



**OITA UNIVERSITY**  
**researcher conspectus 2022**

大分大学研究者総覧



## 研究者総覧刊行にあたって

---

国立大学法人大分大学長  
**北野 正剛**

大分大学は、「人間と社会と自然に関する教育と研究を通じて、豊かな創造性、社会性、及び人間性を備えた人材を育成するとともに、地域の発展ひいては国際社会の平和と発展に貢献し、人類福祉の向上と文化の創造に寄与する」という使命を持っています。そこで、この冊子を通じて本学の教員が行っている研究活動等を学外の皆様に広く知っていただくため、刊行することとなりました。

本学は、大分における知の拠点として、国の政策課題や社会のニーズ、SDGsをはじめ国際社会の共通目標に応えるため、総合大学の特性を活かした分野融合の推進、産業界や国・自治体との連携及び国際共同研究体制の強化を通じ、イノベーション・ハブとしての役割を果たします。研究推進と産学官連携の機能を統合した組織「研究マネジメント機構」では、研究資金獲得や研究支援を行うURAを配置して、基礎研究から先端研究まで研究活動を活性化させています。

また、地域との連携も推進しており、「おおいた地域連携プラットフォーム」では、大分県内の産業界、高等教育機関、地方公共団体が協働し、地域ニーズを踏まえた高度人材育成や地域活性化の事業にオール大分で取り組んでいます。本学は、今後も地域のさまざまな課題の解決に向け、産学官一体となって取り組んでまいります。

本学の研究者総覧を実際にお手に取っていただき、企業の研究開発や行政の取組、日常の業務などにおける疑問の解決や改善の手助けとなる多くの教員が、大分大学に在籍することを知っていただきますよう御案内申し上げます。

理事（研究、社会連携、産学連携担当）

**山岡 吉生**

本学は、イノベーションの創出や地域課題の解決に結び付け研究を発展させることを目的とした大分大学認定研究チーム「BURST」、学長戦略経費による研究支援、本学の研究力強化に向けた「研究マネジメント機構」の設置などを進めてきました。

このような取り組みの結果、令和3年度の研究論文数は516報、共同研究は131件と中期計画に掲げる目標を上回り、多くの研究が企業との共同研究や課題解決などに繋がって広く貢献しています。

第4期中期目標期間となる令和4年度からは、学内研究支援制度の見直しによる効率的・効果的な支援の実施、また、研究マネジメント機構のURAを中心とした研究推進及び産学官連携活動の加速により、更なる研究の進展を目指しています。

「創造的な研究活動によって真理を探究し、知的成果を大分の地から世界へ発信する」「広い分野の学際的な研究課題に対して、総合大学の特性を活かし、学の融合による新たな学問分野の創造を目指す」という本学の研究の目標の達成に向けて研究を進めている本学教員の活動が皆様にお届けできればと思います。



# 目次

---

はじめに	1
目次	3
■ 役員	5
■ 教育学部・大学院教育学研究科	11
■ 経済学部	75
■ 医学部	119
■ 医学部附属病院	255
■ 理工学部	325
■ 福祉健康科学部	425
■ その他学内施設等	459
グローバル感染症研究センター	
教育マネジメント機構	
研究マネジメント機構	
学術情報拠点	
減災・復興デザイン教育研究センター	
保健管理センター	
IRセンター	
索引	485



# 役員

---

# 役員

所属・職位	学長	
氏名	北野 正剛 (Kitano Seigo)	
取得学位	医学博士、九州大学、1981年3月	
SDGs目標	  	




研究分野	消化器外科学
研究キーワード	腹腔鏡下手術、内視鏡外科、胃癌、大腸癌、消化器内視鏡、抗がん剤脱毛、化粧療法
研究内容	<p>●進行大腸癌に対する腹腔鏡下手術の有用性に関する臨床試験</p> <p>進行大腸癌に対する腹腔鏡下手術と開腹手術の手術成績を比較した多施設共同無作為比較試験にて腹腔鏡下手術が標準治療である開腹手術と治療成績が同等であり、腹腔鏡下手術が低侵襲かつ良好な治療成績であることを明らかにした。本臨床試験結果により、大腸癌治療ガイドラインでは進行大腸癌に対する腹腔鏡下手術が標準治療として記載されることとなった(論文1)。</p> <p>●世界初の腹腔鏡下幽門側胃切除術の開発</p> <p>1991年に世界で初めての腹腔鏡下幽門側胃切除術を行い、その成績を発表した。またその後は胃癌に対する腹腔鏡下手術の指導的立場として様々な臨床試験をおこなった(論文2)。</p> <p>●わが国への内視鏡的肥満治療および外科的肥満治療の導入</p> <p>大分大学で本邦初の内視鏡的胃内バルーン留置術を行った後、肥満治療に外科的治療を導入するなど、本邦の肥満外科治療の指導者として数々の報告を行った(論文3)。</p> <p>また、日本消化器外科学会ならびに日本内視鏡外科学会の理事長・名誉理事長として本邦の肥満外科治療の現状について報告した。</p> <p>●我が国への新たな治療法の導入(食道静脈瘤硬化療法と内視鏡外科)</p> <p>食道静脈瘤硬化療法の開発；食道静脈瘤に対する手術療法は死亡率も高く予後不良であったことからケープタウン大学留学を契機に新たな硬化療法の開発に邁進した。現在内視鏡的治療が標準治療となった(論文4)。</p> <p>内視鏡外科の開発；偉大な外科医は大きな切開を行うという概念を覆す外科の大きな変革に関わった。日本における導入から国際展開までこれまでの発展を紹介した(論文5)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●研究業績</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Kitano S, et al. Survival outcomes following laparoscopic versus open D3 dissection for stage II or III colon cancer (JCOG0404); a phase 3, randomised controlled trial. Lancet Gastroenterol Hepatol 2(4); 261-268, 2017</li> <li>2. Kitano S, et al. Laparoscopy-assisted Billroth I gastrectomy. Surg Laparosc Endosc 4(2); 146-148, 1994</li> <li>3. 北野正剛. 食道静脈瘤硬化療法の黎明期, 消化器外科 21(2):143-151, 1998</li> <li>4. 北野正剛. 内視鏡外科の黎明期から現在に至るまでの苦勞, 消化器外科 41(13):1733-1745, 2018</li> </ol> <p>●アピールポイント</p> <p>1990年、西日本で最初に腹腔鏡下胆嚢摘出を開始し我が国初の内視鏡外科トレーニングコースを開催するとともに、1991年には世界初の腹腔鏡による胃がん切除術を施行し、その後現在に至るまで多くの教育活動に従事している(国内受講者約6,500名)。アジアを中心にAPSDE(The Asian Pacific Society for Digestive Endoscopy-メンバー：24か国の専門学会)とMESDA(Mekong Endo-Surgery Development Association)の会長として多くの教育プログラムと実地訓練を現地で開催している(受講者約2,500名)。最近では抗がん剤の副作用による容姿の変化に悩む患者さんの社会活動支援のための内閣府認定公益社団法人等の理事長として大手企業と協働し化粧療法の開発や普及に努めている。</p>

所属・職位	総括理事・理事(企画・戦略, 医療・病院担当)、副学長、医学部医学科整形外科学講座・教授	
氏名	津村 弘 (Tsumura Hiroshi)	
取得学位	博士(医学)、九州大学、1998年5月	
SDGs目標		

研究分野	関節外科学、バイオメカニクス
研究キーワード	人工関節学、膝関節、股関節、計算力学
研究内容	<p>●コンピュータを用いた力学解析手法として、有限要素解析 (Finite Element Analysis: FEA) が知られているが、岩盤解析用に開発された剛体ばねモデル (Rigid Body Spring Method: RBSM) は牽引力に抵抗しない関節の力学解析に適したモデルであり、これを用いた関節の接触圧分布の解析を行っている。2次元での膝関節周辺骨切り術や3次元での股関節周辺骨切り術の手術シミュレーションプログラムは、力学解析も行えるものとして開発した。特に膝関節周辺骨切り術は、固定デバイスの発達により術式も変更され、症例数の著しく増加していることから、シミュレーションプログラムもバージョンアップを行っている。</p> <p>●人工膝関節置換術は、日本で年間10万例程度行われている手術であり、疼痛・歩行能力の改善は著しいが、屈曲角度が正常に比べて十分でない症例があり、これを改善する手術法の研究を行ってきた。術後屈曲角度は患者満足度とも強く関連することが報告されている。関節後方のクリアランスを高めるとともに、内外側の軟部組織バランスを適切に調整する必要があり、そのためのデバイスの作成や手術手技、臨床成績について検討している。またFEAを用いた内側側副靭帯に対するパイクラスティングの力学解析なども行っている。</p> <p>●NEDOや帝人ナカシマメディカルとともに、アジア人向けの新型人工膝関節の開発にも携わっている。膝関節のサイズやプロポーションは人種差があることが知られている。日本人やタイ人などで、膝関節の形態を、CTを用いて詳細に測定し、アジア人に適した形態とサイズバリエーションを持った新規人工膝関節 (Future Knee<sup>®</sup>) が完成した。2017年より使用開始し、2021年末には全国で千例以上の手術が行われた。サイズマッチングや屈曲可動域は良好で、よい臨床成績が期待されている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1 Tsumura H, Kaku N, Ikeda S, Torisu T. A computer simulation of rotational acetabular osteotomy for dysplastic hip joint: does the optimal transposition of the acetabular fragment exist? J Orthop Sci. 2005;10(2):145-51.</p> <p>2 Sawatari T, Tsumura H, Iesaka K, Furushiro Y, Torisu T. Three-dimensional finite element analysis of unicompartmental knee arthroplasty--the influence of tibial component inclination. J Orthop Res. 2005 May;23(3):549-54.</p> <p>3 松田 昌悟, 平川 雅士, 長嶋 優, 池田 真一, 津村 弘. TKA術中の屈曲伸展ギャップ差が患者立脚型評価に与える影響. 整形外科と災害外科 (0037-1033)70巻4号 Page618-622(2021.09)</p> <p>アピールポイント：骨切りシミュレータやRBSMのプログラムは、DICOMファイルの読み込みから解析、3Dグラフィックスでの出力に至るまで、C++による自作でありWindows上で稼働する。このため、目的に応じて修正を行いながら研究を行っている。</p>



# 役員

所属・職位	理事（教育，入試，学生・留学生支援担当）	
氏名	藤井 弘也（Fujii Hironari）	
取得学位	博士（理学）、九州大学、1992年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	物理学（物性物理），物理教育，情報教育	
研究キーワード	放射線分析，ICT活用，情報通信	
研究内容	<p>●誘電性結晶の構造相転移に関する研究 主にペロブスカイト型結晶構造を持つ誘電体，磁性体の構造相転移を主にX線回折や中性子線回折を使って調べる（論文1.）。</p> <p>●理科教育（特に物理教育）に関する教材開発 物理実験装置のインターネット経由での遠隔制御（論文2.）。理科教育におけるICT活用に関する研究（論文3.）。</p> <p>●情報教育，特に情報通信やプログラミングによるアプリケーション開発 インターネット経由での装置遠隔制御法の研究（論文2.）。プログラミングによる教材開発（論文3.）。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2002年，Magnetic Properties of Layer Compounds <math>RbVF_4</math> and <math>Cs_{0.5}Rb_{0.5}VF_4</math>. J.Phys. Soc.Jpn.(Japan) Vol.70, Suppl. A. pp.103-110</li> <li>2013年，固体の融点遠隔実験装置の開発，大分大学教育福祉科学部研究紀要 第35巻第1号 pp.47-56</li> <li>2019年，アクティブラーニングを取り入れた理科指導法の研究-ICT活用授業実践の取り組み-，大分大学教育学部研究紀要第41巻第1号pp.43-55</li> </ol>	

所属・職位	理事(研究, 社会連携, 産学連携担当)、副学長、医学部医学科環境・予防医学講座・教授	
氏名	山岡 吉生 (Yamaoka Yoshio)	
取得学位	博士(医学)、京都府立医科大学、1997年3月	
SDGs目標	     	

研究分野	消化管感染症、分子疫学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ(ピロリ菌)、胃癌、消化器内視鏡、国際共同研究

研究内容	<p>研究内容は(A)ピロリ菌が疾患や薬剤耐性を惹起するメカニズムに関する研究、(B)ピロリ菌を用いた人類学的研究の2つに大きく分類、<b>国際共同研究</b>を通してこれらの課題に取り組んでいる。外国人を含む若手研究者の育成にも貢献している(研究代表者として、頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム、国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムなど)。</p> <p>(A)に関して、2つのピロリ菌新規病原因子を発見・命名した実績を持つ(OipA、DupA)。ゲノム解析を駆使し、新規病原因子・抗菌薬耐性遺伝子変異の発見に取り組み、迅速に変異を検出するシステムの構築にも取り組んでいる。</p> <p>(B)に関して、ピロリ菌ゲノム解析にて、世界の諸民族の移動の歴史を解明、最近では日本人の起源についての研究にも取り組んでおり、沖縄には、旧石器時代や縄文時代の名残を残すピロリ菌が存在、前者は中央アジアから4万年ほど前に異動してきたことを証明した。<b>国際共同研究</b>では、低開発国を中心に、世界17か国に自ら出かけて内視鏡技術指導を行い、ピロリ菌疫学研究を進めている。最近では、地球規模保健課題解決推進のための研究事業(GACD: AMED)および地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS: AMED + JICA)の代表として、ブータン政府と共同で胃癌撲滅プロジェクトに取り組み、ブータンにおけるゲノム解析基盤、迅速検査キット製造の社会実装を目指している。</p>
------	---



ブータンで内視鏡検査を行う山岡

研究業績・アピールポイント	<p>1997年にペイラー医科大学(米国)に留学、研究代表者として大型NIH研究費を獲得し、2010年からは同消化器内科講座教授を兼任。Impact Factor (IF) 3270.917点、Scopus: h-index 67、国際英文誌380論文(R4年6月末現在)。Nature、Science、Lancet、Lancet Infect Dis、Nature Rev Clin Oncol、Nature Rev Gastro Hepatol、Ann Intern Med、Clin Microbiol Rev.などIF50以上の雑誌に10論文発表(IF30以上の論文に32)(IF2021年度版)。世界のエキスパートを選定するExpertscape (<a href="https://expertscape.com/ex/helicobacter+infections">https://expertscape.com/ex/helicobacter+infections</a>)で、ヘリコバクター感染症研究エキスパートの<b>世界第3位</b>に山岡が入る(R4年6月末現在)。現在進行中の外部資金研究は上述のGACD、SATREPS以外に、研究代表者としてe-ASIA(AMED)、二国間交流事業、新学術領域研究(研究領域提案型)、基盤研究(B)があり、基盤研究(B)(途中基盤研究(A)あり)は7回連続で採択中。</p> <p>【講座ホームページ】 <a href="https://oitadepm.com/">https://oitadepm.com/</a></p> <p>【業績リンク】 <a href="https://researchmap.jp/yoyamaoka">https://researchmap.jp/yoyamaoka</a> (research map), <a href="https://research-er.jp/researchers/view/244636">https://research-er.jp/researchers/view/244636</a> (research-er.jp: 日本の研究.com) <a href="https://www.scopus.com/authid/detail.uri?authorId=55183784100">https://www.scopus.com/authid/detail.uri?authorId=55183784100</a> (Scopus)</p>
---------------	---

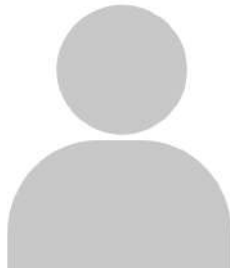



**教育学部**

---

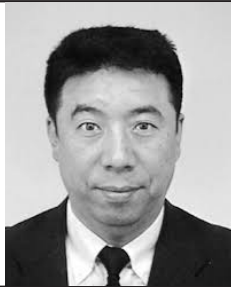

**大学院教育学研究科**

---

所属・職位	教育学部初等中等教育コース（社会認識教育）・教授	
氏名	青柳 かおり (Aoyagi Kaori)	
取得学位	博士（文学）、立教大学、2002年9月	
SDGs目標		

研究分野	歴史学、西洋史、宗教史
研究キーワード	イギリス近代史、英領アメリカ植民地史、イングランド国教会、海外福音伝道協会
研究内容	<p>近代イングランドにおける宗教と政治について関心があり、特にイングランド国教会の宗教政策および異教徒への布教活動について研究している。宗教改革によってプロテスタントの国教会が成立したが、17世紀半ばピューリタン革命期には急進的なプロテスタント非国教徒が優位となり、国教会の地位は低下した。王政復古後、政府は制定法によって国教会のもとでの宗教の統一を図った。一方、国内にはカトリック教徒と非国教徒が存在しており、宗教的統一は困難であった。17世紀後半、一部の国教徒の政治家や国教会聖職者は包括という宗教政策を提案し、同じプロテスタントである非国教徒を国教会に取り込もうとした。結果的に名誉革命後に包括は失敗し、非国教徒に公の礼拝の自由を認める寛容法が成立した。</p> <p>イングランド国教会は現代イギリスの正式な教会であり、世界中にアングリカン・コミュニオンが存在する重要な教会である。しかし、従来のイギリス史研究では17世紀のピューリタン系教会の分析が中心であり、国教会の活動は停滞していたと考えられている。18世紀における国教会の歴史については、イギリス・日本において研究がうすく、とりわけ海外との交流については未開拓の分野である。1701年、国教会はイギリス領アメリカ植民地における異教徒への布教を開始するため、海外福音伝道協会(the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, SPG)を設立した。SPGは各植民地へ宣教師や教理問答師、学校教師を派遣して現地での布教や教育に努めたのである。18世紀におけるSPGによるアフリカ系奴隷への布教活動について一次史料をもとに解明し、国教会の海外進出と発展を明らかにしたいと考えている。また、SPGによるアフリカ系奴隷への英語やキリスト教教育、貧しい人々への学校教育についても関心があり、研究をすすめている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>単著『イングランド国教会ー包括と寛容の時代ー』彩流社、2008年</p> <p>共著「リチャード・フッカーと伝統ーイングランド国教会の儀式におけるカトリック的習慣ー」森田安一編『ヨーロッパ宗教改革における連携と断絶』教文館、2009年</p> <p>共著「イングランド国教会と非国教徒ー「包括」と「寛容」の近世史ー」甚野尚志、踊共二編『中近世ヨーロッパの宗教と政治ーキリスト教世界の統一性と多元性ー』ミネルヴァ書房、2014年</p> <p>論文「18世紀イギリス領アメリカ植民地における奴隷の改宗」『エクフラシスーヨーロッパ文化研究ー』第6号、2016年</p> <p>論文「イングランド国教会とアン女王基金」『史苑』78号1号、2018年</p> <p>科研・基盤C「イングランド国教会の海外進出ーアメリカ植民地の奴隷への布教を中心にー」2013～2017年度、代表者</p> <p>科研・基盤A「中近世キリスト教世界の多元性とグローバル・ヒストリーへの視角」2013～2016年度、研究分担者（代表者：甚野尚志）</p>



所属・職位	教育学部（言語教育）・教授	
氏名	麻生 雄治 (Aso Yuji)	
取得学位	修士（教育学）、鳴門教育大学、1996年3月	
SDGs目標		

研究分野	英語教育
研究キーワード	ライティング、スピーキング、テストング、フィードバック、協同学習
研究内容	<p>研究課題は、大きく(1)教材、(2)指導法、(3)評価の3つの分野に分けられる。</p> <p>(1)教材（教材分析と教材開発）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本人英語学習者にとって適切な英語教材の内容、分量、難易度の検討や効果的な学習を促進するための教材開発、など</li> </ul> <p>(2)指導法（英語表現力育成のための効果的な指導法の検討・開発）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本人英語学習者に適するセンテンス・コンバイニング練習の方法</li> <li>ライティング指導におけるピア・フィードバックの有効性の検討、など</li> </ul> <p>(3)評価（授業内での発問・テストにおける設問の内容とその効果）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>英文和訳に頼らない英文読解力の評価の方法と信頼性、など</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>(1)著書</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『英語教育の理論と実践（理論編）』（共著）現代教育社, 1996.</li> <li>『コミュニケーション文法指導』（共著）開文社, 2003. など</li> </ul> <p>(2)論文</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Effects of peer review on revision in EFL essay writing instruction. (単著)『紀要』第26号, 九州英語教育学会, 1998.</li> <li>A comparison of holistic and analytic scorings for oral interview tests. (単著) <i>ARELE</i>, 11, 全国英語教育学会, 2000.</li> <li>「英文読解力評価のための英文和訳テストの信頼性と妥当性」(単著) <i>STEP Bulletin</i>, 24, 日本英語検定協会, 2012.</li> <li>「センテンス・コンバイニング練習と英作文力の向上」(単著)『紀要』第43号, 九州英語教育学会, 2015. など</li> </ul> <p>(3)教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>これまでに40冊を超える英語問題集や検定教科書の執筆、出版に携わっている。</li> </ul> <p>(4)競争的外部資金の獲得（日本学術振興会科学研究費）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>奨励研究B「オーラル・インタビューテストにおける全体的評価と分析的評価」（課題番号：11903013）</li> <li>奨励研究B「自由英作文テストにおける採点法とその信頼性」（課題番号：13903013）</li> <li>奨励研究「自由英作文テストにおける和文英訳練習の有効性」（課題番号：15903015）</li> <li>奨励研究「ピア・レスポンスにおける内容中心のフィードバックが英作文の書き直しに及ぼす影響」（課題番号：20907001）</li> <li>奨励研究「英作文の書き直しを促進するためのピア・レスポンスのルーブリックの開発」(課題番号：24908002)</li> <li>基盤研究C「センテンス・コンバイニングによる英語ライティング指導法の基礎的研究と教材の開発」（課題番号：18K00837）など</li> </ul>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

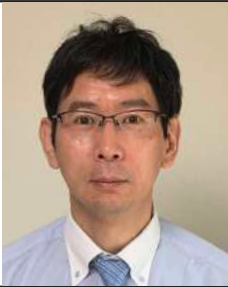



医学部

医学部附属病院


理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	教育学部（社会認識教育）・教授	
氏名	甘利 弘樹 (Amari Hiroki)	
取得学位	修士（文学）、筑波大学、1996年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	歴史学、社会科教育学
研究キーワード	アジア史、歴史教育、多文化共生
研究内容	<p>1 中国華南山間地社会史の研究 17世紀の中国華南山間地における動乱と秩序形成を追究しています。特に当該地域における開発・移住に基づく社会変動とそれに対する政府の権力浸透過程を、行政文書を中心とした文献に基づきながら、研究しています。この研究を通して、中国社会・アジア社会の特質を見出そうとしています(著書1・2、論文1・2)。</p> <p>2 新しい歴史授業の開発 歴史研究の成果に基づいた社会科教育の多様なスタイルを提案しています。歴史研究のエッセンスを生かしながら、小学校・中学校・高等学校・大学・その他における社会科、とりわけ歴史の授業や学びを意義あるものにするために、アクティブラーニング(AL)のメソッドを新たに生み出すことを目指しています(論文3・4)。</p> <p>3 多文化共生社会に関する調査・研究 上の1・2をふまえ、歴史的背景を視野に入れ、現代世界・現代日本の諸課題解決を導くアプローチ方法解明を試みています。焦点化しているテーマは、文化の異なる人々が共生できる社会のあり方です。世界各地の移民問題に端を発する対立・紛争の解決及び融和の方向性に関する理論・実践を発信することに努めています(著書2・論文5)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>下記の中国華南山間地社会史・中等及び高等教育における歴史授業・多文化共生に関する業績以外に、中国行政文書制度、琉球・沖縄史、医学史に関する業績もあります。</p> <p>○著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(単著)『明末清初期、広東東北部地域における行政区域の変化について』富士ゼロックス小林節太郎記念基金小林フェローシップ 1998年</li> <li>(共著)『民衆反乱と中華世界 ー新しい中国史像の構築に向けて』汲古書院 2012年</li> </ol> <p>○論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(単著)「張惟天の亂について ー檔案史料の分析を中心にー」『東方学』97 1999年</li> <li>(単著)「順治年間後半における広東山寇の活動とその終焉 ー謝氏一族の事例を中心にー」『社会文化史学』62 2019年</li> <li>(単著)「外国史・世界史授業のアクティブラーニング化への試み(3) ー中学校社会科歴史的的分野と高等学校「歴史総合」の接続を視野にー」『大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』37 2020年</li> <li>(単著)「外国史・世界史のオンライン授業について ー兼論『外国史・世界史授業のアクティブラーニング化への試み』ー」『大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』38 2021年</li> <li>(単著)「多文化共生教育の実践と考察 ー幼稚園と小・中学校を視野にー」『大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』39 2022年</li> </ol>

所属・職位	教育学部（生活・技術教育）・教授	
氏名	市原 靖士 (Ichihara Yasushi)	
取得学位	博士 (学校教育学)、兵庫教育大学、2010年3月	
SDGs目標		

研究分野	技術教育、情報教育、教育工学
研究キーワード	ものづくり、情報活用能力、ICT教育
研究内容	<p>1 Teacher's Consciousness and Needs for Digital Contents as Teaching-Materials in Technology Education Transactions of Japanese Society for Information and Systems in Education 22(2), 134-139, 2005</p> <p>2. Examination of Design Strategy and Organization of Educational Material Assessment Criteria for Digital Content in Technology Education日本産業技術教育学会誌 47(4), 297-306, 2005-12-25</p> <p>3. An Examination of Structural Model of "Practical Skill of Information Utilization" in Junior High School Students日本教育工学会論文誌 32(Suppl.), 101-104, 2008</p> <p>4. The effects of information education on pupil's practical abilities of information utilizing and media operation skill in case of elementary school学校教育学研究 20, 51-57, 2008</p> <p>5. Influences of Reflection-Impulsivity Cognitive Style on Learning with Digital Contents : A Case Study of "Information and Computer" classes in Technology Education日本教育工学会論文誌 33(Suppl.), 73-76, 2009</p> <p>6. A Relationship between Learners' FDI Cognitive Style and Site Structure of Web Resources in Case of Junior High School教育システム情報学会誌 26(2), 184-190, 2009</p> <p>7. Influences of Reflection-Impulsivity Cognitive Style on Practical Skill of Information Utilization : Focusing on junior High School Students日本教育工学会論文誌 34(Suppl.), 33-36, 2010</p> <p>8. A review of researches on utilization of digital contents based on students' cognitive styles in technology education 学校教育学研究 22, 93-101, 2010</p> <p>9. Relationships Between Students' Self-concepts and School Adjustment in Technical High School日本産業技術教育学会誌 52(4), 255-262, 2010-12-22</p> <p>10. Relationships between Students' Information Literacy and Communication Skill in Technical High Schools : Focusing on the Reflection-Impulsivity Cognitive Style日本産業技術教育学会九州支部論文集 19, 29-36, 2011</p> <p>11. Differences in the learning motivation by field-dependent and field-independent cognitive style in technology education大分大学教育福祉科学部研究紀要 33(1), 89-96, 2011-04</p> <p>12. A Investigating the Morality of Junior High School Students Studying Cultivation教育実践総合センター紀要 (30), 99-108, 2012</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ A Study on Computational Thinking of Technical High school Students The research bulletin of the Faculty of Education, Oita University 42(2), 175-184, 2021-03</li> <li>・ Relationship between Metacognitive Characteristics and Computational Thinking for University Students : Focusing on the qualities required of students in faculties of education The research bulletin of the Faculty of Education, Oita University 42(1), 39-48, 2020-09</li> <li>・ A Study of the Relationship between Junior High School Students' Computational Thinking and Programing Education The research bulletin of the Faculty of Education, Oita University 41(2), 181-191, 2020-03</li> </ul> <p>研究者代表科研費 小・中学生のプログラミング教育のジェンダー格差に関する研究 不登校生徒に対する ICT を利用した遠隔ものづくり学習に関する研究</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	教育学部（発達科学教育）・教授	
氏名	伊藤 安浩 (Ito Yasuhiro)	
取得学位	教育学修士、東京大学、1990年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	教育方法学
研究キーワード	教育課程（カリキュラム）、授業、教師
研究内容	<p>一つのテーマは、1957年のスプートニク・ショックを契機として、1960年代のアメリカにおいて国家的規模で開発が進められた学問中心教育課程（discipline-centered curriculum）の理念や内容と、後世へのその広範な影響に関する研究である。当初は高等学校の理科と数学のカリキュラム改革が開発の焦点であったが、その影響は芸術のカリキュラム改革にまで及んだ。その典型的な一例が、ディシプリンに基づく美術教育（discipline-based art education, 略称DBAE）である。DBAEは、従来の美術教育の中心であった美術制作（art making）に加えて、美術批評（art criticism）、美術史（art history）、美学（aesthetics）の内容をカリキュラムに引き入れようとする。この企ての根底にあるのは、美術が単に感覚や感性の表現であるというよりも、それが正当に思考や知性の形式であるという考え方である。美術や芸術が世界認識の様式であるという捉え方は、ハワード・ガードナーの多元的知能（multiple intelligences）の理論にも支えられつつ、バランスのとれた教育課程の内容構成や、今日的には、STEAM教育のA（art, arts）の在り方を考える際の有力な手がかりとなり得る。</p> <p>もう一つのテーマは、特に初任期の若手教師の専門的成長の実相を、ナラティブ的探究の方法を用いながら明らかにする研究である。教職キャリアにおける初任期は、いくつかの意味で特別な時期である。まず、初任期は単に教職の開始期であるだけでなく、教員養成から教職キャリアへの移行期でもある。ただしそれは、養成期の終点から初任期への始点へというような単純な移行ではない。初任期というのは、養成期の終わりが初任期の始まりのある時点まで一定程度引き延ばされ重なり合う時期である。それだけに、この時期に着目する研究は、教員養成にとっても、初任者研修等を実施する教育行政にとっても意義があると考えられる。さらに、初任期はいきなり職業的な危機に直面し得る時期でもある。長い教職キャリアのどの時点においても職業的な危機に直面することはあり得るが、初任期の若手教師の場合、参照すべき教師としての経験がわずかしかない。そのような状況の中で、初任期の若手教師がどのような困難に遭遇するのか、何をきっかけにその困難を乗り越えたり乗り越えられなかったりするのかを明らかにすることにも、大きな意義がある。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>伊藤安浩（2006）「DBAE（ディシプリンに基づく美術教育）カリキュラムの理念とその認識論的基礎」『九州教育学会研究紀要』第34巻 257-264頁</p> <p>伊藤安浩（2017）「DBAE（ディシプリンに基づく美術教育）をめぐる論争—芸術カリキュラムにおいて「創造行為」はどのような位置を占めるべきか—」『大分大学教育学部研究紀要』第39巻第1号 135-144頁</p> <p>伊藤安浩, 桂 直美, 高井良健一（2017）「初任期における若手教師の経験と成長のモノグラフ（1）—第1回インタビュー調査の分析を通して—」『大分大学教育学部研究紀要』第38巻第2号 63-78頁</p> <p>伊藤安浩, 桂 直美, 高井良健一（2018）「初任期における若手教師の経験と成長のモノグラフ（2）—第2回インタビュー調査の分析を通して—」『大分大学教育学部研究紀要』第40巻第1号 81-96頁</p> <p>伊藤安浩（2020）「社会に開かれた教育課程と体験活動の可能性—『総合的な学習の時間』を核としたカリキュラム・マネジメント」『生活体験学習研究』第20号 19-26頁</p>



所属・職位	教育学部（発達科学教育）・教授	
氏名	衛藤 裕司 (Eto Hiroshi)	
取得学位	①教育学修士、筑波大学、1991年3月 ②修士（心身障害学）、筑波大学、1993年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	障害児心理学, 特別支援教育
研究キーワード	発達障害, 知的障害, 指導法, 学び, カリキュラム
研究内容	<p>●応用行動分析（Applied Behavior Analysis : ABA）・認知処理的アプローチ（Cognitive-Based Approach : CBA）をベースに、エビデンスに基づく教育の実践を目指しています。対象は主に自閉症や発達障害のある人達で、支援のための様々なプログラムを開発し、専門家（療育指導者・言語聴覚療法士・心理師等）や保護者に提供しています。</p> <p>（研究テーマ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション, 問題行動, 行動マネジメント, 教科学習, 心理検査</li> </ul> <p>（対象）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障害（自閉症・学習障害・ADHD）, 知的障害</li> </ul> <p>●カリキュラム・教育課程に基づくアプローチ（Curriculum-based Approach）をベースに、個々の児童生徒に合った適切な教育の実践を目指しています。対象は主に、知的障害や発達障害のカリキュラムで、実践のための様々なツールやモデルを開発し、教育現場に提供しています。</p> <p>（研究テーマ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・欧米のIEP（Individual Education Plan）</li> <li>・個別の指導計画, 個別の教育支援計画, 指導案</li> <li>・自立活動, 知的障害教育の独自教科, 知的障害教育の合わせた指導</li> <li>・合理的配慮</li> </ul> <p>（対象）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚園・保育園～高校・大学, 特別支援学校及びこれらと連携する専門機関</li> </ul> <p>●身体心理学における、特に、障害児者のボディ・イメージの研究を行っています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>衛藤裕司（2021）：第11章 発達障害児（者）への理解と支援—LD（学習障害）—。障害者・障害児心理学（'21）。放送大学教育振興会（p.196-216）</p> <p>肥後祥治・衛藤裕司・天海丈久（2021）：発達障害・知的障害の自立活動を展開するために必要な知識と方法論とは何か—自立活動の「解説」の記載内容の分析—。九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, 第8巻, 1号（全20頁）</p> <p>衛藤裕司（2017）：特集 自閉症と制度—学齢期（小学生・中学生）の支援制度と活用—。日本自閉症協会 いとしご増刊「かがやき（専門家向け）」, NO.13,（p.16-23）</p> <p>衛藤裕司（2016）：第2章 気になる問題のアセスメントと支援の要点。心の発達シリーズ 第5巻 中学生・高校生 学習・行動が気になる生徒を支える。明石書店（p.33-63）</p> <p>Hiroshi ETO（2008）：Le système éducatif japonais pour les élèves handicaps - le point de vue de l'intégration.. Auteur (s) Jean-François Sabouret, Liberté, inégalité, individualité - La France et le Japon au miroir de l'éducation -. CNRS Editions（pp.239-248）</p> <p>衛藤裕司（2021）：認知的中範囲理論 ボディ・イメージ（理論編）。看護診断のためのよくわかる中範囲理論（第3版）。学研メディカル（p.240-248）</p>



所属・職位	教育学部（理数教育）・教授	
氏名	大上 和敏 (Oue Kazutoshi)	
取得学位	博士（理学）、京都大学、2000年1月	
SDGs目標	 	

研究分野	地球化学
研究キーワード	物質循環、河川、温泉、環境
研究内容	<p><u>温泉水に含まれる化学成分の起源に関する研究</u></p> <p>福岡県筑後市に位置する船小屋温泉にある船小屋温泉から湧出する冷鉱泉の水、炭酸成分、希ガスの起源を明らかにするために、鉱泉水および付随ガスの化学・同位体分析を行った。鉱泉水の安定同位体組成 (<math>\delta D</math> および <math>\delta^{18}O</math>) から、船小屋温泉および長田鉱泉の鉱泉水はいずれも天水起源であることが示された。また、付随ガス中の<math>^3He/^4He</math>比と<math>^4He/^{20}Ne</math>比の関係より、船小屋温泉に流出するHeは大気起源Heの混入はほとんどなく、マントル起源および地殻起源のHeが混合したものであることが示された（マントル起源He：60%，地殻起源He：40%，大気起源He：0.1%以下）。<math>C/^3He</math>と<math>\delta^{13}C</math>の関係より、付随ガス中の<math>CO_2</math>に占める炭素の起源を推算したところ、Mantle-derived <math>CO_2</math>が35%，Marine carbonate <math>CO_2</math>が56%，Sedimentary organic carbonが9%という結果が得られた。さらに、付随ガス中の<math>CH_4/(C_2H_6+C_3H_8)</math>比と<math>CH_4</math>中の<math>\delta^{13}C</math>の解析により、付随ガス中の<math>CH_4</math>は地下深部における有機物の熱分解によって生じたものであると説明することができた。</p> <p><u>温泉の変遷過程に関する研究</u></p> <p>大分県の別府温泉には「血の池地獄」と呼ばれる高温湖沼がある。その湖底には名前の由来ともなった赤色の温泉沈殿物が堆積している。これまでの研究により、①湖底の堆積物は、白色のクリストバライトを主成分とし、沈殿物の赤色の原因である赤色のヘマタイトを含有しており、近年の沈殿物では、黄色の鉱物であるジャロサイトを含んでいること、②血の池地獄の周辺には高温（250～300℃）で中性の食塩型の熱水と、比較的低温（100℃前後）で強酸性の硫酸酸性型熱水が混合し、地下に熱水系が形成されていること、③血の池地獄の湖底に堆積している温泉沈殿物中の鉱物・化学組成は、前述の2種類の熱水の混合割合を鋭敏に反映していることが明らかとなっている。そこで、血の池地獄に堆積している温泉沈殿物から柱状試料を採取し、その沈殿物の鉱物・化学組成に基づいて、血の池地獄周辺の熱水系の変遷過程の解読を行った。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>【論文】大分県北部地域の温泉について 2021年12月</p> <p>【論文】有馬型熱水と水質のよく似た同位体的性質の異なる高塩分温泉 - 兵庫県の吉川温泉の例 2015年3月</p> <p>【論文】温泉水・温泉付随ガスの地球化学データから見た大分県山香温泉の生成機構と温泉起源流体 2013年9月</p> <p>【論文】福岡県船小屋温泉の温泉水の起源に関する地球化学的研究 2013年7月</p> <p>【著書】おんせん県おおいたの飲泉スポット30調査本2017 2017年9月</p> <p>【著書】おおいたの温泉の顔2013 2013年3月</p>

所属・職位	教育学部（理数教育）数学科・教授	
氏名	川崎 道広 (Kawasaki Michihiro)	
取得学位	博士（教育学）、広島大学、2007年3月	
SDGs目標		

研究分野	数学教育学
研究キーワード	図形概念, 図形認識, 図形指導, 数学的認識, 現象学的認識, 認識論的研究
研究内容	<p>●数学的概念に関する認識論的研究          数学教育の充実と発展のために, 数学的概念(特に図形概念)の形成過程や理解に関する認知的研究, および数学観や数学的表現に着目した数学的認識論の研究, さらに指導原理や指導方法に関する教授学的研究を総合的に研究している。(論文4)(著書2)</p> <p>●図形指導に関する認識論的研究          図形概念に関する認知的研究, 数学的研究, 哲学的研究, 現象学的研究等の認識論的研究により, 図形指導原理を探究している。(論文1, 2, 3)(著書1)</p> <p>●数学教育における教材研究・開発          数学教育で扱われる様々な指導内容の背景にある数学理論や認知状況を把握し, 効果的な指導法を開発するために教材を分析, 研究, 開発している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>2001年度より5期22年間に及ぶ外部資金(科研費, 代表)獲得状況</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 図形概念の認識論的研究に基づく図形カリキュラムの開発研究, 2001~2004, 代表</li> <li>2. 図形認識に関する『質的研究』に基づく図形授業過程の研究, 2005~2008, 代表</li> <li>3. 図形認識に関する質的研究に基づく認識状況判定基準の開発研究, 2009~2012, 代表</li> <li>4. 図形認識能力を育てる図形指導モデルの開発研究, 2013~2017, 代表</li> <li>5. 図形概念の認識論的研究に基づくルーブリックの開発研究, 2018~2022, 代表</li> </ol> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2001年, 単著, 図形指導における「図形感覚」の意味について, 全国数学教育学会 数学教育学研究 第7巻, pp.93~103</li> <li>2. 2001年, 単著, 図形指導における明証性の認識に関する研究, 日本数学教育学会 第34回数学教育論文発表会論文集, pp.385~390</li> <li>3. 2005年, 単著, 直観的側面に着目した図形指導過程の研究, 日本数学教育学会 第38回数学教育論文発表会論文集, pp.379~384</li> <li>4. 2007年, 単著, 図形概念に関する認識論的研究—図形指導の原理を求めて—, 学位論文</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2010年, 共著, 算数教育の理論と実際, 第8章図形, 数学教育研究会編, 聖文新社</li> <li>2. 2010年, 共著, 数学教育学研究ハンドブック, 第3章教材論 §5図形概念, 日本数学教育学会編, 東洋館出版社</li> </ol> <p>●受賞</p> <p>2002年, 全国数学教育学会 学会奨励賞 (論文1)</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	教育学部 初等中等教育コース（芸術・保健体育教育講座）・教授	
氏名	栗栖 由美子 (Kurusu Yumiko)	
取得学位	博士（音楽学）、東京芸術大学、1995年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	人文学（芸術実践論関連）
研究キーワード	歌唱指導、アレクサンダー・テクニック、姿勢、呼吸、三次元動作解析システム
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 初期バロック音楽の実践的歌唱法の研究 17世紀前半の初期バロック音楽の適切な歌唱法を、実践と理論の両面から具体的に解明しようとするものである。扱う主題は、声区の問題、発音法、装飾法、アジリタの技術等である。（論文1・1-a）</li> <li>・ アレクサンダー・テクニックを応用した歌唱指導に関する研究 本研究は、歌唱指導全体にわたって、音楽科教育においてまだ着目されていないアレクサンダー・テクニックを応用し、小学校のみならず中学校も視野に入れた、教員のための体系的な発声指導プログラムの開発を行おうとするものである。（論文2・2-a・3・4・4-a）</li> <li>・ 教員養成学部における歌唱指導のためのeラーニング教材の開発 本研究の目的は、教員養成学部・小学校音楽科の講義において使用可能な、歌唱指導のためのeラーニング教材を開発することである。研究の独自性は、学校教育の歌唱指導に、アレクサンダー・テクニックと三次元動作解析システムを導入することで、学生が、効率的で効果的な歌唱指導法を習得できるという点にある。（論文5・6・7・8）</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 論文</li> <li>1. 2012年、「バロック初期の歌唱法に関する研究」</li> <li>1-a. 2013年、「初期バロック音楽の実践的歌唱法」（レクチャー・コンサートも実施した。）</li> <li>2. 2010年、「アレクサンダー・テクニックを応用した姿勢と呼吸法のための指導プログラムの開発（2）—指導の方向性について—」</li> <li>2-a. 2012年、「姿勢と呼吸法のための指導プログラム&lt;自然な歌声で&gt;」</li> <li>3. 2015年、「アレクサンダー・テクニックにおける動きを用いた歌唱指導の可能性」</li> <li>4. 2015年、「音色と響きを獲得するための発声指導プログラム&lt;自然な歌声でII&gt;」</li> <li>4-a. 2016年、「発声指導プログラム&lt;自然な歌声で&gt;」</li> <li>5. 2018年、「教員養成学部学生の発声技能の捉え」</li> <li>6. 2019年、「小学校教員に求められる発声に関する技能」</li> <li>7. 2019年、「小学校教員養成における歌唱指導の実際と課題」</li> <li>8. 2020年、「初等教育教科に関する科目『音楽』における新しい授業構成の提案」</li> <li>* 1-a.は科学研究費（基盤研究(C)22520139）、2-a.は科学研究費（基盤研究(C)21530952）、4-a.は科学研究費（基盤研究(C)25381211）の助成を受けた研究の成果としてまとめたものである。5～8は科学研究費（基盤研究(C)19K02709）の助成を受けて、研究を進めている。</li> </ul>

所属・職位	教育学部（社会認識教育）・教授	
氏名	黒川 勲 (Kurokawa Isao)	
取得学位	文学修士、広島大学、1990年3月	
SDGs目標		

研究分野	西洋近世哲学
研究キーワード	自由 感情 コナトゥス
研究内容	<p>スピノザ哲学の自由論に関する研究</p> <p>スピノザ哲学の中心課題はいうまでもなく「自由」であるが、その自由は「必然的自由」と解釈され、哲学史において特異な位置を占めている。このスピノザの自由を理解するためには、方法論、存在論、認識論、感情論など総合的な研究が必要となる。現在は、「スピノザにおける神の観念の形成」にポイントを絞り、『エチカ』を筆頭にスピノザの全著作を視野に検討しているところである。</p> <p>スピノザ哲学の感情論に関する研究</p> <p>スピノザの感情論は、スピノザ哲学における人間の幸福論、倫理学、政治論に関する思想の根幹をなすものである。現在は、「スピノザにおける感情論の構造とコナトゥス」「感情の模倣」「名誉欲」にポイントを絞り、デカルトと比較しながら精査しているところである。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スピノザの方法論について</li> <li>2012年,共著, スピノザ『知性改善論』における「真の観念」の分析, 大分大学教育福祉科学部研究紀要</li> <li>・スピノザの存在論について</li> <li>2013年, 単著, スピノザにおける「存在しない個物」に関する定理, 大分大学教育福祉科学部研究紀要</li> <li>・スピノザの認識論について</li> <li>2007年, 単著, スピノザにおける「第三種の認識」, 大分大学福祉社会科学研究科紀要</li> <li>2008年, 単著, スピノザにおける想像力について, 大分大学教育福祉科学部研究紀要,</li> <li>・スピノザ倫理学について</li> <li>2007年, 単著, スピノザにおけるコナトゥスと最高善, 哲学, 広島哲学会</li> <li>2009年, 単著, スピノザにおける悪の現実性, 大分大学大学院福祉社会科学研究科紀要</li> <li>・スピノザの感情論について</li> <li>2014年, 単著, スピノザにおける時間に関わる感情, 大分大学教育福祉科学部研究紀要</li> <li>2018年, 単著, スピノザにおける「心の強さ」について, 大分大学教育学部研究紀要</li> </ul>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部




福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	教育学部（発達科学教育）特別支援教育コース・教授	
氏名	古賀 精治 (Koga Seiji)	
取得学位	教育学修士、九州大学、1987年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	特別支援教育
研究キーワード	脳性麻痺、動作法、心理リハビリテーション
研究内容	<p>●新奇的な動作の学習に関する心理学的研究 人が経験したことのない新たな動作を学習する過程について研究しています（論文1・2・3、著書1・2）。</p> <p>●脳性麻痺児・児への動作法の適用の効果に関する研究 脳性麻痺のある人に動作法を適用し、動作不自由の改善に関する効果を検証しています（論文4・6・7）</p> <p>●動作法の指導者の力量向上に関する研究 動作法を実践する指導者の力量をどのようにすれば向上できるかについて研究しています（論文5、著書3・4）。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1988年、筋電図バイオフィードバックによる新奇的な筋活動の制御の獲得、心理学研究、Vol.59(3)</li> <li>1989年、Acquisition of self-control of a novel muscular activity with EMG and video feedback、Perceptual and Motor Skills、Vol.69</li> <li>1991年、新奇的な筋活動の制御の獲得における気づきと筋電図バイオフィードバック、心理学研究、Vol.62(5)</li> <li>1992年、A case study of "gait training" for cerebral palsied child、The Journal of Rehabilitation Psychology、Vol.19(1)</li> <li>1995年、臨床動作法における訓練者の力量の評定尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討、特殊教育学研究、Vol.33(3)</li> <li>2002年、脳性マヒ者に対する動作法の効果に関する運動力学的分析、特殊教育学研究 Vol.40(2)</li> <li>2005年、Effects of dohsa-hou (Motor Action Training) on adult with cerebral palsy、Saudi Journal of Disability and Rehabilitation Vol.11(2)</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1992年、アクティブに生きるー自己活動の心理学ー、ソフィア</li> <li>2000年、現代のエスプリ別冊ー実験動作学（からだを動かす心の仕組み）ー、至文堂</li> <li>2003年、講座・臨床動作学IVー教育動作法ー、学苑社</li> <li>2015年、基礎から学ぶ動作法、ナカニシヤ出版</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2008年、第22回大分合同新聞福祉賞</li> <li>2016年、平成28年度日本リハビリテーション心理学会賞</li> </ol>



所属・職位	教育学部（生活・技術教育）・教授	
氏名	財津 庸子 (Zaitu Yoko)	
取得学位	修士（教育学）、熊本大学、1992年3月 博士（教育学）、九州大学、2010年9月	
SDGs目標	    	
研究分野	家庭科教育・消費者教育	
研究キーワード	エシカル消費・消費者市民社会	
研究内容	<p>小学校・中学校・高等学校の家庭科教育の分野における消費者市民教育に関する研究を中心に行っている。近年の研究内容は、おもに次の2点に集約される。</p> <p>1点目は、「エシカル消費」というキーワードに集約される内容である。「エシカル消費」とは、地域の活性化や雇用などを含む、人・社会・地域・環境に配慮した消費行動のことであり、消費者庁も推進しているよりよい消費行動である。個々人が、社会的な課題に気づき日々の消費行動（買物等）を通して、課題解決のためにできることを考え実践につなげていくことである。このような取り組みはSDGsの多くの目標にも関連している国際的な取り組みでもある。このような意識を醸成し実践できるスキルを身に付けられるよう教育現場において家庭科を中心にした教材研究等の実践的な研究を行っている。</p> <p>2点目は、18歳成年時代を迎えるにあたって高等学校家庭科における消費生活への意識やスキルをどのように育成するかということに関連する内容である。平成29年に小中学校・平成30年に高等学校の学習指導要領が改訂され、単に高等学校で18歳成年に備える内容を扱うだけでなく、小中高の系統性や家庭科消費生活分野においてはキャッシュレス化への対応等が強化された。このような社会状況に対応した家庭科における消費者市民教育のあり方について、小中高の教育現場の教員と連携した実践的研究を継続的に行っており、その成果を還元できるよう教材や指導法を検討・開発し提案している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>文部科学省：平成31年度「若年者の消費者教育の推進に関する集中強化プラン」における若年者の消費者教育推進のための実証的調査研究に採択され「18歳成年時代の消費者市民力養成のための教材開発—小中高家庭科の系統性をふまえた実証的研究」と題して実施した。研究成果は「カテイカCEプロジェクト18歳成年時代の消費者市民教育～地方（大分・熊本）からの発信」というWEBサイト（<a href="https://www.togolabo.jp/kateikace">https://www.togolabo.jp/kateikace</a>）を作成し、リーフレットも作成・配布し、教育現場等にも広報した。WEBサイトの特徴は、大分・熊本の小中高で実践された授業に基づいた提案であり、使用した指導案や教材を全てダウンロードして活用することが出来る点である。このように小中高の教育現場と連携した実践的研究を積み重ね、その成果を教育現場に還元する試みを継続している。著作としては、中西雪夫・小林久美・貴志倫子共編「小学校家庭科の授業をつくる第2版」学術図書出版(2020年)、伊藤葉子編著「新版授業力UP 家庭科の授業」日本標準(2018年)等において消費生活分野の内容を執筆している。</p>	

役員

大学院教育学部  
教育学部

経済学部

医学部

医学部  
附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	教育学部（社会認識教育）・教授	
氏名	鄭 敬娥 (Jeong Kyongah)	
取得学位	博士（比較社会文化学）、九州大学、2005年5月	
SDGs目標	  	

研究分野	政治学、国際関係論
研究キーワード	東アジア 地域主義 開発 日韓関係 歴史認識
研究内容	<p>1. 戦後日本の東アジア政策 戦後日本の東アジア諸国・地域との関わりを、地域主義、開発、賠償などをキーワードに研究しています。</p> <p>2. アジア諸国の開発政策と日本の外交 1と関連し、アジア諸国と日本とを結ぶ共通の政策目標こそ「開発」であったと考え、その内容や目指す方向、手段などを分析し、それが日本の戦後の外交と如何に結びついたのかを考えています。</p> <p>3. 東アジアにおける歴史摩擦 東アジアには冷戦が終わった今なお、政治体制や経済状況などをめぐって、多くの分断要因が存在します。近年では、特に歴史認識をめぐる摩擦が顕著に現れ、この地域における外交や安保、経済協力を阻む要因となっています。したがって、近年は特に日韓関係を中心に、歴史摩擦の原因やメカニズム、対処方案などを研究しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初瀬龍平・菅英輝編著『アメリカの核ガバナンス』、第6章「朴正熙政権の『自主国防』と核開発、および『日韓経済協力』」（晃洋書房、2017年）、164-190頁。</li> <li>・菅英輝編『冷戦と同盟——冷戦終焉の視点から』、第2章「『開発』問題の国際的展開と日本のアジア多国間枠組み模索」（松籟社、2014年）、81-111頁。</li> <li>・菅英輝編『東アジアの歴史摩擦と和解可能性——冷戦後の国際秩序と歴史認識をめぐる諸問題』、第6章「歴史認識をめぐる日韓摩擦の構造とその変容」（凱風社、2011年）、178-203頁。</li> </ul>

所属・職位	教育学部（発達科学教育）・教授	
氏名	住岡 敏弘 (Sumioka Toshihiro)	
取得学位	博士（教育学）、広島大学、2016年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	教育学・教育行政学・教育制度学
研究キーワード	公教育史 アメリカ教育制度 マイノリティ教育 教育の機会均等
研究内容	<p>私は、教育学のなかでも、教育行政学や教育制度学を専門としています。</p> <p>私の研究内容は、アメリカ合衆国ジョージア州におけるアフリカ系アメリカ人に対する公教育の歴史的展開過程の解明です。</p> <p>近代国家においては、公権力による関与のもとに公教育が制度化されてきました。研究においては、公権力による関与の実態をマイノリティの視点から見直し、公教育像の見直しを行うことを目的としています。具体的には、アメリカ合衆国南部のジョージア州の公教育の成立・展開過程をアフリカ系アメリカ人の視点から分析するため、黒人自身がものしたもの（自伝、黒人新聞、マニフスクリプト等）を分析し、公権力の教育への関与が、社会的な少数派であるアフリカ系アメリカ人にとってどのような意味があったのか考察しています。こうしたアメリカをフィールドとした知見を積み重ねることで、マイノリティからみた公教育の課題として一般化し、その課題解決に貢献できればと考えております。</p> <p>また最近では、世界的な新自由主義の流れのなかで、教育政策のなかで、市場原理が導入され、一方でアカウンタビリティ（説明責任）の重視も進んでいます。こうした現代の公教育政策についても、マイノリティから見直すことで、新たな側面が見えてくるのではないかと考えています。そこで近年では、アメリカ合衆国のチャータースクール制度に注目し、同制度の導入過程や制度の運用実態をアフリカ系アメリカ人の視点から分析すること試みています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>Toshihiro SUMIOKA, "Equality in education," August 2021, <a href="http://www.impact.pub">www.impact.pub</a></p> <p>八尾坂修編著（2021）『アメリカ教育長職の役割と職能開発』風間書房。（「第8章 マイノリティ教育長の位置と民族的多様性への展望」を分担執筆）</p> <p>藤井穂高・滝沢潤編著（2021）『教育法規・教育制度・教育経営』協同出版。（「子どもの権利条約」「教育を受ける権利」「教育の機会均等」を分担執筆）</p> <p>住岡敏弘（2020）「チャータースクールの法制化過程と地方学区の柔軟性確保の政策動向—ジョージア州を事例として」西日本教育行政学会編『教育行政学研究』第41号。</p> <p>尾上雅信編著（2018）『西洋教育史』ミネルヴァ書房。（「アメリカ独立革命と教育」「アメリカー公立学校設置運動の展開と師範学校における教員養成」「アメリカの新教育運動」「アメリカーアカウンタビリティ重視の教育改革と教師教育」を分担執筆）</p> <p>住岡敏弘（2015）「ジョージア州アトランタ市における黒人公教育制度形成に関する一考察:一人種間の給与平等化闘争に焦点を当てて」日本教育制度学会編『教育制度学研究』第22号。</p>

役員

大学院教育学部  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	教育学部（芸術・保健体育教育）・教授	
氏名	田中 修二 (Tanaka Shuji)	
取得学位	博士（文学）、成城大学、1999年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	美術史学
研究キーワード	近代日本美術史、彫刻、日本画
研究内容	<p>●近現代日本彫刻史に関する研究 江戸時代中期頃から現代に至る、日本の彫刻の歴史について調査・研究しています。江戸時代における仏師や大工、牙彫師、金工師、人形師、石工といったさまざまな職人たちのなかから明治期になって「彫刻家」が生まれ、それを一つの出発点として今日までどのように展開しているのかといったことなどについての著書や論文があります。</p> <p>●福田平八郎に関する研究 大分に生まれ京都で活躍した日本画家福田平八郎（1892-1974）について、調査・研究を進めています。</p> <p>●大分の美術史についての研究 先史時代から現代に至る大分の美術の歴史について、調査・研究を進めています。優れた石による造形が古代から近代まで数多く生まれたこと、豊後南画を支えたパトロンたちの存在、さらに朝倉文夫、日名子実三、福田平八郎、高山辰雄やネオダダのメンバーなど近現代の作家たちにとくに関心をもっています。</p> <p>●屋外彫刻作品のメンテナンスの研究と実践的活動 屋外彫刻作品の歴史とその保存のあり方について研究するとともに、全国各地に設置された屋外彫刻作品の保存、メンテナンスに関する実践的な活動を行なっています。2007年度からは大分市と連携し、朝倉文夫作《滝廉太郎君像》をはじめとする、大分市が管理する屋外彫刻作品の定期メンテナンスを継続しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●主な研究業績は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・『近代日本最初の彫刻家』（吉川弘文館、1994年）</li> <li>・共著『竹内栖鳳とその弟子たち』（思文閣出版、2002年）</li> <li>・『彫刻家・新海竹太郎論』（東北出版企画、2002年）</li> <li>・「福田平八郎の「装飾画」」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第26巻第1号（2004年）</li> <li>・編共著『近代日本彫刻集成』全3巻（国書刊行会、2010-13年）</li> <li>・「京都の日本画と仏教の「空間」」『近代画説』第24号（2015年）</li> <li>・『近代日本彫刻史』（国書刊行会、2018年）</li> <li>・『屋外彫刻メンテナンスハンドブック』（田中修二研究室、2021年）</li> </ul>

所属・職位	教育学部（芸術・保健体育教育）・教授	
氏名	田中 星治 (Tanaka Seiji)	
取得学位	芸術学修士、武蔵野音楽大学、1982年3月	
SDGs目標		

研究分野	ドイツ古典、ロマン派を中心としたピアノ演奏解釈の研究	
研究キーワード	ピアノ、奏法、演奏解釈	
研究内容	<p>ドイツ古典、およびロマン派を中心としたピアノ作品の解釈と演奏法を中心に研究、教育している。特に、ベートーヴェン、シューベルト、シューマン、ブラームスのピアノ作品の分析と、演奏解釈を主な研究題目としている。</p> <p>研究の発表としては、定期的にホールでのリサイタル、オーケストラとの共演、ピアノ五重奏を中心とした室内楽の演奏を通して、成果を披露している。</p> <p>過去における主な演奏曲</p> <p>バッハ チェンバロ(ピアノ)協奏曲二短調 BWV1052 (九州交響楽団と共演)</p> <p>ハイドン ソナタHob.XVI.20, 49, 50</p> <p>モーツァルト ソナタK.282, 283, 309, 330, 570, 2台のためのピアノ協奏曲K.365 (大阪フィルハーモニー交響楽団と共演)</p> <p>ベートーヴェン ピアノソナタOp.27No.2「月光」、Op.53「ワルトシュタイン」、Op.57「熱情」、Op.81a「告別」、Op.110</p> <p>シューベルト「さすらい人」幻想曲</p> <p>シューマン 「パピヨン」Op.2, 「ダヴィッド同盟舞曲集」Op.6「謝肉祭」Op.9, 「アラベスク」Op.18</p> <p>ショパン「ノクターン」Op.15 No.1,2 Op.48, Op.62 「幻想曲」Op.49, ソナタ第3番Op.58, 「幻想ポロネーズ」Op.61</p> <p>リスト ソナタ風幻想曲「ダンテを読んで」</p> <p>ブラームス ソナタ第3番Op.5, バラードOp.10, 幻想曲集Op.116, 3つの間奏曲p.117, 6つの小品 Op.118</p> <p>その他、スカルラッチェ、ドビュッシー、ラヴェル、プロコフィエフ、ラフマニノフ、グリーグ、スクリャーピン、バルトーク、コダーイ等のピアノ独奏曲、協奏曲を演奏。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>研究業績としては、これまで10回に及ぶピアノソロリサイタル、大阪フィルハーモニー交響楽団、九州交響楽団、大分交響楽団、別府市民交響楽団とのピアノ協奏曲の共演、チェコのシュターミッツ弦楽四重奏団、ザルツブルグ・カンマーゾリステン、ドヴォルザーク・カルテット、ワルシャワ・カルテットとのピアノ五重奏の共演、その他、大分県立芸術文化短期大学の宮本修名誉教授とのシューベルトの「冬の旅」「美しき水車小屋の娘」の連作歌曲の伴奏、フルートの藤野翔三氏とのリサイタルの伴奏、田村洋彦大分大学名誉教授のピアノ作品「メタモルフォーゼ」の初演を含む現代音楽の演奏等、ステージ回数は優に100回を超える。</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院






理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等






# 教育学部





所属・職位	教育学部（芸術・保健体育教育）・教授	
氏名	谷口 勇一（Taniguchi Yuichi）	
取得学位	修士（教育学）、広島大学、1994年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	体育社会学・スポーツ社会学
研究キーワード	学校運動部活動の社会的動向、教員文化論、スポーツプロモーション論
研究内容	<p>●変革が期待されつつある学校運動部活動動向に関する社会学的研究</p> <p>学校運動部活動（以下、部活動）は、学習指導要領においても「学校教育活動の一環」であることが明記されてきた。しかしながら、文部科学省スポーツ庁においては「2025年度を目途とし先行的に中学校における部活動の地域活動化をめざす」との通達を出すに至った。各種の課題（教員の過剰負担や生徒たちの燃え尽き症候群の発症等）を抱えてきた部活動ではあるものの、部活動が学校内に存在することに伴う教育的意義は大きい。部活動の地域活動化は、学校（教員、生徒）および地域社会にいかなる動揺をもたらすこととなり、また、いかなる「落としどころ」を見出すことになるのか、壮大な社会実験の一つである部活動の地域活動化を社会学的に追跡研究し、その意味性を考究しようとしている。</p> <p>●今後求められるべきわが国におけるスポーツプロモーション論に関する研究</p> <p>わが国におけるスポーツプロモーション（振興・推進）は、これまで教育行政の範囲で実践されてきた。そのことは地方自体においても同様であり、教育委員会事務局部局内に体育・スポーツ振興部局を置く事例がほとんどであった。しかしながら、昨今においては、スポーツ庁の創設に伴い、地方自治体のスポーツ振興部局を首長部局へと移管する事例が散見・増加傾向にある。その意図するところは「スポーツは市民生活にとって必要不可欠な文化である」との趣意によるものである。現状、既存の教育行政内にスポーツ振興部局を配置している事例と首長部局に配置している事例といった二分化が顕在しているわけであるが、真のスポーツプロモーションの体現に向け、さらには、子どもたちの体育・スポーツ活動の充実に資するためのスポーツ行政機構のあり方はいかにあるべきなのかについて考究している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年、谷口勇一、地方自治体スポーツ行政は部活動改革動向とどう向かい合っているのか：総合型クラブ育成を担当した元指導主事の意識からみえてきた行政文化の諸相. 体育学研究, 63(2): 853-870.</li> <li>2014年、谷口勇一、部活動と総合型地域スポーツクラブの関係構築動向をめぐる批判的検討:「失敗事例」からみえてきた教員文化の諸相をもとに. 体育学研究59 (2) : 559-576</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年、共著、スポーツクラブの社会学―「コートの外」より愛をこめ」の射程. 青弓社</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2011年、九州体育・スポーツ学会 学会賞（優秀論文賞）受賞</li> </ol>



所属・職位	教育学部（芸術・保健体育教育）・教授	
氏名	玉江 和義 (Tamae Kazuyoshi)	
取得学位	博士（医学）、産業医科大学、2009年11月	
SDGs目標	 	

研究分野	学校保健、衛生学・公衆衛生学
研究キーワード	精神心理的ストレス、酸化的・メチル化的ストレス損傷、思春期
研究内容	<p>1. 疫学的アプローチによる思春期の心身ストレスに関する研究 中学生や高校生、大学生を対象に、心身のストレス状態を反映する各種質問紙を駆使し、色々な規模の疫学的調査の実施・検討を行ってきている(論文等1など)。</p> <p>2. 保健教育に関する研究 特に中学生を対象として、性教育に関する文献的検討、AIDS教育および喫煙防止教育に関連する質問紙調査法による検討などを行ってきている。</p> <p>3. 生体内酸化・メチル化ストレス指標を用いた実験的および分子疫学的研究 動物の組織や尿、ヒトの尿中の生体内酸化ストレス指標 (8-Hydroxydeoxyguanosine) および生体内メチル化ストレス指標 (7-Methylguanine)、あるいはヒト血清中酸化ストレス指標 (Reactive Oxygen Metabolites, Biological Antioxidant Potentials)の検討も行っている(論文等2~5など)。</p> <p>4. その他 大豆イソフラボンやガラクトオリゴ糖などの健康効用など関し、臨床栄養学的ならびに疫学的検討を行ってきている。また、学校ストレスや教員ストレスの検討も行っている(論文等6, 7など)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文等</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>九州地区某大学教育系学部学生における抑うつ症状保有程度と生活ストレスの分析, 体育学研究, 55, 2010</li> <li>Suppression of DNA oxidation in cerebral ischemia by indomethacin, European Journal of Pharmacology, 459, 2003</li> <li>Occupational and lifestyle factors and urinary 8-hydroxydeoxyguanosine, Cancer Science, 96, 2005</li> <li>Effect of age, smoking and other lifestyle factors on urinary 7-methylguanine and 8-hydroxydeoxyguanosine, Cancer Science, 100, 2009</li> <li>Analyses of associations between reactive oxygen metabolites and antioxidant capacity and related factors among healthy adolescents, Current Aging Science, 6, 2013</li> <li>大豆イソフラボンによるアセトアミノフェン肝障害抑制効果の解析 日本臨床栄養協会誌, 31, 2015</li> <li>教員の健康とストレスについて考える ~健康観およびヘルスプロモーションの視点から~, 心と体の健康(学校保健専門誌), 25, 2021</li> </ol>

所属・職位	教育学部（社会認識教育）・教授	
氏名	土居 晴洋 (Doi Haruhiro)	
取得学位	博士（文学）、広島大学、2002年1月	
SDGs目標	  	


研究分野	人文地理学
研究キーワード	土地利用, 地域研究, 防災・減災
研究内容	<p>経済発展と社会経済体制の変化は、人の価値観や暮らしの変容を通じて、土地利用変化として現れる。SDGsの観点では、そこに潜む脆弱性や持続可能性が問われる。</p> <p>●中国・インドの土地利用変化に関する研究</p> <p>中国の都市地域では20世紀半ば以降、数度の社会経済体制の変革によって、現世市民の生活基盤である住宅（著書2）と死後の住まいである墓地（論文1）に質的・量的変化が見られる。そこには近代的な経済原理とともに、伝統的価値観の残存・継続も見られる。</p> <p>インド（論文2）や中国（著書1）の内陸地域・農村地域も経済成長や生活水準の向上が見られる。そこには予想以上に大きな土地利用変化が生まれているが、地域の持つ自然条件や歴史的背景が持続可能性の制約条件となっている。</p> <p>●土地利用を踏まえた地域の防災・減災に関する研究</p> <p>わが国では近代化・経済発展の歴史の中で生じた土地利用変化によって、自然災害に対する脆弱性が高まった地域が少なくない（論文3）。防災・減災の基本は一人一人の地域認識にあり、土地利用の特質を理解することが重要であることを、教育の場で伝えている。</p> <p>●大分県の地域変容に関する研究</p> <p>学校教育における活用を念頭において、大分県内各地の地域変容を考察している。別府市や大分市に限らず、その置かれた位置や自然条件、歴史などによって特徴づけられ、日本の近代化の歴史や経済、暮らしのあり方の変化に関連付けることができる（著書3）。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年 Doi Haruhiro, Chai Yanwei, Xu Peiwei and Wang Xinxing: Spatiotemporal change of land use for deceased in Beijing since the mid-twentieth century. <i>Open Geosciences</i>, vol.13, no.1, pp.16-26.</li> <li>2018年 土居晴洋・木本浩一・牧野一成：インド半乾燥地域農村の維持可能性に関する予察的考察. 大分大学教育学部研究紀要, vol.39, no.2, pp.175-190.</li> <li>2015年 土居晴洋：中山間地域における水害と土地利用変化—2012年7月九州北部豪雨における大分県竹田市の事例. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, vol.37, no.1, pp.27-41.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年 Doi Haruhiro and Chai Yanwei: Economic development and land use changes in an inland area of China- A case study of Gansu Province. <i>Exploring Sustainable Land Use in Monsoon Asia</i> (Himiyama Y. ed.), Springer, pp.57-81.</li> <li>2015年 Doi Haruhiro and Chai Yanwei: Urban restructuring of Beijing City through residential development after the reform and open policy. <i>Urban Development Challenges, Risks and Resilience in Asian Mega Cities</i> (R.B.Singh ed.) , Springer, pp.273-300.</li> <li>2012年 土居晴洋：県の性格, 中津・宇佐地域, 南豊後地域. 『日本の地誌10 九州・沖縄』（野澤秀樹他編）, 朝倉書店, pp.374-386, 419-426.</li> </ol>



南向き斜面に立地し、風水に配慮した大規模墓地  
(北京市昌平区, 2018年)



デカン高原上, 半乾燥地域の灌漑用水路  
(カルナータカ州, 2015年)

所属・職位	教育学部（理数教育）・教授	
氏名	中川 裕之（Nakagawa Hiroiyuki）	
取得学位	博士（教育学）、早稲田大学、2006年5月	
SDGs目標		

研究分野	数学教育学
研究キーワード	類推, 証明, 非認知能力
研究内容	<p>類推に関する研究</p> <p>算数, 数学の授業で学習する内容を, 教師が一方的に教えるのではなく, 子どもが発見, 創造するようになることを目指し, そのために必要な数学的な考え方として類推に着目し, 類推の振り返り方, 学習へのつなげ方に関する研究を行っている。</p> <p>類推に関する研究成果は, 数学者の思考を明らかにした点, その数学的な思考を子どもも行えるようにしている点が高く評価され, 日本数学教育学会では令和元年に学会賞（学術研究部門）を受賞している。</p> <p>教員による子どもの非認知能力の評価に関する調査・研究</p> <p>「関心・意欲・態度」や「主体的に学習に取り組む態度」を非認知能力と捉え, 教師による非認知能力の評価に関する研究を行ってきた。非認知能力に関しては, 手を挙げた回数や宿題の提出状況で評価することが問題視されるなど, 評価方法が定まっておらず, 算数・数学科でも研究課題となっている。</p> <p>このため, まず実態調査を行うために質問紙を作成して100名以上のベテラン教員を対象とした調査を何度も行い, ベテラン教員が非認知能力をどのように評価しているかを調査してきた。そうして, ベテラン教員の非認知能力の評価の特徴を明らかにしてきている。</p> <p>学校数学における課題設計原理の開発に関する研究</p> <p>我が国では, 児童生徒の数学学習に対する教材の重要性から, 教材研究が数学教育研究の一つとして古くから行われてきた。国際的な文脈においても, 教材開発に関する研究は, 「課題設計」(task design) という名称で一つの研究領域を成している。そうした課題設計に関する研究の中でも, 個々の具体的な課題を検討することに加えて, そうした課題設計を裏付けるメタ的な原理を開発することに着目して研究を行っている。</p> <p>(関連リンク)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="http://kitchom.ed.oita-u.ac.jp/mathedu-nakagawa/">http://kitchom.ed.oita-u.ac.jp/mathedu-nakagawa/</a></li> <li>・ <a href="https://researchmap.jp/Hi-Nakagawa">https://researchmap.jp/Hi-Nakagawa</a></li> <li>・ <a href="https://orcid.org/0000-0001-7557-5819">https://orcid.org/0000-0001-7557-5819</a></li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>著書, 研究業績となる論文, 外部資金の獲得実績は多数あるため, 上記の関連リンクを参照してください。</p> <p>●受賞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2019年11月 日本数学教育学会 学会賞（学術研究部門）</li> </ul>

所属・職位	教育学部（発達科学教育）・教授	
氏名	長谷川 祐介 (Hasegawa Yusuke)	
取得学位	修士（教育学）、広島大学、2002年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	教育社会学
研究キーワード	特別活動、学級経営、生徒指導

研究内容	<p>これからの社会においてどのような学級や学校を創造すればよいのか。学級活動を中心とした特別活動について、学校現場の先生とともに教育データ分析に基づきながら研究に取り組んでいる。</p> <p>1 学級活動に関するエビデンスと実践知の統合</p> <p>教育社会学の知見を援用しながら、子どもの家庭背景などの影響を考慮した上での小学校学級活動に関する計量分析に取り組んでいる（研究業績1など）。</p> <p>エビデンスに関する考察（研究業績4など）を踏まえ、研究者が創り出すエビデンス（科学的根拠）と学校現場で培われてきた実践知の統合に基づく学級活動の開発に取り組んでいる。</p> <p>2 特別活動に関する教師ネットワーク</p> <p>昨今の働き方改革の推進は、これまでの教師の実践知継承システムの見直しを迫っている。そうした中、特別活動に関する教師の実践力形成について新たな形が模索されている。SNSが普及し、サイバー空間によるコミュニケーションが進化する中、学校外で形成されている特別活動に関する教師ネットワークはどのような構造なのか？また特別活動に関する教師ネットワークと学校現場における特別活動実践にはどのような関連があるのか？</p> <p>社会ネットワーク分析の方法論を参照し、小学校特別活動に関する教師ネットワークの調査研究に取り組んでいる。</p>
------	---

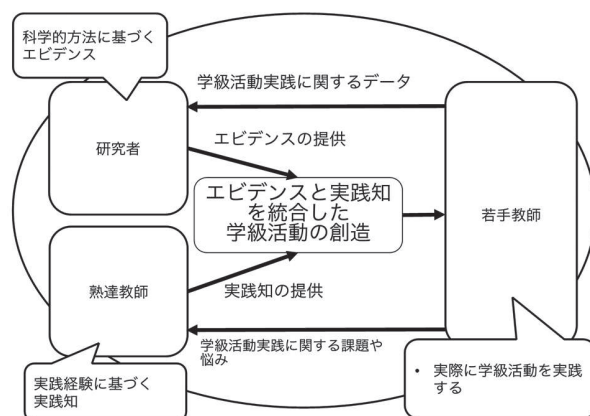






図1 エビデンスと実践知を統合した実践改善プログラム

研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文</li> <li>1 長谷川祐介, 2022, 「マルチレベルモデルによる学級集団の向上に与える小学校学級活動の影響に関する分析」日本特別活動学会編『日本特別活動学会紀要』第30号。</li> <li>2 長谷川祐介, 2014, 「中学部活動における指導者からの暴力被害を規定する要因」日本生徒指導学会編『生徒指導学研究』第13号。</li> <li>3 長谷川祐介・太田佳光・白松賢・久保田真功, 2013, 「小学校における解決的アプローチにもとづく学級活動の効果 - 測定尺度開発と学級・学校適応に与える効果の検討 - 」日本特別活動学会編『日本特別活動学会紀要』第21号。</li> <li>● 著書</li> <li>4 長谷川祐介, 2019, 「エビデンスを「つくる」ことと「つかう」こと」杉田浩崇・熊井将太編著『「エビデンスに基づく教育」の闘を探る』春風社。</li> <li>● 受賞</li> <li>日本生徒指導学会・研究奨励賞（執筆部門）（2019年）</li> </ul>
---------------	--



所属・職位	教育学部（芸術・保健体育教育）美術・教授	
氏名	廣瀬 剛 (Hirose Takeshi)	
取得学位	学士（芸術）、多摩美術大学、1993年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	グラフィックデザイン
研究キーワード	グラフィックデザイン, 造形教育, 美術教育, イラストレーション
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校現場におけるデザイン教育</li> <li>・図画工作・美術の教材開発</li> <li>・地域の子どもを対象とした造形活動</li> <li>・障がい者を対象とした造形活動</li> <li>・地域や学校現場で活用できる絵本教材の開発</li> </ul> <p><a href="https://www.youtube.com/channel/UCIk7HXP02DkrJZWloluDRqQ">https://www.youtube.com/channel/UCIk7HXP02DkrJZWloluDRqQ</a></p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>「造形ワークショップPop-up絵本づくり」</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>「障がい者支援施設での造形活動」</p> </div> </div>

研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論文 2022年「教育現場や地域で活用される絵本を題材にした造形プログラムの開発—遠隔授業における絵本制作の実践から—」(2022年3月発行予定)</li> <li>・小冊子 2019年『ゼロからスタート！障がい者支援のためのはじめてのアート活動』 障がい者支援に従事する教職員や障がい者の家族などに向けた、アート活動を行なうための入門書(小冊子)の発行(本文・アートディレクション・デザイン・イラストレーションを担当)制作・発行: 社会福祉法人みずほ厚生センター こみっとあーと</li> <li>・受賞 1992年クレヨンハウス絵本大賞優秀作品賞</li> </ul>
---------------	--

役員

大学院教育学部  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

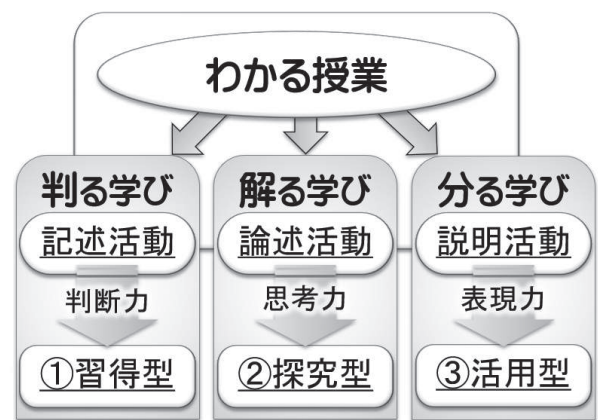
理工学部

福祉健康科学部



その他学内施設等

所属・職位	教育学部（発達科学教育）・教授	
氏名	藤田 敦 (Fujita Atsushi)	
取得学位	博士（心理学）、九州大学、2006年1月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	



研究分野	教育心理学
研究キーワード	教授学習過程の心理、授業デザイン、学習の転移の心理
研究内容	<p>①3相の「わかる」で構成する授業づくりの研究</p> <p>学校の授業の第一の目的は、児童生徒が学習内容を「わかる」ようになることである。この「わかる」授業をデザインするために、学習者が「わかった」と認識する状態を、「判る」・「解る」・「分る」という3つの観点からとらえ、それぞれが、どのような授業中の教授学習過程から生起するのかを推定している。また、3相の「わかる」学びを配置した授業が、いかなる学力の向上に寄与するのか、授業づくりの上での課題は何かという問題について、授業記録や授業実践者を対象とした調査の分析を通して明らかにすることを試みている。それらの結果を踏まえ、「確かな学力」を育てるための3つの「わかる」で構成する授業デザインの考え方と授業づくりの具体的な方法について提案することを目的に研究を進めている。</p> <p>②学習した知識の活用や転移を促進するための教授方略の研究</p> <p>算数や理科などの自然科学領域の学習において、過去に学習した科学概念の活用や転移が成立するために必要な知識の特定や、その知識の獲得を促進する具体的な授業時の教授方略（教材や発問）を探る研究を行ってきた。応用問題などへの転移を促進するには、学習した概念やルールの構造を変換・操作する具体例を用いた教材が有効であることや、教師や児童が、授業の様々な局面で、複数の知識と学習内容を関連づけることで、知識の活用性を高めていると考えられる。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>「わかる」授業、「おもしろい」授業とは何かという問いを追求しています。教員養成教育や学校現場の教員を対象とした研修会を通して、研究成果を還元しています。</p> <p>「科学的概念の転移をうながす事例の学習」, 吉田甫・Erik De Corte編『子どもの論理を活かす教育実践心理学』北大路書房, pp.162-180, 2009年</p> <p>「概念学習と授業」, 高垣マユミ編『授業デザインの最前線—理論と実践をつなぐ知のコレクションⅡ』北大路書房, pp.88-103, 2010年</p> <p>「複数事例の提示が概念の般化可能性に及ぼす影響—気圧の力学的性質に関する概念受容学習過程—」, 教育心理学研究, 53, pp.122-132, 2005年</p>







所属・職位	教育学部（言語教育）・教授	
氏名	藤原 耕作 (Fujiwara Kosaku)	
取得学位	文学修士、神戸大学、1991年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	日本近代文学	
研究キーワード	太宰治・坂口安吾・石川淳・無頼派・新戯作派	
研究内容	<p>私はこれまで、主に太宰治・坂口安吾・石川淳を中心とする、いわゆる無頼派の文学を研究の対象としてきた。私の関心は、言論への規制の厳しい状況下に於いて、どのように表現者が工夫を重ね、その表現の可能性を切り開いていったかというところにある。無頼派の文学者たちは、戦時下の強権による弾圧や、戦後のGHQによる検閲に屈せず、したたかに表現活動を継続していたという点で、魅力的な考察の対象だと考えている。現在の私の研究の中心は、戦時下の言論弾圧の状況との関わりで、彼らの作品を読み進めていくことにある。坂口安吾や石川淳の研究の現状を見ると、まだ主要作品にかたよっており、手がつけられていない分野も多いので、校異や典拠の究明など、基礎的な研究から充実させていきたいと考えている。</p> <p>一方、近年では、戦後のGHQによる検閲の実態も、徐々に明らかにされつつあり、1940年代を通して検閲と文学との関わりを見通していく視座が提唱されてもいる。最新の研究成果を参照しつつ、戦後の無頼派とGHQによる検閲との関わりについても、明らかにしていきたいと考えている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・石川淳『渡辺華山』論 『国語と国文学』第89巻第1号 2012年1月</li> <li>・太宰治『新釈諸国噺』論 『国文論叢』第47号 2013年9月</li> <li>・坂口安吾「イノチガケ」論 『国語と国文学』第90巻第10号 2013年10月</li> <li>・石川淳「義経」論 『日本文学』第65巻第6号 2016年6月</li> <li>・石川淳『義貞記』論 『国語国文』第85巻第6号 2016年6月</li> <li>・石川淳『森鷗外』論 『国語国文』第87巻第5号 2018年5月</li> <li>・坂口安吾『二流の人』論 『国語国文』第89巻第2号 2020年2月</li> <li>・石川淳・戦時下の古典現代語訳 『国語と国文学』第97巻第6号 2020年6月</li> <li>・坂口安吾「安吾下田外史」論 『日本文学』第69巻第12号 2020年12月</li> <li>・太宰治『右大臣実朝』とその時代 『国語国文』第91巻第1号 2022年1月</li> </ul>	

所属・職位	教育学部（芸術・保健体育教育）・教授	
氏名	松田 聡 (Matsuda Satoshi)	
取得学位	修士（文学）、東京大学、1992年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育を みんなに	

研究分野	西洋音楽史
研究キーワード	西洋音楽史、モーツァルト、オペラ、トーマス・リンリ
研究内容	<p>●研究テーマ1：モーツァルトのオペラ創作とオペラ公演との関わり</p> <p>モーツァルトの、特にオペラを専門としている。従来の研究が膨大にある研究分野だが、オペラの作曲や上演を取り巻くコンテクストへの目配りは十分だったとは言えない。コンテクストの重視は1980年代以降に顕著になってきた西洋音楽史学における傾向の1つであり、私も、特に大分大学に赴任した2000年からは、その流れに沿った研究を行っている。具体的には、モーツァルトがどのようなオペラ公演のために作曲を行ったのか、また、なぜ彼が作曲を行うこととなったのかについての考察を中心とする研究である。</p> <p>まず手がけたのは、モーツァルトが後期の諸傑作を作曲したウィーンの宮廷劇場のオペラ公演との関わりについての研究である。その成果の一端は、学術誌『美学』及び『音楽学』掲載の論文にまとめている（研究業績の「主要論文」参照）。その後、さらにザルツブルク時代にも目を広げ、ミュンヘンやザルツブルクにおけるオペラ公演とモーツァルトとの関わりをテーマとした論文を、教育学部の『研究紀要』に発表してきた。そして、2021年には、それらの研究成果を大きくまとめた著作を刊行した（研究業績の「著書」参照）。</p> <p>●研究テーマ2：トーマス・リンリと18世紀後半のイギリス音楽</p> <p>モーツァルトと同じ1756年に生まれ、22歳の若さで世を去ったイギリスの天才音楽家トーマス・リンリについての研究にも、最近、着手した。早世し、作品も多くは残されていないため、一般には知られていないが、その作品は質が高く、再評価が必要である。そのようなリンリにつき、伝記情報をまとめ、作品分析を行うとともに、同時代のイギリス音楽の中に位置づける研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●著書（すべて単著）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・『フィガロの結婚：モーツァルトの演劇的世界』ありな書房、2009年</li> <li>・『モーツァルトのオペラ：全21作品の解説』音楽之友社、2021年</li> </ul> <p>●主要論文（すべて単著・査読付き）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「1786年2月のシェーンブルン宮殿におけるモーツァルトとサリエリの「競演」再考—ウィーンの宮廷劇場における公演の体制との関わりにおいて—」、『美学』214号、70～83ページ、2003年</li> <li>・「ブルク劇場のオペラ公演の中の《フィガロの結婚》—1786/87年の上演状況をめぐる試論—」、『音楽学』第50巻2号、44～55ページ、2005年</li> </ul>

所属・職位	教育学部（言語教育）・教授	
氏名	御手洗 靖 (Mitarai Yasushi)	
取得学位	教育学修士、静岡大学（1987年3月）、広島大学（1989年3月）	
SDGs目標		

研究分野	英語教育
研究キーワード	言語習得
研究内容	<p>人工的な一人一言語家庭内環境におけるバイリンガリズム, 課題の目的は, 日本における幼児の日英両言語の発達を記述・分析することである。本研究の特徴は, 幼児の人工的な一人一言語環境にある。つまり, 日本人の両親のうち, 母親は日本語を, 父親は外国語である英語を常時使用している。これにより, 「ネイティブスピーカーでない人間からのインプットにより, どのような言語能力が獲得されてゆくのか」という問いに答える。さらに, 父親のみが日本社会における少数派言語である英語を使用するという例は, これまでの研究に見られない特徴である。これにより, インプット量の絶対量が少ない言語（英語）の獲得は, どのレベルまで可能であるのかという問いに答える。</p> <p>実践的な発音指導方法の開発。研究者本人の調音過程のビデオ録画, ソフトウェアの使用による, 調音・韻律の明示的な指導の実践効果の検証。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>科学研究費補助金一課題</p> <p>人工の日英バイリンガル養育児における英語習得の縦断的研究, 2008-2010, 代表</p> <p>人工の日英バイリンガル養育児における英語疑問文・関係代名詞文習得の縦断的研究, 2011-2013, 代表</p> <p>Synonymously-used Translation Equivalents as Evidence of Language Separation by an English-Japanese Bilingual Infant at the One-word Stage <i>Annual review of English learning &amp; teaching</i>. No.6. The JACET Kyushu-Okinawa Chapter 2001.10.31.</p> <p>二人の日本人幼児の日英語使い分け能力の発達(2)(二人の日英バイリンガル幼児の3~4歳における英語発話能力—二言語による発話の誤りの分析を中心に—九州英語教育学会紀要38 2010.7</p> <p>実践報告—教養科目「英語ゼミナールF—英語運用力養成訓練II」大分大学高等教育開発センター.第9号, 2017</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部





医学部




医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	教育学部（理数教育）・教授	
氏名	三次 徳二 (Mitsugi Tokuji)	
取得学位	博士（工学）、早稲田大学、1999年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	教科教育学（理科教育）、環境教育、防災教育、地球科学	
研究キーワード	理科、野外観察	
研究内容	<p>1. 理科教育に関する研究</p> <p>理科の中でも、主に地学領域（地球を柱にする領域）における観察、実習（野外観察を含む）について、その効果的な実施方法や教材開発方法について、小学校、中学校および高等学校を対象とした研究を行っています。特に、河川や地層、地形の観察についての研究を行っていますが、研究の例を挙げると、小学校第5学年の理科では、川原の石の大きさや形について上流から下流にかけてどのように変化していくか学びます。これまで、大分県内であれば大分川や山国川の川原の石について上流から下流にかけて調査を行い、どのような場所で授業を行えばよいか示したり、野外に出られない場合には、どのような代替教材があるか示したりしています。</p> <p>2. 環境教育に関する研究</p> <p>環境教育の歴史について研究しておりますが、高等学校向けの教材開発などにも取り組んでいます。例えば、大分県や福岡県の海岸の漂着ごみを教材化し、授業実践をもとに教材の評価を行いました。</p> <p>3. 防災教育に関する研究</p> <p>学校教育における防災教育について研究しております。様々な教科を横断する形で防災教育は実施されます。特に、理科において自然の仕組みを学ぶ中で、人間にどのような影響があるか考えさせる指導法について研究しております。</p> <p>4. 地球科学に関する研究</p> <p>地球科学の中でも、主に地質学・古生物学について研究しております。過去には、中生代の放散虫化石の研究をしておりました。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>学校教育における理科教育については、地学領域に限らず、全ての領域、全ての学校種を対象とした研究を行っております。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・川原の実物大写真と石の標本を組み合わせ教材の有効性の検証—小学校理科「流水の働き」における川の野外観察の代替教材として—、地学教育第74巻2号（2022年）</li> <li>・中学校理科教員から見た科学の甲子園ジュニアの実態—大分市及び別府市における指導経験者と指導未経験者の視点からの調査—、九州地区国立大学教育系・文系研究論文集 第6巻第1・2号（2020年）</li> <li>・素朴概念を科学的概念に転換する実践的研究—高等学校理科物理領域「電力とエネルギー」に着目して—、九州地区国立大学教育系・文系研究論文集 第8巻第1号（2021年）</li> </ul>	

所属・職位	教育学部（生活・技術教育）・教授	
氏名	望月 聡 (Mochizuki Satoshi)	
取得学位	博士（農学）、名古屋大学、1993年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	栄養生化学、水産化学
研究キーワード	食品の機能性、魚類の鮮度保持
研究内容	<p>●魚類の品質に関する研究 大分県が誇るブランド魚「関あじ・関さば」の特徴を化学的分析により明らかにした。一本釣りで漁獲された魚を、活け締めによって致死させ、それを最適な温度で流通することによって刺身で食することができるほど鮮度のよい魚を供給していることを明らかにした。(論文1) また、近年大分県の新しいブランド魚として知名度が上昇している「かぼすブリ」の特徴を体脂肪の観点からその特徴を明らかにした。</p> <p>●生活習慣病の発症に対する食品成分の影響 近年注目がなされている「非アルコール性脂肪肝」について、ショ糖の過剰摂取が脂肪肝を引き起こすメカニズム解明などを他大学の研究者との共同研究によって行っている。(論文2)</p> <p>●食品の機能性に関する研究 上記に示したショ糖の過剰摂取による脂肪肝に対して、発酵大麦エキス（焼酎蒸留後の残液をろ過したもの）や、ユズ・カボスの抽出物が脂肪肝発生を予防する作用があることを動物実験によって明らかにした。(論文3)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>本学に着任以来、30年以上にわたり、関あじ・関さば、ブリ、大麦焼酎粕、カボスなど大分県の食品や食品素材を対象に学内外の共同研究者と共に研究を進めてきました。また、大分県内企業にアドバイスをを行い、商品化に結びついた事例もあります。</p> <p>●論文 1. 2001年、伝統食品の研究 No.22 12-17 2. 2019年、J. Biol. Chem. 294(42) 15206-15217 3. 2021年、日本食品科学工学会誌 68(5) 197-205</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部


医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部




その他学内施設等



所属・職位	教育学部 附属教育実践総合センター・准教授	
氏名	麻生 良太 (Aso Ryota)	
取得学位	修士 (心理学)、九州大学、2005年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	発達心理学, 教育心理学, 教育実践学
研究キーワード	感情理解, 幼保小連携, 教師教育
研究内容	<p>●幼児期の感情理解に関する研究</p> <p>幼児期に自他が抱いた感情の原因や, ある出来事から自他の感情を予測する能力が発達することが知られている。何が起因となって感情を抱くかについては様々であると考えられるが, 直前の出来事ではなく, それ以前の過去の出来事やそれに関わる人や物が原因となって感情を抱くことがある。この種の感情理解はどのような機序で起こるのかを明らかにすることを目的としている (論文1, 論文2)。</p> <p>●幼保小連携に関する研究</p> <p>幼保小接続期 (年長児後期~小学校1年前期) の子どもの怒りの感情についての理解の発達を系統的に明らかにし, 幼小接続期における教育支援プログラムを開発することを目的としている。具体的には, 1) 幼児教育から小学校教育 (低学年) の幼児児童の感情についての理解, 特に怒りの感情についての理解の発達を, 幼児期年長児から小学校1年生の2年間にわたって縦断的に明らかにする。2) 1) で得た知見をエビデンスとし, 年長児後期~小学校1年前期に継続して実施できる怒りの感情理解の発達にもとづいた教育支援プログラムを開発することを目的としている (科研費1)。</p> <p>●養成段階や採用後の育成段階における教員としての資質能力向上に関する調査・分析</p> <p>教育実習や学校支援ボランティア等での学校現場での体験, 採用後の育成段階における研修が教員としての資質能力の向上にどのように影響を与えているかについて, 量的質的に調査・分析を行い, 今後の教育・研修に生かしていくことを目的としている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>麻生良太・丸野俊一 (2007). 幼児における時間的広がりを持った感情理解の発達: 感情を抱く主体の差異と感情生起の原因となる対象の差異の観点から. 発達心理学研究, 18(3), 163-173.</li> <li>麻生良太・丸野俊一 (2010). 時間的広がりを持った感情理解の発達変化: 状況に依拠した推論から再帰的思考に依拠した推論へ. 発達心理学研究, 21(1), 1-12.</li> </ol> <p>●科研費</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>幼小接続期におけるアンガーマネジメントプログラムの開発. 若手研究. 2018-2021. 課題番号: 18K13056</li> </ol>



所属・職位	教育学部（言語教育）・准教授	
氏名	安道 百合子（Andou Yuriko）	
取得学位	博士（文学）、広島大学、1997年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	日本古典文学
研究キーワード	日本文学、中古・中世物語、中世王朝物語、古典籍データベース
研究内容	<p>●日本古典籍のデータベース化に関する研究</p> <p>1999～2003年国文学研究資料館の古典籍データベース作成に携わった経験から、全文検索に堪え得るテキストとして「標準化」されたデータの作成、漢文体の訓読プログラム開発、類似本文を検索する方法の研究、校本作成プログラム開発などの研究や実験（試行）を行ないました。実際に作成したデータベースとしては、『吾妻鏡』（刊行物1）『歴史物語』『古事記』があり、データを活用した成果としての書籍や、情報処理の方法を解説したテキスト（著書1）の執筆を行なっています。</p> <p>●中世王朝物語の基礎的研究</p> <p>主として鎌倉時代につくられた王朝物語の基礎的研究を続けています。『夢の通ひ路物語』について、翻刻読解をしつつ、典拠の調査、年立や人物総覧など物語を読むための基礎的研究を行ない、その後、主題探究や同時代の作品との影響関係などの研究に向かいました。また、データベース化に関する研究成果をもとに、科研費による研究課題「中世王朝物語の引用和歌典拠総覧作成とテキスト処理による物語内引歌表現検索の研究」（2007～2010年・課題番号19720053）に取り組み、おもに表現面から創作基盤を明らかにする研究（論文1）を続けています。現在は、時代性がどのように反映されているかに関心を持って（論文2）研究を進めています。</p> <p>●中学校・高等学校国語科の古典教材に関する研究</p> <p>近年、学校では「古典」を学ぶ意義について問われています。そこで、学校教育で扱われる古典教材を対象にしつつ、教材研究の見直しや関連教材の発掘（論文3）など、成果を現場に還元することを念頭に置いた研究をしています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>データベース作成に関する研究成果は、主に共同制作・執筆の業績があります。</p> <p>●刊行物</p> <p>1. 2003年,国文学研究資料館データベース古典コレクション『吾妻鏡』CD-ROM,岩波書店</p> <p>●著書</p> <p>1. 2008年,文系のための情報処理入門ーパソコンを活用して研究を進めようー,和泉書院</p> <p>個人研究の成果は、主に論文として発表しています。</p> <p>●論文</p> <p>1. 2007年,『夢の通ひ路物語』の成立についてー『題林愚抄』を指標にする可能性ー</p> <p>2. 2020年,『苔の衣』変奏の構想ー為家本『狭衣』の影響を想定してー</p> <p>3. 2021年,古典教材のつながりを考えるー物語の変奏・変容を切り口にしつつー</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部




その他学内施設等

所属・職位	教育学部（芸術・保健体育教育）・准教授	
氏名	大塚 道太 (Ohtsuka Dohta)	
取得学位	博士（教育学）、広島大学、2014年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	体育科教育 スポーツ運動学 スポーツ方法学
研究キーワード	体育授業 競技スポーツ 球技 工夫したゲーム

研究内容	<p><b>【研究のテーマ】</b> 球技の「工夫したゲーム」が運動強度や運動内容に与える影響の検討</p> <p><b>【研究の背景】</b> 学校の「体育授業」で取り扱われる「球技」では、生徒が学習課題を追究しやすいように「工夫したゲーム」に取り組むことがあります。同様に、「競技スポーツ」の「球技」でも、トレーニング目的のために「工夫したゲーム」に取り組むことがあります。そのため、球技の指導では、課題や目的のための「工夫したゲーム」を考案する必要があります。</p> <p style="text-align: center;">「工夫したゲーム」とは？</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>競技規則の (コート広さ) (競技人数) (用具) (ルール) などを工夫したゲーム</p> </div> <p>この「工夫したゲーム」の工夫の仕方によって、そのゲーム中の運動強度や運動内容に影響を及ぼします。しかしながら、球技の指導現場では、この「工夫したゲーム」は指導者の経験則的な知見で実施されている場合が多く、科学的アプローチによる客観的把握による実施までは至っていない現状があります。</p> <p><b>【研究の目的】</b> そこで、球技の「工夫したゲーム」の工夫の仕方によって、ゲーム中の運動強度や運動内容に与える影響を科学的アプローチによって明らかにすることを目的としています。</p>
------	---

研究業績・アピールポイント	<p><b>【主な研究業績】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●大塚道太・森木吾郎・房野真也・菅輝・梶山俊仁・塩川満久・出口達也・黒川隆志(2018)DLT法を用いたブロック大会レベルの7人制ラグビーゲーム中の運動強度. コーチング学研究, 32(1): 99-111.</li> <li>●大塚道太・黒川隆志・梶山俊仁・出口達也・森木吾郎・西山健太(2014) 心拍数と主観的運動強度からみた7人制ラグビーの運動強度. コーチング学研究, 27(1):33-43.</li> </ul> <p><b>【アピールポイント】</b> 上記の2つの研究では、心拍数を指標とした生理的運動強度と、移動距離や移動速度を指標とした物理的運動強度を測定することで、競技人数の違いによるゲーム中の運動強度に与える影響を検討しています。</p>
---------------	---

所属・職位	教育学部（理数教育）・准教授	
氏名	大野 貴雄 (Ohno Takao)	
取得学位	博士（理学）、広島大学、2008年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	解析学（ポテンシャル論）
研究キーワード	Sobolevの不等式, Trudingerの不等式, Rieszポテンシャル
研究内容	<p>●Rieszポテンシャルに対するSobolev型の定理に関する研究</p> <p>様々な偏微分方程式の解の存在や正則性を研究する際に、Rieszポテンシャルに対するSobolev型の定理（Sobolevの不等式やTrudingerの不等式、連続性）は非常に有用なツールである。そのため、古典的な関数空間であるLebesgue空間やMorrey空間などにおいて、Rieszポテンシャルに対するSobolev型の定理の研究は盛んに行われてきた。一方近年、科学技術分野や数学分野からの要請により、変動指数をもつ関数空間やOrlicz空間、Musielak-Orlicz空間、Musielak-Orlicz-Morrey空間などの様々な関数空間が、解析学の研究対象として注目を集めるようになった。また、古典的にはSobolev空間はユークリッド空間において定義されてきたが、微分幾何学やグラフ上の解析学、Riemann多様体上の楕円型偏微分方程式などへの応用を念頭に、距離空間上でのSobolev空間の研究も、解析学の研究対象として非常に注目を集めるようになった。</p> <p>上記のような研究背景より、私の研究内容は、ユークリッド空間又は距離空間上の様々な関数空間において、どのような条件下において、どのようなタイプのRieszポテンシャルに対するSobolev型の定理が成り立つかについて研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>本研究で得られた結果は、様々なタイプの偏微分方程式の解の存在や正則性の研究に応用されることが期待され、関連研究分野の進展、新しい学問分野の開拓等に大きな学術的波及効果が期待される。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Takao Ohno and Tetsu Shimomura, Sobolev's inequality for Musielak-Orlicz-Morrey spaces over metric measure spaces, J. Aust. Math. Soc. 110 (2021), no. 3, 371--385.</li> <li>2. Yoshihiro Mizuta, Takao Ohno and Tetsu Shimomura, Boundedness of the maximal and potential operators in Herz-Morrey type spaces, Complex Var. Elliptic Equ. 65 (2020), no. 9, 1575--1589. (他75編)</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	教育学部（生活・技術教育）・准教授	
氏名	川田 菜穂子 (Kawata Nahoko)	
取得学位	博士(学術)、神戸大学、2012年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	住居学・建築学
研究キーワード	住宅問題・住教育・住宅計画・住宅政策
研究内容	<p>●若年層の住宅アフォーダビリティと家族形成に関する研究 住宅アフォーダビリティ（適切な経済負担で良質な住宅に居住できること）が若年層の家族形成（親世帯からの自立、結婚・パートナーシップ形成、出産・子育てなど）に与える影響について、理論的・実証的に明らかにし、家族・人口の諸課題に対応するための住宅政策のあり方について検討する（論文1、プロジェクト1 など）。</p> <p>●住宅セーフティネットの再構築に関する研究 市場で住宅を確保できない人たちのために、民営借家ストックを活用し、住宅セーフティネットを形成しようとする政策が展開されているが、十分に機能していない。本研究では、住宅セーフティネットの需給関係に関する実態分析、制度分析、さらに地域比較分析を進めるところから、その再構築のあり方を理論・実証の双方から検討する（論文2、プロジェクト2 など）。</p> <p>●新しい時代の住まい・まちづくり学習に関する研究 本研究では、ニューノーマルな社会という転換期にあつて、同時代に生きる異なる世代の住まい・まちづくりに関する経験・知識・行動・意識について調べ、世代間や地域間の違い等から社会変化に伴う住まい・まちづくり学習の課題を明らかにするとともに、今後の住まい・まちづくり学習の方向性を探る（論文3、プロジェクト3 など）。 ※関連リンク：<a href="https://researchmap.jp/kawatan">https://researchmap.jp/kawatan</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>●主な論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年, 新型コロナウイルス感染症の拡大により顕在化する住宅アフォーダビリティの課題, 生活協同組合研究(545), pp.16-24.</li> <li>2017年, 住宅困窮者と居住支援の課題, すまいろん(100), pp.30-33.</li> <li>2017年, 巨大災害の時代を生きるための住教育, 建築雑誌(1697), pp.40-41.</li> </ol> <p>●主なプロジェクト</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>JSPS科研費 18K04512 (代表)</li> <li>JSPS科研費 22H01666 (代表)</li> <li>JSPS科研費 21H01504 (分担)</li> <li>住宅総合研究財団, 2021年度研究・実践助成 (分担)</li> </ol>

所属・職位	教育学部（社会認識教育）・准教授	
氏名	小山 拓志 (Koyama Takushi)	
取得学位	博士（地理学）、明治大学、2012年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	自然地理学（地形学・地生態学）、地理教育、防災・減災
研究キーワード	地形、山岳地、南極、火星、地理教育教材、防災・減災教育、自然災害
研究内容	<p>●南極と火星の地表環境に関する研究</p> <p>南極の自然環境を端的に表現すれば、低温、強風、乾燥です。低温はイメージできるかもしれませんが、実は乾燥地域でもあります（極地砂漠と呼ばれます）。また、南極は雪と氷の大陸ですが、露岩域と呼ばれる地表が剥き出しになっている場所があり、そこにはポリゴンと呼ばれる多角形の模様のような地形が分布しています。このポリゴン、実は火星でも発見されています。火星の環境は、低温乾燥環境、つまり南極の自然環境と非常に似ています。言い換えれば、地球上で最も火星に近い環境は、南極（極地砂漠）ということになります。</p> <p>現在のところ、火星に直接降り立って野外調査を行うことはできません。そこで、近年は南極に分布するポリゴンなどの調査結果を火星表面の類似地形に適用するなどして、火星の地表環境が推定されています。私は南極において、世界で初めてドローンによる地形測量に成功し、これまで誰も成しえなかったポリゴンの詳細な規模や形態を明らかにしました。また、永久凍土を削岩機で掘削し、ポリゴンの地中構造を解明しました。現在、それらの成果や衛星画像解析の結果を基に、火星の地表・地中環境を推定する研究を進めています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>私は良い意味でも悪い意味でも、自他共に認める研究の八方美人です。私の研究テーマ（フィールド）を大きくみれば、「標高0mから4000mまで、北極から南極まで、地球から火星まで」といったところでしょうか。本来の専門である地形学や地生態学に加え、地理教育から防災・減災教育、活断層などの自然災害、被災地調査まで、様々な研究を行っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小山拓志, 氏田洵悠, 土居晴洋 (2022) : セルフハザードマップ作成に向けた洪水時における浸水範囲規定要因の検討. 大分大学教育学部研究紀要, 43(2), 53-68.</li> <li>・小山拓志 (2021) : 国立公園およびユネスコエコパークを中心とした九州の山岳地における自然保護・環境保全の現状. 日本山岳文化学会論集 (18), 107-115.</li> </ul>

役員

大学院教育学部  
教育学部  
教育学部

経済学部

医学部





医学部  
附属病院

理工学部

福祉健康科学部






その他学内施設等



所属・職位	教育学部（生活・技術教育）・准教授	
氏名	齊藤 友子 (Saito Tomoko)	
取得学位	修士（保健福祉学）、東海大学、2004年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	保育学、家族関係学、社会福祉学、メンタルヘルス
研究キーワード	職業性ストレス、育児ストレス、児童虐待、保育、子育て支援
研究内容	<p>1. <u>保育者の職業性ストレスの背景要因の研究</u></p> <p>近年、保育者不足が顕在化しています。その背景のひとつに、保育者の「ストレス」が挙げられます。現在、県下約700名の保育者の協力を得て調査を行い、保育者の職業性ストレスの背景要因について検討しています。先行研究において、保育者の精神健康の不調の要因は、やりがいの低下、低賃金、超過勤務に加えて人間関係の悪循環等が挙げられています。(論文1) これらの要因が精神健康の不調に関連している傾向が高く、その一群では、本来ストレスの緩衝要因になりうる要因、主任や同僚との関係が不良です。そこで、職場環境の改善として「ストレスマネジメント」の視点からアプローチし、課題解決及び精神的な不調の未然防止策を検討しています。</p> <p>2. <u>児童虐待事案における要因に関する調査・分析</u></p> <p>日本の児童虐待件数は増加し続けており、特に家庭内暴力（ドメスティックバイオレンス：DV）を含む児童虐待は深刻な問題を孕んでいます。そこで、現在、A県における面前DVにおける背景要因の検討を行っています。(論文2、その他)</p> <p>3. <u>知的障害者施設における職員の職業性ストレスの背景要因の研究</u></p> <p>障害者福祉施設の職員のストレスについて調査を行い、職員の精神健康に関連するストレス要因について検討を行っています。これらの成果から、職場環境改善策を検討しています。(論文3)</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●子育て支援における助言・講習講師や職場内のコミュニケーションに関する助言・講習（管理者講習、主任者講習等）。</li> <li>●論文             <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 保育者の精神健康およびその関連要因についてのレビュー；日本社会福祉マネジメント学会誌1(2) 43-55. (2021)</li> <li>2. An Online Survey on the Uses of Internet of Things in Supporting Crime Victims. Journal of Japan Association of Forensic Nursing 5(2)35-46.(2019)</li> <li>3. 日本の知的障害者福祉施設で働く福祉職員の精神健康およびその関連要因についてのレビュー；産業ストレス研究28(2) 275-287. (2021)</li> </ol> </li> <li>●その他             <p>A県における児童虐待事案の実態調査 面前DVに着目して；日本子ども虐待防止学会第27回学術集会神奈川大会（2021）</p> </li> </ul>



所属・職位	教育学部初等中等教育コース（音楽講座）・准教授	
氏名	清水 慶彦 (Shimizu Yoshihiko)	
取得学位	博士（音楽）、京都市立芸術大学、2009年3月	
SDGs目標	   	
研究分野	作曲実践、音楽理論	
研究キーワード	作曲、楽曲分析、電子音響音楽、フィールドレコーディング	
研究内容	<p>●作曲実践</p> <p>いわゆる「現代音楽」の分野をおもな活動領域として、器楽・声楽・室内楽や電子音響音楽などの作曲実践をおこなっています。</p> <p>作品集CD『清水慶彦作品集 六相円融』(studio N.A.T) が雑誌『レコード芸術』で「推薦盤」に選定されるなど好評を得たほか、アンサンブル・リュネットCD『エイト・レンズ』、永野伶実CD『笛吹き女』等に楽曲を提供。作品はニューヨークで開催された音楽祭「ミュージック・フロム・ジャパン2018」等でも上演されています。</p> <p>近作では、笙とクラリネットのための《鶴の聲》(2017年初演、東京)、金管八重奏曲《付喪神成仏譚》(2019年初演、京都)、フルートと電子音響のための《鶴鳴キ夜》(2019年初演、大分)、弦楽四重奏曲《人が死ねば、魂は山に登っていく―霊山山中異界譚》(2019年初演、大分)、女声とヴィオラ・電子音響のための《新院御経沈め》(2022年初演、大阪) など「怪異と音楽」を題材に創作を展開しています。</p> <p>●フィールドレコーディング</p> <p>大分県の音の風景を録音・収集する「おおいたの音・音の風景」フィールドレコーディング・アーカイブ・プロジェクトに取り組んでいます。</p> <p><a href="https://www.youtube.com/channel/UCb3U1COccrSfoZK8NJh5X3w">https://www.youtube.com/channel/UCb3U1COccrSfoZK8NJh5X3w</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●CD、楽譜等出版物</p> <p>CD『清水慶彦作品集 六相円融』2010年 Studio N.A.T.</p> <p>楽譜 フルート三重奏曲《トリトリ》2011年 日本作曲家協議会.</p> <p>CD『日本の作曲家2012』（楽曲提供、クラリネットとチェロのための《回旋譜》）2012年 日本作曲家協議会.</p> <p>CD アンサンブル・リュネット『EIGHT LENSES 8つのレンズ』（楽曲提供、フルート四重奏曲《エイト・レンズ》）2012年 Studio N.A.T.</p> <p>CD 永野伶実『笛吹き女』（楽曲提供、バロックフルートのための《プラーナ》）2016年 Studio N.A.T.</p> <p>楽譜 バロックフルートのための《プラーナ》2016年 Studio N.A.T.</p> <p>●書籍</p> <p>書籍『黛敏郎の電子音楽』（共著、川崎弘二編著）2011年 engine books.</p> <p>書籍『ELECTROACOUSTIC MUSIC IN EAST ASIA』（共著、Marc Battier、Kenneth Fields 編）2020年 Routledge.</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	教育学部 附属教育実践総合センター・准教授	
氏名	清水 良彦 (Shimizu Yoshihiko)	
取得学位	博士 (教育学)、九州大学、2014年3月	
SDGs目標	    	
研究分野	教育方法学	
研究キーワード	授業研究、授業分析、教育方法学	
研究内容	<p>●多面的な授業分析方法の開発</p> <p>授業分析の新たな参加主体として学習者である子どもが参加する「子どもによる授業分析」、保護者が参加する「保護者による授業分析」を開発・実施し、授業実践の多面的な解釈・分析を可能とする新たな授業分析方法を開発する。</p> <p>●教育学における分野融合研究の試論的考察</p> <p>中学校教員に対するライフストーリー・インタビューを初任期から継続的に実施し、それらを手掛かりとしながら教育学における分野融合研究の可能性を明らかにする。</p> <p>●持続可能な学習支援事業・居場所づくり事業の普及に向けたモデル構築</p> <p>学習支援事業・居場所づくり事業の先進事例調査と試行的事業実施・効果検証を通して、事業の持続可能性・効果を高める要因を析出し、包括的ネットワークの形成やICT環境を活用した教育プログラムの開発を行うことで、持続可能な学習支援事業・居場所づくり事業のモデル構築を行う。</p> <p>※関連リンク：researchmap (<a href="https://researchmap.jp/shimizuyoshihiko">https://researchmap.jp/shimizuyoshihiko</a>) を参照</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>・清水良彦 (2011) 「多面的な授業分析の開発的研究：「子どもによる授業分析」を通して」日本教育方法学会『教育方法学研究』36巻、pp.13-23</p> <p>●著書</p> <p>・元兼正浩監修 (2020) 『最新版教育法規エッセンス:教職を志す人のために』(共著)「V 教育内容」執筆担当</p> <p>●受賞</p> <p>・清水良彦 (2012)・日本教育方法学会 研究奨励賞</p> <p>●社会貢献活動</p> <p>・きたく部 (放課後学習支援・居場所づくり活動等) 2018年10月～</p>	

所属・職位	教育学部（芸術・保健体育教育）・准教授	
氏名	田端 真弓 (Tabata Mayumi)	
取得学位	博士（体育学）、鹿屋体育大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	体育・スポーツ史学、体育科教育学
研究キーワード	幕末期、剣術、長崎、身体運動文化論
研究内容	<p>●身体教育をめぐる日本的心性の基盤形成に関する研究：幕末明治期の渡邊昇と藤田東湖の武術思想</p> <p>●幕末明治期大村藩における藩校教育と武術振興に関する研究</p> <p>幕末明治期の西洋化の中で、古来の身体運動文化である剣術がどのような位置づけられ、いかなる道程を辿りながら現在の剣道となるのか、また剣術にはどのような思想が内包されているのか、さらにはそれらの思想が現在の身体教育と結びつくのか否か、に着目して幕末明治期の剣術家渡邊昇と彼の出身地である大村藩に着目して研究を進めてきました。そのような研究内容をスポーツ移入と比較検討した成果（論文2）、地方史との関連性のなかで捉えた成果（著書1）、日本武道の変遷と思想における位置づけに触れた成果（著書2）があります。</p> <p>●幕末長崎外国人居留地における競馬場設置交渉に関する研究</p> <p>我が国が幕末期にスポーツを受容する際、いかなる交渉を展開したのかについて、長崎の競馬場交渉を中心に検討を進めてきました。その過程では競馬場施設の設置を要求する外国人とそれを阻もうとする日本人の立場の違いがみられます。そのような主張の相違は、スポーツに対する「姿勢」によって生じたものであることを明らかにし、幕末期に来日した外国人にとってスポーツがどのような意義や価値を持っていたのかについて触れています。（論文1）</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文1. 田端真弓、「幕末期日本における居留外国人のイギリススポーツへの姿勢—The Daily Japan HeraldならびにThe Japan Heraldの記述を手がかりに—」、『東北アジア体育・スポーツ史研究』第4号、2019年、pp.11-22.</p> <p>●論文2. 田端真弓、「幕末を支えた大村藩の武術と藩士たち」、『大村史談』第70号、2019年、pp.44-63.</p> <p>●著書1. 田端真弓、「25.2 剣道」、竹内誠・白坂蕃・新井博編、『郷土史体系 観光・娯楽・スポーツ』、朝倉書店、2021年、pp.397-398.</p> <p>●著書2. 田端真弓、「日本の武道」、新井博編、『新版スポーツの歴史と文化』、道和書院、2019年、pp.69-74.</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部



その他学内施設等


# 教育学部

所属・職位	教育学部初等中等教育コース・准教授	
氏名	都甲 由紀子 (Togo Yukiko)	
取得学位	博士 (生活科学)、お茶の水女子大学、2010年4月	
SDGs目標	     	

研究分野	被服学
研究キーワード	衣生活, 生活工学, 被服教育, 家庭科教育, 染色化学, STEAM教育

研究内容	<p>○被服教育の内容・方法の提案 アクティブ・ラーニング手法やICTを取り入れた新しい被服教育を提案していきます。被服教育勉強会(ひふカフェ)の開催, 家庭科の授業実践, 教育実践を通して, 時代に即した衣生活関係の教育内容を検討していきます。</p> <p>○色をめぐる科学と文化の融合 植物の色, 動物の色, 服の色, 食べ物の色, 建物の色・・・人々は色に囲まれて生きています。色をめぐる文化の地域比較, 国際比較をしながら, その背景を科学的に探り, 色をめぐる科学と文化の融合を図っていきます。</p> <p>○大分の地域振興への貢献 大分県が「豊前・豊後」と呼ばれていたのは, 昔から「豊かな地域」であったことがうかがわれます。温暖で海から山に多様な動植物が育つことで食品になる農作物や魚介類が豊富というだけでなく, 染料になる動植物も育ちます。大分・九州で採れる天然染料情報をまとめ, 地域の教育や地域振興に貢献します。</p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p><b>【テキスト執筆】</b></p> <p>○作る手が子どもたちを輝かす② アクティブラーニングが育てるこれからの家庭科, お茶の水女子大学附属学校家庭科研究会著, 地域教材社, 2017, 担当: pp.46-49,154-155</p> <p>○衣生活論 持続可能な消費と生産, 山口庸子, 生野晴美編, アイ・ケイ コーポレーション, 2019, 担当: 7章 染色と染め文化pp.107-129</p> <p></p> <p></p> <p><b>【論文】</b></p> <p>○九州に育つ動植物由来の天然染料STEAM教育の染色教材開発のための基礎資料, 都甲由紀子, 大分大学教育学部紀要, 43(1), 2021, pp.21-36</p> <p>○ブータン王国のラックカイガラムシを題材とした高等学校家庭科の教材開発: ラック染色布、染色動画と実験を教材とした授業実践の試み 都甲由紀子, 陶山由佳, ブータン学研究, 2, 2019, pp.13-32</p> <p><b>【被服学・染色化学を通じた教材開発 (家庭科, 総合的な学習の時間, STEAM教育)】</b> ・お茶の水女子大学附属中学校, 麻布中学校, 大分舞鶴高校 (舞STEAMs), チューリッヒ日本人学校, 大分大学教育学部附属小学校・中学校への教材提供実績あり</p> <p><b>【Webサイト (動画教材等掲載)】</b> 大分大学都甲由紀子研究室 <a href="https://togolabo.jp">https://togolabo.jp</a></p>
---------------	---

所属・職位	教育学部（発達科学教育）幼年教育講座・准教授
氏名	永田 誠 (Nagata Makoto)
取得学位	修士（教育学）、九州大学、2002年3月
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに



役員  
大学院教育学部  
教育学部

研究分野	教育学, 幼児教育学, 社会教育学
研究キーワード	幼児教育・保育, 家庭・学校・地域の連携・協働, 親の学び, 教育・保育参加

研究内容	<p>1. &lt;子育て&gt;における親の「学び」と子どもの「育ち」の連関        これまで親は「子育ての中で親となる」と語られてきました。しかし、現代では、親自身が親としてのアイデンティティを形成していくことが困難となっています。&lt;子育て&gt;の過程において、親自身はどのように学び、何を得ているのか、そして、子どもや家族、子育てコミュニティとの関係にどのように変化をもたらすのかを探求しています。</p> <p>2. 親の教育・保育参加と幼児教育・保育における保育の質の向上        親が、教育や保育に参加・参画することによって、親・保育者・園がどのように変容するかを調査しています。特に、親の「保育参加」（保育参加体験）に着目しています。</p>
------	--



「幼児の生活実態と親の子育て意識に関するアンケート調査」の園へのフィードバックレポート






園内研修の様子




研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>永田誠 (2020) 「親の「語り」を通した子育てにおける「学び」に関する考察 (2) —クラス別懇談会での親の「語り」の変化に着目して—」日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』第20巻, pp.27-35</li> <li>永田誠 (2019) 「親の「語り」を通した子育てにおける「学び」—クラス別保護者懇談会における家庭生活に関する内容に着目して—」日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』第19巻, pp.23-39</li> <li>永田誠, 菅原航平 (2017) 「幼児の日常生活と親の子育て意識の変容に関する考察 (1) —大分大学教育学部附属幼稚園における10年比較調査の結果から—」『大分大学教育学部研究紀要』第39巻1号, pp.121-134</li> <li>永田誠, 大村綾, 菅原航平 (2017) 「幼児の日常生活と親のかかわりに関する考察—2006年調査結果との比較を通して—」日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』第17巻, pp.1-13</li> <li>永田誠, 時田純子 (2016) 「子どもの育ちの過程を通した保育における生活体験の意義に関する考察—如水保育園における卒園10年後の子どもの記述を手がかりに—」日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』第16巻, pp.13-23</li> </ul> <p>●共同研究・競争的資金等の研究課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 研究代表者「保育参加を通した親の「学びの物語」アプローチとルーブリック評価の開発」(2019年4月 - 2023年3月予定)</li> <li>日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 研究代表者「子どもと親の学びを生み出す発達資産としての生活体験を育む「地域家庭教育支援」」(2015年4月 - 2019年3月)</li> </ul>
---------------	--

経済学部  
医学部  
医学部附属病院  
理工学部  
福祉健康科学部  
その他学内施設等



所属・職位	教育学部（生活・技術教育）・准教授	
氏名	中原 久志 (Nakahara Hisashi)	
取得学位	博士（学校教育学）、兵庫教育大学、2015年3月	
SDGs目標	 	

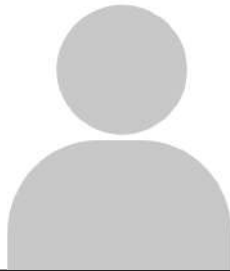

研究分野	教科教育学, 科学教育・教育工学, 材料加工
研究キーワード	技術科教育, 情報教育, 木材加工
研究内容	<p>技術教育や情報教育, 木材加工等の分野において, 児童・生徒の認知的実態に基づいた教材・題材, カリキュラムの開発研究に取り組んでいます。具体的には, 生徒や教員を対象としたアンケート調査や統計的分析, 学校現場でのフィールドワーク, 教材・教具の開発及び試行的実践などの方法を用いて, 以下のような内容を行っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①中学校技術科の授業における生徒の感情状況の把握に基づく情意的支援の在り方の検討</li> <li>②中学校技術科の材料加工学習におけるユーザビリティデザインの視点形成</li> <li>③UXデザインを用いたものづくり活動の教材開発</li> <li>④テキストプログラミングとビジュアルプログラミングを行うことができるマルチタスク型のプログラミングツールの開発</li> <li>⑤学校教育における教員及び児童・生徒のICT活用に関する研究</li> <li>⑥被削材や断面形状の違いが平かんなの刃先摩耗に及ぼす影響</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p><b>【プロジェクト等】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・UXデザインを核としたイノベーション力を育成するSTEAM教育のカリキュラム開発（基盤研究(C), 代表, 20K03211, 2020-2022)</li> <li>・小学生向けマルチタスクビジュアルプログラミングツールの開発と試行的実践（挑戦的萌芽研究, 代表, 16K12767, 2016-2018)</li> <li>・令和の日本型学校教育を担う学校教員のICT活用指導力育成プロジェクト（学長戦略経費・教育改革推進プロジェクト, 2021-2022)</li> </ul> <p><b>【論文】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・島田和典・佐枝佑哉・島田英昭・中原久志：切削加工の温度変化に着眼した安全教育用デジタルコンテンツの制作-視線追跡による評価に焦点をあてて-, 日本工業技術教育学会, 第24巻, 第1号, pp.1-8(2019)</li> <li>・上之園哲也・松浦幹雄・中原久志・勝本敦洋・森山潤：ものづくり活動における生徒の批判的思考の構造, 日本教科教育学会誌, 4(3), pp.25-35(2017)</li> <li>・中原久志・上之園哲也・森山潤：技術科の材料加工学習における生徒の「癒し」と「ストレス」の感情状況の構造と学習意欲との関連性, 日本教科教育学会誌, 39(1), pp.1-10(2016)</li> <li>・中原久志・森山潤・上野耕史：LED照明機器の製作を通して工夫・創造を育成するエネルギー変換学習の題材開発と試行的実践, 日本産業技術教育学会誌, 58(1), pp.21-29(2016)</li> <li>・Hisashi NAKAHARA &amp; Jun MORIYAMA：Research of Relevance of Students' Making Experiences and Emotions felt during Technological Activities -In case of Learning of "Technology of materials and their processing"-, International Journal of Curriculum Development and Practice, Vol.17, No.1, pp.15-24(2015)</li> </ul>

所属・職位	教育学部（生活・技術教育）・准教授	
氏名	萩嶺 直孝 (Hagimine Naotaka)	
取得学位	博士（学校教育学）、兵庫教育大学、2014年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	教科教育学 技術教育
研究キーワード	技術教育, エネルギー変換の技術, デジタルファブリケーション, 遠隔教育システム
研究内容	<p>●技術教育に関する研究</p> <p>児童・生徒の実態分析に基づき、技術教育に関する授業で解決すべき実践課題を明確に把握した上で、授業をデザインするアプローチを行っている。そのため、授業における実態分析や授業改善のスキルとして注目されている教育工学的手法を活用している（論文1.2,3）。</p> <p>●技術教育における学習指導方法や教材・教具の開発</p> <p>デジタルファブリケーションを活用したエネルギー変換の技術による問題解決の学習ストラテジー及び教材・教具の開発に取り組んでいる（著書1.2）。</p> <p>●技術教育における遠隔教育システムの検証</p> <p>小規模校等において専門家等の外部人材を活用した遠隔授業を実施し、教育活動を支援することによって、遠隔教育システムの学習効果の検証を行っている（プロジェクト1.2 論文3）。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年, エネルギー変換の技術を用いた製品の分解・組立活動によって設計の工夫を読み取らせる学習指導方法に関する実践的検討, 日本産業技術教育学会九州支部論文集</li> <li>2018年, エネルギーの変換・利用に関する中高生のイメージの構造と生活意識への影響, 森山潤, 萩嶺直孝他, 兵庫教育大学研究紀要</li> <li>2021年, 資質・能力を育成する一方向型オンライン授業の検討—現職教員を対象とした動画教材作成の意識調査とポイント—, 日本産業技術教育学会九州支部論文集</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年, 新しい技術・家庭技術分野 エネルギー変換の技術, 東京書籍</li> <li>2021年, 技術科教員指導能力認定試験・中学校技術科教員採用試験参考書, 日本産業技術教育学会</li> </ol> <p>●プロジェクト</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年~, 中山間地域等の小規模校における遠隔授業の推進, 大分県教育委員会未来を創るGIGAスクール推進事業</li> <li>2021~23年, 中学校技術科における免許外教科担任を支援する遠隔教育システムの構築, 科学研究費助成事業</li> </ol>

所属・職位	教育学部（言語教育）・准教授	
氏名	橋本 美喜男 (Hashimoto Mikio)	
取得学位	文学修士、筑波大学、1989年3月	
SDGs目標		

研究分野	英語学・言語学
研究キーワード	認知言語学, 英文法, 日英対照研究
研究内容	<p>認知言語学の観点から、いわゆる学校文法を捉え直し、児童・生徒たちが英語の構造を理解しやすくし、英語の力を伸ばすことに資する文法体系の構築を目指すことが研究の基本的目標である。</p> <p>様々な先行研究を踏まえ、日本人学習者が英語を学習するときの大きな障害の一つが、英語の基本構造（学校文法における5文型）と日本語の基本構造の分類（動詞文、形容詞文、名詞文）が著しく異なることを研究の根本に据えた。したがって、第一の研究課題としては、「なぜ英語の基本構文と日本語の基本構文は著しく異なるのか」とし、第二の研究課題としては、第一の研究課題を踏まえて、「日本人に適した英語文法体系とは何か」と設定した。</p> <p>第一の研究課題においては、認知言語学の枠組み、主にLangackerの認知文法やTalmyのForce Dynamicsの考え等に基づき、figure, ground, attentionなど人間の認知機能の見地から英語と日本語の構造や性質について考察し、また英語と日本語の共通点と相違点をさまざまな文献から洗い出す試みを行なっている。</p> <p>第二の研究課題においては、第一の研究課題を踏まえて、事態の捉え方が英語と日本語で異なるため、英語学習者が英語を身につけることに対し困難を抱えていることを指摘するとともに、その困難を克服できる学習英文法を考察している。現在は、「主語の立て方」と「時制と相」について主に考察している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>橋本 (2018) (西岡ほか編「英語の時制と相の指導に関する一考察」『ことばを編む』開拓社)では、英語の時制と相を扱い、例えば、なぜほとんどの大学生が“The bus is stopping.”という簡単な英文を誤って解釈してしまうのかを考察した。</p> <p>橋本 (2019) (「大学生の英語表現力に関する一考察」大分大学教育学部研究紀要41巻第1号)では、特に英語の主語の立て方に焦点を当てて論じ、日本人学習者が英語をうまく使えない原因の一つが主語をうまく立てられないことを指摘した。</p>

所属・職位	教育学部（言語教育）・准教授	
氏名	花坂 歩 (Hanasaka Ayumu)	
取得学位	修士（教育学）、北海道教育大学、2004年3月	
SDGs目標		

研究分野	読書空間論
研究キーワード	読書現象の創出
研究内容	<p>「読書現象の創出」をキーワードに、主に、空間作りに関心をもっています。私が研究する「読書空間論」とは、「読書」そのものと、それを取り巻く「空間（周辺環境）」について考察するものです。「読書」には、「読み手」と「書かれたもの（テクニカル）」が必要です。そこに生じる相互作用は、それらが属する空間からとてつもなく大きな影響を受けます。つまりは、読む場所によって、得られる読書体験が異なるということです（例えば、同じ本を読むにしても、静かな図書館、ジャズが流れるカフェ、波音のある海辺では得られる読後印象が変わりそうでしょうか？） 翻って、授業での読書はどうでしょうか。どこか窮屈です。私は、学校の読書はもっとおもしろくできると思っています。その試行錯誤が主たる研究内容です。</p> <p>また、従たる研究として、音読・朗読の指導法研究に取り組んでいます。個々の読書現象を複数の読み手と共有する上で、音読・朗読による音声化は不可欠です。その音読・朗読についても、技術的に優れているだけでは、どこか無機質です。一人一人の個性を伸ばすという観点に立てばこそ、できるだけ、その人らしい音読・朗読になるように方向付けたいものです。そのための実践研究にも取り組んでいます。</p> <p>その他、教科横断に関する授業開発にも取り組んでいます。これまで、国語を中核に据えながら、美術、特別活動、道徳、社会などの教科等との連携を試みています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>2020年, 音読・朗読のための弛緩発声法の研究(1)ー, 大分大学高等教育開発センター紀要</p> <p>2020年, 読みの授業における巻き込み・巻き込まれ現象の検討, 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集</p> <p>2019年, 中学校美術科と国語科等の教科融合型学習の研究(3), 日本美術教育研究論集</p> <p>詳細を知りたい方は、「大分大学研究者情報」(QRコード)へ</p>



役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部


医学部

医学部附属病院

理工学部

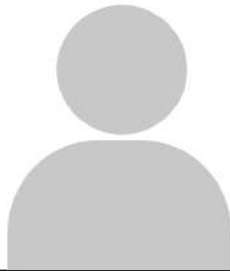


福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	教育学部（芸術・保健体育教育）美術・准教授	
氏名	藤井 康子 (Fujii Yasuko)	
取得学位	博士（教育学）、東京学芸大学、2011年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	美術科教育学, 教科融合型学習, スペインの美術教育, 絵画
研究キーワード	幼児の表現, 図画工作, 中学・高校美術, 教科横断・融合型学習, CLIL, 探究学習, 絵画
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 新たな社会的要請をふまえ、美術科教育の立場から異分野を専門とする大学教員や学校現場、美術館等と連携し、地域の資源である“人・もの・こと”を活用した芸術教育を核とする他教科との融合的な学びを開発し、教育実践を通じた学習指導内容・方法の開発や学習効果の検証に取り組んでいる。</li> <li>2. 海外（スペイン、台湾等）の教育の在り方に着目し、実地調査等も行いながら、日本の教育課程で実現できるCLIL教育（図画工作・美術と外国語活動・外国語）やSTEAM教育（科学・技術・工学・芸術・数学等の融合）の視点を取り入れた芸術教育の内容と指導方法の研究に取り組んでいる。</li> <li>3. 油彩画の大作制作を通して、絵画技法と表現技術の研究を行っている。</li> </ol>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 執筆書籍の紹介 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 藤井康子・西口宏泰・高橋泰佳「“色って何だろう？”から視覚障害児の色のイメージを育む色彩学習プログラム「私の色辞典をつくる」について教えてください」『視覚障害のためのインクルーシブアート学習 基礎理論と教材開発』茂木一司・大内進・多胡宏・広瀬浩二郎編集, ジェアース教育新社, (共同執筆) pp.214-219, 2021年。</li> <li>・ 「各国の教科書制度 欧州：スペイン王国」『海外教科書制度 調査研究報告書』,公益財団法人教科書研究センター, (単独執筆) pp.14-15, p.50, pp.283-289, p.429, 2020年。</li> <li>・ 『色から始まる探究学習ーアートによる自分づくり・学校づくり・地域づくり』,「地域の色・自分の色」実行委員会 + 秋田喜代美 編著, 明石書店, (共同執筆) pp.75-83, (単独執筆) pp.220-225, 2019年。</li> <li>・ 「第14章 国内外の美術教育研究の動き」『小学校図画工作科教育法』山口喜雄・佐藤昌彦・奥村高明編著, 建帛社, (単独執筆) pp.162-172, 2018年。</li> </ul> </li> <li>2. 執筆論文の紹介 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 藤井康子・東奈美子・岩坂泰子「図画工作科と外国語活動を軸とした教科融合型学習の開発と実践ー6年生のMy Best Memoryを絵に表す活動を通してー」美術教育学研究, 第53号, 大学美術教育学会誌, pp. 209-216, 2021年。</li> </ul> </li> </ol> <p>第55回 教育美術・佐武賞受賞論文（執筆代表者 永松芳恵, 共同研究者 藤井康子・花坂歩）「美術がつなぐ、子ども・地域・学校～学校現場が模索した教科融合型学習の試み～」教育美術, 第81巻, 第8号 (938号), 公益財団法人教育美術振興会, pp.15-24, 2020年。</p>



所属・職位	教育学部 学校教育教員養成課程 初等中等教育コース（幼年教育講座）・准教授	
氏名	向井 隆久 (Mukai Takahisa)	
取得学位	博士 (心理学)、九州大学、2010年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	教育心理学, 発達心理学, 幼年教育
研究キーワード	主体的・探究的な学習, 問い (質問) 生成, 概念発達

研究内容	<p>●探究的な学習, 問い (質問) 生成に関する研究</p> <p>学習時に多様な観点から疑問点を見つけ, 発展的に想像や考えを膨らませながら, 仮説を立て問うてみるといった問う力を中心に, 学習者が主体的に問題発見・解決しながら学ぶ教授・学習過程に関する研究を進めています。大学生の問い生成力を高めるための支援法の開発研究 (科学研究費助成事業2) や, より低年齢の子どもたちへの支援法の活用を研究しています (科学研究費助成事業1. 論文1. 論文2)。並行して, 問う力の発達の变化も研究しており (科学研究費助成事業1), 幼児や児童が日常生活や遊び場面・授業場面でどんな問いを抱き, 大人や友達と共に学びを深めているのか, その発達の变化を調べています。</p> <p>●知識獲得, 概念発達に関する研究</p> <p>上記の研究の基礎となる研究として, 知識獲得, 特に概念変化 (発達) メカニズムの研究を行っています。人が物事を理解し, 知識を獲得・構築する過程は, 単に「情報を見聞きして頭に入力, 保持する」といったことではなく, 「状況や文脈との関係の中で, 知識 (概念) をダイナミックに構成する過程である」というモデルを提案しています (論文3)。そうしたモデルに基づき, 共同研究で理科の教授法開発に関わる調査研究を行ったり, 病気やケガに関する幼児の理解形成過程について研究しました (科学研究費助成事業3)。</p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>向井隆久 (2021). 小学4年生社会科の探究的な学習における児童の問い生成力. 別府大学短期大学部紀要, 40, 35-49.</li> <li>向井隆久 (2021). 小学4年生道徳科における児童の問い生成力. 別府大学短期大学部幼児・児童教育センターレポート, 40, 27-34.</li> <li>向井隆久 (2010). 「状況・概念相互依存的システム」としての概念発達モデル—特性の起源に関する認識を中心に— 博士論文 (九州大学)</li> </ol> <p>●著書・雑誌</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>向井隆久 2020年「“できるようになる”心のメカニズム」中村奈良江・山口裕幸 (編著) 『ライブラリ 心理学を学ぶ 心理学概論』 (pp.159-181) サイエンス社</li> <li>向井隆久 2019年「学びを支える授業実践のための心理学」『教育と医学 特集2・学級経営と授業に役立つ心理学』 (pp.59-67) 慶應大学出版会</li> </ol> <p>●科学研究費助成事業</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>基盤研究(C)「深い学びに向けた児童の問題発見力を高めるための文脈構成力育成型教授法の開発」研究代表者: 向井隆久 期間: 2020年4月～現在</li> <li>若手研究(B)「大学教育における問題発見力を育むための文脈構成力強化型教授法の開発」研究代表者: 向井隆久 期間: 2015年4月～2018年3月</li> <li>基盤研究(B)「病気やケガに関する子どもの理解・表現と大人の対応に関する研究」研究代表者: 中島伸子 期間: 2015年4月～2018年3月 研究分担者として参加</li> </ol>
---------------	---

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院





理工学部

福祉健康科学部

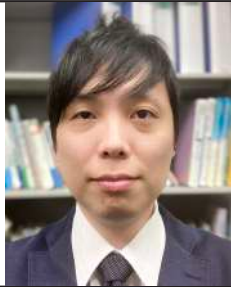


その他学内施設等

所属・職位	教育学部 附属教育実践総合センター・准教授	
氏名	森下 覚 (Morishita Satoru)	
取得学位	博士 (教育学)、東京学芸大学、2010年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	教育心理学
研究キーワード	学校体験活動 (学校インターンシップ), 学習, 社会文化的アプローチ
研究内容	<p>●共創的越境を可能にする学校インターンシップの実施体制モデル</p> <p>教員志望の学生に対して, 教員として必要な資質能力を確実に身につけさせることが喫緊の課題として存在しており, その課題を解消する取り組みとして学校現場における体験活動「学校インターンシップ」の充実が求められている。そうした現状に対して, 共創的越境 (異なる立場・視点を持つ人達が, 互いの異質性を尊重し, 積極的に相互交流を行う交流のあり方) を可能にする学校インターンシップの実施体制モデルの構築を検討している。</p> <p>●社会文化的アプローチによる教師の世代継承の解明</p> <p>現在, 日本における教員志望者は減少傾向にあり, 令和の日本型学校教育を担う質の高い教員コミュニティを形成していく上での課題となっており, 教員志望者の減少の原因分析とその改善が求められている。そうした現状に対して, 教員コミュニティが発する教職の魅力と大学生の受け止め方の相互行為的なメカニズムを社会文化的アプローチから検討している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学校インターンシップの科学: 大学の学びと現場の実践をつなぐ教育 田島充士, 中村直人, 溝上慎一, 森下覚 (編著者) ナカニシヤ出版 (ISBN: 9784779510489) 他3点。</li> </ol> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教員養成系大学・学部における学校体験活動の現状と課題 森下覚 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集 7(1) No.8 2020年10月</li> <li>2. 大学と教育委員会による学校インターンシップの構築と変遷 森下覚 大分大学教育福祉科学部紀要 37(2) 287-300 2015年</li> <li>3. 教師による実践的指導力の自己評価に関する調査 森下覚, 麻生良太, 長谷川祐介, 河野伸子 大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要 (30) 127-138 2012年</li> <li>4. 教育実習における学習はどのように構成されているのか —教育的デザインと実践の保持のデザインとのダイナミクス— 森下覚, 尾出由佳, 岡崎ちひろ, 有元典文 教育心理学研究 58(1) 69-79 2010年3月 他13点</li> </ol>

所属・職位	教育学部（言語教育）・講師	
氏名	大谷 由布子 (Otani Yuko)	
取得学位	修士（教育学）、神戸大学、1996年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	英語教育・小学校外国語教育
研究キーワード	小学校外国語・外国語活動・教科書と教材・第一言語習得と第二言語習得
研究内容	<p>留学中のホームステイ先で、英語を母語とする1歳半の幼児の言語獲得の記録を1年間とり続けたことが、年齢の低い学習者を対象とした英語教育について研究を始めるきっかけとなりました。英国の出版社勤務を経て東京の大学で児童英語関連の講義を行っていた頃、いよいよ日本の公立小学校でも英語を教科として導入することになり、指導要領の改定前年に文部科学省に入省。初等中等教育局国際教育課の英語教育推進プロジェクトオフィサーとして、小学校外国語活動補助教材「In the Autumn Forest」, 「Good Morning」, 新学習指導要領対応小学校外国語教材「We Can! 1, 2」, 新学習指導要領対応小学校外国語活動教材「Let's try! 1, 2」の開発に携わりました。</p> <p>現在は大学にて「小学校外国語（英語）指導法（小）」, 「英語科授業論」, 「英語の心理言語学」などの科目を担当しています。特に、年齢が言語習得に及ぼす影響、第一言語習得と第二言語習得の違い、学習者の発達段階や特性をどのように授業に取り入れるのか、小学校と中学校の英語教育をどのように接続するのか、等について継続的に研究を行っています。</p> <p>ストーリーや教科書の執筆も続けており、今後は地域教材を取り入れた英語教育の実践を行うことができたらと考えています。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・“Acquisition of English Morphemes --- A Longitudinal Study of a Young Native Speaker of English” 平成8年1月, <i>KELT Journal</i> No.11.</li> <li>・“A Case Study of Children's Cross-Cultural Understanding in Relation to the Target Language Use” 平成8年3月, <i>JASTEC Journal</i> No.15.</li> <li>・“Implementation of an online professional development program in the current EES teacher-training context in Japan” 平成27年, <i>National Geographic Learning, ELTeach Global Implementation Report</i></li> <li>・“A Teacher Training Program for English at Elementary School and Its Participants' Training Needs: A Questionnaire Survey” 令和3年1月 大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要第38号</li> <li>・“First Language Acquisition and Second Language Acquisition in Young Learners: Implications for Elementary School English Language Education in Japan” 令和3年8月 九州英語教育学会紀要第49号</li> <li>・「移行期間を経た中学生は小学校でどのような語彙に触れてきたか—文部科学省作成小学校外国語教材『We Can!』で扱われる語彙分析をもとに—」 令和4年3月 <i>JASTEC Journal</i> No.40.</li> </ul>

所属・職位	教育学部（発達科学教育）特別支援教育コース・講師	
氏名	古長 治基 (Kocho Haruki)	
取得学位	博士（心理学）、九州大学、2021年3月	
SDGs目標	 	




研究分野	特別支援教育、臨床心理学
研究キーワード	自閉スペクトラム症、強み、障害児者支援、精神疾患
研究内容	<p>①障害や心の問題を抱える人の強みに関する研究          これまでの障害や精神疾患研究は、「苦手」や「困難」をどのように拾い上げ、対応するかが大きな課題でした。この問題を解決するためにはむしろ「好き」や「得意」を拾い上げ、それに本人や周りが気づき、認めていくことが必要ではないかと考えています。そのことが最終的には自己の「苦手」や「困難」を受け入れ、向き合っていくことにもつながるのではないかと考え、強みの自己理解に焦点を当てた研究を行っています。</p> <p>②自閉スペクトラム症者の社会的動機づけに着目した実践研究          自閉スペクトラム症者は社会的動機づけが先天的に障害されており、それに伴って種々の問題があらわれ二次障害につながるという説があります。このことが悪循環となって自閉スペクトラム症者の精神的健康を低下させ、社会参加を妨げていると考え、社会的動機づけを高める支援について実践的に研究を行っています。</p> <p>③臨床動作法を用いた障害児者支援についての研究          臨床動作法は、障害児者の主体的な身体の動きを引き出すために有効なアプローチです。体への働きかけを通して、心の変化を促し、QOLを高めていく方法について研究を行っています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>【論文】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・青年期自閉スペクトラム症者の社会的動機づけに着目した心理的支援の展開. リハビリテーション心理学研究 2022年 印刷中</li> <li>・特別支援学校(病弱)に在籍する心の問題を抱える児童生徒を担当する教員の困りとニーズ. 大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 2022年3月</li> <li>・病後の脳後遺症を抱え心理・社会的適応に困難が生じている男性のQOL向上を目指した心理学的支援—心理リハビリテーションキャンプにおける関わりを通して—. 特別支援教育実践センター研究紀要 2021年3月</li> <li>・青年期以降の自閉スペクトラム症者における関心スタイルの特徴. リハビリテーション心理学研究 2021年1月</li> <li>・青年期以降の自閉スペクトラム症者における「強み」理解の特徴. 特殊教育学研究 2020年2月</li> </ul>

所属・職位	教育学部（理数教育）・講師	
氏名	小林 良彦 (Kobayashi Yoshihiko)	
取得学位	博士（理学）、新潟大学、2017年3月	
SDGs目標	 	



研究分野	原子核物理、科学コミュニケーション、高等教育開発
研究キーワード	中性子過剰核、共鳴状態、サイエンスカフェ、科学コミュニケーター、物理教育、教材開発
研究内容	<p>大きく分けて以下の三つの分野の研究に取り組んでいます。</p> <p><u>原子核物理</u> r過程と呼ばれる元素合成過程に関わる中性子過剰核の理論的な研究をしています。特に、中性子過剰核の超流動性や共鳴状態に着目しています。</p> <p><u>科学コミュニケーション</u> 日本におけるサイエンスカフェの広がりや科学コミュニケーターに求められる職務・職能についての研究をしています。また、実践研究にも取り組んでいます。</p> <p><u>高等教育開発</u> アクティブラーニングや授業デザインの知見に基づいて、授業改善や教材開発に取り組んでいます。また、物理教育やライティング教育に関する研究も進めています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>上で挙げた三つの研究内容に関する最近の研究成果は以下です。</p> <p><u>原子核物理</u> Yoshihiko Kobayashi and Masayuki Matsuo s-wave quasiparticle resonance in neutron-rich drip-line nuclei Progress of Theoretical and Experimental Physics 2020(1) 2020年1月</p> <p><u>科学コミュニケーション</u> 三島美佐子・小林良彦・吉岡瑞樹 福岡県におけるサイエンスカフェの実践記録分析：サイエンスカフェの継続性に注目して 科学技術コミュニケーション 30 31-43 2022年1月</p> <p><u>高等教育開発</u> 小林良彦・中野享香 原子核や同位体についての理解を助ける模型の開発と教育実践 物理教育 68(1) 18-21 2020年3月</p> <p>より詳しい情報については個人ウェブサイトをご参照下さい：<a href="https://www.yoshikoba113.net/">https://www.yoshikoba113.net/</a></p>



# 教育学部

所属・職位	教育学部（生活・技術教育）・講師	
氏名	杉山 昇太郎 (Sugiyama Shotaro)	
取得学位	修士（教育学）、大分大学、2018年3月	
SDGs目標	 	



研究分野	情報教育
研究キーワード	プログラミング教育
研究内容	<p>●プログラミング学習者の認知的実態に関する研究 教育心理学的アプローチで、学習者がプログラミングに対して持つイメージを構造的に把握し、性別による差や授業前後の変容などを明らかにする。</p> <p>●「令和の日本型学校教育」の構築を目指した電気の理解を深めるICT教材の開発 AR（拡張現実）技術を用いて、電気の動きや素子の働きをリアルタイムで「見て」、「触れて」学ぶことができる教材を開発する。また、教材は、授業中に生徒が個人の端末で扱えるものにし、遠隔授業やアフターコロナにおける学校教育活動で効果を発揮するものにする。</p> <p>●Computational Thinkingを育成すること目的とした評価、測定方法 中学校技術・家庭科・技術分野「情報の技術」と高等学校共通必修教科情報科で活用できる、CT育成カリキュラムとCT能力の測定、評価方法を開発する。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学生のメタ認知特性とコンピューテーショナル・シンキングの関連性—教員養成系学部の学生に求められる資質に焦点をあてて—, 大分大学教育学部研究紀要42巻1号 (2020)</li> <li>・工業高校生のコンピューテーショナル・シンキングに関する調査, 日本科学教育学会年会論文集44, (2020)</li> <li>・中学生のコンピューテーショナル・シンキングとプログラミング教育の関連性に関する一考察, 日本科学教育学会年会論文集44, (2020)</li> <li>・中学生と高校生の持つプログラミングに対するイメージの調査, 大分大学教育学部研究紀要41巻2号, (2020)</li> </ul>

所属・職位	教育学部（芸術・保健体育教育）・講師	
氏名	村上 佑介 (Murakami Yusuke)	
取得学位	博士(学術)、広島大学、2014年3月	
SDGs目標		

研究分野	彫刻、美術教育、造形教育
研究キーワード	彫刻、サイト・スペシフィック、アート・プロジェクト

研究内容	<p>●彫刻制作に関する研究</p> <p>人物具象彫刻を中心とした作品制作を通して、塑造による表現を探求している。また作品は、全国的な公募展等に出品し、国内の文化振興に寄与している。</p> <p>左：《不自由な抱擁》第45回日彫展 日彫賞受賞（2015）</p> <p>右：《そしてまた夢を見る》第46回日彫展 日彫賞受賞（2016）</p>  <p>●サイト・スペシフィック彫刻に関する研究</p> <p>地域特有の歴史や風土などを含めた“場”に帰属した彫刻を、「サイト・スペシフィック彫刻」と捉え、そのような作品の可能性や課題について、指標による作品調査や、自身の展示実践を基に研究を進めている。調査の結果、作品には「木」「プラスチック」なども多く見られることや、主題やモチーフに歴史的背景を取り入れているものが67%を超えるといった傾向が見られた。また、それらの作品の特質として(1)多様な素材の使用、(2)場への「同化」と「介入」、(3)現実空間との連続性、(4)複合的な性質、が導出された(論文1.)。</p> <p>●子どもと立体表現に関する研究</p> <p>芸術を介した地域活性化活動として、お寺で子どもとアートが出会うプロジェクトである「キッズ・ミート・アート」での立体表現ワークショップ講師など、アートを活用した地域活性化や地域連携に取り組んでいる(著書1.)。</p>
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>以下のように作品発表、論文投稿等を積極的に行っている。</p> <p>●作品</p> <p>1.2009年～、日彫展（日本彫刻会主催）での作品発表（2012年優秀賞、2015年・16年日彫賞）</p> <p>●論文</p> <p>1.2015年、「日本のアート・プロジェクトにみる「サイト・スペシフィック彫刻」の傾向と特質」、『美術教育学研究』第47号、大学美術教育学会、pp.359-366、単著</p> <p>●著書</p> <p>1.2019年、『キッズ・ミート・アート 子どもと出会い、すれ違うアート』、ふくろう出版、共著</p>
---------------	--

所属・職位	教育学部（発達科学教育）・講師	
氏名	吉野 敦 (Yoshino Atsushi)	
取得学位	修士（教育学）、早稲田大学、2018年3月	
SDGs目標	 16 平和と公正をすべての人に	

研究分野	教育哲学、道徳教育
------	-----------

研究キーワード	フランス教育思想史、道徳・市民教育
---------	-------------------

研究内容	<p>(1) 18 - 19世紀転換期のフランスにおける教育学の形成過程についての思想史的研究</p> <p>18 - 19世紀転換期のフランスでは、フランス革命をはじめとして、フランス教育史上で「近代」をしるしづける一連の出来事が生じた。革命後のフランスでは、反動的な揺れ動きも見られたにせよ、近代的理念による抜本的な社会の再構築が目指された。その実現手段の一つとして、政治的にも学問的にも重要な論議の対象となったのが、「教育」という主題である。この時期の教育論的言説に関して、教育思想史研究の枠組みでは、コンドルセをはじめとする革命期の公教育論について注目されることが多いものの、ひろく学問・思想的世界のなかで教育という主題がどう位置づけられていたのかは十分明らかになっていない。本研究の目的は、世紀転換期のフランスの知的世界で牽引的役割を果たしていた「イデオログ」と呼ばれる思想家たちに着目し、18世紀フランスの啓蒙主義を継承した彼らの思想的課題、すなわち学問知の全体を近代社会にふさわしく再編成するという課題のもとで、教育と科学がいかなる関わりを持っていたのかを教育思想史的観点から明らかにすることにある。この作業は、フランスでは第三共和政期の公教育制度の確立に伴って成立したとされるディシプリンとしての教育学について、その成立過程の一端を明らかにすることに繋がっている。</p> <p>(2) 道徳教育の日仏比較</p> <p>日本では小・中学校で「特別の教科 道徳」が、フランスでは小学校からリセ（日本の高等学校に相当）までを貫く教科として「道徳・市民教育」が、ほとんど時を同じくして公教育カリキュラムのなかに新たに導入された。共通点の多い両国の道徳教育のあり方を、カリキュラムや教科書、指導法など、種々の観点から比較検討することで、日本の道徳教育の現状を批判的に捉え、よりよい方向性を模索していくための基盤的知見を提供することが本研究のねらいである。</p>
------	--


研究業績・アピールポイント	<p>吉野敦「一九世紀初頭フランスにおける教育・科学・統治—マルク＝アントワーヌ・ジュリアンの教育思想を中心として—」『教育哲学研究』123号、2021年5月</p> <p>吉野敦「フランスにおける最初期ペスタロッチ受容の思想的基盤 —マルク＝アントワーヌ・ジュリアン以前の動向に着目して—」『教育哲学研究』121号、2020年5月</p> <p>吉野敦, 杉山大幹, 鈴木規子, 上原秀一, 辻和希, 坂倉裕治「フランスの道徳・公民科にかかわるデジタル・リソースの現状」『早稲田教育評論』35巻1号、2021年3月</p> <p>木下智実, 折口量祐, 吉野敦「小学校道徳科における「考え、議論する」授業の開発」『早稲田教育学会紀要』21号、2020年3月</p>
---------------	---

# 大学院教育学研究科


所属・職位	大学院教育学研究科（教職大学院）・教授	
氏名	内田 昭利 (Uchida Akitoshi)	
取得学位	博士（文学）、北海道大学、2017年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

役員  
大学院教育学研究科  
教育学部

研究分野	教育心理学, 学校心理学, 数学教育学
研究キーワード	Evidence に基づく教育, 人間教育

研究内容	<p>人間教育の視点から、Evidence（科学的根拠）に基づく教育のための Evidence を確立することを旨として、理論と実践の往還に取り組んでいます。具体的には、心理学の研究手法を用いて、以下の研究を柱に取り組んでいます。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>自己効力感（Self-Efficacy）の向上に関する研究              自己効力感理論（Bandura, 1977）の根幹をなす「成功体験は自己効力感を向上させる」との理論を初めてランダム化比較対象試験によって証明しました。さらに、自己効力感を向上させた生徒は、その後の学業成績も改善させることが明らかとなりました。              現在、自己効力感を向上させるための具体的な教育方法について研究を進めています。</li> <li>潜在意識と顕在意識の相違に関する研究              集団式潜在連想テスト（Mori, Uchida, &amp; Imada, 2008）を活用し、「数学」に対する潜在意識を調査しました。アンケートによる顕在意識調査で「数学が嫌い」と回答しても、潜在意識では数学を肯定的に捉えている生徒が、全体の20%以上も存在していることを明らかにしました。これらの生徒に「心の中では、数学を前向きにとらえている」と伝えることで、成績の改善がみられました。論文として公刊するとともに、広く知っていただくために書籍として出版しました。【右の書籍です】                 現在、様々な概念における潜在意識と顕在意識の相違に着目し、研究を進めています。</li> </ol>
------	---

経済学部  
医学部  
医学部附属病院  
理工学部  
福祉健康科学部




研究業績・アピールポイント	<p>アメリカ教育省教育資源情報センター（Education Resources Information Center）が運営する教育に関する研究のデータベース ERICに4本の論文が収録されています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Uchida, A., Michael, R. B., Mori, K. (2018). An Induced Successful Performance Enhances Student Self-Efficacy and Boosts Academic Achievement. <i>AERA Open</i>, 4(4), 1-9.</li> <li>Uchida, A., &amp; Mori, K. (2018). Detection and Treatment of Fake Math-Dislikes among Japanese Junior High School Students. <i>International Journal of Science and Mathematics Education</i>, 16(6), 1115-1126. 【右の論文です】</li> <li>Mori, K., &amp; Uchida, A. (2012). The leading group effect: Illusory declines in scholastic standard scores of mid-range Japanese junior high school pupils. <i>Research in Education</i>, 87(1), 64-74.</li> <li>Mori, K., &amp; Uchida, A. (2009). Can contrived success affect self-efficacy among junior high school students? <i>Research in Education</i>, 82, 60-68.</li> </ol>	
---------------	---	---

その他学内施設等


所属・職位	大学院教育学研究科（教職大学院）・教授	
氏名	清國 祐二 (Kiyokuni Yuji)	
取得学位	教育学修士、広島大学、1990年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	教育学 地域と学校との連携・協働 学習支援論
研究キーワード	コミュニティ・マネジメント 参加型学習 ファシリテーション イギリスの学校制度
研究内容	<p>1. 地域と学校との連携・協働に関する研究</p> <p>学校運営協議会（コミュニティ・スクール）が法制上は努力義務となったこと、学校教育の理念に「社会に開かれた教育課程」が位置づけられたこと、急激な社会変化への教育的対応が求められること等により、地域と学校との連携・協働が重要課題となっています。（論文1を中心に、著書1及び2、論文2も関連しています。右は教職員支援機構校内研修シリーズの講義動画です。<a href="https://www.youtube.com/watch?v=xIKWvbyvV84">https://www.youtube.com/watch?v=xIKWvbyvV84</a>）</p> <p>2. 参加型学習に関する研究及び教材開発</p> <p>学校教育の方法論として導入されているアクティブラーニング（主体的、対話的で深い学び）は、成人教育では古くから実践されています。私の主たる関心事は「家庭教育支援」や「地域づくり」における参加型学習です。理論研究だけではなく、実際に数多くの参加型学習用教材を開発し、多くの場所で実践しています。また、教育委員会等と連携して、ファシリテーターの養成にも取り組んでいます。（著書3を中心としますが、これまで香川大学生涯学習教育研究センター研究報告に論文を執筆してきました。）</p> <p>3. イギリスの学校制度に関する研究</p> <p>イギリスの教育改革は2000年代に入って急速に加速しています。例えば、義務教育年限の延長、第三者評価機関・Ofstedの評価の厳格化、アカデミー法制定以降の学校理事会の権限強化などがあげられます。教育改革を批判的に検討する視座を与えてくれるイギリスの教育制度についてさらに研究を深めたいと考えています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 時岡晴美他編『地域と協働する学校』福村出版、2021年</li> <li>2. 山本珠美他編『社会教育経営の基礎』学文社、2021年</li> <li>3. 清國祐二編『生涯学習支援論』ぎょうせい、2020年</li> </ol> <p>●論文・報告</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「学校と地域の連携から考える学校改善の視点」（令和2年度 学校と地域の連携の在り方に関する調査研究プロジェクト 報告書）独立行政法人教職員支援機構、2021年</li> <li>2. 「地域とともにある学校づくりに関する調査報告」香川大学地域連携・生涯学習センター研究報告（25巻）、2020年</li> </ol>



所属・職位	大学院教育学研究科（教職大学院）・教授	
氏名	佐藤 晋治 (Sato Shinji)	
取得学位	修士（教育学）、筑波大学、1995年3月 修士（心身障害学）、筑波大学、1997年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	特別支援教育, 心理臨床
研究キーワード	知的障害, 発達障害, 心理アセスメント, 認知機能, 機能分析, 合理的配慮
研究内容	<p>知的障害や発達障害のある人の学校や地域での生活がより豊かなものとなるために、アセスメントに基づいた指導、支援計画の立案とその効果の検討について実践的に研究している。</p> <p>1. 認知機能のアセスメントに基づいた指導・支援計画の検討  近年の認知能力検査は、CHC理論やPASS理論に基づいている。具体的には、ウエクスラーファミリー検査、DN-CAS、KABC-IIなどの検査結果をCHC理論やPASS理論に基づいて解釈し、障害のある人の得意な力を活用したり、不得意な力を補ったり配慮したりするような指導・支援計画を立案し、その効果について検討している。また、アセスメント結果のフィードバックが障害のある人の自己理解、自己実現につながるようなあり方についての検討も行っている。</p> <p>2. 行動の機能分析に基づいた指導・支援計画の検討  行動分析学の基本的な枠組みである三項随伴性（弁別刺激-反応型-強化子）によって行動の機能を理解し、その機能に応じた指導・支援計画を立案し、その効果について検討している。その際には、もっぱら障害のある人のスキル形成のみを重視するのではなく、そのスキルが生起するための環境調整や関係者への要請なども重視する「援助-援護-教授」のパラダイムも適用する。</p> <p>3. 根拠に基づいた合理的配慮の検討  合理的配慮が、診断名などから先験的に提供されるのではなく、障害のある人と彼らを取り巻く環境との相互作用から、活動・参加の促進要因や阻害要因を明確にした上で提供されるための必要条件とその効果について検討している。具体的には、ICF大分モデルによる合理的配慮の提供プロセスを検証し、より活用しやすいものへの調整・変更を進めている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>根拠に基づいた合理的配慮の提供プロセス-ICF九州モデル（仮称）の開発と普及-  日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）（研究代表）2019年4月 - 2023年3月</p> <p>教育臨床の実際第2版：学校で行う心と発達へのトータルサポート  武内珠美, 渡辺亘, 佐藤晋治, 溝口剛 編 (担当:共著) ナカニシヤ出版 2018年5月</p> <p>日本版DN-CASの解釈と事例  佐藤百合子, 佐藤 晋治 (担当:分担執筆, 範囲:事例11 学習の遅れから登校渋りを示した小学校6年生男児) 日本文化科学社 2017年3月</p> <p>インクルーシブ教育ってどんな教育?  青山新吾, 赤坂真二, 上條晴夫, 川合紀宗, 佐藤晋治, 西川純, 野口晃菜, 涌井恵 著 (担当:共著)  学事出版 2016年4月</p> <p>KABC-IIの基本的解釈と子ども理解：生活文脈におけるメカニズムの機能化のために  佐藤 晋治 K-ABCアセスメント研究 17 55-60 2015年8月</p>

所属・職位	大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）・教授	
氏名	竹中 真希子 (Takenaka Makiko)	
取得学位	博士(学術)、神戸大学、2005年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

**研究分野** 科学教育, 教育工学

**研究キーワード** 教育方法, STEAM教育, 教育におけるICT活用, 生活科

**研究内容**

- 「理」を見る力, 「理」を解く力の芽を育む生活科の授業開発と評価 (代表)  
ものの理を追究する力の育成と小学校低学年の生活科で育てる学びの芽との関係について考究している。そのための「問い」は、具体的な体験や活動を主軸とする生活科の学習において、「理」を見る力, 「理」を解く力の芽をいかに育むことができるかである。
- 探究と課題解決・デザイン活動を融合したSTEAM教育カリキュラムの構築と評価 (分担)  
探究と課題解決・デザイン活動を融合したSTEAM教育カリキュラムの考案, ならびに, STEAM教育教材の開発を手掛け, DBR (Design Based Research) による実践授業と評価を実施している。考案するSTEAM教育カリキュラムは, 幼稚園, 小学校, 中学校, 高校, 高等専門学校, 大学を対象とし, 教科横断型でかつ文理融合的に統合した学びのフレームワークである。「探究型」の学びである理数系 (理学系) 科目, 「課題解決型」の学びである技術・情報系 (工学部系) 科目, 「デザイン型」の学びであるアート・ものづくり系 (芸術系) 科目を融合し, STEAM教育プログラムの事例を作成する。

**研究業績・アピールポイント**

竹中真希子・遠藤ももこ (印刷中) 「美術 I」におけるSTEAM教育「デザイン×サステナブル建築」の意義～授業に参画した建築家へのインタビューより～, 日本科学教育学会年会論文集, 46.

遠藤ももこ・竹中真希子 (印刷中) サステナブル建築を題材にした高等学校美術におけるSTEAM教材の開発. 大分大学教育学部研究紀要, 44(1).

竹中 真希子, 遠藤ももこ (2022) 日本の学術雑誌におけるSTEAM教育研究について, 日本科学教育学会研究会研究報告, 36 (6), 45-50.

遠藤ももこ・竹中真希子 (2022) 美術 I 「デザイン×サステナブル建築」でのSTEAM教育における建築家の存在と生徒の領域横断に関する認識, 36 (6), 5-8.

竹中真希子・辻宏子 (2022) 小学校生活科の教科書における科学, 日本科学教育学会研究会研究報告 36 (4), 33-36.

江草遼平・竹中真希子 (2021) 幼児教育における「まちづくり」を題材としたSTEAM教材に関するパイロットスタディ, 日本科学教育学会研究会研究報告, 36 (2), 41-44.


江草遼平・竹中真希子 (2021) 幼児教育における「まちづくり」を題材としたSTEAM教材の開発, 日本科学教育学会年会論文集, 45, 629-630.

竹中 真希子・辻宏子 (2021) 学術研究にみる小学校生活科における科学的・数理的要素, 日本科学教育学会年会論文集 45, 359-360.

竹中真希子 (2021) 生活科と中学年以降の学習との関連についての教員志望学生の捉え, 日本科学教育学会研究会研究報告, 35 巻 5 号, 23-26.

竹中 真希子・中原久志・大野貴雄 (2020) 数学・物理に関する文系大学生の能力, 大分大学教育学部研究紀要, 42(1), 73-84.

竹中真希子 (2019) 小学校教員志望学生の生活科に対するイメージの変容: 生活科指導法の受講前後における比較, 日本理科教育学会全国大会発表論文集, 69, 327.

所属・職位	大学院教育学研究科（教職大学院）・准教授	
氏名	大島 崇 (Oshima Takashi)	
取得学位	修士（教育学）、横浜国立大学、2008年3月	
SDGs目標		

研究分野 教育方法学, 教師教育学

研究キーワード 教師の専門性、授業研究、教育実践研究、カリキュラム研究

研究内容

- 戦後初期の生活教育における教師の専門性  
戦後初期に生活教育を実践していた学校における教師の専門性とはいかなるものであったのかについて、特に授業研究とカリキュラム研究の連関に着目して研究している（論文3.）（著書1.）。
- 個々の子どもの興味・関心・思考・探究を重視する教育における教師の専門性  
生活教育や総合学習の理念を重視する教育、問題解決学習、オルタナティブ教育など、個々の子どもの興味・関心・思考・探究を重視する教育において求められる教師の専門性や力量形成について研究している（論文1.）。
- 教師の省察を促す授業研究・教育実践研究  
現代の教育実践を対象に教師の省察を促す授業研究・教育実践研究について、特に実践の観察・記録、事実の即した解釈、実践についての協議のあり方に着目して研究している（論文2.）（著書2.）。

研究業績・アピールポイント

- 論文
  1. 2021年、子どもの「おもしろさ」を感じ取れる教師であるために、日本生活教育連盟『生活教育』73巻6号、pp.14-19。
  2. 2016年、「当事者型授業研究」の実践と評価、日本教育心理学会紀要『教育心理学研究』64巻4号、pp.583-597。
  3. 2012年、戦後初期の授業研究における教師の力量形成とカリキュラム開発—古城学園の「プラン会議」と「研究授業」に焦点をあてて—、日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第37号、pp47-57。
- 著書
  1. 2021年、これからの教師研究—20の事例にみる教師研究方法論—、東京書籍。
  2. 2017年、「授業研究」を創る—教師が学びあう学校を実現するために—、教育出版。
- 受賞
  1. 2017年、日本教育心理学会優秀論文賞, 日本教育心理学会。

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	大学院教育学研究科（教職大学院）・准教授	
氏名	熊丸 真太郎 (Kumamaru Shintaro)	
取得学位	修士（教育学）、福岡教育大学、2001年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	教育経営学
研究キーワード	学校組織論、学校事務

研究内容	<p>学校経営について、組織マネジメントの観点から研究を行っています。学校組織のメンバーの行動に影響を与える組織文化に主な研究上の関心があります。最近では、学校組織が多様性を尊重する文化を有することが学校経営にどのような影響を与えるかに着目しています。それは、学校組織が多様性を尊重していることが、組織としての創造性の発揮や向上につながるのではないかとの説を抱いているためです。</p> <p>教育政策において「チーム学校」の実現が求められており、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、これまでとは異なった立場の専門職が学校に関わるようになり、学校組織の多様性も増えています。ただ、それらの専門職は、常に学校にいるわけではありません。一方、学校事務職員は、「総務や財務に通ずる専門職」と再定義され、より一層、学校経営の意思決定に関わることが求められている存在です。そこで、従来から学校組織のメンバーでありながら、教員ではない行政職員である学校事務職員に焦点を当て、その学校組織における役割や職務の実態を明らかにしようと試みています。そうした研究の成果から、学校事務職員を対象とした研修の依頼をいただくこととなりました。その機会を通して、学校事務の実態を少しずつとらえられるようになってきました。</p> <p>また、地域と連携した探究活動に取り組むことが、生徒や教師にとってどのような効果をもたらすかについても関心があり、高校での探究活動のカリキュラム開発にも携わる機会をいただいています。生徒たちが授業において探究の過程を経て学ぶこと、そして教師がそれに伴走していくという、従来とは異なる学び方が行われている学校で、生徒だけでなく教師や教師集団がどのように影響を受け、学び、変革していきうるかも明らかにすることに取り組み始めています。</p>
------	--



研究業績・アピールポイント	<p>近年の研究業績は以下の通りです。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学校事務職員はどのような職務意識を抱いているのか ―職務負担感に焦点を当てて―, 学校教育実践研究, 2019年</li> <li>2. 教員養成段階での学校安全・危機管理に関する教育 ―国立大学教員養成課程のシラバス分析から―, 学校教育実践研究, 2018年</li> <li>3. 地域連携型教育プログラムは地域創造精神や課題発見解決力の育成に有効か ―卒業生アンケートに見る成果と課題―, 島根大学教育臨床総合研究, 2018年</li> <li>4. 学校事務職員の学校経営への参画を促す支援的行動, 島根大学教育学部紀要. 教育科学, 人文・社会科学, 自然科学 = Memoirs of the Faculty of Education, Shimane University, 2016年</li> <li>5. 学校経営における「多様性」の尊重に関する一考察, 教育学研究紀要, 2016年</li> </ol>
---------------	---



所属・職位	大学院教育学研究科（教職大学院）・准教授	
氏名	河野 晋也 (Kouno Shinya)	
取得学位	修士（教育学）、長崎大学、2007年3月	
SDGs目標	    	

研究分野	ESD, 社会科教育	
研究キーワード	持続可能な開発のための教育, SDGs, 社会科	
研究内容	<p>● ESDに関する研究</p> <p>ESDは、Education for Sustainable Development（持続可能な社会の担い手を育成する教育）の略で、環境教育や開発教育をはじめ、平和、国際理解、地域の活性化、人権など様々な領域にまたがる教育です。年々深刻化する環境問題やSDGsが注目されるようになり、総合的な学習の時間、総合的な探究の時間を中心に学校現場で取り組まれることも増えてきました。ESDでは、SDGsや現代社会の諸課題に気付いたり、課題を解決するための能力を身につけるだけでなく、子どもたちが自身の価値観と行動を変えていくことが目的です。児童・生徒の変容を促すための学習の在り方について、総合的な学習の時間や社会科を中心に研究しています（論文1.3.）。</p> <p>● 社会科に関する研究</p> <p>公民的資質・能力を育むことが求められる社会科教育は、より良い自身の生き方や社会の在り方について考えるESDと親和性が高い教科だと言えます。より良い社会の在り方や社会の在り方を考えるためには、今の自分の生き方や自身を取り巻く環境について、クリティカルに考えていくことが必要です。しかし、子どもたちにとって現代社会の様々な問題は自分ごとにはなりがたく、自分たちの生活を見つめなおすことも容易なことではありません。学びを深めていくためには、身近なところに問題を見出し、その問題に取り組む人々の姿に出合うこと、そして他者と相互に考えをねり合って知識を構築していく過程が必要だと考えます。こうした探究的な学びのデザインについて、特に小学校社会科の授業を通して研究しています（論文2.）。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年「持続可能な社会の担い手としての価値観変容をめざす社会科学習：素朴概念の転換を取り入れた学習方略」広島大学大学院人間社会科学研究科『教育学研究』(2) pp.375-384</li> <li>2020年「持続可能な社会の創りに求められる批判的思考力の育成：小学校社会科第5学年『これからの食料生産』の実践をとおして」日本社会科教育学会『社会科教育研究』(139),pp.24-35</li> <li>2018年「持続可能な社会を形成する主体としてのアイデンティティの構築：小学校第5学年総合的な学習の時間の実践を通して」奈良教育大学次世代教員養成センター『次世代教員養成センター研究紀要』(4),pp.59-67</li> </ol>	



所属・職位	大学院教育学研究科（教職大学院）・准教授	
氏名	藤村 晃成 (Fujimura Kosei)	
取得学位	修士（教育学）、広島大学、2016年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育を みんなに	

研究分野	教育社会学
研究キーワード	フリースクール、オルタナティブスクール、不登校支援
研究内容	<p>●オルタナティブな学びの場における実践知に関する研究</p> <p>近年では学校外における「オルタナティブな学びの場」が多く設立されるようになった。フリースクールでは不登校の子どもを受け入れる居場所としての役割に限らず、スタッフの理念や子ども・若者のニーズに応じた多様な実践が展開されている。個々のフリースクールにおける実践がどのようなプロセス・葛藤を経ながら行われているのか、学校教育との関係をスタッフや利用者はどのように捉えているのか、といった点をフィールドワークに基づきながら探究している。</p> <p>●フリースクールから社会への移行プロセスに関する研究</p> <p>不登校支援における進路形成や社会的自立の重要性が着目されているが、フリースクールから社会への移行について考える上では、学校的なメリトクラシーの概念に基づく「規範的・標準的な移行プロセス」を前提にするのではなく、当事者の視点から移行経験や意味づけを捉えていくことが不可欠である。フリースクール卒業生へのインタビューと追跡調査を通して、フリースクールから社会への移行プロセスをめぐる課題を描き出していきたい。</p> <p>●オルタナティブな学びの場の連携・ネットワークに関する研究</p> <p>フリースクールをはじめとしたオルタナティブな学びの場において、他の団体や学校・行政といった外部アクターとの連携が積極的に試みられるようになってきている。複数のフリースクールやオルタナティブスクールが協働して運営している中間支援組織の事例に着目しながら、その実態や機能に関する調査研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、藤村晃成・内田康弘・伊藤秀樹「『オルタナティブな学びの場』からみた新型コロナ問題—オンライン活用による不登校支援の可能性と限界」『子ども社会研究』第27号、pp.89-103。</li> <li>2019年、藤村晃成「若者の移行研究からみるフリースクール研究の課題」『教育学研究紀要（CD-ROM版）』第65巻、pp.411-414。</li> <li>2018年、藤村晃成「フリースクールからの大学進学をめぐるジレンマ：大学進学がもたらす光と影」『子ども社会研究』第24号、pp.115-132。</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2019年、研究奨励賞（日本子ども社会学会）</li> </ol>

所属・職位	大学院教育学研究科（教職大学院）・講師	
氏名	山本 遼 (Yamamoto Ryo)	
取得学位	修士（教育学）、広島大学、2013年3月	
SDGs目標		

研究分野	教育経営学
研究キーワード	スクールリーダー教育、クラフト、アクション・リサーチ
研究内容	<p>□専門領域は教育経営学である。スクールリーダー教育を研究テーマとしており、主に下記の3つの研究課題に取り組んでいる。</p> <p>(1) 戦略クラフティングに基づくスクールリーダー教育に関する研究</p> <p>現在、支配的な戦略論は、事前にリーダー層が組織内外の環境を分析してビジョンや戦略を形成し、それらを組織構成員が実行すると考える戦略プランニングである。カナダの経営学者ミンツバーグは、この戦略論が戦略形成のプロセスを歪めていると批判し、組織は行為や経験を通じた学習によって、ビジョンや戦略を創発的に形成すると考える戦略クラフティングを提唱する。そして、この戦略論を踏まえたマネジメント教育論を展開している。彼のマネジメント教育論に注目して、スクールリーダーに求められるマネジメント能力やその能力を高めるためのカリキュラム、教育方法について、研究を行っている。</p> <p>(2) サイエンス（科学）の時代のスクールリーダーに替わるスクールリーダーを養成するスクールリーダー教育に関する研究</p> <p>アメリカでは、1980年代半ば以降、スクールリーダーの専門性の基礎となる知識ベースについて、科学的・理論的な知識に加えて、クラフト（経験から得られる技）的な知識の側面に光が当てられ、実践的な教育が行われるようになる。こうした動きを主導した論者たちは、スクールリーダー像やスクールリーダー教育の在り方をいかに転換しようとしたのかについて、研究を進めていきたいと考えている。</p> <p>(3) アクション・リサーチを中核とする教職大学院におけるスクールリーダー教育プログラムに関する研究</p> <p>マネジメントはクラフトの側面が大きく、実際の仕事（実践）を通じた省察によって学習する必要がある。こうした考えのもと、学校の課題解決を通してマネジメント能力の開発を狙う教育方法であるアクション・リサーチを中核とする教職大学院のカリキュラム構成の考え方等について、研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 曾余田浩史・金川舞貴子・山本遼・佐々木優・横山達也「教職大学院における「スクールリーダー教育者」の力量形成の課題」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第66巻、2020年、614-625頁。</li> <li>・ 山本遼「戦略クラフティングの発想に基づくスクールリーダー教育に向けて」末松裕基編『教育経営論』学文社、2017年、88-105頁。</li> <li>・ 山本遼「経営戦略論の観点から見たP.ハーリンジャーのスクールリーダー教育論に関する考察」中国四国教育学会編『教育学研究ジャーナル』第19号、2016年、21-30頁。</li> <li>・ 山本遼「協働型リーダーを養成するスクールリーダー教育プログラムに関する一考察：スタンフォード大学「将来の校長プログラム」の事例を通じて」『広島大学大学院教育学・研究科紀要・第三部』第64号、2015年、95-104頁。</li> </ul>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



# 経済学部

---

所属・職位	経済学部 経済学科（経済政策論）・教授	
氏名	石井 まこと (Ishii Makoto)	
取得学位	修士（経済学）、九州大学、1992年3月	
SDGs目標	    	

研究分野	社会政策
研究キーワード	地方圏での仕事創出、地営業、女性労働、労働災害、生活保障、労使関係
研究内容	<p>・ <b>地方圏の多様な就業・生活を支える「人的つながり」と「多様な経済」に関する調査研究</b>          地方圏で展望をもってくらす人々を増加させるために、「人的つながり」と経済を多様に理解する「多様な経済」の展開による地方福祉社会のあり方を展望する。地方で自営という形で仕事作りを行う「人」にフォーカスする。(研究プロジェクト①、論文②、著書①②)</p> <p>・ <b>ノルディック・ウォークを軸としたコミュニティ活性化による循環型経済社会の展望</b>          健康寿命増進を社会活動と連動させて展開する取り組み。地方圏で進む高齢化、地震等による被災地でのコミュニティ維持に対し、ノルディック・ウォークを活用したセミナーの開催、学生と地域民の交流促進、地域資源の掘り起こしを行う。将来的に地域でのコミュニティ維持・仕事創出を手がける資格作りへと進めていく。(論文②③)</p> <p>・ <b>多様な就労と労働災害に関する調査研究（大原記念労働科学研究所プロジェクト）</b>          労働災害と経済情勢の関係について、いかなる要因が労災に影響するのかを明らかにするため統計分析・検証する試み。労災統計の整備や労働安全衛生対策が必要であること、特にジェンダー視点を含めた統計分析の重要性を指摘。(論文①)</p> <p>・ <b>チッソ労働運動史研究（熊本学園大学水俣学研究センタープロジェクト）</b>          いまだなお終わらない水俣病問題に対して、当時働いていた労働者が事実をいかに受け止め、労働と生活への展望を考えていたのか、残された資料とインタビューを通じて明らかにするプロジェクト。(著書③)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>・ 地方圏における仕事創出と生活保障のあり方について、健康・文化・つながりの要素を加味した仕事・労働の再構成を行い、展望のもてる地方暮らしとは何かを研究していく。</p> <p>●研究プロジェクト</p> <p>①地方圏の多様な就業・生活を支える「人的つながり」と「多様な経済」に関する調査研究（科学研究費・基盤研究（B）2019-2023：代表）</p> <p>●論文</p> <p>①「労働災害・職業病・安全衛生とジェンダー」『経済学論纂』2019年</p> <p>②「地方圏における自営業セクターと多様な就業・生活」『経済論集』2018年</p> <p>③「ノルディック・ウォークを用いた体力向上に関する研究」『福祉社会科学』2021年</p> <p>●著書（共著）</p> <p>①『地方に生きる若者たち』旬報社、2017年（序章、第1章）</p> <p>②『ワークライフ・インテグレーション』ミネルヴァ書房、2021年（第7章）</p> <p>③『水俣に生きた労働者』明石書店、2021年（第5章）</p>



所属・職位	経済学部 経済学科 (比較経済論)・教授	
氏名	市原 宏一 (Ichihara Koichi)	
取得学位	博士 (学術)、名古屋大学、2003年1月	
SDGs目標	 	

研究分野	西洋経済史
研究キーワード	東方植民、バルト海南岸、北西スラヴ、ヴァイキング

研究内容	<p>1. 中世前期における環バルト海交流の実相</p> <p>中世の早い時期から、バルト海を一つの社会・文化圏とみなす近年の国際研究の動向を踏まえて、本研究では、バルト海北岸のスカンディナヴィアと南岸の北西スラヴ、さらに北東ではバルト、フィン人社会の相互の交流史を展望する。同時にこうした交流が、キリスト教の拡大とこれに伴う土着宗教・祭礼の変転などの社会的変容を中心に、バルト海南岸地域の社会形成へと展開する過程を検証しようとするものである。</p> <p>2. 前近代世界における国家形成</p> <p>本研究の特徴は、前近代における周辺蛮族における国家形成が、中核からの軍事的・文化的圧力の単純な結果ではなく、その外圧に内応するような、土着勢力自身の変質との総合的な作用の結果ではないかとの見通しにある。従来、中世盛期のハンザ史や近世・近代のバルト貿易史・国制史で実証されてきたのよりも早期に、北西スラヴ人らの社会形成の当初からのバルト海をめぐる交流が国家形成へと至る要因となっていることを明らかにする。</p> <p>3. 歴史資料論としての文献史料と考古学資料との総合</p> <p>現今のヨーロッパ統合の国際状況を背景に、バルト諸国及び旧東欧地域では、国際的な支援キャンペーンの展開により、ポーランド、ロシア、バルト三国での考古学調査が伸長し、史料上に言及された地名が考古学成果により比定されるという状況が進んでいる (例えば、ポーランド・トルソ、ロシア・ヴィスクーテン等)。バルト海南岸の北西スラヴ及びバルト諸族の社会構成の検討は、こうした考古学研究と、ドイツ・デンマーク・ポーランド等多様な出自の記述系文献史料上の知見との比較検討と総合という、資料論上の独自性を有している。</p>
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>「外来と土着 ～考古学資料を基にしたバルト南岸地域史研究の課題～」(藤井美男・田北廣道編著『ヨーロッパ中世世界の動態像 ～史料と理論の対話～』九州大学出版会、313-345頁、2004年)</p> <p>『中世前期北西スラヴ人の定住と社会』(九州大学出版会、2005年)</p> <p>「ポーランドにおけるヴァイキング期沿岸交易地遺跡トルソ～ハンザ以前の環バルト海交流の実相～」(大分大学経済論集、61巻6号、2010、pp.51-60.)</p> <p>「『異教』と改宗 ～十二世紀バルト海南岸における社会構成の移行～」(『歴史科学』232号、35-48頁、2018年)</p> <p>「前近代西洋における帝国と周辺一渡辺信一郎・西村成雄編『中国の国家体制をどう見るか』によせてー (2019年5月例会：中国古代帝国の世界史的特質ー東西比較研究を通して考えるー)」(『歴史科学』第241号、40-47頁、2020年5月)</p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	経済学部 経営システム学科（経営行動論）・教授	
氏名	鵜崎 清貴 (Uzaki Kiyotaka)	
取得学位	博士（経営学）、明治大学、2008年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	コーポレートファイナンス、経営学、会計学
研究キーワード	企業評価、ベンチャービジネス、IPO
研究内容	<p>●新規株式公開時のアンダーパフォーマンス（Underperformance）とアンダーパフォーマンス（Underperformance）に関する研究</p> <p>新規株式公開(IPOs)時、公開価格と初値とが大きく乖離し、高い収益率が発生するというアンダープライシングと、IPOs後3年から5年の期間にかけて、新規株式公開時の収益率が、市場インデックスや同業種の他の企業の株価収益率よりも平均して低くなっている、というアンダープライシングの2つの現象である。これらの原因を情報の非対称性の観点から研究している。</p> <p>●アセアン諸国のイスラム企業における新規株式公開（Initial public Offerings: IPOs）の特徴とイスラム金融の資金調達方法に関する研究</p> <p>マレーシアなどのアセアン諸国において、資金株式公開を行うイスラム法準拠企業（Shariah-compliant company）(イスラムの伝統的企業)と非イスラム法準拠企業（Non-Shariah-compliant company）(従来の日米欧型企業)とを比較し、企業の新規株式公開（IPOs）時のアンダープライシングとアンダーパフォーマンスを観察し、その現象の要因を明確にする研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. “Robust Long Term Performance Analysis for Initial Public Offerings Using Market Adjusted Buy and Hold Returns (MABHR) Model” (with Nashirah Abu Backar and Sofian Rosbi), The International Journal of Engineering and Science (IJES), Vol. 8, Issue 1, Series I, 8-15, 2019.</p> <p>●著書</p> <p>1. 「マレーシアにおける新規株式公開（IPOs）」坂本恒夫・境睦・林幸治・鳥居陽介編著『中小企業のアジア展開の本質』中央経済社, 224-241, 2016年.</p> <p>●受賞</p> <p>1. 日本中小企業・ベンチャービジネスコンソーシアム研究奨励賞 2022年5月</p>

所属・職位	経済学部 経営システム学科（経営行動論）・教授	
氏名	大井 尚司 (Ooi Hisashi)	
取得学位	博士（経営学）、神戸大学、2007年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	地域公共交通政策、観光、交通経済、交通計画、地域計画、公企業論、公益事業論
研究キーワード	地域公共交通、交通計画、交通事業経営、人材育成、観光、まちづくり、防災
研究内容	<p>①地域公共交通の事業経営に関する研究  第三セクター地方鉄道の経営効率性や組織運営（経済学的視点での計量分析を含む）  乗合バス事業の規制緩和の影響、運営規模、経営効率性に関する研究（同上）  これらをベースとした地域公共交通の現場・政策に資する研究（定性分析、事例分析）  共同研究でJR3島問題の研究、公共交通のプライシングについて（土木計画学）</p> <p>②地域公共交通政策・地域の公共交通計画に関する研究  地域人材による地域公共交通の確保・維持・活性化に関する研究（自治体、高等教育機関との連携を含む）。JCOMM（日本モビリティ・マネジメント会議）や土木計画学で発表。  地域公共交通計画のあり方に関する研究（プライシング、運営形態、持続可能性、人材育成；自治体等との共同研究を含む）。勉強会組織「Qサポネット」を主宰・運営。  共同研究で交通分野へのITS等の利活用について（土木学会土木計画学の委員会）</p> <p>③観光の経済効果に関する研究  観光税・観光目的の特定財源のありかた、DMOの運営、集客施設（飲食）の存在意義、  航空会社と連携した観光振興の提案（ジェットスター・ジャパンとの提携）、など</p> <p>④その他—地域計画・防災関係  港湾整備計画（第三セクター方式で運営される港湾）、熊本地震後の復興計画のあり方（日本都市計画学会九州支部の研究取りまとめ）、駅前通り再生の提言（自治体・学生も含めた共同研究）、  首都圏空港活性化（経済的側面；共同研究）など</p>
研究業績・アピールポイント	<p>①について、「第三セクター地方鉄道の費用構造に関する計量分析」（交通学研究（日本交通学会）、2007年）は同学会の学会賞を受賞し、地方鉄道の計量分析の有力な研究となっている。</p> <p>②について、『運輸と経済』誌に特集・座談会・寄稿含め10数編（ほぼ年1回）掲載があり、鉄道、政策関係が多数で、現場の政策形成や研修材料などに寄与している。また、豊後大野市・三重総合高校・日本工営との共同研究「大人の社会見学」が令和3年度日本モビリティ・マネジメント会議「JCOMMマネジメント賞」を受賞した（2021年）。</p> <p>九州内問わず自治体・交通事業者や、国土交通省・行政機関とのつながりを多々有し、関係する政策形成に多々関与。行政・交通事業者との共同研究や研究受託経験も多数ある。</p> <p>学術雑誌の編集（運輸政策研究編集委員、日本観光研究学会学術委員）にも関与するほか、学会役員にも従事（日本交通学会理事、日本観光研究学会理事・九州韓国南部支部長、公益事業学会評議員、日本モビリティ・マネジメント会議委員兼幹事、他。支部役員複数）。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	経済学部 地域システム学科（地域経営論）・教授	
氏名	大呂 興平 (Oro Kohei)	
取得学位	博士(学術)、東京大学、2011年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	経済地理学, 農業経済学, 畜産経営学
研究キーワード	農業, 畜産, 国土周辺部, wagyu, オーストラリア
研究内容	<p>日本や諸外国における農業や食料貿易の変動を、産業を構成する各主体の動態に注目することで、精緻かつ体系的に説明することを目指しています。</p> <p>現在、日本農業では、労働力の面で地域農業を長らく支えてきた世代が急速にリタイアしています。また、先祖代々の土地を守る規範意識も弱まり、就農をめぐる価値観も多様化しています。この10年、20年のうちに、日本各地の農業は、その土地利用や労働力構成を劇的に変えていくはずですが、日本の都市近郊農村で、あるいは奥地山村や離島、遠隔畑作地帯といった各地域で、農業が人々になどのようなかたちで営まれるようになるのか、換言すれば、農業が日本の国土にいかに関わり直すのかを理解する必要が高まっています。現場で起きている変化を読み取り、今後の展開を体系的に説明することに取り組んでいます。</p> <p>オーストラリアでのwagyu生産拡大や日本の牛肉輸出、トンガでの対日カボチャ輸出の盛衰といった、海外の農業生産や食料貿易をめぐる重要な動態についても、個々の生産者や輸出業者の対応を跡づけて分析しています。</p> <p>&lt;具体的な研究テーマ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の国土周辺部における肉用牛繁殖経営の動態</li> <li>・海外におけるwagyu生産の拡大と日本の和牛輸出に関する研究</li> <li>・肉用牛の生産拡大を目指した地域的取り組みに関する研究</li> <li>・日本の食糧調達の変化と海外農業地域の変動をめぐる研究</li> <li>・世界の牛肉貿易の動態に関する研究</li> <li>・地域の農業技術開発・普及システムに関する研究 ほか。</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>大呂興平（2014）『日本の肉用牛繁殖経営—国土周辺部における成長メカニズム』農林統計協会。（2015年度人文地理学会図書奨励賞受賞）</p> <p>大呂興平ゼミナール（2018）『漁に生きる—姫島漁業の模索』佐伯印刷。</p> <p>大呂興平（2019）オーストラリアへフィールドワークに行ってみよう，荒木一視・林紀代美編『食と農のフィールドワーク』昭和堂，197-206。</p> <p>大呂興平（2020）帝国書院『中学生の地理（文部科学省検定済中学教科書）』</p> <p>大呂興平（2021）沖縄・多良間島における肉用牛繁殖経営群の動態— 2000年と2017年の農家経営の追跡調査から，地理学評論，ほか。</p> <p>詳しくは、個人HP (<a href="https://orosresearch.webnode.jp">https://orosresearch.webnode.jp</a>) をご覧ください。</p>

所属・職位	経済学部 経済学科 (経済政策論)・教授	
氏名	小笠原 悟 (Ogasawara Satoru)	
取得学位	博士 (経済学)、埼玉大学、2009年3月	
SDGs目標		

研究分野	国際金融, 金融市場
研究キーワード	国際資本フロー、外国為替、金融政策
研究内容	<p>・グローバル化、金融自由化の進展に伴い、巨額な資本が国際間を移動するようになった。それは時として金融市場を混乱させ、実体経済にも甚大な影響を及ぼすようになっている。また、2000年代に入り新興国が著しい成長を遂げる中、主要先進国の金融政策が周辺国とりわけ新興国の国際資本フローにも影響を与えるようになり、一国あるいは一地域の混乱が世界各国に広がる機会も増えている。研究では、地域、国ごとにどのような要因が国際資本フローを決定し、またその重要性が変化しているのか明らかにする。また先進主要国の金融政策スタンスの変更が、どのような経路で周辺国に影響を及ぼしているのか検討する。</p> <p>・2000年3月に日本銀行が採用した量的緩和政策は、政策金利を上げ下げすることにより、物価の安定、完全雇用、国際収支の均衡を図るという従来型の金利政策に対し、政策金利がゼロ近傍に低下する中でさらなる緩和効果を狙ったもので、非伝統的金融政策と呼ばれる。さらに非伝統的金融政策は、2007-09年のサブプライム危機後、中央銀行がリスク性資産を買入れる信用緩和、民間銀行が中央銀行に預ける際に利子を課すマイナス金利政策等、様々な形で進化してきた。こうした非伝統的金融政策の効果波及経路は、伝統的金融政策と大きく異なるものではないが、適切な政策運営は時々の経済・金融環境や金融構造によって異なるとみられる。研究では、主要国の金融構造とグローバル金融危機期における各国中央銀行の金融政策運営を吟味し、非伝統的金融政策の役割とその効果について検討する。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>岩壺 健太郎, 小笠原 悟, 「資産価格, 資本フロー, 興国経済」, 財務省財務総合研究所『フィナンシャル・レビュー』, 第2号, p.35-61, 2019</p> <p>Iwatubo, Kentaro, Ogasawara, Satoru, "International Portfolio Flows in the Post-Global Financial Crisis Period", Japanese Journal of Monetary and Financial Economics, Vol.4 No.1, pp.18-37, Japan Society of Monetary Economics, 2016</p> <p>小笠原 悟, 「アジア諸国の国際資本フロー構成の変化と為替相場への影響」, 大分大学経済論集, 第86巻第3号, pp.37-86, 大分大学経済学会, 2013</p> <p>小笠原 悟 「サブプライム危機発生後の米国金融政策運営」, 大分大学経済論集, 第64巻第3・4合併号, pp.19-50, 大分大学経済学会, 2012</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

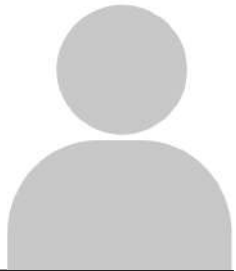

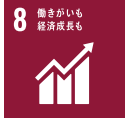



医学部附属病院





理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	経済学部 経営システム学科（会計情報論）・教授	
氏名	加藤 典生 (Kato Norio)	
取得学位	修士（商学）、中央大学、2005年3月	
SDGs目標	    	
研究分野	原価計算論・管理会計論	
研究キーワード	原価企画、逆機能、人間心理	
研究内容	<p>原価企画の逆機能問題を中心に研究しています。原価企画とは、端的に述べれば、新製品の企画・設計段階において設定される目標原価と見積原価との原価差異を計算する管理会計技法です。と同時に、原価差異を埋める活動でもあります。原価企画が、単なる会計ツールではなく、「活動」でもあることから、その活動に取り組む人間の心理的影響が、原価企画の成功を左右することになります。</p> <p>原価企画を実施することで生じるネガティブな結果を、逆機能といいます。原価企画の逆機能には、設計担当エンジニア（以下、エンジニア）の疲弊、サプライヤーの疲弊、組織内コンフリクト、地球環境問題の深刻化、手法依存症候群、品質問題などが先行研究で指摘されてきました。上述した人間の心理的側面に関する逆機能には、エンジニアの疲弊があげられます。最近では、エンジニアなど目標達成に従事する個人々の心理的側面に着目しながら、この問題に取り組んでいます。</p> <p>原価企画の逆機能問題に取り組み始めた頃は、上述のサプライヤーの疲弊に着目していましたが、研究蓄積に伴い、原価企画の多くの逆機能が相互に関連性を有していることが分かり、サプライヤーの疲弊を軽減していくためにも、他の逆機能も含めて検討していく必要があると考え、研究を進めています。</p> <p>サプライヤーの疲弊を含む、原価企画の逆機能問題の解決を目指すことは、原価企画それ自体の維持のみならず、わが国製造業の持続的発展を考える上でも不可欠です。本研究は、SDGs（貧困、経済成長、パートナーシップ、作る責任、地球環境）の目標を達成するためにも貢献する課題であると考えます。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>加藤典生・小林英幸（2021）「会計主導の原価企画と行動的原価企画：トヨタの事例から」『原価計算研究』第45巻第1号、14-24頁。</p> <p>加藤典生・小林英幸（2019）「行動的原価企画研究の必要性：トヨタ自動車の実務を踏まえて」『企業会計』第71巻第11号、117-124頁。</p> <p>加藤典生（2018）「解題深書 原価企画と心理学」『企業会計』第70巻第4号、77-80頁。</p> <p>加藤典生（2014）「原価企画における心理学研究の重要性」『商学論纂』（中央大学）第55巻第4号、21-40頁。</p> <p>科研課題 基盤研究（C）「行動的原価企画の理論と実践における逆機能問題に関する研究」2017～2021年度など。</p>	

所属・職位	経済学部 地域システム学科 (地域経営論)・教授	
氏名	城戸 照子 (Kido Teruko)	
取得学位	経済学修士、九州大学、1986年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	ヨーロッパ中世社会経済史
研究キーワード	イタリア半島・都市＝農村関係・社会経済史
研究内容	<p>●中世イタリア半島政治史</p> <p>政治的に多様な枠組みが併存するイタリア半島の中世1000年の歴史について、中世初期の8-9世紀(カロリング勢力の「イタリア王国」、9世紀末-10世紀中葉のほぼ90年間(「独立イタリア王国」)の歴史を、初期封建社会としていかに類型化するかを考察しています。独立自由農民が多くいわゆる荘園制による土地支配が貫徹していない「南欧封建社会」論ともまた異なる社構造論が必要と考えられます。</p> <p>紀元1100年頃までは、イタリア半島の西の入り口であるミラノとパヴィーアおよびポー川水系、半島東の入り口であるヴェネツィアとラヴェンナおよびアドリア海ポー川デルタ地域の東西対比が、比較史の検討軸になります。封建領主国家、共和国という政体、教皇領、といった統治と政治制度の比較を「貨幣」発行の制度史からみていきます。</p> <p>●中世イタリア食文化史</p> <p>食文化は、農業と畜産の生業史、社会構造を調べるのに最適です。ローマ教皇庁があるイタリアでは、在地文化の特殊性とヨーロッパ全域で共通する社会階層の違いが現れます。地中海的食文化の枠内に、イスラーム文化の食物(砂糖・米・柑橘類・香辛料)が入ってくるところがイタリア半島の特徴といえます。</p> <p>●研究動向でいえば、文献学に加えて、中世考古学研究が重要です。政治史だけでなく地域社会の定住地形成過程こそ地域史の根幹であり、考古学の成果はその基盤と位置づけています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●(共著) 春田直紀・新井由紀夫編著『歴史的世界へのアプローチ』刀水書房、2022年。 (共著)『世界歴史大系 イタリア史1 古代・初期中世』、『世界歴史大系 イタリア史2 中世・近世』、山川出版社、2021年。 (共著) 高橋進・村上義和編著『イタリアの歴史を知るための50章』明石書店、2017年。 (共著) 高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』、東京大学出版会、2013年。</p> <p>●(単著)「中世イタリアの貨幣の機能と製造」『西洋中世研究』13号、知泉書館、2022年。 (単著)「1974年以降のイタリアにおける中世考古学の研究動向：『中世考古学』誌の40周年記念号から」『経済論集』(大分大学経済学部)、2017年。</p> <p>●(共訳) マッシモ・モンタナーリ著/山辺規子・城戸照子共訳『ヨーロッパの食文化』平凡社、1999年。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	経済学部 経済学科（経済政策論）・教授	
氏名	金 珍奎 (Jingyu KIM)	
取得学位	博士（商学）、大阪市立大学、2001年3月	
SDGs目標	 10 人や国の不平等をなくそう	

研究分野	金融・証券市場論
研究キーワード	金融システム、インフォーマル金融、株式投資
研究内容	<p>1. インフォーマル金融の制度化</p> <p>金融システムが未発達している国では、インフォーマル金融と呼ばれるものが大きな役割を果たしてきた。しかし、インフォーマル金融は様々な問題がある。そのため、発展途上国を中心に、多くの国でインフォーマル金融の制度化が行われている。そこで、このインフォーマル金融に注目した研究に取り組んでいる。具体的にいうと、インフォーマル金融の制度化の過程で各国の金融システムがどのように形成されていくのかを研究テーマにしているのである。とはいえ、研究対象にしているのは発展途上国だけではない。かつての発展途上国であった韓国や台湾のインフォーマル金融や、いまだにインフォーマル金融の規模が大きいといえる中国についても研究を行っている。</p> <p>2. 金融リテラシーと投資教育</p> <p>日本では金融リテラシーの大切さがさほど注目されていない。しかし、経済格差をなくすためにも投資教育をつうじた金融リテラシーの向上は急ぐべき課題である。このため、投資教育や学生との投資ファンドの運営をつうじて、金融リテラシーに関する研究にも取り組んでいる。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文1、「韓国の派生結合証券と証券会社」『経営研究』大阪市立大学、2022年。</p> <p>論文2、「中国のシャドーバンキング」『大分大学経済論集』2015年。</p> <p>在外研究1、上海社会科学院訪問教授（中国）、2013年。</p> <p>在外研究2、日本学術振興会特定国派遣研究者（韓国科学財団招聘）、2005年。</p> <p>日本だけではなく、韓国の大学や中国の政府系シンクタンクでの研究経験を活かし、多方面での研究を行っている。</p>

所属・職位	経済学部 社会イノベーション学科・教授	
氏名	河野 憲嗣 (Kouno Kenji)	
取得学位	博士 (経済学)、京都大学、2012年1月	
SDGs目標	  	

研究分野	経営学
研究キーワード	決済システム、研究開発マネジメント、経営人類学、イノベーション、事業創成
研究内容	<p>1. 決済システムの機能が消費行動に与える影響の研究      決済システムは経済活動の血流を担い経済活動を支えている。日常の買い物で決済に使う媒体は紙幣や硬貨に加えて各種デジタル化が進んでいるが、それらの運用はプラットフォーム財としての決済システムに支えられている。本邦銀行間決済の実務に携わった立場から決済機能の特性や巧拙が社会で広く議論される機会が少ない点に着目し、日本の事例や諸外国の状況を比較検証して決済システムの機能が消費行動に与える影響を研究している。</p> <p>2. 非接触型紙認証システムを活用した社会インフラの整備      決済システムのイノベーションと目されるチェック・トランケーションの概念を発展させて、紙の支払手段の利便性と効率性を同時に追求する非接触型の紙認証システムを開発した。本システムと地域通貨の提供により、被災による停電や通信障害時にも日常生活に支障なく買い物ができるインフラの確保や高齢者や情報弱者に使い勝手のよい決済環境の整備について研究している。</p> <p>3. 過剰品質とイノベーションに関する研究      本邦金融サービスのイノベーションが世界から遅れている要因として、事務ミスはあってはならないとする過剰な事務品質との関連性に着目し、決済分野におけるセキュリティやオペレーショナルリスクの領域で「あいまいさ」を方法論として導入することによるイノベーションへの影響について研究している。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ AI-OCRを活用した非接触型紙認証システムの実装環境の提供、実証試験の実施</li> <li>・ 紙の利便性とデジタル技術の共生を通じたソリューションの提案、支援</li> <li>・ 富士/みずほ銀行、全国銀行協会、ソニーにおける実務経験</li> <li>・ 電子決済システムに関する特許出願実績(4件,うち1件は特許権化)</li> <li>・ 京都の町家旅館を運営する会社の創業</li> <li>・ 事業を通じて社会課題解決を実践した経験</li> <li>・ 参与観察による課題抽出を起点とする経営人類学的アプローチの活用</li> </ul>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	経済学部 経済学科（経済政策論）・教授	
氏名	高見 博之（Takami Hiroyuki）	
取得学位	経済学修士、山口大学、1991年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	経済学, 経済政策
研究キーワード	報酬制度、賃金交渉、社会厚生、賃金決定のタイミング、最適民営化比率
研究内容	<p>●労働市場における報酬制度と経済の安定性に関する研究</p> <p>雇用の確保は、経済の安定にとって重要な課題です。本研究では、1970年代の石油危機を契機とするいわゆる「スタグフレーション」（インフレと景気後退の同時発生）への処方箋として80年代から議論されているProfit Sharingによる報酬制度（企業利潤の一定比率を労働者・労働組合に分配する報酬制度）を雇用の確保の枠組みとして研究を進めています。</p> <p>例えば、この報酬制度を日本経済の特徴（ボーナスを利潤の比例部分と想定）にとらえ、春季労使交渉（春闘）において大手、全国企業が先に動き賃金（世間相場）が決定され、その後、中小、地方の企業が追随する賃金決定のタイミングの状況を理論的に説明できる可能性があることを確認しました。</p> <p>（下記の論文1・3・6が関連します）</p> <p>●公企業と民間企業が競合する市場における報酬制度と経済厚生に関する研究</p> <p>1980年代以降の規制緩和の流れの中で、日本でも公企業の民営化が進められてきました（旧国鉄、電電公社など）。この研究では、公企業と民間企業が競合する市場（宅配便市場や金融市場などの混合市場）において、賃金決定のタイミング（先手、後手、同時）や報酬制度が、経済厚生や公企業の民営化にどのように影響するかについて理論的な分析を進めています。</p> <p>例えば、社会厚生（経済全体の満足度）の最大化を目的とする公企業と自己の利潤の最大化を図る民間企業が競争する状況を想定した場合、各企業がProfit Sharing による報酬制度を採用し、分配比率が労働者に有利で、賃金決定について民間企業が先手、公企業が後手の場合には、政府は完全国有化よりも完全民営化を選択する状況を確認しました。</p> <p>（下記の論文2・4・5が関連します）</p>
研究業績・アピールポイント	<p>理論分析により、意思決定のタイミングや報酬制度が経済厚生に及ぼす効果を研究しています</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2005年, 賃金交渉と内生的シュタツケルベルク均衡, 現代経済学研究, 12. (共著)</li> <li>2010年, 混合複占市場下の賃金決定のタイミングと民営化, 大分大学経済論集, 62(3・4).</li> <li>2012年, Profit-Sharing and the Endogenous Order of Moves in Oligopoly, Theoretical Economics Letters, 2(2). (共著)</li> <li>2013年, 混合複占市場下の賃金決定のタイミングと部分民営化, 東亞経済研究, 71.</li> <li>2015年, Nash bargaining and partial privatization in mixed oligopoly, ECONOMIC MODELLING 46. (共著)</li> <li>2018年, Profit Sharing, Labour Share and Financial Structure, Evolutionary and Institutional Economics Review, 15. (共著)</li> </ol>






所属・職位	経済学部 経済学科 (比較経済論)・教授	
氏名	デイ・スティーブン (Day, Stephen)	
取得学位	博士、ウォーリック大学、1999年4月	
SDGs目標		

研究分野	EU研究・比較政治	
研究キーワード	政治学・民主主義・政党・Brexit・欧州議会・欧州政党	
研究内容	<p>地方、国家レベル、超国家レベルでの政党の役割と意義、制度構築に関心を持っています。現在、欧州政党の役割と意義について本を執筆中です。2021年には、Brexitが北アイルランドの政治的未来に与える影響に関する研究プロジェクトを開始しています。</p> <p>欧州政党 (Europarties) に関しては、その役割とEU加盟国の国境を越えた代表民主主義について研究しています。欧州政党の重要な役割の一つは、ヨーロッパの人々に力を与えることです。すなわち、欧州政党はヨーロッパを総体的に発展させ、EUレベルでの欧州市民による民主主義と、市民参加を促進させる力となるのです。したがって、欧州政党を強化することが、欧州統合を進める議論をより効果的に進める積極的取り組みの第一歩なのです。国境を超えた民主主義の発展を進める上で、欧州政党の役割に注目しておかなければなりません。</p> <p>今後の展開として、欧州公共圏を実現するために、以下のことに着目していきます。まず、ヨーロッパの選挙法の改革、次いで、欧州市民が欧州政党を通して直接的に関与する機会の増加、さらに、2024年の欧州議会選挙に備えて、選挙の重要度を知らしめる筆頭候補制 (spitzenkandidaten system) を活性化するため、国境を越えた筆頭候補者名簿の導入です。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 『「ブレグジット」という激震—混迷するイギリス政治』 スティーブン・デイ・カ久昌幸共著 2021年, ミネルヴァ書房 同志社大学のカ久昌幸教授との共著。日本経済新聞 (2021年4月17日電子版) で「丹念な情報収集と精緻な分析」「将来を展望する基礎となる知識を提供」と評価される。</li> <li>◆ 「院内会派」, 『EU—欧州統合の現在』 辰巳浅嗣編著, 第4版, 第3章 第8節, 134-143頁, 2020年, 創元社 日本国内でのEU学の教科書として高く評価されており、第4版を数える。</li> <li>◆ ‘Global Party Internationals: “Tackling the Dilemma of Indifference”’, in S. Van Hecke et al. (2018), Reconnecting European Political Parties with EU Citizens. Office of the International Institute for Democracy and Electoral Assistance [International IDEA] to the European Union, Brussels, pp.35-39. <a href="https://doi.org/10.31752/idea.2018.71">https://doi.org/10.31752/idea.2018.71</a> シンクタンクInternational IDEA (国際民主・選挙支援機構) の要請でヨーロッパの様々な国の研究者が1つのプロジェクトとして作成した報告書</li> </ul>	

所属・職位	経済学部 社会イノベーション学科・教授	
氏名	豊島 慎一郎 (Toyoshima Shin'ichiro)	
取得学位	修士 (社会学)、関西学院大学、1995年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	社会学
研究キーワード	社会階層、NPO/ボランティア、市民社会、災害復興支援
研究内容	<p>1. 現代日本における社会階層と社会参加に関する実証的研究</p> <p>「1995年社会階層と社会移動(SSM)全国調査」をはじめとする大規模調査データを用いて、社会的活動(NPO/ボランティア、地域活動等)に関する計量分析を行い、社会階層や社会的ネットワーク、ICT活用等が活動参加に与える影響等について研究している。2002年からは、大分市役所・大分市社会福祉協議会と連携し、福祉や防災に関する市民意識調査を継続的に行っており、地方都市における社会参加の現状を実証的に分析することにより、人々にとって望ましい地域社会や市民社会のあり方を検討している。</p> <p>2. 被災者・災害ボランティアに関する実証的研究</p> <p>東日本大震災等の被災地調査データの分析により、被災者・災害ボランティア支援を中心として災害復興や防災・減災に関わる研究を行っている。2012・3年には、大分県豪雨災害(2012年7月)における被災地調査を実施した(大分県ボランティア・市民活動センターとの連携)。</p> <p>2011～6年には、福島市や仙台市等の東日本大震災の被災地調査(立教大学学術推進特別重点資金東日本大震災・復興支援関連研究、科研費基盤研究(C)「震災後の生活と将来認識—ネットワークと社会階層に関する実証分析」)に研究分担者として参加した。現在、立教大学学術推進特別重点資金による社会調査プロジェクトのメンバーとして、引き続き東日本大震災の被災地調査に関わっている。</p> <p>個人研究としては、2016年に熊本・大分地震の被災地である大分県湯布院町を事例として災害復興に関する調査研究を行った。</p> <p>※関連リンク(研究室サイト)：<a href="http://www.ees.ec.oita-u.ac.jp/toyosima/">http://www.ees.ec.oita-u.ac.jp/toyosima/</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1998年、「社会参加にみる階層分化—社会階層と社会的活動—」片瀬一男編『1995年SSM調査シリーズ7 政治意識の現在』1995年SSM調査研究会、151-78.</li> <li>2007年、「マイノリティのための社会調査—当事者の現実に接近する方法をめざして—」先端社会研究編集委員会『先端社会研究』6、143-63.</li> <li>2019年、「被災地における社会階層と地域活動—福島市を事例として—」震災問題研究ネットワーク・日本社会学会震災問題情報連絡会『第5回震災問題研究交流会研究報告書』47-53.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2000年、「新しい市民像 社会的活動」高坂健次編著『日本の階層システム 第六巻 階層社会から新しい市民社会へ』東京大学出版会、143-59.</li> <li>2018年、「災害復興と地域活動—福島市と湯布院町を事例として—」日本臨床政治学会監修、池田美智代編『臨床政治学第8巻 地方政治と選挙』志學社、165-86.</li> </ol> <p>●書評</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、「書評：安立清史著『21世紀の〈想像の共同体〉』」日本社会学会『社会学評論』72(2)、185-7.</li> </ol> <p>●プロジェクト(研究代表者)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>科学研究費 基盤研究(C)「災害に対する地域住民の意識と社会参加—被災地と未災地の比較分析」(2021～3年度)</li> </ol> <p>●資格 専門社会調査士(社会調査協会)</p>

所属・職位	経済学部 経営システム学科（経営基礎論）・教授	
氏名	藤原 直樹 (Fujiwara Naoki)	
取得学位	経済学修士、九州大学、1986年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	経営労務論
研究キーワード	『資本論』、協業論、指揮論
研究内容	<p>カール・マルクス『資本論』と経営学の基礎理論（人事・労務管理分野）</p> <p>研究内容としては、下記の私の主著『『資本論』の経営理論—協業論と指揮論の構築をめざして』御茶の水書房 2018年、の概要を紹介することでお伝えすることが可能であろう。全13章（453ページ）からなる本書のうち、第1章～第8章までは（以下、本書前半部と称す）、『資本論』等に依拠する経営学（経営労務論分野）の基礎理論におけるさらなる基礎部分として協業論ならびに指揮論・資本家の指揮論を打ち立てることを目的としている。第9章～第13章（以下、本書後半部と称す）は、本書前半部で確立した協業論ならびに指揮論・資本家の指揮論を基礎として、続く『資本論』等を対象とした経営に係る理論的課題の解決を意図したものである。本書前半部の成果を用いることにより、先学が提起された課題に対し、一定の回答を示すことも目的としている。本書前半部が基礎理論の基礎であるとするれば、本書後半部は基礎理論に基づく応用的な理論的課題を扱うものである。</p> <p>総じて、本書は『資本論』等に依拠しつつ経営学の基礎理論の構築のみを目的とした構成となっている。筆者は、協業と指揮に関し全く新たな概念を次々に導入し、新規の諸議論を展開している。これは、『資本論』を着実に、全体的に、かつ、新しい研究成果を加味しながら読み解くことで、新たな基礎理論が展開できるのではないかという一つの試みである。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論文</li> <li>1. 『資本論』第3巻における「困難な問題」について—第4篇第17章「商業利潤」における「困難な問題」再論一、大分大学経済論集第72巻第1号（2020.5）所収</li> <li>・著書</li> <li>1. 『資本論』の経営理論—協業論と指揮論の構築をめざして、御茶の水書房、2018年</li> </ul>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部





医学部

医学部附属病院




理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等


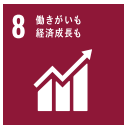



所属・職位	経済学部 地域システム学科（地域情報文化論）・教授	
氏名	包 聯群 (Bao Lianqun)	
取得学位	博士(学術)、東京大学、2009年4月	
SDGs目標	  	

研究分野	社会言語学、中国語学（中国北方少数民族言語）関連
研究キーワード	言語接触、言語変異、危機言語、満洲語、ダグル語、言語継承、言語政策、言語景観、言語サービス、言語経済

研究内容	<p>(1)危機言語満洲語の保護・教育と継承及び再活性化への取り組みや実態解明の研究</p> <p>満洲人は清朝政権を樹立し、300年近く統治してきた歴史を持つ。中国国勢人口センサス(2020年)の調査によると、満洲人が1千42万人以上いる。だが、民族言語—満洲語(<i>manju gisun</i>)を流暢に話せる人は数えるほどしかない。満洲語の母語話者は主に黒龍江省の三家子村に集中的に居住しているが、満洲語で日常会話ができる人はわずか3-4名しかない(2021年)。貴重な無形文化財でもある満洲語は消滅の危機的状態に置かれている。本研究では、満洲語口語の言語的特徴(論文2)を分析し、満洲語の記録保護と教育及び継承活動をし、三家子(<i>ilan boo</i>)村の満洲語口語データに基づき、『満語会話課本』(満洲語会話テキスト)を作成し配布した(右掲写真は2017年8月に撮影)。三家子村の満洲人が主導してWeChatによる満洲語の学習活動を行い、満洲語の保護と継承活動に努めている。本研究は、人々が自分の言語と文化に自信や誇りを持って学習し、文化の多様性の享受、次世代への継承、平等な暮らしができることを目指すように実践的な活動も行ってきた。</p> <p>(2)社会言語学の視点から中国におけるダグル語の実態に関する調査研究</p> <p>本研究はダグルの言語接触と言語変異のプロセス(論文3)及びそのメカニズムを解明し、異なる年齢層のダグル人の言語使用実態を明らかにし、会話データと物語を収集し、民話集を作成する。そして研究成果を地域社会に還元し、ダグル人の言語と文化の次世代への継承に繋がる努力をし、また言語接触に関する理論的枠組の構築を目指している。</p> <p>業績関連HP <a href="http://www.aisf.or.jp/jp/search/articles/view/23938">http://www.aisf.or.jp/jp/search/articles/view/23938</a></p>	  
------	--	--

研究業績・アピールポイント	<p>「言語政策と言語継承」に関する研究を中心とし、言語景観による地域振興/災害言語サービスに関する論文も多数ある。●論文(1) 2022年「満洲語習得者の音韻面における相違点—中国黒龍江省富裕県三家子村を事例として」、『現代中国における言語政策と言語継承』(第6巻、pp192-211). (2)2021年「満洲語継承活動と現代満洲語の言語特徴—中国黒龍江省三家子村の2013-2020言語調査報告」、『現代中国における言語政策と言語継承』(第5巻、pp173-202). (3)2019年「中国における満洲語継承の実態」、『東アジア社会教育研究』(TOAFAEC東京・沖縄・東アジア社会教育研究会)、第24号(pp147-156). (4) 2022年「言語接触の視点からみるモリンダワ地域のダグル語の特徴」、『現代中国における言語政策と言語継承』(第6巻、pp144-166). (5) 2019年「言語接触の視点からみるチチハル市梅里斯ダグル語の特徴—物語「結婚と生活の礼節」を事例として」、『現代中国における言語政策と言語継承』(第4巻、pp95-110).●著書 (1)2013年-2022年『現代中国における言語政策と言語継承』(第1-6巻)、包聯群編著、三元社。(2)2011年『言語接触と言語変異』。包聯群著、現代図書。●受賞「言語景観による地域の活性化—大分県での事例—」(Revitalization of Community by Linguistic Landscape in Oita Prefecture)、『アジアの未来へ—私の提案5— Toward the Future of Asia: My Proposal Best Paper of the 5th Asia Future Conference Vol.5』今西淳子編、2020年、181-194。ジャパンタイムズ出版。</p>
---------------	--



所属・職位	経済学部 社会イノベーション学科・教授	
氏名	松隈 久昭 (Matsuguma Hisaaki)	
取得学位	経営学修士、西南学院大学、1987年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	マーケティング論、流通論
研究キーワード	マーケティング、流通、ブランド、消費者行動
研究内容	<p>①顧客の創造と顧客満足の上昇に関する研究 主な対象は、営利企業（製造業、小売業、サービス業など）、非営利組織（病院の患者満足度、看護師満足度など）である。</p> <p>②ブランディングに関する研究 主な対象は、商品・サービス、農林水産物である。</p> <p>③魅力のあるまちづくりに関する研究 主な対象は、まちづくり3法を考慮した商業活性化である。</p> <p>④観光地経営に関する研究 主な対象は、観光地や宿泊業の活性化やDMOもテーマとしている。</p> <p>⑤流通に関する研究 主な対象は、小売業、卸売業などである。また、地方卸売市場も対象とする。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「旅館の競争優位性に関する研究：西日本の旅館を対象として」『大分大学経済論集』72(3) 2020年（単著）</li> <li>・「地域団体商標による農産物のブランド化の現状と課題」『大分大学経済論集』69(5・6) 2018年（単著）</li> <li>・「職位別にみた看護師の職務満足に関する研究」『大分大学大学院福祉社会科学部研究紀要』13、2010年（単著）</li> <li>・『地域ブランド戦略と雇用創出』（共著）白桃書房、2010年</li> <li>・「商店経営と経営者意識--大分市の中心部商店街を対象として」『コミュニティ総合研究』（大分大学）2006年（単著）など</li> </ul> <p>・現在、大分県最低賃金専門部会委員、大分市公設地方卸売市場開設運営協議会委員、大分市販路拡大課題解決補助金選考委員会委員、日田市指定管理者選定委員会委員などを務める。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部


医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	経済学部 地域システム学科 (地域経営論)・教授	
氏名	宮町 良広 (Miyamachi Yoshihiro)	
取得学位	文学修士、名古屋大学、1985年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	経済地理学、地域経済論、地域学
研究キーワード	地域発展、経済のグローバル化、グローバル生産ネットワーク (GPN)
研究内容	<p><b>1. グローバリゼーションと地域経済に関する研究</b></p> <p>現代世界が直面するもっとも重要な課題の一つであるグローバル化が作り出す新しい経済空間の態様を経済地理学の視点で究明する。近年の業績として、日本とりわけ九州における外資系企業の進出経緯と地方経済の再生について究明した。また国内外の経済地理学研究をレビューすることで、グローバル化の分析枠組みを提起した (右図)。</p> <p><b>2. 地域学・地域政策に関する研究</b></p> <p>地域学は、地域の振興と環境保全の調和のもとに安全安心な地域の実現を住民の視点から実証的に研究する学問であり、地方創生時代の要請により急速に発展しつつある。近年の業績として、地域学の世界的学会である Regional Studies Association (RSA) の発展を整理することで、地域政策を研究する学問としての地域学を展望した。</p> <p><b>3. 高大接続・連携に関する研究と実践</b></p> <p>高校と大学における教育の質的向上のためには、学習者の視点に立った教育内容の検討が重要である。とりわけ学力要素として注目されている主体性を涵養するための高大接続教育のあり方を究明する。近年の業績として、NPOカタリバとの協働授業を素材とした研究実践を報告した。</p>

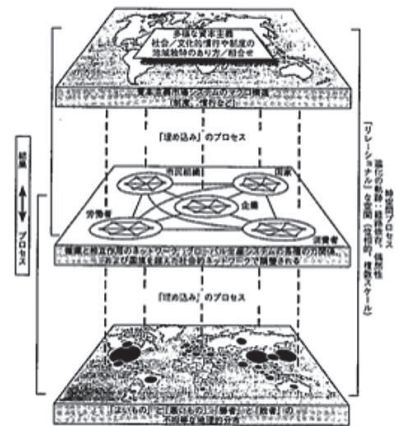
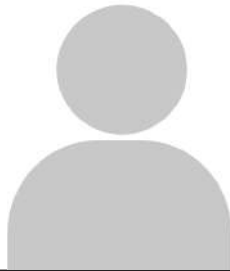

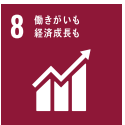



図3 グローバル経済を分析するための枠組み  
出典: Dickson (2015), p.61.

研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●上記1に関する最近の業績 宮町良広 (2022): グローバル生産ネットワーク論の発展と論争—英語圏の経済地理学理論における「ヘゲモニー化」?—, 『経済地理学年報』68-1: 4-28.</li> <li>●上記2に関する活動 日本学術会議では地域研究委員会・地域学分会を設置しており、筆者は同分会委員長として研究を推進する。また上記RSA学会の日本で唯一のFellowとして国際的研究交流を推進する。日田市総合計画審議会会長や大分市空家等対策協議会副会長などを務めている。</li> <li>●上記3に関する活動 1999年から高大接続教育事業を推進したことで、日本学術振興会の外部評価において「特に優れた取組」として認定された。その結果、本学が高大接続教育の先導的であると評価が定着している。 ※関連サイト <a href="http://www.ees.ec.oita-u.ac.jp/gp/">http://www.ees.ec.oita-u.ac.jp/gp/</a></li> </ul>
---------------	---

所属・職位	経済学部 経営システム学科（経営行動論）・教授	
氏名	本谷 るり (Motoya Ruri)	
取得学位	修士（経済学）、岡山大学、1996年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	経営組織論
研究キーワード	組織、協働、変化、継続、環境
研究内容	<p>企業組織の継続について、その原動となる組織的要因を明らかにすることを目的に老舗企業を対象として実態調査研究をおこなっている。多くの企業は継続し、可能なら発展や成長を遂げ、次世代へ渡すことを目的のひとつに掲げている。刻々と変化する環境にあって企業の経営を続けるということは一体どのようなことなのかを組織的側面から解明することは、社会に貢献する研究となる。</p> <p>特に、現在注目しているのは、企業と環境とのかかわりである。環境は幅広い概念であるため、分割して関係性を探り最後には統合することが必要である。まずは密接な関係構築をするステークホルダーとのかかわりが企業組織の継続に対していかに影響しているのかを探求している。個人と同じく、企業も単独で何かを成し遂げることは困難である。他の企業や個人との関係の上に自社の経営が成立しているとすれば、その関係構築が大きな鍵となる。長期にわたる継続を望むならばなおさらである。</p> <p>さらにその関係構築の相手が変わっていると考えられる。これまでは企業同士が基本と理解されてきたが、企業ではない組織である自治体やNPO、個人と多様なかかわりを持つことで、これまでは難しいとされた事業展開の可能性や、企業単独では得られなかった視点を獲得しイノベーションにつながるものがわかってきている。同じ組織とはいえ、企業や自治体、NPOといった形態が異なると、協働するための共通目的の設定が難しくなる。その中で新しい協働のあり方、協働組織体の運営について、研究に取り掛かっている。</p> <p>なお、ステークホルダーのみが環境ではないため、そのほかの要素についても徐々に取り組む予定である。そして、これらの関係性は一定ではなく、変化する。その変化を追うことも企業組織の継続を明らかにする重要なポイントである。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「協働する組織とその即興」『経済論集(大分大学)』第71巻第6号, pp.55-76, 2020年(研究ノート)。</li> <li>・「老舗企業の継続と地域社会の相互発展」『経済論集(大分大学)』第67巻第4・5合併号, pp.119-144, 2016年。</li> <li>・「老舗企業の長寿性を支える経営者の意思決定」『経済論集(大分大学)』第66巻第1・2合併号, pp.1-26, 2014年。</li> <li>・『長寿企業にみる経営のあり方 一大分県内長寿企業の経営に関する調査一』(川野恭輔氏と共著) 大銀経済経営研究所, 2012年。</li> <li>・「ブランドと老舗ののれん」『老舗学の教科書』同友館, pp.47-64, 2011年。</li> <li>・「ベンチャーと老舗」『老舗学の教科書』同友館, pp.65-80, 2011年。</li> <li>・「地域と企業の継続」『グローバル化する経済と社会』ミネルヴァ書房, pp.118-137, 2008年。</li> </ul>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院




理工学部

福祉健康科学部

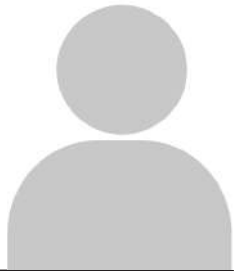
その他学内施設等

所属・職位	経済学部 社会イノベーション学科・教授	
氏名	渡邊 博子 (Watanabe Hiroko)	
取得学位	経済学修士、大分大学、1990年3月	
SDGs目標	    	

研究分野	産業経済論
研究キーワード	産業振興、イノベーション、ベンチャービジネス、ユニバーサルデザイン、ダイバーシティ
研究内容	<p>1. 日本における産業の分析と今後の発展戦略</p> <p>日本経済の発展に貢献してきた電機・家電産業を対象に、海外展開やグローバル化、国際競争力、生産分業やネットワーク化などとともに、医療や福祉産業などの新規産業創出やイノベーション、新しい事業形成としてのアントレプレナーシップやベンチャービジネスなどについて関連する企業動向とともに調査研究。現在は、大分のモノづくりや中小企業の発展戦略について研究中。</p> <p>2. ユニバーサルデザイン視点によるモノづくりと人にやさしい社会</p> <p>モノづくりやサービス提供、社会に対して「やさしさ」を取り入れるきっかけとなったユニバーサルデザインに関する概念やその展開、企業や行政での取り組み事例や評価などとともに、その展開としてのCSR（企業の社会的責任）や企業戦略との関係性、多様な働き方としてのダイバーシティなどについて調査研究。現在は、ユニバーサルデザイン視点からの大分の地域づくりやまちづくり、大分におけるダイバーシティの実態や課題について研究中。</p> <p>3. 課題探求型教育プログラムの実践</p> <p>社会や地域の課題、企業や組織の困り事などについて、学生が主体となってそれらの問題に取り組み、解決していくための方法を考え、各種機関と一緒に実践。現地調査を積極的に行いながら、これまで、企業や金融機関、自治体、スポーツ団体、同窓会組織などと連携。こうした過程の中で、連携の形態、取り組み方法、実践とその成果の出し方について研究中。</p>
研究業績・アピールポイント	産業振興、新規産業、企業戦略、地域づくり・まちづくり、労働等分野において、大分市次世代モビリティ研究会への参加、大分市委員会等への参加（商工業振興計画、小規模事業者競争力強化、新事業分野、行政評価、自治基本条例他）、大分県委員会等への参加（中小企業活性化関連他）、日田市まちづくり集会コーディネーターや検討委員会等への参加、金融機関社外取締役、労働に関する外部機関検討会への参加（大分労働局、大分県労働委員会）。

所属・職位	経済学部 地域システム学科（地域行政論）・准教授	
氏名	青野 篤 (Aono Atsushi)	
取得学位	修士（法学）、愛媛大学、2000年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	憲法学
研究キーワード	思想・良心・言論・結社の自由、公教育、刑事司法、少年司法、法の支配、アメリカ憲法
研究内容	<p>●公教育制度・選挙制度における思想・良心・言論・結社の自由の保障 公教育制度や選挙制度という民主政を維持、発展させることを目指す一定の制度内において、思想・良心・言論・結社の自由という民主政の維持、発展に不可欠とされてきた各種の精神的自由権の保障範囲、違憲審査基準をどのように考えるべきかについて、アメリカ憲法との比較に基づいて、検討する（共著書1・3、論文3、判例研究1）。</p> <p>●刑事司法制度・少年司法制度・公教育制度における手続的権利保障 刑事司法制度における被疑者・被告人の手続的権利保障、国民の司法参加、少年司法制度における少年の手続的権利保障、公教育制度における生徒の手続的権利保障について、アメリカ憲法との比較に基づいて、検討する（共著書2、論文1・2、判例研究2）。</p> <p>●地方自治体のコロナ対応と法の支配 新型コロナのパンデミックに対して地方自治体が行った外出自粛要請、休業要請、営業時間短縮要請などの各種自粛要請について、法の支配の観点から、憲法及び新型インフルエンザ特措法に基づく適切な対応であったか否かを検証する。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>傷つきやすい権利と人に着目しながら、主にアメリカ憲法をベースに研究を行っている。</p> <p>●共著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>『アメリカ憲法と公教育』（成文堂、2017年）</li> <li>『ロバーツコートの立憲主義』（成文堂、2017年）</li> <li>『アメリカ憲法と民主政』（成文堂、2021年）</li> </ol> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>「裁判員制度の憲法学的一考察」大分大学経済論集62巻5・6号203頁（2011年）</li> <li>「公立学校における個別的嫌疑に基づかない搜索と合衆国憲法修正4条」大阪市立大学法学雑誌62巻3・4号739頁（2016年）</li> <li>「謝罪の強制と合衆国憲法修正1条」大分大学経済論集69巻1・2号1頁（2017年）</li> </ol> <p>●判例研究</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>「Minnesota Voters Alliance v. Mansky, 585 U.S. __, 138 S. Ct. 1876 (2018)」[2019-1] アメリカ法80頁</li> <li>「報復的逮捕と合衆国憲法修正1条」大分大学経済論集72巻1号81頁（2020年）</li> </ol> <p>●共訳書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>エリック・バレント『言論の自由』（雄松堂、2010年）</li> <li>ルース・ベイダー・ギンズバーグ＝アマンダ・L・タイラー『ルース・ベイダー・ギンズバーグ アメリカを変えた女性』（昌文社、2022年）</li> </ol>

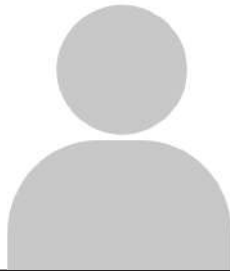

所属・職位	経済学部 地域システム学科（地域行政論）・准教授	
氏名	秋山 智恵子 (Akiyama Chieko)	
取得学位	修士（法学）、千葉大学、2007年3月	
SDGs目標	 16 平和と公正をすべての人に	

研究分野	法学
研究キーワード	民法（財産法）

研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 保証債務の「附従性」原則と消滅時効の「相対効」原則との優劣についての考察</li> <li>2. 破産終結決定を受けて消滅した主たる債務者会社の債務の存否および保証人によるその援用の可否についての考察</li> <li>3. 主たる債務について生じた時効中断の効力が及ぶ範囲についての考察</li> <li>4. 根抵当権によって担保された複数の債権のうち1個の債権の連帯保証人がその債権全部を代位弁済したことにより取得した求償権と債権者の残債権の優劣についての考察</li> <li>5. 複数の債権を負担する債務者会社の破産手続開始決定後に抵当目的不動産の売却代金により数個の債権の全部弁済を受けた債権者が行使し得る債権の範囲についての考察</li> </ol> <p style="text-align: right;">など</p>
------	--

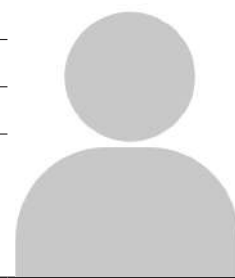
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 秋山智恵子「保証債務の『別個』性の意義—特に、主たる債務の時効中断について—」法学新報117巻9・10号133-181頁</li> <li>2. 秋山智恵子「根保証の法的性質に関する一考察—特に、保証債務の『個数』と保証人の『責任』について」法学新報122巻1・2号1-29頁</li> </ol> <p style="text-align: right;">など</p>
---------------	--



所属・職位	経済学部 経済学科（基礎経済論）・准教授	
氏名	宇野 真人 (Uno Masato)	
取得学位	修士（経済学）、香川大学、1997年3月	
SDGs目標		

研究分野	経済成長理論
研究キーワード	技術進歩、人口成長率、内生的成長理論
研究内容	<p>●人口成長と技術進歩の関係についての考察</p> <p>人口成長は経済成長ともに増加してきた。そして人口成長は経済成長もたらず上で重要な要素である。しかし、昨今人口は減少局面になっており、人口成長に頼らない経済成長を模索する必要があると思われる。そこで人のかわりに働く機械などの技術で経済を支えていけるのかを考えている。</p> <p>●技術進歩と雇用率の関係</p> <p>技術進歩には雇用を増やす効果と減らす効果の二面性がある。ベルリン科学センター雇用職業総合研究所（1988）『技術革新と労働の新時代』によると、例えば職場のオートメーション化である。マイクロプロセッサ技術の発展に伴いコンピュータが安価で幅広くなるにつれ電卓、時計、パソコンなど新製品（新産業）を生み出した。それは雇用を生み出すだろう。同時にオフィスの事務などがオートメーション化されるに伴い労働の生産性を押し上げ、労働節約の可能性を見出した。これは雇用を減らしてしまうだろう。</p> <p>整理すると、産業増加タイプの技術進歩が起きたとき、産業の増加による雇用の増加が見込める一方、新しく起きた産業が既存産業の労働生産性を高めた結果、既存産業における雇用を減らしてしまう。雇用が増える効果と減る効果を技術進歩が持つ結果、技術進歩が起きる前より後の方が、雇用が減ってしまうということがどのような時に言えるのかを考察していく。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>経済成長理論においても技術進歩と並んで経済成長率を決めるため人口成長率の動きは重要な点である。江戸時代（1847）から明治初め（1870）までの推定人口をみみるとおおよそ3千万人前半で微増していることが観察される。</p> <p>これに対して1872年以降の人口増加の割合を観察するとかなりのスピードで増加していることが読み取れる。この理由として医療の発展、食料増産体制の確立など人が増加しても維持できるような技術進歩の存在が考えられる。つまり、技術進歩が人口成長率を高める要因となっていることである。</p> <p>昨今日本は人口成長率はマイナスである。理論的に考えると人口が減っているということは技術進歩が後退しているということになるが、技術進歩は起きている。人口成長率がマイナスの時の技術進歩とはどうゆう種類のものなのか？またそれに関連して人口が減ってもGDPを維持するために必要な技術はなんなのか？について研究している。</p> <p>●論文</p> <p>1. 単著（2022）“Consideration of the Solow model with logistic curve”『大分大学経済論集』第73巻第5・6合併号近刊</p>

所属・職位	経済学部 経営システム学科 (会計情報論)・准教授
氏名	小野 慎一郎 (Ono Shinichiro)
取得学位	博士 (経営学)、神戸大学、2012年3月
SDGs目標	



研究分野	会計学
------	-----

研究キーワード	財務会計
---------	------

研究内容	<p>●会計基準や会計情報の有用性に関する実証研究 ※関連リンク：<a href="https://researchmap.jp/s-ono">https://researchmap.jp/s-ono</a></p> <p>●リスク・期待リターン推定での会計情報の有用性：実現原則や保守主義の影響を踏まえて ※関連リンク：<a href="https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-19K13853/">https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-19K13853/</a></p> <p>●会計情報を活用した株主資本コストの推計：割引率の時間的変動を前提とした場合 ※関連リンク：<a href="https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-15K17163/">https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-15K17163/</a></p>
------	---

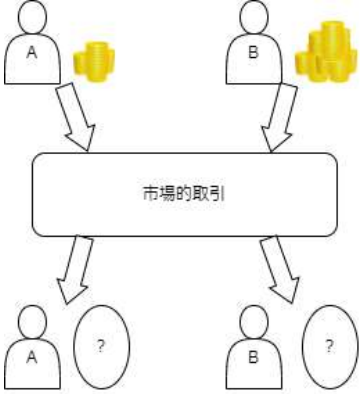
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年12月, 「日本市場におけるバリュートラップ: 会計原則の影響に基づく説明の検証」(椎葉淳・村宮克彦との共著), 『経営財務研究』40 (1・2), 45-63。</li> <li>2019年10月, 「対数線形・現在価値法に基づく事業の資本コスト」(村宮克彦との共著), 『証券アナリストジャーナル』57 (10), 39-50。</li> <li>2018年7月, 「会計上の認識・測定原則を考慮した資産価格モデルへ向けて: Penmanの所説を中心に」, 『大分大学経済論集』70 (1・2), 27-55。</li> <li>2018年7月, 「組替財務諸表に基づくROE予測の有効性」(椎葉淳・村宮克彦との共著), 『国民経済雑誌』218 (1), 59-79。</li> <li>2017年10月, 「クリーンサープラス関係を利用した時間的に変動する期待リターンの推計」(村宮克彦との共著), 『証券アナリストジャーナル』55 (10), 70-81。</li> <li>2015年10月, 「不確実性リスクの決定要因に関する実証研究」(桜井久勝との共著), 『国民経済雑誌』212 (4), 1-16。</li> <li>2013年9月, 「四半期財務諸表による損益分岐点推定の有効性」(桜井久勝との共著), 『国民経済雑誌』208 (3), 1-19。</li> <li>2011年9月, 「売上債権を減少させる収益認識指針が利益の品質に及ぼす影響: 情報サービス産業に関する実証分析」, 『六甲台論集 (経営学編)』58 (1), 21-43。</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年10月, 日本経営財務研究学会 2018年度 学会賞 (「クリーンサープラス関係を利用した時間的に変動する期待リターンの推計」(村宮克彦との共著), 『証券アナリストジャーナル』55 (10), 70-81 に対して)</li> </ol>
---------------	---

所属・職位	経済学部 経済学科 (経済政策論)・准教授	
氏名	小野 宏 (Ono Hiroshi)	
取得学位	博士 (経済学)、広島大学、2003年3月	
SDGs目標	  	


研究分野	財政学
研究キーワード	財政運営 都市スプロール
研究内容	<p>都市スプロールに関する計量的研究</p> <p>近年、多くの市町村では、都市スプロールの問題に直面しています。都市スプロールの問題の1つは、非効率な行政サービスの提供や社会資本の整備によって行政コストが増大することです。重要な概念にも関わらず日本では都市スプロールを直接的に計測した統計データがありません。そこで我々は代理変数を作成し、都市スプロールの拡大が、日本の地方自治体の行政コストをどの程度増加させるのか、市町村データに基づき推計を行いました(研究業績[1]、研究業績[2])。</p> <p>財政運営に関する計量的研究</p> <p>主に日本の中央政府を対象として、財政運営の評価に関する研究を行っています。政府の歳出と歳入の関係に着目して、日本の財政運営を評価すると、日本では財政の持続可能性が満たされていない可能性が高いと言えます。また、政府の歳出と歳入は、経済成長とも大きく関係していますが、日本では、経済成長は、政府の財政規模を拡大する傾向があると言えます (研究業績[3]、研究業績[4])。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>[1] Tomoya Ida,Hiroshi Ono(2019) 'Urban Sprawl and Local Public Service Costs in Japan' Minoru Kunizaki,Kazuyuki Nakamura,Kota Sugahara and Mitsuyoshi Yanagihara(eds.)' .Advances in Local Public Economics: Theoretical and Empirical Studies (New Frontiers in Regional Science: Asian Perspectives37)",Springer,pp.195-216.</p> <p>[2] 井田知也・小野宏(2020)「コンパクトシティが及ぼす地方財政への影響—都市スプロール弾力性の市町村別推計—」『公共選択』第74号,pp.26-47.</p> <p>[3] Hiroshi Ono(2014)' The government expenditure-economic growth relation in Japan: an analysis by using the ADL test for threshold cointegration' <i>Applied Economics</i>, vol.46, pp.3523-3531.</p> <p>[4] Hiroshi Ono(2008)' Searching for nonlinear effects and fiscal sustainability in G-7 countries' <i>Applied Economics Letters</i>,15,pp.457-460.</p>

所属・職位	経済学部 社会イノベーション学科・准教授	
氏名	金子 創 (Kaneko Soh)	
取得学位	修士 (経済学)、慶應義塾大学、2010年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	理論経済学、経済学説、経済思想
研究キーワード	国際貿易、所得分配、搾取、不等価交換、動学的一般均衡モデル

<p><b>研究内容</b></p> <p>●不等価交換に関する理論的基礎の解明</p> <p>近年、多くの国で資産格差の拡大傾向が実証的に確認されており、所得分配をめぐるメカニズムへの関心が高まっています。しかし、資産格差が存在することそれ自体の良し悪しは決して自明ではなく、様々な観点から検討される余地があり、分配の状態に関する倫理的な評価と突き合わせて考察することは避けられません。</p> <p>本プロジェクトでは、一見、公正と思われがちな市場取引が人や国の間の格差をもたらし、またより深刻化させる条件を特定すると共に、そこで実現している取引が搾取的であるかどうかの可能性について、数理モデルを構築することで検討します。これまでのところ、例えば、古典的な国際貿易モデルにおいて、静学的な均衡で搾取が発生する条件の特定（論文1）や国際貿易における不等価交換をとらえるための搾取の妥当な定義の形式（論文2, 3）、さらに資産格差が温存されながらも搾取的ではないような動学的な均衡の存在（論文4）、などを明らかにしています。また、こうしたアプローチに関する学説史的な位置づけについても考察を進めています（論文5）。</p>	 <p>主体間の資産格差は、市場取引の結果、どのように変化するか？ またその変化は望ましいと言えるか否か？</p>
--	--

<p><b>研究業績・アピールポイント</b></p>	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. On the existence and characterization of unequal exchange in the free trade equilibrium (joint with Naoki Yoshihara). <i>Metroeconomica</i>, 67(2), 210-241, 2016.</li> <li>2. 「国際経済学における不等価交換」(吉原直毅氏との共著)『経済研究』67(4), 289-306, 2016年.</li> <li>3. International Exploitation, Capital Export, and Unequal Exchange (joint with Jonathan F. Cogliano, Roberto Veneziani, and Naoki Yoshihara). In Zak Cope and Immanuel Ness eds., <i>The Oxford Handbook of Economic Imperialism</i>. Oxford University Press, Chapter 13, 2022.</li> <li>4. On the General Impossibility of Persistent Unequal Exchange Free Trade Equilibria in the Pre-industrial World Economy (joint with Naoki Yoshihara). UMass Amherst Economics Working Papers. 263, 2019.</li> <li>5. 「格差と規範の政治経済学: 分析的マルクス主義の視点から」『歴史と経済』64(3), 2022年 (近刊).</li> </ol>
-----------------------------	---

所属・職位	経済学部 経営システム学科（経営基礎論）・准教授	
氏名	加納 拡和 (Kano Hirokazu)	
取得学位	博士（商学）、早稲田大学、2021年7月	
SDGs目標		

研究分野	国際経営論、企業家論、戦略経営論
研究キーワード	早期国際化企業、ボーングローバル企業、企業家精神、不確実性
研究内容	<p>主に以下の3つについて研究を進めています。</p> <p>①早期国際化企業の国際化プロセスに関する研究</p> <p>②スタートアップ企業の都市部における集積と立地戦略に関する研究</p> <p>③進出国の賄賂の水準が日本企業の立地選択に及ぼす影響に関する研究</p> <p>詳細はResearch mapをご参照ください (<a href="https://researchmap.jp/hkano1128">https://researchmap.jp/hkano1128</a>)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>◎論文 Hirokazu, K. (2020). "The Dilemma and its Solution of Deep Uncertainty in the Dynamic Capabilities Framework: Insights from Modern Austrian Economics". <i>Managerial and Decision Economics</i>, 42(3), 605-611.</p> <p>◎学会報告（国際学会） Hirokazu, K. (2021). "Early Internationalization and the Subsequent Geographic Expansion: An Extended Penrosean Perspective", 2021 Annual Meeting of the Academy of International Business, Jul. 1, Online.</p> <p>Hirokazu, K. (2020). "Early and Rapid Internationalization as Means of Entrepreneurial Experimentation and Learning", 80th Annual Meeting of the Academy of Management, Aug. 10, Online</p> <p>その他の研究業績はResearch mapをご参照ください (<a href="https://researchmap.jp/hkano1128">https://researchmap.jp/hkano1128</a>)。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部





その他学内施設等



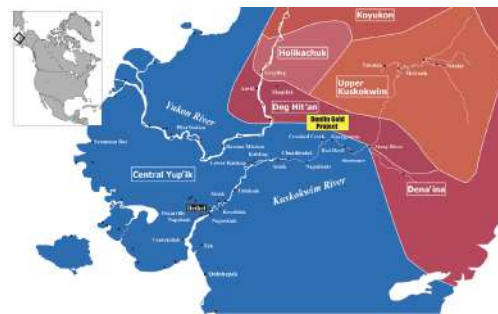
所属・職位	経済学部 社会イノベーション学科・准教授	
氏名	川崎 晃央 (Kawasaki Akio)	
取得学位	博士 (経済学)、九州大学、2007年3月	
SDGs目標		

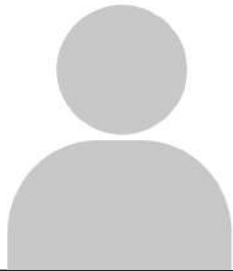
研究分野	産業組織論
研究キーワード	民営化
研究内容	<p>近年は、企業の費用関数（収穫一定、収穫逓減）の違いが混合寡占市場における生産量の決定タイミングにどのような影響を与えるのか、またそれらが民営化の程度にどのような影響を与えるのかについて研究を進めてきた。</p> <p>その結果、タイミングゲームの均衡としては私企業先手、または公企業先手、という複数均衡が実現することを明らかにした。これらの帰結は従来の研究結果と同じであるため、この均衡は費用関数の違いに影響を受けないことが確認された。次に、リスク支配概念を用いて均衡の絞り込みを行うと、私企業と公企業の費用効率性の差が小さいならば私企業の国籍に関係なく公企業先手がリスク支配均衡として実現するが、その差が大きいならば、私企業が国内企業であれば私企業先手が、外国私企業であれば公企業先手がリスク支配均衡として実現することを明らかにし、従来の結論が必ずしも成立しないことを明らかにした。</p> <p>また、部分民営化の議論とタイミングゲームの議論をまとめることによって、国内私企業の場合は私企業先手のもとでの部分民営化、外国私企業の場合は公企業先手での完全公営が均衡として実現することを明らかにし、これまでの多くの研究で仮定されてきた同時手番ゲームは、タイミングゲームでの均衡という視点から見ると、オフパスのゲームであることを示すことに成功している。</p> <p>また、非対称な複数市場競争モデルを用いて、企業が収穫一定の技術を持つ場合と収穫逓減の技術を持つ場合で、最適な民営化の程度にどのような変化をもたらすかについて研究をすすめ、2つの財・サービスの差別化の程度が最適な民営化の程度に及ぼす影響に大きな違いを生じさせることを明らかにした。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>【タイミングゲームに関する成果物】 Kawasaki, A., Ohkawa, T., Okamura, M., (2020) “Endogenous timing game in a mixed duopoly with partial foreign ownership and asymmetric increasing marginal costs” Australian Economics Papers, 59(2), 71—87. (Top Cited Article 2020-2021)</p> <p>【部分民営化と費用関数に関する成果物】 Kawasaki, A., (2022) “Pricing strategies and partial privatization policy based on complementary competitive Market “ Journal of Industry, Competition and Trade 22, 99—123.</p> <p>【タイミングゲームと部分民営化に関する成果物】 Kawasaki, A., Ohkawa, T., Okamura, M., (2022) “Optimal partial privatization in an endogenous timing game: a mixed oligopoly approach” Journal of Economics, Forthcoming. DOI: 10.1007/s00712-022-00777-9</p>

所属・職位	経済学部 経済学科 (比較経済論)・准教授	
氏名	木村 雄一 (Kimura Yuichi)	
取得学位	博士 (経済学)、京都大学、2003年3月	
SDGs目標	   	
研究分野	開発ミクロ経済学	
研究キーワード	農業家計、農業への投資・商品作物、土地制度、教育投資、産業集積・技術伝播、労働移動	
研究内容	<p>・親族の絆は足枷か？：西アフリカの伝統的土地所有制度と農業投資</p> <p>西アフリカの伝統的土地制度は、親族単位の集団的土地アクセスを特徴としており、重複した曖昧な所有権が、商品作物導入、農業投入を停滞させていると見られている。過去20年間にゴム栽培の普及が進むガーナ南部で収集した家計データを使い、重複土地権利がどのような経路で、なぜ投資を抑制するかを検証した。実証分析結果から次のことが明らかになった：ゴム投資の収益に対する分配圧力や、利益回収の前に土地が親族内で再配分されるリスクなどが従来から仮説的に認識されている抑制要因だが、これらの仮説は親族経由の土地で起きる極端な低投資の理由を説明しない。土地の担保権は資金アクセスを向上させるが農業投入と生産性を上昇させていない。親族所有での投資抑制誘引を説明する最大の要因は商品作物導入と農業投入に付随する投資リスクの回避だ。商品作物投資は食糧安全保障とトレードオフの関係にある。リスク回避誘引が親族経由の土地で特に強くなるのが、商品作物への投資抑制をしていると考えられる。(科研費課題 26450329)</p> <p>・中国の農村土地制度改革と農業への投資、分配、政治参加</p> <p>中国の公的な土地制度改革の一部として、宁夏省 石嘴山市、陕西省 咸阳市 杨陵区で、土地使用権（経営権）を担保とした借入を可能にする制度変更が2017年から開始された。これらは土地の所有権制度と農業家計の行動の因果関係を検出する目的にとって理想的な実験機会を提供している。担保権の付与が借入に対して、農村家計による農業への投資、都市への移民の土地資産運用と都市での生計上あるいは教育投資などに対してどのように影響したか；都市への移民の資金制約の緩和や、農村での生産要素市場の、ある程度の規模を持つ組合（合資会社）の出現などについて効果を持つか、について検証する。介入群をプロジェクト試行自治体境界線の内側、日介入群を境界線の外側から標本抽出する地理的断絶設計の実験研究として計画している。(計画段階、科研費課題 19K01655)</p> <p>・義務教育の学費、教育投資と所得配分：インドネシアの家計データによる実証研究</p> <p>インドネシアでは小中学校の学費無料化は完了しているが、非公式な寄付や諸経費に100ドルほどかかる。農村を出て他地域で、あるいは非農業部門に就業することは農村出身者の所得向上にとって有望な経路だが、それには条件中学卒業が重要な要件となる。小中学校の学費無料化が、中学卒業、就業地域・職種の選択を通じて将来所得にどの程度のインパクトがあるかを反実仮想的に計測した。シミュレーションから学費無料化が、とくに女性の低賃金稼働者の所得向上に大きな効果を持つであろうことを明らかにした。(科研費課題 22830055)</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>Kimura, Yuichi, 2021. "Shackles of Kinship Bonds: Land Tenure Institutions and Smallholders' Farm Investments in Ghana," 2021 Conference, August 17-31, 2021, Virtual 315049, International Association of Agricultural Economists.</p> <p>Kimura, Yuichi, 2015. "Informal school fee, school progression, migration and occupational choice, and income distribution: evidence from Indonesia", mimeo.</p> <p>Kimura, Yuichi, 2011. "Knowledge Diffusion and Modernization of Rural Industrial Clusters: A Paper-manufacturing Village in Northern Vietnam," World Development, Elsevier, vol. 39(12), pages 2105-2118.</p> <p>Kimura, Yuichi, 2005. "Learning Own Ability and Migration of the Young : Evidence from Thailand" KIER Working Papers 605, Kyoto University, Institute of Economic Research.</p>	

所属・職位	経済学部 地域システム学科（地域情報文化論）・准教授	
氏名	久保田 亮 (Kubota Ryo)	
取得学位	博士（文学）、東北大学、2010年2月	
SDGs目標	  	

研究分野	文化人類学
研究キーワード	アラスカ先住民、多民族社会、生業、生存狩猟・漁労、天然資源開発、伝統芸能、文化継承
研究内容	<p>(1) アラスカ先住民文化の歴史動態に関する研究</p> <p>アメリカ合衆国の周縁に位置づけられた先住民の日常生活を現地調査から得た一次資料に基づいて丹念に検討することで、先住民という社会的な位置づけが人びとの文化の実践、表象、構築の仕方にどのように作用しているのかを検討する。研究の焦点となる先住民は、アラスカ州南西部を故地とする先住民ユピック/チュピックと自称する人びとであり、アラスカにおける先住民の政治活動が興隆した1970年代以降に生じた諸現象を取り上げる。具体的な検討事項の一つとしては、キリスト教宣教師の布教活動において抑圧された先住民文化実践の一つである伝統ダンスの復興や活性化に向けた人びとの営為と、その政治経済的意義などが挙げられる（業績 2,3,4）。</p> <p>(2) アラスカにおける生業活動の持続と天然資源開発の関係性についての研究</p> <p>アラスカ州南西部で計画されている天然資源開発のステークホルダーたちが、いかなる持続可能な社会を求めており、その実現のためにいかなる方策を立てているのかについて、民族誌学的に検討する。本研究が主眼とする天然資源開発事業は、アラスカ南西部を流れるクスコクウィム川上流で1980年代より埋蔵量調査が始まった金鉱開発である。天然資源開発の社会的、文化的、経済的、政治的インパクトを捉えるための事例となるのは、同地域で行われているサケを対象とした生存漁労である。地域経済の発展が期待される天然資源開発と、伝統的生業として経済的かつ文化的に高く価値づけられているサケ漁労の持続的実施の達成にむけた行政機関、先住民団体、開発企業、地元住民のさまざまな実践について分析する（業績 1,5）。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>研究業績</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生田博子・久保田亮(2022予定)『南西アラスカ・クスコクイン川流域における生業、野生動物管理、金鉱開発の研究動向』「国立民族学博物館調査報告」。</li> <li>2. 久保田亮(2016)『伝統ダンスを踊ることの意味：アラスカ南西部先住民の民族誌的事例検討』「大分大学経済論集」67(6):95-125。</li> <li>3. 久保田亮(2015)『ユピックの在来知と知的財産概念：人と伝統芸能の関係についての事例検討』「国立民族学博物館調査報告」131:229-251。</li> <li>4. 久保田亮(2011)『歌の帰郷：民族誌的資料の「返還」と「活用」に向けた取り組みについて』「北海道立北方民族博物館研究紀要」20:11-24。</li> <li>5. 久保田亮(2009)『法概念「サブシステム」の成立：先住民権利保障へのドミナント文化の影響』「東北人類学論壇」8:22-53。</li> </ol>



所属・職位	経済学部 地域システム学科（地域行政論）・准教授	
氏名	小山 敬晴 (Koyama Takaharu)	
取得学位	博士（法学）、早稲田大学、2019年9月	
SDGs目標		

研究分野	社会法学
------	------

研究キーワード	労働法、労働組合の代表性、フランス労働法
---------	----------------------

研究内容	<p>フランスにおける代表的労働組合概念の研究（早稲田大学博士論文、2019年9月）。</p> <p>フランスにおける代表的労働組合概念の変容(1)（早稲田大学大学院法研論集 (140) 143-161 2011年）</p> <p>フランスにおける代表的労働組合概念の変容(2・完)（早稲田大学大学院法研論集 (141) 153-171 2012年）</p> <p>ワークショップ フランスの労働法改革 フランスの労働法改革(日本労働法学会誌 (132) 140-148 2019年)</p> <p>「第38条の3～38条の4」西谷敏、野田進、和田肇、奥田香子編『新基本法コンメンタール 労働基準法・労働契約法〔第2版〕』、日本評論社、2020年、pp.169-178.</p> <p>「争議行為と損害賠償」野田進編『実務家のための労務相談』、有斐閣、2020年、pp. 357-361.</p> <p>「労働組合の街宣活動と名誉毀損」野田進編『実務家のための労務相談』、有斐閣、2020年、pp.379-383.</p> <p>「採用内定—大日本印刷事件」『労働判例百選〔第10版〕』別冊ジュリスト257号、有斐閣、2022年、pp.20-21</p> <p>詳細はresearch map(<a href="https://researchmap.jp/7000001599">https://researchmap.jp/7000001599</a>)+B11で公表している。</p>
------	---

研究業績・アピールポイント	社会法学
---------------	------

- 役員
- 大学院教育学研究科 教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

所属・職位	経済学部 経済学科 (比較経済論)・准教授	
氏名	柴田 茂紀 (Shibata Shigeki)	
取得学位	修士 (経済学)、京都大学、1998年3月	
SDGs目標		

**研究分野** 通商政策

**研究キーワード** 国際貿易 国際貿易体制 国際経済秩序 国際通商政策

**研究内容**

国際貿易体制や国際経済秩序がいかに形成され、今後展開していくのかを研究している。具体的には、第二次世界大戦後の経済自由化政策の「順序 (sequencing)」を政策立案者の現実的観点から捉え直し、既存の理論研究の補足を試みている。

自由化政策を分析する際、経済学の分野では、いくつかの仮定や条件に基づいたモデル研究が展開されている。しかし、実際の自由化プロセスを整理すると、理論モデルでは捨象されている政策が明らかになる。そこで本研究では、政策立案時に作成された国内外の一次資料と経済統計を活用しながら、自由化に関連する政策が実際に導入された「順序」を検証する。先駆的な理論研究である「宇沢=浜田の命題」や、そこから発展した先行研究の成果をまとめながら、実際に導入された一連の政策を検証し、経済の自由化政策に関する分析枠組の発展を目指す。

本研究の意義としては、第一に、現実的な政策立案・政策導入の観点から、経済の自由化政策に関する分析視角が提起できる点、第二に、経済の自由化を進める上で、他国政府や国際経済機関 (GATT(WTO)、IMF、OECD、BIS) との関係性を明確化できる点、第三に、経済の自由化政策に関する日本の経験が整理されるため、日本と他国の自由化政策の比較研究が進めやすくなる点を想定している。

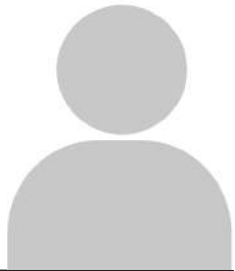






**研究業績・アピールポイント**

Shibata, S. (2018), "Emerging countries' dilemmas in multilateral frameworks: the case of the Japanese "miracle"", Asian Education and Development Studies, Vol. 7 No. 4, pp. 364-374.

科研費・基盤研究 (C) 研究代表者：2020~2023年  
国際貿易体制における日本の「経済大国」化：ルール追従国からルール形成国へ

科研費・若手研究 (B) 研究代表者：2008~2011  
IMFの対日政策と日本-日本のIMF8条国移行(1952年~64年)を中心に



所属・職位	経済学部 地域システム学科（地域経営論）・准教授	
氏名	高島 拓哉 (Takashima Takuya)	
取得学位	博士 (社会学)、立命館大学、1993年3月	
SDGs目標	     	
研究分野	地域社会学、環境社会学、福祉社会学	
研究キーワード	ごみ出し困難、バリアフリー、町内会・自治会、アンペイドワーク	
研究内容	<p>「環境と福祉の社会学」</p> <p>駐車場やトイレのバリアフリー対応は、どこまでの対象者に利用許可を出すかが政策争点となっています。この問題には、障害者のニーズ把握に際して古くからの障害の医学モデルに加え、社会モデルならびに「障害社会学」などの新たな視点で再整理が求められます。</p> <p>また、ごみ問題は環境問題の一部と考えられてきましたが、高齢者・障害者のごみ出し困難やごみ屋敷問題などから福祉の問題としても考えられ始めています。</p> <p>社会福祉学の議論のなかに普遍主義と選別主義という対抗があり、特定の対象者に限定して給付するか、ニーズがある限りニーズの低い人にも応分の給付を行うかの考え方が分かれています。この視点を応用してバリアフリー問題やごみ出し困難の問題を考えてみるということが現在のテーマです。</p> <p>「町内会・自治会とアンペイドワーク」</p> <p>町内会・自治会などの地縁組織においては、担い手の不足から強引な人選など不健全な運営が目立つようになってきました。私はフェミニズムで議論されてきたアンペイドワーク論を素材として、町内会・自治会の活動をアンペイドワークの一部としてとらえ返し、家庭内の介護などの家庭内アンペイドワークと町内会・自治会など地域社会レベルのアンペイドワークとの重複による過重負担問題を考えています。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>高島拓哉 (2020) 「ごみ問題と福祉の接点—ごみ出しが困難とはどういうことか」 大分大学大学院福祉社会科学部研究科『福祉社会科学』12号。</p> <p>高島拓哉 (2009) 「地域社会レベルのアンペイドワーク論に関する試論—ジェンダー不平等の視点からの相対的分離」 大分大学大学院福祉社会科学部研究科『紀要』12号。</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

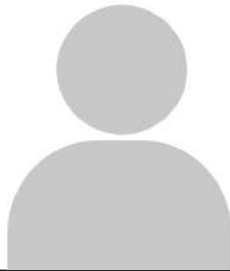

医学部

医学部附属病院



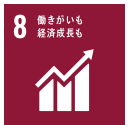

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	経済学部 経営システム学科 (会計情報論)・准教授	
氏名	中村 美保 (Nakamura Miho)	
取得学位	博士 (商学)、一橋大学、2004年3月	
SDGs目標		

研究分野	財務会計・国際会計
研究キーワード	International Financial Reporting Standard (IFRS), 業績報告, 会計制度研究, 実証研究
研究内容	<p>現在はおもに国際会計についての研究を国内外の研究者と共同しながら行っている。</p> <p>現在のわが国の会計制度においては、J-GAAP (日本基準)・IFRS・SEC基準・JMISと企業の連結財務諸表について多くの財務報告基準の選択肢を認めるという状況になっている。またJ-GAAP自体についても、個々の会計基準の検討を前提としたエンドースメント・アプローチによるIFRSとのコンバージェンスが行われている。こうした状況は世界的に見ても複雑で特殊な状態といえる。こうした我が国の会計制度の状況に着目し、財務諸表作成者である企業がどのようなロジックで会計基準選択を行っているのか、そうした選択がステークホルダーにどのような影響を与えているといえるのか、結果として、企業が会計基準をIFRSへ変更するという形でグローバルに統合しようとするのが何を意味するのかということについて、理論的・実証的に検証することである。海外でも本来的なIFRS任意適用をベースに企業の会計基準選択という観点から研究をした文献はあまり多くないため、貴重な研究テーマといえる。近年は、任意適用となっている我が国におけるIFRS適用に関する様々なトピックをテーマに研究している。とくにIFRS適用をめぐる財務諸表作成者 (企業)の動機・適用のあり方、適用後の影響について研究している。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Ozu, C., Nakamura, M., Nagata, K. and Gray S.J. 2018, 'Transitioning to IFRS in Japan: Corporate Perceptions of Costs and Benefits', Australian Accounting Review 28 (1): 4-13.</li> <li>・ University of Valencia の Begona Giner 教授との国際共同研究プロジェクト Working paper: Giner, B., Merello, P., Nakamura, M. and Pardo F. 2020, Implementation of IFRS in Japan: An Analysis of Voluntary Adoption by Listed Firms, SSRN (<a href="https://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=3542995">https://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=3542995</a>).</li> </ul>

所属・職位	経済学部 社会イノベーション学科・准教授	
氏名	仲本 大輔 (Nakamoto Daisuke)	
取得学位	博士 (学術)、横浜国立大学、2006年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	経営戦略論	
研究キーワード	経営戦略、地域ブランド、新製品開発、共創、本業回復	
研究内容	<p>●地域ブランドに関する研究</p> <p>地方創生が叫ばれる今日、日本の各地方自治体が地域活性化の手法の1つとして地域ブランド商品の開発および展開に積極的に取り組んでいる。そこには地方自治体だけでなく、地域企業、農林水産物の生産者等の様々な主体が参画している。また、各地に地域ブランド商品が乱立していると言っても過言ではなく、いかに地域ブランドを確立し持続させていくかが課題となっている。私は経営学、特に経営戦略論の観点から、地域ブランド商品の開発プロセスのあり方、開発戦略、販売戦略について研究をしている。</p> <p>●新型コロナウイルス禍における本業回復に向けての企業の経営戦略</p> <p>2019年12月に中国で発見された新型コロナウイルス (COVID-19) は2022年3月に至るまで様々に変異を続け、世界中の人々の行動が大幅に制限されたままとなっている。そして、様々な業種にわたり、多くの企業が新型コロナウイルスの蔓延前から急激に業績が悪化し、本業としてきた事業の継続が難しくなってきた企業も存在している。その打開策の1つとしては新規事業の開発による多角化があり、本業以外の事業の育成による苦境の脱却があるが、本研究では本業をいかにして再生し、持続させていくのかという点に着目する。研究対象としては鉄道会社、航空会社などの運輸企業を取り上げる。こうした企業の新型コロナウイルス禍における本業に関わる様々な取り組みを検討し、その背後にある経営戦略を研究する。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ (共著) 「地域企業と地方自治体との協働による新製品開発戦略に対する一考察 ―大分市の「大友宗麟時代の南蛮菓子・外国菓子の再現事業」をもとに―」『ビジネス・マネジメント研究』第14号、2018年。</li> <li>・ (共著) 『地域ブランド戦略と雇用創出』白桃書房、2010年。</li> <li>・ 「業界標準の獲得と戦略プロセス ―基幹部品を事例として―」横浜国立大学大学院国際開発研究科博士論文、2006年。</li> <li>・ 2020年4月より刊行が開始された大分合同新聞の別刷「GXビジネス」に毎月1回掲載される「大分大学GXビジネス教室」に2022年3月までに11回、コラムを執筆。</li> <li>・ 2017年度に九州経済産業局が開催した「九州地域ブランド総選挙」に参加した学生グループ2つに対し、ビジネスプランの考案等の際に適宜指導をした。その結果、1グループが「ベストビジュアル賞」と「ベストプレゼン賞」のダブル受賞をすることができた。</li> </ul>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

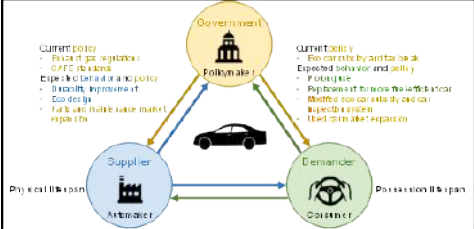
医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	経済学部 社会イノベーション学科・准教授	
氏名	中本 裕哉 (Nakamoto Yuya)	
取得学位	博士 (経済学)、九州大学、2020年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	経済統計、環境経済学
研究キーワード	循環型社会、産業エコロジー
研究内容	<p>○製品寿命に注目した自動車のライフサイクル分析 (業績 1)</p> <p>自動車の寿命には製造から廃棄までの物理的寿命と、購入から買い替えまでの経済的寿命がある。これらの寿命を組み合わせ、自動車のライフサイクルCO<sub>2</sub>排出量を推計するモデルを開発した。</p>  <p>○自動車のグローバルカーボンフットプリント分析 (業績 2,3)</p> <p>自動車のストック・フローモデルと産業連関分析を組み合わせることで自動車のライフサイクルを通して誘発されるカーボンフットプリントを推計した。また、自動車の寿命の変化が自動車由来のカーボンフットプリントに与える影響を推計した。</p> <p>○自動車の買い替え行動分析 (業績 4)</p> <p>ランダム効用理論に基づく離散選択モデルを用いることで、通時的な効用水準を最大化する消費者行動に基づく買い替え分析を行った。結果から、車検制度の修正を通じた自動車の経済的寿命の延長が排出削減に寄与することを明らかにした。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>Nakamoto, Y. and Kagawa, S. (2021) A generalized framework for analyzing car lifetime effects on stock, flow, and carbon footprint, <i>Journal of Industrial Ecology</i>, 1-15. <a href="https://doi.org/10.1111/jiec.13190">https://doi.org/10.1111/jiec.13190</a></li> <li>Nakamoto, Y. (2020) Spatial structural decomposition analysis with a focus on product lifetime, <i>Economic Systems Research</i>; 32: 239-261.</li> <li>Nakamoto, Y., Nishijima, D. and Kagawa, S. (2019) The role of vehicle lifetime extensions of countries on global CO<sub>2</sub> emissions, <i>Journal of Cleaner Production</i>; 207: 1040-1046.</li> <li>Nakamoto, Y. and Kagawa, S. (2018) Role of vehicle inspection policy in climate mitigation: The case of Japan, <i>Journal of Environmental Management</i>; 224: 87-96.</li> <li>Nakamoto, Y. (2017) CO<sub>2</sub> reduction potentials through the market expansion and lifetime extension of used cars, <i>Journal of Economic Structures</i>; 6, 17, 1-14.</li> </ol>

所属・職位	経済学部 経済学科（経済政策論）・准教授	
氏名	林 勇貴 (Hayashi Yuki)	
取得学位	博士（経済学）、関西学院大学、2016年3月	
SDGs目標	11 住み続けられるまちづくりを 	

研究分野	財政学
研究キーワード	博物館、固定資産税、公共施設

研究内容	<p>● 地方公共財の便益評価に関する理論的・実証的研究</p> <p>地方自治体は住民が利用することで得られる直接的な便益と第三者や社会に与える間接的な便益（外部性）の両方を持つ準公共財を供給しているが、便益に関する研究蓄積が国内外とも少ないことから、効率性や公平性に関するエビデンスに基づかない供給がなされている。こうした実態から、本研究は博物館などの公共施設を取り上げ、理論と実証の両面から便益評価に関する研究を進めている。</p> <p>● 自治体のマネジメント改革に関する研究</p> <p>地方自治法で定められた「最少の経費で最大の効果」をあげるために求められる自治体のマネジメント改革に関して以下の研究を行っている。第一の研究として、上下水道事業や公営バス事業の経営効率を検証し、第二の研究として、民間企業で活用されているバランスト・スコアカードなどを地方自治体の政策形成プロセスに応用する研究を進めている。</p> <p>● 固定資産税に関する研究</p> <p>公共サービスの便益は地価に反映されるため、土地にかかる固定資産税は応益原則を満たすとされていることから、第一の研究では、固定資産税が実際に応益性を満たしているのかを検証している。第二の研究では、固定資産税や地方公共財の存在が土地利用や都市の人口分布といった都市空間に与える影響を検証している。</p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>● 主な著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年『地域政策の経済学』、日本評論社。</li> <li>2019年『文化経済学』、有斐閣。</li> <li>2019年『基礎コース 財政学』、新世社。</li> <li>2021年『新・地方財政』、有斐閣。</li> <li>2021年『地域データ分析入門ーすぐに役立つEBPM実践ガイドブックー』</li> </ol> <p>● 主な委員</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>文化庁「文化行政調査研究」審査委員会 技術審査専門員（2020年、2021年）</li> <li>文化庁「文化に関する世論調査」審査委員会 技術審査専門員（2020年、2021年）</li> <li>大分市上下水道事業経営評価委員会 委員長（2020年7月ー現在）</li> <li>大分市入札監視委員会 委員（2021年7月ー現在）</li> </ol> <p>● 受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>納税協会連合会「税に関する論文」専門家の部・優秀賞「応益原則から見た固定資産税の評価ーヘドニック・アプローチを用いた実証的研究ー」</li> </ol>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

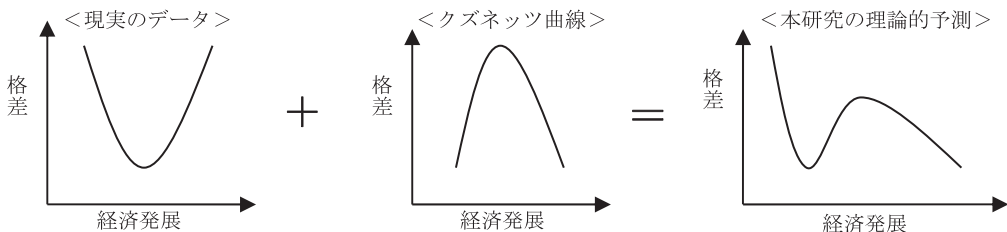


所属・職位	経済学部 経営システム学科 (経営基礎論)・准教授	
氏名	松岡 輝美 (Matsuoka Terumi)	
取得学位	経営学修士、西南学院大学、1985年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	経営情報論 ビジネスモデル論 経営戦略論
研究キーワード	デジタルトランスフォーメーション ビジネスモデル 事業革新
研究内容	<p>●テレワークの戦略的活用          オフィスコストや通勤費の削減というコストセンターな発想からではなく、プロフィットセンターに発想を転換して、企業の境界を超えた知の活用や、場所や時間にとらわれずに、ネットワークを活用して、知的生産性を向上させられる環境で働き、ワーカーの生産性の向上と生活上の満足度の向上を同時に実現可能にするためのテレワークの実装に関する方策の提言をしている。(著書1・著書6)</p> <p>時間より成果で査定されるのを好む優秀なワーカーを雇用したり、環境負荷削減の用途のみならず、地方への移住で地域活性化にも貢献が期待されるワークスタイルで、企業の中でどういう仕組みやルールを構築することにより実現が可能かを分析している。</p> <p>●企業のデジタルトランスフォーメーションに関する分析          ICTを活用して企業のビジネスモデルをいかに再構築し、事業の革新を実現するかのモデルの分析と、現実的な方策の提案をおこなっている。(著書2・著書5)。</p> <p>●価値の相互連結と共創についての分析          企業の境界を超えて、リアルとバーチャルの壁、また企業と顧客の壁を超えて価値の相互連結と共創によりビジネスモデルをいかに変革するかについての分析と方法論について分析を行っている。(著書3・著書4)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 1998(共編著) 『実践SOHO・テレワーク』日科技連出版社</li> <li>2. 1999(共著) 『21世紀の経営戦略—未来企業のビジネスモデル—』新評論</li> <li>3. 2000(分担執筆) 『スーパーエージェント—相互浸透の組織モデル』文眞堂</li> <li>4. 2000(共著) 『協創経営』同友館</li> <li>5. 2000(分担執筆) 『デジタルストラテジー』中央経済社</li> <li>6. 2001(共編著) 『SOHOベンチャーの戦略モデル』中央経済社</li> </ol>

所属・職位	経済学部 経済学科（基礎経済論）・准教授	
氏名	村山 悠 (Murayama Yu)	
取得学位	修士（経済学）、神戸大学、2007年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	経済理論
研究キーワード	教育政策, 所得格差, 世代間階層移動

研究内容	<p>①「公的教育支出を子どもの能力に応じて配分する政策が世代間階層移動に与える影響」</p> <p>Houle (2019)によると、世代間階層移動（親子間の経済的地位の変化）が少ない国ほど、政治的不安定を経験する傾向にある。したがって、世代間階層移動を促す政策を考えるのが重要となる。本研究では、子どもの能力分布に着目し、能力間で公的教育支出をどのように配分すれば世代間階層移動を促すことができるかを分析している。</p> <p>②「人的資本格差の長期的変化」</p> <p>Kuznets (1955)は、経済が成長するにつれて、所得格差は拡大から縮小に転じるといういわゆる逆U字型のクズネッツ曲線を提示した。しかし、実際のアメリカの所得格差の長期的推移を見ると、縮小から拡大、つまりU字型の変化を示しているため、クズネッツ曲線は現実のデータとは必ずしも一致していない。そこで、本研究では、生存のために必要な最低限の消費をモデル分析に取り入れることにより、人的資本格差がU字型の変化をする可能性があることを示す。</p> <div style="text-align: center;">  <p>格差</p> <p>経済発展</p> </div>
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>①“CASH TRANSFERS, INTERGENERATIONAL MOBILITY, AND THE PROCESS OF DEVELOPMENT”, Yu Murayama, <i>Bulletin of Economic Research</i>, 第71巻第3号, pp.209-218, 2019年.</p> <p>②“Human Capital Inequality with Subsistence Consumption”, Yu Murayama, <i>Journal of the Knowledge Economy</i>. (2022年度内掲載予定)</p> <p>③平成25年度から平成26年度まで、科研費（若手研究B）「教育補助政策が世代間階層移動、所得格差、そして経済成長に与える影響」の受領</p> <p>④令和2年度から令和3年度まで、科研費（若手研究）「公的教育支出の配分が世代間階層移動と経済成長に与える影響に関する理論的研究」の受領</p>
---------------	--

所属・職位	経済学部 地域システム学科（地域情報文化論）・准教授	
氏名	矢野 英子 (Yano Hideko)	
取得学位	教育学修士 (MEd TESOL), Leeds University, 2001年 11月	
SDGs目標	  	

**研究分野** 英語教育学, 第2言語習得, 文化財保存科学

**研究キーワード** Oracy, 話すこと, 言語技術, 英語教育, 自尊心, 文化財保存, 天然藍, 久留米餅, 八女手漉和紙

**研究内容** 1. 「イギリスのOracy教育は子どもの「話すためのスキル」をどのように育てるのか」：英語が使えるようになる日本人を育てるためには、英語の知識のインプットのみでなく、さらに根本的な母国語での「自分の表現したいことを話す」教育が必要であると考え。子ども達のおかれている現代社会は価値観や生活様式が多様化し、また、少子化・情報の電子化が進む中、人間関係の希薄化が著しい。子ども達は母語である日本語であってもことばでコミュニケーションをとることが苦手で、相手を理解する能力の低下が懸念される。コロナ禍の中、相手の顔を見ながら話す機会が激減した環境は、子ども達にとってさらに厳しい。コミュニケーションに必要なのは、「伝えたい内容」、「伝えたい動機」「自分には伝える価値があるという自尊心」、そして、それらを実現させるには「それをどのように伝えるか」という言語に関わる技術が必要であると考え（図1）。あらゆる背景を持つ子どもたちに「自分の意見を上手に述べる」「意見を一緒に作り上げるための建設的な話し合い」ができる力をつけようとするイギリスの「Oracy教育」から学ぶものが大きいと注目し、研究を続けている。（JSPS科研 JP18K92541）



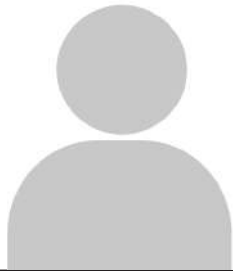

図1 コミュニケーションを支えるもの



2. 「文化財保存：地域と連携して伝統工芸を守り、伝える」：地域の伝統工芸品を文化財の保存に生かすことを核に置き、文系理系、異分野の研究者と伝統工芸の制作者や農業従事者が研究協力者となり研究活動プロジェクトを続け、その一員として活動してきた\*。久留米餅、天然藍染、八女手漉和紙という筑後地域の伝統工芸の原材料の性質や役割を探り、また周縁の農業や製造業、小売業などの他種産業や、学校教育・研究、社会教育へと、地域から圏外、さらに国外へと、「ソト」へとつなげていく学術活動を「ファシリテーター」という役割として捉えている。その中で、伝統文化の一要素としての天然藍をはじめとする天然染料について、歴史・民俗学的な側面や、製品化するにあたって、その過程と環境、地域産業との影響や可能性を探りたい。\*久留米大学比較文化研究所文化財保存科学研究部会特別研究員

**研究業績・アピールポイント**

- ・「イギリスにおける Oracy (オラシー) 教育の現状 (2) — 「話すことで学ぶ・話すことを学ぶ」理論と実践」日本教育方法学会第57回大会自由研究発表, 2021年
- ・「イギリスの初等教育の流れにおける「話すこと」の位置付け—oracyを中心として—」, 矢野英子, 『久留米大学文学部紀要国際文化学科編』第32・33合併号, pp.13-29, 2017年
- ・「学際グループとしての文化財保存科学研究部会が果たした役割—地域の伝統工芸をソトとつなぐファシリテーターとして—」『大分大学経済論集』73-3・4合併号 pp.1-42, 2022年
- ・「SPINDIGO代表Philip John博士に「天然藍」について聞く—文化財保存科学に生かす伝統工芸, 天然藍の展望—」『久留米大学比較文化研究所紀要』第49号, pp.21-38, 2015年

所属・職位	経済学部 地域システム学科（地域経営論）・准教授	
氏名	山浦 陽一 (Yamaura Yoichi)	
取得学位	博士（農学）、東京大学、2009年1月	
SDGs目標		
研究分野	地域運営論	
研究キーワード	地域運営組織（RMO）	
研究内容	地域運営組織の設立・運営手法、RMOと行政の協働、地域づくりのモチベーションなど	
研究業績・アピールポイント	『地域人材育成を育てる手法』（農文協、2022年、共編著） 『地域福祉における地域運営組織との連携』（JCA研究ブックレット、29号、2022年） 『中山間地域ハンドブック』（農文協、2022年、共著）	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

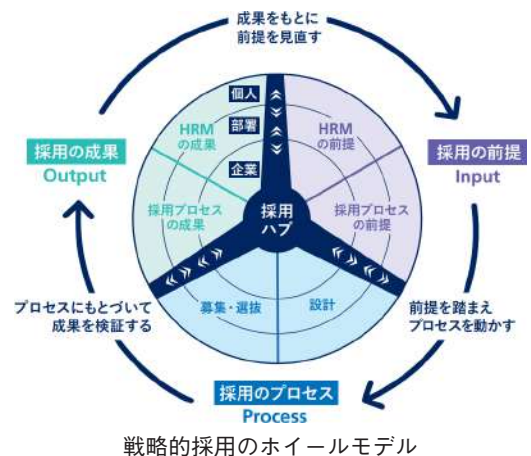
理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

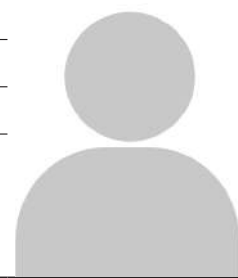
所属・職位	経済学部 経営システム学科 (経営行動論)・講師	
氏名	碓 邦生 (Ikari Kunio)	
取得学位	修士 (経営学)、神戸大学、2012年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	人的資源管理論、組織行動論、産業組織心理学
研究キーワード	戦略的採用、人材育成、タレントマネジメント、キャリア、リーダーシップ、創造性
研究内容	<p>・戦略的採用研究 事業戦略への寄与を軸とした採用活動の全体像を明らかにした戦略的採用のホイールモデルをベースとして、採用活動の各工程の実証研究を行う。例：採用チームにおける共通メンタルモデルの検証</p> <p>・アフターミドルのキャリア開発研究 40代後半から50代前半のキャリア中期からキャリア後期へのトランジションの促進要因、阻害要因を明らかにすることで、人生100年時代の「持続可能なキャリア」の実現に貢献する。</p> <p>・テレワークの実態調査 COVID-19下において、テレワークが上司部下の関係や部下の職務への取り組み姿勢に及ぼす影響について探索的に検討する。</p> <p>・感性デザインマネジメント理論の妥当性検証 人間工学の「感性工学」理論とデザインマネジメント「意味のイノベーション」理論を基に、新規事業が顧客の感性を刺激することでイノベーションを志向する新たな理論を構築し、産業組織心理学の手法を用いて妥当性を検証する。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Kunio Ikari (Oct. 2019) A commonality of business idea productions: A co-occurrence network analysis, 4D Conference, Osaka, Japan.</li> <li>2. Kunio Ikari (Feb. 2019) Bridging the gap between creativity theory and creativity training programs: the three-factor model for developing individual creativity, 16th International Conference on Economics, Business, and Social Sciences, Hong Kong.</li> <li>3. Kunio Ikari, Akie Nakamura, and Katsuaki Tanaka (2017) Consistency in Strategic Recruitment. Considerations for the hub function to ensure (戦略的採用における一貫性を確保するためのハブ機能の考察), Works Review, 12, 20-33.</li> <li>4. Kunio Ikari (2016) The Impact of Sharing Talent Requirements on Selection Indicators and Recruitment Outcomes (人材要件の共有が選抜指標と採用成果に及ぼす影響), Works Review, 11, 68-81.</li> <li>5. Kunio Ikari (2014) The relationship between individual and group creative behaviors, The International Journal of Accounting and Business Society, 22 (1), 113 - 121.</li> </ol>





所属・職位	経済学部 経営システム学科（会計情報論）・講師
氏名	越智 学 (Ochi Manabu)
取得学位	修士（経営学）、法政大学、2004年3月 修士（商学）、一橋大学、2008年3月
SDGs目標	



研究分野	会計学
研究キーワード	継続企業 / ゴーイング・コンサーン / 財務困窮企業 / 監査労力 / 利益調整 / 価値関連性 / 会計保守主義 / 会計情報の質
研究内容	<p>●継続企業情報の開示が会計情報の質に与える影響</p> <p>本研究では、経営者および監査人が継続企業問題の存在を評価し、継続企業情報を開示することの意義を、会計情報の質という観点から実証的に分析した。主たる分析結果として、第1に継続企業情報の開示に伴い、より保守的な会計処理が選択され、会計的利益調整が抑制されることが示唆された。ただし、抑制の程度は、監査の品質によって異なる可能性がある。第2に、継続企業情報は、継続企業を前提とした財務諸表の役割が限定的であることを伝達しており、投資家の経済的意思決定において有用な情報として機能していることが示唆された。</p> <p>本研究の成果は、現行制度に対していくつかの重要な示唆を含んでいる。増加型の会計的利益調整に対するインセンティブが財務困窮企業の経営者に存在し、継続企業情報がネガティブな情報であることに鑑みれば、適正な会計処理と情報開示には監査人の指導性が重要となる。しかし、継続企業問題が存在する企業の受け皿となっている中小監査事務所においては、監査上、必ずしも十分な対応が図られていない可能性がある。したがって、中小監査事務所における監査品質を向上させるとともに、継続企業問題が存在する企業と大手監査事務所の契約解除問題についても検討する必要があると考えられる。</p> <p>また、継続企業問題が存在する企業において、継続企業を前提とした会計情報の有用性が限定的であることは、財務報告の観点からは補足的ないしは追加的な情報開示、監査報告の観点からは無限定適正意見を前提とした追記情報（強調事項）のあり方に議論の余地を残している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2010年、「継続企業情報と将来利益に関する投資家の期待形成」『一橋商学論叢』第5巻第2号。</li> <li>2012年、「継続企業情報の開示企業における会計行動と保守主義の関連性」伊藤邦雄編『企業会計研究のダイナミズム』。</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等




所属・職位	経済学部 地域システム学科 (地域行政論)・講師	
氏名	金 康浩 (Kim Kangho)	
取得学位	修士 (法学)、早稲田大学、2017年3月	
SDGs目標		

研究分野	法学
研究キーワード	会社法、商法
研究内容	<p>会社法に関する問題のうち、株主による企業統治(経営者に対する監督の仕組み)への関与のあり方を中心に研究しています。</p> <p>株式が多くの株主によって広く分散的に保有されている株式会社(上場会社)には、組織的に株式会社への投資を行う機関投資家等の大きな持株比率を占める大株主のほかに、個人として会社に投資する多くの零細な小株主が存在しています。このような株式保有構造の下で、広く小株主に訴訟等を通じた企業統治への関与の機会を保障すると、会社関係者全体に負担(株主による権利の濫用の危険、および、会社が株主による訴訟に応じる費用等の増加)が生じます。他方で、小株主が企業統治に関与する機会を排除すると、経営者に対する監督の効果が損なわれるといった問題が生じます。</p> <p>このような問題について、日本の会社法の母法の1つであるアメリカ法には、大株主による企業統治への関与を促進しながらも、小株主による企業統治への関与の機会を保障する制度がおかれています。しかし、そのような制度がどのような沿革にもとづいて成立したのか、実際に大株主および小株主によってどのように利用されているのか、また、その効果と問題としてどのようなものが生じているのかという点については従来十分に検討されてきませんでした。</p> <p>そこで、そのようなアメリカ法の沿革と実態、および、日本法の状況とを比較しながら、大株主および小株主による企業統治への関与のあり方を研究しています。具体的には、アメリカの州会社法および連邦証券諸法を中心にその内容、沿革および実態を研究して、日本法との共通点および相違点を明らかにすることを目的にしています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>金康浩「株主の権利行使における持株要件の形成および展開(1)ーアメリカ会社法における株主閲覧権制度および株主代表訴訟制度ならびにSEC規則における株主提案権制度を対象としてー」早稲田法学会誌 70巻2号(2020)</p> <p>金康浩「株主の権利行使における持株要件の形成および展開(2・完)ーアメリカ会社法における株主閲覧権制度および株主代表訴訟制度ならびにSEC規則における株主提案権制度を対象としてー」早稲田法学会誌 71巻1号(2020)</p> <p>金康浩「不実開示責任の追及における機関投資家および個人投資家の役割(1)ーアメリカ私的証券訴訟改革法における主任原告条項(Lead Plaintiff Provisions)の構造ー」早稲田法学会誌 71巻2号(2021)</p> <p>金康浩「不実開示責任の追及における機関投資家および個人投資家の役割(2・完)ーアメリカ私的証券訴訟改革法における主任原告条項(Lead Plaintiff Provisions)の構造ー」早稲田法学会誌 72巻1号(2021)</p>

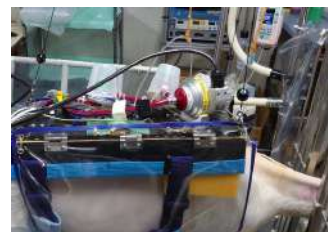


# 医学部





---

所属・職位	医学部医学科放射線医学講座・教授	
氏名	浅山 良樹 (Asayama Yoshiki)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2002年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	放射線医学	
研究キーワード	画像診断、低侵襲治療	
研究内容	<p>①病理学的情報に基づいた画像解析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・肝細胞癌の脱分化過程におけるvascularityの変化を病理学的、画像的に解析した。腫瘍のvascularityは高分化から中分化までは増殖活性と正比例していたが、中分化から低分化にかけては反比例していた。低分化では嫌気性代謝が中心になっていると考えられた (論文1)。</li> </ul> <p>②イメージングバイオマーカーとしての放射線画像の役割探求</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・腫瘍形成型肝内胆管癌の予後と造影CT遅延相の増強の程度との関連を検証した。造影遅延相の所見で病変の3分の2以上が高吸収となる群はscirrhous typeに一致し、多変量解析では同群は独立した予後不良因子であった (論文2)。肝外胆管癌でも同様の結果であった (論文3)。</li> </ul> <p>③新しい画像診断法の開発と臨床応用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・MRIの新しい分子イメージングの一つであるAPTイメージングで子宮体癌のグレードを予測可能であることを報告した (文献4)。</li> </ul> <p>④新しい低侵襲治療法の手技の導入と工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・肝細胞癌に対する球状塞栓物質 (ビーズ) を用いた経動脈的化学塞栓療法 (DEB-TACE) の治療効果予測因子を解析した。治療効果不良となる因子は小さな腫瘍サイズ (2cm未満) および病変の局在 (segment 4/1) であった。適切な症例選択の重要性が示唆された (文献5)。</li> <li>・腎癌凍結療法の術後腎機能予測モデルを開発し、慢性腎障害ステージの増悪の予測正診率は72%であり本システムは腎機能低下の予測に有用であることが示された (文献6)。</li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<p>これまで放射線画像解析や画像バイオマーカーの創出に取り組みその成果を報告してきた。また凍結療法など新たな低侵襲治療法を積極的に導入し、その効果や合併症を報告した。</p> <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2008年、Arterial blood supply of hepatocellular carcinoma and histologic grading: radiologic-pathologic correlation. AJR Am J Roentgenol.</li> <li>2006年、Delayed-phase dynamic CT enhancement as a prognostic factor for mass-forming intrahepatic cholangiocarcinoma. Radiology.</li> <li>2017年、Prognostic significance of contrast-enhanced CT attenuation value in extrahepatic cholangiocarcinoma. Eur Radiol.</li> <li>2018年、Proton Transfer MR Imaging of Endometrioid Endometrial Adenocarcinoma: Association with Histologic Grade. Radiology.</li> <li>2017年、Predictors of therapeutic effect of transarterial chemoembolization using drug-eluting beads for hepatocellular carcinoma. Clin Radiol.</li> <li>2019年、Usefulness of a Pretreatment CT-Based Modified RENAL Nephrometry Score in Predicting Renal Function After Cryotherapy for T1a Renal Mass. Cardiovasc Intervent Radiol.</li> </ol>	

所属・職位	医学部附属臨床医工学センター・教授	
氏名	穴井 博文 (Anai Hirofumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	心臓血管外科学、人工臓器学	
研究キーワード	補助循環、人工心臓、産学官連携、医工連携	
研究内容	<p>●人工心臓開発の基礎研究</p> <p>ターボポンプを用いた人工心臓開発における基礎研究を行った。特に溶血の軽減に関して、比速度（設計回転数）の異なる軸流式血液ポンプを試作し、溶血試験で評価を行った。工学的手法に基づく比速度を逸脱しても低回転で設計する方が溶血が軽度であることを明らかにした。また10,000 rpm以下で設計すれば溶血は問題にならないことを示唆した（論文1.）。続けて人工心臓用の斜流式血液ポンプの試作を行った。引き続き斜流式血液ポンプの開発を行った。</p> <p>●体外循環用小型斜流式血液ポンプの開発</p> <p>JMS社（広島市）との共同研究で人工心肺に用いる体外循環用斜流式血液ポンプの開発を行った。自らが研究してきた斜流血液ポンプのアイデアをもとに1996年から共同研究を開始し、2002年にMixflow®を市販、臨床使用に至った。</p> <p>●斜流式血液ポンプの長期使用へ向けての研究</p> <p>JMS社と開発したMixflowをECMOやLVADなどの補助循環用血液ポンプとして使用するための改良と実証研究を行っている。インペラ、ケーシングの設計変更を行い、成山羊を用いた慢性動物実験における評価を行っている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>機械的補助循環、人工心臓開発の研究をもとに開発したJMS Mixflow®を上市するに至った。2012年からは、産学官連携による医療機器開発のための企業研究者支援事業に取り組み、東九州メディカルバレー構想事業、および「地域に密着した医療現場の開放と医療機器開発情報ネットワーク拠点形成」事業をAMEDの支援を得て進めている。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1992年 Relationship between pump speed design and hemolysis in an axial flow blood pump. Anai H, Wakisaka Y, Nakatani T, Taenaka Y, Takano H, Hadama T Artificial Organs, 20: 564-567</li> <li>1998年 ターボ式血液ポンプ3種の溶血特性の比較検討. 穴井博文, 葉玉哲生, 荒木賢二, 他人工臓器 27 (1): 59-62</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1995年 第33回日本人工臓器学会大会「論文賞」受賞</li> <li>1996年 第34回日本人工臓器学会大会「JSAO - grant」受賞</li> <li>2003年 第31回人工心臓と補助循環懇話会「2003年最優秀人工心臓賞」受賞</li> </ol>	





所属・職位	医学部医学科救急医学講座・教授	
氏名	安部 隆三 (Abe Ryuzo)	
取得学位	博士 (医学)、千葉大学、2006年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	救急医学, 集中治療医学
研究キーワード	敗血症, 心肺蘇生, 臓器不全, 血液浄化法, 体外式膜型人工肺 (ECMO), 人工肝補助療法
研究内容	<p>1) <b>【敗血症の病態と治療】</b> 敗血症の重症化における各種サイトカイン動態の関与, サイトカイン関連遺伝子多型の転帰への影響, 血中サイトカイン吸着除去の臨床効果に関する研究を行っている.</p> <p>2) <b>【心肺蘇生と蘇生後治療】</b> 心拍再開後の蘇生後脳症の転帰を予測するバイオマーカーに関する研究, 低体温療法による心停止後症候群の制御に関する研究, 体外循環を用いた心肺蘇生 (Extracorporeal cardiopulmonary resuscitation: ECPR) に関する臨床研究, 院内急変対応 (Rapid Response System) 活動データを用いた臨床研究を行い, 研究代表者として科学研究費を取得してECPRの研究を進めている.</p> <p>3) <b>【ECMO (Extracorporeal membrane oxygenation, 体外式膜型人工肺)】</b> 新型コロナウイルスパンデミック以前から基礎実験・臨床研究を行い, ECPRに関する臨床研究, ECMO回路構成に関する基礎実験, ECMOチーム活動の臨床効果について報告している. また日本ECMOnetの立ち上げに参加し, COVID-19に対するECMO治療や日本ECMOnetの活動に関して報告している.</p> <p>4) <b>【急性肝不全に対する人工肝補助療法】</b> 血液浄化法を用いた人工肝補助療法によって肝性昏睡からの意識覚醒が得られることを報告し, 現在, 厚生労働科研「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究班 (劇症肝炎分科会)」にて更に研究を進めている.</p> <p>5) <b>【病院前救急医療】</b> 日本医療研究開発機構 (AMED) 研究課題「救急の現場にて傷病者が早く正しい医療を受療できる技術開発プロジェクト」「救急医療予測アルゴリズム研究開発」に研究開発担当者として参加, 新たな救急システム開発を進めている.</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Higashi A, et al. Shortening of low-flow duration over time was associated with improved outcomes of extracorporeal cardiopulmonary resuscitation in in-hospital cardiac arrest. <i>J Intensive Care</i>. 2020; 8:39</li> <li>● Japan ECMOnet for COVID-19. Nationwide system to centralize decisions around ECMO use for severe COVID-19 pneumonia in Japan (Special Correspondence). <i>J Intensive Care</i>. 2020; 8:29.</li> <li>● Fujiwara K, et al. High recovery rate of consciousness by high-volume filtrate hemodiafiltration for fulminant hepatitis. <i>Hepatol Res</i>. 2019; 49: 224-231</li> <li>● Hayashi Y, et al. A prehospital diagnostic algorithm for strokes using machine learning: a prospective observational study. <i>Sci Rep</i>. 2021; 11:20519.</li> <li>● 基盤研究(C)「ECPR症例における神経学的予後予測バイオマーカーの網羅的探索に関する研究」2020-2022年度</li> <li>● 厚生労働科学研究費補助金「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究」班, 2020-2022年度</li> <li>● 日本医療研究開発機構(AMED) (先進的医療機器・システム等技術開発事業基盤技術開発プロジェクト)「救急医療予測アルゴリズム研究開発」, 2019-2022年</li> </ul>

所属・職位	医学部医学科薬理学講座・教授	
氏名	石崎 敏理 (Ishizaki Toshimasa)	
取得学位	博士(医学)、京都大学、1998年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	薬理学・細胞生物学	
研究キーワード	アクチン細胞骨格・創薬・組織線維化・腫瘍生物	
研究内容	<p>○アクチン細胞骨格を調整するRhoシグナリングの生体での機能          アクチンは哺乳類細胞で最も多く発現しており、個体における生体恒常性にも重要な働きをしていることが報告されている。細胞外からの様々な刺激に応答して、アクチン単量体は重合し線維を形成する(アクチン細胞骨格再編成)。このアクチン線維形成にはRho family GTPaseが寄与していることが明らかになっている。その中でもRhoは、下流標的蛋白質(ROCK, mDia等)を介し、アクチン線維形成の形成・再編成に主要な働きをしている。現在は、皮膚・心臓・肺・腎臓等の各組織において、Rho標的蛋白質を欠損させ、生体におけるRho標的蛋白質の機能解析を通じ、アクチン細胞骨格再編成の果たす生理的・病態生理的な役割を解析している。</p> <p>○創薬          特発性肺線維症とは、肺泡に“傷”ができ、その修復のためにコラーゲン等が増加することで間質が肥厚し、その結果呼吸障害を引き起こす根本的治療法のない疾患である(特発性肺線維症は、「特発性間質性肺炎」の一種で、国の指定難病に指定)。本疾患の治療を目的に、治療標的分子の同定および治療薬候補化合物の探索を実施している。</p> <p>○新たな創薬プラットフォームの構築          これまでは低分子化合物が「治療薬」の大半を占めていたが、昨今は中分子薬や抗体医薬の開発が進み、現在では様々なモダリティのものが治療に用いられている。それぞれのモダリティは、長所・短所を持ち合わせており、それらを補いながら新規性が高く、効果的にかつ安価に治療薬の開発を目指し、そのプラットフォームの構築を実施している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Abe A., et al. Disruption of Actin Dynamics Regulated by Rho Effector mDia1 Attenuates Pressure Overload-Induced Cardiac Hypertrophic Responses and Exacerbates Dysfunction. <i>Cardiovasc Res.</i> Jul 9; cvaa206 (2020)</li> <li>2. Thumkeo D, et.al. mDia1/3-dependent actin polymerization spatiotemporally controls LAT phosphorylation by Zap70 at the immune synapse. <i>Sci Adv.</i> 6(1): eaay2432. (2020)</li> <li>3. Yamaoka M, et al. PI3K regulates endocytosis after insulin secretion by mediating signaling crosstalk between Arf6 and Rab27a. <i>J Cell Sci.</i> 129: 637-649. (2016)</li> <li>4. Mizuno H, et al. Rotational movement of the formin mDia1 along the double helical strand of an actin filament. <i>Science.</i> 331:80-83. (2011)</li> <li>5. Rose R, et al. Structural and mechanistic insights into the interaction between Rho and mammalian Dia. <i>Nature.</i> 435:513-518. (2005)</li> <li>6. Ishizaki T, et al. Coordination of microtubules and the actin cytoskeleton by the Rho effector mDia1. <i>Nat Cell Biol.</i> 3: 8-14. (2001)</li> <li>7. Uehata M, Ishizaki T, et al. Calcium sensitization of smooth muscle mediated by a Rho-associated protein kinase in hypertension. <i>Nature</i> 389: 990-994. (1997).</li> </ol>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部





医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座地域看護学・教授	
氏名	井手 知恵子 (Ide Chieko)	
取得学位	博士 (看護学)、千葉大学、1997年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	看護学 (地域看護学・公衆衛生看護学・家族看護学)
研究キーワード	地域看護活動、保健師活動方法と評価、人材育成
研究内容	<p>●<u>地域を単位とした看護活動方法に関する研究</u> 行政機関に働く保健師の活動から地域看護活動の方法や体制の特徴を検討し、地域を単位とした看護活動方法の構造について追究している。(論文3.)</p> <p>●<u>地域保健・福祉システムにおいて人々の健康を守る看護の機能や役割に関する研究</u> 行政機関等で活躍する保健師とともに、行政における看護の実践活動を分析・評価し、看護専門職の機能の見える化をはかり、実践知を構築している。(論文2.5.)</p> <p>●<u>保健師の人材育成に関する研究</u> 保健師の実務・行政能力の開発過程に注目し、人材育成としてのジョブローテーションを研究し、とくに行政組織における異動や役割分担の変更にもなっている業務の引継ぎに関して人材育成方法のツールとしてのあり方を検討している。(論文1.)</p> <p>●<u>地域看護学の教育内容と方法の練成</u> 看護基礎教育における地域看護学・家族看護学の教授方法とその効果について検討し、教育方法の開発を続けている。(論文4.)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>地域を単位とした看護活動の実際からの実践知を看護基礎教育活動に反映し、逆に教育活動で洗練した知を実践に反映することを目指して日々研鑽しています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2019年、行政組織における保健師業務の引継ぎに関する研究、科学研究費助成事業 平成28～30年度・挑戦的萌芽研究 報告書</li> <li>2016年、行政保健師が行う医療依存度の高い乳児への支援チームづくり.第46回日本看護学会 論文集—ヘルス・モーション—, 200-203.</li> <li>2009年、中核市の保健師活動における地区活動と業務体制に関する研究、平成18～20年度 科学研究費補助金・基盤研究 (C) 報告書</li> <li>2009年、大学院修士課程における地域看護学領域教育、日本地域看護学会誌、12(1)22-23</li> <li>2007年、老人保健法による集団健康診査場面での保健師の行動に関する研究、日本地域看護学会誌、10(1) 72-77</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2000年、生活習慣に関する援助の基本、地域看護学講座成人地域看護活動.第3章、医学書院</li> <li>1997年、保健指導技術 助産学講座6:助産診断・技術学II 医学書院</li> </ol>

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・教授	
氏名	井上 亮 (Inoue Ryo)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1999年12月	
SDGs目標	  	

研究分野	一次性頭痛、高齢者せん妄
研究キーワード	慢性頭痛、片頭痛、薬物乱用頭痛、せん妄、脳血流、睡眠障害
研究内容	<p>・慢性連日性頭痛／薬物乱用頭痛の実態調査および発症要因の検討</p> <p>頭痛や緊張型頭痛があり、これらは有病率が高く、日常生活や仕事に支障をきたす疾患である。しかしながら、適切な自己管理がなされていない場合が多く、職場環境や日常生活環境等により容易に慢性化へつながりやすく、さらに、薬物乱用頭痛に至った場合には根本的な頭痛の対応がなされないままいたずらに時間が経過し、その間辛い状況を我慢しながら日々を送るといった状況に陥ってしまう。薬物乱用頭痛を主とする慢性連日性頭痛の実態を把握し、そのような状況にいたった因子を検討することは今後の快適な就業へつながるのではないかと考える。また、小児、思春期においても慢性連日頭痛は不登校へつながる重大な問題である。昨今、スマホの使用方による睡眠障害から不登校となる事例もあり、睡眠障害の実態やそれに伴う自律神経障害の把握も必要であろう。</p> <p>・脳血流モニタリングによる高齢者夜間せん妄の看護に関する検討</p> <p>脳血管障害を有する高齢者を対象とし、これまでの急性期管理に加え、NIRS（近赤外線分光法）装置の装着下に脳血流モニタリングを行う。NIRSモニタリング中、看護ケアやバイタルサインの変化に伴う脳血流変動有無の確認、せん妄発症時脳血流変化の確認、せん妄に対するケア実施後の症状変化および脳血流変化の把握等を行い、せん妄予防および早期発見につながるNIRS所見を検討する。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>・時間生物学に基づく急性期脳卒中患者の概日リズム再獲得に向けた看護の挑戦 (科学研究費補助金、R3～R7年度)</p> <p>・脳血流モニタリングを用いた高齢者脳血管障害患者に対するせん妄マネジメントの開発 (科学研究費補助金 H25年度～27年度)</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	医学部医学科消化器・小児外科学講座・教授	
氏名	猪股 雅史 (Inomata Masafumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	消化器外科学、内視鏡外科学、腫瘍生物学、AIデータサイエンス
研究キーワード	低侵襲手術、人工知能、産学連携、ビッグデータ、癌治療
研究内容	<p>●<b>内視鏡手術における人工知能を活用した腫瘍局をおよび解剖学的ランドマークの術中リアルタイム指示システム開発 (科学研究費 基盤B：研究代表者)</b></p> <p>内視鏡手術動画のビッグデータを用いた術中の解剖学的ランドマーク指示機能と特殊光を用いた腫瘍局在の指示機能を併せ持つ、人工知能活用の次世代内視鏡機器システムの開発</p> <p>●<b>人工知能を用いた先進的内視鏡医療システムの開発 (AMED未来医療事業：研究代表者AMEDデジタルトランスフォーメーション事業：分担)</b></p> <p>安全で精緻な内視鏡手術実現のため、人工知能を用い術中リアルタイムに解剖学的ランドマーク指示しうる先進的内視鏡医療システムを開発し、社会実装を実施 (論文1、特許1、2)</p> <p>●<b>内視鏡手術動画におけるビッグデータベースの基盤構築研究 (AMEDデータベース事業)</b></p> <p>内視鏡手術動画を集積したビッグデータを確立するため、AMED事業および日本内視鏡外科学会とタイアップし、産業利用可能なシステム構築を実施</p> <p>●<b>消化器外科手術におけるCOVID-19の影響を評価するNCDビッグデータ解析研究 (厚生労働科学研究費補助金 門田班・分担)</b></p> <p>NCDビッグデータを用い、胃癌・大腸癌・胆嚢良性疾患におけるCOVID-19感染拡大の影響を実施件数および治療成績の観点から明らかにする</p> <p>●<b>大腸癌における内視鏡手術の標準化に向けた大規模多機関共同研究 (AMED革新的がん医療実用化研究事業 金光班・清水班 各分担、内視鏡振興財団)</b></p> <p>大腸癌に対する腹腔鏡手術・ロボット支援手術の標準化に向けた多機関共同ランダム化比較試験およびNCDビッグデータを用いた観察研究による有用性の評価 (論文2)</p> <p>●<b>抗癌剤脱毛のメカニズム解明と予防薬の開発研究 (株式会社アデランス共同研究)</b></p> <p>二光子顕微鏡を用いた抗癌剤誘発脱毛のメカニズム解明と、新規抗酸化剤を用いた予防薬の開発研究 (特許5)</p>
研究業績・アピールポイント	<p><b>【代表的論文】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Development of Endoscopic Surgery Navigated by Artificial Intelligence Inomata M, Fujinaga A, Nakanuma H, et al. Surg Technol Int, Online, 2021</li> <li>2) Survival outcomes following laparoscopic versus open D3 dissection for stage II or III colon cancer (JCOG0404): a phase 3, randomised controlled trial. Kitano S, Inomata M, Mizusawa J, et al. Lancet Gastroenterol Hepatol, 2(4) 261-268, 2017</li> </ol> <p><b>【産学連携による主な共同研究および受託研究】</b></p> <p>オリンパス株式会社、富士フイルム株式会社、株式会社アデランス、川澄化学工業株式会社、デンケン株式会社、カイゲンファーマ株式会社、株式会社日田天領水など</p> <p><b>【主な特許取得】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 情報処理システム、内視鏡システム、学習済みモデル、2018.11.30 特願2018-044121</li> <li>2) 小矩形自動フィッティングによる検出部表示技術：2020年9月25日受理 (OU-0437)</li> <li>3) 光線照射治療装置 (ピロリ菌光線照射治療装置) 2017.9.21 特開2017-164223</li> <li>4) 医療用組成物 (粘膜挙上剤)：2014.10.6 特開2014-188054</li> <li>5) がん化学療法誘発脱毛に対する抗脱毛用組成物 2012.3.29 特開2012-62283</li> </ol>



所属・職位	医学部医学科小児科学講座・教授	
氏名	井原 健二 (Ihara Kenji)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、1996年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	小児科学、臨床遺伝学、先天代謝異常症、小児内分泌学	
研究キーワード	分子遺伝学、遺伝カウンセリング、希少疾患、遺伝学的診断	
研究内容	<p>●小児の遺伝性疾患の病因・病態解析 周産期から小児期の希少疾患について遺伝学的解析による病因解明と分子生物学的手法を用いた病態解析を進めている。大分大学小児科で経験した遺伝性疾患の病態メカニズムの解明から創薬への発展に向けて本学医学部の基礎系講座と協働して進めている (論文1, 2)。</p> <p>●早老症の疫学調査研究 厚生労働省難治性疾患政策研究事業「早老症の病態解明、診断・治療法の確立と普及を目的とした全国研究」において、超稀少疾患のHutchinson-Gilford 早老症症候群の調査研究小班的班長として国内調査を実施し報告した (論文3)。また医療従事者と家族向けにHutchinson-Gilford 早老症症候群のホームページを公開した (<a href="http://square.umin.ac.jp/hgps/index.html">http://square.umin.ac.jp/hgps/index.html</a>)。</p> <p>●小児の肥満や脂質異常の長期疫学調査 大分市ではH3年度から30年以上にわたり小学校5年対象に成人期以降の生活習慣病予防を目的とした健診を実施している。この健診データをもとに大分市の10歳児学童の小児肥満と血清脂質に関する27年の長期動向を日本動脈硬化学会の英文雑誌に報告した (論文4)。</p> <p>●新生児マス・スクリーニング保存ろ紙血を用いた臨床研究 新生児期の突然死や重篤な症状で発症する脂肪酸代謝異常症や有機酸代謝異常症の後方視的診断法の確立に向け、保存ろ紙を用いたタンデムマス検査の基礎研究を進めている。大分市と大分市医師会立アルメイダ病院の臨床検査部のご協力により研究成果をまとめ、日本小児科学会の英文雑誌に報告した (論文5)。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>(論文1) Inoue M, Miyahara H, Shiraishi H, Shimizu N, Tsumori M, Kiyota K, Maeda M, Umeda R, Ishitani T, Hanada R, Ihara K, Hanada T: Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. <i>Sci Rep.</i> 16;11(1):8392. 2021.</p> <p>(論文2) Sekiguchi K, Miyahara H, Inoue M, Maeda T, Kiyota K, Sakai K, Hanada T, Ihara K: Metabolome characteristics of liver autophagy deficiency under starvation conditions in infancy. <i>Nutrients</i> 13, 3026. 2021.</p> <p>(論文3) Sato-Kawano N, Takemoto M, Okabe E, Yokote K, Matsuo M, Kosaki R, Ihara K: The clinical characteristics of Asian patients with classical-type Hutchinson-Gilford progeria syndrome. <i>J Hum Genet.</i> 62(12):1031-1035, 2017</p> <p>(論文4) Maeda M, Maeda T, Ihara K: Secular Trends in obesity and serum lipid values among children in Oita City, Japan, during a 27-year period. <i>J Atheroscler Thromb.</i> (in press)</p> <p>(論文5) Shimada Y, Kawano N, Goto M, Watanabe H, Ihara K: Stability of amino acids, free and acyl-carnitine in stored dried blood spots. <i>Pediatr Int.</i> 2022 (in press)</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部





医学部



医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科医療倫理学講座・教授	
氏名	今井 浩光 (Imai Hiromitsu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	医療倫理学、臨床薬理学、心身医学	
研究キーワード	臨床研究のインフォームド・コンセント、薬理遺伝学、薬物と労働災害	
研究内容	<p>●臨床研究におけるインフォームド・コンセントのあり方に関する研究</p> <p>臨床研究は患者や健康人が被験者として参加することで成立し、その際にインフォームド・コンセントを経る。この重要なプロセスは個々の研究者と被験者により行われ、外部からの確認が困難であり、質の保証がなされにくい。本研究では研究者と被験者の間で行われる研究についてのコミュニケーションを多面的に分析し、倫理的に望ましいコミュニケーションのあり方、それを担保する方策について考察することを目的とする。</p> <p>●薬物動態や薬理作用に及ぼす因子の研究</p> <p>薬物動態や薬効を修飾する内的及び外的因子を評価し、患者個々に最適な薬物投与法を提案することを目的とする。具体的には薬物代謝酵素、薬物トランスポーターや薬物受容体の遺伝的多型による影響や食品による薬理作用の変化を検討する。(論文1, 2, 3)</p> <p>●薬物と労働災害の影響に関する研究</p> <p>日本の労働災害は労働災害防止計画により対策が講じられているが、死傷者数減少の目標達成が困難な状況である。これには様々な因子が関与していると思われるが、労働人口が生活習慣病を始めとする医薬品使用が多い年齢層に一致しており医薬品による作業能力への影響が労働災害の因子ではないかという仮説を設定して、これを検証する研究を進めている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>医療倫理、薬物、人と社会のコミュニケーションという軸から、実際に社会で問題となることの分析と解決のための方策を社会に実装することを目標として、領域横断的な研究の展開を目指している。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年、The <math>\mu</math>-opioid receptor gene polymorphism 118A&gt;G weakens the pharmacological action of buprenorphine. <i>Int J Clin Pharmacol Ther.</i> 58: 626-633.</li> <li>2019年、No Effect of Digoxin on Rosuvastatin Pharmacokinetics in Healthy Subjects: Utility of Oita Combination for Clinical Drug-Drug Interaction Study. <i>Clin Transl Sci.</i> 12: 513-518.</li> <li>2016年、The pharmacokinetic exposure to fexofenadine is volume-dependently reduced in healthy subjects following oral administration with apple juice. <i>Clin Transl Sci.</i> 9: 201-206.</li> </ol>	

所属・職位	医学部医学科臨床薬理学講座・教授	
氏名	上村 尚人 (Uemura Naoto)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1999年3月	
SDGs目標		

研究分野	臨床薬理学、薬物治療学、早期探索的臨床開発
研究キーワード	早期探索的臨床試験、ヒト初回投与試験、POC試験、臨床分子イメージング、合理的薬物治療、薬物動態、薬力学、
研究内容	<p>大分大学医学部臨床薬理学講座では、現代医学では有効な治療方法のない難病を中心に、新しい治療方法の研究開発に取り組んでいる。</p> <p>講座の関連施設である附属病院臨床薬理センターは我が国を代表する臨床薬理専門施設であり、附属病院に整備されたクリニカルトライアルユニット（臨床試験専用病床）を活用し人を対象とした早期探索的臨床試験を積極的に行なっている。特に、新規医薬品や新しいワクチンなどを人に初めて投与する“ヒト初回投与試験”や、治療概念を確立するための臨床試験としての“POC試験”を数多く実施しており、先端分子イメージングセンターにおいては、新規のPET (Positron Emission Tomography)トレーサーを用いた新薬開発を進めている。</p> <p>これまでに取り組んできたテーマとしては、血管奇形（低分子）、難治性皮膚炎症疾患（低分子）、COVID-19（治療薬）、COVID-19（ワクチン）、新規経口抗真菌薬の開発（低分子）、中性脂肪蓄積心筋血管症の治療薬（中分子）、抗がん剤（肺がん治療薬）の新規製剤開発、中枢作動薬としての抗搔痒薬（低分子）、新規肺線維症の新規（中分子）、乳がん骨転移抑制薬（低分子）、線維筋痛症の治療薬（低分子）、上気道炎ウイルス感染症治療薬（抗体）、NASH（核内受容体作動薬 低分子）、NASH（抗炎症 低分子化合物1）、NASH（抗炎症 低分子化合物2）、進行性骨化性線維異形成症、アルツハイマー病新規PET トレーサー（低分子1）、アルツハイマー病新規PET トレーサー（低分子2）骨代謝診断用新規PET トレーサー、狂犬病（低分子）、ヒト トリパノソーマ症（低分子）、アルコールや違法薬物の体内動態研究、などがある。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>Cumulative seroprevalence among healthcare workers after the first wave of the COVID-19 pandemic in El Salvador, Central America. Nakagama Y, Rodriguez-Funes MV, Dominguez R, Candray-Medina KS, Uemura N, Tshibangu-Kabamba E, Nitahara Y, Kaku N, Kaneko A, Kido Y. Clin Microbiol Infect. 2022 Jun (in press)</p> <p>A phase I study to evaluate safety, pharmacokinetics, and pharmacodynamics of respiratory syncytial virus neutralizing monoclonal antibody MK-1654 in healthy Japanese adults. Orito Y, Otani N, Matsumoto Y, Fujimoto K, Oshima N, Maas BM, Caro L, Aliprantis AO, Cox KS, Tokumaru O, Kodama M, Kudo H, Imai H, Uemura N. Clin Transl Sci. 2022 May 3 (in press)</p> <p>A phase I study of high dose camostat mesylate in healthy adults provides a rationale to repurpose the TMPRSS2 inhibitor for the treatment of COVID-19. Kitagawa J, Arai H, Iida H, Mukai J, Furukawa K, Ohtsu S, Nakade S, Hikima T, Haranaka M, Uemura N. Clin Transl Sci. 2021 Sep;14(5):1967-1976</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部・教授	
氏名	大崎 美泉 (Osaki Yoshimi)	
取得学位	商学修士、早稲田大学、1979年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	医療経営学、病院マネジメント、管理会計	
研究キーワード	医療制度改革、病院の経営戦略、病院の経営分析、病院原価計算	
研究内容	<p>1. 医療のマネジメントに関する研究</p> <p>疾病構造の変化、超高齢化社会の進展、医療技術の進歩、デジタル社会の出現等医療を取り巻く環境が大きく変化する中で、医療費の高騰による財政逼迫への対応も視野に入れた医療提供体制、医療保険制度、診療報酬制度のあり方について考察を行う。</p> <p>2. 医療環境の変化と病院経営に関する研究</p> <p>医療を取り巻く環境の変化、医療制度改革の進展、あるいは昨今の新型コロナ問題の出現のように、病院の経営環境が激変し厳しさを増す中で、地域の医療を担う病院はその生き残りをかけ如何に経営改革を実践していくべきかについて検討を行う。</p> <p>3. 病院のマネジメント・システムの研究</p> <p>経営環境の変化が厳しさを増す中、これからの病院経営に不可欠な経営戦略、原価計算、経営分析、バランススコアカード、MRP、ICT、リスクマネジメントといった病院のマネジメントに関する様々な理論や技法について研究を行う。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>(論文)</p> <p>1. 2006年、「DPCと原価計算・管理会計—病院マネジメントへの役立ちを中心として—」 (DPC時代の病院原価計算システムに関し、診療科別原価計算の限界と疾患別原価計算の必要性について考察するとともに病院マネジメントにおけるBSCの有用性についても検討した。)</p> <p>2. 2002年、「医療改革へのマネジメント技法の適用について」 (医療改革の実現にあたって、マネジメントにおける概念や技法が有用であることを指摘した。医療の質と標準化に関してはクリティカルパス、電子カルテの進展にはABC、その他に予算管理、損益分岐点分析も有用なツールとして適用可能なことを指摘した。)</p> <p>(研究ノート)</p> <p>1. 2012年、「病院経営における経営戦略の展開について」 (BSCを採用したデューク小児科病院等の例を参考に、病院マネジメントにおける経営戦略の重要性を指摘するとともに、マクロの医療制度の動向如何によって、ミクロである個々の病院の経営戦略が左右される問題点を検討した。)</p>	

所属・職位	医学部医学科腫瘍・血液内科学講座・教授	
氏名	緒方 正男 (Ogata Masao)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1998年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	血液学	
研究キーワード	造血幹細胞移植、ヒトヘルペスウイルス6、HHV-6脳炎、移植後合併症、HTLV-1	
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 同種造血幹細胞移植後ヒトヘルペスウイルス6脳炎の疾患概念の確立 同種造血幹細胞移植後に急激に悪化する特異な脳炎を連続して経験しこれがヒトヘルペスウイルス6 (HHV-6) が原因と考え、その疾患単位の確立に取り組んだ。HHV-6再活性化と脳炎発症との関係性について全国多施設前向き観察研究により証明した (論文1)。全国調査を実施し、HHV-6脳炎の臨床像、危険因子や治療と予後との関連について明らかとした (論文2)。これらの成果はHHV-6脳炎の疾患概念の確立に貢献している。</li> <li>● 同種造血幹細胞移植後ヒトヘルペスウイルス6脳炎の治療法の確立 全国調査ではホスカルネット治療が良好な予後と関連することを示した(論文2)。この成果を世界初となる移植後HHV-6脳炎治療薬の保険承認につなげた。HHV-6脳炎発症予防のための多施設介入臨床試験を責任者として実施した (論文3)。移植後HHV-6感染症に関する日本造血幹細胞移植学会ガイドラインを部会長として執筆し(著書1)、欧州骨髓移植学会機関紙にもガイドラインを掲載した (論文4)。このようにHHV-6脳炎の治療で世界をリードしている。</li> <li>● 同種造血幹細胞移植後合併症の克服に関する研究 同種造血幹細胞移植後の感染症や臓器障害などの合併症克服のための多数の検討を日本造血細胞移植学会・合併症ワーキンググループにおいて実施した。2015年から2019年まではワーキンググループ責任者として全国の移植医による提案研究に助言と指導を行なった。</li> <li>● HTLV-1キャリアの疫学研究 AMED研究事業におけるHTLV-1の全国的疫学研究に研究開発参加者として参加し、感染総合対策の確立に取り組んでいる。</li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2013年、Ogata M, et al. Human herpesvirus 6 (HHV-6) reactivation and HHV-6 encephalitis after allogeneic hematopoietic cell transplantation: a multicenter, prospective study. Clin Infect Dis.</li> <li>2. 2017年、Ogata M, et al. Clinical characteristics and outcome of human herpesvirus-6 encephalitis after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation. Bone Marrow Transplant.</li> <li>3. 2018年、Ogata M, et al. Effects of Prophylactic Foscarnet on Human Herpesvirus-6 Reactivation and Encephalitis in Cord Blood Transplant Recipients: A Prospective Multicenter Trial with an Historical Control Group. Biol Blood Marrow Transplant.</li> <li>4. 2020年、Ogata M, et al. Clinical practice recommendations for the diagnosis and management of human herpesvirus-6B encephalitis after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation. Bone Marrow Transplant.</li> </ol> </li> <li>● 著書 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 緒方正男、高野久仁子、橋井佳子、植木俊光、森康雄(共著). 造血細胞移植ガイドライン HHV-6 (第2版)、日本造血・免疫細胞療法学会</li> </ol> </li> <li>● 受賞 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2021年、一般社団法人日本造血細胞移植学会 第3回日本造血細胞移植学会 学会賞</li> <li>2. 2021年、大分大学学長表彰</li> </ol> </li> </ul>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

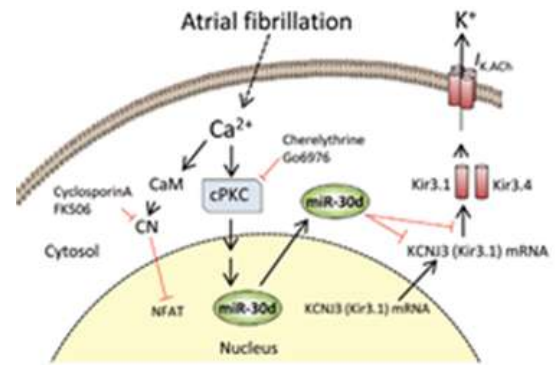
福祉健康科学部



その他学内施設等



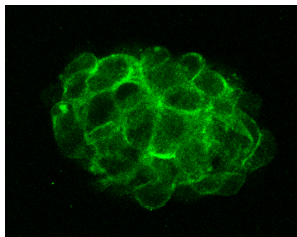
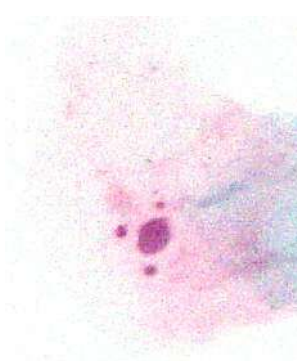
所属・職位	医学部医学科病態生理学講座・教授	
氏名	小野 克重 (Ono Katsushige)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1989年3月	
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	

研究分野	電気生理学, イオンチャンネル, 不整脈学
研究キーワード	電位作動性Na <sup>+</sup> チャンネル, 電位作動性Ca <sup>2+</sup> チャンネル
研究内容	<p>心房細動は最も罹患率の多い不整脈でありながら成因は解明されておらず、根本的な治療戦略は未だに確立していない。それは、心房細動の発症と維持の分子機序が明確でないことに起因する。一方、近年の循環器領域研究において心臓発生や心不全の進行においてmicroRNAの発現異常が存在することが明らかとなった。我々は、ヒト心筋細胞（慢性心房細動を呈する患者の心房筋において、特定のmicroRNAとイオンチャンネル、関連するtrafficking蛋白、更に発現の制御を担う転写因子との機能的連関を明らかにしている。microRNAをラット心筋細胞に導入し、更に特定のmicroRNAノックアウトラット心筋細胞にパッチクランプ法を用いてmicroRNA機能異常を電気生理学的に評価している。また、心房細動患者に特有と思われるmicroRNAの発現変化を記録している。循環器領域では、心臓の発生や筋肥大、心不全等において、いくつかのmicroRNAの発現異常が存在することが報告されているが、microRNAが不整脈の病態機序として機能することは不明な点が多いため、不整脈、特に心房細動の持続、特にイオンチャンネルのリモデリングにmicroRNAの発現異常が関わることを中心に研究を進めている（図は特定のmicroRNA, miR30dがI<sub>K,ACh</sub>チャンネルの発現をcontrolすることを示す）。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>Morishima M, Fujita T, Osagawa S, Kubota H, Ono K. Enhanced BDNF actions following acute hypoxia facilitate HIF-1 <math>\alpha</math>-dependent upregulation of Cav3-T-type Ca<sup>2+</sup> channels in rat cardiomyocytes. <i>Membranes</i> 11: 470, 2021</li> <li>Wang P, Wei M, Zhu X, Liu Y, Yoshimura K, Zheng M, Liu G, Kume S, Morishima M, Kurokawa T, Ono K. Nitric oxide down-regulates voltage-gated Na<sup>+</sup> channel in cardiomyocytes possibly through S-nitrosylation-mediated signaling. <i>Scientific Reports</i> 11: 11273, 2021</li> <li>Morishima M, Ono K. Serum microRNA-30d is a sensitive biomarker for angiotensin II-induced cardiovascular complications in rats. <i>Heart and Vessels</i>, 36(10), 1597-1606, 2021.</li> <li>Morishima M, Tahara S, Wang Y, Ono K. Oxytocin down-regulates the Cav1.2 L-type Ca<sup>2+</sup> channel via Gi/cAMP/PKA/CREB signaling pathway in cardiomyocytes. <i>Membranes</i> 11: 234, 2021.</li> <li>Wang P, Zhu X, Wei M, Liu Y, Yoshimura K, Zheng M, Liu G, Kume S, Kurokawa T, Ono K. Disruption of asparagine-linked glycosylation to rescue and alter gating of the Na<sup>v</sup> 1.5-Na<sup>+</sup> channel. <i>Heart and Vessels</i> 36: 589-596, 2021.</li> <li>Suzuki R, Morishima M, Nakada C, Miyamoto S, Ono K. Manifestations of gene expression profiles in human right atrial myocardium caused by mechanical stretch. <i>Heart and Vessels</i> 36: 577-588, 2021.</li> </ol>








所属・職位	医学部医学科歯科口腔外科学講座・教授	
氏名	河野 憲司 (Kawano Kenji)	
取得学位	歯学博士、九州大学、1990年1月	
SDGs目標		







研究分野	口腔外科学、口腔病理学、細胞生物学
研究キーワード	口腔癌、口腔潜在的悪性疾患、口腔粘膜疾患、口唇裂、口蓋裂、




研究内容	<p><b>1. 口腔癌の浸潤・転移に関する研究</b>          病理組織学的手法と細胞生物学的手法により口腔扁平上皮癌の浸潤・転移機序の研究を行っている。口腔癌における接着因子（カドヘリン、インテグリン）や細胞外マトリックスの発現と臨床動態の関連を調べ、さらに<i>in vitro</i>三次元癌微小環境モデルを用いて癌細胞の浸潤能と運動能の亢進機序を解析している。</p> <p><b>2. 癌化リスクの高い口腔潜在的悪性疾患のスクリーニングに関する研究</b>          口腔潜在的悪性疾患（口腔癌の前駆疾患）から採取した細胞の遺伝子損傷や癌化関連遺伝子の異常をもとに癌化リスクを評価し、高癌化リスク症例を選別し発癌前に治療を行う。</p> <p><b>3. 口腔癌および口腔潜在的悪性疾患の疫学的研究</b>          大分県内での口腔がん検診、ネパールカトマンズ大学との共同で行っているネパール人の口腔粘膜疾患検診をもとに、口腔潜在的悪性疾患の頻度に関する調査研究を行っている。</p> <p><b>4. 口唇口蓋裂の手術に関する研究</b>          口唇口蓋裂術後の長期的観察により、自然な口唇鼻形態と正常の口腔機能を獲得するための術式の確立を研究している。</p>	 <p>Nカドヘリンを発現する口腔扁平上皮癌細胞株の細胞集塊</p>  <p>micronucleiをもつ異常細胞（口腔白板症の上皮細胞）</p>
	研究業績・アピールポイント	<p>上記の研究成果は次の論文、大学HPで公開している。</p> <p>1. 口腔癌の浸潤・転移に関する研究：          Exp Cell Res 262:180-196,2001          Oral Oncol 38:549-556,2002          Head Neck 28:525-533,2006          J Oral Maxillofac Surg Med Pathol 29:116-121, 2017          J Oral Maxillofac Surg Med Pathol 32:400-405, 2020</p> <p>2. 口腔癌および口腔潜在的悪性疾患の疫学的研究：  <a href="http://www.med.oita-u.ac.jp/rpp/report/2020burst02.pdf">http://www.med.oita-u.ac.jp/rpp/report/2020burst02.pdf</a>  <a href="https://www.oita-u.ac.jp/O1oshirase/topics/2019-010.html">https://www.oita-u.ac.jp/O1oshirase/topics/2019-010.html</a>  <a href="https://www.oita-u.ac.jp/O1oshirase/topics/2020-002.html">https://www.oita-u.ac.jp/O1oshirase/topics/2020-002.html</a></p>

- 役員
- 大学院教育学研究科  
教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科麻酔科学講座・教授	
氏名	北野 敬明 (Kitano Takaaki)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1988年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	麻酔科学
研究キーワード	手術侵襲、臓器保護
研究内容	<p>現在、麻酔科学講座では、手術侵襲や敗血症などの感染症など生体侵襲に対する生体反応機序の解明を目的として研究を行っている。さらに侵襲に対する過度の生体反応は、却って臓器障害を引き起こすため、臓器障害を防ぐための治療法の開発研究を行っている。また全身麻酔時の生体反応、集中治療領域の臓器障害・保護の研究も行っている。</p> <p>具体的には、生体侵襲反応と時計遺伝子の関係や、ビタミンCなどのフリーラディカルスカベンジャーと生体侵襲との関連性の研究などを行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Uchino T, Miura M, Matsumoto S, Shingu C, <u>Kitano T</u>: Use of epidurography and computed tomography to identify misplacement of a section of an epidural catheter in the subarachnoid space. J Clin Anesth, 46:1-2,2018</li> <li>2. Tokumaru O, Shuto Y, Ogata K, Kamibayashi M, Bacal K, Takei H, Yokoi I, <u>Kitano T</u>: Dose-dependency of multiple free radical-scavenging activity of edaravone. J Surg Res, 228:147-153,2018</li> <li>3. Kosaka M, Oyama Y, Uchino T, Ogihara Y, Koga H, Shingu C, Matsumoto S, <u>Kitano T</u>: Ultrasound-guided central venous tip confirmation via right external jugular vein using a right supraclavicular fossa view. J Vasc Access, 20(1):19-23,2019</li> <li>4. Ohchi Y, Goto K, Yasuda N, Koga H, <u>Kitano T</u>: High Efficiency Removal of Cytokines and HMGB-1 by Continuous Hemofiltration With a Dual Layered Polyethersulfone Membrane: An Ex Vivo Study. Ther Apher Dial, 23(2):173-179,2019</li> <li>5. Michikoshi J, Matsumoto S, Miyawaki H, Morita M, Niu H, Seo K, Hagiwara S, <u>Kitano T</u>: Evaluation of Proteins and Cells that Adsorb to Dialysis Membranes Used in Continuous Hemodiafiltration: Comparison of AN69ST, Polymethylmethacrylate, and Polysulfone Membranes. Blood Purif, 48(4):358-367,2019</li> <li>6. Takigawa M, Yatsu T, Takino Y, Matsumoto S, <u>Kitano T</u>, Lee J, Arai T, Tanaka H, Ishii T, Mori Y, Ishigami A: High-Dose Vitamin C Preadministration Reduces Vancomycin-Associated Nephrotoxicity in Mice. J Nutr Sci Vitaminol (Tokyo), 65(5):399-404,2019</li> <li>7. Okuno T, Yoshida Y, Takaki Y, Araki Y, Inoue H, Soejima K, Okado Y, Yoshida K, Imamura H, Hagiwara S, Matsumoto S, <u>Kitano T</u>: Observation of Granulocyte Adsorption in Adacolumn Cellulose Acetate Beads after Granulocytapheresis. Ther Apher Dial, 23(3):210-216,2019</li> <li>8. Himeno E, Goto S, Inoue S, Hatanaka Y, Hagiwara S, Matsumoto S, <u>Kitano T</u>: Application and Efficacy of Vitamin E-Bonded Polysulfone Membrane in Acute Blood Purification Therapy.. Blood Purif Jul 17, 1-7,2020</li> <li>9. Yasuda N, Goto K, Mizoguchi T, Ohchi Y, Nureki S, <u>Kitano T</u>: A new anticoagulation strategy using recombinant human thrombomodulin in patients on veno-venous extracorporeal membrane oxygenation: A retrospective study. ANNALS OF PALLIATIVE MEDICINE 10(2), 1834-1841,2021</li> </ol>

所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・教授	
氏名	清村 紀子 (Kiyomura Noriko)	
取得学位	修士 (看護学)、大分医科大学、2000年3月	
SDGs目標	    	
研究分野	看護学	
研究キーワード	看護技術のエビデンス、看護に活かす解剖生理学、クリティカルケア看護	
研究内容	<p><b>【看護技術のエビデンス】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生体リズムを整えるための看護プログラムの開発</li> <li>2. 足浴による自律神経活動の解明</li> <li>3. 三角筋における安全な筋肉注射部位の検討</li> </ol> <p><b>【看護に活かす解剖生理学】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 臨床推論能力向上のための解剖生理学教育法の検討</li> <li>2. 解剖生理学と連動したフィジカルアセスメントの能力向上を目指すプログラム開発</li> </ol> <p><b>【クリティカルケア看護】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 腹臥位療法の効果の検証</li> <li>2. 人工呼吸器早期離脱にむけた取り組み</li> </ol>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Evaluation of appropriate sites for intramuscular injection in the deltoid muscle: The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science Program &amp; Abstract p.144</li> <li>・ The morphologic features and distributions of the axillary nerve in relation to the safe deltoid intramuscular injection: Fifth Pan-Pacific Nursing Conference and Seventh Nursing Symposium on Cancer Care, Conference Abstract Book (p.99)</li> <li>・ 三角筋内の腋窩神経の走行：MRIを用いた生体データと解剖体データの比較：日本看護技術学会誌 16.P70-76,2018</li> <li>・ サブストラクション・アウトカムモデルを用いた人工呼吸器離脱への介入に関する文献検討，日本クリティカルケア看護学会誌，15，P1-11，2019</li> <li>・ 「人工呼吸器離脱プロトコル」の有効性の検証，日本クリティカルケア看護学会誌，17，P31-43，2021</li> </ul>	

所属・職位	医学部医学科眼科学講座・教授	
氏名	久保田 敏昭 (Kubota Toshiaki)	
取得学位	医学博士、九州大学、1988年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	眼科学
研究キーワード	緑内障、前房隅角、視神経、続発緑内障
研究内容	<p><b>落屑緑内障の病態と疾患感受性遺伝子多施設研究</b></p> <p>落屑症候群に関連する遺伝子としてlysyl oxidase like-1 protein (LOXL1)遺伝子異常が報告されているが、人種によってリスクアレルに差が見られる。本研究では落屑症候群の原因遺伝子および遺伝子座をゲノムワイド関連解析(GWAS; genome-wide association study)法を用いてコホート研究にて決定する研究を行い、LOXL1異常の人種差のメカニズムも明らかにされた。また新たな疾患感受性遺伝子を発見し、これらの結果は医学のトップジャーナルに掲載された。</p> <p><b>緑内障の疫学調査 (久山町疫学研究)</b></p> <p>福岡県久山町で行われているコホート疫学調査の久山町研究は開始されて60年になる。眼科検診は1998年から開始しており20年以上が経過した。緑内障検診は2017年に初めて九州大学、秋田大学、大分大学の協力で行った。緑内障有病率は7.6%であり、病型別では原発開放隅角緑内障5.8%、原発閉塞隅角緑内障0.7%、続発緑内障1.1%であった。多治見スタディと比較して高齢化率の上昇に比例して本邦の緑内障有病率が上がっていることを示した。</p> <p><b>続発緑内障の原因となるウイルス眼感染症の起炎菌を同定するための網羅的PCR検査</b></p> <p>前房水や硝子体などの眼科微量検体から多項目の眼感染症主要病原微生物を網羅的に検出できる眼感染症網羅的PCR検査の先進医療を開始し、保険収載を目指して全国の多施設研究を取りまとめている。マルチプレックス・リアルタイムPCRキット「Direct Strip PCR」は東京医科歯科大学、理化学研究所、大分大学で共同開発し、サイトメガロウイルス角膜炎などのウイルス性続発緑内障の診断に貢献している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>主な論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Nakano S, Kubota T, et al.: Multiplex solid-phase real-time polymerase chain reaction without DNA extraction: A rapid intraoperative diagnosis using microvolumes, Ophthalmology 2021</li> <li>The Genetics of Exfoliation Syndrome (GenES) Partnership: Association of rare CYP39A1 variants with exfoliation syndrome involving the anterior chamber of the eye, JAMA 2021</li> <li>Nakano S., Tomaru Y., Kubota T., et al.: A prospective multicenter study, American Journal of Ophthalmology 2020</li> <li>Aung T, Kubota T, et al. Genetic association study of exfoliation syndrome identifies a protective rare variant at LOXL1 and five new susceptibility loci, Nature Genetics 2017</li> <li>Aung T., Ozaki M., Kubota T., et al.: A common variant mapping to CACNA1A is associated with susceptibility to exfoliation syndrome, Nature Genetics 2015</li> </ol> <p>学会関係: 日本眼科学会評議員、日本緑内障学会理事、第89回九州眼科学会会長 (2019年5月31日~6月2日)、第31回日本緑内障学会会長 (2020年10月2日~4日ライブ、11月5日~30日オンデマンド配信)、第76回日本臨床眼科学会 (2022年10月13日~16日) 特別講演予定</p>

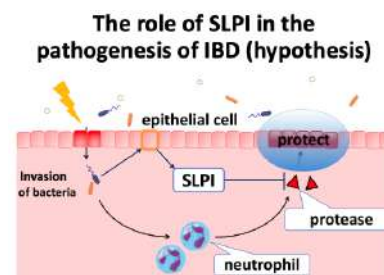





所属・職位	医学部医学科感染予防医学講座・教授	
氏名	小林 隆志 (Kobayashi Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2000年7月	
SDGs目標		


研究分野	免疫学、感染症学、寄生虫学、ウイルス学、分子生物学
研究キーワード	炎症性腸疾患、自己免疫性神経疾患、アルボウイルス感染免疫、アニサキス、がん免疫

研究内容	<p>感染防御に働く免疫システムの分子基盤とその破綻による炎症性疾患の病態を分子レベルで解明し、その成果を病気の予防や治療に結びつけることを目標にしています。</p> <p><b>1) 炎症性腸疾患の分子免疫学的研究</b></p> <p>炎症性腸疾患は、自己の免疫細胞が腸組織を攻撃することで消化管粘膜に慢性的な炎症が引き起こされる疾患で、潰瘍性大腸炎とクローン病が知られています。原因は不明ですが、最近の研究で、遺伝子の関与や腸内細菌叢の変化などが指摘されています。私たちはこれまでに新たな抗生物質起因性腸炎モデル動物の作製に成功し (文献1)、このモデルを使った漢方薬の評価を行っています。また、炎症性腸疾患に関連する遺伝子や腸内細菌の研究 (文献2) も進めています。最近、プロテアーゼ阻害因子であるSLPIが炎症性刺激により誘導されて腸管上皮バリアを保護することで腸炎を抑制することが明らかになりました (文献3)。この研究成果は炎症性腸疾患の新規治療薬の開発につながる事が期待されます。</p> <p><b>2) 多発性硬化症の分子免疫学的研究</b></p> <p>多発性硬化症は、自己の免疫細胞が神経細胞の軸索を覆っているミエリンを攻撃することで脱髄がおき、運動障害、感覚障害、視覚障害などが引き起こされます。私たちはT細胞におけるシグナル伝達分子TRAF6やT細胞の遊走を制御する種々のケモカイン・ケモカイン受容体が病態形成におよぼす役割について遺伝子改変マウスを用いて解析しています。これらの研究により、この病気の発症に重要な分子が明らかになってきました。</p> <p><b>3) 蚊媒介性ウイルスの研究</b></p> <p>チクングニアウイルスは蚊によって媒介され、非常に重篤な関節痛を伴うチクングニア熱を引き起こします。私たちは、RT-LAMP法を応用した迅速で簡便な診断法を開発しました (文献4)。また、蚊の吸血でジカ熱を引き起こすジカウイルスは、C型肝炎ウイルス治療薬のリバビリンによって抑制されることを明らかにしました (文献5)。</p> <p><b>4) アニサキスの研究</b></p> <p>大分特産の関サバは、他のサバに比べアニサキスの寄生率が低いことを明らかにしました (文献6)。現在、アニサキス感染の激症化の解明に取り組んでいます。</p>
------	--


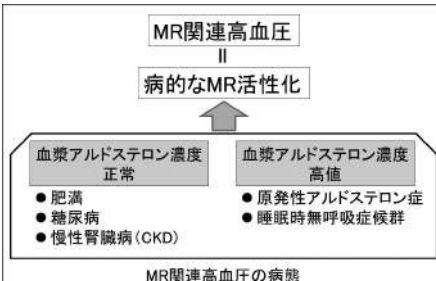
研究業績・アピールポイント	<p>私たちはゲノム編集技術を用いて遺伝子改変マウスを作製し病態解析を行っています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年、Sonoda et al., <i>Genes Cells</i> 23(12) 1043-1055.</li> <li>2018年、Gendo et al., <i>Inflamm Intest Dis</i> 3(3) 145-154.</li> <li>2021年、Ozaka et al., <i>Genes Cells</i> 26(10) 807-822.</li> <li>2020年、Saechue et al., <i>Genes Cells</i> 25(9) 615-625.</li> <li>2017年、Kamiyama et al., <i>Antiviral Res</i> 146 1-11.</li> <li>2021年、Hidano et al., <i>Jpn J Infect Dis</i> 74(5):387-391.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2022年、中村丁次 監修、国民の栄養白書 2021年度版 - 日本の食と栄養が創る新時代の健康 小坂聡太郎、小林隆志 日本人の身体に合った食事 ～腸内環境から考える日本人の理想の食～ 日本医療企画</li> </ol>
---------------	--



所属・職位	医学部医学科公衆衛生・疫学講座・教授	
氏名	斉藤 功 (Saito Isao)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年9月	
SDGs目標	 	
研究分野	公衆衛生・疫学分野	
研究キーワード	循環器疾患の疫学, 危険因子, 健康の社会的決定要因, コホート研究	
研究内容	<p>●新たな循環器疾患危険因子の探索とその予防方法の確立</p> <p>地域における数千から数十万人の参加者からなるコホート研究を通じて循環器疾患や生命予後に及ぼす新たな危険因子の探索を行っている。脂質異常, 高血圧, 糖尿病, 肥満といった古典的な危険因子からメタボリックシンドローム, 炎症, そして社会心理的要因に至る新たなエビデンスの構築を行ってきた。とりわけ自律神経系機能の指標である心拍変動に関する約5千人規模のコホート研究を構築し, 糖尿病や循環器疾患発症といったアウトカムとの関連について機械学習の分析手法も取り入れながら分析を進めているところは独自性がある。自律神経系機能が示す交感神経や副交感神経の機能指標は, 健康の社会的決定要因とされる社会環境や社会的な格差と生活習慣病発症とをリンクしており, アウトカムの新たな予測因子としての可能性を有する。また, 社会的格差がもたらす健康影響について科学的に明らかにすることは公衆衛生領域におけるこれからの主な研究テーマである。(文献1~5)</p> <p>●自治体との協同による公衆衛生活動の実践と評価に関する研究</p> <p>自治体の公衆衛生部門と連携し, 地域の健康増進に資するデータ分析, レセプト分析を行いながら地域医療構想, あるいは健康づくり計画に係る委員会委員としての実践活動を行っている。保健師, 管理栄養士等の多職種と共同で公衆衛生活動を展開しながらその評価にかかる研究を行っている。 ※関連リンク: <a href="http://www.med.oita-u.ac.jp/phealth1/">http://www.med.oita-u.ac.jp/phealth1/</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>米国ARIC研究や国内JPHC研究等, 国内外の代表的なコホート研究に関わった。TOON HEALTH STUDY等の新たなコホート研究を創設し地域の公衆衛生活動を実践してきた。 (主な論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Saito I, et al. Nontraditional risk factors for coronary heart disease incidence among persons with diabetes: The Atherosclerosis Risk in Communities (ARIC) Study. <i>Ann Intern Med</i> 2000;133:81-91.</li> <li>2. Saito I, et al. Comparison of fatal coronary heart disease occurrence based on population surveys in Japan and the USA. <i>Int J Epidemiol</i> 2000;29:837-844.</li> <li>3. Saito I, et al. Body mass index, weight change and risk of stroke and stroke subtypes: the Japan Public Health Center-based prospective (JPHC) study. <i>Int J Obesity</i> 2011;35:283-291.</li> <li>4. Saito I, et al. Association between mortality and incidence rates of coronary heart disease and stroke: The Japan Public Health Center-based prospective (JPHC) study. <i>Int J Cardiol</i> 2016;222:281-286.</li> <li>5. Saito I, et al. Association between heart rate variability and home blood pressure: The Toon Health Study. <i>Am J Hypertens</i>. 2018;31:1120-1126.</li> </ol>	

所属・職位	医学部医学科内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座・教授	
氏名	柴田 洋孝 (Shibata Hiroataka)	
取得学位	博士 (医学)、慶應義塾大学、1993年1月	
SDGs目標	  	

研究分野	内分泌代謝学
研究キーワード	高血圧、副腎、アルドステロン、糖尿病、慢性腎臓病

研究内容	<p><b>1. 原発性アルドステロン症患者のQOLを重視した最適治療法の検討</b></p> <p>副腎疾患、内分泌性高血圧の専門家として国内外の原発性アルドステロン症や高血圧の診療ガイドラインを副委員長として策定した。</p> <p>さらに、大分大学BURST認定の研究チーム「OPAT (大分大学原発性アルドステロン症研究チーム)」の責任者として、本疾患の最適治療と臨床評価をテーマに活動している。</p>  <p><b>2. 肥満、糖尿病、慢性腎臓病に合併する高血圧および臓器障害の分子機構の解明：新規病態「MR関連高血圧」の提唱</b></p> <p>血中アルドステロン濃度が高値を示す原発性アルドステロン症のみならず、血中アルドステロン濃度が正常の肥満、糖尿病、慢性腎臓病患者では、アルドステロン作用発現に関わるミネラルコルチコイド受容体 (MR) の病的な活性化が高血圧や臓器障害に関わるという新規病態「MR関連高血圧」を世界で初めて提唱し、基礎および臨床研究を展開している。</p>  <p><b>3. 糖尿病性腎症重症化予防につなげる早期発見マーカーの確立と治療戦略の確立</b></p> <p>健康寿命の延伸を目指し、大分大学—大分県医師会—大分県の3者連携締結による糖尿病性腎症重症化予防推進事業のために、腎症重症化の早期発見バイオマーカーとしてアルブミン尿や尿沈渣中ポドサイトmRNAを用いて、食事、運動療法とSGLT2阻害薬、MR拮抗薬などエビデンスがある薬剤介入と有用性を検討している。</p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>1. <b>ヒト副腎におけるアルドステロン合成酵素 (CYP11B2) の単離精製</b> (Ogishima, Shibata et al. J Biol Chem, 1991) を世界に先駆けて成功し、CYP11B2特異抗体により、<b>アルドステロン産生細胞を可視化</b>した (Nishimoto, Shibata, et al. J Clin Endocrinol Metab, 2010)。</p> <p>2. <b>新規病態「MR関連高血圧」の確立</b>：数種類のMR転写共役因子を酵母Two-Hybrid法により同定し (Yokota, Shibata et al. J Biol Chem 2010; Hayashi, Shibata, et al. Int Heart J, 2017; Mitsuishi, Shibata, et al. Mol Cell Endocrinol 2018; Nakamura, Shibata, et al. J Am Heart Assoc, 2018)、MRの翻訳後蛋白修飾による活性化機構の解明から新規病態「MR関連高血圧」を提唱した (Shibata and Itoh. Am J Hypertens 2012)。これにより、糖尿病や慢性腎臓病における腎症重症化とMR活性化の関連が明らかとなった。https://researchmap.jp/read0162153</p> <p>3. <b>CLEIA法による新規アルドステロン測定法の確立</b>に成功し (Ozeki, Shibata, et al. Diagnostics, 2021; Frontiers in Endocrinology, 2022)、従来法より精密なLC-MS/MS相当値が実測可能となり、原発性アルドステロン症の新ガイドラインの改訂に貢献した。</p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科総合外科・地域連携学講座・教授	
氏名	白石 憲男 (Shiraiishi Norio)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1988年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	消化器外科、内視鏡外科、地域外科医療学、外科教育学
研究キーワード	内視鏡外科腫瘍学、低侵襲手術、腹腔鏡下手術、機能温存胃切除術、多職種連携
研究内容	<p>高齢社会における良好な外科医療を確立するため、腫瘍学、外科侵襲学、外科治療学、社会学的立場から研究を進めている。</p> <p>●手術侵襲が癌の増殖・進展に及ぼす影響に関する基礎研究（内視鏡外科腫瘍学） 手術侵襲による癌の増殖・進展への影響を基礎研究にて明らかにしてきた。低侵襲手術である内視鏡外科腫瘍学の確立をめざしている。</p> <p>●消化管癌に対する内視鏡外科手術の手技の確立とその評価 内視鏡外科手術の癌治療としての手技の定型化と標準化をめざして、技術的および腫瘍学的な安全性を後ろ向き試験や多施設共同研究による無作為化比較試験にて検討している。安全な内視鏡外科手術における合併症発生の回避と予後改善が目標である。</p> <p>●高齢患者に対する低侵襲治療の意義 臓器の予備機能が低く併存疾患の多い高齢患者に対する外科治療が増加している。そのため、高齢患者の耐術性評価や術式選択、さらなる低侵襲手術の開発を行っている。</p> <p>●消化器癌に対する機能温存手術の開発 外科的治療は罹患している臓器を手術により体外に排除することを基本としているため、術後のQOLを損なう宿命にある。術後遠隔期の患者QOLを向上させるため、神経温存手術や縮小手術などの開発や評価を進めている。特に胃上部早期胃癌に対する腹腔鏡下手術の新しい再建法を開発し、その評価を進めている。</p> <p>●地域外科医療と外科教育 地域医療構想や医師の働き方改革などの医療制度改革、医学教育制度改革および専門医制度改革が進むなか、多職種との連携システムの構築や外科医教育の改革が求められている。現状と課題を明らかにするため、疫学的調査研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Shiraiishi N, Sato K, Adachi Y, et al. Multivariate prognostic study on large gastric cancer. J Surg Oncol 96(1): 14-18, 2007</li> <li>2. Kitano S, Etoh T, Inomata M, Shiraiishi N. Laparoscopy-Assisted Distal Gastrectomy for Early Gastric Cancer: A Video Demonstration. Ann Surg Oncol 18, 3701, 2011.</li> <li>3. Ueda Y, Shiraiishi N, Hirashita T, Inomata M. Training tools and methods for laparoscopic surgery Austin J Surg 5(8) online first, 2018.</li> <li>4. Ueda Y, Fujishima H, Masuda T, Shiroshita H, Etoh T, Inomata M, Shiraiishi N. Clinical impact of clinicopathological characteristics of undifferentiated advanced gastric cancer in elderly patients. Gerontology and Geriatric Research 2(1) 3-7, 2020</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 白石憲男. 第8章内視鏡外科. 標準外科. 2021, 医学書院(東京)</li> <li>2. 白石憲男, 上田貴威(編集). 高齢者に対する消化器外科のminimal requirements. 20021, メジカルビュー社(東京).</li> <li>3. 白石憲男(担当編集). DS Now リンパ節郭清手技を究める[上部消化管編]. 2021, メジカルビュー社(東京)</li> </ol>



所属・職位	医学部医学科腎泌尿器外科学講座・教授	
氏名	秦 聡孝 (Shin Toshitaka)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2005年3月	
SDGs目標		
研究分野	泌尿器科学	
研究キーワード	泌尿器腫瘍学、低侵襲手術、画像融合技術、再生医療	
研究内容	<p>&lt;基礎研究&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●前立腺癌細胞における前立腺特異抗原(PSA)の転写調節機構の解明 PSAの近位プロモーター領域にはSp1/SP3の結合部位が4カ所あり、そのいずれもが転写活性の上昇に関与しており、もっとも近位側の結合部位が最重要であることを解明した (論文1)。</li> <li>●再生医療を見据えた外尿道括約筋の幹細胞である衛星細胞の機能解析 当教室では、これまでに外尿道括約筋の幹細胞である衛星細胞の分離培養・長寿化法などを確立した。今後も尿失禁の病態解明、さらには再生医療への応用へ向けた研究を推進する。</li> </ul> <p>&lt;臨床研究&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●前立腺癌のMRIとMRI/US画像融合下生検に関する研究 MRI/US画像融合技術を用いた前立腺狙撃生検の精度やその臨床的意義、発展的活用法についての研究を行っている。正確な局在診断に基づいた世界初の3Dプリントモデルの開発やロボット手術への応用にも取り組んでいる (論文2, 3, 4、受賞2)。</li> <li>●単孔式・減孔式泌尿器腹腔鏡手術の開発 当科が本邦で先駆的に開始した単孔式・減孔式手術は整容性に優れた術式である。本術式では、いかに挿入する鉗子の数を減らすかに工夫が必要であり、われわれは新たなinternal retractorを用いた手技を泌尿器科領域ではじめて報告した (受賞1)。</li> <li>●ロボット支援腹腔鏡下手術における新たな術式の開発 ロボット支援膀胱全摘除術後の尿路変向法である回腸導管造設術において、「Early pull out technique」と名付けた新たな完全体腔内での手技を開発した (論文5)。</li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●論文 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2005年、Shin T et al. Arch Biochem Biophys. 435: 291-302.</li> <li>2. 2016年、Shin T et al. Eur Urol. 69: 377-379.</li> <li>3. 2017年、Shin T et al. BJU Int. 120: 233-238.</li> <li>4. 2018年、Shin T et al. BJU Int. 121: 77-83.</li> <li>5. 2021年、Shin T et al. Int J Urol. 28: 778-779.</li> </ol> </li> <li>●受賞 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2012年、30th World Congress of Endourology and SWL (WCE): Olympus Best Paper Award (Best New Innovation Paper)</li> <li>2. 2016年、The American Urological Association (AUA) 2016 Annual Meeting: AUA 2016 Best Poster</li> </ol> </li> </ul>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	医学部医学科大分こども急性救急疾患学部門医療・研究事業・教授	
氏名	末延 聡一 (Suenobu Souichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年9月	
SDGs目標	   	

研究分野	小児科学、小児血液・腫瘍学
研究キーワード	小児がん、急性リンパ性白血病、神経芽腫、QOL、グループ研究、がん教育、がんワクチン
研究内容	<p>●小児がんの治療成績改善に関する研究</p> <p>小児急性リンパ性白血病 (ALL) や神経芽腫の治療成績向上を目指している。小児ALLは50年間で治る見込みが10%から90%近くまで向上したが、その理由は「グループ研究」であり、自施設でも小児白血病研究会 (JACLS: Japan Association of Childhood Leukemia / Lymphoma Study) などの治療研究を実施、末延はALL小委員会委員長である (2022年3月)。また、高リスク神経芽腫では治療成績は不十分で、日本小児がん研究グループ (JCCG: Japan Children's Cancer Group) のプロトコル共同研究に参加しており、末延は神経芽腫委員会のメンバーである。No Child should die of cancerの達成を目指している。</p> <p>●小児がん経験者のQOL (Quality of life) 向上に関する研究</p> <p>白血病が治る時代になった。しかし、治った子どもたちはきちんと社会生活を送っているかを検討する必要があり、晩期合併症の回避とQOLの担保が極めて重要であると認識している。現在、治療後低身長回避などQOLに注目している。</p> <p>●世界中の小児がんに向けた研究</p> <p>アジア全体での協力体制が望まれるため、Webを利用した会議、共同研究を行っている。</p> <p>●がんの予防に関する開発・研究</p> <p>がん教育、がんワクチン、正しい知識と研究とが必要と考えて情報発信している。</p> <p>* 関連リンク (Research map) <a href="https://researchmap.jp/read0072809">https://researchmap.jp/read0072809</a>          (JACLS HP) <a href="http://www.jacls.jp/">http://www.jacls.jp/</a> (JCCG HP) <a href="http://jccg.jp/">http://jccg.jp/</a>          (大分大学小児科 HP) <a href="https://www.oita-ped.jp/about/member/suenobu-s.html">https://www.oita-ped.jp/about/member/suenobu-s.html</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年、Early Recovery of Height Velocity in Prepubertal Children With Acute Lymphoblastic Leukemia Treated by a Short Intensive Phase Without Cranial Radiation Therapy. J Pediatr Hematol Oncol 42: 271-274. (主著)</li> <li>Japanese children and children in Western countries with acute lymphoblastic leukaemia treated with a Berlin-Frankfurt-Münster (BFM)95-based protocol. Br J Haematol (共著)</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>小児がん治療後の長期フォローアップガイド (分担) クリニコ出版 2021年</li> <li>小児血液・腫瘍学 (分担) 改訂第2版 診断と治療社 2022年</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>令和2年、大分大学小児科同門会論文賞『小川賞』</li> <li>令和3年度、大分大学医学部附属病院治験貢献賞</li> </ol>

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・教授	
氏名	末弘 理恵 (Suehiro Rie)	
取得学位	博士 (保健学)、金沢大学、2011年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	クリティカルケア看護、老年看護
研究キーワード	クリティカルケア看護、周手術期、高齢者ケア、せん妄ケア
研究内容	<p>●手術を受ける後期高齢者のケアプログラムの開発</p> <p>手術をうける後期高齢者は、前期高齢者と比べ緊急手術及び術後ICUに入室している者が多かった。ICUでは、早期の苦痛の除去や付添い、リラクゼーションや関心ある話題により睡眠が充足され早期回復につながっていた。一方、手術に対する意思決定を高齢者自身が行い、術後の人生をイメージしていた者は術後のリハビリテーションにも積極的に参加していた。後期高齢者が手術を受ける際には術前より今後生き方を共に考え支援する必要性がある。</p> <p>●ICUにおける高齢患者のケアプログラムの開発</p> <p>ICUに入室する高齢者は成人期患者の7割を占め、入室期間は成人期患者より延長していた(4.2日&lt;5.1日)。看護師は高齢患者のケアにて、多動不穏な状態や睡眠障害等を経験し、患者の現状認知、睡眠覚醒、早期離床を実施していた。一方、せん妄や認知症による意思疎通の障害に困難感を持ち、チーム上の課題として、看護師間のケア方針や内容の不統一、医師との治療方針の共有が示された。ICUでの高齢患者へのケアプログラムにおいては、個別ケアに加え、医療チームで進める必要性が示唆された。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●主な研究論文・発表</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Suehiro Rie ; Effect of cerumen removal among institutionalized elderly individuals: Hearing and the relationship between earwax type and accumulation, Journal of the Tsuruma health science society, Kanazawa University, Vol.34 No.2, 1-11,2011.</li> <li>・ 森淳恵、末弘 理恵、荒川 満枝他：看護系大学卒業生のキャリアとキャリアアップに対する考え、大分大学高等教育センター紀要 第5号 21-27,2013.</li> <li>・ 尾野亜由美, 末弘理恵：救命救急センターに入院した後期高齢患者の睡眠の実態—非装着型睡眠計を用いた睡眠評価—, 日本老年看護学会 第23回学術集会抄録集, 163, 2018.</li> <li>・ 末弘理恵、宮脇美菜子：ICUにおける高齢患者のケアの実際、第45回日本看護学会・急性期看護学術集会、269, 2014.</li> </ul> <p>●主な科学研究費補助金</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 要支援・要介護高齢者の耳のケア効果に関する介入研究, 2008-2010, 代表</li> <li>・ ICUにおける高齢者のケアプログラムの開発, 2011-2014, 代表</li> <li>・ 手術を受ける後期高齢者におけるケアプログラムの開発, 2015-2018, 代表</li> <li>・ 術後疼痛の症状マネジメントに用いる除痛アルゴリズムと評価指標の構築, 2019-2023, 分担</li> <li>・ 認知症を有する後期高齢者のがん患者の人生の最終段階を支える看護のモデル化, 2016-2019, 分担</li> </ul> <p>●受賞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 重度認知症高齢者の耳垢蓄積と耳のケアの実態, 日本認知症ケア学会・石崎賞, 2007.</li> </ul>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科呼吸器・乳腺外科学講座・教授
氏名	杉尾 賢二 (Sugio Kenji)
取得学位	医学博士、九州大学、1988年3月
SDGs目標	  



研究分野	腫瘍外科学、分子生物学
研究キーワード	肺癌、癌遺伝子、分子標的治療、がん免疫治療
研究内容	<p>●肺癌における標的分子の解析と分子標的治療の耐性に関する研究</p> <p>肺癌の標的分子、上皮成長因子受容体(EGFR)遺伝子変異の高感度スクリーニング法を開発し、チロシンキナーゼ阻害剤(TKI)に対する感受性変異と新たな耐性変異を見いだした。現在、感受性と耐性を規定するバイオマーカーの探索研究を推進し、さらに多施設共同臨床試験にて標準治療のエビデンス創出と個別化治療の推進に努めている。</p> <p>●肺癌の周術期治療の開発</p> <p>局所進行肺癌 (IB期～IIIA期) の手術成績はいまだ満足のいくものではなく、手術前後の薬物/放射線治療により治療成績を向上させる必要がある。殺細胞性抗癌剤、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤などの新規薬物の臨床試験を企画・参画し、新たな標準治療のエビデンス構築に努めている。</p> <p>●胸部悪性腫瘍に対する低侵襲手術の開発</p> <p>内視鏡手術 (胸腔鏡手術) やロボット支援下手術などを臨床に取り入れ、低侵襲手術の提供を図っている。また、それらの術式開発をすすめている。</p> <p>●肺癌、大腸癌、膵臓癌の多段階発癌に関する研究</p> <p>肺癌の多段階発癌に関与する遺伝子を同定し、癌遺伝子、腫瘍抑制遺伝子、細胞接着因子などの遺伝子変化と癌の進展・予後などとの関係を解明した。また、Epigeneticの観点からメチル化解析の共同研究を米国と行い発癌との関係を見いだした。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●肺癌における標的分子の解析と分子標的治療の開発 (論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、Osoegawa A, ...Sakai K, Nishio K, <u>Sugio K</u>. High incidence of C797S mutation in patients with long treatment history of EGFR-TKIs including osimertinib. JTO Clin Res Rep. 2:100191</li> <li>2021年、Sakai K, ... <u>Sugio K</u>, et.al. Tumor mutation burden as a biomarker for lung cancer patients treated with pemetrexed and cisplatin (the JIPANG-TR). Cancer Sci. 112:388-396</li> <li>2018年、Hashimoto T, Osoegawa A, Takumi Y, Abe M, Kobayashi R, Miyawaki M, Takeuchi H, Okamoto T, <u>Sugio K</u>. Intratumoral heterogeneity of copy number variation in lung cancer harboring L858R via immunohistochemical heterogeneous staining. Lung Cancer. 124:241-247</li> </ol> <p>●肺癌の周術期治療の開発 (論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2022年、Tada H, <u>Sugio K</u>, et.al. Randomized phase III study of gefitinib versus cisplatin plus vinorelbine for patients with resected stage II-IIIa non-small-cell lung cancer with EGFR mutation (IMPACT). J Clin Oncol. 40:231-241</li> <li>2022年、Takahashi T, <u>Sugio K</u>, et.al. Predictive value of EGFR mutation in stage II/III non-squamous NSCLC patients treated with platinum doublet postoperative chemotherapy. Cancer Sci. 113:287-296</li> <li>2021年、Yamaguchi H, ... <u>Sugio K</u>. A Phase II Study of Osimertinib for Radiotherapy-Naive Central Nervous System Metastasis From NSCLC: Results for the T790M Cohort of the OCEAN Study (LOGIK1603/WJOG9116L). J Thorac Oncol. 16:2121-2132</li> </ol> <p>●受賞 1. 2006年、日本肺癌学会 篠井・河合賞</p>

所属・職位	医学部医学科耳鼻咽喉科学講座・教授	
氏名	鈴木 正志 (Suzuki Masashi)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1988年10月	
SDGs目標		



研究分野	上気道粘膜免疫
研究キーワード	粘膜免疫、経鼻ワクチン、インフルエンザ菌、急性上気道炎
研究内容	<p>① <b>インフルエンザ菌由来ワクチン抗原による気道粘膜免疫に関する研究</b>  免疫アプローチである経鼻および全身免疫ルートによるインフルエンザ菌ワクチン抗原の外膜蛋白(OMP)による粘膜免疫誘導を行い、抗CTLA-4抗体、PD-1/2抗体の全身投与との併用にて、全身免疫応答の活性化により粘膜免疫応答が賦活化するかどうか検証し、新しいワクチン治療法の開発を行っている。コラゲナーゼ処理や比重遠沈法などにより単核球を採取して、CD4、CD8陽性T細胞においてCD69、CD25、CD62L、CD44などの活性化マーカーにてTリンパ球の状態や、B220陽性B細胞、CD11b陽性顆粒球、CD11c陽性樹状細胞などの活性化についても解析し、セルソーターを用いて各臓器よりT細胞分離後にRNAを抽出し、innate and adaptive immune responses PCR arrayを施行し、Tリンパ球のカスケードをRNAレベルから解析し、免疫応答でのカスケードの解明および細胞内シグナル伝達の解析を行い、抗CTLA-4抗体、PD-1/2抗体投与後の免疫誘導の変化した因子を探索している。</p> <p>② <b>自然リンパ球と経鼻免疫による上気道粘膜免疫応答に関する研究</b>  自然リンパ球の刺激によりB細胞が活性化し抗体産生を誘導されることが最近の研究で報告されており、インフルエンザ菌のワクチン候補であるOMPおよびその一部であるP6を抗原として適切なアジュバントにて経鼻免疫誘導後に、鼻粘膜関連リンパ組織、頸部リンパ節、脾臓における自然リンパ球の動態について解析しており、自然リンパ球のうちILC2をセルソーターにて分離したのちに、各臓器における自然リンパ球のサイトカイン、ケモカイン発現について解析を行っている。各組織からB細胞や樹状細胞を分離してILC2と共培養を行い、OMPおよびP6特異的抗体産生効果および樹状細胞の活性化について検証し、経鼻粘膜免疫賦活と自然リンパ球との関連性についての研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>①科学研究費  1) 科学研究費 基盤研究 (C) : 令和2年度~令和5年度  研究課題名: 免疫チェックポイント阻害による上気道粘膜免疫応答賦活化  (研究代表者: 鈴木正志、研究経費4,290,000円)  2) 科学研究費: 基盤研究 (C) : 平成29年度~令和元年度  研究課題名: 上気道粘膜免疫反応と自然リンパ球の関与  (研究代表者: 鈴木正志、研究経費3,500,000円)</p> <p>②学会発表  19<sup>th</sup> Symposium of Otitis Media, June 4-8, 2017, Goldcoast (Australia)  Masashi Suzuki, Takashi Hirano, Yoshinori Kadowaki, Satoru Kodama, Toshiaki Kawano. : Phase variation of nontypeable <i>Haemophilus influenzae</i> affect mucin production in the middle ear.</p> <p>③論文  Hirano T., Kodama S., Kawano T., Suzuki M. Accumulation of regulatory T cell and chronic inflammation in the middle ear in a mouse model of chronic otitis media with effusion induced by combined eustachian tube blockage and nontypeable <i>Haemophilus influenzae</i> infection. <i>Infect Immun</i>, 2016;84:356-364.</p>



所属・職位	医学部医学科診断病理学講座・教授	
氏名	駄阿 勉 (Daa Tsutomu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、1994年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	診断病理学
研究キーワード	唾液腺腫瘍病理
研究内容	<p>●唾液腺腫瘍の病理診断に関する研究</p> <p>唾液腺は食物摂取に関するQOLに関与する重要な臓器であり、大唾液腺、小唾液腺の形で頭頸部領域に広く分布する。他の臓器に例にもれず、唾液腺にも腫瘍性病変が発生するが、他の臓器とことなり、腫瘍発生に関与する細胞が多彩であり、特に筋上皮細胞が関わることにより、その組織形態が多彩であり、組織型の種類も多く、加えて、唾液腺腫瘍は比較的稀であることから、一般病理医にとっては診断の難しい領域となっている。また、近年、キメラ遺伝子や、特定の遺伝子の突然変異等、病理診断に直結する分子病理学異常に関する知見の蓄積が著しく、分子生物学的手法の診断への応用が、正確な病理診断に必須となってきている。当講座においては、免疫染色、PCR、DNAシーケンス解析、RT-PCR、FISHを用い、唾液腺腫瘍の診断に資する新規マーカの検出を試みている。</p> <p>●腫瘍の転移に関する研究</p> <p>健診体制整備による早期発見、有効な分子標的薬の開発等により、癌の治癒率は近年著しく向上しているが、悪性腫瘍は、いまなお、死亡原因一位の地位を保っている。その悪性腫瘍の完治が困難であることの主要因は腫瘍の転移である。転移に関する細胞生物学的な要素として、上皮間葉変換、細胞間接着等があげられ、それに関する分子異常が次第に明らかとなってきているが、いまだ解明すべき部分が多い現象である。当講座では、乳癌、大腸癌等の臨床材料を用い、免疫染色や分子病理学的手法を応用し、転移のメカニズムの解明を試みている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年. Immunohistochemical Reactivity of Prostate-Specific Membrane Antigen in Salivary Gland Tumors. Head Neck Pathol.</li> <li>2021年. Clinical significance of sarcoid-like reaction in lymph nodes of gastric cancer patients. J Surg Oncol.</li> <li>2019年. A Biotin Tagging Immunoelectron Microscopy for Paraffin-embedded Sections. Appl Immunohistochem Mol Morphol</li> <li>2018年. Difference in transducin-like enhancer of split 1 protein expression between basal cell adenomas and basal cell adenocarcinomas - an immunohistochemical study. Diagn Pathol</li> <li>2013年. PLAG1 and CYLD do not play a role in the tumorigenesis of adenoid cystic carcinoma. Mol Med Rep.</li> <li>2009年. Alteration of SMAD4 does not participate in tumorigenesis of adenoid cystic carcinoma of the salivary gland. Mol Med Rep</li> </ol>



所属・職位	医学部医学科循環器内科・臨床検査診断学講座・教授	
氏名	高橋 尚彦 (Takahashi Naohiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1993年3月	
SDGs目標		

研究分野 循環器内科学

研究キーワード 不整脈, 心房細動, 心外膜脂肪

研究内容 ●心房細動, 心房線維化, 炎症, 心外膜脂肪に関する研究

2004年から, “心房細動は生活習慣病と密接に関係し炎症性心房線維化がその主たる病態である”と考え研究を続けてきた。2013年からヒト開胸手術時に得られる心房細動患者の左心耳切片心外膜脂肪の解析に着手した。連続59例の左心耳標本を解析し, “心外膜脂肪そのものの顕著な線維化が心房細動重症化をもたらす”という新事実を明らかにした (論文1, 下図)。



また“心外膜脂肪中の悪玉サイトカイン (IL-6, MCP-1, TNF- $\alpha$ ) の含量が多いほど隣接する心房筋の線維化が顕著で心房細動が重症である”ことも突き止めた。引き続き, 独自の器官培養法を確立し, ヒト心外膜脂肪が真に心房線維化を惹起することを証明し, そのシグナル伝達系を解明した (論文2)。平成31年度には基盤(B)に採択され研究を大きく推進できた。

●Brugada症候群, 早期再分極症候群に関する研究




2006年にJ波の顕著な変動を示す症例を報告し (論文3), NEJM誌に引用された。心室細動抑制にシロスタゾールとベプリコールの併用が有用であることを証明し (論文4), 2020年改訂版不整脈薬物治療ガイドラインに採用された。

研究業績・アピールポイント 心外膜脂肪と心房細動の関連についてヒト組織を用い世界のトップに位置する研究を継続している。Brugada症候群, 早期再分極症候群も独創性の高い論文を多く公表してきた。

- 論文
1. Abe I, Takahashi N, et al. Association of fibrotic remodeling and cytokines/chemokines content in epicardial adipose tissue with atrial myocardial fibrosis in patients with atrial fibrillation. Heart Rhythm. 2018 Nov;15(11):1717-1727.
  2. Kira S, Takahashi N, et al. Role of angiotensin-like protein 2 in atrial fibrosis induced by human epicardial adipose tissue: Analysis using an organo-culture system. Heart Rhythm. 2020 Sep;17(9):1591-1601.
  3. Shinohara T, Takahashi N, et al. Characterization of J wave in a patient with idiopathic ventricular fibrillation. Heart Rhythm. 2006 Sep;3(9):1082-4.
  4. Shinohara T, Takahashi N, et al. Combination therapy of cilostazol and bepridil suppresses recurrent ventricular fibrillation related to J-wave syndromes. Heart Rhythm. 2014 Aug;11(8):1441-5.

所属・職位	医学部医学科生物物理学講座・教授	
氏名	谷川 雅人 (Tanigawa Masato)	
取得学位	博士 (理学)、広島大学、1995年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	医療情報学、生物物理学
研究キーワード	ベイズ推定、情報統計力学、原子間力顕微鏡
研究内容	<p><b>●少数検査データ時のベイズ統計解析による重症度の確率の決定法</b></p> <p>腎生検をはじめとする様々の検査データからIgA腎症等の進行段階を正確に推定し、それぞれの患者の置かれた状況を考慮した治療指針を、医療現場に提供する。十分な数の試料が、確保できない場合もある。少数の試料しか得られない場合において、重症度をベイズ統計を用いて確率分布として導き出し、それぞれの患者の実情と併せて考えることのできる方法を確立する。また、IgA腎症の場合、病変と考えられる糸球体には、巣状糸球体硬化症、各種増殖性腎炎、硝子化、半月体形成など様々なものがあり、この病気にかかる年齢も様々である。この中で、どのような場合に予後が悪く、透析療法に至りやすいのかを、マルコフ連鎖モンテカルロ法を拡張した分析方法を検討している。また十分な数の用意はできない場合の解析方法として、回帰係数のいくつかを0にすることによって、スパース性を維持した解析方法を検討し、この結果を通常のGibbs sampler等のMCMC法によって推定された事後分布と比較し、推定精度や予測精度がどのように変化するかを詳細に調べ、有用性を明らかにした。さらに、この結果を用いて、どのような病変（分布）で、病気がどのように進行するかの確率分布を明らかにする。</p> <p><b>●対イオンによるDNAの局所構造変化がタンパク質との相互作用や凝集に及ぼす影響</b></p> <p>G-quadruplex等のDNA四重鎖を取り得る配列がゲノム中に多数あり、これらがガンをはじめとする様々な病気にかかわっていることが分かってきた。我々はこれまで、このG-quadruplex形成過程や薬剤となる小分子との相互作用をCDストップフローなどによって明らかにしてきた。また、DNAの溶液中での挙動を1分子観察によって明らかにしてきた。これらの成果をもとに、本研究では、G-quadruplexが形成されることに伴い、その近くのDNA鎖の構造がどのように変化するかを明らかにした。具体的には、G-quadruplexの形成過程を実験とシミュレーションによって明らかにし、形成段階に応じた周囲のDNAの変化を一分子観察によって調べた。また、さまざまな小分子（薬剤候補）を加えた場合について、この変化にどのような影響を及ぼすのかを調べた。</p>
研究業績・アピールポイント	<p><b>●論文</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. MicroRNA-375 is downregulated in gastric carcinomas and regulates cell survival by targeting PDK1 and 14-3-3<math>\zeta</math>. Cancer Research, 70, 2339-2349, 2010.</li> <li>2. Detection and mapping of mismatched base pairs in DNA molecules by atomic force microscopy., Nucleic Acids Res., 電子版 28, E38, 2000.</li> </ol> <p><b>●国際学会</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Analysis of Japanese histological IgA classification using probabilistic analysis associated with the Bayesian theorem., American Society of Nephrology Annual Meeting ,2019.</li> <li>2. How the Circular and Linear Conformational Fluctuations of Giant DNA Molecules Change with the Viscosity of the Solvent., 65<sup>th</sup> Biophysical Society Annual Meeting, 2021.</li> </ol>

所属・職位	医学部医学科精神神経医学講座・教授	
氏名	寺尾 岳 (Terao Takeshi)	
取得学位	博士 (医学)、産業医科大学、1992年7月	
SDGs目標	 	

研究分野	精神神経科学
研究キーワード	双極性障害、リチウム、臨床精神薬理、リワーク、実存的アプローチ
研究内容	<p>●リチウムと自殺予防に関する研究：リチウムには気分安定作用以外にも衝動性や攻撃性を抑える作用があって、気分安定作用を発揮する濃度よりもずっと低い濃度つまり微量でも効果があることがわかってきました。そこで、水道水に含まれるリチウム濃度と自殺率の相関を、大分県→九州→全国とフィールドを広げ調査し、水道水リチウム濃度が高い地域は自殺率が低いことを突き止めました (論文1)。特に、大分県における研究は英国BBCのWorld Newsで取り上げられました。 (関連リンク：<a href="http://news.bbc.co.uk/2/hi/health/8025454.stm">http://news.bbc.co.uk/2/hi/health/8025454.stm</a>)</p> <p>●気分障害から認知症へ移行する疾患に関する研究：「うつ病→双極性障害→認知症という経過を、偶発的にではなく、必然的にたどる特異的な一群が存在し、その背景にGSK-3が関与している」という仮説を考え、最近報告しました (論文2)。この仮説が正しければ、この一群がいわゆる疾患単位として成立し、Mental GSK-3 diseaseと呼称できるのではないかと考えています。</p> <p>●実存的アプローチに関する研究：実存哲学に基づく精神療法を研究しています (論文3)。 ※詳細、その他研究関連リンク：<a href="https://www.oita-u-psy.jp/research/index.html">https://www.oita-u-psy.jp/research/index.html</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>●科研 基盤研究C (研究代表者)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021~2024年「うつ病から双極性障害を経て認知症に進展する一群におけるGSK-3遺伝子多型の関与」</li> <li>2018~2020年「双極I型障害とII型障害の違いに着目した画像所見や薬物反応性の比較研究」</li> <li>2015~2017年「気質から見た双極性障害の病態進展と治療反応性の予測」他2課題 (関連リンク：<a href="https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000080217413/">https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000080217413/</a>) 他公的研究助成11課題、民間研究助成獲得</li> </ol> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Kugimiya T, Ishii N, Kohno K, Kanehisa M, Hatano K, Hirakawa H, Terao T. Lithium in drinking water and suicide prevention: The largest nationwide epidemiological study from Japan. <i>Bipolar Disord.</i> 2021 Feb;23(1):33-40</li> <li>Terao T, Ishii N, Hirakawa H. A specific group of patients with diagnostic conversion from depression to bipolar disorder and finally to dementia as a mental GSK-3 disease: A hypothesis. <i>Bipolar Disord.</i> 2020 Jun;22(4):356-359.</li> <li>Sakai A, Terao T, et al. Existential and Mindfulness-Based Intervention to Increase Self-Compassion in Apparently Healthy Subjects (the EXMIND Study): A Randomized Controlled Trial. <i>Front Psychiatry.</i> 2019 Aug 2;10:538.他多数 (関連リンク：<a href="https://www.oita-u-psy.jp/achievement/251/">https://www.oita-u-psy.jp/achievement/251/</a>)</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年. 精神科薬物療法に再チャレンジ</li> <li>2020年. 精神科とは無縁と思っていたあなたが困ったときに精神科を味方につけるための本</li> <li>2019年. 双極性障害の診かたと治しかた-科学的根拠に基づく入門書 他多数 (関連リンク：<a href="https://www.oita-u-psy.jp/book/">https://www.oita-u-psy.jp/book/</a>)</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1998年. 日本臨床神経精神薬理学会海外研修員派遣制度基金受賞</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部




福祉健康科学部

その他学内施設等




所属・職位	医学部附属医学教育センター・教授	
氏名	中川 幹子 (Nakagawa Mikiko)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1989年6月	
SDGs目標	  	



研究分野	循環器病学、性差医学
研究キーワード	心電図、不整脈、自律神経、性差
研究内容	<p>●<b>心電図や不整脈の性差に関する研究</b></p> <p>心電図のQT時間、STレベルの年齢別性差、女性における性周期や妊娠の影響など、性ホルモンと関連付けた多数の成果を報告した（論文1,2）。世界で初めての報告も含まれており、性差医学に関する原著、総説や著書にも頻繁に引用されている。</p> <p>●<b>早期再分極・J波症候群に関する研究</b></p> <p>ブルガダ症候群やJ波症候群に注目し、これらの疾患における自律神経の影響や性差、またJ波の成因に心室内の偽腱索や乳頭筋等の心内構造物、心外膜側の急性炎症や胸郭異常による慢性炎症が関連している可能性を世界で初めて報告した（論文3,4,5）（著書1,2）。</p> <p>●<b>不整脈と心臓自律神経機能に関する研究</b></p> <p>ヒトを対象に不整脈の発生と密接な関係がある自律神経機能に関する研究を行い、不整脈のリスク層別化に重要な心電図学的指標について多くの成果を発表した。また圧受容体反射（BRS）に関する研究では、我々独自の評価法を開発し（論文6）、2型糖尿病患者の長期的な心血管イベントの予測に有用である可能性を報告した。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2005年, Gender differences in autonomic modulation of ventricular repolarization in humans. J Cardiovasc Electrophysiol.</li> <li>2006年, Influence of menstrual cycle on QT interval dynamics. PACE.</li> <li>2012年, Electrocardiographic characteristics of patients with false tendon: possible association of false tendon with J waves. Heart Rhythm.</li> <li>2021年, Transient manifestation of J waves and Brugada pattern electrocardiograms in patients with acute pericarditis. JACC Clin Electrophysiol.</li> <li>2021年, Possible role of narrow anteroposterior thorax in patients with Brugada syndrome. JACC Clin Electrophysiol.</li> <li>2001年, Development of a new method for assessing the cardiac baroreflex: response to downward tilting in patients with diabetes mellitus. Heart.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2012年, 不整脈の検査法. 1.新しいホルター心電図. 不整脈学. 南江堂.</li> <li>2013年, 自律神経とJ波. J波症候群. 医学出版社</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2010年, 大分大学女性研究者奨励賞 最優秀賞</li> <li>2011年, 第4回日本性差医学・医療学会 優秀演題賞</li> </ol>




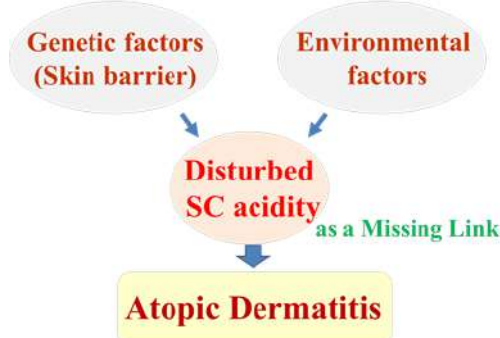
所属・職位	医学部医学科おおいた地域医療支援システム構築事業講座・教授	
氏名	奈須 家栄 (Nasu Kaei)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1995年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	産科婦人科学	
研究キーワード	子宮内膜症、卵巣癌	
研究内容	<p><b>1) 子宮内膜症における瘢痕形成に関する研究</b>  子宮内膜症における瘢痕形成の実験モデルとして、子宮内膜症間質細胞のコラーゲンゲル3次元培養法を確立した。その結果、子宮内膜症間質細胞は正所性子宮内膜間質細胞より強い収縮能を有することが分かった。子宮内膜症細胞では正所性子宮内膜間質細胞に比べて筋線維芽細胞への分化が著明であること、Ras homology (Rho) A、Rho-associated coiled-coil-forming protein kinase (ROCK)-IおよびROCK-IIの発現が増強し、mevalonate-Rho/ROCK pathwayが活性化しているためと考えられた。</p> <p><b>2) 子宮内膜症におけるエピジェネティクス異常に関する研究</b></p> <p>①microRNA (miRNA)の発現異常  正所性子宮内膜間質細胞と比較して子宮内膜症間質細胞で発現が変化しているmiRNAについて、miRNA microarrayを用いて網羅的に解析を行い、12個のmiRNAを同定した。個々のmiRNAの機能に関する検討から、miRNAの発現異常が子宮内膜症の病態に関与していることが明らかとなった。</p> <p>②ヒストンのアセチル化異常  子宮内膜症間質細胞ではヒストンのアセチル化が抑制されていた。ヒストン脱アセチル化酵素阻害剤によって子宮内膜症間質細胞におけるヒストンH3、H4のアセチル化、細胞増殖の抑制と細胞周期の停止およびapoptosisが誘導された。ヒストン脱アセチル化酵素阻害剤は子宮内膜症の治療薬として有用であることが示唆された。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>1. Nasu K, Yuge A, Tsuno A, Narahara H. Mevalonate-Ras homology (Rho)/Rho-associated coiled-coil-forming protein kinase (ROCK)-mediated signaling pathway as a therapeutic target for the treatment of endometriosis-associated fibrosis. <i>Curr Signal Transduct Ther</i> 5: 141-148, 2010.</p> <p>2. Nasu K, Kawano Y, Kai K, Aoyagi Y, Abe W, Okamoto M, Narahara H. Aberrant histone modifications in endometriosis. <i>Front Biosci</i> 19: 1215-1226, 2014.</p> <p>3. Nasu K., Aoyagi Y., Zhu R., Okamoto M., Yano M., Kai K., Kawano Y. Role of repressed microRNAs in endometriosis. <i>Med Mol Morphol</i> 55: 1-7, 2022.</p>	



所属・職位	医学部医学科微生物学講座・教授	
氏名	西園 晃 (Nishizono Akira)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1989年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	ウイルス学、感染症学、ワクチン学、渡航医学	
研究キーワード	狂犬病、新興・再興感染症、渡航医学、熱帯医学、ワクチン	
研究内容	<p>新興・再興ウイルス感染症の病態解明、なかでも狂犬病ウイルス感染の発症病理機構の解明に力を注いでいる。狂犬病は既に本邦で最後の報告がなされてから50年以上が経過し、我が国は世界でも数少ない狂犬病の清浄国となっている。しかしながら昨今の疾病のグローバル化に伴い、狂犬病は再び我が国において再興する可能性のあるre-emergingウイルス感染性疾患として認識されている。国内にある大学医学部において狂犬病研究を行う唯一の講座としてその独自性を生かし、未だに世界中で多くの犠牲者のいる狂犬病について、ウイルス学的側面からばかりでなく、疫学的重要性さらには予防・治療へ向けた臨床的側面までも包含した総合的研究を行い、この疾病の重要性を次の世代にも絶やすことなく継承することを使命と考えている。</p> <p>狂犬病以外にも新型コロナウイルス、重症熱性血小板減少症候群ウイルスなどの新興ウイルス感染症について、その感染病態をグローバル（グローバル&amp;ローカル）に捉えるため、フィールドを中心としたウイルス感染症に関わる研究と、それら病原微生物が引き起こす感染病態の分子的基盤や免疫応答についての研究をその中心に据えて日々研究活動に励んでいる。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.med.oita-u.ac.jp/biseibut/">https://www.med.oita-u.ac.jp/biseibut/</a>  <a href="https://www.oita-glocal.jp/index.html">https://www.oita-glocal.jp/index.html</a>  <a href="https://japohr.blogspot.com/">https://japohr.blogspot.com/</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>○受賞：2021年日本熱帯医学会賞、2008年日本ワックスマン財団賞、1992年日本肝臓学会研究奨励賞</p> <p>○プロジェクト：AMEDとJICAによるSATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力プロジェクト）「フィリピンにおける狂犬病排除に向けたワンヘルス・アプローチ予防・治療ネットワークモデル構築」研究代表として、ワンヘルスの視点から独自に開発した狂犬病抗原・抗体迅速診断テストを駆使し、ヒトと動物の両面からの狂犬病制圧に力を注いでいる。</p> <p>○学会活動：日米医学協力研究ウイルス性疾患部会長。日本ウイルス学会、日本感染症学会日本渡航医学会、日本熱帯医学会など理事、評議員</p> <p>○行政・社会活動：大分県内各種感染症関係委員・専門部会委員（感染症専門部会、新型コロナウイルス、新型インフルエンザ、母子保健部会）</p> <p>○その他：海外渡航時に必要なワクチン接種を専門とする渡航医学の臨床</p> <p>○論文：関係論文総数 155報うち狂犬病に関するもの37報、取得特許等知財 10件</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Lateral flow devices for samples collected by straw sampling method for postmortem canine rabies diagnosis. <i>PLoS Negl Trop Dis</i>. 2021 Dec 9;15(12):e0009891. doi: 10.1371/journal.pntd.0009891. eCollection 2021</li> <li>2. Validation of serum apolipoprotein A1 in rabies virus-infected mice as a biomarker for the preclinical diagnosis of rabies. <i>Microbiol Immunol</i>. 2021 Jul 16. doi: 10.1111/1348-0421.12929.</li> <li>3. Reevaluation of the efficacy of favipiravir against rabies virus using in vivo imaging analysis. <i>Antiviral Res</i>. 2019 Dec;172:104641. doi:c Epub 2019 Oct 28.</li> <li>4. Efficacy of favipiravir (T-705) in rabies post-exposure prophylaxis. <i>J Infect Dis</i>. 2016 Apr 15; 213(8): 1253-1261.</li> <li>5. Evaluation of an improved rapid neutralizing antibody detection test (RAPINA) for qualitative and semiquantitative detection of rabies neutralizing antibody in humans and dogs. <i>Vaccine</i>. 2012 30: 3891-3896.</li> </ol>	

所属・職位	医学部医学科皮膚科学講座・教授	
氏名	波多野 豊 (Hatano Yutaka)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	皮膚科学
研究キーワード	アトピー性皮膚炎、円形脱毛症、皮膚悪性腫瘍

研究内容	<p>&lt;アトピー性皮膚炎&gt;  *アトピー性皮膚炎の病態の3つの主要な側面である「アレルギー炎症」「皮膚バリア機能」「痒み」の相互関係について研究を行ってきた。特に、タイプ2サイトカインが角層透過性バリア機能に負の影響を及ぼすことは世界に先駆けて示してきた。</p>  <p>&lt;角層 pH の異常のアトピー性皮膚炎の病態における重要性と治療・予防法への応用&gt;  &lt;円形脱毛症&gt;  専門外来における多数の患者診療を通じて治療法の向上に努めている。  &lt;皮膚悪性腫瘍&gt;  高齢者にも耐え得る、安全で有効な治療薬の開発を目指して、癌細胞株を用いた研究を推進中である。</p> 
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>アトピー性皮膚炎の病態研究では、特に、タイプ2サイトカインが角層透過性バリア機能において重要な角層セラミド産生に負の影響を及ぼすことを世界に先駆けて示してきた。この成果は、皮膚科学分野のトップジャーナルであるJournal of Investigative Dermatologyにおいて注目すべき知見として紹介され、また、免疫アレルギー学のトップジャーナルである、Journal of Allergy and Clinical Immunologyの総説の共著者として報告した。現在も、アトピー性皮膚炎の病態研究についての報告を継続している。</p> <p>(参考文献)  Elias PM, Hatano Y, Williams ML  Basis for the barrier abnormality in atopic dermatitis: 'outside-inside-outside' pathogenic mechanisms  J Allergy Clin Immunol 2008 Jun;121(6):1337-43</p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科細胞生物学講座・教授	
氏名	花田 俊勝 (Hanada Toshikatsu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2000年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	疾患生物学、分子生物学	
研究キーワード	ゲノム工学、疾患モデル動物、遺伝性希少疾患	
研究内容	<p>1. 希少遺伝性疾患の病態解明</p> <p>ゼブラフィッシュはヒト遺伝子と約70%の相同性を持ち、コスト面や動物愛護の観点から医学実験動物として有用である。また、低分子化合物のin vivoスクリーニングや、体の透明性から蛍光タンパク質を用いた形態やシグナルの可視化が可能であるなど多くの利点を持つ。我々は、希少遺伝性疾患で発見された遺伝子変異の疾患発症との関連性を検証するため、ゲノム編集を用いてゼブラフィッシュモデルを作製・解析している。特に、希少遺伝性疾患に多くみられるような一塩基置換等の点変異を模倣するゼブラフィッシュモデルの作製に力を入れており、独自の方法により作製効率の向上を図っている。</p>  <p>2. 機能性RNAの生体内における役割</p> <p>希少疾患である橋小脳低形成10型のモデル動物の解析から、神経変性を誘導する新たな小RNAを発見した (Nature,2013, Cell,2014)。この小RNAと他の病的RNA候補分子が実際に生体内で神経変性を惹起するか、ゼブラフィッシュを用いた実験系で検証した (BBRC,2020)。本方法は、核酸医薬を含む機能性RNAのin vivoスクリーニングとして応用可能であると思われる。</p> <p>3. ゼブラフィッシュの生体内シグナル可視化モデル</p> <p>腎臓ポドサイト障害は慢性腎不全に至る重要な病的機転であることから、ポドサイトを標的とした新規治療法の探索が進められている。我々は、ゼブラフィッシュの透明性を利用して、腎臓ポドサイト障害の可視化モデルの作製を行なっている。本モデルにより、腎臓ポドサイトを標的とした創薬を目指している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>・希少遺伝性疾患を模したゼブラフィッシュ点変異ノックインモデルの作製並びにゼブラフィッシュの生体内シグナル可視化モデルの作製をすすめている。</p> <p>論文</p> <p>1: Morisaki I, Shiraishi H, Fujinami H, Shimizu N, Hikida T, Arai Y, Kobayashi T, Hanada R, Penninger JM, Fujiki M, Hanada T. Modeling a human CLP1 mutation in mouse identifies an accumulation of tyrosine pre-tRNA fragments causing pontocerebellar hypoplasia type 10. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2021, 570:60-66.</p> <p>2: Inoue M, Miyahara H, Shiraishi H, Shimizu N, Tsumori M, Kiyota K, Maeda M, Umeda R, Ishitani T, Hanada R, Ihara K, Hanada T. Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. <i>Sci Rep.</i> 2021, 11(1):8392.</p> <p>受賞</p> <p>2016年 武田報彰医学研究助成</p>	

所属・職位	医学部医学科神経生理学講座・教授	
氏名	花田 礼子 (Hanada Reiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部




その他学内施設等

研究分野	生理学, 神経科学, 内分泌・代謝学, 病態生理学	
研究キーワード	生理機能解析, in vivoモデル, ゼブラフィッシュ, マウス, 病態モデル, 肥満・肥満関連疾患, 精神・神経疾患, 臨床応用	
研究内容	<p><b>1. 肥満関連疾患NAFLD/NASHの新たな病態形成機構の解明と創薬基盤の開発</b></p> <p>近年、肥満や肥満関連疾患に罹患する患者数が増加している。肥満の進行に伴い肝臓では非アルコール性脂肪肝疾患 (NAFLD) および非アルコール性脂肪肝炎 (NASH) を発症する。異所性脂肪蓄積によりダメージを受けた肝細胞からは細胞外にdamage associated molecular patterns (DAMPs)が放出され、肝細胞のさらなる炎症や線維化を進展させることが判明しているものの、未だ病態進展に伴う肝臓でのDAMPsの経時的な動態変化は明らかになっていない。我々は、DAMPsを時空間的に可視化するゼブラフィッシュモデルを独自に作製し解析することで、NAFLD/NASHの新たな病態機構解明と治療基盤の開発を目指している。</p>  <p><b>2. 精神・神経疾患の新たな病態機構の解明と創薬基盤の開発</b></p> <p>現代社会では過度のストレスにより、うつ病やパニック障害、心的外傷後ストレス障害 (PTSD) などの精神・神経疾患に罹患する患者数が増加している。多くの精神・神経疾患においては脳内の神経伝達物質のバランス障害をきたしているが、発症時や病態の進行に応じた神経伝達物質動態は未だ不明な点が多い。我々は、神経伝達物質動態可視化ゼブラフィッシュを作製し解析することで、精神・神経疾患の新たな病態機構の解明と新規治療法の創出に寄与したいと考えている。</p> <p><b>3. 神経ペプチドを標的とした病態機構解明と創薬基盤の開発</b></p> <p>我々は神経ペプチドを標的とした遺伝子改変マウスを作製・解析することで、肥満や精神・神経疾患における新たな病態機構を明らかにしつつあり、その知見をもとに新規薬理作用を有する抗肥満薬や精神・神経疾患に対する治療薬の開発を目指したい。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遺伝子改変ゼブラフィッシュ、遺伝子改変マウスの作製、生理学的解析</li> <li>・ 生体内でのDAMPsや神経伝達物質動態可視化ゼブラフィッシュモデルの作製、解析</li> <li>・ 肥満・肥満関連疾患モデル、精神・神経疾患モデルの作製ならびに病態生理学的解析</li> </ul> <p>【代表論文】 *責任著者</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Hanada R,*Kojima M et al. <i>Nature Med.</i> 10(10) :1067-1073. 2004</li> <li>2. Hanada R,*Penninger JM et al. <i>Nature.</i> 462(7272): 505-509. 2009</li> <li>3. Teranishi H, *Hanada R. <i>Int J Mol Sci.</i> 22(8) :4238. 2021</li> <li>4. Umeda R, *Hanada R et al. <i>Genes Cells.</i> 2022 in press</li> </ol> <p>【ホームページ】 <a href="http://www.med.oita-u.ac.jp/seiri/">http://www.med.oita-u.ac.jp/seiri/</a></p>	



所属・職位	医学部医学科解剖学講座・教授	
氏名	濱田 文彦 (Hamada Fumihiko)	
取得学位	医学博士、愛媛大学、1991年3月	
SDGs目標		
研究分野	解剖学、細胞生物学	
研究キーワード	ピロリ菌、胃がん、前立腺がん	
研究内容	<p>1) <u>ピロリ菌感染による胃がんおよび全身性疾患の発症メカニズムの解明</u></p> <p>ピロリ菌は WHO によってヒトに対して発癌性を示す細菌に分類されています。特に CagA と呼ばれる毒素をもつピロリ菌は、これをもたない菌と比較し、激しい炎症とこれを基盤とする数倍以上とも言われる強い発癌活性を示します。本プロジェクトでは、CagA の標的分子の同定を目的として、ショウジョウバエを用いたゲノム規模の遺伝学的スクリーニングを実施し、複数の新規 CagA 標的分子の同定に成功しました。我々はこれらの標的分子に焦点を絞りながら、ピロリ菌感染による胃がんおよび全身性疾患の発症メカニズムを解明していきます。</p> <p>2) <u>前立腺の分泌機構の解明</u></p> <p>前立腺がんのスクリーニングに広く用いられるPSA検査には低い前立腺がん発見率やPSAが高値を示す症例に対する過剰診療などの問題が指摘されていますが、PSAが血液中に漏出するメカニズムはもとより、前立腺の分泌制御機構はほとんど明らかになっていないのが現状です。本プロジェクトでは、ヒトの前立腺組織およびこれをもとに作製する前立腺オルガノイドを用いて、前立腺上皮細胞の分泌を制御する分子を同定し、これに焦点を当てながら、正常前立腺の分泌制御機構を解明します。さらに前立腺肥大症および前立腺がん細胞が示す分泌機構の異常やこれらの疾患におけるPSAの血中への漏出メカニズムを明らかにすることにより、前立腺の分泌機構の包括的理解と、より有効な前立腺がんスクリーニング法の開発を目指します。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>Ninomiya R et al (2021) Inhibition of low-density lipoprotein uptake by <i>H. pylori</i> virulence factor CagA. <b>Biochem. Biophys. Res. Commun.</b> 556, 192-198.</li> <li>Iwasaki K et al (2018) Chronic hypoxia-induced slug promotes invasive behavior of prostate cancer cells by activating expression of ephrin-B1. <b>Cancer Sci.</b> 109, 3159-3170.</li> <li>Tanieue K et al (2010) Sunspot, a link between Wingless signaling and endo-replication in <i>Drosophila</i>. <b>Development</b> 137, 1755-1764.</li> <li>Tran H et al. (2008) Trabad, a new positive regulator of Wnt-induced transcription with preference for binding to and cleaving K63-linked ubiquitin chains. <b>Genes Dev.</b> 22, 528-542.</li> <li>Hamada F &amp; Bienz M (2004) The APC tumor suppressor binds to C-terminal binding protein to divert nuclear <math>\beta</math>-catenin from TCF. <b>Dev. Cell</b> 7, 677-685.</li> <li>Hamada F &amp; Bienz M (2002) A <i>Drosophila</i> APC tumour suppressor homolog functions in cellular adhesion. <b>Nature Cell Biol.</b> 4, 208-213.</li> <li>Hamada F et al (1999) Negative regulation of Wingless signaling by D-Axin, a <i>Drosophila</i> homolog of Axin. <b>Science</b> 283, 1739 - 1742.</li> </ol>	






所属・職位	医学部看護学科・学科長・基盤看護学講座基礎看護学領域・教授	
氏名	原田 千鶴 (Harada Chizuru)	
取得学位	修士 (看護学)、日本赤十字看護大学、1996年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	看護管理学 基礎看護学
研究キーワード	看護管理者育成 看護人材の育成 看護職の職場適応 看護技術の伝承
研究内容	<p>1. 中小規模病院の看護管理者の管理能力向上過程についてのアクションリサーチ 「大分県中小規模病院等看護管理者支援事業」を通じ、地域の看護管理者の管理活動検討会を組織化し、ファシリテーターでの参加観察を通じ、支援者の能力向上過程と支援方法について検討している。各自の看護管理課題を看護管理者同士で共有し、互いの実践知を提供しあうことでエンパワメントされることで、看護管理者が自律して課題解決に取り組む様子が見られ、組織を超えた交流環境が管理能力の向上に関連していた。(論文1)</p> <p>2. キャリア中期 (中堅) 看護師のキャリア発達支援に関する質的研究 出産・育児・介護などライフイベントに取り組みながら働く女性看護師の就業継続意識、配置転換の経験をするることによる看護師のキャリア発達、日々の仕事を通じた看護師の成長について面接調査で、キャリア中期 (中堅) 看護師を対象にした研究である。キャリア中期の看護師が出産や育児の経験を経て専門職として就業継続するにあたり、専門職としての成長を目指す強い意識と自律的に人的環境調整や社会資源の活用する行動力が発見でき、働き続ける方法だけでなく働き続ける意思の早期形成の必要性が明らかになった。(論文2) (論文3)</p> <p>3. 看護技術の伝承における「わざ言語」に関する調査 看護技術を学ぶにあたり、学ぶべきものとは何か、どのような言葉で促されるのかに焦点をあて、わざを学ぶ側の認知プロセスを明らかにする目的で取り組んだ学際的研究である。第一線の指導者や実践者へのインタビューを通じて、それぞれの現場で「わざ言語」が作用する構造の解明を試みた。「わざ言語」は様々で、わざ言語を通して動きを学び「感覚を共有」すること、わざ言語として書かれた文字を通して、師匠の芸や過去の自身と対話し感覚を共有することが作用していることが分かった。(著書1)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文1 福田広美, 原田千鶴, 副田明美他: 中小規模病院等の人材育成に関する看護管理向上のプロセス—地域の看護ネットワークを基盤としたアクションリサーチ, 日本看護管理学会誌 25 (1), 118-128, 2021</p> <p>論文2 岐部千鶴, 原田千鶴, 宮崎伊久子, 大戸朋子: 第1子を出産した看護師の就業継続を促す経験に関する研究 日本看護学会論文集 看護管理(47)pp86-89, 2017</p> <p>論文3 後藤啓子, 原田千鶴, 宮崎伊久子: 一般病棟から緩和ケア病棟に配置転換となったキャリア中期看護師の学び 日本看護学会論文集 看護管理(48)pp321-324 2018</p> <p>著書1 生田久美子, 北村勝朗, 原田千鶴ほか「わざ言語 - 感覚の共有を通しての「学び」へ— 慶応義塾大学出版会, pp163-187 pp335-361 2011</p>

所属・職位	医学部医学科医療安全管理医学講座・教授	
氏名	平松 和史 (Hiramatsu Kazufumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1992年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	医療安全管理学、感染制御学
研究キーワード	緑膿菌感染症、院内感染対策、医療事故防止
研究内容	<p>緑膿菌感染症の制御に関する研究</p> <p>緑膿菌は環境に広く存在し、易感染宿主に対して重篤な感染症を呈する。緑膿菌は様々な抗菌薬に対して自然耐性を示し、抗緑膿菌作用を有する抗菌薬に対しても獲得耐性を示す場合も多い。こうしたことから抗菌薬に依存しない緑膿菌感染症の制御は重要であり、その一つにワクチンが考えられている。私たちは緑膿菌線毛に着目し、線毛蛋白を用いたワクチンの可能性について研究を行っている。緑膿菌線毛蛋白をマウスに経気道的に免疫することで、緑膿菌肺炎によるマウスの死亡を抑制することを示した。また肺洗浄液中の抗緑膿菌線毛蛋白IgAやIgG抗体の上昇が致死抑制に重要であることも明らかにした。線毛蛋白のペプチドワクチンやDNAワクチンの可能性について、検討を行っている。</p> <p>院内感染対策に関する調査・研究</p> <p>新型コロナウイルスや薬剤耐性菌など院内で伝播、拡散する病原体は多く存在する。こうした病原体が易感染宿主の多い院内で拡がると、入院患者の生命予後に大きく影響する。院内や地域レベル、全国レベルでのサーベイランスを行い、様々な耐性菌などの病原体の検出状況のモニタリングを行っている。さらに、検出された病原体の遺伝子レベルでの解析を行い、病原体の拡がりを調査し、その感染防止策について検討を行っている。</p> <p>医療事故防止に関する調査・研究</p> <p>ヒューマンエラーは様々な場面で生じ、医療におけるエラーは重大な医療事故となる場合がある。こうしたエラーを集積し、その防止策を検討している。さらに医療事故調査制度に基づく調査に参加し、医療事故の発生要因や再発防止策の検討を実施している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>緑膿菌感染症をはじめとする各種感染症に関する基礎的、臨床的研究を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.Hashimoto T, Yahiro T, Yamada K, Kimitsuki K, Okuyama MW, Honda A, Kato M, Narimatsu H, Hiramatsu K, Nishizono A. Distribution of Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome Virus and Antiviral Antibodies in Wild and Domestic Animals in Oita Prefecture, Japan. <i>Am J Trop Med Hyg.</i> 2022 Feb 28;tpmd211130.</li> <li>2.Yoshikawa H, Komiya K, Yamamoto T, Fujita N, Oka H, Okabe E, Yamasue M, Umeki K, Rubin BK, Hiramatsu K, Kadota J. Quantitative assessment of erector spinae muscles and prognosis in elderly patients with pneumonia. <i>Sci Rep.</i> 2021 Feb 22;11(1):4319.</li> <li>3.Yoshioka D, Kajiwara C, Ishii Y, Umeki K, Hiramatsu K, Kadota J, Tateda K. Efficacy of <math>\beta</math>-Lactam-plus-Macrolide Combination Therapy in a Mouse Model of Lethal Pneumococcal Pneumonia. <i>Antimicrob Agents Chemother.</i> 2016 Sep 23;60(10):6146-54.</li> <li>4.Miyajima Y, Hiramatsu K, Mizukami E, Morinaga R, Ishii H, Shirai R, Kishi K, Tokimatsu I, Saikawa T, Kadota J. In vitro and in vivo potency of polymyxin B against IMP-type metallo-beta-lactamase-producing <i>Pseudomonas aeruginosa</i>. <i>Int J Antimicrob Agents.</i> 2008 Nov;32(5):437-40.</li> <li>5.Ohama M, Hiramatsu K, Miyajima Y, Kishi K, Nasu M, Kadota J. Intratracheal immunization with pili protein protects against mortality associated with <i>Pseudomonas aeruginosa</i> pneumonia in mice. <i>FEMS Immunol Med Microbiol.</i> 2006 Jun;47(1):107-15.</li> </ol>

所属・職位	医学部医学科脳神経外科学講座・教授	
氏名	藤木 稔 (Fujiki Minoru)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1990年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	脳神経外科学
研究キーワード	神経外傷学、脳卒中、脳腫瘍、磁気刺激

研究内容	<p>1. 神経外傷学を俯瞰的・網羅的病態解析(業績[1][4]) 脳神経外傷・脳卒中は発症直後の急性期のみならず、亜急性期から慢性期に至る病態を俯瞰的に解決する必要がある。重度障害に加え、高次脳機能障害を克服することで真の社会復帰を目指す。</p> <p>2. 脳の磁気刺激を脳神経外科学臨床応用へ(業績[1][2][3][4][5]) 脳腫瘍手術には確実性安全性が必須である。正確な術前脳機能評価を術中・術後経時的に行うことを可能にする新規デバイスを開発した。安全性・有効性の検証後、脳神経外科学臨床応用可能なシステム構築を目指す。</p> <p>3. 神経科学を国際共同研究へ(業績[2][6])</p>
	 

研究業績・アピールポイント	<p><b>研究根幹を成す知的財産と原著</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>藤木 稔 非侵襲的ヒト優位半球・大脳運動性言語野機能判定装置 特願2018-137499号</li> <li>藤木 稔 神経系細胞の増殖を活性化させるための磁気の制御方法、及び脳・運動機能再建システム 新規特許出願中 特願2018-164498; (2018年7月23日; 2018年9月3日出願)</li> <li>藤木 稔, 磁気刺激コイル 特開2012-187149; (2011年3月8日出願)</li> <li>Fujiki M, W Matsushita, Kawasaki Y, Fudaba H. Monophasic-Quadripulse Theta Burst Magnetic Stimulation for Motor Palsy Functional Evaluation After Intracerebral Hemorrhage. Front Integr. Neurosci. Apr; 2022.</li> <li>Fujiki M, Kuga K, Ozaki H, Kawasaki Y, Fudaba H. Blockade of Motor Cortical Long-Term Potentiation Induction by Glutamatergic Dysfunction Causes Abnormal Neurobehavior in an Experimental Subarachnoid Hemorrhage Model. Front Neural Circuits. Apr 9;15: 670189. 2021.</li> <li>Fujiki M, Yee KM, Steward O. Non-invasive High Frequency Repetitive Transcranial Magnetic Stimulation (hfrTMS) Robustly Activates Molecular Pathways Implicated in Neuronal Growth and Synaptic Plasticity in Select Populations of Neurons. Front Neurosci. 16; 14: 558. 2020.</li> </ol>
---------------	---

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

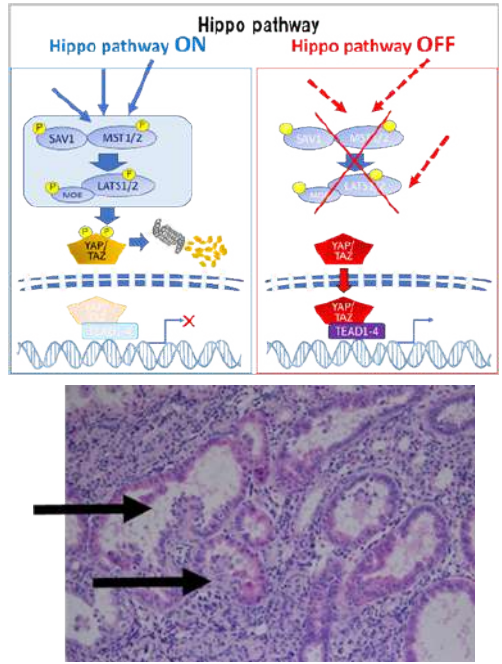
理工学部

福祉健康科学部


その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科医学生物学講座・教授	
氏名	松浦 恵子 (Matsuura Keiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1992年12月	
SDGs目標	   	

研究分野	医学 ダイバーシティ
研究キーワード	腎癌, 悪性, ノックアウトマウス, 適正飲酒, ダイバーシティ
研究内容	<p><b>1. 悪性度腎癌のゲノム解析とHippoパスウェイノックアウトマウス作成</b></p> <p>腎臓にできる癌の約80%を占める淡明細胞性腎細胞癌は、組織学的に低悪性度と高悪性度に分類され、その予後は全く異なる。ゲノム解析により高悪性度腎細胞癌は14番染色体に欠失が認められ、SAV1遺伝子の発現低下が悪性化をもたらしていることが示唆された。SAV1遺伝子がコアコンポーネント(主要因子)の一つであるHippoパスウェイというシグナル伝達経路の異常(右図OFF)をもたらしていることがわかった。そこでHippoパスウェイを腎臓特異的に働かないようにしたSAV1ノックアウトマウスを作成したところ、腎尿管の異型増殖がみられた(右図矢印)ことから、Hippoパスウェイの異常は腎癌悪性化に関わる可能性が見いだされている。</p> <p><b>2. 適正飲酒のための臨床研究</b></p> <p>飲酒後の自覚症状や他覚検査による臨床研究を行い、適正飲酒の推進を目指している。</p> <p><b>3. ダイバーシティの推進</b></p> <p>大分大学ダイバーシティ推進本部長として、企業等と連携し地域でダイバーシティを推進している。共同研究等を通じた女性研究者・技術者のキャリアアップ、ダイバーシティ・男女共同参画に関する意識改革、セミナー、教育、意識調査、女性医療人支援等を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1.Hippo pathwayの腎臓特異的ノックアウトマウスを作成・解析中である</p> <p>【代表的論文】 1) Nakada C et al. <b>J. Pathol.</b>, 251(1), 12-25 <b>2020</b>.                  2) Takahashi M et al. <b>Cancer Sci.</b>, 107(4): 417-23, <b>2016</b>.                  3) Kai T et al. <b>J. Pathol.</b>, 239(1): 97-108, <b>2016</b>.                  4) Matsuura K et al. <b>Histopathology</b>,64(2), pp306-309, <b>2014</b>                  5) Narimatsu T et al. <b>Cancer Medicine</b>, Oct 15., pp1-13, <b>2014</b>                  6) Matsuura K et al. <b>BMC Cancer</b>, 20;11(1):523, pp1-10, <b>2011</b>                  7) Inoue T et al. <b>Cancer Sci</b>, 103(3), pp569-576, <b>2011</b>                  8) Yoshimoto T et al. <b>J Pathol</b>, 213, pp392-401, <b>2007</b></p> <p>2. UMIN-CTR臨床試験「麦焼酎の代謝に関する研究 ―アルコール摂取後の呼気中濃度と精神運動機能の経時的変化―」</p> <p>3. 令和3年度 第5回日本ダイバーシティ学会 大会長                  文部科学省科学技術人材育成費補助事業「平成29年度ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)」プロジェクトリーダー</p>





所属・職位	医学部医学科脳神経内科学講座・教授	
氏名	松原 悦朗 (Matsubara Etsuro)	
取得学位	博士 (医学)、群馬大学、1995年11月	
SDGs目標	  	
研究分野	神経科学、神経内科学	
研究キーワード	認知症、アルツハイマー病 (AD)、疾患修飾薬、先制医療薬、セラノスティクス	
研究内容	<p>① <u>ADの発症病態解明を基盤とした画期的診断法・治療法・予防法開発</u></p> <p>-1 :<u>細胞外Aβオリゴマー標的抗体治療薬 (疾患修飾薬) 開発</u> : ADの発症基盤分子であるAβオリゴマー特異抗体を作製し、その脳内特異的な制御でADモデルマウスの記憶障害発症予防とシナプス保護効果を実証して、AβオリゴマーがADの発症分子基盤かつ治療標的である傍証を得る。Aβオリゴマー特異的抗体の特許を取得して、そのライセンスアウト先製薬企業を選定し、ヒト化抗体として臨床試験を終了させ治療薬承認を目指す。</p> <p>-2 :<u>細胞内Aβオリゴマー標的的先制医療薬開発</u> : 発明抗体を基盤としたBBB通過型先制医療薬を設計・開発し、ヒト病態を忠実に再現するプレクリニカルADマウス(APP-KIマウス)での前臨床試験とヒト臨床試験を経てその臨床応用を目指す。</p> <p>-3 :<u>Aβオリゴマー標的セラノスティクス開発</u> : 従来のアミロイドPET画像では検出困難なプレクリニカルADやMCI due to AD症例に、発明抗体や開発先制医療薬を活用し、診断しつつ治療も実現するセラノスティクス (Theranostics + Diagnostics) を実現する。</p> <p>② <u>前向き白杣コホート研究 (1,000人規模の健常者+軽度認知障害)</u> 軽度認知障害や認知症発症リスク因子同定に加え、生体センサデータ (歩数、睡眠時間、心拍数、会話時間等) と画像検査(MRI/FDG-PET/PiB-PET)データを駆使したテーラーメイド型認知症予防介入法と無侵襲性早期認知症診断技術の構築を行う。</p> <p>③ <u>コンフォメーション病の疾患修飾薬開発</u> 先制医療薬シードを応用し、プリオン病、前頭側頭型認知症、筋萎縮性側索硬化症、レビー小体型認知症、糖尿病性認知症のBBB通過型疾患修飾薬・先制医療薬開発を目指す。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>①-1 :ライセンスアウト発明抗体 (特許513853号) がヒト化され本邦初の純国産疾患修飾薬第I相臨床試験終了(欧州5か国+日本) : 2003年度科研費特定領域研究代表で研究開始し、国立長寿医療センター研究所アルツハイマー病研究部室長として特許申請 : 成果論文 Mol Neurodegener (2011), J Neurosci Res (2011), Life Sci (2012), Biomed Res Int (2013)</p> <p>①-2 &amp; -3: JST A-STEP代表(2011-2014), 橋渡し研究シーズA代表(2014), 同シーズB代表(2015), AMED脳科学研究戦略推進プログラム分担(融合脳2016-2020)+基盤研究B代表(2016-2022) : 取得特許 (特許513853号) と成果特許申請 : 特願2019-14596 論文 : Neurobiol Dis (2014), Curr Alzheimer Res (2018)</p> <p>② 産学官連携ヘルスケアモデル事業 (2015-2017, 代表) +AMED未来医療を実現する医療機器・システム研究開発事業 (2016-2018, 代表) : 成果論文 Front Neurol(2019), Geriatr Gerontol Int (2019), J Alzheimer Dis (2019, 2020, 2021), JAMA Netw Open (2020), Curr Alzheimer Res (2020x2, 2021), PLoS One (2020), J Prev Alzheimers Dis (2021), Biomolecules (2021)</p> <p>③ 挑戦的萌芽代表(2018-2019)、今後展開研究予定</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部




医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等





所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・教授	
氏名	三重野 英子 (Mieno Eiko)	
取得学位	博士 (保健学)、広島大学、2004年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	老年看護学、リハビリテーション看護
研究キーワード	認知症ケア、緩和ケア
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>●一般病院における非がん後期高齢者の緩和ケアプログラムの開発             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 老衰や心不全、認知症等の非がん後期高齢者の緩和ケアプログラムの開発にむけて、事例研究に取り組む。</li> </ul> </li> <li>●認知症専門外来における看護実践モデルの開発             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 認知症専門外来での看護実践をモデル化するために、初診・再診での診療過程に沿った看護ケアの内容を記述した。今後、認知症専門外来の看護師等を対象にした看護ケアの実際に関する調査や外来での検証を行い、看護実践モデルを提示する。</li> </ul> </li> <li>●認知症高齢者の薬物療法の援助に関する実態調査             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 看護師が認知症高齢者に適切・安全に薬物療法を援助できるための教育プログラムを検討することを目的に、看護師、介護家族、医師、薬剤師（病院・薬局）を対象に、看護師の薬物療法の援助に関する質問紙調査を行った。</li> </ul> </li> <li>●特定機能病院・一般病院における認知症高齢者の看護のモデル化             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 病院における認知症看護のモデル化を目指し、特定機能病院や一般病院の看護師を対象とした看護の実際と課題に関する質問紙調査、入院経験がある認知症高齢者の家族やグループホーム職員を対象とした病院看護の評価に関する質問紙調査を行った。</li> <li>・ これらの調査結果に基づき「入院時に認知症の行動・心理症状やせん妄を予測し、予防的に介入するための認知症看護プログラム」を作成し、その実行可能性について事例研究を行った。</li> </ul> </li> <li>●短期入所を利用する認知症高齢者とその家族に対するケアに関する研究             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 短期入所のケアのモデル化を目指し、まず、短期入所施設のケア責任者を対象にケアの質評価に関する質問紙調査を行った。次いで、短期入所利用者4名を対象に入所から退所までに行われたケアとその結果を参与観察と面接により記述し、施設適応を促進するケア要素を抽出した。</li> </ul> </li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●著書             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2022年、最新老年看護学、第4版、日本看護協会出版会。</li> <li>・ 2018年、系統看護学講座専門分野Ⅱ老年看護学、第9版、医学書院。</li> </ul> </li> <li>●論文・研究発表             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2017年、医師からみた看護師が行う認知症高齢者の薬物療法の援助の実際と課題、第37回日本看護科学学会学術集会。</li> <li>・ 2013年、一般病院・診療所における認知症看護プログラムの開発～認知症看護プログラムの実行可能性の検討～、日本老年看護学会第18回学術集会。</li> <li>・ 2011年、A survey on practical nursing care for dementia patients admitted to general hospitals, 26<sup>th</sup> International Conference of Alzheimer's Disease International (トロント)。</li> <li>・ 2009年、家族による一般病院・診療所での認知症の人と家族への看護に対する評価、日本認知症ケア学会第10回大会。</li> <li>・ 2003年、施設種別による短期入所のケアの質に関する研究、日本老年看護学会誌。</li> <li>・ 2005年、介護老人福祉施設の看護師が行うEnd-of-Life Careの実際、日本老年看護学会誌。</li> </ul> </li> </ul>

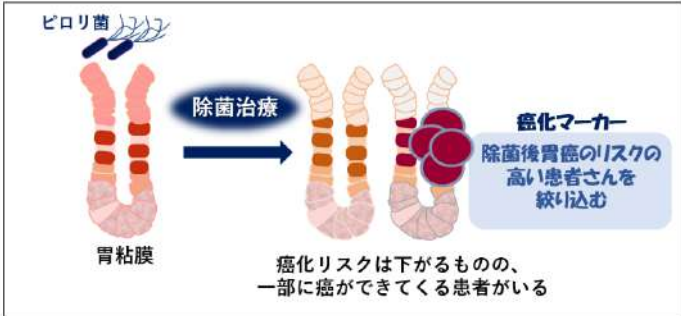
所属・職位	医学部医学科総合診療・総合内科学講座・教授	
氏名	宮崎 英士 (Miyazaki Eishi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1992年6月	
SDGs目標	 	
研究分野	総合診療医学、地域医療学、呼吸器病学	
研究キーワード	総合診療、地域医療、高齢者、気管支喘息	
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 高齢者の疾病予防、健康増進に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> <li>◇ ソーシャルキャピタルを活用した認知症の早期発見と予防 県北のA市との共同研究として、高齢者サロンに参加した住民を対象として、認知症の簡便なスクリーニング検査法を確立する。</li> <li>◇ サルコペニア高齢者の身体活動度を増やす方法に関する研究 県南のB市と連携して、認知行動療法、運動療法、健康教育の併用がサルコペニア高齢者の身体活動量を増やすかどうかを明らかにする。</li> <li>◇ 高齢者喘息に吸入ステロイドが使用されない因子の解析 喘息の標準治療である吸入ステロイド薬の処方率には地域間格差、病院－診療所間格差が大きいことを明らかにした (Tohoku J Exp Med. 2020: 251: 135)。薬局への介入が処方率改善に寄与するか否かについて検討を行う。また、コロナ禍での診療実態についてもレセプト調査で明らかにする。</li> </ul> </li> <li>● 複雑困難症例、多疾患併存に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 3週間原因不明の“古典的不明熱”を呈した患者のうち20～30%は無治療で自然緩解する。初診時にself-limitingな経過を予測させるバイオマーカーを明らかにし、スコアリングシステムの開発に繋げる。</li> <li>◇ 診療所における多疾患併存患者が日常診療に及ぼす影響の検討 MCAMを用いて複雑度の解析を行い、日々の複雑患者の数と医療・介護スタッフの疲労度の関連について検討している。</li> </ul> </li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2022年, Utsunomiya R, Shiota S, Ishii T, Sano K, Suzuki T, Hasegawa H, Miyazaki E. Plasma Exchange Did Not Reduce Viral Load in a Recovered Case of Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome. Intern Med. 2022;61:253.</li> <li>2. 2022年, Horinouchi N, Shiota S, Takakura T, Yoshida A, Kikuchi K, Nishizono A, Miyazaki E. J. Med. Casde Rep. 2022 16:19</li> <li>3. 2021年, Horinouchi N, Shiota S, Takakura T, Yamamoto K, Miyazaki E. Polypharmacy in Japanese primary care and association with length of hospital stay: a prospective cohort study. J Hos Gen Med. 2021;3-6:190.</li> <li>4. 2020年, Ishii T, Shiota S, Yamamoto K, Abe K, Miyazaki E. Inhaled corticosteroid-containing regimens reduce hospitalizations and healthcare costs among elderly asthmatics: real-world validation using the National Health Insurance Claims Database. Tohoku J Exp Med. 251: 135</li> </ol> </li> </ul>	

所属・職位	医学部医学科心臓血管外科学講座・教授	
氏名	宮本 伸二 (Miyamoto Shinji)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1995年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	心臓血管外科学
研究キーワード	再生医療、生体内組織形成術、脊髄保護、低侵襲、止血剤
研究内容	<p>■生体内組織形成術による自己組織化する弁、血管の代用組織開発</p> <p>○生体内組織形成術(iBTA)により得たシート (biosheet) を用いて大動脈弁再建を行い、長期耐久性・自己弁化を動物実験にて証明。異種 (牛) バイオシートの可能性も検証中。</p>  <p>○重症下肢虚血に対するバイパス手術に用いる人工血管をiBTAにて作成 (Biotube) し、静脈グラフトと同等以上の開存性、自己血管化を証明。</p>  <p>○大動脈用のBiotubeを作成し、その耐圧性、成長性を検証。 ○分岐型Biotubeの作成、耐久性を検証。</p> <p>■フリーラジカルスキャベンジャーによる脊髄 (虚血補助)</p> <p>■Matsudaito (止血物質) の有効な使用方法の開発</p> <p>■低侵襲心臓手術用特殊機器開発</p>
研究業績・アピールポイント	<p>デバイス開発につながる大動物を用いたtranslational researchを主とする。</p> <p>Three - month outcomes of aortic valve reconstruction using collagenous membranes (biosheets) produced by in - body tissue architecture in a goat model: a preliminary study K Okamoto BMC Cardiovasc Disord. 2021; 21: 184. Published online 2021 Apr 15.doi:10.1186/s12872 -021-01988-6</p> <p>Aortic valve neocuspidization with in-body tissue-engineered autologous membranes: preliminary results in a long-term goat model T Kawashima, Tadashi Interact Cardiovasc Thorac Surg. 2021 Jun; 32(6): 969-977.</p> <p>科研費 基盤B H28光造形と生体内組織形成術による生体適合性に優れる弁再建用バイオリーフレットの開発</p> <p>科研費基盤B H29 生体内組織合成法を用いた異種移植可能な心臓弁膜用バイオシートの開発</p> <p>科研費基盤B H31 光造形と生体内組織形成術による自己成長可能な大血管再建用バイオチューブの開発</p> <p>科研費基盤B R3 生体内組織形成術による大血管用分岐弯曲バイオチューブの開発</p> <p>科研費基盤B R4 生体内組織形成術による長期耐久性を有する冠動脈バイパス用人工血管開発</p> <p>AMED シーズB R2-3 下肢動脈バイパス用人工血管 (バイオチューブ) 作製用鋳型の開発</p> <p>AMED シーズC R4-6 研究開発課題名: 体内管状組織形成具 (バイオチューブメーカー) の薬事承認に向けた医師主導治験に関する研究</p>

所属・職位	医学部医学科消化器内科学講座・教授	
氏名	村上 和成 (Murakami Kazunari)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1990年3月	
SDGs目標		

研究分野	消化器内科学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ感染症、上部消化管、胃癌、メチル化異常

研究内容	<p>●除菌後時代におけるリスクとなる因子の同定を目指す研究</p> <p>近年、ピロリ菌を除菌することで胃癌症例は減少傾向にある。しかし除菌治療後の胃粘膜にも胃癌発生するリスクが残っていることが近年明らかとなってきた。当科ではこれまで消化器癌の発生や進展に関わるシグナル伝達経路（タンパク質リン酸化）やタンパク質メチル化の解析を行ってきた。そこで、除菌後の胃粘膜においてシグナル伝達経路やメチル化の異常がどのように残存し胃癌発生に関わるのかを明らかにすることで、除菌後胃癌の発生リスクとなる因子の同定を目指している。</p> <p>ピロリ菌除菌後に胃癌でなくなることは、絶対に避けたいといけなないことである。そのためには、発癌をしても早期に発見し、内視鏡治療で治癒しうる段階でフォローする必要がある。本研究は、除菌後に内視鏡を継続する症例の選択や、内視鏡頻度の決定につながることを期待している。</p>	
------	--	--

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>Murakami K, Okimoto T, Kodama M, Tanahashi J, Mizukami K, Shuto M, Abe H, Arita T, Fujioka T. Comparison of the efficacy of irsogladine maleate and famotidine for the healing of gastric ulcers after Helicobacter pylori eradication therapy: a randomized, controlled, prospective study. Scand J Gastroenterol, 46(3), 287-292, 2011.</p> <p>Murakami K, Sakurai Y, Shiino M, Funao N, Nishimura A, Asaka M. Vonoprazan, a novel potassium-competitive acid blocker, as a component of first-line and second-line triple therapy for Helicobacter pylori eradication: a phase III, randomised, double-blind study Gut, 65(9), 1439-46, 2016.</p> <p>●著書</p> <p>村上和成 Ⅲ消化管疾患 B. 胃・十二指腸 慢性胃炎 消化器疾患 最新の治療 2019-2020, 129-132, 2019.3</p> <p>●総説</p> <p>村上和成 ピロリ菌感染と胃がんとの関連 日本内科学会雑誌 110(3):476-480 2021.3</p> <p>村上和成 Ⅱ疾患編 3消化器疾患 「胃潰瘍」今日の診断指針 第8版 株式会社医学書院 713-714 2020</p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

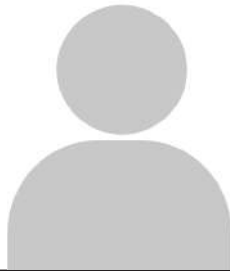

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	医学部医学科医学英語教育学講座・教授	
氏名	森 茂 (Mori Shigeru)	
取得学位	教育学修士、広島大学、1988年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	医学英語教育	
研究キーワード	医学英語、医学英語教育、医療英語、Medical English Education、EMP	
研究内容	<p>●医学英語教材の作成</p> <p>日本語を母語とする英語学習者が、医学専門教育に進む前段階で医学（医療）に関する基本的な用語や定型表現を日本語・英語の両方で正しく、また効率よく習得させるにはどうしたら良いか、内容 (Minimum requirement &amp; Advanced requirement) と方法を日々研究・実践している。(論文 1, 著書 1, 2, 3)</p> <p>●医学英語力の評価</p> <p>日本語を母語とする英語学習者の医学英語力をどのように評価するか、妥当性、信頼性、実用性を担保した評価方法・テストの開発・実施・分析を行っている。(著書 4)</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. 2015年、「医学教育のグローバルスタンダードに対応するための医学英語教育ガイドライン」福沢嘉孝、一杉正仁、石井誠一、亀岡淳一、建部一夫、高田 淳、服部しのぶ、廣川慎一郎、森 茂、守屋利佳、Rauol Breugelmans、吉岡俊正。 <i>Journal of Medical English Education</i>. 14 (3), pp. 130-135.  <a href="https://jasmee.jp/guidelines/#jguidelines">https://jasmee.jp/guidelines/#jguidelines</a>  <a href="https://jasmee.jp/guidelines/#eguidelines">https://jasmee.jp/guidelines/#eguidelines</a></p> <p>●(編) 著書</p> <p>1. 2009年、『クイズで学ぼう！ 医学英単語』森 茂、メジカルビュー社。  <a href="https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&amp;code=ISBN978-4-7583-0423-8">https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&amp;code=ISBN978-4-7583-0423-8</a></p> <p>2. 2016年、『医学・医療系学生のための総合医学英語テキスト Step 1』日本医学英語教育学会編：一杉 正仁、福沢 嘉孝、森 茂 (編集・分担執筆)、安藤 千春、Clive Langham、Timothy Minton。メジカルビュー社。  <a href="https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&amp;code=ISBN978-4-7583-0448-1">https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&amp;code=ISBN978-4-7583-0448-1</a></p> <p>3. 2017年、『医学・医療系学生のための総合医学英語テキスト Step 2』日本医学英語教育学会編：一杉 正仁、福沢 嘉孝、森 茂 (編集・分担執筆)、安藤 千春、Clive Langham、Timothy Minton。メジカルビュー社。  <a href="https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&amp;code=ISBN978-4-7583-0449-8">https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&amp;code=ISBN978-4-7583-0449-8</a></p> <p>4. 2015年、『日本医学英語検定試験 3・4級教本 第3版』日本医学英語教育学会編：安藤 千春、五十嵐 裕章、押味 貴之、小島 多香子、玉巻 欣子、西村 月満、一杉 正仁、平野 美津子、森 茂 (編集・分担執筆)、Chrisine Kuramoto、Timothy Minton。メジカルビュー社。  <a href="https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&amp;code=ISBN978-4-7583-0442-9">https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&amp;code=ISBN978-4-7583-0442-9</a></p>	



所属・職位	医学部医学科法医学講座・教授	
氏名	森 晋二郎 (Mori Shinjiro)	
取得学位	博士 (医学)、群馬大学、2002年3月	
SDGs目標		

研究分野	法医学
研究キーワード	遺体 死因 診断 内因性急死

研究内容	<p>・遺体診断学に関する研究</p> <p>法医学領域において常に必要とされる技術は、正確な死因を確定することである。元来これらの技術は、遺体の解剖を主体として進歩・開発されてきた。一方、臨床医学の現場では、CTやエコー、種々の血液マーカーの開発など、革新的な技術の進歩・発展が認められている。よって、法医学領域においてもこれら臨床医学での技術を死因究明に応用することが求められている。しかし、遺体では循環動態がないだけでなく、細胞死によって細胞内容物が流出するなど、単純に技術を応用することは難しく、種々の条件を研究・工夫してクリアーしていくことが必要である。</p> <p>また、遺体には種々の死後変化が存在するが、生前の感染症や壊死の存在は死後変化をより早く進行させるなど、これら死後変化は疾患や死因によって影響を受けることがある。一方、環境や死後時間経過などによっても、死後変化の種類や程度が異なるため、これら疾患・死因と環境、死後時間経過の関係を研究することによって、臨床医学とは異なる遺体特有の所見を見いだせる可能性がある。</p> <p>・内因性急死に関する研究</p> <p>法医学領域で扱われる疾患による死亡は、その多くが急死を呈する疾患群である。これらは内因性急死と呼ばれ、発症から死亡までの時間が極端に短いことが特徴的である。よって、病院搬送前に死亡する事が多く、その病態生理も臨床で知られているものとは異なる特異的な形態を示していることがある。よって、これら内因性急死の特異的な病態生理を解明することは、新たな臨床医学への発展に貢献できるものと考えられる。</p>
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>Mori S, Takahashi S, Hayakawa A, Saito K, Takada A, Fukunaga T Fatal intracranial aneurysms and dissections causing subarachnoid hemorrhage: An epidemiological and pathological analysis of 607 legal autopsy cases. Journal of Stroke &amp; Cerebrovascular Diseases , 27(2):486-493, 2017</p> <p>森晋二郎、呂彩子、景山則正、水上創、船越泉、渡貴博、福永龍繁：内因性心膜血腫剖検例における死後画像の評価と心肺蘇生術の影響. 法医学の実際と研究 58:119-124 , 2015</p> <p>森晋二郎、渡貴博、呂彩子、景山則正、福永龍繁：死後CT撮影および撮影画像の3次元解析を行った高血圧性脳出血の1剖検例. 法医病理 21(1):17-20, 2015</p>
---------------	---

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座老年看護領域・教授	
氏名	吉岩 あおい (Yoshiiwa Aoi)	
取得学位	博士 (医学)、大阪大学、1999年12月	
SDGs目標	 	

研究分野	老年医学
研究キーワード	アルツハイマー病、レビー小体型認知症、骨粗鬆症、生活習慣病
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アルツハイマー病と生活習慣病の関連に関する研究</li> <li>・レビー小体型認知症 糖尿病、高血圧症などが認知症と関連があるとの研究が進み、注目されている。当院総合診療科・総合内科は生活習慣病を抱える患者の受診も多く、認知症との併存も認めるため、生活習慣病が認知症の罹患率をあげるのか、発症や進行に関与しているのかを探求する。</li> <li>・認知症と骨代謝</li> <li>・認知症とビタミンD 近年、骨粗鬆症に対し、ビタミンD (25(OH)D3) の測定が可能となった。またアルツハイマー病では、重症になるほど25(OH)D3濃度が低下することが明らかになっている。当科では骨粗鬆症の外来も行っており、骨密度、骨代謝マーカー、ビタミンD測定により、認知症との関連を研究している。</li> <li>・認知症とH.pyloriの関連に関する研究</li> <li>・軽度認知障害 (Mild Cognitive Impairment: MCI) の発症予防に関する研究 豊後高田市でサロンに通所する高齢者にフレイル、嗅覚、あたまの健康チェックなどのスクリーニング検査を行い、MCIと診断された症例は、運動、料理、座学などを行い定期的に神経心理テストなどでフォローするというまちぐるみ、多職種協働の研究を行っている。</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <math>\alpha</math> 1-Antichymotrypsin as a Risk Modifier for Late-Onset Alzheimer's disease in Japanese apolipoprotein E <math>\epsilon</math> 4 allele carriers. nn. Neurol. 42(1):115-7, 1997</li> <li>・ 認知症の治療をいつまで続けるかー抗認知症薬をできる限り続けるべきであるー 日本老年精神医学会30(Suppl.I),90-98,2019</li> <li>・ 塩酸ドネペジルが著効したレビー小体型痴呆. 臨床と研究 80(10): 1917-1918, 2003</li> <li>・ もの忘れ外来でみられた認知症と「生活の様子確認票」によるアルツハイマー病の重症度評価について. Geriatric Medicine 50(3): 349-357, 2012</li> <li>・ 骨粗鬆症治療薬デノスマブの疼痛軽減効果. 日本病院総合診療医学会誌14(2)140-146, 2017</li> <li>・ 「認知症の人が安心して暮らせるまちづくりー認知症の早期スクリーニングー」 現在進行中の多職種協働によるスタディである。</li> </ul>

所属・職位	医学部医学科救急医学講座・准教授	
氏名	石井 圭亮 (Ishii Keisuke)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2000年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	神経外科, 救急医療, 災害医療, 遠隔医療	
研究キーワード	神経の再生・成長・移植, 神経外科手術, 脳血管障害, ICT, 災害	
研究内容	<p>●神経機能再建、神経細胞移植、神経細胞保護および脳虚血耐性に関する研究 パーキンソン病や脳虚血の治療、脳虚血や脳脊髄外傷における神経細胞保護および難治性慢性疼痛症の研究を行っています (論文1.)。</p> <p>●脳血管障害、神経外科手術手技の確立に関する研究 脳血管障害の疫学・病態解明・診断・治療法・手術手技に関する研究を行っています。特に、出血性脳血管障害 (くも膜下出血や脳動静脈奇形) に対する診断・治療・手術手技等に関する研究およびもやもや病に対する臨床研究や有効な手術治療指針の確立には力を入れています (論文2.)。</p> <p>●ICTを活用した医療に関する研究 全国に先駆けて、救急車内映像、救急車動態および12誘導心電図をリアルタイムに伝送閲覧するシステムの構築を行い、平時の救急から災害への実運用を行っています。</p> <p>●南海トラフ地震を想定したDMAT支援受援数と傷病者搬送人数に関する研究 重点受援県である大分県・宮崎県に対して、九州ブロック全体における支援DMATおよび傷病者搬送フローの試算を行っています。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>神経機能再建、神経細胞移植、神経細胞保護、脳虚血耐性に関する基礎研究および脳血管障害、神経外科手術手技の確立に関する臨床研究を継続して行ってきましたが、近年は、救急災害医療体制の効率化および充実を図るための研究に力を入れ実績を挙げています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2000年、Ishii K, Isono M, Inoue R, et al: Attempted gene therapy for intractable pain; Dexamethasone-mediated exogenous control of <math>\beta</math>-endorphin secretion in genetically modified cells and intrathecal transplantation. <i>Exp Neurol</i> 166: 90-98</li> <li>2010年、Ishii K, Morishige M, Anan M, et al: Superficial temporal artery-to-middle cerebral artery anastomosis with encephalo-duro-myo-synangiosis as a modified operative procedure for moyamoya disease. <i>Acta Neurochir Suppl</i> 107: 95-99</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2001年、日本脳神経外科学会総会奨励賞(ガレーヌス賞)受賞</li> </ol>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科（グローバル感染症研究センター）・准教授	
氏名	伊波 英克 (Iha Hidekatsu)	
取得学位	博士（理学）、総合研究大学院大学、1992年9月	
SDGs目標	   	

研究分野	分子腫瘍学・分子免疫学・分子疫学
研究キーワード	成人T細胞白血病、TAX1BP1、ウイルス感染症
研究内容	<p>●成人T細胞白血病(ATL)の病態形成機序・診療技術の向上に関する研究 ATLはヒトT細胞白血病ウイルス(HTLV-1)に感染した方の約5%が発症する、難治性の血液腫瘍です。ATLの発症危険度を予測する技術の確立と、より効果的で副作用の小さい治療技術の開発を目指しています。</p> <p>●免疫制御因子TAX1BP1とHTLV-1関連疾患との機能相関性の解析 TAX1BP1はHTLV-1が産生する癌遺伝子産物Taxと結合する宿主因子で、様々な免疫応答の活性を制御しています。HTLV-1はATLだけではなく様々な免疫不全症状を誘発します。TAX1BP1の機能をTaxがどのように攪乱し病態を進行させるかについて研究しています。</p> <p>●ウイルス関連疾患の分子疫学的調査 国内外の研究者とウイルス関連疾患の疫学調査を進めています。特にマレーシア大学サバ校のシニアリサーチフェローとして、同大学のアハメド教授との共同研究を重点的に展開しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>TAS-116 (pimipespib), a heat shock protein 90 inhibitor, shows efficacy in preclinical models of adult T-cell leukemia. <b>Cancer science</b> 2021年11月、責任著者</p> <p>Depletion of TAX1BP1 amplifies innate immune responses during respiratory syncytial virus infection. <b>Journal of virology</b> 2021年8月</p> <p>An outbreak of gastroenteritis by emerging norovirus GII.2[P16] in a kindergarten in Kota Kinabalu, Malaysian Borneo. <b>Scientific reports</b> 2020年4月28日</p> <p>Soluble SLAMF7 promotes the growth of myeloma cells via homophilic interaction with surface SLAMF7. <b>Leukemia</b> 2020年1月</p> <p>The regulation of NDRG2 expression during ATLL development after HTLV-1 infection. <b>Biochimica et biophysica acta. Molecular basis of disease.</b> 2019年10月</p> <p>Human-porcine reassortant rotavirus generated by multiple reassortment events in a Sri Lankan child with diarrhea. <b>Infection, genetics and evolution: journal of molecular epidemiology and evolutionary genetics in infectious diseases.</b> 2018年11月</p> <p>Complete Sequences of the Human T-Cell Leukemia Virus Type 1 Proviral Genomes from Newly Established Adult T-Cell Leukemia Cell Lines in Oita Prefecture, Japan. <b>Genome announcements.</b> 2018年6月、責任著者</p>

所属・職位	医学部医学科総合外科・地域連携学講座・准教授	
氏名	上田 貴威 (Ueda Yoshitake)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標	   	

研究分野 外科腫瘍学、内視鏡外科治療学、総合外科学、地域医療学

研究キーワード 内視鏡外科、高齢者医療、外科教育、地域外科医療

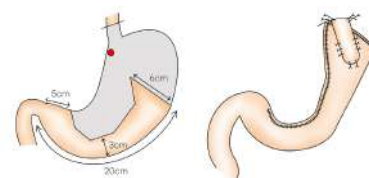
研究内容 消化器悪性腫瘍に対する外科治療、特に低侵襲治療やQOL向上に関する研究を行っている。

●胃癌におけるHLA class I 抗原発現の意義に関する基礎研究

胃癌におけるHLA class I 抗原発現の意義を明らかにするため、HLA class I 抗原の発現と臨床病理学的因子および予後との関連を検討した。その結果、胃癌ではHLA class I 抗原が発現しているものほど腫瘍は発育・進展し予後も不良であった。特に、HLA-B/C抗原の発現は胃癌腹膜再発の独立危険因子であった (論文1)。

●術後QOL向上を目指した腹腔鏡下噴門側胃切除術 (LAPG) の開発 (下図)

胃上部早期胃癌に対する「コブラ頭型細径胃管を用いた腹腔鏡下噴門側胃切除術」を開発し、その安全性・有用性を検討した。本術式は、安全かつ簡便に施行可能であり、LAPGの有用な再建法となりうることを示した (論文2)。



●高齢者消化管悪性腫瘍に対する低侵襲外科治療の安全性・有効性に関する研究

高齢者における小型進行胃癌の臨床的意義を検討し、4cm以下であれば安全に手術が施行可能であり、予後も良好であることを示した (論文3)。また、80歳以上の高齢者大腸癌症例に対する腹腔鏡下手術の短期・長期成績を後方視的に検討し、高齢者大腸癌症例に対する腹腔鏡下手術の安全性・低侵襲性・根治性を示した (論文4)。

●地域外科医療における問題点の現状調査・分析

大分県の勤務外科医に対するアンケート調査から、外科医のやりがいやキャリア形成、医学生と外科医のイメージの相違、外科医の働き方改革に対する意識、さらに地域における外科教育に対する外科医の役割、などに関する学会発表ならびに論文発表を行っている。

研究業績・アピールポイント ●論文

- 2008年、Ueda Y, et al. Clinical Significance of HLA Class I Heavy Chain Expression in Patients With Gastric Cancer. J Surg Oncol. 97.
- 2016年、Ueda Y, et al. Laparoscopic Proximal Gastrectomy With Gastric Tube Reconstruction. JSLS. 20.
- 2017年、Ueda Y, et al. Clinical impact of small advanced gastric cancer (≤ 40 mm) in elderly patients: A retrospective cohort study. Int J Surg. 45.
- 2020年、Ueda Y, et al. Short- and long-term outcomes of laparoscopic surgery for colorectal cancer in the elderly aged over 80 years old versus non-elderly: a retrospective cohort study. BMC Geriatrics. 20.

その他、10年以上にわたり、大分県地域の勤務外科医に対する調査・分析活動を行い、10編以上の報告ならびに論文発表を行っている。

●受賞

- 2018年、平成30年度日本外科系連合学会賞 (最優秀論文) 「上田貴威, 他. 外科医アンケート調査からみた外科医のキャリア形成に関する現状と課題」日本外科系連合学会誌42巻.
- 2018年、第32回地域保健医療に関する研究奨励賞「上田貴威, 他. 医療改革と医学教育改革に対する地域外科勤務医の認識：外科勤務医に対するアンケート調査」地域医学, 32巻.

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等







所属・職位	医学部医学科消化器・小児外科学講座・准教授	
氏名	衛藤 剛 (Etoh Tsuyoshi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2003年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	消化管外科学、低侵襲治療学、外科腫瘍学
研究キーワード	内視鏡外科、集学的治療開発、人工知能
研究内容	<p>■ 研究の実績概要</p> <p>消化器癌の治療成績の向上を目指し、臨床研究、基礎研究、産学官共同研究を積極的に進めている。臨床研究では、低侵襲手術である腹腔鏡下手術の確立と適応拡大、患者予後因子、新しい癌集学的治療について研究を進めている。一方、基礎研究については、内視鏡外科における手術侵襲と生体反応、癌の発生や転移・浸潤の機序、制限増殖型レオウイルスを用いた診断・治療への応用に関する研究を行っている。さらに産学官共同研究として人工知能支援手術システムの開発を行っている。</p> <p><b>A: 基礎研究 ～ がんの増殖・浸潤・転移のメカニズムおよび発がん機構の解明 ～</b> 腸管還流血中の大腸癌・胃癌微小転移検出法の開発、食道癌・大腸癌の臨床検体を用いた癌悪性度規定因子の同定、および胃癌における血管新生因子Angiopoietin-2の意義解明した。 <u>Etoh T, et al. Angiopoietin-2 is related to tumor angiogenesis in gastric carcinoma: possible in vivo regulation via induction of proteases. <b>Cancer Res</b>, 61(5) : 2145-2153, 2001.</u></p> <p><b>B: 基礎研究 ～ 低侵襲治療、新規がん治療開発 ～</b> 低侵襲手術である内視鏡外科手術の利点と短所を明らかにするため、手術侵襲に対する生体反応を腫瘍学・生理学・免疫学観点から、動物モデルを用いて検討した。</p> <p><b>C: 臨床研究 ～ 低侵襲手術、がん臨床 ～</b> <u>Etoh T, et al. Extranodal metastasis is an indicator of poor prognosis in patients with gastric carcinoma. <b>Br J Surg</b>, 93(3) : 369-373, 2006.</u></p> <p><b>D: 臨床研究 ～ 多施設共同臨床試験 ～</b> <u>Etoh T, et al. Morbidity and Mortality From a Propensity Score-Matched, Prospective Cohort Study of Laparoscopic Versus Open Total Gastrectomy for Gastric Cancer: Data From a Nationwide Web-Based Database. <b>Surg Endosc</b>, 32(6) : 2766-2773, 2018.</u></p>
研究業績・アピールポイント	<p><b>1. 低侵襲手術の確立とエビデンス創生の取り組み</b> 胃癌分野において、低侵襲手術として開発された腹腔鏡下手術の手術手技の確立と適応拡大に向けたエビデンス創生を行っている。中でも2009年より開始した多施設共同ランダム化第II/III相試験は、進行胃癌に対する腹腔鏡下手術の技術的・腫瘍学的安全性を検証するものであり、研究事務局長として本研究の企画・運営を中心的に遂行している。</p> <p><b>2. 制限増殖型レオウイルスを用いた新しい診断・治療法の開発</b> 新しい癌の診断・治療法開発として、制限増殖型レオウイルスに着目してきた。本研究においては、12年間にわたり競争的外部研究費を獲得している。</p> <p><b>3. 産学官共同研究</b> 新規医療材料の開発や、安全な手術法開発を目的とし、日本を代表する企業と産学官共同研究を行い、特許取得および外部資金を獲得してきた。またAMED事業の中で、人工知能を用いた内視鏡外科機器開発を行っている。</p>

所属・職位	医学部医学科医学英語教育学講座・准教授	
氏名	大下 晴美 (Oshita Harumi)	
取得学位	博士 (教育学)、広島大学、2010年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	外国語教育	
研究キーワード	読解指導、多読、NIRS、EMP	
研究内容	<p>●英語多読および英語の読み聞かせに関する脳科学的研究</p> <p>NIRS (近赤外線分光法) を用い、「英語多読」や「英語絵本の読み聞かせ」の効果を脳科学的見地から研究し、これまでに以下の成果をあげてきた。</p> <p>①挿絵がある絵本は内容理解の観点からも脳活動の最適化の観点からも効果的な多読教材である (論文1)。</p> <p>②英語学習者の発達・学習段階の差によって、英語絵本読み聞かせ聴取時の脳の前頭前野の賦活部位および賦活量に違いが見られる (外部資金：科研費基盤研究(C) 17K01084)。</p> <p>現在は、発達・学習段階によって英語絵本読み聞かせ聴取時の脳の賦活状況の差が生じる要因について研究を行っている (外部資金：科研費基盤研究(C) 21K02860)。</p> <p>●英語医療面接の評価方法に関する研究および英語医療面接自動採点システムの開発</p> <p>医療従事者の英語力育成のための英語医療面接の評価方法に関して、これまでにCan-do Listを活用した評価項目の作成や教員間および学生間の評価結果の信頼性・妥当性に関する研究を行ってきた。現在は、医療従事者を目指す学生の学習支援ツールとしてだけでなく、医療従事者の生涯学習ツールとしても利用可能な「英語医療面接自動採点システム」開発のためのタスクや評価指標の開発を行っている (論文2・講演1)。</p> <p>※関連リンク：  <a href="http://oitauniv-soran.ad.oita-u.ac.jp/profile/ja.aa59fa576d22f103520e17560c007669.html">http://oitauniv-soran.ad.oita-u.ac.jp/profile/ja.aa59fa576d22f103520e17560c007669.html</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. 2020年、大下晴美、「日本人大学生における英語多読教材としての絵本の有効性—NIRSを用いた脳科学的見地からの検証—」 鬼田崇作・山内優佳(編)『深澤清治先生退職記念英語教育学研究』 溪水社 (広島) pp. 30-41.</p> <p>2. 2021年、大下晴美、「AIを用いた英語医療面接評価システムの開発に向けて」大坪喜子(編)『長崎大学教育学部英語科の記録と思い出—卒業生による思い出と実践レポートを中心に—』長崎大学英語教育研究会 (長崎) pp. 130-138.</p> <p>●講演</p> <p>1. 2021年、大下晴美、「ZoomとMoodleを用いた英語医療面接試験およびその評価法の課題と可能性」(外国語教育メディア学会九州・沖縄支部 2020年度学術講演会 (講師))</p> <p>●受賞</p> <p>1. 2013年、第10回植村研一賞 奨励賞 (日本医学英語教育学会)</p>	

所属・職位	医学部医学科消化器内科学講座・准教授	
氏名	沖本 忠義 (Okimoto Tadayoshi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1996年6月	
SDGs目標		
研究分野	消化器内科学	
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ感染症、上部消化管	
研究内容	<p>ヘリコバクター・ピロリ感染症に関する研究</p> <p>ヘリコバクター・ピロリ (<i>H. pylori</i>) 感染症は、幼少期に本菌が感染することによって生じ、萎縮性胃炎を引き起こす。本菌の持続感染は、胃・十二指腸潰瘍、胃MALTリンパ腫、免疫性血小板減少性紫斑病 (ITP) や胃癌の発症に関与することが報告されている。また、本菌の除菌治療により、胃・十二指腸潰瘍の再発抑制、胃MALTリンパ腫の寛解やITPの血小板数増加が期待でき、更には胃癌の発症抑制効果も報告されており注目されている。</p> <p>現在以下の研究を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・若年者における<i>H. pylori</i>感染の現状と除菌治療の検討</li> <li>・薬剤耐性<i>H. pylori</i>の現状と有効な治療法の検討</li> <li>・除菌難治例に対する治療法の検討</li> <li>・<i>H. pylori</i>感染による胃癌発症機序に対する研究</li> </ul> <p>Non-Helicobacter pylori-Helicobacter (NHPH) に関する研究</p> <p>上述のように<i>H. pylori</i>関連疾患については多くの報告があるが、<i>H. pylori</i>未感染の消化性潰瘍や胃MALTリンパ腫、除菌後胃癌などでは原因が明らかでない。ヒトの胃に感染する<i>H. pylori</i>以外のヘリコバクター属である NHPHの中で、<i>H. suis</i>や<i>H. heilmannii</i>が胃十二指腸疾患と関連していることが少数例報告されているが、感染率や疾患との関連は明らかではない。</p> <p>現在以下の研究を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・NHPH感染実態、薬剤感受性に関する他施設共同研究</li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<p>R. Ogawa, T. Okimoto et. al. Changes in Gastric Mucosal Glycosylation Before and After Helicobacter pylori Eradication Using Lectin Microarray Analysis. Turk J Gastroenterol 2022; 33: 88-94.</p> <p>K. Okamoto, M. Kodama, K. Mizukami, T. Okimoto et. al. Immunohistochemical differences in gastric mucosal damage between nodular and non-nodular gastritis caused by Helicobacter pylori infection. J Clin Biochem Nutr. 2021; 69: 216–221.</p> <p>T. Okimoto, K. Mizukami et. al. Esomeprazole- or rabeprazole-based triple therapy eradicated Helicobacter pylori comparably regardless of clarithromycin susceptibility and CYP2C19 genotypes. J Clin Biochem Nutr. 2016; 59: 149–153.</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・別府市と臼杵市の中学生を対象とした、感染検査および除菌治療に関する検討を実施中。</li> <li>・現在、多施設共同研究である「ヒト胃に感染するピロリ菌以外のヘリコバクター属菌に関する研究」を共同研究者として実施中。</li> </ul>	

所属・職位	医学部医学科呼吸器・乳腺外科学講座・准教授	
氏名	小副川 敦 (Osoegawa Atsushi)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2005年3月	
SDGs目標	  	

研究分野 腫瘍外科学

研究キーワード 肺癌、分子標的治療、低侵襲医療




研究内容

- 肺癌におけるドライバー遺伝子と細胞周期関連遺伝子を標的とした治療開発  
 ドライバー遺伝子変異を伴う肺癌では分子標的治療が奏効するが、ほとんどの症例は約1年で治療に耐性となる。原因の1つに、併存する遺伝子変化がシグナル伝達に与える影響がある。細胞周期関連遺伝子の発現は分子標的治療における耐性の一因とされており、その機序や、これを克服するための治療開発が急務である(論文1-3)。
- 肺癌における免疫チェックポイント分子の発現に関する研究  
 免疫治療は進行非小細胞肺癌に対する治療の重要な一手となったが、バイオマーカーの同定には難航している。肺癌切除標本及び臨床背景から得られるデータをもとに、免疫チェックポイント分子発現のバイオマーカーに関する研究を行っている(論文4-6)。
- 胸部悪性腫瘍に対する低侵襲手術の開発  
 ロボット支援下手術は呼吸器外科領域においてもその巧緻性、低侵襲性で有用性が示されている。開胸や胸腔鏡手術と同じ手順で行えるようなアプローチの工夫を行っている。  
 ※関連リンク：<https://researchmap.jp/osoegawa-ths>

研究業績・アピールポイント

- 論文  
 肺癌におけるドライバー遺伝子と細胞周期関連遺伝子を標的とした治療開発  
 1. 2004年、Osoegawa A, Yoshino I, Tanaka S, Sugio K, Kameyama T, Yamaguchi M, Maehara Y. Regulation of p27 by S-phase kinase-associated protein 2 is associated with aggressiveness in non-small-cell lung cancer. J Clin Oncol. 22:4165-4173  
 2. 2018年、Osoegawa A, Hashimoto T, Takumi Y, Abe M, Yamada T, Kobayashi R, Miyawaki M, Takeuchi H, Okamoto T, Sugio K. Acquired resistance to an epidermal growth factor receptor-tyrosine kinase inhibitor (EGFR-TKI) in an uncommon G719S EGFR mutation. Invest New Drugs. 36(6):999-1005  
 3. 2021年、Osoegawa A, Yamaguchi M, Nakamura T, Morinaga R, Tanaka K, Kashiwabara K, Miura T, Suetsugu T, Harada T, Asoh T, Taguchi K, Nabeshima K, Kishimoto J, Sakai K, Nishio K, Sugio K. High incidence of C797S mutation in patients with long treatment history of EGFR tyrosine kinase inhibitors including osimertinib. JTO Clin Res Rep, 2:100191  
 肺癌における免疫チェックポイント分子の発現に関する研究  
 4. 2017年、Osoegawa A, Gills JJ, Kawabata S, Dennis PA. Rapamycin sensitizes cancer cells to growth inhibition by the PARP inhibitor olaparib. Oncotarget. 8(50):87044-87053  
 5. 2021年、Osoegawa A, Takada K, Okamoto T, Sato S, Nagahashi M, Tagawa T, Tsuchida M, Oki E, Okuda S, Wakai T, Mori M. Mutational signatures in squamous cell carcinoma of the lung. J Thorac Dis, 13:1075-1082  
 6. 2018年、Osoegawa A, Hiraishi H, Hashimoto T, Takumi Y, Abe M, Takeuchi H, Miyawaki M, Okamoto T, Sugio K. The positive relationship between  $\gamma$ H2AX and PD-L1 expression in lung squamous cell carcinoma. In Vivo. 32(1):171-177

- 役員
- 大学院教育学研究科  
教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・准教授	
氏名	小野 光美 (Ono Mitsumi)	
取得学位	博士 (医学)、島根大学、2016年3月	
SDGs目標	 	

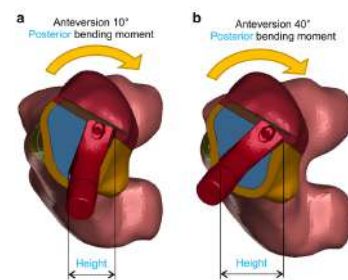
研究分野	高齢者看護学
研究キーワード	高齢者, End-of-Life care, 終末期
研究内容	<p>●「介護老人保健施設における看取りに関する研究」</p> <p>高齢者の終末期に関する研究として、特に、介護老人保健施設での看取りについて取り組んできた。研究内容としては、介護老人保健施設で実際に看取りを経験した家族を対象にケアの実際やケアに関する評価 (満足感や課題)、家族自身への影響についての面接調査、看取りケアにかかわるすべての専門職に対するケアの実際と評価、自身の揺らぎと満足度、多職種・他機関との連携についての量的調査、質的調査等である。介護老人保健施設は中間施設として在宅復帰・在宅療養支援の役割・機能があるため、看取りにおいても、利用者 (高齢者) は繰り返し施設を利用する中で歳を重ね、なじみの関係 (利用者同士やスタッフ) の中で、リハによる身体の調整を行いながら、最期までいつもの生活を送ることができる特徴がある。その過程の中で、どのように利用者 (高齢者) 自身の意思を理解し、住み慣れた地域で、生ききることを支えるのが、現在の研究の中心である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・科研費基盤研究 (C) 平成25年度～平成28年度、介護老人保健施設における高齢者と家族の意思を引き出すケアモデルの開発 (研究代表者)</li> <li>・科研費基盤研究 (C) 平成29年度～令和4年度 (延長2年を含む)、地域包括ケアシステムにおける高齢者の終末期を支える看取りケアモデルの開発 (研究代表者)</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>●高齢者の終末期に関する研究</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Mitsumi Ono, Hideyuki Kanda, Yuko Takeda, Sachiko Hara (2015) : Characteristics of Geriatric Health Service Facilities Designated as Sites of Death, Health, 7, 1275-1282.</li> <li>2) 小野光美 (2015) : 介護老人保健施設の看取りにおける看護管理者の実践内容, 日本看護倫理学会, 7(1), 68-76.</li> </ol> <p>●看護倫理に関する活動</p> <p>日本看護倫理学会臨床倫理ガイドライン検討委員会のメンバーとして、ガイドラインの作成および管理者応援研修を開催してきた。研究に発展させる途中である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 日本看護倫理学会臨床倫理ガイドライン検討委員会編 (2018) : 看護倫理ガイドライン : 医療や看護を受ける高齢者の尊厳を守るためのガイドライン・身体拘束予防ガイドライン, 看護の科学社.</li> <li>2) 常見藍, 三重野英子, 小野光美 (2020) : 急性期病院での老年看護において看護師の倫理的感受性を育む取り組み, 日本老年看護学会第25回学術集会, 148.</li> </ol>



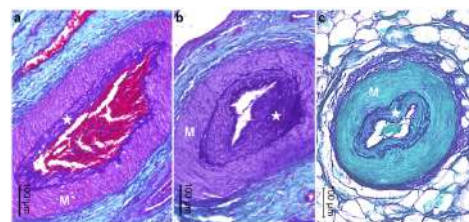
所属・職位	医学部医学科整形外科学講座・准教授	
氏名	加来 信広 (Kaku Nobuhiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2002年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	整形外科
研究キーワード	股関節、バイオメカニクス、微小解剖

研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 股関節疾患の診断および治療に関する研究 股関節に関わる治療改善のため、疾患の特徴、診断方法及び外科治療効果について、臨床的成績を報告している。人工骨頭置換術については、QOLを含めた術後の成績を疾患ごとに綿密に明らかにしてきた。インプラント自体のデザインや材質も改良してきた。人工股関節全置換術においては、インプラントの設置精度改善に対するNavigation systemの有効性について、初回手術および再置換術に対しても検討している。適切な脚長補正を行うための新しい術中確認法を報告してきた。股関節疾患診断のため、FDG-PETの可能性について評価した。寛骨臼形成不全の骨盤の解剖学的特徴や加齢に伴う大腿骨の弯曲変形について、その特徴と影響について検討している。</li> <li>● 股関節のバイオメカニクスに関する研究 3次元有限要素法や治具を用いて、人工関節のデザインや設置条件が及ぼす特徴や影響について検討している。またコンピュータソフトを用いて、最大の可動域を得るための適切なインプラント設置や手術手技をシミュレーション研究から探求している。</li> <li>● 股関節の微小解剖学に関する研究 特別な処理を行うことによって、股関節を構成する靭帯、関節唇、軟骨や骨のコラーゲン線維を明確に描出し、電子顕微鏡を用いて観察している。免疫染色も加えて、血管や神経の形態と走行の特徴も明確にしている。これらの微小解剖に対する加齢の影響について検討している。</li> </ul>
------	--



研究業績・アピールポイント	<p>股関節外科に関わる基礎的及び臨床的研究を多方面から行っているが、すぐに役立つ知見だけでなく、長期的な研究を支える知見も得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2022年、Microvascular system of hip joint constituents with special reference to ultrastructural findings and early arteriosclerosis.</li> <li>2. 2019年、Efficacy of Vitamin E for Mechanical Damage and Oxidation of Polyethylene Rim by Stem Neck Impingement.</li> </ol> </li> <li>● 著書 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2019年、受診時年齢別発育性股関節形成不全の診かた・治しかた (分担)</li> </ol> </li> <li>● 受賞 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2018年、NPO運動器医療ネットワークおおいた 優秀賞</li> </ol> </li> </ul>
---------------	--



役員  
大学院教育学研究科  
教育学部  
経済学部  
医学部  
医学部附属病院  
理工学部  
福祉健康科学部  
その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科産科婦人科学講座・准教授	
氏名	河野 康志 (Kawano Yasushi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1995年6月	
SDGs目標		

**研究分野** 生殖医学、生殖内分泌学、生殖免疫学

**研究キーワード** 卵胞発育、排卵、受精、着床

**研究内容**

子宮内膜には種々の局所因子が発現している。胚の着床、妊娠の維持には白血球系の免疫担当細胞が関与し、これらの遊走にはサイトカインやケモカインの産生が必要となる。このような物質を促進的に産生調節するのがIL-1、EGFや血小板活性化因子であり、これらの受容体の下流に存在するのが細胞内情報伝達系である。我々は、子宮内膜間質細胞や脱落膜化した細胞における細胞内情報伝達系について検討し、いくつかの経路の活性化で様々な生理活性物質の産生が調節されることを明らかにした。また、培養した子宮内膜間質細胞からサイトカイン(Kawano et al., 2004)や、プロスタグランジン(Kawano et al., 2001)が産生され一方で、これらの産生を抑制的に調節する機序についても検討し、AMPKの活性化が重要な役割を担うことも明らかにした(Kawano et al., 2021)。これらのケモカイン・サイトカイン産生およびプロスタグランジン産生が胚の着床・妊娠維持においてネットワークを形成し、生殖現象に関与していると考えられる。

また、子宮内膜間質細胞は落膜化することで血管新生因子であるVEGFの産生が亢進することも明らかにしてきた(Matsui, Kawano et al., 2004)。脱落膜化現象はプロテアーゼ活性化受容体や上皮成長因子のmRNAおよび蛋白質の発現を増加させ、それらの受容体蛋白を介してIL-8やMMP-1のmRNA発現をさらに増加させた。加えて、脱落膜化により受容体蛋白からの刺激を介して細胞走化性が亢進することが確認でき、脱落膜化により発現が増加するこれらの受容体蛋白を介した細胞内情報伝達系は、着床および妊娠維持に必須であることが確認できた(Goto, Kawano et al., 2018)。さらには、体外受精・胚移植時に子宮内膜の受容能を確認する方法を見出し、着床に関わる遺伝子発現を検討中である(Goto, Kawano et al., 2021)。

**研究業績・アピールポイント**

[Kawano Y, Nakamura S, Fukuda J, Miyakawa I. Synergistic effect of interleukin-1  \$\alpha\$  and ceramide analogue on production of prostaglandin E2 and F2  \$\alpha\$  by endometrial stromal cells. Am J Reprod Immunol 46: 393-398, 2001.](#)





[Kawano Y, Fukuda J, Nasu K, Matsumoto H, Narahara H, Miyakawa I. Synergistic effects of interleukin \(IL\)-1  \$\alpha\$  and ceramide analogue on the production of IL-6, IL-8 and macrophage colony-stimulating factor by endometrial stromal cells. Fertil Steril 82: 1043-1047, 2004.](#)

[Matsui N, Kawano Y, Nakamura S, Miyakawa I. Changes of vascular endothelial growth factor production associated with decidualization by human endometrial stromal cells in vitro. Acta Obstet Gynecol Scand 83: 138-143, 2004.](#)

[Goto K, Kawano Y, Utsunomiya T, Narahara H. Decidualization modulates a signal transduction system via protease-activated receptor-1 in endometrial stromal cells. Am J Reprod Immunol 80: e13036, 2018.](#)

[Goto K, Kawano Y, Utsunomuya T, Narahara H. The possibility of analyzing endometrial receptivity using cells from embryo transfer catheters. Reprod Sci 28: 2623-2629, 2021.](#)


[Kawano Y, Sato H, Goto K, Nishida M, Nasu K. The inhibitory effect of AMP-activated protein kinase \(AMPK\) on chemokine and prostaglandin production in human endometrial stromal cells. Reprod Biol & Endocrinol 19: 188, 2021.](#)

所属・職位	医学部医学科神経内科学講座・准教授	
氏名	木村 成志 (Kimura Noriyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2007年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	新たな認知症予防法の開発
研究キーワード	認知症 生活習慣 神経機能画像

研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 新たな認知症リスク因子の発掘に向けた疫学研究 2015年から大分県臼杵市の地域在住高齢者を対象としてウェアラブル生体センサによる生活習慣データの収集、認知機能検査、PET検査を実施し、これらのビッグデータを解析することで科学的根拠のある認知症リスク因子の発掘を目指してきた。65歳以上の高齢者855例（平均年齢73.8±5.8歳）を対象に3カ月ごとの生体センサ装着および年1回の認知機能評価を行い、さらに軽度認知障害(MCI: mild cognitive impairment)にはPiB-PET、FDG-PETを追加した。これまでの横断的解析から①歩数、心拍数、睡眠時間、会話時間がMMSEと関連する、②認知症予防には7791歩以上の歩行、353～434分の睡眠、80～321分の会話が重要である、③睡眠時間は脳内アミロイド蓄積および脳糖代謝量と有意な負の相関を示すことを明らかにした（論文1, 2）。さらに、一日の歩数は、睡眠効率と正の相関、中途覚醒時間、中途覚醒回数、昼寝時間と負の相関を示すことから身体活動が睡眠の質を改善するために効果的であることを明らかにした（論文3）。</li> <li>● 認知症および神経変性疾患の早期診断に有用な画像マーカーの開発 アルツハイマー病の早期診断に有用な画像マーカーの探索を目的としてMRI、PiB PET、FDG PETを活用した臨床研究を行ってきた。軽度認知障害および健常者103例を対象とした検討によりMRI、PiB PET、FDG PETを組み合わせることで軽度認知障害の診断精度が向上することを明らかにした（文献4）。さらに、脳血流SPECTを用いて様々な神経変性疾患に特異的な脳血流異常を検討した。①パーキンソン症候群における脳血流異常は各疾患で異なり、早期診断に有用であること、脊髄小脳変性症やアルツハイマー病における治療前後の脳血流量変化が治療効果判定に有用であることを明らかにした（論文4, 5, 6）。</li> </ul>
------	--

研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <a href="#">Kimura N, Aso Y, Yabuuchi K, Ishibashi M, Hori D, Sasaki Y, Nakamichi A, Uesugi S, Fujioka H, Iwao S, Jikumaru M, Katayama T, Sumi K, Eguchi A, Nonaka S, Kakumu M, Matsubara E. Modifiable Lifestyle Factors and Cognitive Function in Older People: A Cross-Sectional Observational Study. Front Neurol. 24;10:401, 2019.</a></li> <li>2. <a href="#">Kimura N, Aso Y, Yabuuchi K, Ishibashi M, Hori D, Sasaki Y, Nakamichi A, Uesugi S, Jikumaru M, Sumi K, Eguchi A, Obara H, Kakuma T, Matsubara E. Association of Modifiable Lifestyle Factors With Cortical Amyloid Burden and Cerebral Glucose Metabolism in Older Adults With Mild Cognitive Impairment. JAMA Netw Open. 3:e205719, 2020.</a></li> <li>3. <a href="#">Kimura N, Aso Y, Yabuuchi K, Matsubara E. Association between objectively measured walking steps and sleep in community-dwelling older adults: A prospective cohort study. PLoS One. 15:e0243910, 2020.</a></li> <li>4. <a href="#">Kimura N, Hanaki S, Masuda T, Hanaoka T, Hazama Y, Okazaki T, Arakawa R, Kumamoto T. Brain perfusion differences in Parkinsonian disorders. Mov Disord. 26:2530-2537, 2011.</a></li> <li>5. <a href="#">Kaneko H, Kimura N, Nojima S, Abe K, Aso Y, Matsubara E. Diagnosis of mild cognitive impairment using multiple neuroimaging modalities in addition to the Mini-Mental State Examination. Geriatr Gerontol Int. 19:1193-1197, 2019.</a></li> <li>6. <a href="#">Kimura N, Kumamoto T, Masuda T, Nomura Y, Hanaoka T, Hazama Y, Okazaki T, Arakawa R. Evaluation of the effect of thyrotropin releasing hormone (TRH) on regional cerebral blood flow in spinocerebellar degeneration using 3DSRT. J Neurol Sci. 281:93-98, 2009.</a></li> </ol>
---------------	---

所属・職位	医学部医学科眼科学講座・准教授	
氏名	木許 賢一 (Kimoto Kenichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2004年6月	
SDGs目標	 	

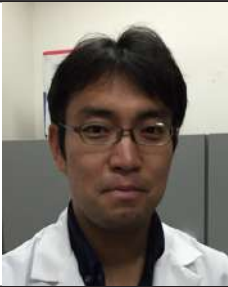



研究分野	眼科学
研究キーワード	網膜、増殖性硝子体網膜症、加齢黄斑変性、網膜色素上皮細胞
研究内容	<p>1) 実臨床で多くの難治性眼内増殖疾患の手術 (増殖糖尿病網膜症、増殖硝子体網膜症) を手懸けながら、手術療法単独治療の限界も痛感し、眼内増殖疾患の分子標的治療の開発を目指している。</p> <p>2) 遺伝性の網膜剥離や網膜変性の病態解明</p> <p>3) 滲出型加齢黄斑変性のより効果的な治療方法の探求</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1) p38 MAPK mediates the expression of type I collagen induced by TGF-beta 2 in human retinal pigment epithelial cells ARPE-19 K Kimoto, K Nakatsuka, N Matsuo, H Yoshioka INVESTIGATIVE OPHTHALMOLOGY &amp; VISUAL SCIENCE 45(7) 2431-2437 2004</p> <p>2) Inhibition of RhoA/Rho-kinase pathway suppresses the expression of type I collagen induced by TGF-beta 2 in human retinal pigment epithelial cells Yuji Itoh, Kenichi Kimoto, Masamoto Imaizumi, Kazuo Nakatsuka EXPERIMENTAL EYE RESEARCH 84(3) 464-472 2007</p> <p>3) The PI3K/Akt pathway mediates the expression of type I collagen induced by TGF-β2 in human retinal pigment epithelial cells. Yokoyama K, Kimoto K, Itoh Y, Nakatsuka K, Matsuo N, Yoshioka H, Kubota T Graefe's archive for clinical and experimental ophthalmology 250(1) 15-23 2012</p> <p>4) One-Year Outcomes following Intravitreal Aflibercept for Polypoidal Choroidal Vasculopathy in Japanese Patients: The APOLLO Study Yuji Oshima, Kenichi Kimoto, Noriko Yoshida, Kimihiko Fujisawa, Shozo Sonoda, Toshiaki Kubota, Toshinori Murata, Taiji Sakamoto, Shigeo Yoshida, Koh-Hei Sonoda, Tatsuro Ishibashi OPHTHALMOLOGICA 238(3) 163-171 2017</p> <p>5) Foveal Hypoplasia in Patients with Stickler Syndrome Itsuka Matsushita, Tatsuo Nagata, Takaaki Hayashi, Kenichi Kimoto, Toshiaki Kubota, Masahito Ohji, Shunji Kusaka, Hiroyuki Kondo OPHTHALMOLOGY 124(6) 896-902 2017</p> <p>6) A Japanese Family with Autosomal Dominant Oculocutaneous Albinism Type 4 Ryoko Oki, Kisaburo Yamada, Satoko Nakano, Kenichi Kimoto, Ken Yamamoto, Hiroyuki Kondo, Toshiaki Kubota INVESTIGATIVE OPHTHALMOLOGY &amp; VISUAL SCIENCE 58(2) 1008-1016 など</p>





所属・職位	医学部医学科病態生理学講座・准教授	
氏名	黒川 竜紀 (Kurokawa Tatsuki)	
取得学位	博士 (情報工学)、九州工業大学、2005年6月	
SDGs目標		

研究分野	イオンチャネルの構造と生理機能
研究キーワード	イオンチャネル、酸化ストレス、膜電位
研究内容	<p>○TRPチャネルの構造と生理機能 (原著論文3, 4, 7, 9)</p> <p>TRPチャネルは、種々の生理活性物質により活性化され、環境変化を感知するセンサータンパク質として働く。特に酸化感受性TRPチャネルについて、その生理学的意義について研究を展開している。</p> <p>○心筋イオンチャネルの翻訳後修飾と機能変化 (原著論文1, 2, 6)</p> <p>糖鎖修飾などの翻訳後修飾がチャネル活性にどう影響するかについて研究を行っている。</p> <p>○DNAナノ構造体へのイオンチャネルの集積化 (原著論文8)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>○原著論文 (過去5年分を記載)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Wang P, Zhu X, Wei M, Liu Y, Yoshimura K, Zheng M, Liu G, Kume S, <u>Kurokawa T</u>, Ono K. Disruption of asparagine-linked glycosylation to rescue and alter gating of the Nav1.5-Na<sup>+</sup> channel. <i>Heart Vessels</i> <b>36</b>, 589-596, 2021.</li> <li>2. Wang P, Wei M, Zhu X, Liu Y, Yoshimura K, Zheng M, Liu G, Kume S, Morishima M, <u>Kurokawa T</u>, Ono K. Nitric oxide down-regulates voltage-gated Na<sup>+</sup> channel in cardiomyocytes possibly through S-nitrosylation-mediated signaling. <i>Sci. Rep.</i> <b>11</b>, 11273, 2021.</li> <li>3. Uchiyama M, Nakao A, Kurita Y, Fukushi I, Takeda K, Numata T, Tran NH, Sawamura S, Ebert M, <u>Kurokawa T</u>, Sakaguchi R, Stokes AJ, Takahashi N, Okada Y, Mori Y. O<sub>2</sub>-Dependent Protein Internalization Underlies Astrocytic Sensing of Acute Hypoxia by Restricting Multimodal TRPA1 Channel Responses. <i>Curr. Biol.</i> <b>17</b>, 3378-3396.e7, 2020.</li> <li>4. Tanaka M, Hayakawa K, Ogawa N, <u>Kurokawa T</u>, Kitanishi K, Ite K, Matsui T, Mori Y, Unno M. Structure determination of the human TRPV1 ankyrin-repeat domain under nonreducing conditions. <i>Acta Crystallogr. F Struct. Biol. Commun.</i> <b>76</b>, 130-137, 2020.</li> <li>5. Jouraku A, Kuwazaki S, Miyamoto K, Uchiyama M, <u>Kurokawa T</u>, Mori E, Mori MX, Mori Y, Sonoda S. Ryanodine receptor mutations (G4946E and I4790K) differentially responsible for diamide insecticide resistance in diamondback moth, <i>Plutella xylostella</i> L. <i>Insect Biochem. Mol. Biol.</i> <b>118</b>, 103308, 2020.</li> <li>6. Liu Y, Wang Pu, Ma F, Zheng M, Liu G, Kume S, <u>Kurokawa T</u>, Ono K. Asparagine-linked glycosylation modifies current density and voltage-dependent gating properties of Cav3.1-T-type Ca<sup>2+</sup> channel. <i>J. Physiol. Sci.</i> <b>69</b>, 335-343, 2019.</li> <li>7. Horton JS, Shiraishi T, Alfulaij N, Small-Howard AL, Turner HC, <u>Kurokawa T</u>, Mori Y, Stokes AJ. TRPV1 is a component of the atrial natriuretic signaling complex, and using orally delivered antagonists, presents a valid therapeutic target in the longitudinal reversal and treatment of cardiac hypertrophy and heart failure. <i>Channels (Austin)</i> <b>13</b>, 1-16, 2019.</li> <li>8. <u>Kurokawa T</u>, Kiyonaka S, Nakata E, Endo M, Koyama S, Mori E, Tran NH, Dinh H, Suzuki Y, Hidaka K, Kawata M, Sato C, Sugiyama H, Morii T, Mori Y. DNA Origami Scaffolds as Templates for Functional Tetrameric Kir3 K<sup>+</sup> Channels. <i>Angew. Chem. Int. Ed.</i> <b>57</b>, 2586-2591, 2018.</li> <li>9. Numata T, Tsumoto K, Yamada K, <u>Kurokawa T</u>, Hirose S, Nomura H, Kawano M, Kurachi Y, Inoue R, Mori Y. Integrative approach with electrophysiological and theoretical methods reveals a new role of S4 positively charged residues in PKD2L1 channel voltage-sensing. <i>Sci. Rep.</i> <b>7</b>, 9760, 2017.</li> <li>10. Hirano M, Takada Y, Wong CF, Yamaguchi K, Kotani H, <u>Kurokawa T</u>, Mori MX, Snutch TP, Ronjat M, Waard M, Mori Y. C-terminal splice variants of P/Q-type Ca<sup>2+</sup> channel CaV2.1 <math>\alpha</math>1 subunits are differentially regulated by Rab3-interacting molecule proteins. <i>J. Biol. Chem.</i> <b>292</b>, 9365-9381, 2017.</li> </ol>



所属・職位	医学部医学科呼吸器・感染症内科学講座・准教授	
氏名	小宮 幸作 (Komiya Kosaku)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2013年3月 修士 (公衆衛生)、聖路加国際大学、2019年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	呼吸器内科学、感染症学
研究キーワード	肺炎、結核、非結核性抗酸菌症、慢性気道炎症、臨床研修
研究内容	<p>●市中肺炎における予後予測因子と治療戦略に関する研究</p> <p>肺炎患者における予後因子を、肺炎発症の機序の視点から解析している。日本呼吸器学会の成人肺炎診療ガイドラインに携わり、各種システマティック・レビューも行っている。また、誤嚥性肺炎として世界で初めての英文教科書を編者として出版した。</p> <p>Shinji Teramoto and Kosaku Komiya, editors. Aspiration Pneumonia; The Current Clinical Giant for Respiratory Physicians, Shinji Teramoto and Kosaku Komiya Eds., Springer Nature Singapore Pte Ltd., 17th June 2020</p> <p>Komiya K, Rubin BK, Kadota JI, Mukae H, Akaba T, Moro H, Aoki N, Tsukada H, Noguchi S, Shime N, Takahashi O, Kohno S. Prognostic implications of aspiration pneumonia in patients with community acquired pneumonia: A systematic review with meta-analysis. Sci Rep. 2016 Dec 7;6:38097.</p> <p>●結核・非結核性抗酸菌症に関する臨床研究</p> <p>2017年より大分県委託事業である結核医療体制強化事業を担当し、公衆衛生修士としての視点から日本における結核診療の課題に関連する研究を多く行っている。日本結核・非結核性抗酸菌症学会が出版している結核診療ガイドの作成委員を努めた。</p> <p>Shuto H, Komiya K, Goto A, Kan T, Honjo K, Uchida S, Takikawa S, Yoshimatsu T, Yamasue M, Hiramatsu K, Kadota JI. Efficacy and safety of fluoroquinolone-containing regimens in treating pulmonary Mycobacterium avium complex disease: A propensity score analysis. PLoS One. 2020 Jul 9;15(7):e0235797.</p> <p>●気道炎症に関する基礎的研究</p> <p>慢性気道炎症における病態の解明、マクロライド系抗菌薬、抗コリン薬などの薬剤の影響について研究を行っている。</p> <p>Davis MD, Suzaki I, Kawano S, Komiya K, Cai Q, Oh Y, Rubin BK. Tissue Factor Facilitates Wound Healing in Human Airway Epithelial Cells. Chest. 2019 Mar;155(3):534-539.</p> <p>Komiya K, Ohta S, Arima K, Ogawa M, Suzuki S, Mitamura Y, Nunomura S, Nanri Y, Yoshihara T, Kawaguchi A, Kadota JI, Rubin BK, Izuhara K. Clarithromycin attenuates IL-13-induced periostin production in human lung fibroblasts. Respir Res. 2017 Feb 20;18(1):37.</p>
研究業績・アピールポイント	肺炎に関連する臨床研究および気道炎症における基礎研究において、米国胸部疾患学会から2回の受賞歴がある。国内各学会からもそれぞれの分野で受賞している。日本呼吸器学会においては、成人肺炎診療ガイドライン作成委員およびCOVID-19診療expert opinionワーキング委員を担当し、日本感染症学会では、臨床研究促進委員会委員、JAID/JSC感染症治療ガイド・ガイドライン作成委員 (呼吸器感染症領域)、臨床研究促進委員会委員、気道感染症抗菌薬適正使用委員会委員、全国レジオネラ症ワーキンググループ委員、DPCを用いた臨床研究に関するアドホック委員会委員等を担当している。研究業績を元に学会活動では中心的役割を果たしており、論文のみならず多くの書籍等も執筆している。

所属・職位	医学部医学科微生物学講座・准教授	
氏名	齊藤 信夫 (Saito Nobuo)	
取得学位	博士 (医学)、長崎大学、2017年6月 熱帯医学修士、リバプール大学、2010年9月	
SDGs目標		

研究分野	臨床感染症学
研究キーワード	狂犬病、インフルエンザ、ワクチン、熱帯感染症、薬剤耐性対策、顧みられない熱帯感染症
研究内容	<p>臨床感染症専門医であり、臨床感染症・感染症疫学分野が専門である。特に熱帯感染症が得意で、フィリピンやタイなどのフィールドで長年研究を行ってきた。ラボを活用したフィールド疫学研究を得意とし、狂犬病、ジフテリア、レプトスピラ症、デング熱などの研究を行っている。</p> <p>○狂犬病研究 (フィリピン) ヒト狂犬病前向き研究でリスク因子の特定、血液バイオマーカーの検討 狂犬病迅速診断キットによる犬狂犬病のフィールド診断から迅速な封じ込め策を開発し、現場で実証研究を行っている。2018年よりJICA専門家としてフィリピンへ長期派遣 <a href="http://www.med.oita-u.ac.jp/biseibut/">http://www.med.oita-u.ac.jp/biseibut/</a> <a href="https://www.jica.go.jp/project/philippines/014/index.html?fbclid=IwAROMtLQ1MKT0bgFOxPLNYjropmFyD87U6eAYWTTV6huA-qawyJy_hHu6aZ0">https://www.jica.go.jp/project/philippines/014/index.html?fbclid=IwAROMtLQ1MKT0bgFOxPLNYjropmFyD87U6eAYWTTV6huA-qawyJy_hHu6aZ0</a></p> <p>○熱帯感染症臨床疫学研究 (薬剤耐性菌・ジフテリア・レプトスピラ症・髄膜炎菌) 世界で最も熱帯感染症の入院が多い、フィリピン国立感染症病院 (サンラザロ病院) で研究拠点 (長崎大学) を立ち上げ、様々な臨床疫学研究を実施 <a href="http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/internal/about/saito.html">http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/internal/about/saito.html</a></p> <p>○インフルエンザワクチン・新型コロナワクチン臨床疫学研究 テスト陰性デザインを活用したインフルエンザワクチンの効果を推定する臨床疫学研究を実施。同様の方法で、多施設新型コロナワクチン有効性研究も実施している <a href="https://covid-19-japan-epi.github.io/output/index.html">https://covid-19-japan-epi.github.io/output/index.html</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>○論文 (筆頭著者もしくは責任著者のみ)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Household survey on owned dog population and rabies knowledge in selected municipalities in Bulacan, Philippines: A cross-sectional study. PLoS Negl Trop Dis. 2022 Jan 18;16(1)</li> <li>Lateral flow devices for samples collected by straw sampling method for postmortem canine rabies diagnosis. PLoS Negl Trop Dis. 2021 Dec 9;15(12):e0009891.</li> <li>Unique characteristics of new complete blood count parameters, the Immature Platelet Fraction and the Immature Platelet Fraction Count, in dengue patients. PLoS One. 2021 Nov 1;16(11):e0258936.</li> <li>Diphtheria in Metro Manila, the Philippines 2006-2017: A Clinical, Molecular, and Spatial Characterization. Clin Infect Dis. 2021 Jan 23;72(1):61-68.</li> <li>Dose-Dependent Negative Effects of Prior Multiple Vaccinations Against Influenza A and Influenza B Among Schoolchildren: A Study of Kamigoto Island in Japan During the 2011-2012, 2012-2013, and 2013-2014 Influenza Seasons. Clin Infect Dis. 2018 Aug 31;67(6):897-904.</li> </ol> <p>○著書 Tropical Infectious Disease Clinical Case Report. Sysmex Corporation 2020</p> <p>○受賞 2018年 感染症学会 北里柴三郎記念学術奨励賞 日本感染症学会専門医・指導医、総合内科専門医</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科総合診療・総合内科学講座・准教授	
氏名	塩田 星児 (Shiota Seiji)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2009年3月	
SDGs目標		

研究分野	総合診療、疫学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ
研究内容	<p>My research is aimed at understanding the important human bacterial pathogen, <i>Helicobacter pylori</i>, which is the major cause of peptic ulcer disease and of gastric cancer. The infection remains latent in the majority of infected patients, only a minority of individuals with <i>H. pylori</i> infection ever develop them. Importantly, the risk for different outcomes varies both among and within populations. These different outcomes are poorly understood and are currently thought to reflect differences in the virulence of the infecting <i>Helicobacter pylori</i> strain, in host genetic factors, in environmental factors, as well in interactions among these elements. My work has pursued basic studies of bacterial gene function and tries to provide critical information to help eliminate the suffering caused by peptic ulcer and deaths caused by gastric cancer. The problem however remains only partially solved and my work is important in helping eliminate this important human pathogen.</p>
研究業績・アピールポイント	<p>Shiota S, Singh S, Anshasi A, El-Serag HB. The Prevalence of Barrett's Esophagus in Asian Countries: A Systematic Review and Meta-analysis. Clin Gastroenterol Hepatol. 2015 Nov;13(11):1907-18.</p> <p>Shiota S, Reddy R, Alsarraj A, El-Serag HB, Graham DY. Antibiotic Resistance of Helicobacter pylori Among Male US Veterans. Clin Gastroenterol Hepatol. 2015 Sep;13(9):1616-24.</p> <p>実施機関名：日本学術振興会 制度（事業）名：科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)（基盤研究(C)） 課題名：認知症患者のピロリ菌CagA抗体陽性率の検討（課題番号：21K07321） 実施期間：令和3-5年度 予算規模：4,160千円（直接経費3,200千円） 申請代表者名：塩田星児</p> <p>実施機関名：日本学術振興会 制度（事業）名：科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(若手研究(B))) 課題名：ヘリコバクター・ピロリCagA抗体の迅速検出キットの開発 実施期間：平成25-26年度 予算規模：4,030千円（直接経費3,100千円） 申請代表者名：塩田星児</p>

所属・職位	医学部医学科医化学講座・准教授	
氏名	下田 恵 (Shimoda Kei)	
取得学位	博士 (理学)、広島大学、1999年7月	
SDGs目標	 	

研究分野	機能材料学
研究キーワード	グリコシド化、機能性化合物、環境汚染物質
研究内容	<p>○機能性食品のグリコシド化に関する研究 化学的および酵素的的手法を利用して機能性食品をグリコシド化することにより、生理活性の高い機能性食品の開発を行う。(論文1)</p> <p>○医薬品のグリコシド化に関する研究 化学的および酵素的的手法を利用して医薬品をグリコシド化することにより、生理活性の高い医薬品の開発を行う。(論文2)</p> <p>○環境汚染物質のグリコシド化に関する研究 酵素的的手法を利用して環境汚染物質をグリコシド化することにより、環境汚染物質を環境から除去する。(論文3)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>○論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. I. Nakanishi, K. Ohkubo, Y. Shoji, Y. Fujitaka, K. Shimoda, et al., Relationship between the radical-scavenging activity of selected flavonols and thermodynamic parameters calculated by density functional theory. <i>Free Radical Research</i>, Vol. 54, No. 7, pp. 534-539 (2020).</li> <li>2. H. Hamada, H. Hamada, K. Shimoda, et al., Resveratrol oligosaccharides (gluco-oligosaccharides) effectively inhibit SARS-CoV-2 infection: Glycoside (polysaccharide) approach for treatment of COVID-19. <i>Natural Product Communications</i>, Vol. 16, No. 5, pp. 1-3 (2021).</li> <li>3. K. Shimoda, N. Kubota, Y. Kondo, D. Sato, et al., Glycosylation of fluorophenols by plant cell cultures. <i>International Journal of Molecular Sciences</i>, Vol. 10, No. 5, pp. 1942-1949 (2009).</li> </ol> <p>○受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 平成22年度 舟橋重明記念奨励助成金</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部





医学部

医学部附属病院


理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科細胞生物学講座・准教授	
氏名	白石 裕士 (Shiraiishi Hiroshi)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2007年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	細胞生物学・遺伝学	
研究キーワード	希少遺伝性疾患・RNAリン酸化酵素・疾患モデル・細胞死・アレルギー	
研究内容	<p><b>【RNAリン酸化酵素に関する研究】</b></p> <p>生体内の様々なRNA分子は厳密に合成と分解の調節を受けており、それらRNAの代謝調節機構をつかさどる分子の異常が、神経変性疾患や悪性腫瘍といった様々な疾患を引き起こすことが明らかとなってきた。RNAの末端をリン酸化する酵素であるRNAリン酸化酵素を中心に、RNA関連分子の生理的意義とその破綻が原因となる疾患の発症メカニズムに関する研究を行なっている (論文1、3、4)。</p> <p><b>【希少遺伝性疾患の疾患モデル作製およびその発症メカニズムと治療法に関する研究】</b></p> <p>遺伝性疾患の多くは希少疾患であるが、未だ多くの疾患において発症メカニズムが不明である。そこで、マウスやゼブラフィッシュにおいて、CRISPR/Cas9といった遺伝子改変技術を駆使して、より効率の良い疾患モデル作製方法を開発するとともに、希少遺伝性疾患の疾患モデルを作製して発症メカニズムの研究を行なっている (論文1、2)。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>これまでにRNAリン酸化酵素の一つであるCLP1の変異が橋小脳低形成症10型の原因となることを発見し、実際にその変異によって病気が発症することを、遺伝子改変技術を用いて作製した動物モデルを用いて明らかにした (論文1、4)。さらに、その生理的役割の一部を明らかにしてきた (論文3)。</p> <p><b>【論文】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Modeling a human CLP1 mutation in mouse identifies an accumulation of tyrosine pre-tRNA fragments causing pontocerebellar hypoplasia type 10. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2021 Sep 17;570:60-66. doi: 10.1016/j.bbrc.2021.07.036.</li> <li>2. Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. <i>Sci Rep.</i> 2021 Apr 16;11(1):8392. doi: 10.1038/s41598-021-87879-4.</li> <li>3. CLP1 acts as the main RNA kinase in mice. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2020 April 23;525(1):129-134 doi: 10.1016/j.bbrc.2020.02.066.</li> <li>4. Human CLP1 mutations alter tRNA biogenesis, affecting both peripheral and central nervous system function. <i>Cell.</i> 2014 Apr 24;157(3):636-50. doi: 10.1016/j.cell.2014.02.058.</li> <li>5. Periostin promotes chronic allergic inflammation in response to Th2 cytokines. <i>J Clin Invest.</i> 2012 Jul;122(7):2590-600. doi: 10.1172/JCI58978.</li> <li>6. ER stress-induced apoptosis and caspase-12 activation occurs downstream of mitochondrial apoptosis involving Apaf-1. <i>J Cell Sci.</i> 2006 Oct 1;119(Pt 19):3958-66. doi: 10.1242/jcs.03160.</li> </ol> <p><b>【受賞】</b></p> <p>第6回日本アレルギー学会学術大会賞</p>	



所属・職位	医学部医学科解剖学講座・准教授	
氏名	千葉 政一 (Chiba Seiichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2005年6月	
SDGs目標		

研究分野	代謝学、行動生理学、医療工学、肥満臨床学、解剖学	
研究キーワード	肥満症、中枢性ヒスタミン、記憶学習	
研究内容	<p>●肥満にともなう代謝学に関する研究 基礎研究では食事誘導性肥満モデルを作成し、主に中枢性側行動調節機構を解析している。臨床研究では行動療法の有効性を後ろ向き観察研究として行なっている。</p> <p>●中枢性ヒスタミン機能に関する研究 小動物視床下部のヒスタミン機能について外因性にヒスタミンを投与し、その行動修飾作用を解析している。</p> <p>●医療工学機器の開発 体重日内変動のデジタル解析を行い、AIによる体重減少効果の予測を検討している。皮膚小外科用の局所麻酔薬を用いない皮膚冷却デバイスを開発した。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文 Wei H, *<b>Chiba S</b>, Moriwaki C, Kitamura H, Ina K, Aosa T, Tomonari K, Gotoh K, Masaki T, Katsuragi I, Noguchi H, Kakuma T, Hamaguchi K, Shimada T, Fujikura Y, Shibata H: A clinical approach to brown adipose tissue in the para-aortic area of the human thorax. PloS one 10:e0122594, 2015 (IF 4.411) 査読有 Moriwaki C, *<b>Chiba S</b>, Wei H, Aosa T, Kitamura H, Ina K, Shibata H, Fujikura Y: Distribution of histaminergic neuronal cluster in the rat and mouse hypothalamus. J Chem Neuroanat 68:1-13, 2015 (IF 1.8) 査読有 Aosa T, *<b>Chiba S</b>, Kitamura H, Ina K, Tatsukawa S, Moriwaki C, Wei H, Gotoh K, Masaki T, Kakuma T, Shibata H, Fujikura Y: Pore alterations of the endothelial lining of rat fenestrated intestinal capillaries exposed to acute stress. Histol. Histopathol. 31(7):807-817, 2016 (IF 2.025) 査読有 *<b>千葉政一</b>、森脇千夏、伊奈啓輔、藤倉義久： 摂食と肥満における視床下部神経ヒスタミンの役割:創薬へ向けて。 日本薬理学会雑誌 147:1-8, 2016 *<b>千葉政一</b>：基礎医学研究の今。 肥満研究 68(2):130-131, 2017</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科産科婦人科学講座・准教授	
氏名	西田 欣広 (Nishida Yoshihiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	周産期医学、分子生物学、東洋医学
研究キーワード	胎盤、胚細胞、メタボローム解析
研究内容	<p>●胚移植前メタボローム解析による新しい胚機能評価法に関する研究</p> <p>これまでに<b>単一胚細胞由来の超微量培養液中一次代謝産物の、GC-MS/MS法による測定条件を確立した</b> (特許出願済)。各胚細胞の一次代謝産物について主成分分析すると、形態学的に分別できる群ごとに分かれ、胚の良否判別に有用であることを明らかにした(文献1)。現在、妊娠継続の可能性が高い受精胚は<b>胚移植前の早い段階でその胚細胞分裂に起因する代謝に差異が生じるのではないかと</b>の仮説のもと研究を行っている。</p> <p>●胚移植前に個体の運命を予測可能とする研究</p> <p>本研究では<b>妊娠継続の可能性が高い受精胚の選択マーカーを提案</b>することを研究目的とし、下図に先行研究 (パイロット研究) の一部を示す。最終的に生児を得た胚細胞と流産に帰結した胚細胞のそれぞれ胚移植前の培養液中の代謝産物を解析し、<b>肉眼的には同レベルの胚移植に適した良好胚細胞 (Gardner分類: 3BCもしくは3CB以上) であっても生児を得た胚細胞培養液は明らかにその一次代謝産物に相違があることを確認し、現在精査を進めている。</b>この非侵襲的解析手法は我々が独自に開発した独自性が強い研究である。</p>

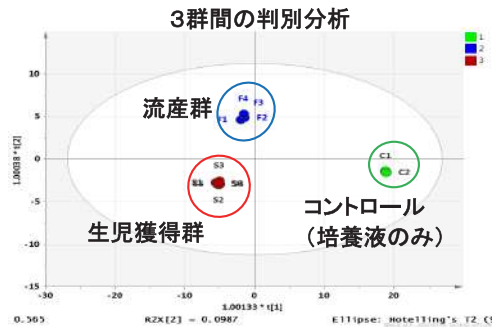







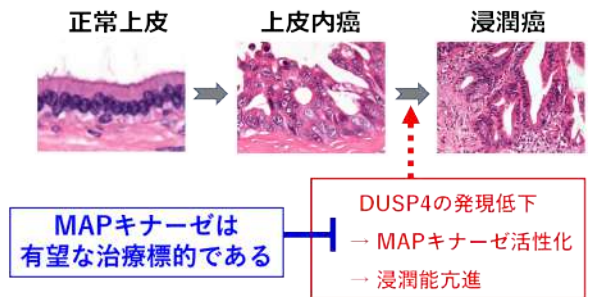
図. 培養液のメタボローム解析

研究業績・アピールポイント	<p>この2年間の研究業績を示す。文献1-3は責任著者として発表。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Naomi Inoue, <b>Yoshihiro Nishida*</b>, Emi Harada, Kumi Sakai, Hisashi Narahara. GC-MS/MS analysis of metabolites derived from a single human blastocyst. <b>Metabolomics</b>. 2021 Jan 25;17(2):17. doi: 10.1007/s11306-021-01770-x.</li> <li>Inoue N, Terabayashi T, Takiguchi-Kawashima Y, Fujinami D, Matsuoka S, Kawano M, Tanaka K, Tsumura H, Ishizaki T, Narahara H, Kohda D, <b>Nishida Y*</b>, Hanada K. The benzyloisoquinoline alkaloids, berberine and coptisine, act against camptothecin-resistant topoisomerase I mutants. <b>Sci Rep</b>. 2021 Apr 8;11(1):7718. doi: 10.1038/s41598-021-87344-2.</li> <li>Naomi Inoue, Hisashi Narahara, <b>Yoshihiro Nishida*</b>, and Katsuhiko Hanada, Detection of Bleomycin-Induced DNA Double-Strand Breaks in <i>Escherichia coli</i> by Pulsed-Field Gel Electrophoresis Using a Rotating Gel Electrophoresis System. DNA Electrophoresis: Methods and Protocols, <b>Methods in Molecular Biology</b>, vol.2119, p155-163. Humana Press 2020.</li> <li>Masanori Inoue, Kazumasa Hada, Hiroshi Shiraishi, Hiroyuki Yatsuka, Hiroyuki Fujinami, Ikuko Morisaki, <b>Yoshihiro Nishida</b>, Etsuro Matsubara, Tohru Ishitani, Reiko Hanada, Masaki Matsumoto, Josef M Penninger, Kenji Ihara, Toshikatsu Hanada, Tyrosine Pre-Transfer RNA Fragments Are Linked to p53-dependent Neuronal Cell Death via PKM2. <b>Biochem Biophys Res Commun</b> 2020 Mar 3, DOI: 10.1016/j.bbrc.2020.02.157</li> </ol>
---------------	---



所属・職位	医学部医学科ヘルスケアAI・データサイエンス学講座・准教授	
氏名	秦野 浩司 (Hatano Koji)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2016年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	神経画像学、医療情報学、データサイエンス、精神医学	
研究キーワード	神経突起イメージング、MRI、機械学習	
研究内容	<p>・機械学習と神経突起画像を用いて精神疾患を弁別する研究</p> <p>うつ病と双極性障害の診断は時に難しいことがあります。MRIによる拡散テンソル画像を用いて神経突起を画像化することが可能となっており、これと機械学習を用いてうつ病と双極性障害の弁別を行うことを目指しています。</p> <p>・気質と脳画像研究</p> <p>うつ病の仮面をかぶった双極性障害が結構多いことが問題になっています。「気質」は生まれつきの性格傾向であり、循環気質や発揚気質を持ったうつ症状のある方を、双極スペクトラムと診断し、治療を行っています。気質と脳画像の関連に着目して、MRIや18F-FDG-PETを用いた脳画像研究を行っています。健康成人において、循環気質や発揚気質が高い人は、左内側前頭回の体積が大きいことを示しました (論文1)。さらに、MRIの拡散テンソル画像を用いることで、気質と白質の微細構造の関連を精査しています。循環気質は、右前放線冠や右脳梁膝部と関連があり、発揚気質は全脳の多くの部位の白質と関連があることを明らかにしました (論文2)。今後は、気質に着目して健常者と気分障害 (躁うつ病やうつ病) に共通した、あるいは異なった脳機能・構造特性を明らかにしていく予定です。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>精神疾患とMRIを用いた脳画像研究を軸に研究活動を行っています。近年は機械学習やデータサイエンスにも取り組んでいます。</p> <p>・論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Hatano K., Terao T., Hoaki N., Kohno K., Araki Y., Mizokami Y., Kodama K., Harada M., Fujiki M., Shimomura T., Hayashi T. Association between affective temperaments and regional gray matter volume in healthy subjects. <i>Journal of Affective Disorders</i>. 155:169-173, 2014.</li> <li>Hatano K., Terao T., Hayashi T., Hirakawa H., Makino M., Mizokami Y., Fujiki M., Shimomura T. Affective temperaments are associated with the white matter microstructure in healthy participants. <i>Bipolar Disorders</i>. 21:539-546, 2019.</li> <li>Hatano K., *Terao T., Hirakawa H., Kohno K., Mizokami Y., Ishii N. Cyclothymic temperament and glucose metabolism in the right superior parietal lobule. <i>Psychiatry Research Neuroimaging</i>. 270:76-79, 2017.</li> <li>Hirakawa H., Terao T., Hatano K., Shirahama M., Kugimiya T., Kohno K., Ishii N., Matsuta H., Shimomura T., Fujiki M. Increase in the left hippocampal dentate gyrus head volume after a 4-week bright light exposure in healthy participants: A randomized controlled study. <i>Journal of Psychiatric Research</i>. 145:1-5, 2021.</li> <li>Bhagwat N., Barry A., Dickie E.W., Brown S.T., Devenyi G.A., Hatano K., DuPre E., Dagher A., Chakravarty M.M., Greenwood C.M.T., Misic B., Kennedy D.N., *Poline J. Understanding the impact of preprocessing pipelines on neuroimaging cortical surface analyses. <i>GigaScience</i>. 10:giaa155. doi:10.1093/gigascience/giaa155, 2021.</li> </ol>	

所属・職位	医学部医学科分子病理学講座・准教授	
氏名	泥谷 直樹 (Hijiya Naoki)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1994年9月	
SDGs目標		

研究分野	病理学
研究キーワード	膵癌、大腸癌、悪性形質、責任遺伝子、分子標的治療
研究内容	<p>●膵上皮内癌から浸潤癌への進展に関わる分子機序の解明</p> <p>膵癌は正常上皮から上皮内癌を経て生じる悪性腫瘍です。私は上皮内癌と浸潤癌のゲノム異常を比較することで、浸潤に関わるゲノム異常と責任遺伝子を同定し、それに伴って活性化するMAPキナーゼ経路が有望な治療標的となりうることを報告しました(論文#1, 2)。</p> <p>●MAPキナーゼ阻害薬の耐性化関連分子を標的とした新規治療法の開発</p> <p>膵癌はMAPキナーゼ経路依存性腫瘍であるにもかかわらず、MAPキナーゼ阻害薬に対して強い抵抗性を示します。私は抵抗性に関わる分子を同定し、その分子の機能を抑制することでMAPキナーゼ阻害薬の感受性が改善することを証明しました (paper in preparation)。現在、膵癌の新規治療法の開発に向けた基礎研究を進めています。</p> <p>●大腸癌の進展に関わる分子機序の解明</p> <p>大腸癌の深達度や転移は重要な予後規定因子です。これらの悪性形質に関わる分子を同定して、バイオマーカーおよび治療標的としての有用性を報告しました(論文#3, 4, 5)。現在、臨床講座と協力して新規診断法と治療法の開発を目指しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <p>#1. Genomic loss of DUSP4 contributes to the progression of intraepithelial neoplasm of pancreas to invasive carcinoma. <i>Cancer Res.</i> 76(9):2612-2625. 2016</p> <p>#2. Downregulation of ZNF395 drives progression of pancreatic ductal adenocarcinoma through enhancement of growth potential. <i>Pathobiology</i> 88:374–382. 2021</p> <p>#3. Visinin-like protein-1 overexpression is an indicator of lymph node metastasis and poor prognosis in colorectal cancer patients. <i>Int J Cancer.</i> 131(6):1307-17. 2012</p> <p>#4. Downregulation of DUSP4 enhances cell proliferation and invasiveness in colorectal carcinomas. <i>Cancer Sci.</i> 109(1):250-258. 2018</p> <p>#5. DUSP4 is involved in the enhanced proliferation and survival of DUSP4-overexpressing cancer cells. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 528 (3):586-593. 2020</p>





所属・職位	医学部医学科小児科学講座・准教授	
氏名	前田 知己 (Maeda Tomoki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2009年3月	
SDGs目標		

研究分野	胎児・新生児医学
研究キーワード	新生児自発運動評価、General Movements、心拍変動解析





研究内容	<p>●General Movements; GMs評価を用いた発達予測 GMsは新生児期・乳児期早期に認められる自発的な運動で、発達過程の中枢神経系の機能を反映すると考えられており、脳性麻痺予測に有用な事が確立している。当院NICUで入院加療を行った、極低出生体重児に代表される発達に問題を抱えるリスクのある児のコホートで、発達予後を前方視的に検討している。新生児期の評価はGMsのほかに頭部MRIによる脳形態発達、心拍変動解析による自律神経機能の評価も行い、GMsの由来や影響を及ぼす因子を検討している。それらの評価を組み合わせることで、脳性麻痺以外の運動の巧緻性の障害、知的障害、神経発達症リスク児の早期の気づき、早期介入や家庭への支援につなげることを目指している。</p> <p>●GMs判定補助システムの開発、GMs評価普及活動 GMs評価は本邦で評価できる者が少ない。本邦で広くGMs評価を実践するために、自身が中心となり評価用サーバーを立ち上げ、多施設・複数の評価者で連携して、継続的な評価者のトレーニングと評価精度の向上を目指すシステムの運用している。また、研究を通じて収集された臨床情報、GMs記録とその評価、発達予後は、日本人のGMsアーカイブとして保存・公開し、本邦における新生児乳児期の自発運動に関する基礎・臨床研究の基礎資料とする予定である。</p>	
------	--	--

図 2022年に作成した乳児期早期のGMs評価演習用DVD

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Maeda T, Kobayashi O, Ihara K, Bos AF. Fidgety movements assessment accuracy survey in Japan. Int. J. Environ. Res. Public Health. 2021; 18(24):13428</li> <li>2. 前田知己. 新生児期・乳児期早期の発達評価-General movements評価法を中心に. 脳と発達 2020; 52:141-146</li> <li>3. Maeda T, Sekiguchi K, Wasada R, Ihara K. Caffeine not associated with irritable behaviour in very low-birth-weight infants. Ear Hum Dev. 2019; 137: 104835</li> <li>4. 前田知己. 脳性麻痺の診断と小児科治療. Medical rehabilitation 2019; 232:1-7</li> <li>5. Maeda T, Iwata H, Sekiguchi K, Takahashi M, Ihara K. The association between brain morphological development and the quality of general movements. Brain Dev. 2019;41:490-500</li> <li>6. Maeda T, Inoue M, Sekiguchi K, Ihara K. Aminophylline-associated irritable behaviour in preterm neonates. Ear Hum Dev 2016;99:37-41</li> </ol> <p>●GM-Trust主催の評価講習会2011年基礎コース、2013年、2017年にアドバンスコースを受講し評価認証を受けている。2018年に本邦で初めての基礎評価法講習会を開催した。</p>
---------------	--

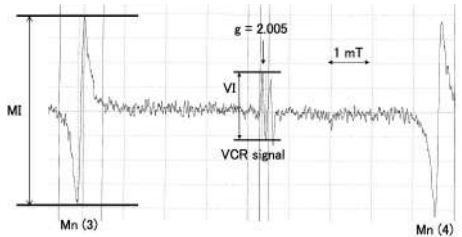
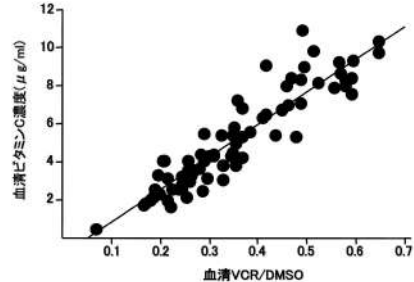


所属・職位	医学部医学科内分泌代謝・膠原病・腎臓内科講座・准教授	
氏名	正木 孝幸 (Masaki Takayuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2000年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	医学
研究キーワード	肥満症、糖尿病、代謝性症候群
研究内容	<p>●<b>脂肪由来因子アディポネクチンのエネルギー代謝への影響に関する研究</b>          肥満糖尿病モデルマウスにおいてアディポネクチンを投与した時に褐色脂肪組織や骨格筋での脱共役タンパク質の発現増加作用を示した。アディポネクチンはエネルギー代謝調節作用を持つことが示唆された(論文 1)。</p> <p>●<b>脂肪由来因子アディポネクチンの肝臓の炎症への影響に関する研究</b>          本研究ではアディポネクチンの肝臓における抗炎症効果について調べた。肥満症肝炎モデルにアディポネクチンは肝炎に保護的に作用することが分かった(論文 2)。</p> <p>●<b>神経ヒスタミンの摂食リズムやエネルギー代謝への影響に関する研究</b>          肥満糖尿病モデルマウスにおいて神経ヒスタミンは脱共役タンパク質の発現増加作用を持つことや摂食のリズムに関連することが示唆された(論文 3)。</p> <p>●<b>ヒト内臓脂肪蓄積と血圧変動との関連についての解析</b>          本研究では耐糖能異常のある患者さんの24時間血圧変動と内臓脂肪蓄積の関連について解析した。耐糖能異常の患者さんにおいて内臓脂肪蓄積は特に夜間の高血圧と関連することが示唆された(論文 4)。</p> <p>●<b>GLP-1アナログ製剤の糖代謝と食行動への影響に関する研究</b>          肥満糖尿病の患者さんでGLP-1アナログ製剤セマグルチド投与は糖尿病改善と併せて食行動の改善所見も認めた。特に食行動の中でも空腹満腹感が糖代謝の改善と関連することが示唆された(論文 5)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●<b>主な論文</b>          (論文1). Masaki T, et al. Diabetes. 52:2266, 2003.          (論文2). Masaki T, et al. Hepatology. 40:177, 2004.          (論文3). Masaki T, et al. Trends Pharmacol Sci. 27:279, 2006.          (論文4). Masaki T, et al. Diabetes Care. 34: e32, 2011.          (論文5). Masaki T, et al. Metabolites 12:147, 2022.</p> <p>●<b>受賞</b>          2003年、日本肥満学会 Young Investigate Award          2008年、日本肥満学会 学術奨励賞</p>

所属・職位	医学部医学科マトリックス医学講座・准教授	
氏名	松尾 哲孝 (Matsuo Noritaka)	
取得学位	博士 (農学)、九州大学、1996年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	マトリックス生物学、生化学、分子生物学	
研究キーワード	細胞外マトリックス、細胞分化、転写、機能性因子	
研究内容	<p>1) 細胞外マトリックス分子の機能解析</p> <p>我々の生体は、種々の細胞とそれを取り巻く細胞外環境の相互作用によって組織・臓器が形成され、機能が維持されています。従って、生命現象や疾患のメカニズムを解明するためには、細胞自身だけでなく、細胞外マトリックスの役割を知る事が重要と思われます。我々は、これら分子の中で、コラーゲン分子に着目し、その発現調節機構や分子自身の機能について解析を進めています。</p> <p>2) 天然成分の生体調節機能因子</p> <p>我々の周りには、数多くの天然成分が存在していますが、その中には、我々の生体維持に機能的に作用する因子を含んでいる事が知られています。これら機能因子を検索、同定することは、医薬とは異なり、日常生活で我々の健康状態を維持し、改善することが可能となります。我々は、天然成分の様々な生体調節機能を検討すると共に、その作用機序の解明を進めています。</p> <p>3) 間葉系幹細胞の組織特異的分化に関わる因子の検索及び機能解析</p> <p>未分化間葉系幹細胞からは、骨・軟骨・皮膚・筋肉・脂肪細胞などに分化していくことが知られています。これら各組織への分化メカニズムについては、未だ謎の部分が多いですが、組織特異的な転写因子や足場となる細胞外マトリックス分子などがこの課程に関与していることが判ってきました。我々は、再生医療を目指して、組織特異的な分化課程に関与する因子を検索し、その機能解析を進めています。</p> <p>関連リンク：<a href="https://www.med.oita-u.ac.jp/matrix/">https://www.med.oita-u.ac.jp/matrix/</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>&lt;代表的な論文&gt;</p> <p><u>N. Matsuo, S. Tanaka, M. K. Gordon, M. Koch, H. Yoshioka, F. Ramirez.</u> CREB/AP1 protein complexes regulate transcription of the collagen XXIV gene (Col24a1) in osteoblasts. <b>J. Biol. Chem.</b> 281; 5445-52; 2006</p> <p>H. Nagato, <u>N. Matsuo</u>, H. Sumiyoshi, K. Sakata-Takatani, M. Nasu, H. Yoshioka. The transcription factor CCAAT-binding factor CBF/NF-Y and two repressors regulate the core promoter of the human pro-<math>\alpha</math>3(V) collagen gene (COL5A3). <b>J. Biol. Chem.</b> 279; 46373-83; 2004</p> <p><u>N. Matsuo</u>, W. Yu-Hua, H. Sumiyoshi, K. Sakata-Takatani, H. Nagato, K. Sakai, M. Sakurai, H. Yoshioka. The Transcription factor CCAAT-binding factor CBF/NF-Y regulates the proximal promoter activity in the human <math>\alpha</math>1(XI) collagen gene (COL11A1). <b>J. Biol. Chem.</b> 278; 32763 - 70; 2003</p> <p>R. Kawano, <u>N. Matsuo</u>, H. Tanaka, M. Nasu, H. Yoshioka, K. Shirabe. Identification and characterization of a soluble cadherin-7 isoform produced by alternative splicing. <b>J. Biol. Chem.</b> 277; 47679-85; 2002</p>	

所属・職位	医学部医学科麻酔科学講座・准教授	
氏名	松本 重清 (Matsumoto Shigekiyo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	麻酔科学、集中治療医学、周術期管理医学
研究キーワード	酸化ストレス、炎症、ビタミンC、敗血症、術後せん妄、胎児仮死
研究内容	<p>●ビタミンCリアルタイム測定法の確立と各種病態における酸化ストレスの評価に関する研究</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="384 629 847 864">  <p>図1. DMSO添加後に得られる血漿VCRのESRシグナル。Mnマーカーのシグナル高(MI)に対するVCRのシグナル高(VI)の比を血漿VCR/DMSOとした。</p> </div> <div data-bbox="911 584 1326 864">  <p>図2. ESR装置で測定したVCR/DMSOとHPLCで測定したビタミンC濃度には有意な正の相関関係を認めた(論文1)。</p> </div> </div> <p>電子スピン共鳴(ESR)装置を用いた血漿ビタミンCリアルタイム測定法を確立し、これを応用して、急性肺傷害(論文1)や胎児仮死(論文2)において、リアルタイムで酸化ストレスの程度を評価することに成功した。さらに、敗血症性ショックの機序として、過剰な酸化ストレスに伴うビタミンCの減少による副腎不全の可能性を指摘し(論文3)、基礎研究にて検証中である(東京都健康長寿医療センター研究所・石神研究部長との共同研究)。また、現在、心臓手術後のビタミンCの減少と術後せん妄の関連性について臨床研究を行っている。</p> <p>●酸化ストレスと栄養療法に関する概説 重症病態において、抗酸化栄養療法により酸化ストレスを制御することの重要性を概説した(著書1)。</p> <p>●呼気中揮発性代謝産物のリアルタイム測定法の開発 近年、疾患に関連する呼気中揮発性代謝産物が多数報告され、呼気からの揮発性代謝産物検知による疾患の早期発見や予防への期待が高まっているが、周術期においてはいまだに検討されていない。周術期には、手術侵襲により組織代謝が著明に変化する。それに伴い産生された揮発性代謝産物は生体膜を通過して呼気中に出現する。本研究では、水晶振動子ガスセンサシステム(北九州市立大学・李教授との共同研究)を用いて、呼気揮発性代謝産物のリアルタイム検出法を確立し、周術期合併症や予後との関連を検討中である。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2010年、The impact of oxidative stress levels on the clinical effectiveness of sivelestat in treating acute lung injury: an electron spin resonance study. J Trauma. 68: 796-801.</li> <li>2014年、New evaluation of fetal oxidative stress: measurement of the umbilical cord blood dimethyl sulfate-induced ascorbyl-free radical by an electron spin resonance method. J Matern Fetal Neonatal Med. 27: 1550-4.</li> <li>2011年、Effects of the Antioxidant-Enriched Concentrated Liquid Diet ANOM on Oxidative Stress and Multiple Organ Injury in Patients with Septic Shock: A Pilot Study. J Anesthe Clinic Res. 2: 8.</li> </ol> <p>著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2009年、抗酸化栄養療法とその可能性. 臨床栄養臨時増刊号, 114, 659-665</li> </ol>

所属・職位	医学部・准教授	
氏名	道越 淳一 (Michikoshi Junichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年6月	
SDGs目標	  	
研究分野	人工臓器学 (呼吸器系・代謝系)	
研究キーワード	人工呼吸器、気道管理、急性血液浄化、持続的血液濾過器	
研究内容	<p>●人工呼吸管理で気道管理に必要な気管チューブ・気管カニューレのカフに関する研究 (カフ圧の自然脱気やシール能力をカフの材質・形状・大きさなどから解析)、気管吸引・加温加湿に関する研究を通し、急性期・慢性期・在宅における安全な人工呼吸管理を目指した研究。(著書1.・2.・3.・4.)</p> <p>●自動カフ圧調整装置の開発 気管チューブのカフ圧の管理は人工呼吸器関連肺炎予防のためにも重要である。現在行われている一般的な管理方法は間欠的な調整方法であり十分な管理が困難であるため、カフ圧を持続的に安定した圧力で管理するため、電源を必要としない新たな自動カフ圧調整装置を開発。(論文1.・受賞2.)</p> <p>●持続緩徐式血液濾過で使用される濾過器の吸着特性を研究。病態に応じた膜の選択を可能にするため、各種タンパクや細胞の吸着による除去特性が、いかにして臨床効果につながるかについて研究。(論文2.・受賞1.)</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>臨床ニーズに合った医療機器をより早く臨床に反映させる機器開発。 生体情報のモニタリング機器の研究開発。 医療安全の見地から、各種医療機器の分析を行い臨床に反映させる研究。</p> <p>●論文 1.2016年 Performance comparison of a new automated cuff pressure controller with currently available devices in both basic research and clinical settings. Journal of Intensive Care 2016;4:4. 2.2019年 Evaluation of Proteins and Cells that Adsorb to Dialysis Membranes Used in Continuous Hemodiafiltration: Comparison of AN69ST, Polymethylmethacrylate, and Polysulfone Membranes. Blood purification 2019;48(4):P358-367.</p> <p>●著書 1.2015年 どう回避し,対処する? 事例から学ぶ人工呼吸療法時のトラブル,気管チューブに関するトラブル事例と対処 月刊 Clinical Engineering Vol.26 No.9 2015,P894~900 2.2017年 臨床工学技士のための人工呼吸療法トラブル事例と対処:臨床工学技士のための人工呼吸療法 第4章,3,P234~242 学研メディカル秀潤社 3.2018年 気管カニューレのカフ圧持続管理の重要性 月刊難病と在宅ケア Vol.23 No11. 2018.2 4.2020年 [特集]呼吸管理上級編2020 気管チューブカフと自動カフ圧コントロール装置 月刊 Clinical Engineering VOL.31 NO.11 2020,P947~954 学研メディカル秀潤社</p> <p>●受賞 1.2018年 第2回日本集中治療学会 支部総会 最優秀演題賞 2.2019年 日本臨床工学会 第2回医工連携Award特別賞</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

理工学部


福祉健康科学部




その他学内施設等

所属・職位	医学部附属医学教育センター・准教授	
氏名	山本 恭子 (Yamamoto Kyoko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年12月	
SDGs目標	 	

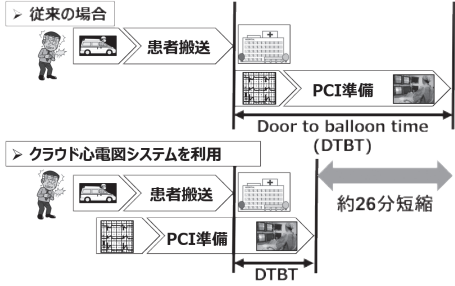

研究分野	医学教育
研究キーワード	医学教育 総合診療
研究内容	<p>① 認知症予防に関する研究 介護予防拠点での介護予防の取り組みの有用性 認知症早期発見に関する研究</p> <p>② 医学教育に関する研究 総合診療に関する学生の学び 鑑別診断に基づく身体診察 (HDPE) を用いた診察技能向上</p> <p>③ 総合診療に関する研究 身体症状の訴えの数とうつ病の関連</p>
研究業績・アピールポイント	<p>山本恭子, 中川幹子, 北野敬明, 宮崎英士. コロナ禍のオンライン講義—アクティブラーニングで健康の社会的決定要因 (SDH) を学ぶ—. 大分大学高等教育開発センター紀要 第13号,111-121,2021.</p> <p>Kyoko Y., Seiji S., Shigeki O., Akiko K., Aoi Y., Koh A., Kazunari M., Toshio F. A Diagnosis of Depression Should Be Considered in Patients with Multiple Physical Symptoms in Primary Care Clinics. <i>Tohoku J. Exp. Med.</i>,229,279-285 (2013).</p> <p>山本恭子,塩田星児,中川幹子,北野敬明,宮崎英士.特集: コロナ禍より生まれた医学教育イノベーション 鑑別診断を考えながら行う身体診察 (HDPEモデル) に基づく教育実践—認知的徒弟制の枠組みを用いた学生によるシナリオ作成とその成果—. 医学教育52(3): 241-245,2021.</p> <p>Kyoko Yamamoto, Aoi Yoshiiwa et al. Intervention study for elderly people attending Salons - Initiative to prevent dementia in local Government. WONCA2021 World Conference.</p>



所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・准教授	
氏名	幸松 美智子 (Yukimatsu Michiko)	
取得学位	修士(看護学)、高知女子大学、2002年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	小児看護学	
研究キーワード	慢性疾患を抱える子ども 病児の家族看護 病児のしつけ 基礎教育 アセスメント能力	
研究内容	<p>●看護学生が捉える子どもの甘えの構造</p> <p>病児だけでなく子どもの成長発達に「甘え」は不可欠であるが、「甘え」の研究を紐解くと文化の中に「甘え」があるものの、子どもを養育する際には「甘え」は許されぬものとなっている。病児やその家族は強いストレスを抱えており、その意味でも「甘えや依存」は重要なコーピングであるが、医療従事には自立を促すことが需要であると甘えを許さない傾向が先行研究で明らかとなった。将来看護師となる看護学生が「甘え」をどのように捉え、対応すべきと考えているかを明らかにすることは、養育の専門家を育成するための重要な資料となるため取り組んだ(論文1)</p> <p>●学生の分析力向上におけるアセスメント・モデルの効果</p> <p>看護教育において学生の看護実践能力の向上が急務であるが、高校までの学習方法(科目の暗記)しか修得できていない学生にとって知識を統合して事象を正しく判断することは極めて難しい。そのため、学生の修得した知識の統合を図る手段が必要であり、本研究は臨床判断のモデルを用いて、より学生の活用し易いモデルへと改変したものを、学生に実際に使ってもらい、その効果を明らかにしたものである(論文2)</p> <p>●慢性疾患を抱える子どものしつけ</p> <p>子どもの養育に関する知識と技術の修得は、子育て不安が社会問題となっている現状において看護職に求められる能力である。子どもの育児に関する基本的な知識をまとめ、看護に応用できるようにしたものである(著書1)</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 看護学生が捉える「甘え」について, 九州・沖縄小児看護教育研究会誌、第20号、2019</li> <li>2. 学生の分析力向上におけるアセスメント・モデルの効果, 九州・沖縄小児看護教育研究会誌、第20号、2019</li> </ol> <p>著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 幼児期の子どもの成長・発達と看護, 小児の成長と発達、P99~133、メディカ出版、2021</li> <li>2. アトピー性皮膚炎をもつ子どもと家族, 場面で学ぶ小児看護学(改訂版) P139-152、メディカ出版、2019</li> <li>3. 子どもの成長・発達. 場面で学ぶ小児看護学(改訂版) p36-53、2019</li> </ol>	

所属・職位	医学部医学科循環器内科・臨床検査診断学講座・准教授	
氏名	油布 邦夫 (Yufu Kunio)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	循環器内科学
研究キーワード	病院前12誘導心電図・血管内皮機能・冠動脈インターベンション・心臓再同期療法・構造的な疾患・心筋梗塞

<p><b>研究内容</b></p> <p>急性心筋梗塞患者の経皮的冠動脈インターベンション(PCI)で、予後を左右するDoor to balloon time (DTBT;患者の病院到着から冠動脈閉塞の再疎通までの時間)をいかに短縮するかが重要で、事実大分県では全国に先駆け、救急車に12誘導心電計を搭載して搬送前に病院へ伝送するクラウド心電図伝送システムを導入。</p> <p>実際にこのシステムを活用し、DTBTが平均96分から70分へ約26分短縮したことを図1のように論文報告した(Yufu K et al. Circulation Reports. 2019)。図2は現在のクラウド心電図伝送システムの分布であり以下の研究を行っている。</p> <p>I. DTBTの調査…DTBTをC-ECGシステム群とコントロール群で比較。</p> <p>II. 至適患者搬送の調査…心電図伝送後の患者の流れの調査。従来搬送と比較。</p> <p>III. 都市部と辺域地域の調査…PCI施設の密集する都市部と遠隔地域で同システムの有効性の相違を群間比較。</p> <p>IV. 時間帯による有効性の差異の調査…日直帯と当直帯による伝送効果の差異を群間比較。</p> <p>V. 治療効果、医療経済的効果を算出…同システムで治療された患者の予後・入院費用・人件費・医療費などを算出。</p>	 <p>図1. クラウド心電図システムによるDoor to balloon timeの短縮</p>  <p>図2. 大分県クラウド心電図伝送システムの分布          □ システム参加地域    救急車にシステム搭載          ○ PCI可能施設    ● 地域中核病院 (非PCI施設)</p>
<p><b>研究業績・アピールポイント</b></p> <p>・Yufu K, Takahashi N, et al. Outcome of Patients With Cardiac Sarcoidosis Who Received Cardiac Resynchronization Therapy: Comparison With Dilated Cardiomyopathy Patients. J Cardiovasc Electrophysiol. 2017;28:177-181. (Impact Factor:2.424)          : 主要心脳血管イベントをみると、心サルコイドーシス群45%に対し拡張型心筋症群14%と有意に心サルコイドーシスにイベントが多かった。このため心サルコイドーシスの重症の慢性心不全患者に心臓再同期療法を考慮する際は適応に十分な検討を加えるべきである。</p> <p>・Yufu K, Takahashi N, et al. Impact of Mobile Cloud Electrocardiography System on Door-to-Balloon Time in Patients With Acute Coronary. Circulation Reports. 2019;1:241-247. (Impact Factor:未)          : 急性心筋梗塞に対する緊急経皮的冠動脈インターベンション (PCI) において救急搬送後冠動脈を再開通させるまでの時間、すなわちドアーバルーン時間を短縮することは重要である。大分県での全国有数と思われるクラウド心電図システムの緊急PCIに対する効果は明白である。</p> <p>・Tanino T, Yufu K, et al. Proposal criteria of paradoxical low-flow low-gradient aortic stenosis for predicting prognosis in patients undergoing transcatheter aortic valve implantation. Heart Vessels. 2021 Nov 25. doi: 10.1007/s00380-021-01992-y.          : 重症大動脈弁狭窄症に対する経カテーテル的大動脈弁留置術が発展してきている。奇異性低灌流低圧較差大動脈弁狭窄症は術後も予後不良であるがこれを予測する評価法を提案。</p>	




所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座（成人看護学）・准教授	
氏名	脇 幸子 (Waki Sachiko)	
取得学位	博士（看護学）、大阪大学、2016年9月	
SDGs目標	     	

研究分野	看護学
研究キーワード	慢性疾患看護、セルフケア支援、チーム医療、地域医療、看護教育学、看護生涯学習
研究内容	<p>●【研究1】慢性疾患(糖尿病)を持つ人のセルフケア支援に関する研究(研究活動①～④)</p> <p>糖尿病重症化予防のためのセルフケア支援では、単に食事や運動などのセルフケア方法や知識だけでなく、自分自身で自分のセルフケア状況を自己評価できる力を育成することが重要であるが、病院での支援だけでは効率的ではない。そこで、糖尿病・予備軍のある人と糖尿病療養指導士との相互作用の場である、患者会活動や地域活動(就労支援)において、先行研究で示唆された『糖尿病をもつ人のセルフケア自己評価を促す支援のガイドライン』やACP概念を活用したセルフケア支援を行い、患者会や地域との協働によるセルフケアpower upプログラムの有効性を探究している。(加えて、慢性疾患患者の防災プロジェクト参加)</p> <p>●【研究2】研究1と連動：チーム医療、地域医療、多職種連携に関する研究(研究活動⑤)</p> <p>大分県での糖尿病医療と地域連携システムの検討として、情報提供・共有、相談導入など両者が共に活用できる資源としてタッチパネル式コンピュータ：アンドロイドを作製した。</p> <p>●【研究3】研究1・2と連動：介護老人保健施設における糖尿病チーム医療・介護モデルの開発(研究活動⑥)</p> <p>介護老人保健施設における糖尿病チーム医療のモデル開発とアプリ作製・糖尿病療養指導士の介入による糖尿病チーム医療・介護の実践</p> <p>●キャリア開発・看護学教育でのVR教材開発</p>
研究業績・アピールポイント	<p>①基盤C(平成19・20年度)「外来看護での糖尿病患者のセルフケア自己評価の試みと自己決定能力向上との関連」</p> <p>②基盤C(平成22～24年度)「タッチパネル式情報提供コンピュータを活用した糖尿病患者のセルフケア自己評価の試み」</p> <p>③基盤C(平成25～28年度)「糖尿病患者のセルフケア自己評価支援ツールとCDE看護師育成プログラムの開発」</p> <p>* Structural model of self-care agency in patients with diabetes: A path analysis of the Instrument of Diabetes Self-Care Agency and body self-awareness, Sachiko WAKI, etc, <i>Japan Journal of Nursing Science</i> (2016.5.25) doi:10.1111/jjns.12127</p> <p>* Insights into self-care behavior of patients with diabetes: support using a computerized self-evaluation system, Sachiko Waki, etc, <i>Journal of Nursing Education and Practice</i> 2016, Vol. 6, No. 10, 51-64. DOI: 10.5430/jnep.v6n10p51 URL: <a href="http://dx.doi.org/10.5430/jnep.v6n10p51">http://dx.doi.org/10.5430/jnep.v6n10p51</a></p> <p>④基盤C(平成30～令和4年度)「糖尿病療養指導士と患者会の協働によるセルフケアpower upプログラムの有効性」</p> <p>⑤萌芽(平成13～14年度)分担「地域における糖尿病患者のためのチーム医療の現状と連携システムの構築」地域貢献特別支援事業費(平成15～16年度)「生活習慣病等へき地医療対策支援事業 糖尿病管理のための情報の共有化：糖尿病管理のための情報の共有化」文科省概算要求事業(平成19・20年度) 分担「ICTを活用した双方向性型地域再生モデル事業」</p> <p>⑥基盤C分担(平成30～令和4年度)「介護老人保健施設における糖尿病チーム医療・介護モデルの開発」(平成26～30年度)「介護老人保健施設における糖尿病療養指導士の介入による糖尿病チーム医療・介護の実践」</p>

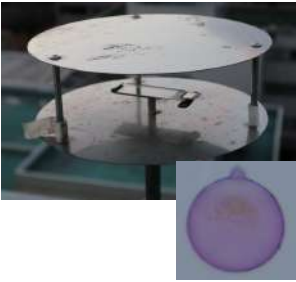
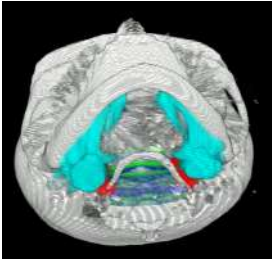
## 医学部

所属・職位	医学部医学科心臓血管外科学講座・准教授	
氏名	和田 朋之 (Wada Tomoyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1999年3月	
SDGs目標	   	
研究分野	成人心臓病外科疾患	
研究キーワード	自己心膜心臓弁膜再建術、SHD (Structure heart disease)、大動脈疾患	
研究内容	<p>弓部大動脈瘤ステントグラフト治療、In situ fenestration法の有用性</p> <p>J-ORCHESTRA Study (J-Open caRdiac aortic arCH disEase replacement Surgical TheRApy Study) (本邦における弓部大動脈疾患に対する術式を評価するため、オープンステントグラフト術並びに、従来の治療法である弓部全置換術を対象とする臨床研究)</p> <p>大動脈組織のバイオバンク構想を用いた国際間共同研究 (患者からの血管および血管周囲の組織と血液サンプルで構成される生体材料バンクの設立意義は、血管疾患の病態機構の解明である。)</p> <p>破裂性腹部大動脈瘤に対する開腹手術とステントグラフト内挿術の治療選択 に関する全国多施設観察研究</p> <p>モバイル端末を活用した救急医療支援システムの有用性評価 (スマートフォンアプリを用いた実用性評価研究)</p> <p>自己心膜強度測定に関する検討</p> <p>体外式膜型人工肺インスパイア臨床使用実態調査</p> <p>カテーテル塞栓法による僧帽弁置換術後弁輪部逆流の制御に関する研究</p> <p>バイオチューブを用いた末梢血行再建術の有用性の検討</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>自己心膜による大動脈弁再建術の多施設共同研究体制とデータベースの確立 (大動脈弁再建術 (AVNEO) 専用の登録システムを構築する、多施設共同研究)</p> <p>自己心膜を用いた大動脈弁再建術の安全性と有効性に関する多施設共同遠隔研究</p> <p>大動脈弁疾患に対する自己心膜を用いた大動脈弁形成術</p> <p>高難度医療申請  「経皮的僧帽弁クリップ術 (経皮的僧帽弁接合不全修復術、マイトラクリップ手術)」  「胸腔鏡下左心耳切除術 (WOLF-OHTSUKA法: WO法)」  「大動脈弁疾患に対する自己心膜を用いた大動脈弁形成術」  「経カテーテル大動脈弁留置術TAVI」</p>	



所属・職位	医学部医学科耳鼻咽喉科学講座・准教授	
氏名	渡邊 哲生 (Watanabe Tetsuo)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1990年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	耳鼻咽喉科頭頸部外科学
研究キーワード	①アレルギー性鼻炎、スギ花粉、②深頸部感染症、深頸部解剖

研究内容	<p>①スギ花粉情報と飛散予測</p> <p>1990年より挟間キャンパス屋上にてスギ花粉飛散数の計測を行なっている。スギ花粉情報は毎年のスギ花粉飛散期に大分県医師会と協力して花粉情報を提供している。飛散予測は総飛散数、飛散開始、飛散期の日々の飛散予測があるが、現在は日々の飛散予測にAIの活用も試みている。そのほか、秋にも少数ながらスギ花粉が飛散するが、飛散予測の一助とするため、秋期の飛散数計測も行なっている。</p>	
	<p>②深頸部感染症の基礎と臨床</p> <p>基礎としては頸部の筋膜と間隙からなる複雑な解剖を理解しやすくするため、正常CT画像からの3Dモデルの作成を試みている。</p> <p>臨床としては最も症例が多い扁桃周囲膿瘍の病態解明、その他の膿瘍については予後を規定する因子の検討を行なっている。</p>	

研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <p>①スギ花粉情報と飛散予測</p> <p>1) 渡辺哲生、末永智、松下太、他：大分大学医学部(大分県由布市挾間町)におけるスギ花粉飛散予測 アレルギー 2005; 54: 1272-1278.</p> <p>2) 渡辺哲生、鈴木正志：スギ花粉飛散数の累積曲線の検討 耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2010; 28: 297-300.</p> <p>3) 渡辺哲生、鈴木正志：大分大学医学部(大分県由布市挾間町)における秋期スギ花粉飛散状況の検討 アレルギー 2014; 63: 920-927.</p> <p>4) 渡辺哲生、鈴木正志:大分大学医学部(大分県由布市挾間町)におけるスギ花粉飛散予測の検証 日耳鼻 2016; 119: 1210-1219.</p> <p>5) 渡辺哲生、鈴木正志：大分大学医学部におけるダーラム式計測器と自動計測器によるスギ・ヒノキ花粉飛散数の比較と分析 耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2017; 35: 271-277.</p> <p>6) 渡辺哲生、鈴木正志：スギ花粉飛散と比較したヒノキ花粉飛散状況の検討 日耳鼻 2020;123:139-144.</p> <p>②深頸部感染症、深頸部解剖</p> <p>1) 渡辺哲生、鈴木正志：扁桃周囲膿瘍症例の検出菌についての検討。口咽科2005; 17: 345-352.</p> <p>2) Watanabe T, Suzuki M: Bilateral peritonsillar abscesses: Our experience and clinical features. Ann Otol Rhinol Laryngol 2010; 119: 662-666.</p> <p>3) 野田加奈子、児玉悟、野田謙二、渡辺哲生、鈴木正志：深頸部感染症299例の臨床的検討。日耳鼻2010; 113: 898-906.</p> <p>4) 渡辺哲生：解剖から見た扁桃周囲膿瘍・深頸部膿瘍。口咽科2016; 29: 9-17.</p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部


医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等





所属・職位	医学部医学科医学微生物学講座・講師	
氏名	池田 八果穂 (Ikeda Yatsukaho)	
取得学位	博士 (理学)、筑波大学、2001年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	動物系統分類学
研究キーワード	進化、発生、線虫、昆虫
研究内容	<p>●動物系統分類学的な研究</p> <p>昆虫類や線虫類についての系統分類学的な研究を行っている。原始的な昆虫であるコムシ目のウロコナガコムシ<i>Lepidocampa weberii</i>については胚発生の詳細な観察を行い、昆虫の基本的体制に関わる特徴、特に背器の形成過程を明らかにした(論文1.)。線虫類についてはアマガエルに寄生した新属新種<i>Paracosmocercella rosettae</i>を記載(論文3.)、また分子系統学的手法により蟯虫や糞線虫の分子同定法の開発に携わってきた(論文2, 4.)。</p> <p>●モデル線虫を用いた薬剤評価システムの開発</p> <p>線虫の一種である<i>Caenorhabditis elegans</i>にRNA干渉法を使って特定の遺伝子をノックダウンすると表現型に異常を示す線虫が得られる。これをモデル線虫として様々な化合物を加えて表現型の回復が起きる化合物を探索し、その化合物が作用する標的を同定するといった手法によって、薬剤の生体評価システムを構築することを目指している。Hippo pathwayは細胞や臓器の大きさ、腫瘍の抑制、組織の再生など多くの生命現象に重要な働きを担っているシグナル伝達経路であり、ヒトや<i>C. elegans</i>を含む多くの動物で進化的に保存されている。このHippo pathwayを構成するコンポーネント遺伝子をノックダウンしたモデル線虫を作成することで、発生や生理的機能の解明、さらにはガンや再生医療における創薬などに貢献できるものと考えられる。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2001年、Y. Ikeda, R. Machida. Embryogenesis of the dipluran <i>Lepidocampa weberii</i> Oudemans (Hexapoda: Diplura, Campodeidae): formation of dorsal organ and related phenomena. <i>Journal of Morphology</i> 249, no. 3: 242-51.</li> <li>2006年、T. Nakano, M. Okamoto, Y. Ikeda, H. Hasegawa. Mitochondrial cytochrome c oxidase subunit 1 gene and nuclear rDNA regions of <i>Enterobius vermicularis</i> parasitic in captive chimpanzees with special reference to its relationship with pinworms in humans. <i>Parasitology Research</i> 100, no. 1: 51-57.</li> <li>2007年、H. Hasegawa, Y. Ikeda. <i>Paracosmocercella rosettae</i> n. gen. et n. sp. (Nematoda: Cosmocercidae: Cosmocercidae) collected from the Japanese tree frog, <i>Hyla japonica</i> (Anura: Hylidae), in Japan. <i>Journal of Parasitology</i> 93, no. 4: 884-88.</li> <li>2009年、H. Hasegawa, S. Hayashida, Y. Ikeda, H. Sato. Hyper-variable regions in 18S rDNA of <i>Strongyloides</i> spp. as markers for species-specific diagnosis. <i>Parasitology Research</i> 104, no. 4: 869-74.</li> </ol>

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座 母性看護学領域・講師	
氏名	猪俣 理恵 (Inomata Rie)	
取得学位	修士 (助産学)、The University of Aberdeen、2006年11月	
SDGs目標	   	
研究分野	母性看護学	
研究キーワード	Women centred care, Shared decision making, Birthplace choice	
研究内容	<p>●母体搬送の経験がその後の助産業務に与える影響についての研究</p> <p>スコットランドでは、助産師が正常出産の主たるケアの担い手として認識されており、ハイリスク出産の担い手である産科医師との分業が確立している。またNHSという包括的医療体制のもと、女性や家族がどこで誰と出産をするかという選択が尊重されている。しかし、産科医療機関の集約化が進み、地域の国営助産所 (Midwifery-led Unit) で出産する場合、正常から逸脱した際の母体搬送に困難が生じていた。そこで、助産師たちの母体搬送の経験についてインタビューを行い、その後の助産業務にどのような影響を与えているかを質的に分析した。</p> <p>結果は、スコットランドという雪深く、離島を有する地域性から、搬送に有する時間やタイミングは計りにくい中で、女性や家族の安全とともに希望に沿った分娩ができるようにするため、国営助産所の助産師たちは常に孤独と葛藤を抱えながら業務していることが明らかになった。また、同じ助産師という職種であっても、搬送先 (病院) の助産師に理解してもらえないことも多く、そのことが円滑な協力体制を阻害する要因になっていることも分かった。母体搬送の経験から、国営助産所では助産師たちが定期的に研修会やシュミレーショントレーニングを主体的に行い、安全に備える体制づくりをしていることが明らかになった。更に、NHSという組織下での搬送体制であるため、病院と国営助産所の助産師たちの相互研修の必要性などが示唆された。(学位論文)</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●学位論文 2005年 An Exploration of Midwives' Experiences of Maternal Transport: What Are The Impact of These Experiences on Their Future Practice?</p> <p>●共著論文 2015年 妊婦健康診査・分娩施設までの所要時間と施設の選択・転院理由との関連 日本母子看護学会誌</p> <p>2014年 分娩施設に関する情報の活用についての調査 日本母子看護学会誌</p> <p>2011年 患者や家族が安心して退院できるような継続支援のあり方の検討 日本看護学会論文集</p>	

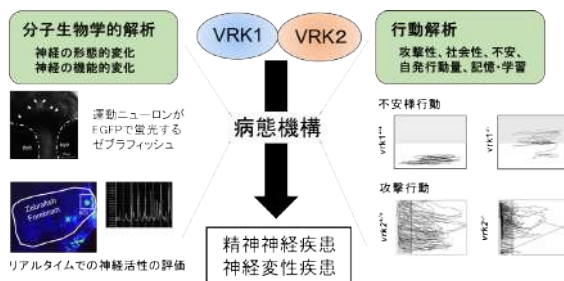
所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座精神看護学領域・講師	
氏名	岩本 祐一 (Iwamoto Yuichi)	
取得学位	修士 (看護学)、熊本大学、2013年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	精神看護学
研究キーワード	精神障害者 看護実践 退院支援 向精神薬
研究内容	<p>●精神科入院中の患者の自殺に関する看護実践の研究 (論文1.)</p> <p>精神科看護師が経験した慢性期統合失調症患者の予測困難な自殺から、入院中における慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な視点を明らかにすることを目的として研究を行った。本研究により、精神科看護師が【患者-看護師関係の長期化に伴う弊害】を中核とした慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な視点をもつ事で、慢性期統合失調症患者の自殺の予防や効果的な支援に繋がるとことが考えられた。</p> <p>●精神科長期入院患者に対する看護師による退院支援に関する研究 (論文2.)</p> <p>精神看護専門看護師 (以下CNS) が行なう精神科長期入院患者の退院に向けた支援を明らかにすることを目的として研究を行った。本研究では、1年以上入院しているケア困難な精神障害者への支援および治療チームへのコンサルテーションを行っている精神看護専門看護師を対象として支援に関するデータを得た。データの分析にはGTAを用いて質的に分析を行った。その結果CNSは病棟看護師とケアを振り返り、提供できているケアとできていないケアを明確にしていた。また、患者への介入の糸口が見えない病棟看護師とその患者との治療的な関係を構築していた。さらには、長期入院患者が新しい試みを行う際に動機づけを明確にする事や、患者家族に対しての支援を行っていた。</p> <p>●一般科看護師のためのBZD系薬剤漸減時の離脱症状アセスメントツールの開発</p> <p>本研究の目的は、向精神薬であるベンゾジアゼピン系薬剤 (以下、BZD) の漸減時に見られる反跳性不安の視点を踏まえ、精神・身体・知覚症状に焦点を当てた一般科看護師のための離脱症状アセスメントツールを開発することである。本研究により、BZD漸減を促進し、さらには向精神薬の適正使用とBZDを使用する患者のQOL向上にむけての新たな提言につながると考えている。まずはBZD漸減時の看護アセスメントの実態調査を行い、アセスメント項目を抽出した。その後、予備的調査を経て看護実践自己評価尺度を開発した。現在、大規模調査にて尺度の信頼性・妥当性を検証中である。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>これまで、精神科領域における看護師の実践に関する研究を行い、公表してきた。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>岩本祐一, 藤野成美. 入院中における慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な精神科看護師の視点. 日本精神保健看護学会誌.29(1), 60-69, 2020.</li> <li>岩本祐一. 長期入院患者への退院支援における精神科看護師の支援 ~精神看護専門看護師の立場から~. 日本精神保健看護学会誌 26(2), 21-30, 2017.</li> </ol> <p>●受賞</p> <p>第9回 中塚医学賞 (大分大学医学研究表彰), 2019.</p>

所属・職位	医学部・講師	
氏名	梅田 涼平 (Umeda Ryohei)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年3月	
SDGs目標		

研究分野	生理学、神経科学、病態生理学、行動生理学
研究キーワード	生理機能解析、in vivoモデル、遺伝子改変ゼブラフィッシュ、病態モデル、行動解析、形態学的解析

研究内容	<p>●VRK familyの神経変性疾患、精神神経疾患における病態機構の解明と創薬基盤の開発</p> <p>Vaccinia related kinase (VRK) familyは主に細胞増殖が盛んな細胞に発現し、細胞に対する様々な刺激に応答して細胞の増殖や細胞周期の調節に関与する遺伝子群である。その中でもVRK1、VRK2はそれぞれ神経変性疾患、精神神経疾患と関連が深いと報告されている。これまでにVRK familyの細胞内における作用は報告されているものの、生体内での役割はほとんど明らかになっていない。</p> <p>VRK familyに関連の深いとされる神経変性疾患や精神神経疾患は、中枢神経系や運動神経の異常から運動機能障害や精神症状を呈する疾患群であるが、その病態メカニズムは解明されておらず、治療法やバイオマーカーはいまだ同定されていない。我々はVRK familyの生理機能を解明することでこれらの疾患の病態機構の一部を明らかにし、創薬基盤を確立することを目的に研究を進めている。(論文2.)</p> <p>上記のVRK familyの解析にあたって、ゼブラフィッシュを用いてVRK familyの遺伝子改変モデルを樹立し、表現型解析においてモデル動物の情動の変化を評価するために行動実験（自発的運動量、不安様行動、攻撃行動、社会性行動、学習・記憶行動）を行っている。さらに、異常な行動がどのような病態メカニズムによって惹起されるのかを解明するために、分子生物学的手法およびプロモーター下で蛍光を発する物質（EGFP、Kaede、GCaMP、GRABセンサーなど）を発現させて神経細胞の形態を解析する形態学的な手法を用いて解析し、その知見をもとに、治療方法の開発の基盤となる病態基盤の確立を目指している。</p>
------	---



研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遺伝子改変ゼブラフィッシュ、行動実験・解析、生理学的解析、形態学的解析</li> <li>・ 神経伝達物質可視化ゼブラフィッシュモデルの作製、解析</li> </ul> <p>【代表論文】 *責任著者</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Umeda R, *Tokumaru O et al. <i>J Clin Biochem Nutr.</i> 64(1): 20-26. 2019.</li> <li>2. Umeda R, *Hanada R et al. <i>Genes Cells.</i> 27(4): 254-265. 2022.</li> </ol> <p>【ホームページ】 <a href="http://www.med.oita-u.ac.jp/seiri1/">http://www.med.oita-u.ac.jp/seiri1/</a></p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部




福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科皮膚科学講座・講師	
氏名	後藤 瑞生 (Goto Mizuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2006年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	皮膚科学
研究キーワード	iPS細胞、創傷治癒
研究内容	<p>iPS細胞は様々な臓器の細胞に分化する細胞で、再生医療への利用が期待されている。我々はヒトiPS細胞から誘導した細胞を用いて、創傷治癒に対する再生医療として利用する計画を検討中である(研究業績3)。そして、iPS細胞のもう一つの利点として、今まで採取が困難であった患者の疾患臓器の細胞をiPS細胞から作製し、創薬研究に利用できるということが挙げられる。我々も難治性の皮膚疾患の患者より作製したiPS細胞を使った研究を行っている。具体的には、患者のiPS細胞から皮膚細胞を作製することに加えて、iPS細胞から皮膚細胞などへの分化過程の観察も詳細に行う。分化してしまった細胞の研究内容は、今まで行われていた臨床研究の内容とあまり変わらないが、細胞の分化過程において問題があれば、その点を解析することにより、その疾患の新たな原因を発見できる可能性がある。また、その原因に対する治療方法は今までの既存の治療方法とは全く異なったものになりえる。</p> <p>関連リンク：<a href="http://www.med.oita-u.ac.jp/dermatology/research_ips.html">http://www.med.oita-u.ac.jp/dermatology/research_ips.html</a></p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Yokouchi Y, Suzuki S, Ohtsuki N, Yamamoto K, Noguchi S, Soejima Y, <u>Goto M</u>, Ishioka K, Nakamura I, Suzuki S, Takenoshita S, Era T. Rapid repair of human disease-specific single-nucleotide variants by One-SHOT genome editing. Sci Rep, 2020 Aug 18;10(1):13927.</li> <li>2. Matsuda-Hirose H, Yamate T, <u>Goto M</u>, Katoh A, Kouji H, Yamamoto Y, Sakai T, Uemura N, Kobayashi T, Hatano Y. Selective Inhibition of <math>\beta</math>-Catenin/Co-Activator Cyclic AMP Response Element-Binding Protein-Dependent Signaling Prevents the Emergence of Hapten-Induced Atopic Dermatitis-Like Dermatitis. Ann Dermatol, 2019 Dec;31(6):631-639.</li> <li>3. Eto S, <u>Goto M</u>, Soga M, Kaneko Y, Uehara Y, Mizuta H, Era T. Mesenchymal stem cells derived from human iPS cells via mesoderm and neuroepithelium have different features and therapeutic potentials. Plos One, 2018 Jul 25;13(7):e0200790.</li> <li>4. Sato T, <u>Goto M</u>, Takeo N, Hatano Y. Case of generalized morphea with the manifestation of diffuse systemic cutaneous sclerosis without sclerodactyly. J Dermatol, 2018 May;45(5):e100-e101.</li> <li>5. Wang Z, Nakamura K, Jinnin M, Kudo H, <u>Goto M</u>, Era T, Kira T, Nakashima T, Fukushima S, Ihn H. Establishment and gene expression analysis of disease-derived induced pluripotent stem cells of scleroderma. J Dermatol Sci, 2016; 84(2): 186-196.</li> <li>6. Tsuchisaka A, Numata S, Teye K, Natsuaki Y, Kawakami T, Takeda Y, Wang W, Ishikawa K, <u>Goto M</u>, Koga H, Sogame R, Ishii N, Takamori S, Hoshino T, Brandt O, Pas HH, Fujiwara S, Hashimoto T. Epiplakin is a paraneoplastic pemphigus autoantigen and related to bronchiolitis obliterans in Japanese patients. J Invest Dermatol, 2016, 136(2), 399-408.</li> <li>7. <u>Goto M</u>, Sumiyoshi H, Sakai T, Fassler R, Ohashi S, Adachi E, Yoshioka H, Fujiwara S. Elimination of epiplakin by gene targeting results in acceleration of keratinocyte migration in mice. Mol Cell Biol, 2006; 26(2): 548-558</li> </ol>



所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・講師	
氏名	佐藤 祐貴子 (Sato Yukiko)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	看護学
研究キーワード	ポジショニング、安楽、看護教育

研究内容	<p>●安楽なポジショニングに関する研究</p> <p>看護においてポジショニングは、身体を自力で動かすことのできない患者やクライアントの安楽を保持するため、将来的な観点も含めた日常生活行動遂行のための姿勢の調整を行う基本的な看護技術の一つである。患者のリハビリテーションや日常生活援助において、生じる身体背面への摩擦力を軽減する方法として圧取り除きグローブを用いた圧抜きが用いられる。圧取り除きグローブの普及については、ポジショニングの道具として幅広く病床や在宅で活用され始めて概ね5～6年であり、優れた新たな道具がエビデンスに沿った看護技術として普及されることを目指す。これまで、同一体位を持続することによる苦痛を時間の観点から明らかにしている(論文1,論文2)(科研費; 圧取り除きグローブを用いた同一体位における安楽なポジショニングケアの開発, 平成28年～令和元年)。現在は、体軸の観点からそのエビデンスを明らかにすることに取り組んでいる(科研費; 安楽なポジショニングケアの開発: 圧抜き方法のエビデンスの検証, 令和3年～令和6年)。</p> <p>●コルブの経験学習理論を用いた初学者における看護技術教育の取り組み</p> <p>実践を伴う科学である看護において、経験、省察、思考、行動、という要素を持つコルブの経験学習理論は有用な学習理論である。看護技術の初学者が、初めて学ぶ看護技術の科目において、この基本的な学修プロセスを踏んで学ぶ教育効果について検討している。</p> <p>●自然災害に対する平時及び発生時における地域住民の災害時健康危機管理向上のための準備教育プログラムの開発</p> <p>地域住民の中でも特に、慢性疾患患者・高齢者という災害脆弱者が、災害が発生しても自らの治療や療養を継続し安心して安全に生活を継続していくことができるよう、準備教育プログラムの開発や、教材開発、避難所におけるDXの活用について検討している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>安楽なポジショニングに関する研究内容を主軸として活動を行っており、業績については以下の通りである。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 佐藤 祐貴子, 原田 千鶴. 背部拳上背臥位の2 時間までの経時的な苦痛に関する研究. 日本看護技術学会誌, 17: 1-10, 2018. 査読: 有</li> <li>2. Sato Yukiko, Tokumaru Osamu, Eshima Nobuoki, Yokoi Isao, Harada Chizuru. Physical pain and muscle activity during hospital bed rest. the 92nd Annual Meeting of The Physiological Society of Japan, 2015.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 佐藤 祐貴子. ギャッチアップしたあと圧解除するのは、今や常識. 月刊ナーシング 37(5): 87-88, 学研メディカル秀潤社, 2017.</li> </ol> <p>●受賞</p> <p>中塚医賞看護学専門分野受賞 (2016年10月)</p>

所属・職位	医学部医学科医学英語教育学講座・講師	
氏名	Chidlow Sean Michael (チドウロウ ショーン マイケル)	
取得学位	修士 (英文学)、Queen's University、1993年10月	
SDGs目標	 	
研究分野	医療人文学	
研究キーワード	医療人文学、EMP	
研究内容	<p>●医療人文学データベースの開発</p> <p>医療を学ぶ学生や医療従事者が医療に関する文化や医療用語を学ぶことができる本や映画を英語と日本語の2か国語で紹介するデータベース「Medical Humanities Database Japan」を構築した(論文1・論文2・外部資金：科研費基盤研究(C) 24520163)。          ※関連リンク：<a href="http://www.medicalhumanitiesjapan.com">http://www.medicalhumanitiesjapan.com</a>.</p> <p>●英語医療面接の評価方法に関する研究および英語医療面接自動採点システムの開発</p> <p>医療従事者の英語力育成のために、英語医療面接の評価方法に関して研究し、これまでに以下の成果をあげてきた。</p> <p>①Can-do listを用いて英語医療面接のpeer evaluationを実施した結果、英語力に関する評価項目(発音・流暢さ)および発話の適性さ(relevance)に関しては、教員とpeer evaluationの評価の間に大きなギャップが見られ、学生間の評価の信頼性は低く、教師の評価への依存性の高さが明らかになった(学会発表1)。</p> <p>②コロナ禍で英語医療面接をZoomとMoodleを用いて実施し、オンライン実施上の利点を明らかにした(学会発表2)。</p> <p>現在は、これまでの研究をもとに、英語医療面接における英語スピーキング学習・自動評価システムの開発を行っている。</p> <p>※関連リンク：  <a href="http://oitauniv-soran.ad.oita-u.ac.jp/profile/ja.a212ee11f9518446520e17560c007669.html">http://oitauniv-soran.ad.oita-u.ac.jp/profile/ja.a212ee11f9518446520e17560c007669.html</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. 2013年、Chidlow, S. 「Medical Humanities Database Japan: Motivating Medical Students and Professionals to Read English Literature for Pleasure」 <i>Journal of Medical English Education Vol. 12(3)</i>, pp. 56-62.</p> <p>2. 2014年、Chidlow, S. 「Rationalizing the Use of Graphic Novels for EMP Education」 <i>大分大学高等教育開発センター紀要 (6)</i>, pp. 93-99.</p> <p>●学会発表</p> <p>1. 2018年、Chidlow, S. &amp; Oshita, H. 「Creating an effective peer evaluation Can-do list for medical interviews.」 第21回日本医学英語教育学会学術集会.</p> <p>2. 2021年、Chidlow, S. &amp; Oshita, H. 「Evaluating student performance in online medical interviews in English with simulated patients.」 第24回日本医学英語教育学会学術集会.</p>	

所属・職位	医学部附属臨床医工学センター・講師（診療教授）	
氏名	友 雅司 (Tomo Tadashi)	
取得学位	博士（医学）、大分医科大学、2000年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	人工臓器学 代謝系	
研究キーワード	人工腎臓、尿毒症性溶質、腹膜保護	
研究内容	<p>カスケード型尿毒症性溶質の除去に関する研究 人工腎臓に関して従来の蓄積型毒素のみならずカスケード型毒素の除去できるモダリティの開発研究を行っている。</p> <p>日本国特許：金成泰,友 雅司,山下明泰 特許第6889504号(P6889504)</p> <p>腹膜透析における腹膜劣化予防に関する研究を行っている。</p> <p>国際特許:Agent for inhibiting peritoneal membrane thickening:Patent No US 8,842,262,B2: International Filing Date 30.03.2010</p>	
研究業績・アピールポイント	<p><u>Tomo T</u>, Okabe E, Yamamoto T, Namoto S, Iwashita T, Matsuyama K, Kadota J, Nasu M. Synergistic cytotoxicity of acidity and 3,4-Dideoxyglucosone-3-ene under the existence of lactate in peritoneal dialysis fluid. Ther Apher Dial.:9(2):182-7. 2005</p> <p>*<u>Tomo T</u>, Okabe E, Matsuyama K, Iwashita T, Yufu K, Nasu M. The effect of peritoneal rest in combination therapy of peritoneal dialysis and hemodialysis: using the cultured human peritoneal mesothelial cell model. J Artif Organs. 2005;8(2):125-9.</p>	

役員

大学院教育  
教育学部  
教育学研究科

経済学部





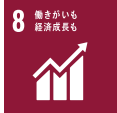



医学部

医学部  
附属病院





理工学部

福祉健康科学部


その他学内施設等

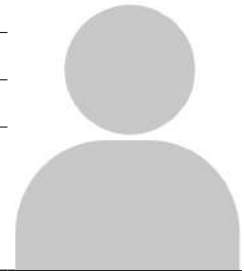
所属・職位	医学部医学科解剖学講座・講師	
氏名	三浦 真弘 (Miura Masahiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1994年6月	
SDGs目標	      	

研究分野	髄液循環生理学、リンパ学、区域麻酔、がん生物学、酵素組織化学、微細構造解析学
研究キーワード	Neurofluid、髄液漏出症、癌リンパ性転移、区域麻酔、皮下浮腫間質、脈管外通路
研究内容	<p>●AMED課題研究：「脳脊髄液減少症の病態生理と診断法の開発」(2020-2023年)</p> <p>①椎骨動脈神経叢-交感神経成分による髄膜リンパ系-髄液圧調節機構の解明 (代表)</p> <p>②特発性低髄液圧症候群SIHに伴う慢性硬膜外血腫における血腫被膜の組織学的検討</p> <p>1.2. 三浦, 脊椎脊髄28(6)2015,脊椎脊髄33(9),2020. 3.三浦, 医学の歩み270(13)2019</p> <p>●科研費課題研究(1) (基盤B・基盤C) (2011-2018年, 2022-2024年) (脳神経外科)</p> <p>①ヒト脳髄膜・脊髄神経鞘内-Neurofluid排液systemの微細構造学的・MRI解析(代表)</p> <p>②経リンパCSF側副吸収路における正常・異常CSF漏出機序の解明とその動態解析(代表)</p> <p>③MRIを用いた脳脊髄液及び間質液の動態解析 (Gadolinium髄注-MRI解析) (分担)</p> <p>1.三浦, 画像診断38(3)2018. 2.三浦, 医学の歩み270(13)2019 3. Miura M, SRA.41(10), 2020</p> <p>●科研費課題研究(2) (基盤C) (2017-2019年, 2020-2022年) (解剖学・麻酔科学)</p> <p>新たな超音波ガイド下各種神経ブロック法の開発と解剖学的evidence解明 (代表)</p> <p>●厚労省・科研費課題(3)：腹膜偽粘液腫の本邦における発生頻度・病態の解明・治療法の開発。(分担)</p> <p>(2011~2014年)、* 腹膜播種性転移機構の酵素組織化学解析 (代表)</p> <p>1.三浦, 腹膜播種の治療. 2017 (腹膜リンパ系) 2. Yonemura &amp; Miura M, et al. JCM.11, 2022</p> <p>●共同研究1 (形成外科)：皮下慢性リンパ浮腫の診断と治療法 (間質変化・液性通路閉塞機序) (代表)</p> <p>1. Miura M, Surgical Treatment for Lymphedema, 86-102, 2017(Person shobo).</p> <p>●共同研究2 (乳腺外科) (代表) 乳癌センチネルリンパ節の血管支配-形態学的解析</p> <p>乳腺リンパ排液経路 1. Miura M, SRA.41(10), 2019. 2. Abe M, Miura M, Anat.Sci. Int.96, 2021</p> <p>●共同研究3 (麻酔科学)：中腋窩線で穿刺するM-TAPAの効果範囲に関する解剖学的検討</p>
研究業績・アピールポイント	<p>Neurofluid循環、髄液漏出症・iNPHの発症機序、脈管外通路、癌腫リンパ行性転移機構、神経ブロック法開発、腱・靭帯線維束解析、皮下浮腫発生機序に関わる臨床解剖的研究に従事</p> <p>●論文：1. 2022年, <b>Miura M</b>, et al. Description of the latest neurofluid absorption mechanisms. JANS. 2. 2022年, Uchino T, <b>Miura M</b>, et al. Comparison of three nerve block techniques for injectate spread into the obturator canal. J. Anesthesia. 3. 2021年, Abe M, <b>Miura M</b>, et al. Arterial blood supply patterning (MSLNs). Anat. Sci. Int. 4. 2020年, 高橋, <b>三浦</b>, 脊髄瘻に伴う髄液減少症.脊椎脊髄(33).</p> <p>●著書：1. 2017年, Miura M :Surgical Treatment for Lymphedema,86-102. (Person Shobo,Tokyo). 2.三浦: 腹膜播種転移の分子機構 (スキルス胃癌 基礎と臨床) 158-177, 2010 (医薬ジャーナル社)</p> <p>●受賞：1. 2009年, 日本リンパ学会・奨励賞 (西満正賞). 2 2013年, 第60日本麻酔科学学会・最優秀演題賞(指導研究). 3. 2018年, 九州山口スポーツ医科学研究会・臨床部門・最優秀演題賞. 4. 2018年, 第6回日本区域麻酔科学学会・最優秀演題賞. 2019年, 第7回日本区域麻酔科学学会・最優秀演題賞. 5. 2019年, 第4回日本リンパ浮腫治療学会学術集会・最優秀ポスター賞.</p>






所属・職位	医学部・講師	
氏名	八尋 隆明 (Yahiro Takaaki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2014年6月	
SDGs目標	  	
研究分野	ウイルス学、細胞診断学、臨床検査学	
研究キーワード	SARS-CoV-2、熱帯感染症ウイルス、下痢症ウイルス、ゲノム解析、遺伝子検査	
研究内容	<p>● <b>感染症ウイルスの分子疫学的解析</b></p> <p>感染症は、途上国ばかりでなく先進国においても、未だ人類の脅威となっています。2019年12月より世界中に蔓延している新興感染症のCOVID-19 (SARS-CoV-2)、熱帯感染症ウイルス (Dengue, Zika 等)、下痢症ウイルス (Rota, Noro, Bufa, Adeno 等) を分子疫学的解析法によって、ウイルスの塩基配列変異をもとにした系統分類・プロファイリングを行っています。Bufa virusはType1~3の3つの型が存在しており、その中のType3を世界で初めて発見し、ウイルスの全ゲノムを明らかにしました(8)。</p> <p>● <b>デングウイルスと新型コロナウイルスの重複感染による重症化メカニズムの解析</b> (若手研究、JSPS、2022-2024年度)</p> <p>バングラデシュにおいて、デング出血熱(DHF)が急増しており、原因メカニズムの解明と対応策が喫緊の課題です。重症化メカニズムを解析すると同時に、対応策として途上国で運用可能となる迅速かつ適切な医療診断システムの構築を目指しています。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>● <b>代表論文</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) Recent downhill course of COVID-19 at Rohingya refugee camps in Bangladesh: Urgent action solicited. Sakirul Khan, Sheikh Mohammad Fazle Akbar, Kimitsuki K, Saito N, <b>Yahiro T</b>, Mamun Al Mahtab, Nishizono A. <i>J Glob Health</i>. 11:03097, (2021)</li> <li>(2) Analysis of the prevalence and species of <i>Anisakis</i> nematode in Sekisaba, <i>Scomber japonicus</i> caught in coastal waters off Saganoseki, Oita in Japan. Hidano S, Mizukami K, <b>Yahiro T</b>, Shirakami K, Ito H, Ozaka S, Arika S, Saechue B, Dewayani A, Chalalai T, Soga Y, Goto M, Sonoda A, Ozaki T, Sachi N, Kamiyama N, Nishizono A, Murakami K, and Kobayashi T. <i>Jpn J Infect Dis</i>. JJID.2020.859.(2021)</li> <li>(3) Nineteen Years of Japanese Encephalitis Surveillance in Sabah, Malaysian Borneo. arilyn Charlene Montini Maluda, Jenarun Jelip, Mohd Yusof Ibrahim, Maria Suleiman, Mohammad Saffree Jeffree, Azalina Farina Binti Aziz, Jaeyres Jani, <b>Yahiro T</b>, Ahmed K. <i>Am J Trop Med Hyg</i>. 103(2):864-868.(2020)</li> <li>(4) Long-Term Potable Effects of Alkaescent Mineral Water on Intestinal Microbiota Shift and Physical Conditioning. <b>Yahiro T</b>, Hara T, Matsumoto T, Ikebe E, Koshinomi N-F, Zhaojun Xu, Hiratsuka T, Iha H, Inomata M. <i>Evid Based Complement Alternat Med</i>. 2020:6706239,(2019)</li> <li>(5) Human-porcine reassortant rotavirus generated by multiple reassortment events in a Sri Lankan child with diarrhea. <b>Yahiro T</b>, Takaki M, Chandrasena TGAN, Rajindrajith S, Iha H, Ahmed K. <i>Infect Genet Evol</i>. 65:170-186.(2018)</li> <li>(6) Bufavirus genotype 3 in Turkish children with severe diarrhea. <b>Yahiro T</b>, Altay A, Bozdayi G, Matsumoto T, Sahin F, Ozkan S, Nishizono A, Söderlund-Venermo M, Ahmed K. <i>Clin Microbiol Infect</i>. S1198 743X(15) 00619-9.(2016)</li> <li>(7) Norovirus GII.21 in children with Diarrhea, Bhutan. <b>Yahiro T</b>, Wangchuk S, Wada T, Dorji C, Matsumoto T, Mynak ML, Tshering KP, Nishizono A, Ahmed K. <i>Emerg. Infect. Dis</i>. 21(4):732-4.(2016)</li> <li>(8) Novel genotype 3 human bufavirus from children with severe diarrhea in Bhutan. <b>Yahiro T</b>, Wangchuk S, Tshering K, Bandhari P, Zangmo S, Dorji T, Tshering K, Matsumoto T, Nishizono A, Soderlund-Venermo M and Ahmed K. <i>Emerg. Infect. Dis</i>. 20(6):1037-9.(2014)</li> </ol> <p>● <b>受賞</b></p> <p>「Appreciation Night 2016」優秀賞 (PUBLICATION部門) / University Malaysia Sabah 「PEREKA 2016」ブロンズ賞 / Center for Research &amp; Innovation, Malaysia</p>	



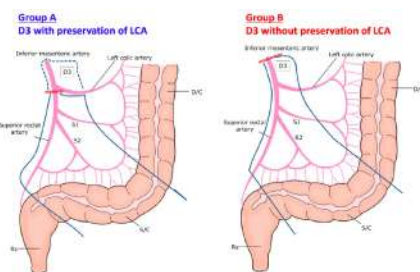
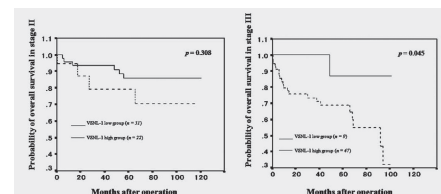
所属・職位	医学部医学科結核医療体制強化事業・講師
氏名	山末 まり (Yamasue Mari)
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年3月
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を





研究分野	呼吸器学、感染症
研究キーワード	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高齢者、呼吸器感染症 (主に抗酸菌感染症)</li> <li>2. びまん性肺疾患、希少肺疾患</li> </ol>
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高齢者における肺結核の早期診断と予後に関する研究 本邦における肺結核患者の大半を高齢者が占め、高齢者肺結核の早期診断と予後の改善は、先進諸国が結核感染を制御する中に未だ結核中蔓延国である日本の結核診療において、一つの重要な課題と言える。高齢者における肺結核は、若年者と比較し非典型的な臨床像となり易く、誤嚥性肺炎など一般細菌による感染の合併による修飾などもあり、診断の遅れ、果ては治療介入の遅れに繋がりが易い。高齢者の肺結核患者を対象に、早期診断に繋がる検査法や画像診断法の開発や、また予後予測因子についての分析を行う。</li> <li>2. 非結核性抗酸菌症の診断および治療に関する研究 結核罹患率は後期高齢者以外の年代では低下の一途であるが、非結核性抗酸菌感染症は中高年の女性を中心に罹患数が増加している。非結核性抗酸菌症は薬剤に対する感受性が低く、治療に難渋することが多い。このため、標準的な治療が実施できない症例におけるより有効な治療レジメンの検討や、本疾患類似の臨床像をとる呼吸器疾患・感染症は多いため、これらの鑑別に有用な画像所見の解析を進めている。</li> <li>3. 県内における希少肺疾患の発生および受療状況の調査 希少肺疾患は情報が少ないが故に診断の付かないまま専門機関への受診に結び付いていない患者が存在する可能性がある。県内での希少肺疾患 (を疑う) 患者の実態調査を行い、肺希少疾患患者を潜在化させずに専門機関に結び付ける橋渡しシステムの構築を行っていく。</li> </ol>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Comparison of chest computed tomography features between pulmonary tuberculosis patients with culture-positive and culture-negative sputum for non-mycobacteria: A retrospective observational study. Kan T, Komiya K, Yamasue M, et al. Medicine (Baltimore). 2021 Aug 6;100(31):e26897.</li> <li>2. Quantitative assessment of the association between erector spinae muscle and in-hospital mortality in elderly patients with pulmonary tuberculosis. Tanaka A, Komiya K, Yamasue M, et al. BMC Res Notes. 2021 Apr 13;14(1):134.</li> <li>3. A solitary pulmonary nodule caused by Mycobacterium tuberculosis var. BCG after intravesical BCG treatment: a case report. Itai M, Yamasue M, et al. BMC Pulm Med. 2021 Apr 7;21(1):115.</li> <li>4. The COVID-19 pandemic and the true incidence of Tuberculosis in Japan. Komiya K, Yamasue M, et al. J Infect. 2020 Sep;81(3):e24-e25.</li> <li>5. Features of active pulmonary tuberculosis without abnormal chest X-ray findings. Matsumoto H, Komiya K, Yamasue M, et al. Infect Dis (Lond). 2020 Jul;52(7):520-523.</li> <li>6. Factors associated with false negative interferon-γ release assay results in patients with tuberculosis: A systematic review with meta-analysis. Yamasue M, Komiya K, et al. Sci Rep. 2020 Jan 31;10(1):1607.</li> <li>7. Effect of long-term clarithromycin therapy on prevention of pneumonia in older adults: A randomized, controlled trial. Yamasue M, Komiya K, et al. Geriatr Gerontol Int. 2019 Oct;19(10):1006-1009.</li> </ol>

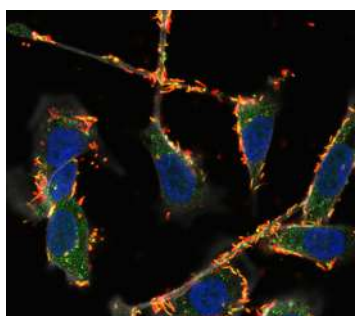
所属・職位	医学部医学科消化器・小児外科学講座・助教	
氏名	赤木 智徳 (Akagi Tomonori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	腫瘍外科学/分子生物学/大腸癌 炎症性腸疾患
研究キーワード	低侵襲性治療、集学的治療
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大腸癌の新規予後規定遺伝子の同定 進行大腸癌のリンパ節転移に関連する新規遺伝子をマイクロアレイ解析にてVSNL-1遺伝子を同定、臨床データより予後規定因子であることを報告した (Akagi T. et al. <i>Int J Ca</i> 2012)。</li> <li>● 左側大腸における左結腸動脈温存術式の有用性 左側大腸癌に対する左結腸温存リンパ節郭清の意義を短期・長期成績で非温存郭清と比較検討し、温存術式での妥当性を報告した (Akagi T. et al. <i>Ann Gastroenterol Surg</i> 2020)。</li> </ul>





所属・職位	医学部医学科環境・予防医学講座・助教	
氏名	赤田 純子 (Akada Junko)	
取得学位	博士 (医学)、山口大学、2000年3月	
SDGs目標	    	



研究分野	細菌学・生化学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ感染症 病原性
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>ヘリコバクター・ピロリ (ピロリ菌) が胃に慢性感染し胃癌を誘導する機序は、胃癌多発地域である東アジアのピロリ菌株に、秘められた謎があるはずと考えています。研究室にストックされた世界のピロリ菌株とそのゲノム情報を活用し、学内の臨床及び基礎研究室研究者と共同で、ピロリ菌研究者の集積した大分大学という環境だからこそできる病原因子機能解析研究を目指して、留学生と日々取り組んでいます。</p>



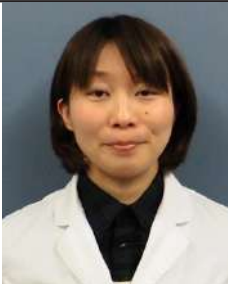
## 医学部

所属・職位	医学部医学科薬理学講座・助教	
氏名	赤嶺 孝祐 (Akamine Takahiro)	
取得学位	博士 (臨床薬学)、九州大学、2017年3月	
SDGs目標		



研究分野	薬理学・時間薬理学
研究キーワード	ROCK、時計遺伝子
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・血管透過性調節機構に基づくARDS治療の基盤構築</p> <p>ARDS (acute respiratory distress syndrome, 急性呼吸促進症候群) は肺胞の血管内皮細胞障害により血管透過性が亢進し、血液液体成分が肺胞内へ漏出・貯留することで起こる予後不良かつ死亡率の高い疾患である。セリン・スレオニンキナーゼROCKは血管内皮細胞の運動や接着を介して血管透過性の制御を担っている。そこで本研究ではROCKが血管透過性を制御するメカニズムを明らかにすることでARDSの新規治療法開発の基盤構築を目指している。(若手研究: 20K17217)</p> <p>研究業績</p> <p><b>Akamine T, et al.</b> Accumulation of sorbitol in the sciatic nerve modulates circadian properties of diabetes-induced neuropathic pain hypersensitivity in a diabetic mouse model. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 503(1);181-187, 2018.</p>

所属・職位	医学部医学科循環器内科・臨床診断学講座・助教	
氏名	秋岡 秀文 (Akioka Hidefumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標		

研究分野	循環器学
研究キーワード	急性心筋梗塞、気象、シースレスカテーテル
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>急性心筋梗塞発症と気象条件に関する研究やシースレスカテーテルと穿刺部の合併症の研究を行ってきた。</p> <p>現在日本人に多いとされている冠攣縮性狭心症と不飽和脂肪酸の関係について臨床研究を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Seasonal variations of weather conditions on acute myocardial infarction onset: Oita AMI Registry <span style="float: right;">Heart Vessels (2019)</span></li> <li>2) Impact of Age on Gender Differences in the Acute Myocardial Infarction Onset-Weather Association - Oita AMI Registry <span style="float: right;">Circ Rep (2020)</span></li> <li>3) Reduction of bleeding complications on puncture site after percutaneous coronary intervention using a 6.5-French sheathless guiding catheter <span style="float: right;">Heart Vessels (2022)</span></li> </ol>

所属・職位	医学部医学科歯科口腔外科学講座・助教	
氏名	阿部 史佳 (Abe Ayaka)	
取得学位	学士 (歯学)、徳島大学、2008年3月	
SDGs目標		

研究分野	口腔外科学
研究キーワード	口腔潜在的悪性疾患、口腔粘膜疾患
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>【研究内容】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>口腔潜在的悪性疾患に関する臨床病理学的研究</li> <li>口腔異型上皮の早期検出に関する研究</li> <li>性差と口腔癌に関する研究</li> </ul> <p><b>【研究業績】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Ayaka Abe, Tatsuyuki Kono, Kana Uchida, Yoshihiro Takahashi and Kenji Kawano Osteosarcoma of the jaw: Report of four cases. Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology (in press)</li> <li>Tatsuyuki Kono, Ayaka Abe, Kaori Noguchi, Kana Uchida, Mao Shinoda, Kenji Kawano Extralingival peripheral ameloblastoma arising in the infratemporal fossa: A case report with an assessment of proliferative activity. Oral Science International (in press)</li> </ul>

所属・職位	医学部医学科整形外科学講座・助教	
氏名	阿部 徹太郎 (Abe Tetsutaro)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標		

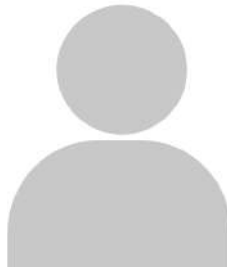


研究分野	脊椎脊髄病学
研究キーワード	骨粗鬆症、脊椎骨癒合、脊椎アライメント
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●脊椎骨癒合に関する研究</p> <p>人口の高齢化が進むに従い、インプラントを用いた脊椎固定術が増加している。良好な結果を得るためには椎体間の骨癒合が重要となる。ラッドを用いた関津港側方固定モデルを用い、最適な骨癒合促進剤の使用方法等について検討を進めている。</p> <p>(Abe T, et al. Optimal intermittent administration interval of parathyroid hormone 1-34 for bone morphogenetic protein-induced bone formation in a rat spinal fusion model. JOR Spine. 2021 Aug 18;4(3):e1168)。</p> <p>●脊椎アライメントに関する研究</p> <p>手術侵襲に伴い、術後経過中に脊柱後弯症等の脊椎アライメント変化が生じる危険性がある。実際の症例を参照にアライメント変化の危険因子を明らかにし、予防策等について検討を行っている。</p> <p>(Abe T, et al. Analysis of the risk factors for increasing cervical sagittal vertical axis after cervical laminoplasty for cervical spondylotic myelopathy. Arch Orthop Trauma Surg. 2022 Apr;142(4):553-560)。</p>

## 医学部



所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・助教	
氏名	阿部 世史美 (Abe Yoshimi)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2022年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	看護学	
研究キーワード	摂食嚥下障害、フレイル、オーラルフレイル、高齢者、頭頸部がん	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●口腔がん術後摂食嚥下障害高齢者の退院後の経験 口腔がん術後に摂食嚥下障害のある状態で自宅退院した高齢者を対象に、退院後の経験を明らかにした。退院後、口腔機能の低下、活動耐性の低下などの課題があるが、対応には高齢者のレジリエンスが活かされていた。</p> <p>●頭頸部がんで放射線化学療法を受ける患者の栄養管理の検討</p> <p>●頭頸部がん化学放射線療法における誤嚥性肺炎リスク因子の検討 化学放射線療法施行患者の栄養管理方法や誤嚥性肺炎リスク因子を検討した。リスク因子として、栄養状態や口腔機能の低下、また咽頭知覚の低下による不顕性誤嚥があり、栄養管理や口腔ケアの重要性が明らかになった。</p>	

所属・職位	医学部医学科小児科学講座・助教	
氏名	糸永 知代 (Itonaga Tomoyo)	
取得学位	学士 (医学)、熊本大学、2008年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	小児内分泌学	
研究キーワード	成長、思春期、性分化	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●21水酸化酵素欠損症に関する研究 21水酸化酵素欠損症は、副腎という臓器から作られる「ステロイドホルモン」が生まれつき不足する病気です。しかし、治療に使用している薬の調整はとても難しく、特定の検査項目のみを目安として調整をできるかどうかはまだわかりません。</p> <p>この病気では、治療薬が足りないと女性の患者さんで男性化が起きたり、思春期が早く来すぎたりということが起きます。適切な治療の調整方法を見つけるための研究をしています。特に、小児の患者さんから苦痛なく集めることができる尿を用いた検査が役に立たないかを調べています (論文1. Itonaga T et al. Frontiers in Endocrinology)。</p>	







所属・職位	医学部医学科産科婦人科学講座・助教	
氏名	井上 尚実 (Inoue Naomi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	産科婦人科・周産期医学
研究キーワード	胎盤
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ヒト胎盤栄養膜細胞における酸化ストレス負荷によるメタボローム解析 妊娠高血圧症候群には胎盤虚血による低酸素、低栄養が影響していると考えられている。ヒト胎盤絨毛を構成する栄養膜細胞を用いて種々の手法により作成した胎盤虚血モデルにおいて代謝産物の網羅的解析を行う。さらに虚血に陥った栄養膜細胞ではどのような代謝経路の変化が起こっているのかを明らかにすることで病態の更なる解明を目的としている。</p> <p>●胎児心拍数モニタリング異常における胎盤代謝変化の検討 分娩前はlow riskと評価されたが、分娩時には胎児心拍モニタリング異常を認めた胎盤、臍帯血における低酸素の影響の有無やその他の代謝変化の有無について、ガスクロマトグラフ質量分析計 (GC-MS) 等を用いて検討する。</p>



所属・職位	医学部医学科消化器内科学講座・助教	
氏名	岩尾 正雄 (Iwao Masao)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年3月	
SDGs目標		

研究分野	医学 (消化器内科学)
研究キーワード	NAFLD、NASH、腸内細菌
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容：NAFLDと腸内細菌との関連性について 研究業績：非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) は、肥満の有病率の劇的な増加に伴い、重大な公衆衛生上の問題となっています。NAFLDの病因の一つに腸内細菌叢が挙げられており、私達は食餌誘導性肥満モデルのラットを用いた実験結果から、分岐鎖アミノ酸 (BCAA) の投与で腸内細菌として<i>R. falvefaciens</i>が増加し、増加した<i>R. flavefaciens</i>がセルロースを基質として酢酸を産生し、その酢酸が肝細胞のAMPKを活性化し、脂肪合成関連遺伝子であるFASやACCの発現を抑制し、肝での脂肪合成を抑制し、肝の脂肪化が改善することを報告しました<sup>1)</sup>。 BCAAは肝硬変症などの治療薬ですすでに広く普及している薬剤でありヒトのNAFLDにおいても薬物治療の選択肢の一つとなれば、近年増加傾向を示しているNAFLDの改善に寄与して、多くの人々の健康に寄与できる可能性があります。</p> <p>1) : Masao Iwao, Koro Gotoh, Kazunari Murakami, Hirotaaka Shibata, et al. Supplementation of branched-chain amino acids decreases fat accumulation in the liver through intestinal microbiota-mediated production of acetic acid. <i>Scientific Reports</i>. 2020. 10 (1), 18768. doi: 10.1038/s41598-020-75542-3.</p>

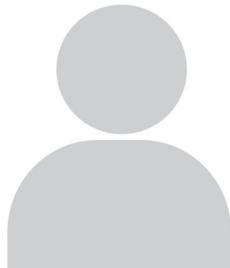

## 医学部

所属・職位	医学部医学科生物物理学講座・助教	
氏名	岩城 貴史 (Iwaki Takafumi)	
取得学位	博士 (理学)、京都大学、2004年3月	
SDGs目標	  	



研究分野	生物物理学
研究キーワード	DNA, polyelectrolyte, flow fields, interfacial phenomena, data analysis
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● DNA高次構造の流体場に対する応答についての研究 マイクロプールの希薄DNA溶液に圧力をかけてマイクロ流路に押し出すとき、流路の入り口付近の流れ場は伸長流となり、DNA一分子の引き延ばしが観測される。これはDNAを手軽に引き延ばす手法と期待され、そのメカニズムを研究している[1]。</li> <li>● 物理学実験教育のデジタル化と学内共通基盤の構築 近年デジタルトランスフォーメーションが叫ばれ、大学教育の現場にもその波が押し寄せつつある。物理学実験のデジタル化と解析結果評価システムの構築に学内の物理学実験教育担当の先生方と協力して取り組んでいる[2]。</li> </ul> <p>[1] Stretching of single DNA Molecules caused by accelerating flow on a microchip, K. Hirano, T. Iwaki, T. Ishido, Y. Yoshikawa, K. Naruse, K. Yoshikawa, JCP 149, 165101(2018)</p> <p>[2] 実験データに基づいて解析結果を評価できるe-learningシステム、長屋智之、菊池武士、片山武夫、北西滋、岩城貴史、近藤隆司、工学教育、70-2, 53-58(2022) <i>in press</i>.</p>




所属・職位	医学部医学科法医学講座・助教	
氏名	内田 智久 (Uchida Tomohisa)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2004年6月	
SDGs目標		

研究分野	病理学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ、アジアの疫学研究、胃がん
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>Helicobacter pylori (ピロリ菌)感染による慢性炎症の持続が胃がん発症に重要な役割を果たしている。アジアの胃がん発症率は国・地域によって大きな差があり、日本では胃がん発症率が高い一方で、インドネシア、タイでは胃がん発症率は本邦の1/10以下と非常に低い。アジアにおける胃がん発症頻度の差を明らかにするために、フィールドワークで得た生検組織、同時に採取した血清検体を解析することで、胃がんにつながる胃粘膜の病態解析を行い、胃がん発症頻度に差がある原因の解明をおこなっている。さらに、胃粘膜に感染しているピロリ菌病原遺伝子の解析を行い、アジアの胃がん発症率の多様性の原因を遺伝子的な側面から明らかにする研究をおこなっている。</p>

所属・職位	医学科附属地域医療学センター・助教	
氏名	宇都宮 理恵 (Utsunomiya Rie)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標		

研究分野	内科学、地域医療
研究キーワード	総合診療、地域医療、高齢者医療、感染症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 外来診療における血液培養陽性者の予測因子分析</li> <li>② 終末期・高齢者医療についての学生・研修医の意識調査研究</li> <li>③ 医師の外来診療における高齢者フレイル予防に関する実態</li> </ul>

所属・職位	医学部医学科内視鏡下心臓外科学講座・助教	
氏名	梅野 惟史 (Umeno Tadashi)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	再生医療
研究キーワード	生体医工学、生体内組織形成術(iBTA)、Biotube
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>「生体内組織形成術を用いた心臓血管外科領域における生体材料の開発」 対象者（患者）自身の体内組織で生成する移植組織・血管グラフトの臨床使用に向けた研究、実験に取り組んでいます。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等



## 医学部

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・助教	
氏名	江藤 千晴 (Etou Chiharu)	
取得学位	修士 (看護学)、佐賀大学、2008年3月	
SDGs目標	    	
研究分野	臨床看護学, 小児看護学, 家族看護学	
研究キーワード	家族 障害児・者	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1. 2014年, 学外組織, 災害看護学実習にエマルゴトレーニングシステム・集団災害訓練を導入した学習効果, 活水論文集 第2集, 2014年</p> <p>2. 2019年, 学内単一組織, 看護学生が捉える“子どもの甘え”, 九州・沖縄小児看護研究会誌, 2019年</p> <p>科学研究費補助金 課題: AYA世代重症心身障害児・者の家族が抱く養育における介護負担感への支援策の検討, 2021~2023, 代表</p>	

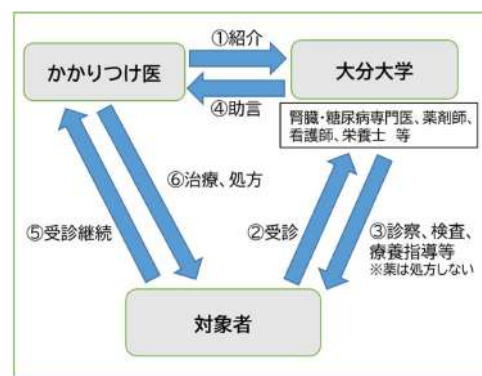
所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・助教	
氏名	大野 夏稀 (Oono Natsuki)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		
研究分野	臨床看護学	
研究キーワード	がん看護、緩和ケア、終末期看護、意思決定支援、症状マネジメント	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>論文：A施設の看護師の意思決定支援における倫理調整者としての実践状況―振り返り票を用いた自己評価―、第51回日本看護学会論文集 看護管理 看護教育、243-246、2021、査読有 菅原真由美、品川陽子、大野夏稀、川野京子、平山珠江、脇幸子、寺町芳子</p> <p>学会発表等：終末期がん患者・家族との対話に対するロールプレイ後の学生の思い、第51回日本看護学会 看護教育 学術集会、2020 (web開催) 大野夏稀、寺町芳子、脇幸子</p> <p>病を持っていてもいなくても“よりよく生きる”を目指した人生会議の意義、看護研究学会 第26回九州・沖縄地方会学術集会、2022 (web開催) 大野夏稀、脇幸子、森元竜太郎、佐藤祐貴子</p>	

所属・職位	医学部医学科消化器内科学講座・助教	
氏名	岡本 和久 (Okamoto Kazuhisa)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年5月	
SDGs目標		

研究分野	超音波内視鏡 H.pylori
研究キーワード	胆膵内視鏡
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>Immunohistochemical differences in gastric mucosal damage between nodular and non-nodular gastritis caused by Helicobacter pylori infection Kazuhisa Okamoto et.al. J Clin Biochem Nutr. 2021 Sep;69(2):216-221.</p> <p>臨床面では主に胆膵内視鏡に従事しております。 超音波内視鏡下胆道ドレナージ(EUS-BD)を2019年より導入しこれまで40症例超に施行。今後はこれらに関するevidenceの発信と後進の育成に注力したいと考えています。</p>

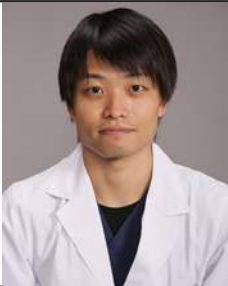

所属・職位	医学部医学科糖尿病性腎症重症化予防事業・助教	
氏名	岡本 光弘 (Okamoto Mitsuhiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標		

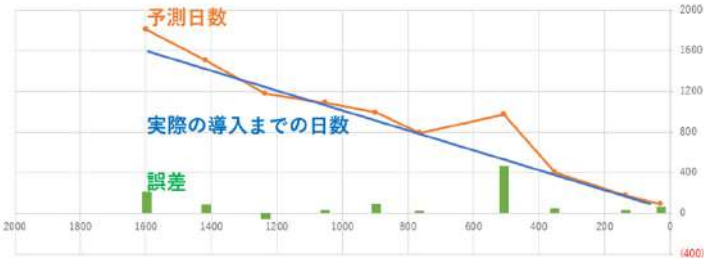
研究分野	糖尿病、糖尿病性腎症
研究キーワード	腎症重症化予防、病診連携
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>大分県では、2016年に「糖尿病性腎症重症化予防プログラム」を策定し、2019年には腎症重症化予防強化のため、大分県医師会、大分大学と「大分県糖尿病性腎症及び慢性腎臓病の重症化予防に係る連携協定」を締結し、「かかりつけ医と専門医、かかりつけ医と市町村・保険者の連携体制の強化」の一環で、重症化予防専門外来を大学に設置しております。この外来では、早期腎症でも、将来的に重症化が予測される患者を受け入れ、看護師、管理栄養士、糖尿病専門医、腎臓専門医などの多職種による生活指導に主眼をおいております。更に患者・かかりつけ医と指導内容と共有し、連携した重症化予防を行なっています。個別指導による腎症重症化を予防する因子への影響を研究すると共に、地域かかりつけ医との病診連携の方法について、より良い連携システムを構築や評価方法の策定につながることを目標にしています。</p>

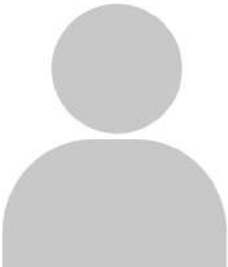












# 医学部

所属・職位	医学部医学科内分泌代謝膠原病腎臓内科学講座・助教	
氏名	沖田 純 (Okita Jun)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2016年3月	
SDGs目標		



研究分野	腎臓内科学
研究キーワード	腎臓、透析、機械学習
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●機械学習を用いた透析導入時期の予測の検討</p> <p>近年AI技術（機械学習）を医療分野に応用することが期待されている。機械学習を用いて慢性腎臓病患者の透析導入時期を予測できるかの検討をおこない、決定係数0.83も予測モデルをつくることができました。下図は今回の予測モデルを使用した一例であるが、5年間の経過で概ね100日以内の誤差で導入時期を予測することが出来た。今後は今回作成したモデルの精度を高め臨床応用を目指し、より質の高い医療を提供することを目標としている。</p> 

所属・職位	医学部医学科（研究マネジメント機構）・助教	
氏名	奥山 みなみ (Okuyama Minami)	
取得学位	博士 (獣医学)、北海道大学、2014年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	繁殖生理学、野生動物学
研究キーワード	野生動物、豚、繁殖、子宮、精漿
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●精漿による子宮機能調節と受胎性向上に関する研究</p> <p>精漿を利用した豚の繁殖成績の向上を目指し、精漿がどのように子宮に作用し受胎性を向上させるのかを研究している。</p> <p>●鯨類の新規人工授精方法の確立を目指した繁殖生理の評価</p> <p>鯨類の新しい人工授精方法を確立させるために、精子の長期保存方法の開発や、雌の発情診断基準の確立、季節的な繁殖生理の評価を行っている。</p> <p>●特定外来生物アライグマの個体数増加・分布拡大に関する研究</p> <p>近年、特定外来生物アライグマの九州地域における生息域は急速に拡大している。「なぜアライグマの個体数がこんなにも増えるのか」を繁殖生理学的な視点で、「どのように生息域を広げているのか」を行動学的・遺伝学的な視点で解析をしている。</p> 




所属・職位	医学部医学科大分こども急性救急疾患学部門医療・研究事業・助教	
氏名	小栗 沙織 (Oguri Saori)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標	  	

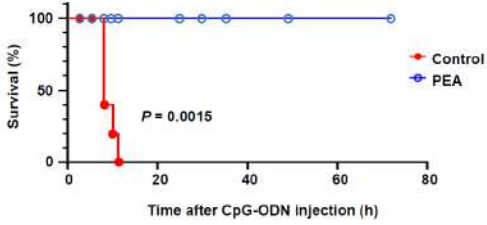
研究分野	小児科学
研究キーワード	小児呼吸器、遺伝学
研究内容・研究業績・アピールポイント	ゼブラフィッシュを用いたACTA2遺伝子変異による左室心筋緻密化障害の発症機構の解析研究（アクチンアイソフォームの1つであり、 $\alpha$ 平滑筋アクチンをコードするACTA2遺伝子は、遺伝子変により家族性大動脈瘤・大動脈解離・冠動脈疾患・もやもや病などの血管疾患や多臓器平滑筋機能障害候群を生じる。左室心筋緻密化障害を伴うACTA2遺伝子バリエーションの患者を経験し、トランスジェニックゼブラフィッシュを用いた機能解析を行っている。）



所属・職位	医学部医学科感染予防医学講座・助教	
氏名	小坂 聡太郎 (Ozaka Sotaro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年3月	
SDGs目標		

研究分野	消化器病学、免疫
研究キーワード	炎症性腸疾患、バイオマーカー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●炎症性腸疾患の新規バイオマーカーの開発に関する研究</p> <p>潰瘍性大腸炎やクローン病で代表される炎症性腸疾患（IBD）は難治性の消化管疾患です。IBDは病気の活動性に応じて治療が選択されます。そのためIBDの活動性を簡便に把握できるバイオマーカー（病気の強さを反映する血液や便の中の特定の物質）の開発が求められています。私は以前、分泌型好中球プロテアーゼ阻害分子（SLPI）というタンパクがIBDモデル動物の腸炎を改善することを報告しました(論文<sup>1</sup>)。そこで現在はこのSLPIがヒトIBD患者の活動性に応じて血液中や便中で増減し、それを測定することで活動性を把握するバイオマーカーに利用できないか研究をしています。</p> <p>(参考論文) Ozaka, S et al. Protease inhibitory activity of secretory leukocyte protease inhibitor ameliorates murine experimental colitis by protecting the intestinal epithelial barrier. <i>Genes Cells</i>. 2021.</p>



# 医学部

所属・職位	医学部医学科内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座・助教	
氏名	尾崎 貴士 (Ozaki Takashi)	
取得学位	学士 (医学)、熊本大学、2006年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	膠原病学、免疫学
研究キーワード	脂質メディエーター、PEA、OEA、Toll様受容体、炎症、全身性エリテマトーデス
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●全身性エリテマトーデス (SLE) の炎症病態に対する抗炎症性脂質メディエーターPEA、OEAの研究 (若手研究18K16155、若手研究 (B) 15K19577)</p> <p>液体クロマトグラフ・質量分析計を用いてSLEモデルマウスの体内に存在する脂質メディエーターを解析し、パルミトイルエタノールアミド (PEA) やオレオイルエタノールアミド (OEA) の濃度が野生型マウスに比べて有意に低下していることを見出した。また、マウス樹状細胞やB細胞において、PEAやOEAは、SLEに関連するToll様受容体9(TLR9)刺激を介する炎症性サイトカイン産生や細胞表面マーカー発現を抑制した。さらに、CpG-ODN (TLR9リガンド) を用いた敗血症モデルマウスは、PEAを投与することで生命予後が著明に改善することを見出した (右図、in preparation)。これらの抗炎症性脂質メディエーターは、自己免疫疾患や炎症性疾患に対する治療応用への発展が期待される。</p>
	

所属・職位	医学部医学科診断病理学講座・助教	
氏名	小山 雄三 (Oyama Yuzo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年3月	
SDGs目標		

研究分野	人体病理学
研究キーワード	診断病理学, 唾液腺腫瘍, 皮膚腫瘍, 腎生検の病理
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容 病理組織像, 免疫染色, FISH法, 分子病理学的手法を駆使して, 病理診断, 病理学研究に従事している。近年ではWNTシグナル, ALPK1遺伝子に注目し, それらの経路, 遺伝子異常に関わる腫瘍発生の研究を行っている。</p> <p>研究業績</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① Difference in transducin-like enhancer of split 1 protein expression between basal cell adenomas and basal cell adenocarcinomas - an immunohistochemical study. Diagn Pathol. 2018 Jul 27;13(1):48.</li> <li>② Short 57 kb CDKN2A FISH probe effectively detects short homozygous deletion of the 9p21 locus in malignant pleural mesothelioma. Oncol Lett. 2021 Dec;22(6):813.</li> </ol>



所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座（精神看護学）・助教	
氏名	折橋 隆三 (Orihashi Ryuzo)	
取得学位	博士（医学）、佐賀大学、2022年3月	
SDGs目標		

研究分野	精神看護学、精神神経科学
研究キーワード	高齢者、認知機能、バイオマーカー開発、脳画像解析(Voxel Based Morphometry)
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>高齢者の精神的健康に関する長期疫学縦断研究</p> <p>Oxytocin and elderly MRI-based hippocampus and amygdala volume: a 7-year follow-up study. Brain Communications. 2(2):fcaa081. 2020. DOI: 10.1093/braincomms/fcaa081</p> <p>Association Between sTREM2, an Immune Biomarker of Microglial Activation, and Aging-Related Brain Volume Changes in Community-Dwelling Older Adults: A 7-Year Follow-Up Study. Frontiers in Aging Neuroscience. 13:665612. 2021. DOI: 10.3389/fnagi.2021.665612</p>




所属・職位	医学部医学科微生物学講座・助教	
氏名	カーン シャキル (KHAN SAKIRUL)	
取得学位	博士（農学）、愛媛大学、2009年9月	
SDGs目標		

研究分野	神経障害感染症、ウイルス学
研究キーワード	神経発達障害、獣共通感染症、新型コロナウイルス
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ニワトリを用いた二分脊椎モデルに関する研究</p> <p>ニワトリは、ワクチン開発の他、倫理面や安全面などの点においてヒトの病態解析モデルに適している。これまでに、先天性奇形の1つである二分脊椎（SBA）について、ニワトリヒナモデルの時間経過に伴った感覚運動機能障害の病態変化の詳細を明らかにした（Khan et al., 2020; 2017）。また、神経栄養因子の一つであるプロサポシンに由来する18アミノ酸の合成ペプチドが、SBAヒナの脊髄神経回路網の障害を防ぎ、出生後の感覚運動機能を劇的に改善することを明らかにした。</p> <p>●感染病原体に関する研究</p> <p>バングラデシュの研究チームと共同でCOVID19に対する新しい治療/予防戦略の開発を目指している（Khan et al., 2021; 2020）。現在は、人獣共通感染症（特に狂犬病）の研究も進めている。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://researchmap.jp/MSI_KHAN">https://researchmap.jp/MSI_KHAN</a></p>

## 医学部



所属・職位	医学部医学科腎泌尿器外科学講座・助教	
氏名	甲斐 友喜 (Kai Tomoki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2016年9月	
SDGs目標		

研究分野	泌尿器科学
研究キーワード	腎細胞癌、泌尿器科病理、泌尿器腫瘍
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・腎細胞癌発生・進展に関わる遺伝子の研究</p> <p>様々な遺伝子異常により腎細胞癌が発生し、進展する。腎細胞癌の増殖に関わるキー遺伝子を同定し、遺伝子をターゲットとしたあらたな新薬の開発を目標としている。</p> <p>参考文献：</p> <p>Kidney-specific knockout of Sav1 in the mouse promotes hyperproliferation of renal tubular epithelium through suppression of the Hippo pathway. J Pathol. 2016 May;239(1):97-108. doi: 10.1002/path.4706. Epub 2016 Mar 30.</p> <p>Downregulation of WDR20 due to loss of 14q is involved in the malignant transformation of clear cell renal cell carcinoma. Cancer Sci. 2016 Apr;107(4):417-23. doi: 10.1111/cas.12892. Epub 2016 Mar 4.</p> <p>Downregulation of NDUFB6 due to 9p24.1-p13.3 loss is implicated in metastatic clear cell renal cell carcinoma. Cancer Med. 2015 Jan;4(1):112-24. doi: 10.1002/cam4.351. Epub 2014 Oct 15.</p>






所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座地域看護学領域・助教	
氏名	金崎 理子 (Kanezaki Ayako)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	看護学
研究キーワード	保健師、児童虐待、母子保健活動
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●子どもの不適切な養育に対する小児科外来看護職の認識・行動に関する研究 (平成30年度修士論文)</p> <p>小児科外来に勤務する看護職を対象に質問紙調査を実施し、外来受診する親子のどのような様子に対して不適切な養育環境を認識し行動するのか、その実態を把握し、さらには看護職の背景要因との関連について統計的手法を用いて明らかにすることを目的とした。</p> <p>小児科外来看護職は、子どもの言動より親の言動を重視しやすい傾向にあること、子どもの愛着形成状況のアセスメントや親への対応については困難感を抱きやすいことが明らかになった。</p>



所属・職位	医学部医学科感染予防医学講座・助教	
氏名	神山 長慶 (Kamiyama Naganori)	
取得学位	博士 (医学)、大阪大学、2013年3月	
SDGs目標		



研究分野	免疫学、ウイルス学、寄生虫学
研究キーワード	多発性硬化症、蚊媒介性ウイルス疾患、ジカウイルス、トキソプラズマ原虫
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>多発性硬化症の発症メカニズムの解明とその新規治療法の開発</b>  多発性硬化症は四肢の筋力低下などが主症状である自己免疫疾患で、我が国でも患者数が激増しているにもかかわらず、未だにその決定的な治療法は確立されていない。近年、多発性硬化症の増悪化および発症には病原性T細胞の中枢神経系への遊走が重要であることが明らかになりつつある。T細胞におけるシグナル伝達分子TRAF6が病原性T細胞の遊走能や病原性に与える影響を分子レベルで明らかにし、TRAF6およびその下流で発現する分子を標的とした効果的かつ安全な新規治療法を開発することを目指す。  参考文献 <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2018 Sep 26;504(1):245-250.</p> <p><b>蚊媒介性ウイルス疾患の発症メカニズムの解析とその治療法の開発</b>  ジカウイルス感染が小頭症やギランバレー症候群などの神経変性疾患の発症および増悪化に関与することが知られている。近年、ジカウイルス感染と多発性硬化症との関連を示唆する症例報告がなされたが、その詳細は未だ明らかになっていない。我々はジカウイルスを感染させたマウスを用いて多発性硬化症モデルを作製するという独自のモデルを樹立し、ジカウイルスが免疫細胞の活性化を介して多発性硬化症の病態に与える影響を分子レベルで解析している。最終的には、感染によって発現が上昇し、病態に深く関わる分子を標的とした新規治療法を開発することを目的とする。  参考文献 <i>Antiviral Res.</i> 2017 Oct;146:1-11.</p> <p><b>蚊媒介性ウイルス感染症の簡便で安価な診断法の開発</b>  チクングニアウイルスは感染した蚊に吸血されることでヒトに感染し、非常に重篤な関節痛を引き起こすことで、QOLを大きく低下させることが大きな問題になっている。世界的にその診断法は専らPCR法によるものであるが、特に発展途上国においては経費や人材の不足により、診断を実施しないまま二次感染が広がっている傾向がある。そこで、RT-LAMP法など応用することで、人材や高額な機器が整備されていない発展途上国においても誰もが使用できる安価で簡便な検出法の開発を目指す。  参考文献 <i>Genes Cells.</i> 2020 Sep;25(9):615-625.</p> <p><b>先天性トキソプラズマ症の発症メカニズムの解析とその予防法の開発</b>  トキソプラズマ原虫はネコ科の動物を終宿主とする寄生虫で、妊婦が初感染した際に子供に重篤な障害が生じることがある(先天性トキソプラズマ症)。近年、先天性トキソプラズマ症が多く原因不明の流産の原因となっていることが示唆されている。しかし、我が国での認知度は低く、未だこの予防法は確立されていない。そこで、種々の遺伝子改変マウスを用いてトキソプラズマ原虫の垂直感染モデルを作製し、先天性トキソプラズマ症の発症メカニズムを明らかにし、新規治療法の開発を目指す。  参考文献 <i>J Exp Med.</i> 2011 Jul 4;208(7):1533-46.</p>

所属・職位	医学部附属地域医療学センター・助教	
氏名	川崎 貴秀 (Kawasaki Takahide)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	   	


研究分野	消化器外科、肥満外科、内視鏡外科治療学、地域医療学
研究キーワード	肥満外科、低侵襲治療、内視鏡外科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>肥満外科手術の確立、消化器疾患に対する内視鏡外科手術の新しい機器開発、消化器外科手術の安全性の向上に関する研究を行なっている。</p> <p>●研究</p> <p>(1)肥満外科手術が視床下部摂食中枢に与える影響についての研究  腹腔鏡下スリーブ状胃切除術の視床下部摂食中枢に与える影響を明らかにする。</p> <p>(2)新しいカメラ付きトロッカーの評価に関する研究  スコピストが不要である新しいトロッカーの臨床応用を行い、低侵襲手術の新たな機器開発とその有用性を検討する。</p> <p>(3)術中光イメージングを用いた安全な膵切除術の確立 (図)  膵切除術において術中に近赤外光イメージングや色相強調イメージングを行う。膵断端の多角的な評価を行うことにより膵液瘻の減少を目指す。</p> <p>●論文</p> <p>(1) Kawasaki T, et al. Effects of sleeve gastrectomy and gastric banding on the hypothalamic feeding center in an obese rat model. <i>Surg Today.</i> 45.2015</p> <p>●受賞</p> <p>(1) 2015年第22回日本外科学会 研究奨励賞</p>




## 医学部

所属・職位	医学部医学科心臓血管外科学講座・助教	
氏名	河島 毅之 (Kawashima Takayuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年6月	
SDGs目標		

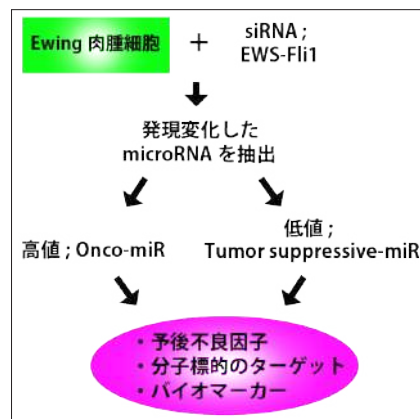
研究分野	心臓血管外科学
研究キーワード	再生医療、生体内組織形成術
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>基礎研究として生体内組織形成術を用いた新規生体材料の研究、脊髄虚血に伴う対麻痺予防の研究を行っており、心臓血管外科領域の各種臨床研究を行っております。</p> <p>● 論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Kawashima T, Umeno T, Terazawa T, Wada T, Shuto T, Nishida H et al. Aortic valve neocuspidization with in-body tissue-engineered autologous membranes: preliminary results in a long-term goat model. <i>Interact CardioVasc Thorac Surg</i> 2021; 32:969-77. doi:10.1093/icvts/ivab015.</li> <li>2. Kawashima T, Yoshimura K, Shuto T, Wada T, Okamoto K, Kawano M, Sato H, Hongo N, Miyamoto S. Extensive Aortic Stent Graft Coverage for Thoracoabdominal Aortic Aneurysm is Associated With Hemorrhagic Complications Induced by Disseminated Intravascular Coagulation. <i>Ann Vasc Surg</i>. 2022;78:152-160. doi:10.1016/j.avsg.2021.06.017</li> <li>3. Kawashima T, Okamoto K, Wada T, Shuto T, Umeno T, Miyamoto S. Femoral artery anatomy is a risk factor for limb ischemia in minimally invasive cardiac surgery. <i>Gen Thorac Cardiovasc Surg</i>. 2021;69(2):246-253. doi:10.1007/s11748-020-01442-y</li> </ol>


所属・職位	医学部医学科耳鼻咽喉科学講座・助教	
氏名	川野 利明 (Kawano Toshiaki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2013年6月	
SDGs目標		

研究分野	耳鼻咽喉科学、免疫学
研究キーワード	粘膜免疫、上気道感染、ウイルス学、ワクチン
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>アジュバント付加型鼻腔投与インフルエンザウイルスワクチンの研究</b></p> <p>現在まだ適応のないアジュバントを付加したインフルエンザウイルスワクチンを作成し、鼻腔から投与することによって粘膜免疫誘導や血清抗体産生を効果的に増加させる新たなワクチン戦略を構築する。</p> <p>(科学研究費 基盤研究 (C) 令和3年～6年 M2タンパクと複合アジュバントを用いた新たなインフルエンザウイルスワクチン戦略)</p> <p><b>Thymic stromal lymphopoietin (TSLP)を標的としたアレルギー病態と慢性感染炎症の制御</b></p> <p>T細胞の数と多様性の維持にはT細胞ホメオスタシスのプロセスが重要であり、その維持にはTSLPなどが関与している。TSLPとアレルギーや扁桃反復感染の関連について免疫学的評価を行い、TSLP抗体の上気道反復感染に対する有効性を検討する。</p> <p>(研究活動支援、奨学寄付、田辺三菱研究助成 令和3年 口蓋扁桃上皮に発現するTSLPを標的としたアレルギー病態と慢性感染炎症の制御)</p>

所属・職位	医学部医学科整形外科学講座・助教	
氏名	河野 正典 (Kawano Masanori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	骨軟部腫瘍
研究キーワード	肉腫、がん遺伝子、マイクロRNA
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>Ewing肉腫特異的融合遺伝子タイプによるマイクロRNA発現制御機構に関する研究</b></p> <p>我々はEwing肉腫の特異的融合遺伝子産物EWS-Fli1が、そのsubtypeによってマイクロRNA及び標的mRNA発現にどのような影響を与えているかを研究している。特に特異的siRNAによりknock down後、有意な発現変化を示すmiRNAとその標的mRNAを網羅的に解析することで、1) Ewing肉腫の性質を普遍的に規定する因子、2) 予後不良例の特有な予後規定因子、3) より選択的な治療標的となる因子、の同定を目指している。</p>



所属・職位	医学部医学科大分子ども急性救急疾患学部門医療・研究事業・助教	
氏名	岸本 慎太郎 (Kishimoto Shintaro)	
取得学位	博士 (医学)、久留米大学、2012年2月	
SDGs目標		

研究分野	小児循環器
研究キーワード	先天性心疾患、川崎病
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>Increased plasma type B natriuretic peptide in the acute phase of Kawasaki disease. <i>Pediatric International</i> 2011 ;53 :736-41.</p> <p>川崎病急性期ではBNP上昇が見られます。そのBNP上昇は、心エコーでの心機能指標は相関せず、炎症所見 (CRPやIL-6) と相関することを発見しました。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等

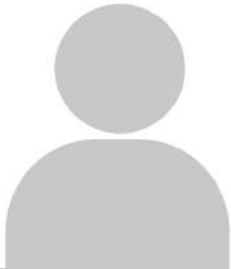

## 医学部

所属・職位	医学部医学科微生物学講座・助教	
氏名	君付 和範 (Kimitsuki Kazunori)	
取得学位	博士 (獣医学)、北里大学、2018年3月	
SDGs目標		
研究分野	獣医学、病理学、ウイルス学	
研究キーワード	狂犬病、Neglected Tropical Diseases	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●フィリピンにおける狂犬病の調査と新規診断方法開発          狂犬病対策として、犬の狂犬病をコントロールすることが最も重要であるにも関わらず、多くの狂犬病流行国では十分なサーベイランス自体が行えていないのが現状である。そこで、より簡便に動物の狂犬病診断を行うべく、狂犬病流行国における狂犬病疑い動物のサーベイランスの実態調査、迅速診断キットによる簡易診断方法の評価、新規遺伝子検出方法の開発、病理組織学解析などを現地の研究者らと行なっている (Mananggit MR. et al 2021, and Kimitsuki K. et al 202)。          ※関連リンク：<a href="http://www.med.oita-u.ac.jp/biseibut/SATREPS.html">http://www.med.oita-u.ac.jp/biseibut/SATREPS.html</a></p> <p>●狂犬病ウイルス感染モデルマウスを用いた病態解析          末梢感染性の高い野外流行株 (街上毒) を用いた末梢感染モデルを解析することで、潜伏期間中におけるウイルスの病原性発現機序、及び宿主応答を明らかにすることを旨とする。さらに、これらの感染モデルマウスを用いて、抗ウイルス薬などの治療効果についても評価を進めている (Kimitsuki et al 2017, Yamada, K 2021)。</p>	

所属・職位	医学部医学科小児科学講座・助教	
氏名	木村 裕香 (Kimura Yuka)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標		
研究分野	小児成育学、小児腎臓病学	
研究キーワード	小児腎疾患	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>小児腎臓病分野に関する研究業績</p> <p>1) Yuka Kimura, Kyoko Kiyota, Hiroshi Koga, Souichi Suenobu, Kenji Ihara: Renal lesions mimicking acute focal bacterial nephritis in pediatric leukemia. <i>Pediatrics International</i>. 2022 Jan; 64(1): e14838.</p> <p>2) Yuka Kimura, Kyoko Kiyota, Mayo Ikeuchi, Kazuhito Sekiguchi, Kenji Ihara: Rituximab-induced serum sickness in a girl with nephrotic syndrome. <i>CEN case reports</i>. 2022 (in press).</p>	

所属・職位	医学部医学科解剖学講座・助教	
氏名	久保 修一 (Kubo Shuichi)	
取得学位	博士 (生命科学)、鳥取大学、2020年9月	
SDGs目標		

研究分野	解剖学、分子生物学
研究キーワード	ピロリ菌、炎症性発癌、胃がん
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●<u>ピロリ菌感染による炎症性発癌機序の解明</u></p> <p>ピロリ菌、特に菌体から胃粘膜上皮細胞へ注入されるCagAと呼ばれる毒素蛋白質をもつピロリ菌は、慢性胃炎から胃癌へと進展する、炎症を基盤とした強い発癌活性を示します。本研究では「炎症に密接に関連する生理活性物質」に着目し、CagAをもつピロリ菌感染によって生じる炎症を基盤とした発癌過程の解明を目指します。</p> <p>●<u>研究業績</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Ninomiya R, <u>Kubo S</u> et al (2021) Inhibition of low-density lipoprotein uptake by <i>H. pylori</i> virulence factor CagA. <b>BBRC</b>. 556, 192-198.</li> <li>2) <u>Kubo S</u> et al (2020) Oct motif variants in Beckwith-Wiedemann syndrome patients disrupt maintenance of the hypomethylated state of the H19/IGF2 imprinting control region. <b>FEBS letters</b>. 594, 1517-1531.</li> <li>3) Morita M et al (2020) <b>Biology open</b>. 9.</li> <li>4) Hori N, <u>Kubo S</u> et al (2020) <b>Gene</b>. 743, 144606-144606.</li> </ol>

所属・職位	医学部医学科脳神経外科学講座・助教	
氏名	久保 毅 (Kubo Takeshi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1995年3月	
SDGs目標		

研究分野	脳神経外科
研究キーワード	脳血管障害 脳卒中 脳動静脈奇形 血管新生 分子細胞生物学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>脳血管障害におけるCAT assayと細胞内シグナルの解析</p> <p>脳血管障害発生には血管内皮前駆細胞からのvasculogenesisのメカニズムと、血管内皮細胞の形成 (angiogenesis) の過程があり、さらにvascular remodelingが加わる。脳血管障害における分子メカニズムは不明な点が多く、これらに特異的な細胞内シグナルをCAT assayとともに解明することで治療困難な脳の病勢把握や新たな血管内治療法開発に寄与する。</p>



## 医学部

所属・職位	医学部医学科眼科学講座・助教	
氏名	久保 夕樹 (Kubo Yuki)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2021年2月	
SDGs目標	   	
研究分野	眼科学	
研究キーワード	網膜静脈閉塞症、糖尿病網膜症	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>網膜静脈閉塞症や糖尿病網膜症に代表される網膜虚血性疾患に関して血管新生や増殖膜形成を惹起する分子の特定とそれらに対する抗体医薬などの分子標的薬の創生を目指している。</p> <p>また、当該疾患に対する既存の分子標的治療に関しての治療効果を解析することを通じて、治療レジメンの検討を行っている。</p> <p>論文 Kubo Y, et al. Periostin and tenascin-C interaction promotes angiogenesis in ischemic proliferative retinopathy. Sci Rep. 2020 Jun 9;10(1):9299. doi: 10.1038/s41598-020-66278-1.</p>	

所属・職位	医学部医学科病態生理学講座・助教	
氏名	桑 慎一郎 (Kume Shinichiro)	
取得学位	博士 (理学)、総合研究大学院大学、2016年10月	
SDGs目標	  	
研究分野	電気生理学、分子生理学	
研究キーワード	イオンチャネル	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●イオンチャネル分子の構造と機能の関係性に関する研究</p> <p>心臓の規則正しい拍動には、電気信号による調節が不可欠です。この電気信号は心筋内外でのイオンの移動により生じており、イオンチャネルという分子群が担っています。例えば、突然変異でイオンチャネルの分子構造が変化すると、その正常な機能が維持できず、結果的に不整脈などの心疾患を引き起こします。</p> <p>私はこれらのイオンチャネルのうち、特に電位作動性K<sup>+</sup>チャネルの1つであるhERGチャネルに焦点を当てた研究をしています (論文1)。イオンの移動を電流として測定できるパッチクランプ法や、分子の構造変化を光の変化として測定できるFRET法、また、遺伝子工学などの技術を駆使して、このチャネルの構造と機能の関係性を解明することで、心疾患の予防や治療に貢献したいと考えています。</p> <p>1: Kume S <i>et al.</i>, J Physiol. 596, 4629-4650 (2018)</p>	



所属・職位	医学部医学科総合診療・総合内科学講座・助教	
氏名	栗林 良子 (Kuribayashi Ryoko)	
取得学位	学士(医学)、帝京大学、2016年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	総合診療、高齢者医療、地域基盤型研究
研究キーワード	ソーシャルキャピタル、家庭医療、アドボカシー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>【研究内容】</b>          高齢者が住み慣れた街で自分らしく過ごせる街創りを推進するために、フレイル、サルコペニア状態にある高齢者とその介護者をはじめとするご家族に対して、身体活動度の向上を目指すための認知行動療法を取り入れた教育活動を推進する。また、フレイル、サルコペニアを有する高齢者に対して認知行動療法を行うことのできる家庭医、総合診療医を育成するための教育プログラムを開発する。</p> <p><b>【アピールポイント】</b>          現在、厚生労働省「総合的な診療能力を持つ医師の養成推進事業～総合診療医センター」を担当する助教として医学生、研修医の教育を行いながら、彼らとともに高齢者が住み続けられるまちづくりについて考え、またソーシャルキャピタルやアドボカシーが高齢者のQOL向上に如何に関与しているか質的研究を行っている。</p>

所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・助教	
氏名	後藤 奈穂 (Goto Naho)	
取得学位	修士(看護学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	看護学
研究キーワード	保健師、地域ケアシステム
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>【テーマ】</b>          行政保健師に医療的ケア児を対象とした活動指標の開発</p> <p><b>【内容】</b>          本研究の問いは「医療的ケア児とその家族の支援における行政保健師ならではの活動内容とは？期待される活動とは？」である。行政保健師は、公的機関に所属の看護職として、住民の健康を守るという責任のもと保健・医療・福祉・介護等の住民サービスの充実を図る役割を担っており、医療的ケア児とその家族に対しても、家庭訪問などの直接的な支援や関係機関との連携、サービスの開拓・調整を行っている。そこで、それらの保健師活動について以下の方法にて活動指標を開発しようとするものである。</p> <p>医療的ケア児とその家族に対する保健師活動を行った行政保健師へのインタビュー調査をもとに指標原案を作成し、その後、全国の行政保健師ならびに医療的ケア児支援に関わる多職種への質問紙調査等によって見直し・検証を経て完成版活動指標の作成を目指す。</p>




## 医学部

所属・職位	医学部医学科循環器内科・臨床検査診断学講座・助教	
氏名	近藤 秀和 (Kondo Hidekazu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年8月	
SDGs目標		

研究分野	循環器内科学
研究キーワード	心房細動, 心外膜脂肪, SGLT2阻害薬
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>#1. 心外膜脂肪の遺伝子発現プロファイルに対するSGLT2阻害薬の効果 イギリス留学時にSGLT2阻害薬の心筋redoxへの直接効果を検証した研究をもとに、現在はSGLT2阻害薬の心外膜脂肪への効果を追究している。留学時に培ったヒト組織からの細胞培養法を駆使してより臨床に近いヒト検体を用いた実験にこだわって研究を進めている。</p> <p>#2. 術後心房細動予防のための心外膜脂肪中新規標的因子の解明 心臓血管外科とコラボレーションし、術後心房細動患者の心外膜脂肪組織で特異的に発現亢進している因子を同定しようとしている。</p> <p>#3. デバイス植込み患者の患者背景・予後と皮下脂肪組織・骨格筋組織の遺伝子発現プロファイルの関係 業績詳細は<a href="https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/?term=kondo+hidekazu&amp;sort=date">https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/?term=kondo+hidekazu&amp;sort=date</a>へ</p>

所属・職位	医学部医学科皮膚科学講座・助教	
氏名	酒井 貴史 (Sakai Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	皮膚科学
研究キーワード	アトピー性皮膚炎
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>● アトピー性皮膚炎の病態解明、新規治療開発、バイオマーカー探索に関する研究</p> <p>アトピー性皮膚炎 (AD) は、かゆみと繰り返す湿疹を特徴とする最もありふれた炎症性皮膚疾患で、AD患者は身体的苦痛、心理的苦痛によって自身および家族などの身の周りの人への生活の質に多大な影響を及ぼす。私はこれまで大分大学およびボン大学 (ドイツ) で、ADの病態、新規治療、バイオマーカーに関する研究に携わり、現在も基礎研究、臨床研究を通して、ADに関する新しい知見を重ねている。</p> <p>代表業績 : Sakai T, et al. <i>Allergy</i> 76(10):3220, 2021. Sakai T et al, <i>Allergy</i> 76(8):2592, 2021.</p> <p>代表受賞歴 : Young JSID Award (December 3, 2021)</p> <p>※ 関連リンク : <a href="https://researchmap.jp/sakai-t-2006">https://researchmap.jp/sakai-t-2006</a></p>

所属・職位	医学部医学科麻酔科学講座・助教	
氏名	佐々木 美圭 (Sasaki Mika)	
取得学位	学士 (医学)、熊本大学、2008年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	医学
研究キーワード	麻酔、周術期禁煙
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ポータブル型パルスCOオキシメータを用いた周術期禁煙指導の有効性の検討</p> <p>周術期禁煙は喫緊の課題であり、手術は患者教育の機会 (teachable moment ; TM) の観点で禁煙の動機付けとして重要性が指摘されている。</p> <p>一般的な禁煙外来での禁煙の動機づけに呼気一酸化炭素 (CO) 濃度測定を行うが、パルスオキシメータによる一酸化炭素濃度 (SpCO) ではより侵襲的に測定可能である。周術期の禁煙指導にSpCOの測定を繰り返し行うが喫煙者に禁煙の動機づけとなり、周術期禁煙指導を行うことで禁煙率を上昇させるかどうか、さらには長期禁煙につながるかどうか調査中である。</p>

所属・職位	医学部医学科神経生理学講座・助教	
氏名	鹿野 健史朗 (Shikano Kenshiro)	
取得学位	博士 (学術)、広島大学、2018年3月	
SDGs目標		

研究分野	生理学、神経内分泌学、内分泌代謝学、ペプチド科学
研究キーワード	神経ペプチド、エネルギー代謝、肥満
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1. 中枢性エネルギー代謝調節機構の解明</p> <p>肥満の主な原因である過食は、脳の摂食中枢におけるエネルギー代謝調節機構が破綻することで生じるため、中枢性エネルギー代謝調節機構のさらなる解明が求められている。これまでの先行研究において視床下部特異的に発現する新規脳内因子に関して食欲亢進作用を有することを明らかにしてきた (研究業績1,2)。現在、この脳内因子について独自に遺伝子欠損マウスを作製し、生理機能解析を行っている。これまでに本遺伝子欠損マウスが摂食量の低下やエネルギー代謝の亢進により「痩せ」を生じさせることが判明している。今後この「痩せ」が生じるメカニズムを明らかにすることで、本因子が関与する肥満発症機構の解明や肥満症治療基盤の開発を目指したい。</p> <p><b>【研究業績】</b></p> <p>1. Shikano K et al. <i>J Endocrinol.</i> 244(1):1-12. 2020.</p> <p>2. Iwakoshi-Ukena E and Shikano K et al. <i>eLife.</i> 6:e28527. 2017</p>

# 医学部



所属・職位	医学部医学科放射線医学講座・助教	
氏名	島田 隆一 (Shimada Ryuichi)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2002年3月	
SDGs目標		

研究分野	放射線診断学、Interventional radiology
研究キーワード	神経放射線診断、腹部放射線診断、Interventional radiology
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>これまでCT、MRIや血管造影など脳神経領域の画像診断に関する研究を行い、脳血管内治療の際に必要な詳細な血管構築及びそれに基づいた治療戦略について国内外で発表を行ってきた (論文1.2、学会発表1-3)。また、腹部放射線領域についても肝胆膵領域の画像診断に関する研究を行っている (論文3)。</p> <p>&lt;論文&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Shimada R, Kiyosue H, Tanoue S, Mori H, Abe T. Superior Petrosal Sinus: Hemodynamic Features in Normal and Cavernous Sinus Dural Arteriovenous Fistulas. <i>Am J Neuroradiol.</i> 2013 Mar;34(3):609-15.</li> <li>2. Ide S, Kiyosue H, Shimada R, Hori Y, Okahara M, Kubo T. Selective transvenous embolization combined with balloon angioplasty of the occluded inferior petrosal sinus for the treatment of cavernous sinus dural arteriovenous fistulas. <i>Interv Neuroradiol.</i> 2021 May 6;15910199211016234. doi: 10.1177/15910199211016234. Epub ahead of print.</li> <li>3. Takaji R, Yamada Y, Shimada R, Matsumoto S, Daa T, Endo Y, Inomata M, Asayama Y. Retrospective evaluation of venous phase contrast-enhanced computed tomography images in patients who developed pancreatic adenocarcinomas after treatment for nonpancreatic primary cancer. <i>BJR Open.</i> 2021 Jul 5;3(1):20200069. doi: 10.1259/bjro.20200069. eCollection 2021.</li> </ol> <p>&lt;学会発表&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Shimada R. Anatomical evaluation of the inferolateral trunk by multiplanner reformatted images of rotational angiography: normal anatomy and pathologic features. <i>European Congress of Radiology.</i> Mar 6-10, 2014 Vienna, Austria.</li> <li>2. Shimada R. Spontaneous carotid-superior petrosal sinus AVF in a patient with Marfan's syndrome. Sep 13-17, 2014 Glasgow, United Kingdom.</li> <li>3. Shimada R. Borden type I transverse-sigmoid sinus dural arteriovenous fistulas cured by selective transvenous embolization for shunted venous pouches. May 28-30, 2015 Miyazaki, Japan.</li> </ol>

所属・職位	医学部医学科細胞生物学講座・助教	
氏名	清水 誠之 (Shimizu Nobuyuki)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2013年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	分子生物学、ケミカルバイオロジー
研究キーワード	疾患モデル、CRISPR/Cas9、ゼブラフィッシュ、プロテインノックダウン
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>X連鎖性ミオチューブラーミオパチーに合併する肝臓障害に関する研究</b></p> <p>X連鎖性ミオチューブラーミオパチーは、MTM1遺伝子の変異により、全身の筋緊張低下を主症状とし、まれに肝障害に起因する出血性ショックにより致死的な状態に陥る。体が透明で、組織・器官の病態プロセスを高精度に追跡できる小型魚類において、本疾患を模倣するモデルを作成した。ライブイメージング技術などを駆使し、病態メカニズムの解明と治療法の確立、創薬の開発に向けた基盤研究をおこなっている。</p> <p><b>白血病治療薬ポマリドミドの適応拡大に関する研究</b></p> <p>一部の血液がんのみ使用が認可された薬剤ポマリドミドの適応拡大を目指した研究を行い、ポマリドミドによって分解誘導される新しい基質PLZFを同定した。これにより、ポマリドミドがPLZFに起因する急性前骨髄球性白血病 (APL) に対して、抗腫瘍効果を示すことが明らかとなった (<i>Communications Biology.</i> 2021)。</p>



所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・助教	
氏名	箕河原 靖子 (Sugahara Seiko)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標		

研究分野	地域看護学
研究キーワード	地域看護
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>【研究業績】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・箕河原靖子、後藤奈穂、志賀たずよ、井手知恵子；運動教室後の健康づくり活動にかかわる看護援助ニーズ、第18回日本地域看護学会学術集会講演集、2015</li> <li>・箕河原靖子、岡本静香、松原麻夏他；結核の早期発見・服薬確認を軸とした患者支援体制の検討、第38回大分県看護研究学会、2015</li> </ul>

所属・職位	医学部医学科神経内科学講座・助教	
氏名	角 華織 (Sumi Kaori)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	神経内科学、認知症
研究キーワード	糖尿病、認知症、アミリン、オリゴマー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ヒトアミリンオリゴマー仮説に基づく2型糖尿病および認知症の研究</p> <p>ヒト膵島アミロイドポリペプチド (hIAPP；アミリン) は膵臓のβ細胞からインスリンと共分泌されます。2型糖尿病(T2DM；Type 2 diabetes mellitus)では、hIAPPが凝集して膵島にアミロイドとして沈着することが特徴的な形態変化のひとつであり、膵β細胞量の減少と膵島アミロイドの蓄積は相互に依存していることがわかっています。また、T2DM患者は健常者と比較して約1.5倍～2.5倍の認知症発症リスクがあり、T2DMおよびAD患者の脳には異常に増加したアミリンやアミリン-Aβ混合プラークも発見されています。2T2DMと認知症に共通する発症基盤としてアミリンについての研究を進めています。</p>

## 医学部


所属・職位	医学部医学科救急医学講座・助教	
氏名	竹中 隆一 (Takenaka Ryuichi)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	救急集中治療学分野
研究キーワード	酸化ストレス、生体侵襲、メタボローム解析、呼吸不全、外傷
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>○重症救急患者における生態侵襲制御を目的とした酸化ストレス制御 重症外傷や心停止・心停止後症候群など救急患者を対象として、生体侵襲に伴う酸化ストレスの動向をリアルタイムに把握する方法を確立させ、どのようなタイミングでどの程度の量の抗酸化物質を投与することが予後改善につながるかを検討。 (科研費基盤研究C 2019年度～2021年度 研究責任者)</p> <p>○救急患者および呼吸不全患者におけるメタボローム解析を利用した重症度・予後予測マーカー、疾患特異的マーカー、治療標的物質の網羅的検討 学内で実施可能であるメタボローム解析を用い、救急患者・呼吸不全患者の臨床検体から、重症度や予後と関連する物質やカスケードの特定を行い臨床応用に繋げる。最終的には治療標的となる物質やカスケードの特定まで結び付けたい。</p>

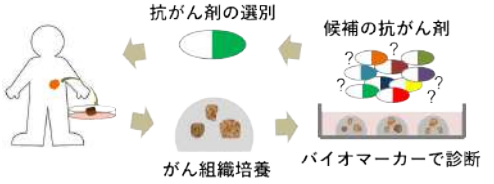
所属・職位	医学部医学科結核地域医療体制強化事業・助教	
氏名	竹野 祐紀子 (Takeno Yukiko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2007年3月	
SDGs目標		

研究分野	呼吸器内科分野
研究キーワード	気管支拡張、器質化肺炎、嫌気性菌
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>&lt;研究内容&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・気管支拡張症における菌分離を目的とした気管支鏡検査の役割</li> <li>・特発性器質化肺炎と続発性器質化肺炎の臨床所見の比較</li> <li>・呼吸器内科における気道検体からの嫌気性菌分離状況と臨床的特徴</li> </ul> <p>&lt;研究業績&gt;</p> <p>Quantitative assessment of the association between erector spinae muscle and in-hospital mortality in elderly patients with pulmonary tuberculosis Ai Tanaka #1,2, Kosaku Komiya #3,4, Mari Yamasue #1,2, Yumiko Ando #5, Yukiko Takeno #1,2, Shuichi Takikawa #1, Kazufumi Hiramatsu #2, Jun-Ichi Kadota #2 BMC Res Notes. 2021 Apr 13;14(1):134. doi: 10.1186/s13104-021-05546-3.</p>

所属・職位	医学部医学科人工関節学講座・助教	
氏名	田中 健誠 (Tanaka Kensei)	
取得学位	博士 (医学)、北里大学、2016年3月	
SDGs目標		

研究分野	人工関節学
研究キーワード	人工股関節、Full HA(hydroxyapatite) coated stem、有限要素解析
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●フルHAコーティング型人工股関節ステムの応力解析における研究</p> <p>近年、人工股関節置換術や人工骨頭置換術ではフルHAコーティング型ステムが広く使用されている。Depuy社が販売しているCorail® はその代表格であり、約30年の長期臨床成績が報告されている。現在では各メーカーより同タイプのステムが販売されているが、そのステム形状やコーティングの仕様は微妙に異なっている。本研究では同タイプステムの1例を対象とし、実際に生体に設置された生理的荷重を受けた状態を再現しつつ、有限要素解析にて大腿骨内の応力状態を解明することを目的としている。</p>
	
	フルHA型ステム1例

所属・職位	医学部医学科分子病理学講座・助教	
氏名	塚本 善之 (Tsukamoto Yoshiyuki)	
取得学位	博士 (生命科学)、鳥取大学、2004年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	分子病理学
研究キーワード	病理、消化器がん、抗がん剤効果予測、がん組織培養
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究テーマ：がん個別化医療の実現へ向けた基盤研究</p> <p>抗がん剤は臨床試験を通してもっとも効果的なものが決められているが、実際は同じ抗がん剤・同じ臓器がんでも患者さんによって効果が異なる。そのため、抗がん剤治療前に効果が予測できれば、患者さんに合った治療法を選択できる。これを「個別化医療」と呼ぶが、医療現場ではまだ十分ではない。私たちは患者さんのがん組織を培養し、バイオマーカーを用いてその患者さんの抗がん剤に対する効果を予測する方法の開発を目指している。将来的に個別化医療の実現に役立てたい。</p> <p>関連リンク  <a href="https://researchmap.jp/tsukamoto-yoshiyuki">https://researchmap.jp/tsukamoto-yoshiyuki</a></p>
	

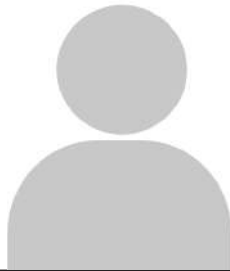

- 役員
- 大学院教育学研究科 教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科神経生理学講座・助教	
氏名	寺西 仁志 (Teranishi Hitoshi)	
取得学位	博士 (医学)、久留米大学、2005年3月	
SDGs目標		

研究分野	生理学、神経科学、ペプチド科学、行動実験学、病態生理学
研究キーワード	ストレス、ペプチドホルモン、遺伝子改変マウス、行動実験
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>1. ニューロメジンUシステムの精神・神経疾患における臨床応用を目指した研究</b></p> <p>現在社会はストレス社会であると言われ、過度のストレスはうつ病やPTSDなどの精神・神経疾患の誘因となる。我々は、神経ペプチドであるニューロメジンU (NMU) システムの遺伝子改変マウスを用いた行動実験により、NMUがストレス応答に深く関与していることを見出している。現在、得られた研究結果をもとに、NMUシステムを介した精神・神経疾患の詳細な病態生理機構ならびに創薬標的としてのNMUシステムの可能性について研究を進めている。</p> <p><b>【研究業績】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Teranishi H, Hanada R. Neuromedin U, a Key Molecule in Metabolic Disorders. <i>Int J Mol Sci.</i> 22(8) :4238. 2021</li> <li>2. Teranishi H, Hanada R et al. Role of neuromedin U in accelerating of non-alcoholic steatohepatitis in mice. <i>Peptides.</i> 99 :134-141. 2018</li> </ol>

所属・職位	医学部医学科薬理学講座・助教	
氏名	寺林 健 (Terabayashi Takeshi)	
取得学位	博士 (医学)、東京大学、2007年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	薬理学、細胞生物学
研究キーワード	細胞運動、細胞骨格、上皮細胞恒常性
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>基底細胞恒常性維持シグナルを標的とした慢性炎症性皮膚疾患治療薬開発</b></p> <p>アトピー性皮膚炎など慢性炎症性皮膚疾患の発症・増悪化の大きな要因の1つが、表皮を構成する基底細胞の増殖と分化の不均衡によって生じる皮膚バリア機能異常である。しかしながら、基底細胞の増殖と分化のバランスを制御するシグナル伝達やその標的となる転写因子群については未だに不明な点が多く残されたままである。我々は、アクチン細胞骨格を基調として基底細胞の分化に関わる因子の同定を行ってきた。同定された因子の活性制御機構の解明を通じて、慢性炎症性皮膚疾患に対する治療戦略と治療薬開発に向けた基盤研究を進めている。</p> <p><b>がん細胞の浸潤・転移を抑制する天然由来化合物の探索</b></p> <p>がん細胞は走化性を獲得することにより、原発巣からの浸潤・転移を可能にする。生薬をはじめとした天然資源には様々な生物活性を有する化合物が含まれていることから、がんの走化性を標的とした成分の探索と同定を進めている。</p>

所属・職位	医学部附属地域医療学センター・助教	
氏名	土井 恵里 (Doi Eri)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	医療
研究キーワード	高齢者
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・在宅の高齢者における口腔ケア、リハビリの実態とADL、QOLの関係</li> <li>・豊後大野市の医療介護に関するアンケート調査</li> <li>・在宅の高齢者における口腔ケア、リハビリの実態と問題点の抽出</li> <li>・国東市における地域包括ケアで求められる医師の役割</li> </ul> <p>看取りを含めた在宅医療を行うには、患者家族との信頼関係が大切であり、安心感を与えることが必要不可欠である。従って患者およびその家族の背景を理解し、寄り添いながら話を聞ける医師が必要だと思われる。また在宅医療を行っていく上で、患者・家族への適切な指導・助言を行うこと、若い医師に対しても在宅医療の教育が重要である。そして、地域包括ケアを円滑に推進していくためには多職種間での連携が必要である。医師は立場上接しにくいことが多いため、多職種間での顔の見える関係性作りが大切であり、各々の立場や職種について理解することが重要で、医師も多職種研修に積極的に参加することが大切である。地域性の異なる市町村における医療従事者の認識についてはさらなる研究が必要である。</p>



所属・職位	医学部医学科放射線医学講座・助教	
氏名	道津 剛明 (Dotsu Takeaki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標	 	




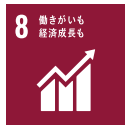

研究分野	画像診断、血管内治療全般
研究キーワード	血管内治療 スtentグラフト
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 大動脈ステントグラフト治療の有効性や合併症に関する研究 (2019-)</li> <li>② 大動脈ステントグラフト留置後のエンドリークに対する治療法開発 (2019-)</li> <li>③ タイプIbエンドリークの血行動態解析に基づいた治療法の選択 (2019-)</li> <li>④ 髄膜腫に対する至適塞栓物質の検討およびその有効性の確認 (2015-2016年)</li> <li>⑤ 硬膜動静脈瘻に対する治療法の検討 (2010-2019年)</li> </ol> <p>過去、脳神経領域を主として血管内治療全般的な研究を行ってきたが、現在は大動脈ステントグラフトの研究を中心に行っており、2020年5月の日本インターベンショナルラジオロジー学会では大動脈ステントグラフト留置後の合併症であるエンドリークタイプIbの血行動態解析や治療方法を解析、2021年4月の日本医学放射線学会総会ではエンドリークタイプIbに関する血管内治療および成績について報告を行った。</p>



## 医学部

所属・職位	医学部医学科臨床薬理学講座・助教	
氏名	中村 優佑 (Nakamura Yusuke)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標		
研究分野	皮膚科学、臨床薬理学	
研究キーワード	全身性強皮症、iPS細胞、低分子化合物、創薬	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>全身性強皮症患者由来iPS細胞を用いたモデルに対する抗線維化作用を有する低分子化合物の薬効評価に関する研究：</p> <p>全身性強皮症は、線維症の代表的な疾患で未だ有効な治療法が存在しない。全身性強皮症の疾患特異的iPS細胞を用いて薬効評価が可能な3次元<i>in vitro</i>細胞モデルを構築する。次にそのモデル系に対して当講座TCB(translational chemical biology)研究室で合成された細胞内タンパク質間相互作用を標的とした低分子化合物を加えることにより、その抗線維化作用効果を評価し、新規の抗線維化薬になりうるかを検討する。</p>	

所属・職位	医学部医学科解剖学講座・助教	
氏名	二宮 遼 (Ninomiya Ryo)	
取得学位	修士 (医科学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標		
研究分野	解剖学、細胞生物学	
研究キーワード	ピロリ菌、胃がん、オルガノイド	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>● <u>ピロリ菌感染による胃炎および胃がんの発生機序の解明</u></p> <p>ピロリ菌、特にCagAと呼ばれる毒素を持つピロリ菌は、胃炎や胃がんの発症に深く関与していることが報告されています。当研究室ではショウジョウバエを用いた遺伝学的スクリーニングにより、複数のCagA新規標的分子を同定することに成功しました。本プロジェクトでは、これらの標的分子について、マウスやヒトの胃組織、さらには胃組織幹細胞より作製したオルガノイドを駆使して解析を進めていき、新たな胃炎・胃がん発症機序の解明、および新規治療法の開発を目標とします。</p> <p>● <u>研究業績</u></p> <p>(1) Ninomiya R et al (2021) Inhibition of low-density lipoprotein uptake by <i>H. pylori</i> virulence factor CagA. <i>Biochem. Biophys. Res. Commun.</i> 556, 192-198.</p> <p>(2) Iwasaki K, <u>Ninomiya R</u> et al (2018) Chronic hypoxia-induced slug promotes invasive behavior of prostate cancer cells by activating expression of ephrin-B1. <i>Cancer Sci.</i> 109, 3159-3170.</p>	

所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・助教	
氏名	野上 龍太郎 (Nogami Ryutaro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年9月	
SDGs目標	   	

研究分野	基礎看護学
研究キーワード	基礎看護、看護技術
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容 文部科学省科学研究費 (若手研究) 「安全な気管吸引法確立のためのエビデンスの開発に関する研究」 気管吸引による気道粘膜への影響に着目し、より安全な気管吸引法確立を目的とした研究に取り組んでいます。</p> <p>研究論文 Ryutaro Nogami・Nobuhiro Kaku・Tatsuo Shimada・Tomonori Tabata・Hiroaki Tagomori・Hiroshi Tsumura、Three-dimensional architecture of the acetabular labrum in the human hip joint、Medical Molecular Morphology、Springer、Vol.53 No.1、pp21-27、March 2020</p>

所属・職位	医学部医学科歯科口腔外科学講座・助教	
氏名	野口 香緒里 (Noguchi Kaori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2018年12月	
SDGs目標		

研究分野	歯原性腫瘍、顎骨壊死、歯科口腔外科手術での周術期管理
研究キーワード	エナメル上皮腫、ARONJ、有病者歯科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>骨吸収抑制薬関連性顎骨壊死ははまだ治療法が確立していません。 適切な治療法を提案できるよう過去の治療の解析を行っています。</p> <p>歯科治療には思いがけない急変や気道トラブルが起きる可能性が多々あります。 医学部麻酔科学講座の協力の元、歯科医師が注意すべき全身既往歴による治療上でのリスクの認識や周術期管理の勉強にも力を入れています。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等





## 医学部

所属・職位	医学部医学科呼吸器・乳腺外科学講座・助教	
氏名	橋本 崇史 (Hashimoto Takafumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2018年12月	
SDGs目標	  	



研究分野	分子腫瘍学、外科腫瘍学
研究キーワード	非小細胞肺癌、EGFR遺伝子変異、耐性、腫瘍内不均一性
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●肺癌腫瘍内の遺伝子学的不均一性と薬剤耐性に関する研究 進行肺癌に対する分子標的治療の耐性化には、同一腫瘍内に多彩な遺伝子変異あるいは発現パターンを有する腫瘍内不均一性が関与していると考えられており、これまでに同一腫瘍内に異なる遺伝子パターンと細胞活性を有する部位があることを証明してきた (論文1)。さらに薬剤耐性の解析を進め、肺癌の予後向上を目指している。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年、Hashimoto T, Osoegawa A, Takumi Y, Abe M, Kobayashi R, Miyawaki M, Takeuchi H, Okamoto T, Sugio K. Intratumoral heterogeneity of copy number variation in lung cancer harboring L858R via immunohistochemical heterogeneous staining. <i>Lung Cancer</i>.124:241-247</li> <li>2018年、Osoegawa A, Hashimoto T, Takumi Y, Abe M, Yamada T, Miyawaki M, Takeuchi H, Okamoto T, Sugio K. Acquired resistance to an epidermal growth factor receptor-tyrosine kinase inhibitor (EGFR-TKI) in an uncommon G719S EGFR mutation. <i>Invest New Drugs</i>. 36(6):999-1005</li> </ol> <p>●胸部悪性腫瘍に対する低侵襲手術の開発 胸腔鏡手術やロボット支援下手術などの低侵襲手術を提供するとともに、それらの術式開発をすすめている。</p>

所属・職位	医学部医学科腎泌尿器外科学講座・助教	
氏名	羽田 真郎 (Hata Shinro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年9月	
SDGs目標		

研究分野	泌尿器癌
研究キーワード	前立腺癌、低酸素
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>Angiopoietin-like protein 4 (ANGPTL 4) は、angiopoietinと構造上類似した蛋白であり、低酸素で誘導され、糖脂質代謝や血管新生因子としての働きが指摘されている。近年様々な癌において、診断および予後因子としての有用性が報告されている。前立腺癌においても、ANGPTL4は低酸素で誘導され、Aktのリン酸化を介してその増殖・遊走能が亢進することを発見した。また前立前全摘出標本におけるANGPTL4の発現は、術後生化学的再発の独立した予測因子であることも判明した。</p> <p>・ Hata, S., et al. (2017). Hypoxia-induced angiopoietin-like protein 4 as a clinical biomarker and treatment target for human prostate cancer. <i>Oncology reports</i>, 38(1), 120-128.</p> <p>・ Hata, S., et al. (2021). Degarelix as a neoadjuvant hormonal therapy for acute urinary tract toxicity associated with external beam radiotherapy for intermediate-and high-risk prostate cancer: a propensity score matched analysis. <i>Japanese Journal of Clinical Oncology</i>, 51(3), 478-483.</p>

所属・職位	医学部医学科神経内科学講座・助教	
氏名	花岡 拓哉 (Hanaoka Takuya)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年12月	
SDGs目標	  	

研究分野	神経内科学、臨床神経生理学
研究キーワード	神経筋疾患、認知症、神経生理検査
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>① 神経生理検査を用いた神経筋疾患の病態解明 論文：疾患関連遺伝子エクソーム解析によりLMNA遺伝子変異を認めたラミノパチーの1例. 中村憲一郎, 松田貴雄, 花岡拓哉, 後藤勝政, 松原悦朗 臨床神経学 2021</p> <p>② 認知症の発症に関する病態の解明と発症の予防 論文：Relationship between white matter lesions and regional cerebral blood flow changes during longitudinal follow up in Alzheimer's disease. Hanaoka T, Kimura N, Aso Y, Takemaru M, Kimura Y, Ishibashi M, Matsubara E. Geriatr Gerontol Int. 2016</p>

所属・職位	医学部附属臨床医工学センター・助教	
氏名	花田 克浩 (Hanada Katsuhiko)	
取得学位	博士 (理学)、東京大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	天然物化学、分子生物学
研究キーワード	遺伝子組換え、天然物化学、遺伝毒素、老化
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>遺伝毒素に関する研究を中心として活動をしている。我々の日常生活の中には、遺伝子にストレスを与える毒素が多く存在する。それらの毒素に対して、遺伝子を守る生体防御の仕組みを解明する研究をしている。生物の中には、生態系での生存競争で勝ち残るために遺伝毒素を積極的に生産し、活用しているものが存在する。そのような生物が生産する遺伝毒素の役割について解明したい。一方、視点を変えてこのような遺伝毒素のことを考察すると、特定の種類の生物を選択的に殺傷できる成分は、医薬品、農薬などに活用できる潜在的能力を有していると考えられる。我々は、遺伝子を環境から守る仕組みを理解することを目標に、我々が住む環境に存在する遺伝毒素の種類、作用に関する理解を深めると同時に、それを活用する技術開発研究を進めていきたいと考えている。 Inoue N, Terabayashi T, Takiguchi-Kawashima Y, Fujinami D, Matsuoka S, Kawano M, Tanaka K, Tsumura H, Ishizaki T, Narahara H, Kohda D, Nishida Y, <b>Hanada K</b>. The benzylisoquinoline alkaloids, berberine and coptisine, act against camptothecin-resistant topoisomerase I mutants. <b>Sci Rep</b>. 2021 Apr 8; 11(1): 7718.</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院




理工学部

福祉健康科学部



その他学内施設等

## 医学部



所属・職位	医学部医学科精神神経医学講座・助教	
氏名	平川 博文 (Hirakawa Hirofumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年3月	
SDGs目標		
研究分野	精神医学	
研究キーワード	環境光、高照度光療法、光調整療法、脳画像研究	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・光を応用した研究</p> <p>光の持つ抗うつ効果を、人工光を用いて活用する治療法として光線療法がある。現在、私は光と神経新生に着目して研究を行っている。健常成人に対して、1ヶ月間の高照度光照射を行ったところ、左海馬歯状回の体積が増加しており、同部位で神経新生が生じた可能性を示唆する所見を得た (Hirakawa et al., J Psychiatr Res, 2021)。</p> <p>また、<sup>18</sup>F-FDG PETを用いて環境光と脳機能の関連を精査した研究では、左小脳虫部の糖代謝と環境光が有意な負の相関を示した (Hirakawa et al., BMC Neurosci, 2018)。環境光により、気分抑制的に働く小脳虫部の機能を抑えて抑うつに傾くことを予防している可能性が示唆された。  <a href="https://www.oita-u-psy.jp/research/03.html">https://www.oita-u-psy.jp/research/03.html</a></p>	


所属・職位	医学部医学科小児科学講座・助教	
氏名	平野 直樹 (Hirano Naoki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	小児科学	
研究キーワード	小児血液腫瘍、QOL	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●小児がん長期生存者のQOL向上を目指した医療・教育・福祉の連携体制の確立に関する研究</p> <p>本研究は当院で治療を行い5年以上経過した、調査時年齢16歳以上の小児がん経験者50名を対象とした。患者背景と支援体制に関するアンケート表とQOL評価尺度を用いて、小児がん経験者のQOL関連因子の抽出を行った。小児がん経験者のQOL改善には、教育・行政機関での身体的状況に配慮した支援や、長期フォローアップでの年齢に応じた精神面への支援の強化の有効性が示された。(第61回日本小児血液・がん学会、2019年11月14日に報告した。)</p> <p>科学研究費助成事業 若手研究(B)課題番号17K13248 (2017~2019年度)</p>	





所属・職位	医学部医学科脳神経外科学講座・助教	
氏名	札幌 博貴 (Fudaba Hirofumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2017年6月	
SDGs目標		

研究分野	脳腫瘍学
研究キーワード	腫瘍微小環境、ウイルス療法、画像診断、アドバンスケアプランニング
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●腫瘍微小環境、ウイルス療法に関する研究 中枢神経系原発悪性リンパ腫において、腫瘍辺縁に介在するマクロファージのSiglec-15発現が予後良好因子となることを見出した(Sci Rep 2021)。また、腫瘍溶解性単純ヘルペスウイルスを用い、悪性髄膜腫に対する有効性を検証している。</p> <p>●画像診断に関する研究 MRIによる新たな画像診断法(PASL)により、神経膠腫の分類や予後が術前予測できることを見出した(AJNR 2014, World Neurosurg 2021)。</p> <p>●アドバンスケアプランニングに関する研究 悪性脳腫瘍患者に対し、急性期病院におけるアドバンスケアプランニングの導入を行い、患者および家族のQOL改善に影響するか検証している。</p> <p>* 関連リンク <a href="https://researchmap.jp/hirotakafudaba">https://researchmap.jp/hirotakafudaba</a></p>




所属・職位	医学部医学科公衆衛生・疫学講座・助教	
氏名	船越 弥生 (Funakoshi Yayoi)	
取得学位	博士 (医学)、熊本大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	公衆衛生学、疫学
研究キーワード	栄養疫学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●骨密度を規定する生活習慣要因に関する疫学研究 栄養疫学を専門にしています。私のこれまでの研究成果では、生活習慣病は遺伝要因と環境要因の相互作用により発症することが明らかになっています。Relation of bone mineral density to vitamin D receptor gene polymorphism and lifestyle factors in Japanese female workers aged 22-44 years: a cross-sectional study.) 遺伝要因を変えることは出来ませんが、環境要因である食事、運動、休養、飲酒、喫煙などの行動を変容させるための方法について提供することが出来ます。</p> <p>疫学(Epidemiology)とは？</p>  <p>※関連リンク： <a href="https://jglobal.jst.go.jp/detail?JGLOBAL_ID=202101007178540260">https://jglobal.jst.go.jp/detail?JGLOBAL_ID=202101007178540260</a></p>

## 医学部

所属・職位	医学部医学科整形外科学講座・助教	
氏名	細山 嗣晃 (Hosoyama Tsuguaki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	股関節学
研究キーワード	変形性股関節症、脚長差
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>人工股関節全置換術前後における脚長差の影響とその因子</li> <li>3Dテンプレートをを用いた術前計画におけるステムアライメントの検討</li> <li>変形性股関節症診療ガイドライン策定委員会メンバー論文 <ul style="list-style-type: none"> <li>骨軟部腫瘍に対するGemcitabine+Docetaxel併用療法の効果 Orthopedics &amp; Traumatology 64 (1), 176-181, 2015</li> <li>Contemporaneous Insufficiency Fractures of Bilateral Femoral Necks in an Older Patient Taking Bisphosphonate: A Case Report and Literature Review Hiroaki Tagomori, Nobuhiro Kaku, Shota Sato, <u>Tsuguaki Hosoyama</u>, Hiroshi Tsumura Case Rep Orthop. 2022; 9294289. Published online 2022 Apr 29.</li> <li>Microvascular system of hip joint constituents with special reference to ultrastructural findings and early arteriosclerosis Nobuhiro Kaku, Tatsuo Shimada, <u>Tsuguaki Hosoyama</u> &amp; Hiroshi Tsumura <i>Medical Molecular Morphology</i> volume 55, pages 158-165 (2022)</li> </ul> </li> </ul>



所属・職位	医学部医学科おおい地域医療支援システム構築事業講座・助教	
氏名	松田 史佳 (Matsuda Fumika)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	小児内分泌学
研究キーワード	小児1型糖尿病、発達障がい、トランジション
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●発達障がいに合併した小児1型糖尿病児の自立支援プログラムの開発 本研究では、発達障がいを有する1型糖尿病患児の特性について、アンケート調査と直接の聴き取りをもとに自己管理上の問題点を明らかにし、その上で患者と家族への新しい支援プログラムを確立することを目的としている。 科学研究費助成事業 若手研究(B)課題番号19K19677(2019~2023年度)</li> <li>●大分県内の過去22年間の小児期発症の1型糖尿病の発症率 本研究では、小児慢性特定疾病のデータおよび大分県内の医療施設と協力し、得られたデータを用いて、大分県内の小児期発症した1型糖尿病の発症数・発症率の調査を行った。結果を第54回日本小児内分泌学会学術集会、第95回日本内分泌学会学術総会で発表した。</li> <li>●小児インスリン治療研究会(第5コホート) 小児期発症1型糖尿病の治療・予後改善のための多施設共同研究に、大分大学医学部附属病院のメンバーとして参加している。</li> </ul>

所属・職位	医学部医学科環境・予防医学講座・助教	
氏名	松本 昂 (Matsumoto Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	感染症
研究キーワード	ゲノム解析、ヘリコバクター・ピロリ感染症、国際協力
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>アジア・アフリカ地域において現地政府および医療機関と連携し、公衆衛生上の課題となる感染症の制圧を目指す。次世代シーケンス技術によるヘリコバクター・ピロリのゲノム解析に取り組み、学部生、大学院生や海外若手研究者の育成に貢献する。AMEDとJICAが実施する地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) では、ブータン保健省王立疾病管理センターにおけるゲノム解析基盤および迅速検査キット製造のキャパシティ・ディベロップメントと社会実装を目標とする。</p> <p>【業績リンク】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ research map: <a href="https://researchmap.jp/oita-u%5Ematsumoto">https://researchmap.jp/oita-u%5Ematsumoto</a></li> <li>・ research-er.jp: <a href="https://research-er.jp/researchers/view/589799">https://research-er.jp/researchers/view/589799</a></li> </ul> <p>【講座ホームページ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="https://oitadepm.com/">https://oitadepm.com/</a></li> </ul>



所属・職位	医学部医学科呼吸器・感染症内科学講座・助教	
氏名	松本 紘幸 (Matsumoto Hiroyuki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	呼吸器内科
研究キーワード	呼吸器感染症、抗酸菌感染症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●活動性肺結核患者における胸部単純X線所見陰性例の割合と特徴に関する研究</p> <p>活動性肺結核における胸部単純X線所見陰性例の割合を調査し、その症例の特徴や背景について検討した (Matsumoto et al. Infect Dis. 2020;52(7):520-523)。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院

理工学部

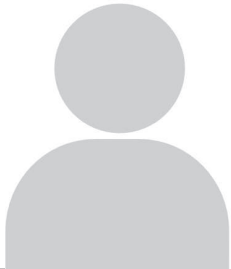

福祉健康科学部

その他学内施設等



## 医学部

所属・職位	医学部医学科呼吸器・感染症内科学講座・助教	
氏名	水上 絵理 (Mizukami Eri)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	呼吸器内科一般・慢性閉塞性肺疾患
研究キーワード	慢性閉塞性肺疾患、間質性肺炎
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>「慢性閉塞性肺疾患における胸部単純X線所見と重症度に関する検討」</p> <p>胸部単純X線検査所見とスパイロメトリーにおける呼吸機能検査結果の相関性を検討し、新たなCOPDの評価方法を模索することを目的とした検討を行っている。この結果により、健康診断やプライマリ・ケアの段階でCOPDを発見およびコントロールできる一助となりうることを期待できる。</p> <p>「6分間歩行試験と間質性肺炎の自覚症状の関係性の検討」</p> <p>超高齢化社会を迎え、90歳以上の間質性肺炎の患者数が増加傾向にある。高齢者のADLはもともと低下しており、呼吸困難の自覚症状と実際の呼吸状態が乖離していることも多い。高齢者の間質性肺炎の患者に積極的に6分間歩行試験を行い、解析を行うことにより実際の呼吸状態をより早くて正確に判断できる可能性が高い。</p>

所属・職位	医学部医学科法医学講座・助教	
氏名	村田 久美 (Murata Kumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標		

研究分野	法医学
研究キーワード	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>2022年1月から法医学に所属しました。</p> <p>これまでは臨床医として働いており、数回、学会に参加してcase reportの発表を行う程度でした。今後は本教室で死後のCTから死亡経過時間を推定できる方法や、死後に髄液中で増減する物質等を解析したりしたいと考えています。</p>

所属・職位	医学部医学科精神神経医学講座・助教	
氏名	室長 祐彰 (Muronaga Masaaki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2016年3月	
SDGs目標		

研究分野	精神医学
研究キーワード	気分障害、双極性障害、薬物療法
研究内容・研究業績・アピールポイント	気分障害における抗うつ薬や気分安定薬、非定型抗精神病薬の効果に関する後方視的研究 双極性障害や双極スペクトラムの再発予防の中心となる薬物療法の効果を検討しており、双極Ⅰ型障害、双極Ⅱ型障害、双極スペクトラムの長期経過と、それに及ぼすリチウム、バルプロ酸、カルバマゼピン、ラモトリギン、抗うつ薬、抗精神病薬、ベンゾジアゼピン系薬剤の影響を、後方視的に比較検討している。 <a href="https://www.oita-u-psy.jp/manage/wp-content/uploads/2021/05/optout1.pdf">https://www.oita-u-psy.jp/manage/wp-content/uploads/2021/05/optout1.pdf</a>

所属・職位	医学部医学科耳鼻咽喉科学講座・助教	
氏名	森山 宗仁 (Moriyama Munehito)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標		

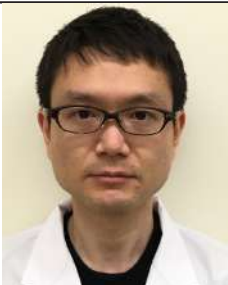


研究分野	免疫学
研究キーワード	TREM-1、TLR-4
研究内容・研究業績・アピールポイント	・鼻咽腔粘膜における好中球機能とTLR4およびTREM-1の協調的作用に関する研究 今までの検討から、インフルエンザ菌性急性鼻副鼻腔炎モデルにおいて、TLR4およびTREM-1の協調的作用が存在することが推測されたため、マウスモデルのさらなる追加データにて検証を行い、鼻腔内に遊走する好中球と鼻粘膜組織に存在する好中球を採取し、副鼻腔炎症動態の変化をTLR4およびTREM-1との関連について組織学的、細胞生物学的、分子細胞学的手法を用いて解析を行っている。 (論文: Moriyama M, Hirano T, Kawano T, Kadowaki Y, Kodama S, Suzuki M.: Triggering receptor expressed on myeloid cells (TREM-1) expression on polymorphonuclear cells enhanced the bacterial clearance from the nasopharynx in synergy with TLR4. International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology 112, 27-33 2018)



# 医学部

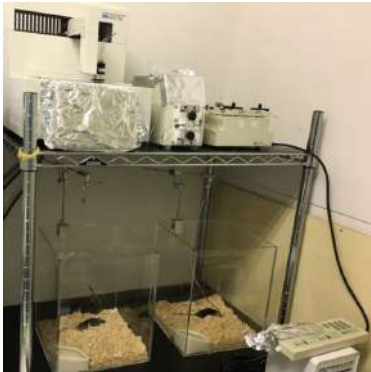
所属・職位	医学部医学科眼科学講座・助教	
氏名	八塚 洋之 (Yatsuka Hiroyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年3月	
SDGs目標	 	



研究分野	眼科学、細胞生物学
研究キーワード	ゼブラフィッシュ、CRISPR-Cas9、網膜変性
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●RNA代謝異常による遺伝性網膜変性症の疾患モデル作製と発症機序の解明</p> <p>RNAエキソソームは、様々なRNAを分解・修飾する多タンパク質複合体であり、RNAの品質管理に重要な役割を担っている。このRNAエキソソームを構成する分子の遺伝子変異は、網膜変性を含む神経変性疾患の原因となることが報告されているが、その病態機構については未だ不明な点が多い。本研究はRNAエキソソームに関連した疾患動物モデルを作製し、その解析を通して病態機構を解明することを目的とする。RNAエキソソームは生体の維持に不可欠であり、遺伝子改変マウスモデルでは胎生致死のため、解析が困難になることが懸念される。そこで、本研究では、疾患動物モデルとして、体外発生で胚が透明であり、発生早期から網膜を含めた神経発生が観察しやすく、電気生理、視覚機能等に関しての研究に多くの利点を備えたゼブラフィッシュモデルを使用する。ヒトで遺伝子変異が報告されているRNAエキソソーム構成分子のEXOSC2、EXOSC3、EXOSC8についての遺伝子改変ゼブラフィッシュをゲノム編集技術にて作製し、形態学的、生化学的、生理学的解析を行う。これらの解析を通して、網膜変性発生の原因の一端を明らかにし、また関連する神経変性疾患も含め、新たな診断法、治療法の解明につながる研究を進める</p> <p>※関連リンク：  <a href="https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/33333712/#:~:text=Exosc2%20deficiency%20leads%20to%20developmental%20disorders%20by%20causing,17%3B533%20%284%29%3A1470-1476.%20doi%3A%2010.1016%2Fj.bbrc.2020.10.044.%20Epub%202020%20Oct%2024.">https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/33333712/#:~:text=Exosc2%20deficiency%20leads%20to%20developmental%20disorders%20by%20causing,17%3B533%20%284%29%3A1470-1476.%20doi%3A%2010.1016%2Fj.bbrc.2020.10.044.%20Epub%202020%20Oct%2024.</a> </p>

所属・職位	医学部医学科産科婦人科学講座・助教	
氏名	矢野 光剛 (Yano Mitsutake)	
取得学位	博士 (医学)、埼玉医科大学、2019年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	婦人科病理学
研究キーワード	卵巣がん、子宮体がん、ヒストン脱アセチル化酵素、バイオマーカー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>婦人科がんの病理学的解析を介して、治療標的分子やバイオマーカーの同定を試みています。特に埼玉医科大学国際医療センター病理診断科での職務経験を活かして、同施設との共同研究を活発に行っております。卵巣がんにおいてはヒストン脱アセチル化酵素の治療標的としての意義 (論文1, 2)、子宮体がんにおいてはTP53やホルモン受容体の発現が患者予後に与える影響を発表しました (論文3, 4)。また多施設共同研究によって悪性黒色腫など婦人科稀少がんの病態解明にも取り組んでいます (論文5)。いずれのテーマも形態学的な差異/組織型に着目して研究しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Yano M et al. Sci Rep. 2019;9(1):2397.</li> <li>2. Yano M et al. Anticancer Res. 2021;41(3):1647-1654.</li> <li>3. Yano M et al. Mod Pathol. 2019;32(7):1023-1031.</li> <li>4. Yano M et al. Diagn Pathol. 2019;14(1):54.</li> <li>5. Yano M et al. Melanoma Res. (in press)</li> </ol>

所属・職位	医学部医学科神経内科学講座・助教	
氏名	藪内 健一 (Yabuuchi Kenichi)	
取得学位	修士 (薬学)、九州大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	神経内科学, 認知症
研究キーワード	アルツハイマー型認知症, Aβオリゴマー, 抗体療法
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●アルツハイマー型認知症に対する抗体療法の開発についての研究</p> <p>アルツハイマー型認知症は, 認知症の原因の半分以上を占めますが, いまだに根治する治療がないため, 21世紀の医療や介護, 人的資源や経済に対して大きな負担になっています. この病気の発症には, どうやらAβオリゴマーという分子が関わっていることがわかってきておりますが, 我々の研究グループはそのオリゴマーに対する特異的抗体を作り出すことに成功しており, 現在その医療への応用に向けて研究を進めています.</p> <p>※ 関連リンク<a href="https://jglobal.jst.go.jp/detail?JGLOBAL_ID=201801013277423440">https://jglobal.jst.go.jp/detail?JGLOBAL_ID=201801013277423440</a></p>
	

所属・職位	医学部附属地域医療学センター・助教	
氏名	吉村 亮彦 (Yoshimura Katsuhiko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標		

研究分野	内科学一般
研究キーワード	内科学一般、地域医療
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不定愁訴患者におけるコルチゾール値、炎症性サイトカイン値の解析</li> <li>・過疎地における医療満足度を高める要素の探求</li> <li>・無菌性髄膜炎に尿閉を合併したMenigitis retention syndromeの一例</li> <li>・発熱、意識障害を主訴に来院し、中枢性副腎不全の診断に至った一例</li> <li>・黄色爪症候群の1例</li> </ul>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等





# 医学部附属医院




---

所属・職位	医学部附属病院薬剤部・教授	
氏名	伊東 弘樹 (Itoh Hiroki)	
取得学位	博士(薬学)、熊本大学、2004年1月	
SDGs目標		



研究分野	医療薬学、臨床薬理学
研究キーワード	生理活性ペプチド、バイオマーカー、MR-proADM、AcSDKP、抗菌薬適正使用
研究内容	<p>1. MR-proADM濃度と腎不全時の降圧治療抵抗性および脂質異常症との関連性に関する研究          酵素免疫測定法および質量分析法を用いた血漿中MR-proADMの高感度測定法を開発し、慢性腎不全患者の血漿中MR-proADM濃度は健常人と比較して有意に高いことを示した。また、その濃度は生体腎移植後に急激に低下することを明らかとした。慢性腎不全患者において、降圧治療抵抗性と血漿中MR-proADM濃度の間に有意な正の相関が認められることを示し、MR-proADM濃度と脂質異常症との関連性を明らかとした。さらに、健常人における検討において、MR-proADM濃度は血管不全を反映する鋭敏なバイオマーカーであることを示した。</p> <p>2. N-acetyl-seryl-aspartyl-lysyl-proline (AcSDKP) 濃度と腎性貧血との関連性に関する研究          酵素免疫測定法による血漿中AcSDKPの高感度測定法を開発し、慢性腎不全患者の血漿中AcSDKP濃度は健常人と比較して有意に高いことを示した。また、その濃度は生体腎移植後に急激に低下することを明らかとした。さらに、慢性腎不全患者において、腎性貧血の合併の有無で、血漿中AcSDKP濃度に有意な違いが認められることを明らかとした。</p> <p>3. 抗感染症薬の適正使用（薬物動態および治療薬物モニタリング）に関する研究          発熱性好中球減少時におけるバンコマイシンおよびテイコプラニンの至適血中濃度を明らかとした。ポリコナゾールはCYP2C19遺伝子多型に基づく減量により、有効血中濃度到達率が高いこと、高濃度の持続時間が高いと肝障害の発症頻度が高いことを明らかとした。イトラコナゾールは活性代謝物の遊離型分率の方が低く、有効性と関連している可能性および未変化体の遊離型濃度が有害事象と関連している可能性を示した。ドリペネムおよびポリコナゾールの特殊病態下における薬物動態特性を明らかとした。さらに、多くの広域抗菌薬の高感度同時定量法を開発し、治療薬物モニタリングに応用可能であることを確認した。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>Koyama T, Kuriyama N, Suzuki Y, Saito S, Tanaka R, Iwao M, Tanaka M, Itoh H, et al. Sci Rep, 11, 305, 2021.</li> <li>Iwao M, Suzuki Y, Tanaka R, Koyama T, Ozaki E, Nakata T, Aoki K, Fukuda A, Sato Y, Kuriyama N, Fukunaga N, Sato F, Katagiri F, Ohno K, Shibata H, Mimata H, Itoh H. J Pharm Biomed Anal, 183, 113168, 2020.</li> <li>Suzuki Y, Katagiri F, Sato F, Fujioka T, Tanaka R, Sato Y, Mimata H, Itoh H. Clin Chim Acta, 453, 160-163, 2015.</li> <li>Suzuki Y, Itoh H, et al. Peptides, 48, 45-48, 2013.</li> <li>Suzuki Y, Itoh H, et al. Peptides, 43, 102-104, 2013.</li> <li>Suzuki Y, Itoh H, et al. J Pept Sci, 19, 59-63, 2013.</li> <li>Suzuki Y, Katagiri F, Sato F, Fujioka K, Sato Y, Fujioka T, Sato Y, Mimata H, Itoh H. Clin Lab., 62, 1323-1328, 2016.</li> <li>Suzuki Y, Katagiri F, Sato F, Fujioka K, Sato Y, Fujioka T, Sato Y, Mimata H, Itoh H. Biol Pharm Bull, 37, 1075-1079, 2014.</li> <li>Suzuki Y, Itoh H, et al. J Pept Sci, 18, 276-281, 2012.</li> </ol>



所属・職位	医学部附属病院医療情報部・教授	
氏名	下村 剛 (Shimomura Tsuyoshi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年6月	
SDGs目標		
研究分野	医療情報、救急領域のICT、MRI、災害医療	
研究キーワード	医療情報ネットワーク、遠隔画像伝送システム、fMRI、MRS、災害医療	
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 医療情報ネットワーク：「うすき石仏ねっと」と総務省の提唱するクラウド型高度化EHR事業に参画し成果を上げている。また、このシステムを発展させて、おおいた医療ネットワークを現在構築中である。(論文1)</li> <li>● 救急領域のICT：平成26年に大分県遠隔画像伝送システムを立ち上げ、平成29年には12誘導心電図伝送システム追加した。不必要な搬送の回避やDoor-to-balloon timeの短縮などの成果を上げている。令和3～4年にかけてシステム更新を行い、大分県下全消防本部とほぼすべての救急病院が参加する全国に例のないクラウド統合型救急支援システムを完成させる。(論文2) また、医療関係者間コミュニケーションアプリJoinを県下に導入して運営協議会を立ち上げ運営して、不必要な転院搬送の回避などで成果を上げている。</li> <li>● MRIを用いた研究：MRIを用いたfMRI、MRS、GABA、DTI等の手法を用いた解析を行う技術を習得している。これらの解析方法を駆使して脳神経外科、精神科領域において様々な成果を上げている。令和3年よりヘルスケアAIデータサイエンス講座教授も兼務しており、AIを用いたデータ解析へと発展させていく。(論文3、4)</li> <li>● 災害医療：大分大学災害対応研修の開催、BCP・BCMの策定を行っている。DMAT、医療救護班、災害医療コーディネーターとして、実災害で活動している。</li> </ul> <p>様々な領域におけるICTの統合：医療情報、救急領域、MRI、災害医療等の幅広い領域で中心的役割を担っておりそこで得られた知見を基にICTの統合を目指している</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 平成30年、ID-Linkを利用したクラウド型高度化EHR事業と大分大学医学部附属病院との連携について. 第38回医療情報学連合大会プログラム・抄録集 307</li> <li>2. 令和元年、遠隔画像伝送システムへのクラウド心電図機能の統合—地域中核病院参画による遠隔地への不要な搬送の回避—. 日本臨床救急医学会雑誌 2019年 22巻 5号 p. 671-679</li> <li>3. 令和3年、Perfusion Parameter Obtained on 3-Tesla Magnetic Resonance Imaging and the Ki-67 Labeling Index Predict the Overall Survival of Glioblastoma. World Neurosurg. 2021 May;149:e469-e480.</li> <li>4. 平成20年、Functional brain mapping during recitation of Buddhist scriptures and repetition of the Namu Amida Butsu: a study in experienced Japanese monks. Turk Neurosurg. 2008 Apr;18(2):134-41.</li> </ol>	

所属・職位	医学部附属病院長・教授	
氏名	三股 浩光 (Mimata Hiromitsu)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1988年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	泌尿器科学
研究キーワード	排尿機能、低侵襲手術、前立腺癌
研究内容	<p>1 外尿道括約筋再生による尿失禁治療法の開発          外尿道括約筋は尿失禁を防止する横紋筋であるが、加齢に伴って減少し、高齢者の尿失禁の原因の一つと考えられている。我々はヒト外尿道括約筋幹細胞を分離培養し、不死化細胞株を樹立して、各種サイトカインのシグナル伝達機構を明らかにしてきた。増殖因子のHGFとIGF-IIはそれぞれMAPK経路とPI3-K経路を活性化して増殖と分化を促進し、Myostatinはsmad-2をリン酸化して増殖を阻害すること、またTNF-<math>\alpha</math>はcaspase3を活性化してアポトーシスを誘導することを明らかにした。</p> <p>2 低酸素環境における前立腺癌細胞のアンドロゲン非依存性獲得機序の解明          アンドロゲン除去にて前立腺癌細胞はアポトーシスを誘導して細胞死に陥るが、同時に前立腺組織では微小血管が減少して、組織内低酸素状態となる。われわれは長期低酸素状態が、ヒト前立腺癌細胞のアンドロゲン非依存性や増殖能・浸潤能を亢進することを見出し、その機序としてvav3やangiopoietin-like protein-2、ephrin-B1が関与することを明らかにした。</p> <p>3 泌尿器科領域の低侵襲手術の開発          本邦で初めて単孔式ドナー腎採取術を施行し、泌尿器科領域における単孔式腹腔鏡手術やReduced Port Surgeryの新規術式を開発してきた。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>① <u>Growth mechanism of satellite cells in human urethral rhabdosphincter.</u>  <b>Sumino Y</b>, et al. Neurourol Urodyn. 2007;26(4):552-561.</p> <p>② <u>Growth inhibition and apoptosis induction by tumor necrosis factor-<math>\alpha</math> in human urethral rhabdosphincter satellite cells.</u> Hanada M, <b>et al.</b> J Urol. 2010 Jun;183(6):2445-50.</p> <p>③ <u>Regenerative medicine as a new therapeutic strategy for lower urinary tract dysfunction.</u>  <b>Sumino Y, Mimata H.</b> Int J Urol. 2013 Jul;20(7):670-5.</p> <p>④ <u>Chronic hypoxia induces androgen-independent and invasive behavior in LNCaP human <b>prostate cancer</b> cells.</u> Yamasaki M, et al. Urol Oncol. 2013 Oct;31(7):1124-31.</p> <p>⑤ <u>Chronic hypoxia-induced slug promotes invasive behavior of <b>prostate cancer</b> cells by activating expression of ephrin-B1.</u> Iwasaki K, et al. Cancer Sci. 2018 Oct;109(10):3159-3170.</p> <p>⑥ <u>Angiopoietin-like protein 2 induces androgen-independent and malignant behavior in human <b>prostate cancer</b> cells.</u> Sato R, et al. Oncol Rep. 2015 Jan;33(1):58-66.</p> <p>⑦ <u>Laparoendoscopic single-site surgeries: A multicenter experience of 469 cases in Japan.</u>          Sato F, et al. Int J Urol. 2017 Jan;24(1):69-74.</p> <p>⑧ <u>Patient-reported postoperative pain, body image, and cosmetic satisfaction after transumbilical laparoendoscopic single-site adrenalectomy.</u>          Nomura T, et al. Asian J Endosc Surg. 2017;10(3):289-294.</p> <p>⑨ <u>Laparoscopic ileal ureteral replacement to preserve the natural anti-reflux system: An initial case report.</u> Shinohara M, et al. IJU Case Rep. 2021;4(3):132-135.</p> <p>⑩ <u>"Early-pull-out" technique for intracorporeal ileal conduit urinary diversion after robot-assisted radical cystectomy.</u> Shin T, Mimata H. Int J Urol. 2021 Jul;28(7):778-779.</p>

所属・職位	医学部附属病院医療情報部・准教授	
氏名	安徳 恭彰 (Antoku Yasuaki)	
取得学位	博士 (芸術工学)、九州大学、2013年3月	
SDGs目標	   	
研究分野	医療情報、遠隔医療、学習支援	
研究キーワード	遠隔診断治療システム、医療情報、学習管理システム	
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 遠隔医療：テレビ会議システムを利用した遠隔医療教育への応用への研究 遠隔診療の普及に向けた、カメラによる画像認識や映像評価に関する研究。医療機器をネットワーク接続するのは患者の負担になるため、カメラに映った医療機器のデータを画像解析で自動的に読み込むことで患者負担を軽減するための研究（論文1）</li> <li>● 医療情報：臨床データ収集におけるシステム開発 臨床データにおけるデータ収集システムの構築をおこない、データ収集の効率化、および収集データの精度向上を行っている（論文2）</li> <li>● 遠隔医療教育における人材育成 国内外における国際遠隔医療教育における技術者育成事業。技術者のスキルレベル向上のための教科書作成、および研修プログラムの構築、その評価基準の作成など。国を超えた遠隔医療エンジニアの育成に係る技術的研究。（発表1）（著書1、2）</li> <li>● 学生のキャンパス内でのPC環境改善に係る研究 学内で運用している貸し出しノートパソコンのシステム改修による効果検証。システム構築による24時間無人運用。無人による無断利用、期限無視などの問題をシステム改修により改善。（発表2）</li> <li>● 院内における各種データに関する調査・解析 IRセンターにおいて、学生の成績データをもとに学生の学習効率の調査・解析を行なっている。入学時の成績が卒業時の成績にどの程度影響しているかなど教育効果の検証にもつながっている。</li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 令和3年、遠隔医療における医療機器の画像認識に関する研究, 第41回医療情報学連合大会論文集, p 878-879, 2021</li> <li>2. 令和3年、Predictive factors of non-treatment and non-persistence to osteoporosis medication after fragility hip fractures at 3 years after discharge:a multicentre,prospective cohort study in the northern kyushu district of Japan, Archives of Osteoporosis(2021)16:132</li> </ol> <p>発表</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 令和3年、Developing Evaluation Criteria for Engineering Training Programs in Remote Medical Education in Asia、IEEE TALE 2021, 2021.12.</li> <li>2. 令和2年、ノートパソコンの無人貸出返却システムの改修、AXIES2020年次大会</li> </ol> <p>著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 令和2年、新版医療情報第6版 医療情報システム編、2章3節「遠隔医療システム」p.52-58</li> <li>2. 平成28年、遠隔医療カンファレンス 技術担当者になったら読む本～入門編～、編集</li> </ol>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院





理工学部

福祉健康科学部


その他学内施設等

所属・職位	医学部附属病院手術部・准教授	
氏名	新宮 千尋 (Shingu Chihiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2010年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	周術期医学
研究キーワード	スピンメタボロミクス、周術期管理、医療経済
研究内容	<p>本研究は、NMRメタボロミクスとESRメタボロミクス（スピンメタボロミクス）により、周術期の合併症を予測、また発生時の病態の把握を行うための技術を確立することを目的としている。</p> <p>国家予算やGDPに対する医療費の割合の増加は年々増すばかりで、今後の加速する高齢化社会を考慮すると、逼迫した問題である。また、本国も米国並みの訴訟社会へと変貌してきており、手術の結果が少しでも患者や患者家族の意図にそぐわないものであると、医師が訴訟に巻き込まれる危険性も年々増加してきており、そのためにも手術前の患者の術前検査を簡単に省略できない状況にある。以上の状況より、NMRメタボロミクスとESRメタボロミクスを組み合わせたスピンメタボロミクスの測定系を確立することにより、周術期合併症をきたした患者と、経過に問題のなかった患者から採取した検体との比較・検討を経時的に行うことで、手術侵襲に伴う代謝物やフリーラジカルの変化を、網羅的に解析し、明らかにすることにより、周術期合併症の予測の基盤を築き、人的や財政的な医療資源の節約に貢献することを目的としている。</p> <p>現在のところ、健常人の血液と尿のサンプルの分析は、順調に進み、スピンメタボロミクスの正常パターンの傾向は概ね把握することに成功したため、合併症を有する術前患者における血液と尿のサンプルの採取に取りかかっている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>基盤研究 (C) (研究課題/領域番号: 20K09200、2020-2022) 研究代表者 周術期合併症に関する予測因子の基礎的検討-スピンメタボロミクスの臨床</p> <p>基盤研究 (C) (研究課題/領域番号: 15K10539、2015-2017) 研究代表者 スピンメタボロミクスに関する基礎的検討および臨床応用</p> <p>基盤研究 (C) (研究課題/領域番号: 20591808、2008-2010) 研究代表者 脳低体温療法施行時の患者重症度に関する研究-電子スピン共鳴法を用いた検討</p>



所属・職位	医学部附属病院リハビリテーション部・准教授																	
氏名	田仲 和宏 (Tanaka Kazuhiro)																	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、1995年3月																	
SDGs目標	  																	
研究分野	骨軟部腫瘍学、整形外科学																	
研究キーワード	骨軟部腫瘍・肉腫、臨床試験、融合遺伝子、染色体転座、分子標的治療																	
研究内容	<p><b>臨床的研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本医療研究開発機構 (AMED) 革新的がん医療実用化研究事業 進行軟部肉腫に対する二次治療における標準治療の開発のための研究：研究代表者</li> <li>● Japan Clinical Oncology Group (JCOG)：骨軟部腫瘍グループ事務局</li> <li>● 高悪性度非円形細胞肉腫に対する補助化学療法のランダム化第III相試験 (JCOG2102)：研究代表者</li> <li>● 進行軟部肉腫に対する二次治療のランダム化第II相試験 (JCOG1802)：研究代表者</li> <li>● 高悪性度非円形細胞肉腫に対する補助化学療法のランダム化第II/III相試験 (JCOG1306)：研究事務局</li> <li>● 高悪性度非円形細胞軟部肉腫に対する術前術後補助化学療法の第II相試験 (JCOG0304)：研究事務局</li> </ul> <p><b>基礎的研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本学術振興会 (JSPS) 基盤研究(C) ゲノム編集によるsyngeneic系を用いた(肉腫型)転座発がんのメカニズム解明：研究代表者</li> <li>● 日本学術振興会 (JSPS) 基盤研究(B) 多層的遺伝子解析を用いた高悪性度軟部肉腫に対する個別化医療の開発：分担研究者</li> </ul>																	
研究業績・アピールポイント	<p><b>研究業績</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>Tanaka K</b>, Machida R, Kawai A, et al. Perioperative Adriamycin plus ifosfamide versus gemcitabine plus docetaxel for high-risk soft tissue sarcomas: Randomised, phase II/III study-JCOG1306. <i>Br J Cancer</i>, in press, 2022.</li> <li>2. <b>Tanaka K</b>, Kawano M, Iwasaki T, et al. Surrogate endpoints for overall survival in randomized controlled trials of localized osteosarcoma: A meta-analytic evaluation. <i>Sci Rep</i> 10:8573, doi:10.1038/s41598-020-65591-z. 2020.</li> <li>3. <b>Tanaka K</b>, Kawano M, Iwasaki T, et al. A meta-analytic evaluation of the correlation between event-free survival and overall survival in randomized controlled trials of newly diagnosed Ewing sarcoma. <i>BMC Cancer</i> 20:379, doi:10.1186/s12885-020-06871-9. 2020.</li> <li>4. <b>Tanaka K</b>, Mizusawa J, Naka N, et al. Ten-year follow-up results of perioperative chemotherapy with doxorubicin and ifosfamide for high-risk soft tissue sarcomas in the extremities: Japan Clinical Oncology Group study JCOG0304. <i>BMC Cancer</i> 19:890, doi:10.1186/s12885-019-6114-2. 2019.</li> <li>5. <b>Tanaka K</b>, Kawano M, Iwasaki T, et al. A meta-analysis of randomized controlled trials that compare standard doxorubicin with other first-line chemotherapies for advanced/metastatic soft tissue sarcomas. <i>PLoS One</i> 14:e0210671, doi:10.1371/journal.pone.0210671. 2019.</li> <li>6. <b>Tanaka K</b>, Kawano M, Iwasaki T, et al. Surrogacy of intermediate endpoints for overall survival in randomized controlled trials of first-line treatment for advanced soft tissue sarcomas in the pre- and postpazopanib era: A meta-analytic evaluation. <i>BMC Cancer</i> 19:56, doi:10.1186/s12885-019-5268-2. 2019.</li> </ol> <p><b>受賞歴</b></p> <table border="0"> <tr> <td>平成8年7月</td> <td>文部省在外研究員 (米国National Institutes of Health留学)</td> </tr> <tr> <td>平成10年4月</td> <td>日本整形外科学会 学会奨励賞</td> </tr> <tr> <td>平成11年2月</td> <td>米国整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award</td> </tr> <tr> <td>平成12年4月</td> <td>整形災害外科学研究助成財団 ジンマージャパン奨励賞</td> </tr> <tr> <td>平成13年6月</td> <td>日米加欧整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award</td> </tr> <tr> <td>平成13年6月</td> <td>日本がん分子標的治療学会 奨励賞</td> </tr> <tr> <td>平成28年10月</td> <td>Japanese Journal of Clinical Oncology誌 Paper of the Year</td> </tr> <tr> <td>令和2年1月</td> <td>第6回運動器疾患論文学術賞 最優秀賞</td> </tr> </table>		平成8年7月	文部省在外研究員 (米国National Institutes of Health留学)	平成10年4月	日本整形外科学会 学会奨励賞	平成11年2月	米国整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award	平成12年4月	整形災害外科学研究助成財団 ジンマージャパン奨励賞	平成13年6月	日米加欧整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award	平成13年6月	日本がん分子標的治療学会 奨励賞	平成28年10月	Japanese Journal of Clinical Oncology誌 Paper of the Year	令和2年1月	第6回運動器疾患論文学術賞 最優秀賞
平成8年7月	文部省在外研究員 (米国National Institutes of Health留学)																	
平成10年4月	日本整形外科学会 学会奨励賞																	
平成11年2月	米国整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award																	
平成12年4月	整形災害外科学研究助成財団 ジンマージャパン奨励賞																	
平成13年6月	日米加欧整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award																	
平成13年6月	日本がん分子標的治療学会 奨励賞																	
平成28年10月	Japanese Journal of Clinical Oncology誌 Paper of the Year																	
令和2年1月	第6回運動器疾患論文学術賞 最優秀賞																	






所属・職位	医学部附属病院薬剤部・准教授	
氏名	田中 遼大 (Tanaka Ryota)	
取得学位	博士 (薬学)、熊本大学、2014年3月	
SDGs目標		

研究分野	医療薬学、薬物動態学、臨床薬理学
研究キーワード	抗感染症薬、アルブミン、タンパク結合、薬物動態、特殊病態、ファーマコメトリクス
研究内容	<p>●特殊病態における広域抗菌薬のPharmacometrics解析</p> <p>集中治療部 (ICU) 入室患者ではカルバペネム抗菌薬の血中濃度の個体差が大きく、一般病棟患者と異なる体内動態を示すことを明らかとした (論文1)。持続的腎代替療法 (CRRT) 施行の有無を考慮した母集団薬物動態解析を実施した結果、CRRTによるクリアランスを考慮した用法用量の調節の必要性を明らかとした (論文2)。経管投与時のポリコナゾールの吸着特性および薬物動態特性を明らかとした (論文3)。小児患者におけるバンコマイシンの薬物動態解析を実施した結果、発熱性好中球減少症時にはクリアランスが大きくなることで血中濃度が低値を示すこと、またその現象が幼児期で顕著であることを示した (論文4)。</p> <p>●広域抗菌・抗真菌薬の高感度同時測定系の開発とPK/PD解析への応用</p> <p>カルバペネム系抗菌薬、抗MRSA薬、ニューキノロン系抗菌薬、アゾール系抗真菌薬等のハイスループットな高感度同時定量法を新規に開発し、ICU患者や血液悪性疾患患者におけるPK/PD解析やTDM研究への臨床応用が可能であることを示した (論文5-7)</p> <p>●抗感染症薬の有害事象に関連した医療薬学研究</p> <p>リネゾリドの代表的な有害事象である血小板減少症と低ナトリウム血症の関連性を検討し、両因子のリスク因子を同定した (論文8-9)。</p> <p>●タンパク結合型抗微生物薬の遊離型分率変動要因解明とTDMへの応用</p> <p>イトラコナゾール及び活性代謝物の総・遊離型濃度の高感度同時定量法を確立し、生体内では活性代謝物の方が有効性に寄与している可能性を見出した (論文10, 11)。また、ダプトマイシンの総・遊離型濃度の同時定量法を確立し、腎不全時におけるタンパク結合率の変動要因を解明している (論文12, 13)</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Tanaka R, et al. Biol Pharm Bull. 2017;40(8):1226-1231.</li> <li>2. Nonoshita K, Suzuki Y, Tanaka R, et al. Sci Rep. 2020 Dec 17;10(1):22148.</li> <li>3. Tanaka R, et al. Biol Pharm Bull. 2021;44(5):737-741.</li> <li>4. Amano E, Tanaka R, et al. Ther Drug Monit. 2022, in press.</li> <li>5. Kai M, Tanaka R, et al. Clin. Biochem. 2021 Apr;90:40-49.</li> <li>6. Tanaka R, et al. J Pharm Biomed Anal. 2021 Feb 5;194:113764.</li> <li>7. Tanaka R, et al. Clin Biochem. 2022 Jan;99:87-96.</li> <li>8. Tanaka R, et al. Biol Pharm Bull. 2016;39(12):1968-1973.</li> <li>9. Tanaka R, et al. J Clin Pharm Ther. 2021 Apr;46(2):343-351.</li> <li>10. Suzuki Y, Tanaka R, et al. Clinical Biochemistry. 50(18):1228-1236, 2017.</li> <li>11. Tanaka R, et al. Clin Case Rep. 2021 Jan 14;9(3):1187-1192.</li> <li>12. Tanaka R, et al. Clin Biochem. 2020 Jul;81:20-26.</li> <li>13. Tanaka R, et al. J Pharm Biomed Anal. 2019 Feb 20;165:56-64.</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院病理診断科・病理部・准教授	
氏名	西田 陽登 (Nishida Haruto)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	病理診断	
研究キーワード	形態学、腫瘍、遺伝子、皮膚	
研究内容	<p><b>・皮膚扁平上皮癌における腫瘍免疫療法および分子標的薬の適応についての研究</b></p> <p>皮膚扁平上皮癌(SCC)に対して、次世代シーケンサー(NGS)を用いた遺伝子の解析を行うことで、腫瘍発生を遺伝子学的に解明し、さらに、免疫染色を行って、腫瘍免疫とのかかわりを合わせて検討している。対象としては、臨床・病理学的に転移巣を確認できている症例を14例、転移巣のない症例を14例、計28例とした。それぞれに対してiSeq Hotpanel (Illumina社)の対象となっている50遺伝子を検索し、腫瘍免疫とのかかわりを検索するために、PD-L1、CD8の免疫染色を行っている。</p> <p><b>・間質性肺炎関連肺癌に関わるタンパクおよび遺伝子の検索</b></p> <p>肺扁平上皮癌(SCC)は、以前は喫煙関連のものが圧倒的に多かったものの、近年では間質性肺炎に関連した扁平上皮癌が増加しつつある。そこで、肺SCCに対して、次世代シーケンサー(NGS)を用いた遺伝子解析を行い、腫瘍発生に関連した遺伝子の解明を進めている。さらに、免疫染色を行って発現タンパクを確認することで、発現遺伝子との関連を検討している。</p> <p><b>・子宮・卵巣腫瘍における免疫染色の反応性の比較・検討</b></p> <p>子宮・卵巣腫瘍は組織学的に多彩であるが、いずれにも共通して発生する腫瘍があり、代表的なものとして類内膜癌や明細胞癌がある。腫瘍の発生部位としては近いものの、それらの腫瘍についての異同の議論はなされていない。子宮・卵巣腫瘍の類内膜癌と明細胞癌に対して免疫染色にて発現タンパクを解析し、そのパターンにより組織学的な異同を検索するとともに、腫瘍発生や予後との関連を検討している。それによって予後と関連のあるタンパクの発見や新たな治療法の開発に結び付けたい。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>Nishida H, Kondo Y, Kusaba T, Kadowaki H, Daa T. Immunohistochemical Reactivity of Prostate-Specific Membrane Antigen in Salivary Gland Tumors. Head Neck Pathol. 2021 Aug 21. Epub ahead of print.</p> <p>Goto K, Kukita Y, Honma K, Ogawa K, Nishida H, Takai T, Oishi T, Hishima T, Tanaka M, Isei T. Signet-ring cell/histiocytoid carcinoma of the axilla: a clinicopathological and genetic analysis of 11 cases, review of the literature, and comparison with potentially related tumours. Histopathology. 2021 Dec;79(6):926-939.</p> <p>Kawashima T, Umeno T, Terazawa T, Wada T, Shuto T, Nishida H, Anai H, Nakayama Y, Miyamoto S. Aortic valve neocuspidization with in-body tissue-engineered autologous membranes: preliminary results in a long-term goat model. Interact Cardiovasc Thorac Surg. 2021 May 27;32(6):969-977.</p>	

所属・職位	医学部附属病院卒後臨床研修センター・准教授	
氏名	水上 一弘 (Mizukami Kazuhiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標		

研究分野	消化器内科学
研究キーワード	NSAIDs起因性小腸粘膜傷害、内視鏡診断・治療、アニサキス
研究内容	<p>●NSAIDs起因性小腸粘膜傷害に関する研究 カプセル内視鏡を用いて、健常人ボランティアにNSAIDsを内服してもらい、小腸粘膜傷害のできる頻度を検討し、さらに粘膜保護剤の併用によるNSAIDs起因性消化管粘膜傷害の予防効果などを検討した。</p> <p>●内視鏡診断に関する研究 現在の消化器内視鏡は画像強調内視鏡や超音波内視鏡などを用いて、より精度の高い診断を追求しているが、とくに画像強調内視鏡に関する胃炎や胃癌診断の可能性を研究している。また最近ではArtificial Intelligence (AI) を搭載した大腸内視鏡検査に関する研究に着手しており、内視鏡専門医との病変検出能の比較や画像強調内視鏡との併用による診断効率の検討など、未来の消化器内視鏡検査のあるべき姿を模索している。</p> <p>●アニサキス症に関する病態解明 アニサキス症を呈した患者から摘出したアニサキス虫体をおそらく世界で一番多く集めており、虫体側・宿主側の両面から、腹痛発生などのメカニズム解明を研究している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>&lt;論文&gt;</p> <p>●Mizukami K, Murakami K, Abe T, Inoue K, Uchida M, Okimoto T, Kodama M, Fujioka T. Aspirin-induced small bowel injuries and the preventive effect of rebamipide. World J Gastroenterol 2011; 17 (46): 5117-22.</p> <p>●Mizukami K, Murakami K, Yamauchi M, Matsunari O, Ogawa R, Nakagawa Y, Okimoto T, Kodama M, Fujioka T. Evaluation of selective cyclooxygenase-2 inhibitor-induced small bowel injury: randomized cross-over study compared with loxoprofen in healthy subjects. Dig Endosc 2013; 25 (3): 288-94.</p> <p>●Mizukami K, Ogawa R, Okamoto K, Shuto M, Fukuda K, Sonoda A, Matsunari O, Hirashita Y, Okimoto T, Kodama M, Murakami K. Objective Endoscopic Analysis with Linked Color Imaging regarding Gastric Mucosal Atrophy: A Pilot Study. Gastroenterol Res Pract 2017; 2017: 5054237.</p> <p>●Hidano S, Mizukami K, Yahiro T, Shirakami K, Ito H, Ozaka S, Arika S, Saechue B, Dewayani A, Chalalai T, Soga Y, Goto M, Sonoda A, Ozaki T, Sachi N, Kamiyama N, Nishizono A, Murakami K, Kobayashi T. Analysis of the prevalence and species of Anisakis nematode in Sekisaba, Scomber japonicus caught in coastal waters off Saganoseki, Oita in Japan. Jpn J Infect Dis 2021;74 (5): 387-391.</p> <p>&lt;受賞&gt;</p> <p>2008年10月：ポスター優秀演題 (jddw2008)</p> <p>2013年10月：日本消化器内視鏡学会賞</p> <p>2014年5月：Poster of Distinction (DDW2014)</p> <p>2018年2月：Awards for Outstanding Reviewers (Internal Medicine)</p> <p>2019年1月：日本内科学会九州地方会指導医賞</p>

所属・職位	医学部附属病院腎臓外科・泌尿器科・講師	
氏名	安藤 忠助 (Ando Tadasuke)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2006年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	腎不全治療学
研究キーワード	腎代替療法 (透析、腎移植)、生活の質 (QOL)
研究内容	<p>生命維持に腎臓の機能が不足する状態を腎不全といい、私は腎不全の患者さんに腎代替療法を行っています。その際、透析患者さんや腎移植患者さんのQOLを改善するために泌尿器科的な介入を行う研究を行っています。具体的には、透析患者さんや腎移植患者さんの経過の中で、ある働きかけをすることでQOLが変化しうるかどうかを調べています。</p> <p>これらは患者さんに直結する、貴重な臨床研究と考えて取り組んでいます。</p> <p>現在、県内の基幹病院および多職種で連携・協力し、下記3つの研究を行っています。</p> <p>I 腎不全患者さんは男性ホルモン分泌能が低下し、男性更年期になりやすく、QOLが悪化します。したがって若い透析患者さんも男性更年期の状態でのQOLが悪化しているかを調査中です。</p> <p>II 腎不全患者さんは、腎移植によって腎不全状態から脱却します。したがって、腎移植前の男性更年期状態とQOLの悪化も腎移植によって改善するかどうかを調査中です。</p> <p>III 新型コロナウイルス感染症の流行前後で生活様式が変化し、透析患者さんの外食の頻度が変わった可能性があります。外食の頻度の変化と透析患者さんの血液データの変化について解析し、新型コロナウイルス感染症の流行が透析患者さんへ与える間接的な影響について調査中です。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>① 透析患者さんはほとんど尿が出ないにもかかわらず、排尿に関する悩みでQOLが低下していることを解明し、排尿の改善によってQOLが改善する可能性があることについて論文化しました。Ando et al. Lower urinary tract symptoms impair the quality of life in maintenance hemodialysis patients. Renal Replacement Therapy (2019) 5:35 <a href="https://doi.org/10.1186/s41100-019-0230-y">https://doi.org/10.1186/s41100-019-0230-y</a></p> <p>② 透析患者さんの食事指導は非常に複雑です。透析患者さんも高齢化し、分かりやすい食事指導が必要です。心臓病死予防という観点の適切な魚の摂取頻度について論文化中です。</p> <p>受賞  2013年：大分人工透析研究会 奨励賞  2014年：大分人工透析研究会 奨励賞、九州泌尿器科連合地方会学術集会 会長特別賞  2015年：大分人工透析研究会 奨励賞、西日本泌尿器科学会総会 学術奨励賞</p>

所属・職位	医学部附属病院皮膚科・講師	
氏名	石川 一志 (Ishikawa kazushi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	皮膚科学
研究キーワード	皮膚、皮膚悪性腫瘍、エピプラキン、プラキンファミリー
研究内容	<p>・創傷治癒過程におけるエピプラキンの役割</p> <p>エピプラキンはプラキンファミリーと呼ばれる細胞内分子群に属しており中間径フィラメントであるケラチンと結合すると考えられている。エピプラキン欠損マウスでは、創傷治癒過程で表皮細胞の移動速度が増し、創傷治癒が早くなることが示されていた。そこでエピプラキン欠損および野生型マウスを用いて、創傷治癒過程における形態学的変化の比較検討を行っている。</p> <p>・エピプラキンと皮膚疾患との関連</p> <p>ヒトエピプラキンでは、Bドメインと呼ばれる繰り返し構造が13個とされており、マウスでは16個とされていた (Fujiwara 2001, Spazierer 2003)。しかし以前から表皮抽出物や、培養細胞において、分子量の異なる蛋白質バンドが2本見られることがあった (Fujiwara 1992, Jang 2005, Tsuchisaka 2016)。このエピプラキンの遺伝子の多様性が、エピプラキンの分子の多様性の原因になっているか否か、およびその生物学的・医学的意義について、特に皮膚疾患との関連について検討したい。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>野生型マウスでの創の表皮細胞では核周囲に太いケラチン線維を認め、細胞間の空隙も比較的規則的であった一方、欠損型では強拡大でも太いケラチン線維を認めず、デスモソームにも細いケラチン線維を認めた。野生型の創傷治癒過程に認めるケラチンは、ケラチンが太くなることで細胞の弾性を増加させ、剪断応力に対する抵抗性を増加させていると考えられる。同時期のエピプラキン欠損細胞は断面積が有意に小さくなるが、太いケラチン線維を形成できない為、応力に抗しきれず細胞が小さくなるのではないかと考えられ、エピプラキンはin vivoにおいて、創傷治癒過程の表皮細胞で、ケラチンの側方会合を促進することが明らかになり、エピプラキンは創傷治癒過程において表皮細胞の移動に影響を与えることが推察された。</p> <p>Ishikawa K,et.al. : Epiplakin accelerates the lateral organization of keratin filaments during wound healing. J Dermatol Sci. 2010;60(2):95-104</p>



所属・職位	医学部附属病院整形外科・講師	
氏名	糸永 一郎 (Itonaga Itiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	整形外科	
研究キーワード	関節リウマチ、骨軟部腫瘍	
研究内容	<p>●関節リウマチにおける骨破壊に関する研究</p> <p>関節リウマチにおける関節炎と関節破壊の機序において、特に関節滑膜でのサイトカインと破骨細胞形成および活性化による骨破壊のメカニズムについて研究する。</p> <p>●腫瘍における骨破壊に関する研究</p> <p>骨に発生する腫瘍による骨破壊機序を解明するため、腫瘍組織に存在する破骨細胞の特徴を調べ、破骨細胞形成に関与する腫瘍細胞の影響について研究する。</p> <p>関連リンク：<a href="https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000010295181/">https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000010295181/</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p><u>Rheumatoid arthritis synovial macrophage-osteoclast differentiation is osteoprotegerin ligand-dependent.</u> Itonaga I, Fujikawa Y, Sabokbar A, Murray DW, Athanasou NA. <i>J Pathol.</i> 2000 Sep;192(1):97-104. doi: 10.1002/1096-9896(2000)9999:9999&lt;::AID-PATH672&gt;3.0.CO;2-W.PMID: 10951406</p> <p><u>Phenotypic characterization of mononuclear and multinucleated cells of giant cell reparative granuloma of small bones.</u> Itonaga I, Schulze E, Burge PD, Gibbons CL, Ferguson D, Athanasou NA. <i>J Pathol.</i> 2002 Sep;198(1):30-6. doi: 10.1002/path.1184.PMID: 12210060</p> <p>●受賞</p> <p>1999年9月、British Orthopaedic Research Society, Best Poster Prize 2001年3月、Girdlestone Scholarship 2001年4月、日本リウマチ財団 欧州派遣研修医</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部



その他学内施設等

所属・職位	医学部附属病院小児科・講師	
氏名	井上 真紀 (Inoue Masanori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年6月	
SDGs目標		

研究分野	人類遺伝学、新生児学
研究キーワード	臨床遺伝学、周産期医学、先天代謝異常症、疾患モデル動物
研究内容	<p>● 乳児肝不全症候群1型における病態分子機構の解明</p> <p>LARS1遺伝子の病的バリエーションにより発症する乳児肝不全症候群1型について、<i>larsb</i>遺伝子ノックアウトゼブラフィッシュを用いて解析し、その病態に過剰なオートファジーの亢進が関与することを報告した (論文1)。さらなる病態解明を目的とし、乳児肝不全症候群1型患者と同様のLARS1遺伝子点変異を導入したノックイン動物モデルを作製し解析を行っている。</p> <p>● 橋小脳低形成10型における病態分子機構の解明</p> <p>RNA代謝関連分子であるCLP1の異常により発症する橋小脳低形成10型について、ゼブラフィッシュを用いて解析し、RNA代謝異常により蓄積する複数のRNA断片の中から病的RNA断端を同定し報告した (論文2)。</p> <p>● 新生児感染症の網羅的検索と臨床症状との比較</p> <p>NICUに入院を要する新生児を対象に、一般的な感染症検査では同定困難な病原体について multiplex real-time PCR法を用いた新生児感染症の網羅的解析を行い、周産期の経過や臨床症状との関連について解析を実施している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>CRISPR/Cas9システムを独自に改変した作製法を用いて、本附属病院にて同定された小児希少遺伝性疾患と同様の病的バリエーションを有するノックイン動物モデルの作製を行い、病態分子機構の解析を実施している。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、Inoue M, et al. Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. <b>Scientific Reports</b>.</li> <li>2020年、Inoue M, et al. Tyrosine pre-transfer RNA fragments are linked to p53-dependent neuronal cell death via PKM2. <b>Biochem Biophys Res Commun</b>.</li> </ol> <p>●競争的研究助成金</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2022年度～2024年度、科研費若手研究「乳児肝不全症候群1型における乳児期重症化と発熱時増悪因子の解明 (課題番号：22K15947)」研究代表者</li> <li>2019年度～2021年度、科研費若手研究「遺伝性神経変性疾患に認めるtRNA由来small RNAの生理的・病理的意義の解明 (課題番号：19K17366)」研究代表者</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、第62回日本先天代謝異常学会学術集会 若手優秀演題賞 「ロイシルtRNA合成酵素欠損ゼブラフィッシュを用いた乳児肝不全症候群の病態解明」</li> </ol>

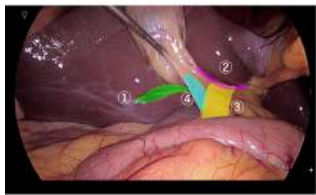
所属・職位	医学部附属病院消化器内科・講師	
氏名	遠藤 美月 (Endo Mizuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標		

研究分野	肝臓
研究キーワード	ウイルス性肝炎 肝がん 肝線維化
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 肝炎ウイルス排除達成を目指した研究 WHOは、2030年までに公衆衛生上の脅威としての肝炎ウイルス排除達成を目指すことを目標として掲げている。C型肝炎はウイルス排除薬の進歩により、治癒可能な疾患となったが、いまだ専門医受診に結びつかず治療までたどり着けない患者が存在する。病院で検査を行ったC型肝炎ウイルス抗体陽性者を確実に拾い上げ、専門医受診につなげるシステムを構築しその効果を検討した。</li> <li>● 肝癌治療に関する研究 切除不能な肝細胞癌に対する治療薬が続々と登場している。分子標的薬であるレンバチニブは奏効率が高く有効な治療であるが、副作用により中止・減薬されることも稀ではない。レンバチニブの副作用の一つに血小板減少があるが、レンバチニブの血中濃度が血小板減少を予測しうるか研究した (論文1.) 検討の結果、Cmaxと血小板減少率に有意な相関を認め、Cmaxはレンバチニブによる初期の血小板減少の予測に有用であることを証明した。</li> <li>● 肝線維化に関する研究 肝疾患患者の予後において、肝線維化進展度を評価することは非常に重要である。非侵襲的肝線維化診断であるFib4 index、超音波エラストグラフィに関して、生検診断と比較した診断能について検討した。またFib4 indexを用いた糖尿病患者の肝発がん高リスク群を囲い込みの検討を行った。</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <p>1. 2021年、Maximum Plasma Concentration of Lenvatinib Is Useful for Predicting Thrombocytopenia in Patients Treated for Hepatocellular Carcinoma. Endo M, Honda K, Saito T, Shiraiwa K, Sueshige Y, Tokumaru T, Iwao M, Tokoro M, Arakawa M, Tanaka R, Tatsuta R, Seike M, Itoh H, Murakami K. World J Oncol.</p> <p>著書</p> <p>1. 2019年、糖尿病合併NAFLD/NASH診療—糖尿病内科と肝臓内科の連携—肝臓内科サイドから—肝臓クリニカルアップデート (特集 NAFLD/NASH診療の諸問題).vol.5,No.2 183-187</p>

所属・職位	医学部附属病院消化器外科・講師	
氏名	遠藤 裕一 (Endo Yuichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2009年3月	
SDGs目標	 	



研究分野	消化器外科学、肥満外科学、AI開発
研究キーワード	肥満外科の基礎と臨床、AIによる手術支援システム開発

研究内容	<p><b>【肥満外科における基礎および臨床研究】</b></p> <p>①基礎研究：肥満外科手術では体重減少と同時に、糖尿病・高血圧、脂質代謝異常また脂肪肝などが高率に改善することが報告されている。当科はいままでに、ラット胃バンディングモデル、スリーブ状胃切除モデルおよびスリーブバイパスモデルを作成し、減量にともなうホルモン変化を測定し、報告してきた。最近では、脳内視床下部における満腹中枢に与える影響やコレシストキニンや短鎖脂肪酸への影響について研究している。</p> <p>②臨床研究：当科では腹腔鏡下調節性胃バンディング術 31例、腹腔鏡下スリーブ状胃切除 (LSG) を184例に行い (2022年2月末まで)、良好で安全な成績を報告している。わが国では一般的に行われている術前内視鏡検査の有用性や、LSG後の脂肪肝の改善率、またLSGの際に使用するステープラーの至適高および胃壁の厚さについて検討を行い、それぞれ論文化し報告している。最近では、術前減量が内臓脂肪に与える影響や、癌への影響について研究を行っている。</p> <p><b>【AIによる手術支援システム開発】</b></p> <p>腹腔鏡下胆嚢摘出術はわが国においては標準治療とされているが、重篤な合併症である胆道損傷が約1%の頻度で発生している。これらは解剖学的誤認が原因とされているため、誤認防止に有効とされるランドマーク (右図) をAIが術中にリアルタイムで教示することで、合併症が軽減されることが期待される。当科ではAIを使用した手術支援システム開発を胆嚢以外の胃・肝臓手術に応用するため、現在研究を続けている。</p>
------	---



- ① Rouviere sulcus (RS)
- ② Lower edge of liver S4
- ③ Common bile duct (CBD)
- ④ Cystic duct (CD)

研究業績・アピールポイント	<p><b>【肥満外科】</b></p> <p>Endo Y, Ohta M, Kawamura M, Fujinaga A, Nakanuma H, Watanabe K, Kawasaki T, Masuda T, Hirashita T, Inomata M. Gastric Wall Thickness and Linear Staple Height in Sleeve Gastrectomy in Japanese Patients with Obesity. <i>Obes Surg</i> <b>2022</b> Feb; 32(2): 349-354</p> <p>遠藤裕一、太田正之、猪股雅史. 日本における肥満外科手術の現状と展望. <i>医学のあゆみ</i> 274: 934-938, 2020.</p> <p><b>【AI関連】</b></p> <p>Tokuyasu T, Iwashita Y, Matsunobu Y, Kamiyama T, Ishikake M, Sakaguchi S, Ebe K, Tada K, Endo Y, Etoh T, Nakashima M, Inomata M. Development of an artificial intelligence system using deep learning to indicate anatomical landmarks during laparoscopic cholecystectomy. <i>Surg Endosc</i>. <b>2021</b>; 35(4): 1651-1658.</p> <p>遠藤裕一. 胆嚢摘出術におけるAIを用いた胆管損傷回避法. <i>胆と膵</i> 42(7), 医学図書出版, 東京, 2021.</p>
---------------	--

所属・職位	医学部附属病院腫瘍センター・講師	
氏名	大津 智 (Otsu Satoshi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2006年3月	
SDGs目標		

研究分野 がんの薬物療法開発

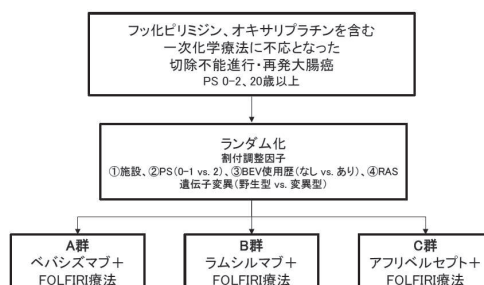
研究キーワード がん薬物療法

研究内容 JCOG2004:切除不能進行・再発大腸癌に対する二次化学療法におけるFOLFIRI療法と併用するVEGF阻害薬 (ベバシズマブ、ラムシルマブ、アフリベルセプト) の選択に有用なバイオマーカーを探索するランダム化第II相試験

・研究の目的

切除不能進行・再発大腸癌における二次化学療法の標準治療であるベバシズマブ (BEV) + 5-FU+ロイコボリン+イリノテカン (FOLFIRI) 療法 (BEV併用FOLFIRI療法) に対して、試験治療であるラムシルマブ (RAM) + FOLFIRI療法 (RAM併用FOLFIRI療法)、アフリベルセプトベータ (AFL) + FOLFIRI療法 (AFL併用FOLFIRI療法) をランダム化し、治療法の選択に有効な効果予測因子となるバイオマーカーを探索する。

また、効果予測因子となるバイオマーカーが判明した場合には、BEV併用FOLFIRI療法に対してRAM併用FOLFIRI療法、AFL併用FOLFIRI療法の有効性が期待される集団を抽出し、次期第III相試験の対象を設定する。



・研究者の役割：研究事務局 (プロトコール作成、試験のマネージメント、遂行)

そのほか参加中の臨床試験

・ JCOG1213, JCOG1314, JCOG1503C, JCOG1510, JCOG1904, JCOG2014 等

研究業績・アピールポイント

- Phase 1 Trial of Avelumab (anti-PD-L1) in Japanese Patients With Advanced Solid Tumors, Including Dose Expansion in Patients With Gastric or Gastroesophageal Junction Cancer: The JAVELIN Solid Tumor JPN Trial  
Toshihiko Doi , Satoru Iwasa , Kei Muro , Taroh Satoh , Shuichi Hironaka , Taito Esaki , Tomohiro Nishina , Hiroki Hara , Nozomu Machida , Yoshito Komatsu , Yasuhiro Shimada , Satoshi Otsu , Shin Shimizu , Morihiro Watanabe  
Gastric Cancer, 22 (4), 817-827 Jul 2019
- Phase II Trial of Aflibercept With FOLFIRI as a Second-Line Treatment for Japanese Patients With Metastatic Colorectal Cancer  
Tadamichi Denda , Daisuke Sakai , Tetsuya Hamaguchi , Naotoshi Sugimoto , Takashi Ura , Kentaro Yamazaki , Hirofumi Fujii , Takeshi Kajiwara , Takako Eguchi Nakajima , Shin Takahashi , Satoshi Otsu , Yoshito Komatsu , Fumio Nagashima , Toshikazu Moriwaki , Taito Esaki , Takeo Sato , Michio Itabashi , Eiji Oki , Toru Sasaki , Yoshinori Sunaga , Samira Ziti-Ljajic , Claire Brillac , Takayuki Yoshino  
Cancer Sci, 110 (3), 1032-1043 Mar 2019

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	医学部附属病院麻酔科・講師	
氏名	奥田 健太郎 (Okuda Kentaro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2011年12月	
SDGs目標	 	

**研究分野** 緩和医療学、ペインクリニック

**研究キーワード** 鎮痛薬、オピオイド鎮痛薬、神経ブロック療法

**研究内容**

- ① がん起因する痛みの緩和に関する研究・実践  
鎮痛薬と神経ブロック療法を併用することで鎮痛の質の向上を図る (論文1・著書1・総説2)
- ② がん起因する痛みに使用する薬剤の適正な使用に関する教育  
特にオピオイド鎮痛薬の使用に関して、適正な使用が重要であり、ケミカルコーピングなど (該当論文なし)
- ③ がん教育の推進 (小学校・中学校・高等学校を対象に実施する予定、該当論文なし)
- ④ 痛みの緩和に関する実践・教育・研究 (論文2・3、総説1・3)

**研究業績・アピールポイント**

- 論文
  - 1.2003年 Pharma Medica 癌性疼痛管理におけるSSRIの鎮痛補助的役割；塩酸パロキセチン奏効例
  - 2.2011年 J Anesth  
The antinociceptive effects of estradiol on adjuvant-induced hyperalgesia in rats involve activation of adrenergic and serotonergic systems.
  - 3.2012年 Journal of Surgical Research  
New anthranilic acid derivative, EAntS-GS, attenuates Freund's complete adjuvant-induced acute pain in rats.
- 著書
  - 1.2013年 癌性疼痛 6.a2アゴニスト
- 総説
  - 1.2002年 LISA ロピバカインによる術後鎮痛
  - 2.2017年 プロフェッショナルがんナーシング  
ペインZOOへようこそ！動物にたとえて患者さんにスルッと伝わるがん疼痛Q&A
  - ⑤神経障害性疼痛～ハリネズミ～
  - 3.2019年 LiSA 2019年別冊春号  
痛みだけ診ていればいいわけではない！交通事故患者の複合性局所疼痛症候群から学んだこと

所属・職位	医学部附属病院精神科・講師	
氏名	河野 健太郎 (Kohno Kentaro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標		
研究分野	精神神経医学	
研究キーワード	微量元素、飲料水、犯罪、疫学研究	
研究内容	<p>●リチウムと犯罪率に関する研究</p> <p>水道水中の微量リチウムがメンタルヘルスに与える影響について、全世界で様々な研究が行われてきた。筆者らは水道水リチウムと犯罪率の関連について、九州に焦点を当てて研究を行った。その結果、水道水リチウム濃度が有意に犯罪率に影響を与えることが判明した。今後、さらに同研究を発展させていく (論文1)。</p> <p>●気質と光</p> <p>光をあびると双極性障害の病前気質である発揚気質が維持・増進されるのではないかとの仮説を検証するため、2市の住民を対象に気質の質問紙を施行した。その結果、日照量の多い市の住民の方が、日照量の少ない市の住民よりも発揚気質得点が有意に高いことを示した (論文2)。さらに2市の中間の日照量を有する市を加え、3市でさらなる調査を行った。その結果、3市において日照量が増えるごとに発揚気質得点が増加するという、量・反応関係が認められた (論文3)。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>これまで上記のような研究を行ってきた。以下に論文を示す。</p> <p>●論文</p> <p>1、Lithium in drinking water and crime rates in Japan: cross-sectional study. Kentaro Kohno, Nobuyoshi Ishii, Hirohumi Hirakawa and Takeshi Terao Br J Psych Open. 2020 Oct 15;6(6):e122.</p> <p>2、Latitude effect on bipolar temperaments. Kentaro Kohno, Nobuhiko Hoaki, Takeshi Inoue, Yukiei Nakai, Atsuhito Toyomaki, Yasuo Araki, Koji Hatano, Takeshi Terao J Affective Disord. 2012 Dec 15;142(1-3):53-6.</p> <p>3、Dose-dependent effects of light on hyperthymic temperament. <u>Kentaro Kohno</u>, <u>Hajime Baba</u>, <u>Takeshi Inoue</u>, <u>Yukiei Nakai</u>, <u>Atsuhito Toyomaki</u>, <u>Toshihito Suzuki</u>, <u>Koji Hatano</u>, <u>Heii Arai</u>, <u>Takeshi Terao</u> J Affect Disord. 2014 Jun;162:26-9.</p>	

役員

大学院教育  
教育学部  
教育学研究科

経済学部



医学部

医学部  
附属病院



理工学部

福祉健康科学部

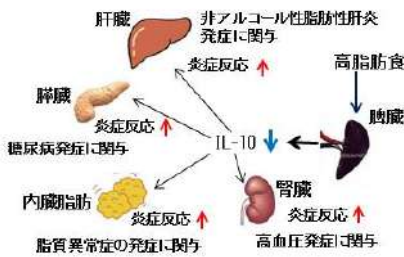
その他学内施設等

所属・職位	医学部附属病院歯科口腔外科・講師	
氏名	河野 辰行 (Kono Tatsuyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年3月	
SDGs目標		

研究分野	口腔癌
研究キーワード	口腔癌治療、頸部リンパ節転移、口腔癌検診
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口腔癌頸部リンパ節転移の画像診断と病理組織像に関する研究 口腔癌の治療成績に大きく関与する頸部リンパ節転移の早期診断を目的とした頸部超音波検査による画像評価と病理組織所見および免疫組織化学的所見の関連についての検討を行った。転移リンパ節の中には急速な増大を認める群と緩徐な増大を認める群が存在し、リンパ節の免疫組織化学的所見 (Ki-67) に相関が見られた。さらに転移リンパ節の免疫組織化学的所見と原発腫瘍の免疫組織化学的所見に相関を認め原発腫瘍の組織像から転移リンパ節の増大様式を予測できる可能性が示された。(下記論文)</li> <li>・口腔癌を含む顎骨再建治療と術後の形態回復および機能回復に関する研究 下顎骨の欠損に対して遊離腓骨皮弁を用いた下顎骨の再建を実施し、その術後の顔貌形態の回復の程度および再建に伴う機能の回復 (会話、咀嚼、嚥下) がどの程度得られているかを後ろ向きに解析し良好な機能回復を得るために必要な因子の解析を行っている。</li> <li>・大分県における口腔癌検診の実施とその有病率に関する研究 大分県の郡市において市民を対象とした口腔癌検診を実施し、口腔癌の有病者率および口腔潜在的悪性疾患の有病率について調査・解析を行っている。</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>論文) Relation between proliferative activity of tumor cells and the enlargement pattern of metastatic lymph nodes in oral squamous cell carcinomas. Tatsuyuki Kono, Yoshihiro Takahashi, Kazuhiro Kawamura, Noriaki Yamamoto, Ayaka Abe, Masahiro Ohara, Kenji Kawano Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology 29(2), 116-121 2017</p>

所属・職位	医学部附属病院内分泌・糖尿病内科・講師	
氏名	後藤 孔郎 (Gotoh Koro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2005年3月	
SDGs目標		

研究分野	神経内分泌学
研究キーワード	脾臓、IL-10、臓器連関、肥満

研究内容	<p><b>1. 脾臓由来IL-10発現低下が肥満による全身性炎症性病変の発症に関与している。</b></p> <p>2008年から肥満による脾臓由来IL-10合成能の低下が肥満に伴う全身性炎症病態の発症や糖脂質代謝異常に深く関与していることが明らかにした。食餌誘導性肥満モデル動物では、脾臓からの抗炎症性サイトカインであるIL-10合成が低下しており、その低下が中枢神経の視床下部、肝臓や内臓脂肪、膵臓、腎臓、心臓といったように多臓器にわたり炎症性病変をもたらすという結果は、世界的に注目されている。</p>	
	<p><b>2. 中枢神経を介したインクレチンと膵島のクロストークについて解明した。</b></p> <p>小腸のL細胞から分泌されるインクレチンである glucagon-like peptide-1 (GLP-1) は門脈を介して肝臓に到達した後、肝臓由来求心性神経を活性化させ、その活性が中枢神経に伝達される。その刺激は膵臓への遠心性神経を活性化させ、膵臓でのグルカゴン分泌の抑制や膵島の保護作用をもたらすことを明らかにした。</p>	

研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>Gotoh K, Inoue M, Masaki T, et al. A novel anti-inflammatory role for spleen-derived interleukin-10 in obesity-induced hypothalamic inflammation. <b>J Neurochem.</b> 120, 752-764, 2012.</li> <li>Gotoh K, Inoue M, Masaki T, et al. A novel anti-inflammatory role for spleen-derived interleukin-10 in obesity-induced inflammation in white adipose tissue and liver. <b>Diabetes</b> 61, 1994-2003, 2012</li> <li>Gotoh K, Inoue M, Masaki T, et al. Obesity-related chronic kidney disease is associated with spleen-derived IL-10. <b>Nephrol Dial Transplant.</b> 28, 1120-1130, 2013</li> <li>Gotoh K, Inoue M, Shiraishi K, et al. Spleen-derived interleukin-10 downregulates the severity of high-fat diet-induced non-alcoholic fatty pancreas disease. <b>PLoS One.</b> 7, e53154, 2012</li> <li>Kondo H, Abe I, Gotoh K, et al. Interleukin 10 Treatment Ameliorates High-Fat Diet-Induced Inflammatory Atrial Remodeling and Fibrillation. <b>Circ Arrhythm Electrophysiol.</b> 11(5):e006040. 2018</li> <li>Fujiwara K, Gotoh K, Chiba S, et al. Intraportal administration of DPP-IV inhibitor regulates insulin secretion and food intake mediated by the hepatic vagal afferent nerve in rats. <b>J Neurochem.</b> 121:66-76. 2012</li> <li>Gotoh K, Masaki T, Chiba S, et al. Hypothalamic brain-derived neurotrophic factor regulates glucagon secretion mediated by pancreatic efferent nerves. <b>J Neuroendocrinol.</b> 25, 302-311, 2013</li> <li>Ando H, Gotoh K, Fujiwara K, et al. Glucagon-like peptide-1 reduces pancreatic <math>\beta</math>-cell mass through hypothalamic neural pathways in high-fat diet-induced obese rats. <b>Sci Rep.</b> 7, 5578. 2017</li> </ol> <p>2009年：第52回日本糖尿病学会 プレジデントポスター賞  2012年：第50回日本糖尿病学会 九州支部賞、第2回大分大学医学部表彰  2013年：第63回日本体質医学会 研究奨励賞  2014年：第87回日本内分泌学会 研究奨励賞、第35回日本肥満学会 学術奨励賞  2015年：第21回日本膵臓病研究財団 膵臓病研究奨励賞</p>
---------------	---

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部附属病院高度救命救急センター・講師	
氏名	柴田 智隆 (Shibata Tomotaka)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年12月	
SDGs目標	 	

研究分野	消化器外科学 外傷学
研究キーワード	食道疾患 Acute care surgery
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 食道癌に対する低侵襲治療に関する研究 食道癌手術は開胸・開腹を伴う消化器外科領域で最も高侵襲な手術であるが、近年の内視鏡下手術の発展に伴い様々な低侵襲アプローチの開発が進んでいる。 我々は開胸を伴わないアプローチとして縦隔鏡下に食道切除を行う方法を行っており低侵襲な食道癌手術開発に取り組んでいる。(論文1)</li> <li>● 食道癌術後患者の栄養状態の調査・研究 食道癌手術は手術自体が高度な侵襲を伴うものであるのみならず、胃を管状にして再建する(胃管再建)こと、胃食道逆流防止機構を全て切除すること、により術後の栄養状態にも大きく影響する。食道癌手術後の患者の栄養状態を評価することにより、その改善点を検討している。</li> <li>● 外傷手術教育 致死的外傷において、外科的処置は欠かせないものであるが近年その機会は著しく減少している。外科医及び救急医に対する外傷手術トレーニングとして施設内で「外傷外科手術治療戦略コース(SSTT)」及び「献体による外傷手術臨床解剖学的研究会:C-BEST(Cadaver-based educational seminar for trauma surgery)」などのトレーニングコースを開催し外傷外科医育成に取り組んでいる。(論文2,3) ※関連リンク SSTT: <a href="https://sstt-trauma.org">https://sstt-trauma.org</a> C-BEST: <a href="http://cadaverbasedsurgicaltrainingfortrauma.kenkyuukai.jp/special/?id=30235">http://cadaverbasedsurgicaltrainingfortrauma.kenkyuukai.jp/special/?id=30235</a></li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文1【縦隔を覗き、さらにくり抜く-これからの食道・胃外科手術】非胸腔アプローチによる食道癌手術 新規手術手技の導入に際しての注意事項 非胸腔アプローチを開始するにあたって 柴田 智隆, 鈴木 浩輔, 錦 耕平, 衛藤 剛, 猪股 雅史 臨床外科73巻5号 Page594-597(2018.05)</li> <li>● 論文2【急性腹症に対する低侵襲アプローチ-適応と手技】緊急手術としての低侵襲アプローチ 急性腹症への応用pros&amp;cons 柴田 智隆, 河野 洋平, 平塚 孝宏, 赤木 智徳, 猪股 雅史: 外科79巻9号 Page801-804(2017.09)</li> <li>● 論文3【腹部外傷治療戦略】腹部外傷診療体制の構築をめざして 柴田 智隆, 武内 裕, 松成 修, 鍋田 祐介, 猪股 雅史, 坂本 照夫 日本腹部救急医学会雑誌 (1340-2242)39巻5号 Page855-858(2019.07)</li> </ul>



所属・職位	医学部附属病院形成外科・講師	
氏名	清水 史明 (Shimizu Fumiaki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2010年6月	
SDGs目標		

研究分野	傷跡治療 同種間顔面移植 顔面神経麻痺治療
研究キーワード	瘢痕 ケロイド 顔面移植 顔面神経麻痺
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 傷跡評価用の診断アプリケーションの開発 JSW scar scaleを用いて、傷跡写真の傷跡の重症度を決定する。このデータを1000画像以上人工知能に学習させて、傷跡重症度評価用の人工知能の作成に取り組んでいる。</li> <li>・ ケロイドの治療法の開発 ラットを用いた瘢痕モデルを用いて、様々な薬剤にて瘢痕組織が改善するかどうかを観察して、傷跡治療に有効な薬効成分を調査する。</li> <li>・ 同種間顔面移植の基礎研究 動物実験にて同種間の皮膚を含んだ複合組織を移植して、その拒絶反応をコントロールする方法を研究している。</li> <li>・ 同種間顔面移植の臨床応用への研究 近年海外などで行われている人から人への顔面移植の本邦での手術方法やガイドライン作成を、学会、他大学と連携して行っている。</li> <li>・ 顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の臨床研究 顔面神経麻痺に対する新しい手術法を開発し、その成果を国内外に報告している。</li> <li>他 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の基礎研究</li> <li>・ 末梢神経再建における人工神経の基礎研究</li> <li>・ 末梢神経再建における人工神経と幹細胞併用法の研究</li> </ul> </li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>関連文献</p> <p>Shimizu F, Okamoto O, Katagiri K, Fujiwara S, Wei FC. Prolonged ischemia increases severity of rejection in skin flap allotransplantation in rats. <i>Microsurg</i> 30: 132-137, 2010.</p> <p>Shimizu F, Ootari M, Uehara M, Takahashi Y, Kawano K, Effect of concurrent mental nerve reconstruction at the same time as mandibular reconstruction using a fibula osteoseptocutaneous flap. <i>J Plast Reconstr Aesthet Surg</i> 68(9): 1228-1234, 2015</p> <p>Shimizu F, Uehara M, Ootari M, Kusatsu M. Three-dimensional visualization of the human face using DICOM data and its application to facial contouring surgery using free anterolateral thigh flap transfer. <i>J Plast Reconstr Aesthet Surg</i> 69(1):e1-4., 2016</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等




所属・職位	医学部附属病院心血管外科・講師	
氏名	首藤 敬史 (Shuto Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2016年9月	
SDGs目標		

研究分野	成人心血管、人工臓器、IBTA(in-body tissue architecture)
研究キーワード	大動脈瘤、補助人工心臓、バイオチューブ
研究内容	<p>①胸腹部大動脈瘤に対するハイブリッド治療の研究。          胸腹部大動脈瘤は最も治療が難しい動脈瘤です。当科では手術のハイリスク患者に対して腹部内臓血管バイパス術と胸部ステントグラフト内挿術を組み合わせたハイブリッド手術をおこなってきました。その10年を超える遠隔期の成績、4D flow MRIを使用してバイパスされた腹部内臓血管への血流分布のデータ解析をおこなってきました(論文1、2)。</p> <p>②補助人工心臓に関する研究。          心臓移植を必要とするような重症心不全患者に対しては補助人工心臓が装着されます。重症心不全患者に対しての機械的補助に関する臨床研究をおこなっています。</p> <p>③生体内組織形成術(IBTA)による小口径代用血管の作成とその臨床応用に関する研究。          重症下肢虚血は血行再建がおこなわれなければ下肢の切断に至る病態です。下肢のバイパス手術が一般的な治療法ですが、特に下腿の小口径自家動脈へのバイパスは自家静脈グラフトの使用が推奨されます。自家静脈が使用できない場合に、生体内組織形成術で自己組織による代用血管(バイオチューブ)を作成し、それを使用したバイパス術を動物実験でおこなってきました。将来はその臨床への応用を期待しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>大分大学心血管外科ではヤギや豚などの大型動物実験をおこなうことができます。          臨床での手術件数も豊富なため、多くの臨床研究もおこなわれ、国内外の学会で報告しています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年、Ten-year experience of the thoraco-abdominal aortic aneurysm treatment using a hybrid thoracic endovascular aortic repair</li> <li>2022年、Blood flow analysis after a renovisceral debranching procedure by four-dimensional flow magnetic resonance imaging</li> </ol>



所属・職位	医学部附属病院消化器外科・講師	
氏名	白下 英史 (Shiroshita Hidefumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2004年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	消化器外科学
研究キーワード	内視鏡外科、低侵襲手術、外科腫瘍学、腸内細菌叢
研究内容	<p><u>胃癌腹膜播種に対するパルスレーザーを用いた新規光線療法の開発</u> 肉眼的にすべての病巣を診断することが難しく、腸閉塞や腹水により患者QOLを低下させる難治性の胃癌腹膜播種病変に対するより効果的で正常組織に影響の少ないパルスレーザー光線照射を用いた新規治療法を開発することを目的とする。そのために①抗腫瘍効果をしめす至適な照射量の確認、②レーザー光線照射が癌細胞と癌微小環境に与える影響の評価、③内視鏡などに使用される細いファイバーからより広範囲の病変を治療するため、レーザー光を拡散させるデバイスの開発、を行っている。</p> <p><u>COVID-19感染拡大が及ぼす内視鏡下手術への影響の評価</u> NCDデータベースを用いて、COVID-19感染拡大が内視鏡下手術に与えた影響を明らかにすることである。主要な内視鏡下手術の手術件数の変化や手術成績をしらべることにより、COVID-19感染拡大時における内視鏡下手術の問題点や課題を明らかにする。</p> <p><u>大腸癌再発における腸内細菌叢の変化に関する研究</u> 腸内細菌が発癌や予後に影響すると考えられている大腸癌に関して、周術期の腸内細菌叢の構成や変化と大腸癌の再発の有無を調べることにより、大腸癌再発に關与する腸内細菌叢を明らかにする。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、Current Status of Endoscopic Surgery in Japan: The 15th National Survey of Endoscopic Surgery by the Japan Society for Endoscopic Surgery Asian J Endosc Surg. 2021</li> <li>2018年Clinical Impact of Laparoscopic Intersphincteric Resection following Neoadjuvant Chemoradiotherapy for Locally Advanced Rectal Cancer: Case controlled study. Annals of Laparoscopic and Endoscopic Surgery, 3:37, 2018</li> <li>2016年Prognostic factors in advanced gastric cancer patients with suprapancreatic lymph node metastasis. Journal of Gastrointestinal cancer and stromal tumor. 1: 102, 2016</li> <li>2004年Re-evaluation of mucin phenotypes of gastric minute well-differentiated-type adenocarcinomas using a series of HGM, MUC5AC, MUC6, M-GGMC, MUC2 and CD10 stains Pathol Int. 54(5):311-21, 2004.</li> </ol>

- 役員
- 大学院教育学研究科  
教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

所属・職位	医学部附属病院小児科・講師	
氏名	関口 和人 (Sekiguchi Kazuhito)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	小児科学
研究キーワード	新生児、栄養、SGA児、オートファジー
研究内容	<p>●網羅的代謝物解析によるSGA児の新たな発達予測因子の探求</p> <p>本研究は胎児発育遅滞の発生要因の究明や新生児発達の予測因子の究明に向けた基礎的知見を見出すことを目的としています。妊娠期間に比して低体重で出生した新生児では運動発達遅滞に加え、精神発達遅滞や情緒行動の異常を呈するリスクが高いとされています。その傾向は早産のみならず、正常産においても認められます。</p> <p>我々は、妊娠期間に比して低体重で出生した新生児は胎児期に何らかの特徴的な代謝特性を持ち、例えば神経伝達物質の増減や神経組織形成障害を通じて神経発達に影響するのではないかと考えました。本研究では臍帯静脈血および新生児血の網羅的な代謝物解析を行うことで、胎児発育に関与する代謝物や代謝経路を明らかにしていきます。</p> <p style="text-align: right;">(科研費 基盤研究 (C) 21K07774)</p> <p>●肝臓のオートファジーが新生児期に果たす役割の検討</p> <p>我々は先行研究において、新生児の肝臓オートファジーと肝細胞のミトコンドリア形態に関連があることを明らかにしました (論文①)。</p> <p>本研究は、新生児の肝臓においてオートファジーがミトコンドリア活性 (働き) にどのような機序で関与するのかを明らかにすることを目標としています。この研究により肝臓オートファジーの新生児期における役割、例えば感染免疫や解毒作用への貢献が明らかになれば、新生児集中治療室における敗血症や代謝異常症管理の新たなバイオマーカーや治療法の確立の第一歩となり得ます。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文① Sekiguchi K, Miyahara H, Inoue M, Maeda T, Ihara K. The autophagy reaction in the human umbilical cord: a potential marker for estimating fetal nutrition and neonatal growth. J Matern Fetal Neonatal Med. 2022 ; 35 : 625-629.</p> <p>論文② Sekiguchi K, Miyahara H, Inoue M, Kiyota K, Sakai K, Hanada T, Ihara K. Metabolome Characteristics of Liver Autophagy Deficiency under Starvation Conditions in Infancy. Nutrients. 2021 ; 13 : 3026</p> <p>論文③ Sekiguchi K, Itonaga T, Maeda T, Fukami M, Yorifuji T, Ihara K*. A case of CHARGE syndrome associated with hyperinsulinemic hypoglycemia in infancy. Eur J Med Genet. 2018 ; 61 : 312-314.</p>

所属・職位	医学部附属病院放射線科・講師	
氏名	高司 亮 (Takaji Ryo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2016年9月	
SDGs目標		

研究分野	放射線医学
研究キーワード	腹部画像診断 インターベンショナルラジオロジー(IVR)
研究内容	<p>主に腹部領域で画像診断及びインターベンショナルラジオロジーに関する研究を行っています。MDCTやMRIを用いた腹部間膜画像解剖や膵臓の画像診断、泌尿生殖器領域の画像診断およびインターベンショナルラジオロジーに興味を持って研究に従事しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 腹部間膜の画像診断 <ul style="list-style-type: none"> <li>・後腹膜解剖の個体差に関する研究(業績1)。</li> </ul> </li> <li>② 膵臓の画像診断 <ul style="list-style-type: none"> <li>・小径膵癌のCT画像所見に関する研究(業績2)。</li> <li>・早期膵癌のCT画像所見に関する研究(業績3)。</li> </ul> </li> <li>③ 婦人科領域の急性疾患を対象とした画像診断 <ul style="list-style-type: none"> <li>・婦人科急性腹症のCT診断に関する研究。</li> <li>・産科出血の血管造影所見やインターベンショナルラジオロジーに関する研究(業績4)。</li> </ul> </li> <li>④ 泌尿器領域の画像診断 <ul style="list-style-type: none"> <li>・前立腺癌のMRI診断に関する研究。</li> </ul> </li> </ol> <p>日常診療で感じた疑問を掘り下げて臨床に根ざした研究をするように心掛けています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1) Takaji R, Mori H, Yamada Y, et al. Medial pathway patterns of the right retromesenteric plane: anatomical investigation using MDCT in patients with acute pancreatitis and pyelonephritis. Br J Radiol. 2016;89(1059):20150471. doi: 10.1259/bjr.20150471. Epub 2015 Dec 23.</p> <p>2) Takaji R, Tamada Y, Matsumoto S, et al. Small pancreatic ductal carcinomas on triple-phase contrast-enhanced computed tomography: enhanced rims and the pathologic correlation. Abdom Radiol (NY). 2018 Dec;43(12):3374-3380. doi: 10.1007/s00261-018-1645-6.</p> <p>3) Takaji R, Yamada Y, Shimada R, et al. Retrospective evaluation of venous phase contrast-enhanced computed tomography images in patients who developed pancreatic adenocarcinomas after treatment for nonpancreatic primary cancer. BJR Open. 2021 Jul 5;3(1):20200069. doi: 10.1259/bjro.20200069. eCollection 2021.</p> <p>4) Takaji R, Kiyosue H, Maruno M, et al. Angiographic features and transarterial embolization of retained placenta with abnormal vaginal bleeding. CVIR Endovasc. 2021 Nov 2;4(1):77. doi: 10.1186/s42155-021-00265-z.</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部




医学部附属病院

理工学部

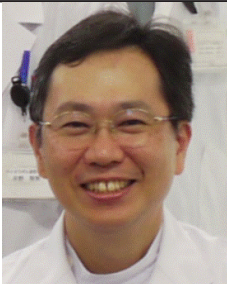

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	医学部附属病院輸血部・講師	
氏名	高野 久仁子 (Takano Kuniko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年12月	
SDGs目標	 	

研究分野	血液内科学
研究キーワード	造血幹細胞移植、移植後HHV-6脳炎、造血幹細胞移植後合併症、移植後LTFU
研究内容	<p>● 同種造血幹細胞移植後ヒトヘルペスウイルス6(HHV-6)脳炎について、重症化に関する髄液および血漿サイトカインの動態についての検討</p> <p>同種造血幹細胞移植後の重篤な中枢神経合併症である移植後ヒトヘルペスウイルス6脳炎について、その疾患概念、診断、治療法の確立に向け世界を牽引してきた緒方正男教授のご指導の下、移植後HHV-6脳炎発症例の多くが、生着症候群をはじめとする移植後早期免疫反応に引き続き、脳炎を発症していることより高サイトカイン血症の関与について着目し、移植後HHV-6脳炎の重症化と髄液および血漿サイトカインの動態について検討を行いました。移植後HHV-6脳炎の重症化には、発症時の髄液IL-6、IL-8、および発症1週間前の血漿IL-6、IL-7、MCP-1、IL-12、髄液ウイルス量の関与が示唆され、特に、髄液IL-6、IL-8については病態形成への関与や中枢神経系の炎症の強さを反映するため、予後予測に有用なバイオマーカーとなり得ることが示唆されました(論文1)。脳炎の重症化に過剰な免疫反応が関与するならば、免疫抑制剤の強化や抗サイトカイン療法によって脳炎の重症化を抑制に繋げることができないか、が今後の研究課題である。</p> <p>● 同種造血幹細胞移植後合併症の克服のための研究</p> <p>同種造血幹細胞移植後の合併症克服のため日本造血細胞移植学会・合併症ワーキンググループに参加している。全国データを用い、移植前DMの存在が移植成績に与える影響について同種移植例9478例を対象に後方視的解析を行い、移植前の糖尿病の存在は、documented infectionの累積発症率を上昇させ、特にムーコル症の発症リスクは有意に上昇すること、移植前の糖尿病の存在は非再発死亡特に感染症死亡のリスク因子となることを明らかにし、論文発表を行なった(論文2)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. Takano K, Ogata M, Satou T, Miyazaki Y, Otsuka E, Saito N, Ueki T, Kako S, Fukuda T, Shirao K. Correlations of cytokine levels in cerebrospinal fluid and peripheral blood with outcome of HHV-6B encephalitis after hematopoietic stem cell transplantation. <i>Transpl Infect Dis</i> 21: e13172, 2019.</p> <p>2. Takano K, Fuji S, Uchida N, Ogawa H, Ohashi K, Eto T, Sakamaki H, Morishima Y, Kato K, Suzuki R, Fukuda T. Pre-transplant diabetes mellitus is a risk factor for non-relapse mortality, especially infection-related mortality, after allogeneic hematopoietic SCT. <i>Bone Marrow Transplant</i>. 50: 553-8, 2015.</p> <p>3. Takano K, Ogata M, Kawano R, Satou T, Nashimoto Y, Shirao K. Comparison of HHV-6 DNA detection in plasma and whole blood in allogeneic hematopoietic stem cell transplant recipients: frequent false-positive results for active HHV-6 infection using whole blood samples. <i>Int J Hematol</i>. 108: 535-542, 2018.</p> <p>4. Fuji S, Hirakawa T, Takano K, Doki N, Sawa M, Kanda Y, Uchida N, Ara T, Miyamoto T, Eto T, Matsuoka KI, Kawakita T, Ozawa Y, Katayama Y, Onizuka M, Fukuda T, Atsuta Y, Nakasone H. Disease-specific impact of anti-thymocyte globulin in allogeneic hematopoietic cell transplantation: a nationwide retrospective study on behalf of the JSTCT, transplant complications working group. <i>Bone Marrow Transplant</i>. Online ahead of print. PMID: 35039621, 2022 Jan.</p> <p>●著書</p> <p>緒方正男、高野久仁子、橋井佳子、植木俊光、森康雄. 造血細胞移植ガイドライン, HHV-6 (第2版) 日本造血・免疫細胞療法学会 (JSTCT)  <a href="https://www.jshct.com/uploads/files/guideline/01_03_03_hhv6_02.pdf">https://www.jshct.com/uploads/files/guideline/01_03_03_hhv6_02.pdf</a></p>

所属・職位	医学部附属病院検査部・講師	
氏名	手嶋 泰之 (Teshima Yasushi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2000年3月	
SDGs目標		

研究分野	循環器病学、臨床検査医学
研究キーワード	心筋虚血再灌流障害、血糖変動
研究内容	<p>・ 糖尿病が心機能に及ぼす影響と心疾患との関連についての研究 糖尿病モデル動物では心筋内のカルシウム動態の異常が出現しており左室拡張機能の低下につながる可能性を見出し報告した (論文1)。また糖尿病心筋における活性酸素種の増加とその機序としてカルシウムカルモジュリン依存性蛋白質キナーゼが関与することを見出した (論文2, 3)。</p> <p>・ 心筋虚血再灌流障害の軽減に関する研究 心筋代謝、ミトコンドリア機能を制御することにより心筋虚血再灌流に対して心保護効果をもたらすことを報告した (論文4, 5)。</p> <p>・ 血糖変動が心筋、心機能に及ぼす影響に関する研究 上記の研究を行なう中で、高血糖状態が持続する病態よりも血糖変動が大きい方が心筋細胞に与えるダメージが大きいのではないかと印象を得た。まず長期間の血糖変動への曝露が心房組織の変性をもたらし心房細動を惹起することを発見し (論文6)、さらに血糖変動が虚血再灌流による心筋ダメージを拡大することを発表した (論文7)。以上の基礎実験で得られた知見を基に、心不全患者の血糖モニタリングを行なった結果、多くの心不全患者において夜間から早朝に低血糖を認め論文として報告した (論文8)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>【論文】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <u>Teshima Y</u>, et al. Diminished expression of sarcoplasmic reticulum Ca<sup>2+</sup>-ATPase ryanodine sensitive Ca<sup>2+</sup> channel mRNA in streptozotocin-induced diabetic rat heart. <b>J. Mol. Cell. Cardiol</b>, <b>32</b> 655-664, 2000</li> <li>2. Nishio S, <u>Teshima Y</u>, et al. Activation of CaMKII as a key regulator of reactive oxygen species production in diabetic rat heart. <b>J Mol Cell Cardiol</b> <b>52</b>: 1103-1111, 2012</li> <li>3. <u>Teshima Y</u>, et al. Production of reactive oxygen species in the diabetic heart. Roles of mitochondria and NADPH oxidase. <b>Circ J</b> <b>78</b>: 300-306, 2014</li> <li>4. <u>Teshima Y</u>, Akao M, Jones SP, Marbán E. Uncoupling protein-2 overexpression inhibits mitochondrial death pathway in cardiomyocytes. <b>Circ Res</b>, <b>93</b> 192-200, 2003</li> <li>5. <u>Teshima Y</u>, Akao M, Jones SP, Marbán E. Cariporide (HOE642), a selective Na<sup>+</sup>-H<sup>+</sup> exchange inhibitor, inhibits the mitochondrial death pathway. <b>Circulation</b>, <b>108</b> 2275-81, 2003</li> <li>6. Saito S, <u>Teshima Y</u>, et al. Glucose fluctuations increase the incidence of atrial fibrillation in diabetic rats. <b>Cardiovasc Res</b> <b>104</b>: 5-14, 2014</li> <li>7. Saito S, Thuc LC, <u>Teshima Y</u>, et al. Glucose fluctuations aggravate cardiac susceptibility to ischemia/ reperfusion injury by modulating microRNAs expression. <b>Circ J</b> <b>80</b>: 186-195, 2016</li> <li>8. <u>Teshima Y</u>, et al. Potential risk of hypoglycemia in patients with heart failure. <b>Int Heart J</b> <b>61</b>: 776-780, 2020</li> </ol> <p>【著書】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 手嶋泰之 シンプル循環器学 (犀川哲典、小野克重 編) 8章第三部 循環器疾患に有用な血液検査、バイオマーカー 139-143, 15章 心不全 243-268 南江堂, 2015</li> <li>2. 手嶋泰之、高橋尚彦 知っておきたい臨床検査値 (第2版) (日本薬学会編) 第三部17章 循環器疾患、65-67, 2019</li> <li>3. 手嶋泰之 臨床検査のガイドライン JSLM2021, 第2章 症候 循環器「動悸」, 2021</li> </ol>

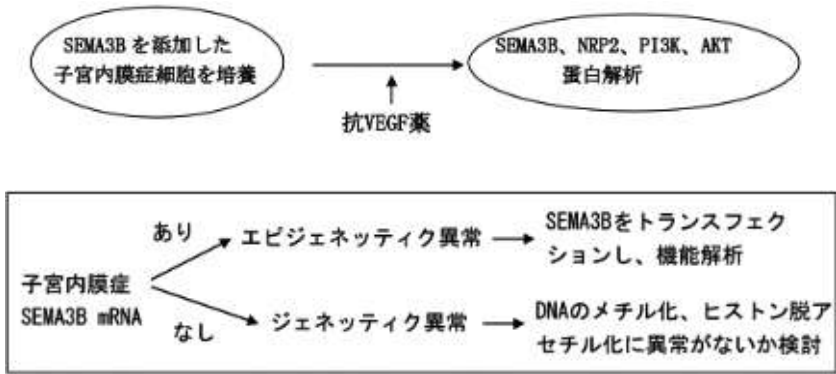
所属・職位	医学部附属病院産科婦人科・講師	
氏名	西田 正和 (Nishida Masakazu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2005年3月	
SDGs目標	 産業と技術革新の基盤をつくろう	

研究分野	産科婦人科学
研究キーワード	子宮内膜症、semaphorin、neuropilinm、PI3k

**研究内容**

子宮内膜症の病因には月経血の逆流説、体腔上皮化生説など緒説あるが、その根本的な病因は不明である。現在、子宮内膜症の病態解明および治療薬の開発に取り組み、日々研究を進めている。今回、SEMA3BとそのレセプターであるNRP2が関与していることに着目し、PI3k-AKT-mTOR系のシグナル伝達異常について研究を進めている。

現在、子宮内膜症細胞において、semaphorin (SEMA) 3Bの発現減少に起因するPI3k-AKT-mTOR経路の伝達異常を発見している。子宮内膜症細胞では正常子宮内膜間質細胞と比較してSEMA3BとNER2の蛋白発現が減弱している。この原因を明らかにするため、①子宮内膜症細胞にSEMA3Bを作用させることでPI3k-AKT-mTOR系の細胞伝達異常が正常化し、子宮内膜症の病態が改善するか②抗VEGF薬 (VEGFはNRP2のリガント) を子宮内膜症細胞に作用後、PI3k-AKT-mTOR系のシグナル伝達経路が正常化するのか③SEMA3Bの発現低下はジェネティック、あるいはエピジェネティックな要因なのかという部分を解明すべく研究を進めており、将来の子宮内膜症の治療薬の開発を目指している。



**研究業績・アピールポイント**

{beta}-Hydroxyisovalerylshikonin induces apoptosis and G0/G1 cell-cycle arrest of endometrioticstromal cells: a preliminary invitro study. Masakazu Nishida,Kaei Nasu, Tami Ueda, Akitoshi Yuge,NoriyukiTakai, Hisashi Narahara. Hum Reprod. 21(11): 2850-6, 2006)

Application of the nuclear factor- $\kappa$ B inhibitor, BAY 11-7085, for the treatment ofendometriosis: an in vitro study.Kaei Nasu,Masakazu Nishida,Tami Ueda, Akitoshi Yuge,Noriyuki Takai, Hisashi Narahara.Am J Physiol Endocrinol Metab.293(1): E16-23. 2007Role of chemokines in the pathogenesis of endometriosis. Masakazu Nishida,Kaei Nasu,HisaashiNaraharaFront Biosci (Schol Ed).1(3): 1196-1204, 2011

Reversal of gene dysregulation in cultured cytotrophoblasts reveals possible causes of preeclampsia.Zhou Y, Gormley MJ, Hunkapiller NM, Kapidzic M, Stolyarov Y, Feng V,Masakazu Nishida,Drake PM, Bianco K, Wang F, McMaster MT, Fisher SJ.J Clin Invest.123(7):2862-72.2013

所属・職位	医学部附属病院呼吸器・感染症内科・講師	
氏名	濡木 真一 (Nureki Shinichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2005年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	呼吸器内科学	
研究キーワード	肺線維症	
研究内容	<p>●特発性肺線維症の病態解明</p> <p>特発性肺線維症は、進行性・不可逆性に肺線維化を来す難治性疾患である。原因は不明のものが多く、遺伝性肺線維症の原因遺伝子であるSP-C遺伝子変異は、線維化に対する影響力が高い。SP-C遺伝子変異は、細胞の自浄作用であるオートファジーの阻害に引き続いて起こるII型肺胞上皮細胞上皮障害を引き起こす。我々は、実際の患者の遺伝子変異をマウスに組み込み、肺線維症を自然発症する<i>sftpc</i><sup>L73T</sup>ノックインマウスの樹立に世界で初めて成功した。現在同マウスを用いてさらなる肺線維症の病態解明を行っている。</p> <p>●特発性肺線維症のバイオマーカー探索</p> <p>既存の診断・疾患活動性バイオマーカーはまだ不十分な点がある。一方、メタボローム解析は代謝物を一斉分析する技術であり、その臨床応用が急速に進んでおり、難治性疾患の新たな病態解析方法として注目を集めている。特発性肺線維症における代謝異常を同定し、診断のためのバイオマーカーを探索するとともに治療薬のターゲットを探索もしている。</p> <p>●特発性肺線維症の治療薬開発</p> <p>診断確定後の平均余命はわずか2.5~5年であり、予後を改善する治療法の開発が社会から求められている。医薬基盤研究所との共同研究として官民研究開発投資拡大プログラム事業「新薬創出を加速する人工知能の開発」に参加している。九州工業大学、本学の臨床薬理学教室、薬理学教室とグループを組んで研究を行い、特発性肺線維症の治療ターゲットを見出している。現在SP-Cノックインマウス、臨床サンプルを用いて治療薬開発のための研究を継続している。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.nibiohn.go.jp/prism/works/">https://www.nibiohn.go.jp/prism/works/</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. Nureki SI, et al. Expression of mutant <i>Sftpc</i> in murine alveolar epithelia drives spontaneous lung fibrosis. <i>J Clin Invest</i>. 2018 Aug 31;128(9):4008-4024.</p> <p>●受賞</p> <p>2016年 Respiration Research Retreat (Philadelphia, USA) — Best Poster Award  2018年 第58回日本呼吸器学会学術講演会 — International Session Award  2018年 日本サーファクタント・界面医学会第54回学術研究会 — Best Poster Award  2019年 第18回肺分子病態研究会 — 奨励賞  2020年 日本サーファクタント・界面医学会第56回学術研究会 — 学会奨励賞  2020年 第10回中塚医学賞</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部




医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部



その他学内施設等





所属・職位	医学部附属病院麻酔科・講師	
氏名	日高 正剛 (Hidaka Seigo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2010年1月	
SDGs目標	  	

研究分野	麻酔科学、集中治療医学
研究キーワード	周術期管理、急性肺傷害、敗血症、人工呼吸管理、血液浄化療法
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>HMGB1を標的とした血液浄化の新たな敗血症治療法の開発</li> <li>重症敗血症における酸化ストレス制御を目的とした新たな血液浄化カラムの開発</li> <li>HFVCHDFが重症患者の病態改善に及ぼす影響の検討</li> <li>急性血液浄化が各種抗菌薬の血中濃度変化に及ぼす影響の検討</li> <li>重症患者における各種感染症に対する抗菌薬療法効果の検討</li> <li>リンファンゴ オキシゲン-アルドステロン系制御による臓器保護効果の検討</li> <li>急性肺傷害治療法の検討</li> <li>人工呼吸管理法に関する検討</li> <li>心臓手術後の呼吸管理</li> <li>高侵襲手術における輸液、循環管理に関する検討</li> </ol>
研究業績・アピールポイント	<p><b>論文</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Gabexate mesilate inhibits the expression of HMGB1 in lipopolysaccharide-induced acute lung injury. J Surg Res. 165(1): 142-50. 2011</li> <li>Dripenem Pharmacokinetics in critically ill patients receiving continuous hemodiafiltration (CHDF). Yakugaku Zasshi. 130(1), 87-94, 2010</li> <li>Effect of Hemopurification Rate on Doripenem Pharmacokinetics in Critically Ill Patients Receiving High-flow Continuous Hemodiafiltration. Yakugaku Zasshi. 131(9):1395-9, 2011</li> </ul> <p><b>著書</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>気管切開、はじめての人工呼吸管理—基本がわかると先が見える—, 62-68, 2012</li> <li>SLEDD(slow low-efficiency daily dialysis), 日本急性血液浄化学会標準マニュアル, 72-5, 2013</li> <li>心臓手術後の呼吸管理. 徹底ガイド 心臓麻酔Q&amp;A, 231-6, 2013</li> <li>【PACO<sub>2</sub>とPAO<sub>2</sub>は肺胞内でいす取りゲームをしている?】A-aDO<sub>2</sub>が必要な理由がわかった! 呼吸器ケア, 13(5): 25-29, 2015</li> <li>周術期の輸液管理, 臨床麻酔, 41(8): 1129-1136, 2017</li> </ul> <p><b>研究プロジェクト</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平成20年度～平成22年度 基盤研究 (C) 研究代表者 HMGB1を標的とした血液浄化による新たな敗血症治療法の開発</li> <li>平成24年度～平成26年度 基盤研究 (C) 研究代表者 重症敗血症における酸化ストレス制御を目的とした新たな血液浄化カラムの開発</li> <li>平成29年度～令和3年度 基盤研究 (C) 研究代表者 人工心肺中の血液浄化アプローチによる心臓手術関連急性腎傷害の新規予防法の開発</li> </ul>



所属・職位	医学部附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科・講師	
氏名	平野 隆 (Hirano Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1998年6月	
SDGs目標		

研究分野	粘膜免疫
研究キーワード	中耳炎、インフルエンザ菌、粘膜免疫
研究内容	<p>①急性中耳炎の病態と発症機序の解析</p> <p>インフルエンザウイルス感染により鼻咽腔粘膜糖鎖構造が変化し、インフルエンザ菌や肺炎球菌の鼻咽腔粘膜への定着性が亢進し、ウイルス感染後の急性中耳炎発症のメカニズムについて解析した。また、中耳での自然免疫応答について、Toll like receptor (TLR) 4欠損マウスを用いた急性中耳炎マウスモデルを確立し、TLR4とTLR2の発現が好中球の細菌貪食能に関与し、TLR4欠損により好中球の自然免疫防御能が低下する事を解明した。また、インフルエンザ菌においてPhosphorylcholineの発現によるphase variationが、鼻咽腔と中耳腔における細菌病原性に影響を与え、Phosphorylcholine発現陰性インフルエンザ菌では、中耳における細菌クリアランスが遅延することを解明している。</p> <p>②滲出性中耳炎の成因と病態の解析</p> <p>インフルエンザ菌の菌体外膜の主要な成分の1つであるLipooligosaccharide(LOS)を含むエンドキシンを用いた滲出性中耳炎マウスモデルを作成し、サイトカイン発現と滲出性中耳炎発症へ関与について解明している。また、顕微鏡下にてマウスの耳管閉塞とエンドキシンを中耳に注入することにより、慢性滲出性中耳炎マウスモデルの作成に成功し、慢性中耳炎症病態の組織学的解析、慢性時におけるTNF-<math>\alpha</math>などの炎症性サイトカインの関与について解析した。また小児滲出性中耳炎患児の上咽頭より採取したインフルエンザ菌にphase variationを認めることを示し、臨床経過の解析やin vitroでの培養組織を用いた細菌定着実験を行い、Phosphorylcholineの表出が、滲出性中耳炎の遷延化に関与している事を解析している。</p> <p>③慢性中耳炎の病態と局所免疫応答の解析</p> <p>耳管閉塞およびインフルエンザ菌投与による慢性中耳感染マウスモデルの作成に成功し、その病態につき組織学的変化ならびに細胞および分子生物学的解析を行い、慢性炎症には制御性T細胞、<math>\gamma\delta</math>T細胞、Th1、Th2、及びTh17細胞など様々なリンパ球が関与することを研究し、中耳のインフルエンザ菌慢性感染には、中耳粘膜に存在する制御性T細胞が局所免疫寛容に関与していることを示し、抗CD25抗体分子標的治療の可能性についても研究している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>①今までも粘膜ワクチン開発のため、科学研究費を獲得しており、最近においても以下のように研究代表者として研究資金を獲得している。</p> <p>1) 科学研究費 基盤研究 (C) 平成31年～令和4年 研究課題名：上下気道粘膜免疫における経年的免疫動態の解析 研究代表者：平野 隆 研究経費 3,200,000円</p> <p>②学会発表においても、海外を始め研究結果を報告している。 21st International Symposium on Recent Advances in Otitis Media, Jun 11-12 2021,UK. Hirano T, Kawano T, Yoshinaga K, Matsunaga T, Suzuk M: Effect of aging mucosal immune responses against nontypeable Haemophilus influenzae in upper airway.</p> <p>③論文においても論文作成や論文作成指導を行っている。 Hirano T. et al. , Interaction between regulatory T cells and antibody-producing B cells for immune responses at the upper respiratory mucosa against nontypeable Haemophilus influenzae: In vitro assay model. Ann Otol Rhinol Laryngol. 2019;128(6 suppl):45S-51S. 他</p>

所属・職位	医学部附属病院放射線科・講師	
氏名	本郷 哲央 (Hongo Norio)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2007年12月	
SDGs目標	  	

研究分野	画像診断 血管内治療 画像下治療 Interventional Radiology
研究キーワード	腹部画像診断 CT,MRI 大動脈ステントグラフト 経皮的血管形成術
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>大動脈血管内治療に関する研究 胸部, 腹部大動脈瘤に対するステントグラフトを主体とした血管内治療の有効性, 安全性向上, 適応の拡大に関する研究 とくに <ul style="list-style-type: none"> <li>・分枝再建を伴うステントグラフト治療 (資料5, 6)</li> <li>・エンドリークに対する予防, 制御 (資料4, 7)</li> <li>・安全性向上に対する試み</li> </ul> </li> <li>血管に於ける画像を用いた新たな低侵襲治療法や器具の開発 Interventional Radiology (画像下治療) における低侵襲治療法に資するカバードステント, 塞栓デバイス, 塞栓法の開発 (資料1, 3)</li> <li>Dual energy CT, MRIを用いた大動脈画像診断法に関する研究 大動脈血管内治療における術前, 術後の画像診断, とくにエンドリークの診断法の開発 (資料2)</li> </ol>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 科学研究費助成事業 研究代表者 本郷 哲央 研究期間 (年度)2019 -2022 盤研究(C) ナノ炭素複合素材と電界紡糸技術を用いた高生体適合性細径カバードステントの開発</li> <li>2) 科学研究費助成事業 研究代表者 本郷 哲央 研究期間 (年度)2014 -2016 基盤研究(C) Dual energyと超遅延相造影CTによる4次元CT血管造影エンドリーク診断</li> <li>3) Hongo, N. et al.:Vessel Occlusion using Hydrogel-Coated versus Nonhydrogel Embolization Coils in Peripheral Arterial Applications: A Prospective, Multicenter, Randomized Trial. J Vasc Interv Radiol 32:602-609 e601, 2021.</li> <li>4) Hongo, N. et al.:Sac Expansion with Vasa Vasorum-Related Type II Endoleak after Endovascular Aortic Repair Managed by Translumbar Direct Sac Embolization Using Glue. Interventional Radiology 4:27-31, 2019.</li> <li>5) Hongo, N. et al.:Back Table Modification of Bifurcated Endurant Stent Graft to Aorto-Uni-Iliac Stent Graft to Treat Chronic Failure of Endovascular Abdominal Aortic Repair (EVAR) for Abdominal Aortic Aneurysm. Interventional Radiology 1:18-20, 2016.</li> <li>6) Hongo, N. et al.: "Squid-capture" modified in situ stent-graft fenestration technique for aortic arch aneurysm repair. Cardiovasc Intervent Radiol 37:1093-1098, 2014.</li> <li>7) Hongo, N. et al.:Double coaxial microcatheter technique for transarterial aneurysm sac embolization of type II endoleaks after endovascular abdominal aortic repair. J Vasc Interv Radiol 25:709-716, 2014.</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院脳神経内科・講師	
氏名	増田 曜章 (Masuda Teruaki)	
取得学位	博士 (医学)、熊本大学、2018年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	ライフサイエンス、神経内科学、病態検査学
研究キーワード	小径線維ニューロパチー、末梢神経障害、自律神経障害、認知症
研究内容	<p>●<u>小径線維ニューロパチーの早期診断および病態評価に有用なサロゲートマーカーの確立</u></p> <p>本疾患群は、A<math>\beta</math>線維およびC線維の障害により自律神経障害や感覚障害が出現し、糖尿病、アミロイドニューロパチー、膠原病、高齢者の原因不明のしびれ (特発性) など様々な末梢神経障害に関与する。本病態は神経伝導検査など従来の検査法では、異常の検出が困難であるため適切な診断がされず可逆的な時期での早期診断および治療介入が遅れることが多い。本病態の評価法として、これまでに自身が確立し、皮神経に着目した病理学的検査法 (論文1) を上回る、さらに独自性の高い、かつ超早期診断のみならず、進行度の評価、正確な治療効果判定にも活用できるサロゲートマーカーの開発を目指す。(論文3, 4)</p> <p>●<u>自律神経障害の客観的評価法および治療法の開発</u></p> <p>自律神経系は臓器および器官の制御を行い、生体の恒常性の維持に重要な役割を果たす。様々な疾患に伴う自律神経の異常は、全身に極めて多彩な症状を引き起こし、QOLを大きく損なう。神経内科領域の疾患を中心に、病態に応じた多角的な自律神経機能検査法の開発および治療法の開発を目指す。(論文2, 著書1)</p> <p>●<u>認知症の早期診断に有用なバイオマーカーおよび治療法の開発</u></p> <p>アルツハイマー病および軽度認知障害を中心に、認知症発症リスクを予知するバイオマーカーの検索および治療法の開発を目的として、臨床研究および基礎研究を行う。(論文5)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Masuda T, Ueda M, Suenaga G, et al. Early skin denervation in hereditary and iatrogenic transthyretin amyloid neuropathy. <i>Neurology</i> 88: 2192-2197, 2017.</li> <li>Ikeda T, Masuda T, Ueda M, et al. Unwanted road to anaemia in transthyretin familial amyloid polyneuropathy may continue irrespective of tafamidis treatment. <i>Ann Clin Biochem</i> 55: 571-575, 2018.</li> <li>Masuda T, Ueda M, Kitajima M, et al. Morphology of lumbosacral dorsal root ganglia and plexus in hereditary transthyretin amyloidosis. <i>Neurology</i> 91: e1834-e1835, 2018.</li> <li>Misumi Y, Ueda M, Masuda T, et al. Characteristics of acquired transthyretin amyloidosis: A case series and review of the literature. <i>Neurology</i> 93: e1587-e1596, 2019.</li> <li>Inoue Y, Masuda T, Misumi Y, et al. Metformin attenuates vascular pathology by increasing expression of insulin-degrading enzyme in a mixed model of cerebral amyloid angiopathy and type 2 diabetes mellitus. <i>Neurosci Lett</i> 25: 762:136136, 2021.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>増田 曜章, 安東 由喜雄. 家族性アミロイドポリニューロパチーと自律神経障害. <i>自律神経</i> 55: 81-84, 2018.</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年: 日本自律神経学会 学会賞</li> <li>2018年: The XVIth International Symposium on Amyloidosis Best Poster Award</li> <li>2016年: 第69回日本自律神経学会総会 優秀演題賞</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部





福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部附属病院整形外科・講師	
氏名	宮崎 正志 (Miyazaki Masashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	脊椎脊髄外科学、整形外科
研究キーワード	脊椎脊髄外科・後縦靱帯骨化症、側弯症、骨粗鬆症、脊椎固定、骨癒合
研究内容	<p><b>臨床研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 脊椎固定術における骨癒合研究と骨粗鬆症薬の重要性 骨粗鬆症薬は3つの側面を担っている。1つは椎体骨折予防のための骨粗鬆症の治療薬としての側面である。後の2つは骨粗鬆症患者に脊椎固定術を行う際に、脊椎インストルメントによる固定性の向上と骨癒合の向上を狙うものである。我々は様々な骨粗鬆症薬の脊椎固定術における骨癒合向上効果を研究し臨床的意義を検討している。</li> <li>● 遺残性側弯症の病態と治療 高難易度症例に対する治療戦略 成人期まで遺残した側弯症は、適切な治療や定期的な経過観察を受けておらず、有症状を訴えて来院することが多い。若年者の側弯症と比較して主カーブが大きく、rib humpが重篤で体幹や肩のバランス不全が認められる。主カーブの進行に関連する様々な合併症を引き起こし、心肺機能の低下や胃腸障害を呈している場合があり、思春期側弯例と比較すると問題点は多い。我々は遺残性側弯症の病態と、各種解離術と矯正術の手技的な安全性を確立するために様々なモダリティを用いて研究している。</li> </ul> <p><b>基礎研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本学術振興会 (JSPS) 基盤研究(C) ラット脊椎固定モデルにおけるBMPと抗スクレロチン抗体の相互効果の検討：研究代表者</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p><b>研究業績</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>Miyazaki M*</b>, Ishihara T, Abe T, Kanezaki S, Notani N, Sato S, Kataoka M, Tsumura H. Analysis of the reciprocal changes in upper cervical profile and the risk factors for cervical sagittal imbalance after laminoplasty for ossification of the posterior longitudinal ligament of the cervical spine. Clin Neurol Neurosurg. 2020</li> <li>2. <b>Miyazaki M*</b>, Ishihara T, Abe T, Kanezaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. Analysis of Reciprocal Changes in Upper Cervical Profiles after Posterior Spinal Fusion with the Simultaneous Double Rod Rotation Technique for Adolescent Idiopathic Scoliosis. Orthopaedics &amp; Traumatology: Surgery &amp; Research.2020</li> <li>3. <b>Miyazaki M*</b>, Abe T, Ishihara T, Kanezaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. Cervical alignment after single-level anterior cervical corpectomy and fusion using autologous bone graft without spinal instrumentation for cervical pyogenic spondylitis. Eur J Orthop Surg Traumatol. 2019</li> <li>4. <b>Miyazaki M*</b>, Ishihara T, Abe T, Kanezaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. The Position of the Spinal Cord Relative to the Vertebrae in Adolescent Idiopathic Scoliosis. Medicine (Baltimore). 2019</li> <li>5. <b>Miyazaki M*</b>, Ishihara T, Abe T, Kanezaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. Effect of intraoperative position in single-level transforaminal lumbar interbody fusion at the L4/5 level on segmental and overall lumbar lordosis in patients with lumbar degenerative disease. Medicine (Baltimore). 2019</li> </ol> <p><b>受賞歴</b></p> <p>平成20年 10月 2008 North American Spine Society Outstanding Paper Award 平成23年 9月 第6回日本脊椎脊髄病学会Asia Traveling Fellowship選出 平成28年 3月 第2回運動器疾患論文学術最優秀賞</p>



所属・職位	医学部附属病院呼吸器外科・講師	
氏名	宮脇 美千代 (Miyawaki Michiyo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2009年6月	
SDGs目標	  	

研究分野	腫瘍外科学
研究キーワード	肺癌、胸部悪性腫瘍、低侵襲手術
研究内容	<p>●呼吸器外科領域の低侵襲手術の開発 胸腔鏡手術やロボット支援下手術などの低侵襲手術は患者さんへの生活の質(Quality of Life: QOL)の向上に寄与する。手術の正確さや安全性を第一に考えた術式開発をすすめている。また、若手外科医への低侵襲手術の教育方法の研究も進めている。</p> <p>●縦郭腫瘍,胸壁腫瘍の治療開発 縦隔、胸壁腫瘍の低侵襲手術の術式の開発と、悪性腫瘍に対する殺細胞性抗癌剤、分子標的薬などの新規薬物の臨床試験に参画し、新たな標準治療のエビデンス構築と治療成績の向上に努めている。</p> <p>●胸部悪性腫瘍に対する治療開発とエビデンスの構築 胸部悪性腫瘍、特に局所進行肺癌の手術成績を改善するために、手術前後の薬物/放射線治療による集学的治療に関する全国的な臨床試験に参画している。特に薬物療法は、従来の殺細胞性抗癌剤に加え、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤などの新規薬物のエビデンスの構築に努めている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●縦郭腫瘍,胸壁腫瘍の治療開発 (論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2022年、Noda D, ..., Miyawaki M, et.al. Resection and postoperative radiation therapy for desmoid fibromatosis of the chest wall in a young woman. Surg Case Rep, 7(1):28</li> <li>2022年、Miyawaki M, et.al. Thymoma-associated myasthenia gravis coexisting with myotonic dystrophy: a case report. Surg Case Rep, 7(1):159</li> </ol> <p>●胸部悪性腫瘍に対する治療開発とエビデンスの構築 (論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年、Osoegawa A, ..., Miyawaki M, et.al. The positive relationship between <math>\gamma</math>H2AX and PD-L1 expression in lung squamous cell carcinoma. In Vivo. 32(1):171-177</li> <li>2018年、Hashimoto T, ..., Miyawaki M, et.al. Intratumoral heterogeneity of copy number variation in lung cancer harboring L858R via immunohistochemical heterogeneous staining. Lung Cancer. 124:241-247</li> <li>2018年、Osoegawa A, ..., Miyawaki M, et.al. Acquired resistance to an epidermal growth factor receptor-tyrosine kinase inhibitor (EGFR-TKI) in an uncommon G719S EGFR mutation. Invest New Drugs. 36(6):999-1005</li> <li>2022年、Okamoto T, Miyawaki M, et.al. Clinical significance of part-solid lung cancer in the eighth edition TNM staging system. Interact Cardiovasc Thorac Surg. 34(2): 219-226</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	医学部附属病院眼科・講師	
氏名	横山 勝彦 (Yokoyama Katsuhiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標	  	



研究分野	眼科学
研究キーワード	緑内障、角膜
研究内容	<p>研究内容</p> <p>1) 落屑緑内障発症における細胞外マトリックスと網膜表層微少循環の関与：落屑緑内障の発症および進行に眼圧非依存の因子 (TGF-<math>\beta</math>および網膜微少循環など) が含まれることを同定し、眼圧下降に依存しない新規薬物療法の開発を行う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>緑内障手術</p> <p>症例A</p> <p>眼圧が安定</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>TGF-<math>\beta</math> 濃度</p> <p>高い</p> <p>低い</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>毛細血管密度減少</p> <p>進行</p> <p>維持</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>緑内障手術後の視野障害</p> <p>視野がさらに悪化する</p> <p>視野が維持される</p> </div> </div> <p>2) 角膜疾患に対する新規外科的治療の開発：重症角膜疾患における外科的治療である角膜移植において、手術侵襲が少なく、術後の合併症を軽減するための手術方法の開発を行う。</p> 

研究業績・アピールポイント	<p>研究業績；</p> <p>論文</p> <p>1) The PI3K/Akt pathway mediates the expression of type I collagen induced by TGF-<math>\beta</math>2 in human retinal pigment epithelial cells. Yokoyama K, Kimoto K, Itoh Y, Nakatsuka K, Matsuo N, Yoshioka H, Kubota T. Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol. 250(1):15-23.2012.</p> <p>2) Deep Anterior Lamellar Keratoplasty and Peripheral Lamellar Keratoplasty for a Case of Severe Peripheral Ulcerative Keratitis. Yokoyama K, Nakamura R, Otsuka T, Kimoto K, Kubota K. Case Reports in Ophthalmology, 13:9-16 .2022.</p> <p>総説</p> <p>1) 【最新ツールで診療力アップ 緑内障診療トピック】 OCT Angiographyと緑内障 眼科グラフィック10巻3号：282-291, 2021</p>
---------------	--



所属・職位	医学部附属病院臨床薬理センター・講師	
氏名	和久田 浩一 (Wakuda Hirokazu)	
取得学位	博士 (医療薬学)、静岡県立大学、2012年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	臨床薬理学・薬理学・薬物動態学	
研究キーワード	PBPKモデル・ドラッグリポジショニング・メタアナリシス・P-糖タンパク質	
研究内容	<p>薬物動態学と基礎薬理学のバックグラウンドを持ち、それを活かして臨床薬理学の研究に取り組んでいる。現在の研究テーマは以下の3つである。</p> <p>① <b>生理学的薬物速度論 (Physiologically based pharmacokinetics: PBPK) モデルによる研究</b>  Covid-19の治療薬開発を目指して、Transmembrane protease, serine 2 (TMPRSS2) の阻害薬であるナファモスタットおよびカモスタットについてPBPK解析を行った。本研究の結果は、下記の学会で発表した。(仁田脇 麻衣, 和久田 浩一, 他. 第41回 日本臨床薬理学会学術総会 2020., Wakuda H, <i>et al.</i> The American Society for Clinical Pharmacology and Therapeutics (ASCPT) Annual Meeting 2021.)</p> <p>② <b>ドラッグリポジショニングの研究</b>  非アルコール性脂肪肝炎 (Nonalcoholic steatohepatitis: NASH) の治療薬は未だ無い。特発性肺線維症の治療薬にニンテダニブがある。ニンテダニブは線維化に関わるTGF-<math>\beta</math>を阻害するため、NASHの治療薬としてドラッグリポジショニングを目指して研究を行った。(Wakuda H, <i>et al.</i> 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology, 2018., Susutlertpanya W, Wakuda H, <i>et al.</i> 第70回 日本薬理学会 北部会 2019.)</p> <p>③ <b>メタアナリシスを用いた研究</b>  鎮痛薬であるヒドロモルフォンとオキシコドンの鎮痛効果および副作用に関してメタアナリシスにより解析した。(和久田 浩一, 他. 第4回 日本臨床薬理学会 東海・北陸地方会 2019.)</p> <p>2022年1月よりUniversity of California, San Francisco(UCSF)LZ Benet教授のラボに留学中。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>・論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Susutlertpanya W, <u>Wakuda H</u>, Otani N, Kuramoto T, Li L, Kuranari M, Sekiguchi A, Kudo H, Uchida T, Imai H, Uemura N. Histological evaluation of nintedanib in non-alcoholic steatohepatitis mice. <i>Life sciences</i> 228: 251-257, 2019.</li> <li>Otani N, <u>Wakuda H</u>, Imai H, Kuranari M, Ishii Y, Ito Y, Okubo A, Ogawa O, Takeda K, Ohyama T, Hasunuma T, <u>Uemura N</u>. No Effect of Digoxin on Rosuvastatin Pharmacokinetics in Healthy Subjects: Utility of Oita Combination for Clinical Drug-Drug Interaction Study. <i>Clinical and translational science</i>. 12(5): 513-518, 2019.</li> <li><u>Wakuda H</u>, Okura T, Maruyama-Fumoto K, Kagota S, Ito Y, Miyauchi-Wakuda S, Otani N, Uemura N, Yamada S, Shinozuka K. Effects of Anticholinergic Drugs Used for the Therapy of Overactive Bladder on P-Glycoprotein Activity. <i>Biological &amp; pharmaceutical bulletin</i> 42(12): 1996-2001, 2019.</li> </ol> <p>・特許  特許第7061310号 慢性脂肪性疾患の予防および治療用医薬 上村 尚人, 大谷 直由, <u>和久田 浩一</u></p>	

所属・職位	医学部附属病院麻酔科・助教	
氏名	安部 隆国 (Abe Takakuni)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2005年3月	
SDGs目標	  	



研究分野	麻酔科学、集中治療医学
研究キーワード	集中治療、急性腎傷害、腎代替療法、腎バイオマーカー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●急性腎傷害患者に対する持続的腎代替療法の終了基準の模索 重症急性腎傷害(AKI)に対する治療法として持続的腎代替療法(CRRT)が普及し、有効な治療手段として確立されているが、CRRTを終了する適切なタイミングについての研究報告は少ない。CRRTを終了すべき適切なタイミングを知ることは治療対象患者の転帰の改善のみならず医療経済面においても非常に重要な意義を持つと考えられており、CRRT施行患者における腎機能評価法を模索し、AKIに対するCRRTの適切な終了基準を明らかにすることで患者転帰の改善や医療コスト削減につなげることを研究目的としている。</p> <p>●平成29年5月 日本集中治療医学会第1回九州支部学術集会 最優秀演題賞受賞 「敗血症性急性腎傷害に対する腎代替療法の離脱基準に関する後方視的検討」</p>

所属・職位	医学部附属病院肝疾患相談センター・助教	
氏名	荒川 光江 (Arakawa Mie)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標		

研究分野	肝疾患・自己免疫性肝障害
研究キーワード	肝炎・自己免疫性肝炎・原発性胆汁性胆管炎
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>自己免疫性肝障害の臨床研究を主にしています。 また、肝疾患相談センターでは、肝疾患診療連携拠点病院として大分県とともに肝炎・肝がん撲滅運動の仕事をさせていただいております。</p> <p>The effects of branched-chain amino acid granules on the accumulation of tissue triglycerides and uncoupling proteins in diet-induced obese mice. Endocrine Journal (0918-8959)58巻3号 Page161-170(2011.03) 先天性肝線維症に増大する限局性結節性過形成類似病変を合併した1例. 肝臓 (0451-4203)56巻9号 Page461-468(2015.09)</p>

所属・職位	医学部附属病院精神科・助教	
氏名	泉 寿彦 (Izumi Toshihiko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標		

研究分野	精神神経医学
研究キーワード	気分障害、双極性障害、サングラス、非薬物療法
研究内容・研究業績・アピールポイント	双極性障害の治療においてサングラス搔痒による抗躁効果に関する研究 双極性障害の治療には暗室に長時間滞在する暗闇療法があるが、患者に負担が大きい。サングラスの装用により光を制限することで抗躁効果が得られる。昼間に灰色サングラスを装着することで、オレンジ色サングラスや透明サングラスよりも強い抗躁効果が発揮されるかについて研究する。

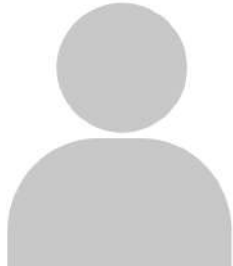

所属・職位	医学部附属病院血液内科・助教	
氏名	井谷 和人 (Itani Kazuhito)	
取得学位	学士 (理学)、大阪大学、2002年3月 学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標		

研究分野	血液学
研究キーワード	造血幹細胞移植、造血器腫瘍
研究内容・研究業績・アピールポイント	●実診療での示唆に富む症例や新しい知見についての報告を実施(学会発表 1-5) 1. 2011年, 同種骨髄移植後の血球貪食症候群に対してトロンボモジュリン・アルファを投与したAML症例, 第33回 日本造血細胞移植学会総会 学会発表 2. 2013年, 原発性形質細胞白血病の同種移植後再発に対してDLIにBortezomibを併用した1例, 第35回 日本造血細胞移植学会総会 学会発表 3. 2013年, Report on nilotinib treatment for chronic myeloid leukemia associated with diabetes mellitus, 第75回 日本血液学会学術集会 学会発表 4. 2016年, WT-1 mRNA値のモニタリングによる同種造血幹細胞移植後再発の予測, 第38回 日本造血細胞移植学会総会 学会発表 5. 2018年, Efficacy of ponatinib dose increment in a Ph+ALL patient with compound mutation involving T315I, 第80回 日本血液学会学術集会 学会発表

# 医学部附属病院

所属・職位	医学部附属病院整形外科・助教	
氏名	岩崎 達也 (Iwasaki Tatsuya)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	小児整形外科学
研究キーワード	小児 骨関節
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>小児の骨関節疾患に関する研究</p> <p>我が国の少子超高齢化社会において未来を担う子供達の健康維持は非常に大切な分野です。小児は成人と違い成長が起こるため、成長に伴って変形や脚長差、また小児特有の疾患もしくは病態を持っています。骨折後や骨髄炎後に過成長を生じたり、骨系統疾患では特有の骨形態の異常や変形の進行が見られます。私は特にこのような骨の疾患特異性やモデリング、骨成長のメカニズムについて興味を持っており小児骨関節疾患の治療や臨床的見地から解明することを目的として臨床研究を行っています。</p> <p>所属学会：日本整形外科学会 日本小児整形外科学会 日本リハビリテーション医学会 日本リウマチ学会等</p>

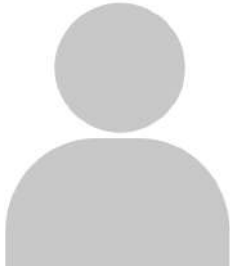

所属・職位	医学部附属病院形成外科・助教	
氏名	上原 幸 (Uehara Miyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年12月	
SDGs目標		

研究分野	顔面神経麻痺治療
研究キーワード	顔面神経麻痺 人工神経 同種神経
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の臨床研究 陳旧性顔面神経麻痺に対する新しい治療法を開発している。その臨床上的有効性を前向き検討行っており、すでにその成果を国内外の学会や学会誌に報告している。</li> <li>顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の基礎研究 動物モデルにて、新しい末梢神経再建手術法の開発を行っている。その人実験結果を国内外の学会論文に報告している。</li> <li>末梢神経再建における人工神経の基礎研究 近年使用されるようになった人工神経の有効性について、動物モデルにて検討している。さらに新たな人工神経の開発を研究している。</li> <li>末梢神経再建における人工神経と幹細胞併用法の研究 人工神経移植のみでは、今まで行っていた自家神経移植と同等の神経再生能力がないことが分かっている。現在我々は、人工神経に脱落乳歯から採取した歯髄幹細胞を移植して、これにより神経再生能力が向上するかどうかの検討を行っている。 Uehara M, Shimizu F, Wu W, Oatari M. The distal stump of the intramuscular motor branch of the obturator nerve is useful for the reconstruction of long-standing facial paralysis using a double-powered free gracilis muscle flap transfer. J Craniofac Surg 29(2): 476-481, 2017. (IF 0.788)</li> </ul>



所属・職位	医学部附属病院麻酔科・助教	
氏名	内野 哲哉 (Uchino Tetsuya)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、1999年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	麻酔科学
研究キーワード	末梢神経、末梢動脈、中心静脈、カテーテル留置、末梢神経ブロック
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>安全な血管カテーテル留置や神経ブロックに関する臨床解剖学的研究を行っている。</p> <p>①安全な中心静脈カテーテル留置や動脈カテーテル留置の際に重要な局所解剖学について、特に末梢静脈ルート確保時や橈骨動脈カテーテル留置時に問題となるSuperficial radial arteryの臨床解剖学的特徴についての検討。</p> <p>②臨床解剖学からみた各種神経ブロックにおける局所解剖学および臨床研究。</p>

所属・職位	医学部附属病院皮膚科・助教	
氏名	梅木 真由子 (Umeki Mayuko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2006年3月	
SDGs目標		

研究分野	皮膚科学
研究キーワード	皮膚悪性腫瘍
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>皮膚悪性腫瘍の診断、治療</p> <div style="display: flex; align-items: flex-start;"> <div style="flex: 1;"> </div> <div style="flex: 1; padding-left: 20px;"> <p>爪下悪性黒色腫は他の悪性黒色腫に比べて生命予後が悪いことが知られている。その要因として、初期病変の爪甲色素線条についての良悪の鑑別が困難であることが挙げられる。我々は、当科で経験した症例をもとに、爪甲色素線条における悪性黒色腫の鑑別アルゴリズム案を作成した。</p> <p>図引用：西日本皮膚科 72巻2号 Page101-105(2010.04)</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">図3 SMM 鑑別アルゴリズム(案)</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部


医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部



その他学内施設等

所属・職位	医学部附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科・助教	
氏名	梅本 真吾 (Umemoto Shingo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2016年3月	
SDGs目標	  	




研究分野	粘膜免疫学
研究キーワード	粘膜ワクチン、経鼻ワクチン、RSウイルス、肺炎球菌、インフルエンザ菌
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>● 粘膜免疫・粘膜ワクチンに関する研究</p> <p>局所粘膜免疫を介した免疫は、抗原特異的な免疫応答を全身系のみならず粘膜局所にも誘導可能であることが知られている。しかしながら、粘膜ワクチンについて臨床応用がなされているのはごく一部に限られている。</p> <p>私はこれまで新しい経鼻ワクチンデリバリーシステムを用いた上気道病原菌（肺炎球菌、インフルエンザ菌）に対するワクチンの研究に携わっており、現在はRSウイルスに対する経鼻ワクチンの研究、および広く腸管まで含めた粘膜免疫の研究をすすめている。</p> <p>My Bibliography:  <a href="https://www.ncbi.nlm.nih.gov/myncbi/1RKmR5sWassQ9g/bibliography/public/">https://www.ncbi.nlm.nih.gov/myncbi/1RKmR5sWassQ9g/bibliography/public/</a></p>

所属・職位	医学部附属病院精神科・助教	
氏名	衛藤 真樹 (Eto Masaki)	
取得学位	学士 (医学)、宮崎大学、2015年3月	
SDGs目標		

研究分野	精神医学
研究キーワード	気分障害、統合失調症、認知症、音楽療法、非薬物療法
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>気分障害、統合失調症、認知症など、様々な精神疾患を持つ病棟患者を対象に音楽療法を実施している。</p> <p>精神疾患に対する非薬物療法として、音楽療法の有効性についてはかねてより指摘されているが、研究としては少なく、まだ未知の部分が多い分野である。</p> <p>今後は、精神疾患に対する音楽療法の有効性に関する臨床研究に発展させたいと考えている。</p>

所属・職位	医学部附属病院高度救急救命センター（消化器外科）・助教	
氏名	圓福 真一郎 (Empuku Shinichirou)	
取得学位	博士（医学）、大分大学、2016年3月	
SDGs目標		

研究分野	直腸癌
研究キーワード	放射線化学療法
研究内容・研究業績・アピールポイント	局所進行直腸癌に対する術前化学放射線療法(CRT)の治療成績と効果予測について研究を行いました。これは多施設共同第II相臨床試験(OITA-Trial)としてわれわれのグループが主として行った研究です。背景としては進行直腸癌に対するCRTは欧米では標準とされ日本でも有用性が注目されています。ただし患者によって治療効果にばらつきがあることが問題となっています。そこで、われわれは局所進行直腸癌に対する経口抗がん剤を用いたCRTの第II相前向き試験を行い、またCRTに対する効果予測因子の同定を試みました。術前CRTを受けた直腸癌37例を対象とし、S-1/RTを施行。CRT前生検材料は26例を対象とし、アレイデータをもとに主成分解析を行った結果、術前CRTは32/37例で完遂し奏効率は56.8%であった。組織学的奏効率は48.6%。G3以上の有害事象は4/36例であった。RO切除率は94.6%だった。また治療効果予測遺伝子群を抽出できた。S-1/RTによる術前CRTは認容性が高く、短期成績は良好であり、今回抽出した遺伝子群は、治療効果予測因子として有用であると考えられた。今回の研究に端を発し、さらに遺伝子群の検索を続けることにより、今後将来的に患者個人に最も効果の期待できる個別化された治療が提供できるようになると思われる。

所属・職位	医学部附属病院眼科・助教	
氏名	大木 玲子 (Oki Ryoko)	
取得学位	博士（医学）、大分大学、2017年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	小児眼科
研究キーワード	斜視、不同視弱視、光干渉断層計
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1)遠視性不同視弱視では弱視眼の眼球形態が健常眼と異なり、眼軸長が短く、視神経乳頭径や陥凹が小さく、脈絡膜厚が厚い。このような眼球後部の形態は、眼鏡の装用開始をきっかけに脈絡膜を主として変化する。弱視治療法の違いにより眼球後部形態の経年変化に差があるか、光干渉断層計を使用して調査する。</p> <p>2)外斜視手術では広く共通した定量表を用いて内・外直筋の術量を決定するが、術効果が乏しく術後に著しく低矯正となる症例がある。眼窩形状・外眼筋の走行・プリーの位置、あるいは術中所見からみる外眼筋性状が手術効果に及ぼす影響を研究する。</p> <p>1)安達麻衣, 門田智恵美, 安田昌子, 田村弘一郎, 大木玲子, 久保田敏昭 不同視弱視症例における立体視の発達. 眼科臨床紀要2021;14(3) : 141-145 2)松永建司, 伊東智恵美, 安田昌子, 田村弘一郎, 本村由香, 大木玲子, 久保田敏昭 急性内斜視10例におけるPrism adaptation testと手術成績. 眼科臨床紀要2019;12(6) : 494-496 3)Oki R., Yamada K., Nakano S., Kimoto K., Yamamoto K., Kondo H., Kubota T. : A Japanese family with autosomal dominant oculocutaneous albinism type 4, Investigative Ophthalmology &amp; Visual Science, 2017;58:1008-1016.</p>



## 医学部附属病院

所属・職位	医学部附属病院集中治療部・助教	
氏名	大地 嘉史 (Ohchi Yoshifumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標		
研究分野	集中治療医学、麻酔科学	
研究キーワード	急性血液浄化、人工呼吸、敗血症	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>集中治療専門医として重症患者管理の臨床及び基礎研究に取り組んでいる。集中治療患者の多くが多臓器不全を呈しており様々な臓器補助手段を必要とすることから、急性血液浄化や人工呼吸、膜型人工肺といった臓器補助装置を研究テーマとしている(Ther Apher Dial, 23(2):173-179, 2019, 人工呼吸, 37:236-7, 2020, 他)。さらに、様々な治療薬物が臓器補助装置に影響を受けることから、臓器補助装置使用時の薬力学・薬物動態について当院薬剤部との共同研究を進めている(J Pharm Biomed Anal. 113764, 2020, Clin Biochem. 90:40-9, 2021, 他)。</p> <p>(※業績詳細⇒<a href="https://researchmap.jp/_O_Y">https://researchmap.jp/_O_Y</a>)</p>	

所属・職位	医学部附属病院脳神経外科・助教	
氏名	大西 晃平 (Oonishi Kouhei)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2011年3月	
SDGs目標		
研究分野	脳神経外科学	
研究キーワード	脳腫瘍、脳血管障害、脊髄外科	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容：脳腫瘍の分子生物学と臨床への応用</p> <p>これまでの研究では脳腫瘍の増殖や血管新生とフリーラジカルの一種である一酸化窒素の合成酵素 (Nitric oxide synthase : NOS)との関連、NOS阻害剤の増殖抑制効果を報告したものは散見されるが、臨床的意義や治療へ発展性を明確にするには至っていない。実際に、様々な悪性度の脳腫瘍患者の組織で、酸化ストレスの関連や腫瘍予後への影響を検討する。</p> <p>研究業績：Onishi K, Kamida T, Momii Y, Abe T, Fujiki M. The clinical and pathological significance of nitric oxide synthase in human pituitary adenomas: a comparison with MIB-1. Endocrine. 46(1): 154-9, 2014</p>	

所属・職位	医学部附属病院産科婦人科・助教	
氏名	岡本 真実子 (Okamoto Mamiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標		

研究分野	医学
研究キーワード	子宮内膜症、マイクロRNA、生殖医学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●子宮内膜症において発現が減少しているmiR-199a-3pの役割に関する研究</p> <p>子宮内膜症病変は、月経周期に伴って出血、凝血、吸収を繰り返して癒痕化し、病態が進行する。これまでの研究から、子宮内膜症の病態形成におけるエピジェネティクス異常の役割が注目されているが、その詳細なメカニズムに関しては未だ不明な点が多い。</p> <p>本研究では、以前に我々が子宮内膜症細胞において発現が減少していることを報告したマイクロRNAに着目し、① 子宮内膜症におけるマイクロRNAの標的遺伝子の網羅的解析、② 網羅的解析によって見出された候補遺伝子の役割に関する分子生物学および細胞生物学的検討、③ マイクロRNA標的遺伝子を制御する薬剤の子宮内膜症治療薬としての有用性についての検討を行う。</p>

所属・職位	医学部附属病院消化器内科・助教	
氏名	小川 竜 (Ogawa Ryo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年12月	
SDGs目標		

研究分野	医学 消化器内科学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ、食道アカラシアなど
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>ヘリコバクター・ピロリに関する研究</p> <p>Ogawa R, Okimoto T, Kodama M, Togo K, Fukuda K, Okamoto K, Mizukami K, Murakami K. Changes in Gastric Mucosal Glycosylation Before and After Helicobacter pylori Eradication Using Lectin Microarray Analysis. Turk J Gastroenterol. 2022 Feb;33(2):88-94.</p> <p>食道アカラシアに関する研究</p> <p>Shiwaku H, Sato H, Shimamura Y, Abe H, Shiota J, Sato C, Ominami M, Sakae H, Hata Y, Fukuda H, Ogawa R, Nakamura J, Tatsuta T, Ikebuchi Y, Yokomichi H, Hasegawa S, Inoue H. Risk factors and long-term course of gastroesophageal reflux disease after peroral endoscopic myotomy: A large-scale multicenter cohort study in Japan. Endoscopy. 2022 Feb 16.</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院

理工学部




福祉健康科学部

その他学内施設等





所属・職位	医学部附属病院手術部・助教	
氏名	小山 淑正 (Oyama Yoshimasa)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標		




研究分野	麻酔学、集中治療医学
研究キーワード	概日リズム、敗血症、炎症、麻酔、集中治療
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>概日リズムと炎症制御方法の研究</p> <p>概日リズムは、覚醒、ホルモン分泌、認知などの生理的機能を調整しており、生体の恒常性維持に欠かせないものである。概日リズムの乱れは高血圧、糖尿病、心筋梗塞発症といった炎症性疾患に影響を与えるだけでなく、炎症性疾患自体が概日リズムを乱し、病態を悪化させるといった悪循環を形成することが知られている。</p> <p>概日リズムの是正により、いかに病態改善できるかを主な研究テーマとして取り組んでいる。</p> <p><a href="https://researchmap.jp/yoyama">https://researchmap.jp/yoyama</a></p>

所属・職位	医学部附属病院産科婦人科・助教	
氏名	甲斐 健太郎 (Kai Kentaro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	婦人科腫瘍学、生殖内分泌学
研究キーワード	神経内分泌腫瘍、子宮内膜症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 卵巣神経内分泌腫瘍の病理学的細分類に関する研究 <p>神経内分泌腫瘍の診断において、臓器横断的病理診断が導入されつつある。しかし、卵巣では依然カルチノイドや小細胞癌という名称が使われている。そこで、卵巣にも臓器横断的病理分類が可能かを検証し、将来的には卵巣神経内分泌腫瘍にも臓器横断的治療を導入したい。Kai et al. <i>Neuroendocrinology</i>. 2021. PMID: 32097950</p> </li> <li>● 子宮内膜症の病態形成の解明に関する研究 <p>子宮内膜症は、生殖年齢女性の約10%が罹患し、病勢が進行すると骨盤内環境の悪化のため不妊を来す。しかし、現行の診断法では、発症から診断まで約10年の遅延が生じる。そこで、miRNAと子宮内膜症の病態形成との関連を検証し、早期診断・治療へ応用したい。Nasu, Aoyagi, Zhu, Okamoto, Yano, Kai et al. <i>Med Mol Morphol</i>. 2022. PMID: 34463829</p> </li> </ul>





所属・職位	医学部附属病院手術部・助教	
氏名	甲斐 真也 (Kai Shinya)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2006年3月	
SDGs目標		

研究分野	麻酔学
研究キーワード	バランス麻酔
研究内容・研究業績・アピールポイント	各種麻酔薬や鎮痛薬の一部には、臓器保護効果があることが示されている。しかしながら実際の麻酔においては、麻酔薬や鎮痛薬の組み合わせ、適切な麻酔深度を維持することで麻酔を行っており、これらを組み合わせることでの有効性について検討した報告は少ない。そこで、我々は吸入麻酔薬、麻薬性鎮痛薬の各種組み合わせによる臓器保護効果の有無について、肝虚血再灌流障害モデルを使用し検討を行っている。



所属・職位	医学部附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科・助教	
氏名	門脇 嘉宣 (Kadowaki Yoshinori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年12月	
SDGs目標	 	

研究分野	耳科学 粘膜免疫学 感染症
研究キーワード	中耳炎 真珠腫 ホスホリルコリン
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>① 中耳炎に関する研究 中耳炎を引き起こす細菌が、生体反応によってどのように除去されるかを研究しています。 論文1: Phase variation with altering phosphorylcholine expression of nontypeable Haemophilus influenzae affects bacteria clearance and mucosal immune response in the middle ear and nasopharynx (Auris Nasus Larynx, 2021)</p> <p>② 中耳真珠腫に関する研究 中耳真珠腫の疫学や、また手術の前に行う画像検査をどのように扱うかを検討してきました (論文 2,3,4)。 論文2: <u>A novel view of computed tomography images similar to the visual field of otologic surgeons (Laryngoscope Investigative Otolaryngology, 2021)</u> 論文3: 疫学的観点から見た先天性真珠腫: 発生率と傾向 (日本耳鼻咽喉科学会会報, 2022 in press) 論文4: 耳科手術体位でみる矢状断 CT 画像 — 学生教育への活用の試み — (日本耳鼻咽喉科学会会報, 2018)</p>




## 医学部附属病院

所属・職位	医学部附属病院高度救命救急センター（整形外科）・助教	
氏名	金崎 彰三 (Kanezaki Shozo)	
取得学位	博士（医学）、大分大学、2019年9月	
SDGs目標	  	


研究分野	整形外科学
研究キーワード	整形外科外傷、骨盤骨折、寛骨臼骨折、骨癒合
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ラット大腿骨モデルを用いたテリパラチドとBMPの相乗効果に関する研究          確率されたラット大腿骨骨折モデルを用いて、BMP-2単独よりもPTHを併用することで骨形成を促進させることを示した (J Orthop Surg Res, 14(1): 403, 2019)</p> <p>●寛骨臼骨折手術におけるinfra-acetabular screwの挿入経路に関する研究          CTデータを用いて日本人におけるinfra-acetabular screwの挿入経路の大きさなど特徴について検討した。約3割の患者ではinfra-acetabular screwを挿入するのに十分な経路がないことを示した。(Arch Orthop Trauma Surg, 140(3): 359-364, 2020)</p> <p>以上のように主にラットを用いた骨形成に関する基礎研究も行いながら、骨盤・寛骨臼骨折に関する臨床研究も行っています。</p>

所属・職位	医学部附属病院脳神経外科・助教	
氏名	川崎 ゆかり (Kawasaki Yukari)	
取得学位	学士（医学）、大分医科大学、2004年3月	
SDGs目標		

研究分野	脳神経外科学
研究キーワード	theta burst stimulation, long-term potentiation, neurobehavior, subarachnoid hemorrhage, motor-evoked potential
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>顕著な現代医学の進歩にもかかわらず、既存の方法では異常を同定・評価できないものの一つに神経学的無症候・潜在的病態がある。客観的評価が困難であるため、無症候性病態はその影に潜む加療を要する重大な病態を見逃す恐れを有する一方、その数は激増の一途をたどる。この問題は本病態の臨床的評価指標を待たずして客観的評価指標の観点からその大きな糸口を掴むことができる可能性があり、くも膜下出血後の症候性脳血管攣縮予測可否検討を行っている。くも膜下出血において発現する脳保護・可塑性誘導に有効な遺伝子が発現する条件と同一の刺激条件が、臨床上も同様な脳の再教育効果を有するか否かを、神経生理学的手法で評価・解析する。</p>

所属・職位	医学部附属病院総合臨床研究センター・助教	
氏名	倉成 正恵 (Kuranari Masae)	
取得学位	薬学士、近畿大学、1982年3月	
SDGs目標	 	



研究分野	早期臨床試験・臨床薬理学・薬物動態学
研究キーワード	医薬品開発・臨床試験・品質管理・ドラッグリポジショニング
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>アンメットメディカルニーズに対する医薬品開発として、ドラッグリポジショニング研究を行っている。また、人を対象とした早期臨床試験（First In Human試験、PK/PD試験、POC試験まで）の推進として、臨床試験の実施体制構築、品質管理、研究者教育に取り組んでいる。</p> <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Susutlertpanya W, *Wakuda H, Otani N, Kuramoto T, Li L, <u>Kuranari M</u>, Sekiguchi A, Kudo H, Uchida T, Imai H, Uemura N. Histological evaluation of nintedanib in non-alcoholic steatohepatitis mice. Life sciences 228: 251-257, 2019.</li> <li>Otani N, Wakuda H, Imai H, <u>Kuranari M</u>, Ishii Y, Ito Y, Okubo A, Ogawa O, Takeda K, Ohyama T, Hasunuma T, *Uemura N. No Effect of Digoxin on Rosuvastatin Pharmacokinetics in Healthy Subjects: Utility of Oita Combination for Clinical Drug-Drug Interaction Study. Clinical and translational science. 12(5): 513-518, 2019.</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院歯科口腔外科・助教	
氏名	栗林 佳奈 (Kuribayashi Kana)	
取得学位	学士（歯学）、福岡歯科大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	歯学
研究キーワード	口腔外科、口腔内科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容： 骨吸収抑制薬関連顎骨壊死の治療に関する臨床的検討 口腔顎顔面の発育異常とその治療</p> <p>研究業績： 薬剤関連顎骨壊死の治療に関する臨床的検討. 第83回日本口腔外科学会九州地方会 抜歯窩に骨壊死または治癒遅延を生じたBP内服患者の2症例. 第24回日本口腔内科学会・第27回日本口腔診断学会 大分大学医学部附属病院の口唇口蓋裂診療体制と過去33年間の臨床統計. 第43回日本口蓋裂学会総会・学術集会</p>

所属・職位	医学部附属病院集中治療部・助教	
氏名	栗林 由英 (Kuribayashi Yoshihide)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標		

研究分野	麻酔科学, 集中治療医学
研究キーワード	せん妄, 酸化ストレス
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>「周術期における酸化ストレスと術後せん妄の関連」についての研究</p> <p>・敗血症と酸化ストレスの関連性, 一般外科術後と酸化ストレスの関連性について臨床研究継続中である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>「<math>\beta</math>遮断薬ランジオール塩酸塩の抗酸化能—電子スピン共鳴法/TBARS分析によるin vitro/ex vivoラジカル消去能の測定—」 日本麻酔科学会第63回学術集会 (2016年) で発表</li> <li>「心臓血管外科手術における術後せん妄と酸化ストレスの関連」 日本麻酔科学会第65回学術集会 (2018年) で発表</li> <li>「心臓・大血管疾患に対する待機的手術における術後譫妄とビタミンCの関連/-電子スピン共鳴装置を用いた検討-」 日本麻酔科学会第68回学術集会(2021年)で発表</li> <li>「待機的心臓・大血管手術における高齢者術後譫妄には酸化ストレスが関与する/-電子スピン共鳴装置を用いた検討-」 第33回日本老年麻酔学会(2021年)で発表, <u>優秀演題賞受賞</u></li> </ol>

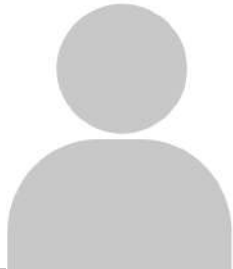

所属・職位	医学部附属病院高度救命救急センター (消化器・小児外科)・助教	
氏名	河野 洋平 (Kono Yohei)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	消化器外科学
研究キーワード	外科侵襲 癌治療 抗癌剤脱毛
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・抗酸化剤を用いた抗癌剤副作用、外科侵襲に対する対策に関する研究</p> <p>抗癌剤の副作用の1つである脱毛には頭皮における毛包周囲環境にて起こる酸化ストレスやアポトーシスが関与しており、抗酸化治療は有効な脱毛対策となる。われわれは強力な抗酸化物質<math>\alpha</math>リポ酸誘導体を用いて酸化ストレスを制御し、脱毛を予防する研究を行っている(The utility of DHL-HisZnNa, a novel antioxidant, against anticancer agent-induced alopecia in breast cancer patients: a multicenter phase II clinical trial. <i>Breast Cancer Res Treat.</i> 2019 ;176(3):625-630)。また、消化器外科領域における腹膜炎や続発する敗血症病態においては酸化ストレスによる臓器障害が問題となり、同様に抗酸化物質は臓器障害を軽減する治療となりうるため、これを制御する治療の開発を行っている(A newly synthetic vitamin E derivative, E-Ant-S-GS, attenuates lung injury caused by cecal ligation and puncture-induced sepsis in rats. <i>Surgery.</i> 2012;151(3):420-6)。</p>



所属・職位	医学部附属病院麻酔科・助教	
氏名	小坂 麻里子 (Kosaka Mariko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標		

研究分野	麻酔科学
研究キーワード	炎症 麻酔
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・ 緑色波長光照射による血小板シグナルを介した肺保護効果の検討</p> <p>本研究は、マウス敗血症モデルに対して光治療を行った際に、血小板関連因子が抗炎症効果に与える影響について検討することを目的としている。我々はこれまでの実験で、自然光を模したLED光照射が照度依存性に抗炎症効果を有し、肺傷害を軽減することを見出した。また、各種波長光を用いて同様の光照射実験を行い、緑色波長光で炎症性サイトカインの抑制と抗炎症サイトカインの増加を認め、光依存性に変動した遺伝子のうち約40%が血小板関連遺伝子であることを発見した。現在、盲腸結紮穿孔 (CLP) による敗血症モデルを作成し、緑色LED光の肺保護効果と上記血小板関連遺伝子の関連、および役割について検討を行っている。</p> <p>(research map: <a href="https://researchmap.jp/mkosa">https://researchmap.jp/mkosa</a>)</p>

所属・職位	医学部附属病院心臓血管外科・助教	
氏名	小崎 智史 (Kozaki Satoshi)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2009年3月	
SDGs目標		

研究分野	心臓血管外科学
研究キーワード	成人心臓外科手術、血管外科手術
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>成人心臓外科手術、血管外科手術治療成績向上に関する研究</p> <p>急性大動脈解離術後の下行大動脈残存解離に対するステントグラフト内挿術の治療成績に関する研究</p> <p>-A型急性大動脈解離に対して手術を行った患者さんの解離残存血管拡大による解離性大動脈瘤に対して、胸部ステントグラフト内挿術による治療成績を他施設と共同で後方視的に検討しています。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部




その他学内施設等

所属・職位	医学部附属病院医療情報部・助教	
氏名	後藤 芳美 (Gotou Yoshimi)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	 17 パートナーシップで 目標を達成しよう	




研究分野	医療情報学
研究キーワード	電子カルテ、病院情報システム、看護
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>主に電子カルテで蓄積した情報を用いて、病院職員からの要求を元に業者では開発できないニッチなシステムを研究し、日本医療情報学会にて発表している。</p> <p>看護管理に有用な情報を提供するシステムの構築に関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>看護業務の数量化の探索</li> <li>DWHを用いた看護業務の可視化の検討</li> <li>業務量調査結果との比較による評価</li> <li>看護師の忙しさの要因を追求するシステムの開発</li> <li>看護必要度C項目評価のための情報収集機能の開発</li> <li>電子カルテを用いたPNSワークシートの構築</li> <li>ケアプロセスの可視化 (第一報)</li> <li>転倒転落アセスメントスコアとベッドマップ機能の融合システムの構築</li> <li>薬剤部門の電子カルテ情報収集のための自作システム開発</li> <li>病院内部署の個別運用業務に応える自作システムとその評価</li> </ul>

所属・職位	医学部附属病院小児科・助教	
氏名	小林 修 (Kobayashi Osamu)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標	 3 すべての人に 健康と福祉を	

研究分野	小児神経学
研究キーワード	神経発達症、早期発見、General Movements、自発運動
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●乳児早期の自発運動評価と神経発達症の早期発見に関する研究</p> <p>神経発達症の早期発見を目的としています。乳児早期のGeneral Movementsという自発運動と、神経発達症との関連性がないかの評価を行います。一般健診を受ける3-4か月時の乳児の自発運動をビデオで評価し、その結果と1歳半、3歳半、5歳時の質問紙や健診結果から、神経発達症の徴候との関連性の検討を行います。</p>

所属・職位	医学部附属病院高度救急救命センター（循環器内科）・助教	
氏名	齋藤 聖多郎 (Saito Shotaro)	
取得学位	博士（医学）、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	循環器内科学
研究キーワード	心不全、糖尿病、肥満、心房細動、心筋虚血再灌流障害、心筋症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・糖尿病ラットにおける血糖変動と心房筋線維化増悪、心房細動易誘発性に関する研究(Saito S, Takahashi N, et al. Glucose fluctuations increase the incidence of atrial fibrillation in diabetic rats. Cardiovasc Res. 2014 Oct 1;104(1):5-14).</li> <li>・糖尿病ラットにおける血糖変動と心筋虚血再灌流障害増悪に関する研究(Saito S, Takahashi N, et al. Glucose Fluctuations Aggravate Cardiac Susceptibility to Ischemia/Reperfusion Injury by Modulating MicroRNAs Expression. Circ J. 2016;80(1):186-95).</li> <li>・ヒト心外膜脂肪中の炎症性サイトカイン含量と隣接する心房筋線維化との関わり(Abe I, Saito S, Takahashi N, et al. Association of fibrotic remodeling and cytokines/chemokines content in epicardial adipose tissue with atrial myocardial fibrosis in patients with atrial fibrillation. Heart Rhythm. 2018 Nov;15(11):1717-1727).</li> </ul>

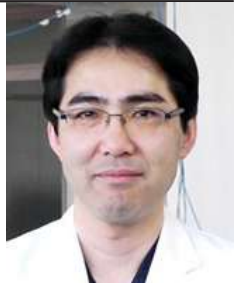


所属・職位	医学部附属病院高度救急救命センター・助教	
氏名	坂本 智則 (Sakamoto Tomonori)	
取得学位	修士（医科学）、大分大学、2012年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	整形外科
研究キーワード	骨癒合 手外科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>私の専門は、整形外科、手外科・Hand surgeryです。現在は2つの研究を並行して行っています。1つ目は幼児を対象とした母指中手指節関節過伸展症の解剖学的・形態機能学的要因の調査で、静岡大学との共同研究をおこなっています。お子さんの中には母指が過伸展してしまう子が一定数いらっしゃいますが、原因はよくわかっていません。ハサミが使いにくかったり、将来的に疼痛が出たりすることがあります。その原因究明と対策を研究しています。2つ目は、ラットを用いた骨癒合の研究をおこなっています。難治性骨折モデルを作成して、どうすれば骨折した骨がよりつくようになるのかを研究しています。現在はいろいろな薬剤を直接骨に投与して、経過を見るということを構想し、実践しています。研究結果がうまくいけば今まで治せなかったような複雑な骨折も直せるようになるかもしれないという信念で研究しています。</p>

## 医学部附属病院

所属・職位	医学部附属病院脳神経内科・助教	
氏名	軸丸 美香 (Jikumaru Mika)	
取得学位	医学博士 (基礎医科学)、大阪市立大学、2010年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	神経内科学・生化学	
研究キーワード	老化・活性酸素・代謝・性差	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1. 性差と代謝に関する検討 (大阪市立大学)</p> <p>2007-2009: 21世紀COEプログラム、疲労克服研究拠点の形成 奨励研究</p> <p>2009: Young Investigator's Award of Society for Free Radical Research Asia</p> <p>2010: 住友生命社会福祉事業団 海外研究助成</p> <p>2018: 第11回日本性差医学・医療学会学術集会 最優秀演題賞</p> <p>2. アルツハイマー病とエストロゲンレセプターとの関連の検討(スペイン・バレンシア大学)</p> <p>3. アルツハイマー病を含む認知症患者の徘徊に関する研究(大分大学)</p> <p>リストバンド型ウェアラブル端末によるバイタルデータの遠隔モニタリングシステム開発と医療施設への導入.新医療,11月号,118-121. 2018</p>	

所属・職位	医学部附属病院歯科口腔外科・助教	
氏名	篠田 茉央 (Shinoda Mao)	
取得学位	学士 (歯学)、東京歯科大学、2018年3月	
SDGs目標		
研究分野	歯科口腔外科・臨床研究	
研究キーワード	顎欠損、再建、顎補綴、インプラント	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容：顎欠損患者の審美的・機能的回復法の検討</p> <p>研究業績：Oral Science Internationalへの論文掲載</p> <p>“Extralingival peripheral ameloblastoma arising in the infratemporal fossa: A case report with an assessment of proliferative activity”</p> <p>：口腔外科学会総会での学会発表</p> <p>“骨性再建を行った上顎腫瘍の2例”</p> <p>アピールポイント：現在、上下顎骨再建患者の咬合回復法について臨床研究をおこなっている最中です。</p>	

所属・職位	医学部附属病院循環器内科・助教	
氏名	篠原 徹二 (Shinohara Tetsuji)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2004年12月	
SDGs目標	 	




研究分野	不整脈、洞結節機能、心臓突然死
研究キーワード	ブルガダ症候群、洞不全症候群、自律神経
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>心臓突然死を含めて、不整脈疾患の治療に関する研究を精力的に行っている。中でも特発性心室細動のJ波症候群に関する臨床研究に力を注いでいる。代表的な論文として、薬物負荷を行うことでJ波症候群患者における薬物によるJ波の変動を2006年に世界で初めて報告した (Heart Rhythm 3, 1082-4, 2006)。そして、大分大学循環器内科におけるJ波症候群患者に対する薬物治療成績結果をまとめ (Heart Rhythm, 11, 1441-5, 2014)、この業績から2015年10月に第5回大分大学医学部中塚医学賞を受賞した。その後もこれまで臨床研究を継続し、最近も以下の論文報告している。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Shinohara T, et al. Ann Noninvasive Electrocardiol. 2021; 26: e12831.</li> <li>2) Shinohara T, et al. J Arrhythm. 2021; 37: 70-78.</li> <li>3) Shinohara T, et al. J Cardiovasc Electrophysiol. 2021;32:507-514.</li> <li>4) Shinohara T, et al. Ann Noninvasive Electrocardiol. 2022:e12937.</li> <li>5) Shinohara T, et al. Circ J. 2022;86:280-286.</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院腎臓外科・泌尿器科・助教	
氏名	篠原 麻由香 (Shinohara Mayuka)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2017年6月	
SDGs目標		



研究分野	泌尿器科
研究キーワード	尿失禁、加齢、ヒト外尿道括約筋
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>加齢に伴う尿失禁に関する研究</p> <p>尿失禁は加齢に伴って増加し、高齢者の生活の質を低下させ、また介護者の負担を増加させる。外尿道括約筋は、尿失禁を防止する機能をもった横紋筋であるが、加齢とともに減少することが明らかにされており、その機序解明と有効な治療の探索は課題である。我々は世界で初めて樹立した不死化ヒト外尿道括約筋幹細胞を用いて、増殖/抑制因子、アポトーシスや分化におけるシグナル伝達機構を明らかにしてきた。今後も他の横紋筋との差異、個体差、性差に注目して研究を行っていき、尿失禁の新規治療法の開発を目指したい。</p>



## 医学部附属病院

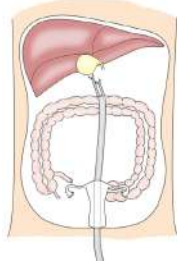
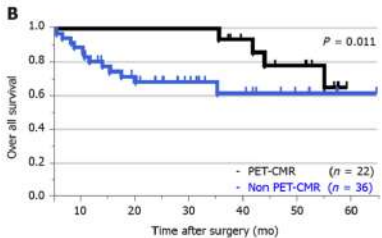
所属・職位	医学部附属病院腎臓外科・泌尿器科・助教	
氏名	澁谷 忠正 (Shibuya Tadamasu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	腫瘍免疫学
研究キーワード	抗体、腫瘍免疫
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>大学院時代はヒト型Fab抗体作成の研究を行っていました。</p> <p>泌尿器科領域では特に悪性腫瘍（がん）に対する治療に力を入れています。</p> <p>多くの抗体医薬品が登場し、中でも免疫チェックポイント阻害薬の登場はがん治療に変革をもたらしました。</p> <p>抗体治療薬及び腫瘍免疫の研究を通じて、泌尿器がん領域の治療躍進に貢献したいと思っています。</p> <p>Identification of a human monoclonal Fab with neutralizing activity against H3N2 influenza A strain from a newly constructed human Fab library. Microbiol Immunol 2008; 52: 162-170</p>

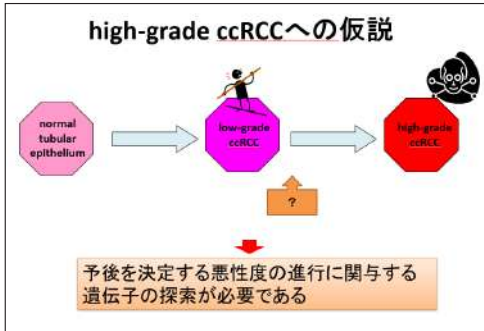
所属・職位	医学部附属病院脳神経外科・助教	
氏名	杉田 憲司 (Sugita Kenji)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	脳血管障害
研究キーワード	脳梗塞モデル、フリーラジカル、認知機能障害、ESR装置
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>脳虚血の病態解明および分子生物学的検索技術の習得を基礎に、脳梗塞動物モデル等を用いて電磁ホーン型ESR装置を用いたフリーラジカルイメージングの技術確立を試みている（2016年度科学研究費）。脳卒中、アルツハイマー病における認知機能障害にターゲットを定め、フリーラジカルの関与に対し、電磁ホーン型ESRイメージング装置による非侵襲的測定を確立させ、病態、進行度、治療に対する反応などに応用すべく基礎研究を行っている。臨床実用技術として必須である『測定の再現性と特異性・定量性』を脳虚血・再灌流モデル、アルツハイマー病モデルの生体の各種パラメーターの測定を用いて検証する。</p>

所属・職位	医学部附属病院消化器外科・助教	
氏名	鈴木 浩輔 (Suzuki Kosuke)	
取得学位	医学博士 (病態制御医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	  	


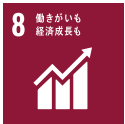
研究分野	消化管外科学／腫瘍学 内視鏡外科学
研究キーワード	内視鏡手術、胃癌、食道癌
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 体表に傷がない、新しい内視鏡手術の研究 内視鏡を口や肛門などの自然孔を経由して体腔内に挿入し、体表に傷を作ることなく体腔内の手術を行う経管腔的内視鏡手術 (NOTES) の研究を行い、NOTES が生体に及ぼす影響を報告した (Suzuki K. et al. Gastrointest Endosc 2011).</li> <li>● 胸部食道癌の治療戦略決定におけるPET/CTの有用性 胸部食道癌に対し術前化学療法の前後でPET/CT評価を行い、PET/CTによるPET-CMR (完全奏効) が予後因子となり得るか報告した (Suzuki K. et al. World J Clin Oncol 2021).</li> </ul>  

所属・職位	医学部附属病院腎臓外科・泌尿器科・助教	
氏名	高橋 美香 (Takahashi Mika)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2016年6月	
SDGs目標		



研究分野	医学 泌尿器科学
研究キーワード	泌尿器科 腎臓癌
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>腎臓癌の悪性化にかかわる染色体欠損部位を同定し、悪性度の強い腎臓癌に共通して認められる部位について研究した。その中の遺伝子が欠損することで、発現の低下する蛋白について検討を行った。その発現が低下している一つの遺伝子を腎癌細胞へ導入し蛋白発現を増加させることで、腎癌細胞の増殖は抑制されることが分かった。その抑制の原因として腎癌細胞のアポトーシスを引き起こしていることを突き止めた。 Mika Takahashi et. al. Cancer Sci. 2016 Apr;107(4):417-23</p> 

所属・職位	医学部附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科・助教	
氏名	立山 香織 (Tateyama Kaori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2017年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	耳鼻咽喉科学
研究キーワード	自己免疫性中耳炎、ANCA関連血管炎
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>「ANCA関連血管炎の早期診断法の確立と中耳炎発症機構の解析」をテーマに科学研究費若手研究B (2016~2017年)、「ANCA関連血管炎性中耳炎発症トリガーとなる中耳感染の関与とサイトカインの解析」をテーマとして若手研究 (2018~2019年) を獲得のもと、研究成果を報告した (Tateyama K, Kodama S, Kishibe K, et al. A novel strategy with combined assays for detection of anti-neutrophil cytoplasmic antibody (ANCA) in clinically ANCA-negative granulomatosis with polyangiitis patients. <i>Auris Nasus Larynx</i>. 2017;44:735-741.). 日本耳科学会、ANCA関連血管炎性中耳炎ワーキンググループの共同研究グループの活動の中では、診療の手引きや研究論文を作成した。2018年にはANCA関連血管炎性中耳炎に関する臨床論文 (立山香織、他: ANCA関連血管炎性中耳炎の寛解導入治療後の聴力経過. <i>Otol Jpn</i> 28, 19-24, 2018) で第24回耳科学会奨励賞を受賞。「ANCA関連血管炎性中耳炎の中耳貯留液を用いた早期診断法の開発」をテーマに基盤研究C (2021~2023年) を獲得し研究継続中。</p>

所属・職位	医学部附属病院眼科・助教	
氏名	田村 弘一郎 (Tamura Koichiro)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2005年3月	
SDGs目標		

研究分野	神経眼科、網膜硝子体
研究キーワード	斜視、視神経
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>斜視、視神経疾患の病態解明と治療          大学でしか診断、治療できない神経眼科疾患症例を蓄積し、新たな治療法を検討、実施する</p> <p>片頭痛に伴い再発を繰り返す網膜動脈閉塞症の1例  <i>神経眼科</i> 37巻1号 45-50 2020 査読有</p> <p>【間違いやすく、鑑別が重要な神経眼科疾患】          うっ血乳頭と偽性うっ血乳頭(解説/特集)  <i>眼科グラフィック</i> Vol9 434-442 メディカ出版 2020査読有</p>



所属・職位	医学部附属病院高度救命救急センター・助教	
氏名	塚本 菜穂 (Tsukamoto Nao)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標		

研究分野	救急医学
研究キーワード	病院前医学、心肺蘇生、集中治療
研究内容・研究業績・アピールポイント	心肺停止後の低酸素脳症に対する体温管理療法に関する研究  心停止後の低酸素脳症に対する体温管理療法の可否については、現在も研究が続いており、議論されている分野である。当院における低酸素脳症、体温管理療法の症例に対し、後方視的に分析を行っていく。また他施設の共同研究にも積極的に参加し、当院における体温管理療法について研究していく。

所属・職位	医学部附属病院腎臓内科・助教	
氏名	中田 健 (Nakata Takeshi)	
取得学位	修士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	腎臓内科領域、血液透析分野、臨床研究疫学
研究キーワード	血液透析、ベイズ統計、リアルワールドデータ解析、AIの臨床応用
研究内容・研究業績・アピールポイント	①腎臓領域における腎生検病理の採取糸球体個数の適正判別におけるベイズの定理の応用。 ②血液透析の診療プラクティスパターンにおけるアンケート調査、全国医学部附属病院血液浄化部門連絡協議会の運営委員として活動及び研究を行っている。 ③大分大学医学部附属病院 女性医療人キャリア支援センター 副センター長および、医療人パパの会ペンギンズの発起人として、働く女性医療人の労働環境の支援及び男性医療人の育休取得活動のキャンペーンを率先して行っている。 ④DPCデータ、レセプトデータを用いたリアルワールドデータに基づく、急性期病院の血液透析患者のプラクティスパターンの研究を行っている。 ⑤学生教育にも従事し、2017年から継続して「もう一度講義を受けたい教員」に選出されている。 (research map) <a href="https://researchmap.jp/nakata-7">https://researchmap.jp/nakata-7</a>

## 医学部附属病院

所属・職位	医学部附属病院眼科・助教	
氏名	中野 聡子 (Nakano Satoko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標		

研究分野	眼科学
研究キーワード	眼感染症、PCR
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>眼感染症多項目PCR検査薬の創出と普及がテーマである。</p> <p>I 新しい眼感染症多項目PCR検査薬の創出 核酸精製不要・検体直接PCR、マルチプレックス・リアルタイムPCR、凍結乾燥・固相化技術で構成された多項目PCR検査薬を創出した (Ophthalmology. 2020)。</p> <p>II PCR適応の体系化 海外を含む多施設研究 (約1200例) にて、各感染症の病原体コピー数の分布を解明し、眼感染症PCR検査の適切な使用法を体系化した (Am J Ophthalmol. 2019)。</p> <p>III 眼感染症PCR需要調査・先進医療・外注検査の導入支援 全国調査 (高瀬, 中野ら. 日眼会誌. 2019) を実施し、全国100施設超に普及させた。</p> <p>IV 橋渡し研究・保険診療化の働きかけ アカデミアでPMDA対応、臨床性能試験を準備し、保険診療化を目指している。</p>

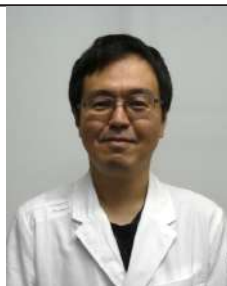

所属・職位	医学部附属病院消化器外科・助教	
氏名	二宮 繁生 (Ninomiya Shigeo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2009年3月	
SDGs目標		

研究分野	消化管外科
研究キーワード	消化管外科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>(研究実績) 2005年4月より大分大学大学院医学系研究科博士課程に進み、消化管外科に関する基礎研究に取り組んできた。特に胃癌に対する血管新生に関する研究を行い、学位を取得した。学位取得は消化管外科に関する臨床研究を行い、学会発表や論文発表を行ってきた。</p> <p>(診療実績) 学位取得後は、有田胃腸病院、臼杵市医師会立コスモス病院などの施設にて外科全般の診療を行ってきた。2020年4月より大分大学医学部高度救命救急センター助教、同8月より大分大学消化器・小児外科助教 (2021年10月より学内講師) として診療に従事している。また日本外科学会専門医・指導医、日本消化器外科学会専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会専門医・指導医として臨床に従事している。</p>



所属・職位	医学部附属病院感染制御部・助教	
氏名	橋本 武博 (Hashimoto Takehiro)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標		

研究分野	感染症学
研究キーワード	SFTS、バクテロイデス
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・大分県内生息動物とダニの包括的な重症熱性血小板減少症候群ウイルス(SFTSV)および抗SVTSV抗体の分布調査 2020年より大分県におけるSFTSの疫学分布調査を行い、県内におけるSFTS感染リスクについて評価を行い、リスクの高い地域を明確にした。 Hashimoto T, Yahiro T, Yamada K, Kimitsuki K, Okuyama MW, Honda A, Kato M, Narimatsu H, Hiramatsu K, Nishizono A. Distribution of Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome Virus and Antiviral Antibodies in Wild and Domestic Animals in Oita Prefecture, Japan. Am J Trop Med Hyg. 2022 Feb 28:tpmd211130.</p> <p>・バクテロイデスの耐性遺伝子保有率の調査 Bacteroides 属菌は腹腔内感染症、術後創感染などの原因菌として重要であり、各種抗菌薬に対する耐性化も注目されている。<i>Bacteroides fragilis</i> の薬剤感受性および耐性遺伝子保有状況について検討を行っている。</p>

所属・職位	医学部附属病院整形外科・助教	
氏名	平川 雅士 (Hirakawa Masashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	整形外科
研究キーワード	膝関節疾患、人工膝関節
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・人工膝関節置換術に関する研究 人工膝関節置換術における術中の問題点など3D画像を用いたシミュレーション (Evaluation of the rotational alignment of the tibial component in total knee arthroplasty: position prioritizing maximum coverage, European Journal of Orthopaedic Surgery &amp; Traumatology, 27-1, 2017) アジア人向け人工膝関節の開発と臨床応用</p> <p>・前十字靭帯損傷、半月板損傷に関する研究 手術用デバイスの開発、臨床応用、臨床成績の評価</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部附属病院皮膚科・助教	
氏名	広瀬 晴奈 (Hirose Haruna)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年3月	
SDGs目標		

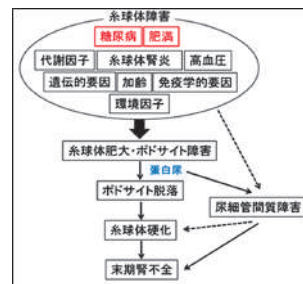
研究分野	皮膚科学
研究キーワード	アトピー性皮膚炎、皮膚免疫、Wnt/beta-cateninシグナル
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>①炎症性皮膚疾患の病態形成に関わる抗菌ペプチドmBD14の発現制御機構の解明</p> <p>◆組織特異的 TRAF6 欠損マウスに S.aureus を感染させ mBD14 誘導能を明らかにする抗菌ペプチドmBD14(=hBD3)の誘導メカニズムと、mBD14と皮膚炎の相関性を生体レベルで明らかにし、アトピー性皮膚炎の増悪機序に新たな知見を加えることができ、hBD3の発現を制御する皮膚局所へのサイトカイン補充療法やIL-4中和抗体投与療法が実現する可能性も期待できる。</p> <p>②Wnt/beta-catenin/CBPシグナル経路に着目したアトピー性皮膚炎の病態解明</p> <p>◆Wnt/beta-catenin/CBPシグナルの阻害剤である化合物ICG-001による湿疹惹起抑制機序の解明 現在、アトピー性皮膚炎において次々と経口低分子化合物JAK阻害剤が認可されている。そこで、Wnt/beta-catenin/CBPシグナル経路に着目し、Wnt/beta-catenin/CBPシグナルの阻害剤である低分子化合物ICG-001を用いて解析することで、アトピー性皮膚炎の発症予防、治療の可能性が期待できる。</p>

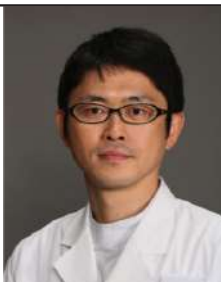


所属・職位	医学部附属病院循環器内科・助教	
氏名	福井 暁 (Fukui Akira)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2017年3月	
SDGs目標		

研究分野	医学
研究キーワード	不整脈、心房細動、心房線維化、心不全
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>循環器内科の中でも、主に不整脈学を研究しています。</p> <p>基礎研究では、アディポサイトカインであるレプチンが炎症を介して心房線維化が進行することや (Circ Arrhythm Electrophysiol. 2013; 6:402-9.)、肥満による高レプチン血症が心房線維化を進行させることを発見しました (J Cardiovasc Electrophysiol. 2017; 28:702-710.)。現在も線維化進行のメカニズムについて研究しています (科研研究課題20K20225)。</p> <p>臨床研究では、心房細動に対するカテーテルアブレーションが、心収縮能が保たれた心不全 (Heart Failure with Preserved Ejection Fraction, HFpEF) 患者の再入院を減少させることを世界で初めて報告しました (J Cardiovasc Electrophysiol. 2020; 31:682-688.)。</p> <p>今後も、基礎研究および臨床研究を通じて、社会の発展に貢献できればと思います。</p>

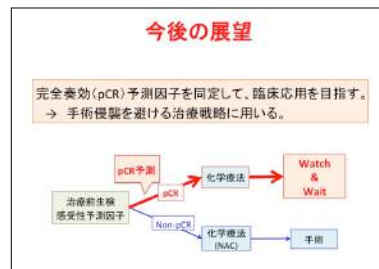
所属・職位	医学部附属病院腎臓内科・助教	
氏名	福田 顕弘 (Fukuda Akihiro)	
取得学位	博士 (医学)、宮崎大学、2011年11月	
SDGs目標	  	



研究分野	腎臓内科学
研究キーワード	尿沈渣中ポドサイトmRNA、バイオマーカー、糖尿病性腎症、肥満関連腎症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●生活習慣病における尿沈渣中ポドサイトmRNA排泄量の有用性の検討</p> <p>糖尿病を主体とした生活習慣病患者の数は増え続け、患者の生活の質の維持や医療経済上も深刻な問題となっている。糖尿病や肥満関連腎症では早期診断に微量アルブミン尿が用いられるが、微量アルブミン尿の多寡が糸球体障害と相関しない例も多く、微量アルブミン尿より精度の高い早期診断法の開発が求められている。多くの糸球体疾患ではポドサイト障害の持続に伴うポドサイトの脱落が糸球体硬化の主な原因である(図)。私はこれまでに尿沈渣中ポドサイトmRNA排泄量が糸球体疾患の有用なバイオマーカーであることを報告した(Kidney Int 2012, Nephrol Dial Transplant 2012,2015,2017, Clin Exp Nephrol 2020, Kidney360 2022)。さらに、糖尿病や肥満関連性腎症では早期より糸球体肥大・ポドサイト障害を認め、尿沈渣中ポドサイトmRNA排泄量がアルブミン尿より早期、予後予測可能なバイオマーカーであることを報告した(Sci Rep 2019,2020)。本研究は非侵襲的な尿検体を用い腎疾患の新規バイオマーカーを探索する研究である。*<a href="https://www.ico.oita-u.ac.jp/seeds/seeds.php?no=38">https://www.ico.oita-u.ac.jp/seeds/seeds.php?no=38</a></p>





所属・職位	医学部附属病院高度救命救急センター (消化器・小児外科)・助教	
氏名	藤島 紀 (Fujishima Hajime)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2018年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	消化管
研究キーワード	食道癌、化学療法、感受性
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・食道癌に対する術前化学療法 (DCF; Docetaxel/Cisplatin/5-Fluorouracil) の治療効果を予測因子の同定</p> <p>近年、局所進行食道癌に対しては術前DCF療法が行われている。JCOG1109試験にて術前DCF療法の効果は示され、今後標準治療として推奨されると思われる。</p> <p>我々は、局所進行食道癌に対する術前DCF療法の治療効果を予測しうる因子を、術前生検組織を用いて判定する研究を行ってきた。今までに術前生検組織を用いたDNAマイクロアレイによる網羅的遺伝子解析を行い、感受性を予測しうる候補分子の同定をした (*論文1)。</p> <p>今後、化学療法の感受性を予測することで、個別化医療に繋がっていきたい。</p> <p>*論文1: Fujishima H, Fumoto S, Shibata T, et al. A 17-molecule set as a predictor of complete response to neoadjuvant chemotherapy with docetaxel, cisplatin, and 5-fluorouracil in esophageal cancer. PlosOne 2017</p>





所属・職位	医学部附属病院小児科・助教	
氏名	前田 美和子 (Maeda Miwako)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、1995年3月	
SDGs目標		

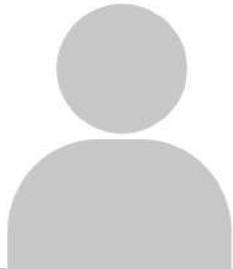
研究分野	小児内分泌学
研究キーワード	肥満、脂質異常
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●小児の肥満と脂質異常の長期免学調査研究</p> <p>大分市の小児生活習慣病予防検診のデータを用いて、小学5年生の肥満発生率や脂質異常の発生率を解析し、小児期からの生活習慣病予防対策を検討しています。</p> <p>(関連する論文 Secular Trends in Obesity and Serum Lipid Values among Children in Oita City, Japan, during a 27-Year Period. Maeda M, Maeda T, Ihara K. J Atheroscler Thromb. 2022 Jan 29. doi: 10.5551/jat.63056. Online ahead of print. PMID: 35095055)</p>

所属・職位	医学部附属病院消化器外科・助教	
氏名	増田 崇 (Masuda Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	肝胆膵外科
研究キーワード	肝胆膵外科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>(研究実績) 2008年4月より大分大学大学院医学系研究科博士課程に進み、肝胆膵外科・肥満外科に関する基礎的研究に取り組んできた。肝臓外科手術の際に重篤な合併症を引き起こす可能性のある虚血再灌流障害に関する研究を行い、学位を取得した。学位取得後は、肝臓癌や肝臓外科に関する臨床的研究を行い、学会報告を行ってきた。現在、今回成果を発表する全国規模の多施設共同研究を主導的に行っている。</p> <p>(診療実績) 津久見中央病院、大分赤十字病院、別府医療センターなどの地域の基幹病院にて、外科全般の診療を行ってきた。現在は大分大学消化器・小児外科助教として、肝胆膵外科に従事している。肝胆膵外科学会高度技能医、内視鏡外科技術認定医を取得し、高難度肝胆膵外科手術や肝胆膵内視鏡外科手術を行っている。</p>

所属・職位	医学部附属病院放射線科・助教	
氏名	松本 陽 (Matsumoto Akira)	
取得学位	医学士、高知医科大学、1991年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	放射線腫瘍学
研究キーワード	放射線治療
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容</p> <p>1放射線治療における新たな治療方法の開発 前立腺癌術後PSA再発に対する高精度治療の開発および照射線量の確立</p> <p>オリゴ転移に対する定位放射線治療の有用性</p> <p>Dual energy CTを用いた放射線治療の治療精度管理の確立</p>

所属・職位	医学部附属病院放射線部・助教	
氏名	丸野 美由希 (Maruno Miyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年9月	
SDGs目標		

研究分野	画像診断学、画像下治療 (IVR)
研究キーワード	門脈圧亢進症、動静脈奇形、内臓動脈瘤
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・門脈系IVRに必要な画像解剖、消化管静脈瘤などの門脈圧亢進症に対するIVRの研究 (論文1)。</p> <p>・動静脈奇形の画像診断、動静脈奇形に対するIVRに関する研究 (論文2、3)。</p> <p>【論文】</p> <p>1. Balloon-occluded retrograde transvenous obliteration for isolated gastric varices draining through pericardiophrenic vein without gastrosplenic or gastrocaval shunts. Maruno M, Kiyosue H, Tanoue S, et al. J Vasc Interv Radiol. 2016; 27:203-207</p> <p>2. Where is the origin of the last normal branch from feeding artery of pulmonary arteriovenous malformations? Maruno M, Kiyosue H, Hongo N, et al. Cardiovasc Intervent Radiol. 2018; 12: 1849-1856</p> <p>3. Renal Arteriovenous Shunts: Clinical Features, Imaging Appearance, and Transcatheter Embolization Based on Angioarchitecture. Maruno M, Kiyosue H, Tanoue S, et al. Radiographics. 2016; 36:580-595</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等







所属・職位	医学部附属病院脳神経外科・助教	
氏名	勅井 泰朋 (Momii Yasutomo)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2007年9月	
SDGs目標		



研究分野	脳腫瘍
研究キーワード	悪性神経膠腫 PET検査 画像診断
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>PETでの画像解析と組織学的解析を併用した遺伝子プロファイルの可能性</p> <p>脳腫瘍における画像診断及び治療については未だ、有益、有効なものは少ない。そこで新たな画像診断と、それを利用した腫瘍の特性を探ることで、新たな治療を導き出すことを主眼においた研究である。またPET検査の利用価値を上げることで、未だ、保険適応外であるメチオニンPETや低酸素PET等の保険適応を得ることで、多くの患者に負担にならない検査となるよう図っていく。</p>

所属・職位	医学部附属病院脳神経外科・助教	
氏名	森重 真毅 (Morishige Masaki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標		

研究分野	脳神経外科
研究キーワード	脳血管障害 脳卒中 脳動静脈奇形 血管新生 分子細胞生物学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容：脳血管奇形における細胞内シグナルの解析</p> <p>血管の発生には血管内皮前駆細胞からのvasculogenesisのメカニズムと、血管内皮細胞の形成 (angiogenesis) の過程があり、さらにvascular remodelingが加わる。脳血管奇形の形成にはこれらの異常が関与し、遺伝的要因を背景に、微小環境 (低酸素環境、外傷、炎症、感染等) に導かれる血管新生、免疫細胞の集積、ストローマ細胞の活性化などといったが考えられている。脳血管奇形における分子メカニズムは不明な点が多く、特異的な細胞内シグナルを解明することで、治療困難な脳血管奇形の病勢把握や新たな治療開発に寄与する。また、血管新生の理解は、もやもや病や脳梗塞といった虚血性脳疾患においても非常に重要な知見となる。</p>

所属・職位	医学部附属病院手術部・助教	
氏名	山本 俊介 (Yamamoto Shunsuke)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	区域麻酔、ペインクリニック、超音波医学	
研究キーワード	超音波ガイド下末梢神経ブロック、オンライン教育	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>①超音波ガイド下末梢神経ブロックと術後鎮痛に関する研究 ②遠隔オンライン技術を駆使した麻酔科診療教育アカデミー (大分大学BURST支援)</p> <p>写真：動画配信セミナーの様子 (研究テーマ②) 臨床における超音波ガイド下末梢神経ブロックを各手術術式にわたって試行し、その有用性についての検討をすすめ、一部、ペインクリニック外来での慢性疼痛患者に対しても応用している。得られた技術は、オンライン技術を駆使して全国へ発信、教育にも役立たせている。</p>	

所属・職位	医学部附属病院呼吸器・感染症内科・助教	
氏名	横山 敦 (Yokoyama Atsushi)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2005年3月	
SDGs目標		

研究分野	呼吸器感染症、びまん性肺疾患
研究キーワード	呼吸器内科学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>Drug-induced pneumonia possibly associated with temsirolimus. J Respirology 2007; 1: 558-561</p> <p>An autopsy case of primary intimal sarcoma of the aortic arch. J Respirology 2013; 2: 641-645</p> <p>A case of IgG4-related lung disease presenting with wandering shadows. J Respirology 2014; 3: 719-722</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部




医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

## 医学部附属病院

所属・職位	医学部附属病院呼吸器・感染症内科・助教	
氏名	吉川 裕喜 (Yoshikawa Hiroki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	医学
研究キーワード	呼吸器、感染症、肺炎、細菌感染、気道炎症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●高齢者肺炎における予後因子に関する研究          高齢者肺炎の生命予後因子として、体幹を保持してADLに関与する脊柱起立筋 (erector spinae muscles: ESM) に注目しました。高齢者肺炎の入院患者を対象として胸部CTを用いてESMの断面積を評価し、ESMが小さいと死亡率が高まることを証明しました (Yoshikawa H, et al. Quantitative assessment of erector spinae muscles and prognosis in elderly patients with pneumonia. Sci Rep. 2021; 11: 4319. )。</p> <p>●気道炎症においてマクロライド系抗菌薬の抗炎症効果に関する研究          肺炎の既往のある高齢者を対象とした後ろ向き研究において、マクロライド系抗菌薬の少量長期投与により肺炎再発が抑制されることを示しました (Yoshikawa H, et al. Long-term macrolide antibiotic therapy may prevent the development of pneumonia in the elderly. J Palliat Med. 2014; 17: 749-50)。実験系ではマクロライド系抗菌薬がマウス由来マクロファージ様細胞からの炎症性サイトカインの放出を抑制することを示しました。</p>



所属・職位	医学部附属病院内分泌・糖尿病内科・助教	
氏名	吉田 雄一 (Yoshida Yuichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標		



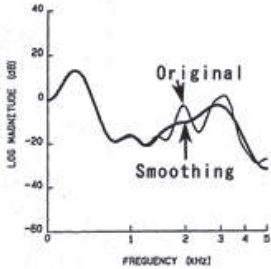
研究分野	内分泌・代謝学
研究キーワード	二次性高血圧、副腎、原発性アルドステロン症、肥満症、糖尿病
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>【臨床研究】</b>          原発性アルドステロン症の診断・重症度判定・治療に関する研究 (英文3)          高血圧に関するメタアナリシス (英文2)、肥満臨床研究 (英文2)          高血圧に関する症例報告・レビュー (英文2) 糖尿病に関する研究 (英文3)</p> <p><b>【基礎研究】</b> 肥満ラットに対する肥満外科手術の効果の検討 (英文1)</p> <p><b>【その他】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高血圧・内分泌関連の執筆 (和文29)</li> <li>・大和証券ヘルス財団 2021年度 (第48回) 調査研究助成 受賞</li> <li>・副腎腫瘍取扱い規約 第4版 執筆協力委員</li> <li>・日本高血圧学会 女性高血圧ワーキンググループ SR委員</li> <li>・日本高血圧学会 高血圧治療ガイドライン2019 SR委員</li> </ul>



# 理工学部

---


所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・教授	
氏名	秋田 昌憲 (Akita Masanori)	
取得学位	工学博士、東京工業大学、1987年3月	
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	

研究分野	音響信号の処理と応用	
研究キーワード	雑音処理 騒音解析 体内音測定 感情検出	
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li> <b>1. 雑音環境下の音響信号処理</b>            悪条件下での音声認識            雑音重畳音声の音質改善 (信号強調)            雑音環境下での音声の区間検出         </li> <li> <b>2. 騒音環境測定と人間の感情への影響</b>            騒音測定と周波数分析            騒音の不快感の検出         </li> <li> <b>3. 音響信号の諸分野への応用</b>            体内音の測定            体内音等を用いた入眠予兆の検出            体内音による不可侵感情変化検出            センサ計測信号処理            マスク着用音響信号処理         </li> </ol>	  <p>体内音による入眠予兆検出システム</p>  <p>高周波数域平滑化による信号処理</p>





研究業績・アピールポイント	雑音環境における所望音声の抽出や強調の実現 騒音の測定と騒音の質の解析の実現 音響信号の解析全般の相談 録音音声信号の音質強調と品質改善 計測信号の特徴の明確化 音響計測・騒音の測定や騒音の質の解析 センサ信号処理・解析の一般的相談	
---------------	--	--



所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・教授	
氏名	池内 秀隆 (Ikeuchi Hidetaka)	
取得学位	博士(工学)、九州工業大学、1996年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	福祉工学, 制御工学	
研究キーワード	歩行訓練, 過渡歩行, 福祉機器, リハビリテーション機器, 力学, 制御	
研究内容	<p>●歩行訓練装置の開発 歩行訓練の必要な患者・訓練者を, 上部からの吊り下げ機能により支え, 訓練を行います。足荷重情報を用いて吊り下げ力を制御し, 水中での歩行訓練と同様の効果を得ようとするものです<sup>(1)</sup>。</p>  <p>●床反力可視化フィードバック歩行訓練システムの開発  歩行リハビリテーションでの自主訓練の質を向上し, 患者の機能改善の効率を上げ, 回復期リハビリテーションの限られた期間を有効に活用するため, 視聴覚フィードバック機構を有する自主訓練システムを開発しています。</p> <p>●立ち上がり支援装置・移乗支援装置の開発 障害者・高齢者の立ち上がりや移乗時の支援を行う装置を開発している。足荷重の測定や, 装置の自律化により, 利用者の利便性やリハビリ効果など, 機械化による利点を生かせる機器開発を検討している。</p> <p>●重度障害児用歩行器電動化装置の評価 重い障害を持つ児童の移動する経験・訓練を行う牽引型歩行器電動化装置に関して, 操作データから発達評価が行えないか, 検討している。  </p>	
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 吊り上げ式歩行訓練装置の開発と評価, 荒金智, 池内秀隆, 今戸啓二, 大西謙吾, 斉藤之男, 宮川浩臣, ライフサポート, Vol.18, No.9, pp.3-10.</li> <li>2. Proposal for a Gait Training Device using a Walker with Visual Feedback Function, H. Ikeuchi, Y. Yasuo, K. Fukuyama, M. Ando, Proceedings of the 2018 12th France-Japan and 10th Europe-Asia Congress on Mechatronics, Tsu, Japan, pp.350-354.</li> <li>3. 足荷重を視聴覚フィードバックする歩行訓練システム, 池内秀隆, 福山慧, 阿部功, 設計工学, Vol.55, No.10, pp.8-14.</li> <li>4. Development of Sit-to-Stand Support System Using Ground Reaction Force, H.Ikeuchi, M. Nagatoshi, A. Miura, Computers Helping People with Special Needs (14th International Conference, ICCHP 2014 Proceedings), Paris, France, pp.256-259.</li> <li>5. 遠隔操作により操縦可能な移乗支援機器の開発, 大神優佳, 松尾重明, 阿部功, 三浦篤義, 池内秀隆, 第37回ロボット学会学術講演会, 2019.</li> <li>6. 重度障害児用牽引型歩行器電動化装置「B-GO」の開発, 相原茂, 武智あかね, 池内秀隆, 後藤保広, 松野奈帆, 池田喜一, 徳丸聖久, 酒井良磨, バイオメカニズム学会誌, Vol43.No.1, pp.55-60</li> </ol>	

所属・職位	理工学部共創理工学科応用化学コース・教授	
氏名	石川 雄一 (Ishikawa Yuichi)	
取得学位	工学博士、九州大学、1986年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	生物有機化学、資源循環化学、生体模倣化学	
研究キーワード	柑橘果皮の保健機能成分、極限環境下の合成脂質、次世代食料の開発	
研究内容	<p><b>1. ユズ、カボス果皮の抗アレルギー、脂肪肝抑制効果 (SDGs 2と9)</b></p> <p>ユズとカボスは、大分地域の特産物である。これら香酸柑橘は、温州みかんと異なり果汁が重さで2割と少なく多量の果皮が産廃となっている。完熟黄化したユズ果皮のエタノール抽出物には、I型アレルギーのバイオマーカー指標値である亢進したIgE値を軽減する(マウスへの経口投与)。同時にIL-5、IL13サイトカインの値の軽減、患部に湿潤した好酸球濃度も減少することも確認している。また、ユズ果皮に加えて、黄化した完熟カボス果皮の双方共に、高シヨ糖食で誘発した脂肪肝を抑制することを確認している。これらをテコにして、地域の食品企業と協働してユズ果皮加工食品を商品化する資源循環と産学連携を展開している。(アレルギーの臨床, Vol.33, No.9, pp.80~85)</p> <p><b>2. 極限環境下の合成脂質など (SDGs 9)</b></p> <p>細胞膜を構成している2分子膜は、水中のみでなくオイル中でも形成できることを見いだした。木星の衛星タイタンにはメタンなどの海があるとされ、水中でなくても自己組織化する脂質型の両親媒性分子の開発について興味を持っている。その一つとして、海底6万mに相当する超高压を印加した際の水中2分子膜の挙動について研究している。また、新しいイオン液体の開発も展開している。</p> <p><b>3. 次世代食料(振替タンパク質など)の開発 (SDGs 2、9、13)</b></p> <p>(a) 農作物の窒素代謝を促進させる葉面散布剤2種を地域企業と協働で三つの特許取得を踏まえて商品化した。散布剤使用により、二酸化炭素を固定化するタンパク質rubiscoの増加に伴い、窒素Nのアミノ酸への代謝変換を促している。特許取得による収益の一部が、毎年大分大学に企業から納められている。</p> <p>(b) 次世代食料(代替タンパク質)として注目されている「ミールワーム幼虫」の成分とその効率的な飼育に興味を持っている。2021年初頭に、欧州食品安全機関(EFSA)は、ミールワームをヒトが消費しても安全であると評価した。ミールワームの餌として、大分の味噌醤油産業から廃棄されている有機物を投与し、アミノ酸や油脂に与える効果について21021年度から着手したところである。自治体と協働したSDGsにも貢献できる資源循環型の研究である。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p><b>1. ゆず、かぼす果皮の抗アレルギー、脂肪肝抑制効果 (SDGs 2と9)</b></p> <p>特許第4803553号「柚子果皮に由来するNF-kB/Th2亢進抑制剤およびその用途」          開発商品:「柚子の力」<a href="http://www.tennensouko.com/yuzu_shohin/yuzu_notikara.html">http://www.tennensouko.com/yuzu_shohin/yuzu_notikara.html</a>2          (株)つえエーピー、開発商品:「ゆずパン」<a href="http://www.usapanco.jp/yuzupan/">http://www.usapanco.jp/yuzupan/</a> 宇佐パン粉(有)</p> <p><b>2. 極限環境下の合成脂質など (SDGs 9)</b></p> <p>オイル中の2分子膜 J. Am. Chem.Soc., 116, 5579-5591, 1994          イオン液体のカチオンとアニオン相互作用 Phys. Chem. Chem. Phys., 2007, 9, 5891 - 5896.</p> <p><b>3. 次世代食料(振替タンパク質など)の開発 (SDGs 2、9、13)</b></p> <p>(a) 特許第5339231号「植物の生育促進剤とその製造方法」、その他に特許第4560723号、特許第4565238号、特許第4830134号の三つの取得特許。          開発商品:「ルビスク」<a href="http://www.farm-tech.co.jp/tech/">http://www.farm-tech.co.jp/tech/</a> ファームテック(株)</p> <p>(b) 特願第2019-191822「畜産食肉の脂質低減剤とその製造方法」</p>	

所属・職位	理工学部共創理工学科応用化学コース・教授	
氏名	井上 高教 (Inoue Takanori)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、1992年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	分析化学, 光化学, レーザー化学
研究キーワード	分析化学, レーザー分光分析, 超高感度検出, 界面, 画像解析, AI
研究内容	<p>●材料に含まれている多くの物質の組成, 量や化学的性質を分析・解明することを目的に, 光に係る知識を活かし, 光の新しい原理の発見を目指し, また多くの光デバイス機器の特性を目的に応じて使い分け, その幅広い応用を模索し, 数多くある分析対象物に対応できるような手法の研究開発を行っています。</p> <p>●レーザー多光子イオン化法を用いた油/水界面の分析, 顕微鏡とレーザーを組み合わせた発光法による水溶液中の金属の高感度分析, 色変化による匂い分析のための簡易型センサの開発, 抗原抗体反応の高感度分析などを行っています。</p> <p>●複雑な信号系 (ノイズの大きい信号) や画像系データに対して, 特殊なアルゴリズムを用いて, 有意な信号の抽出, 相関関係を明らかにしています。</p> <p>●溶液 (バルク, 表面, 液液界面) や固体表面にレーザーを照射して, 発生する電子や光 (蛍光, ラマン光, 散乱光) を, 波長 (紫外から赤外) や時間分解 (ナノ秒からフェムト秒) で計測し, 特定の標的分子のみを選択的に高感度 (分子1個) に検出しています。手法の提案, 装置 (高感度タイプと簡易タイプ) の開発と実試料への応用を行っています。</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p>← 液体の蛍光 物質が異なると, 蛍光の色 (波長) も異なる! 光強度は, 物質の量に比例.</p>
研究業績・アピールポイント	<p>○レーザー光やLED光の照射技術 (コリメート, 顕微鏡下, 光ファイバ) ○微弱な光の計測 (波長分離, 光強度), 散乱光, 蛍光, ラマン光○微弱な電流の計測 (fAオーダー, nVオーダー) ○信号解析 (FFT, 自己相関関数, 多変量解析など) ○匂い解析手法 (匂いセンサの開発) ○マイクロチャンネル中での流体制御・微量検出技術などの技術を有し, 1.レーザー光学顕微鏡システムの開発に関する研究, 2.簡易診断キットの光学式高感度検出に関する研究, 3.レーザーを用いた金属表面の局所分析と状態解析, 4.色素分子含有ガラス膜のマイクロ領域解析及び匂いガスセンサへの応用, 5.ファイバとレーザー照明技術による蛍光装置の開発, 6.金属表面の処理技術およびその評価手法の開発, などの実用化研究や共同研究を行った。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・教授	
氏名	岩本 光生 (Iwamoto Mitsuo)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、1995年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	熱流体工学
研究キーワード	液体金属, ナノ流体, 自然対流伝熱
研究内容	<p>1. 液体金属の流れの磁場による制御</p> <p>液体金属などの導電性流体に静磁場や変動磁場を印加して流れ・温度分布・濃度分布などを制御するための研究を行っている。磁場による液体金属の流れの制御は、半導体基板となるシリコン単結晶の育成などで重要な技術である。本研究室では低融点金属のガリウムを用いた実験や数値解析を行っている。</p> <p>2. ナノ流体の自然対流伝熱特性</p> <p>半導体の高密度化による発熱密度の増大に対応し、従来の空気や水に代わる新たな冷却材料としてナノ流体が注目されている。ナノ流体は、ベース流体に100nm以下のナノサイズの固体粒子を分散させたものであり、ベース流体よりも熱伝導率の高い粒子を用いることで高い熱伝導率のナノ流体が作成可能である。このナノ流体の自然対流伝熱特性を実験や数値解析により検討している。</p> <p>3. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ドライアイス粒子を高速で圧縮空気とともに噴射して洗浄を行うブラスト洗浄</li> <li>・パルスレーザー印加などによる表面融解による変形シミュレーション</li> </ul>

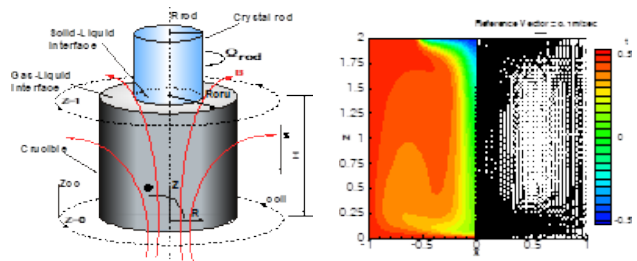










図1 円形容器内の熱流動解析の例

研究業績・アピールポイント	<p>1. 液体金属の流れの制御</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成26年度～28年度 (基盤研究 C) No.26420151</li> <li>研究課題名: 高品位結晶育成のための融液流動制御と流れの直接測定</li> <li>・榎木 陽貴, 門田 翔平, 岩本 光生, 齋藤 晋一, 赤松 正人, 尾添 紘之</li> <li>Combined effects of the rotational magnetic field and the crucible rotation under the CZ melt flow.</li> <li>The 31th International Symposium on Chemical Engineering, No. OG-04, (2018), Thailand, pp.1-2.</li> </ul> <p>2. ナノ流体の自然対流伝熱特性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成29年度～31年度 (基盤研究 C) No.17K06200</li> <li>研究課題名: ナノ流体による対流・沸騰伝熱促進と伝熱機構の解明</li> <li>・壺型円筒容器内のAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-水ナノフルードの自然対流熱伝達特性</li> <li>赤松正人, 鈴木幹士, 岩本光生</li> <li>日本機械学会論文集 (2020.3.25) Vol.86, No.883, 2020, pp.1-15, DOI:10.1299/transjsme.19-00358</li> </ul> <p>3. その他 (ドライアイスを用いた洗浄技術)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・岩本光生「ドライアイスブラスト洗浄～表面を傷つけず環境に優しい洗浄方法～」</li> <li>公益社団法人化学工学会, 化学工学 Vol.77, no.7 (2013)p.540</li> </ul>
---------------	--



所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・教授	
氏名	氏家 誠司 (Ujii Seiji)	
取得学位	博士 (理学)、東京理科大学、1992年10月	
SDGs目標	    	


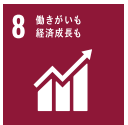


研究分野	高分子化学, 繊維科学, 液晶科学, 天然物化学
研究キーワード	熱物性, 構造解析, 化学修飾, 合成, 調光素子





研究内容	<p><b>1. 高分子材料および液晶材料 (高分子, 低分子) の開発 (合成と物性)</b></p> <p>(1) 新規な高分子材料および液晶材料の開発に加えて, 高分子 (プラスチック, 繊維) の機能改質 (接着性, 相溶性) なども開発対象</p> <p>(2) 関連物質として, 液晶可溶化剤, 液晶架橋化剤, 界面活性剤なども開発対象</p> <p><b>2. 高分子・繊維材料の劣化評価 (品質管理)</b></p> <p>熱劣化や環境劣化などによる高分子・繊維材料の化学構造変化と物性変化の評価</p> <p><b>3. 天然物の改質, 物性評価および実用化</b></p> <p>(1) セルロースなどの天然高分子の化学修飾による液晶材料化 (液晶材料化⇒配向度の向上, 繊維強度・弾性率向上)</p> <p>(2) 化学修飾天然高分子の繊維材料化 (図1)</p> <p>(3) 天然廃棄物の利用方法の開拓</p> <p><b>4. 調光液晶素子の開発と機能評価</b></p> <p>(1) 光重合法によるマイクロ相分離による高分子ネットワーク/液晶複合膜の作製</p> <p>(2) 二色性色素を使った高分子ネットワーク/液晶複合膜のカラー化 (図2)</p>
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>図1. 改質セルロース繊維</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>図2. 二色性黒色素化高分子ネットワーク/液晶複合膜外観 (電場off-on時)</p> </div> </div>

研究業績・アピールポイント	<p>液晶機能を導入することによって, 次のような利点がある. (1)光学的機能改善, (2)繊維材料の強度・弾性率の向上 (図1の改質セルロース繊維 (生分解性) は液晶紡糸によってつくられた繊維で, 化学修飾による液晶化によって機械特性が向上), (3)ポリウレタンの液晶機能導入によって, 機械特性の改善, 光などの外部刺激応答性発現が可能, (4)外部刺激による液晶の応答によって, 光学的性質が変化するため図2に示すような調光機能をもつ複合膜が作製できる. このような調光機能素子はスマートウィンドウとも呼ばれる.</p> <p>天然高分子の特性を解析し, できるだけ少ない化学修飾によって加工性を向上させることで, 生分解性材料として用いる可能性を拡大できる. また, 天然物の中には利用されず, 廃棄されるものもあるが, その利用方法を見つけることが重要であり, 基礎科学的アプローチを用いて研究を行っている.</p>
---------------	--






所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・教授	
氏名	大賀 恭 (Ohga Yasushi)	
取得学位	博士(工学)、京都大学、1995年3月	
SDGs目標		
研究分野	物理有機化学	
研究キーワード	動的溶媒効果, 高圧化学	
研究内容	<p>●液相有機反応機構の研究</p> <p>遷移状態理論(TST)が成立しない非平衡条件下での反応は、例えば酵素が関与する生体内反応など、動植物が生命活動を維持するメカニズムを理解する上で重要である。しかし測定対象は、電子的励起状態にある分子の超高速反応に限られ、理論モデルの十分な検証には使えなかった。さらに多くの有機化学者が対象とする、電子的基底状態の反応は、検討の対象とされていなかった。その中で、我々の高圧力と高粘性媒体を用いた超高粘性反応場での測定は、これらの欠点をいずれも克服できる独創的な実験手法であり、C=N, N=Nに関する異性化反応に対して、従来は実験的には全く得ることができなかった、反応過程におけるミクロな溶媒-溶質相互作用についての情報が得られることを示した[1]。また実験的証拠と共に理論的考察を共同研究者と行い、加速法を取り入れた分子シミュレーションによって、アゾベンゼン誘導体のZ/E異性化反応速度定数をトラジェクトリから直接算出し、その非TST挙動を再現することに成功している[2]。さらに水素結合が可能な置換基をもつ場合、溶媒との間に大きな相互作用を生むと考えられるが、従来のTSTの枠内の有機反応機構論に基づく実験では、反応途中のダイナミクスに関する情報は得られない。しかし我々の手法を用いて、動的溶媒効果の現れ方を比較することにより、定性的に溶媒-溶質相互作用の存在を示すことに成功している[3]。また最近共同研究で、動的溶媒効果を利用して、室温でナノ秒程度の不安定中間体を秒オーダーの長寿命化に取り組んでいる[4]。</p> <p>研究室ホームページ <a href="https://www.appc.oita-u.ac.jp/kinetics/hp/">https://www.appc.oita-u.ac.jp/kinetics/hp/</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>[1] A New Application of High-Viscosity Kinetics. An Attempt to Identify a Site of Solvent Reorganizations around a Reactant, K. Sugita, Y. Goto, M. Ono, K. Yamashita, K. Hayase, T. Takahashi, Y. Ohga, T. Asano, <i>Bull. Chem. Soc. Jpn.</i>, <b>2004</b>, 77, 1803-1806.</p> <p>[2] Computational Analysis of Solute-Solvent Coupling Magnitude in the Z/E Isomerization Reaction of Nitroazobenzene and Benzylideneanilines, Y. Shigemitsu, Y. Ohga, <i>J. Solution Chem.</i>, <b>2018</b>, 47, 127-139.</p> <p>[3] Photochromic Behaviour of 3,3-Diaryl-3H-naphtho[2,1-b]pyrans Having Polar Substituents on Aryl Groups. Electronic Substituent Effect and Dynamic Solvent Effect on Thermal Fading Process, Y. Ohga, Y. Kakitsuba, K. Suzuki, Y. Arakawa, J. Murawaki, Y. Amano, T. Takahashi, K. Iio, <i>Journal of Photocatalysis Science</i>, <b>2012</b>, 3, 41-47.</p> <p>[4] Dynamic Solvent Effects in Radical-radical Coupling Reactants: An Almost Bottleable Localised Singlet Diradical, R. Akisaka, Y. Ohga, M. Abe, <i>Phys. Chem. Chem. Phys.</i>, <b>2020</b>, 22, 27949-27954.</p>	

所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・教授	
氏名	大竹 哲史 (Ohtake Satoshi)	
取得学位	博士 (工学)、奈良先端科学技術大学院大学、1999年6月	
SDGs目標	  	
研究分野	計算機科学 (ディペンダブルシステム)	
研究キーワード	LSIの論理設計とテスト, ATPG, DFT, BIST, フィールド高信頼化, 非同期式回路, IoT	
研究内容	<p>現在、人々はコンピュータ (大規模集積回路 (LSI)) に依存して生活しています。安全・安心・安定な社会を実現するには、そのディペンダビリティが不可欠です。LSIの高信頼化のための論理設計とテスト、そのアプリケーションに関する研究を行っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● LSIのテストパターン生成 (ATPG) 技術 微小遅延故障などのLSI微細化で生じる故障モードや、故障予知 (劣化検知) に対応した高品質なテストパターンを生成する技術を研究開発しています (論文1)。</li> <li>● LSIのテスト容易化設計 (DFT) 技術 高品質なテストを行うために、論理レベル、レジスタ転送レベル、動作レベルなど、様々な設計抽象度におけるテスト容易化設計に関する技術を研究開発しています (論文2)。</li> <li>● LSIのフィールド高信頼化技術に関する研究 長期間にわたって使用されるLSIは、劣化により故障が生じます。そのため、出荷前のテストだけでは不十分で、フィールドでも定期的にテストを行う必要があります。組込み自己テスト (BIST) 技術を応用し、フィールド劣化検知技術を研究開発しています (論文3)。</li> <li>● 非同期式回路に関する研究 現在広く使用されているクロック同期式のLSIに対し、劣化耐性や低消費電力性などの特性をもつ非同期式回路について、その設計とテストの技術を研究開発しています (論文4)。</li> <li>● IoTシステムの実装 実際にIoTシステムを構築し、実環境でのデータ収集と解析による産業や社会、医療における課題解決を図ると同時に、IoTシステム自体のフィールド高信頼化やIoTデバイスの低消費電力化に関する技術も研究開発しています (論文5)。</li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<p>LSI設計・製造テストに関して、設計自動化技術を中心として、論理設計、テスト設計技術を有します。また、低消費電力・高信頼向けの非同期式回路のテスト技術、フィールドテストに関する特許を有します。データマイニング技術、AI技術を活用した不良品予測とその精度向上に取り組んでおり、統計処理、機械学習に関する技術も有します。IoTシステム、センサの設計と製作を行っており、ハードウェア/ソフトウェア全体の設計技術、ネットワークを介したデータ収集等のノウハウを有します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. A method of test generation for path delay faults in balanced sequential circuits, Proc. VTS'02.</li> <li>2. A non-scan approach to DFT for controllers achieving 100% fault efficiency, JETTA, Oct. 2000.</li> <li>3. DART: dependable VLSI test architecture and its implementation, Proc. ITC'12.</li> <li>4. A delay measurement mechanism for asynchronous circuits of bundled-data model, Proc. DDECS'15.</li> <li>5. Vibration measurement of signal bonds for Shinkansen, Proc. ICCE'21.</li> </ol>	

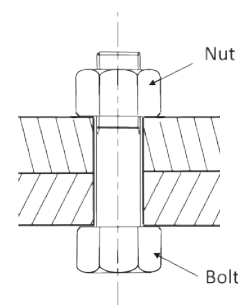
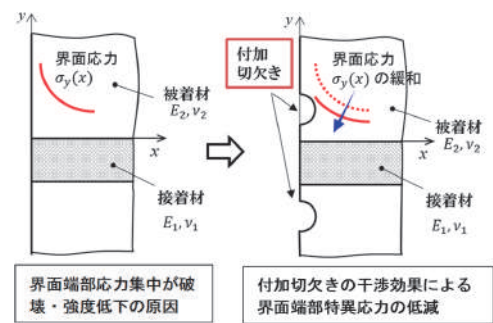
所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース・教授	
氏名	大谷 俊浩 (Otani Toshihiro)	
取得学位	博士 (工学)、熊本大学、2005年6月	
SDGs目標	  	

研究分野	コンクリート工学
研究キーワード	耐久性, 収縮ひび割れ, 中性化, 塩害, アルカリシリカ反応, 補修・補強, リサイクル
研究内容	<p>コンクリートは、セメントの製造、コンクリートの施工からコンクリート構造物の解体に至るまで多くの天然資源やエネルギーの利用とCO<sub>2</sub>の排出が行われており、大きな環境負荷を与えている。その改善のため、コンクリートにおける環境負荷低減を目指し、コンクリートの「耐久性」、「環境問題」、「補修・補強」、「先端材料」を大きなテーマとして、コンクリート構造物の長寿命化や延命化に関する下記のような研究を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 良質な天然骨材の枯渇対策としてのフライアッシュの有効利用</li> <li>(2) フライアッシュを混和したコンクリートの強度推定方法</li> <li>(3) 短繊維と混和材を用いたモルタルのひび割れ抵抗性・自己治癒性能</li> <li>(4) フライアッシュおよび高炉スラグ微粉末を混和したコンクリートの物質移動抵抗性および鉄筋腐食抵抗性</li> <li>(5) 中性化と塩害の複合劣化を受けるフライアッシュを混和したコンクリートの鉄筋腐食抵抗性</li> <li>(6) フライアッシュおよび高炉スラグ微粉末を混和したコンクリートのアルカリシリカ反応抑制効果</li> <li>(7) フライアッシュを用いた高耐久補修用モルタルの開発</li> <li>(8) コンクリート構造物の劣化予測手法</li> </ol>
研究業績・アピールポイント	<p>コンクリートの各種物性、コンクリート構造物の診断に関する様々な装置を保有。毎年、大分県内外の企業との共同研究を実施。</p> <div style="display: flex; flex-wrap: wrap; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> 中性化促進装置</div> <div style="text-align: center;"> 凍結融解試験装置</div> <div style="text-align: center;"> 細孔分布測定装置</div> <div style="text-align: center;"> 気泡組織計測装置</div> <div style="text-align: center;"> 熱重量分析装置</div> <div style="text-align: center;"> 透気試験装置</div> </div> <p>研究室ホームページ：<a href="http://www.arch.oita-u.ac.jp/a-zai/concrete.html">http://www.arch.oita-u.ac.jp/a-zai/concrete.html</a></p>

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・教授	
氏名	小田 和広 (Oda Kazuhiro)	
取得学位	博士(工学)、九州工業大学、1995年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	材料力学、弾性力学、破壊力学
研究キーワード	応力解析、応力集中、特異応力場、接着接合、材料強度

研究内容	<p>●接着接合構造の強度評価および接着強度向上に関する研究（論文1）</p> <p>省エネルギーやCO<sub>2</sub>削減の目標達成のため、接着接合構造は、キーテクノロジーのひとつとして広範囲に普及してきており、異種材料接合構造の高強度化が急務となっている。本研究では、接合界面近傍に付加切欠きを設けることにより、界面端部特異場の強さの低減および高強度の接着構造を実現する手法を検討している。切欠きによる干渉効果という力学的現象に基づく手法であるため、接着界面の形状を変更なしに導入できることが特徴である。</p> <p>接着接合については、技術情報協会オンラインセミナー「接着接合部における応力発生メカニズム、その管理、その評価」（2021）、日本材料学会第161回破壊力学部門委員会（膜・表面・界面に関する最近の研究開発）（2018）にて招待講演を行っている。</p> <p>●ボルト・ナット締結体の疲労強度向上に関する研究（論文2）</p> <p>ボルト・ナット締結体は工業製品に広く普及しており、緩みにくいボルト・ナット等いくつか製品化されている。しかし、緩み性能と高疲労強度の両者が成立する構造は少ない。本研究では、ナットにピッチ差を導入することにより、ボルトとナット間の接触状態を制御し、疲労強度およびゆるみ性能の向上を狙ったものである。</p> <p>●鋭い切欠きを有する平板の弾塑性解析に基づく強度評価</p> <p>船舶の溶接部などは鋭い切欠きにモデル化できる。塑性変形を伴う破壊強度を非線形き裂力学の概念を適用した評価手法を検討している。</p>
------	--



研究業績・アピールポイント	<p>●共同研究プロジェクト（令和3年度「戦略的基盤技術高度化支援事業」）</p> <p>県内企業との共同研究「下水管の工事や検査を安全かつ低価格で行う国産初の高摩擦位置保持型リングチューブ式止水プラグの研究開発」を実施中</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Stress intensity factor solution for edge interface crack based on the crack tip stress without the crack, Kazuhiro ODA, Yosuke TAKAHATA, Yuya KASAMURA, Nao-Aki NODA, Engineering Fracture Mechanics, Volume 219, 1 October 2019, 106612.</li> <li>2. ボルト・ナット締結体の疲労強度に及ぼすボルト形状とピッチ差付与の影響, 小田和広 他7名, 日本機械学会論文集, Vol.86, No.884 (2020-4), DOI:10.1299/transjsme.19-00339</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「演習問題で学ぶ材料の力学」, 野田・小田・高木 (共著), コロナ社 (2022年4月)</li> </ol> <p>●授賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 国際会議PHENMA2020において, Best Paper Award を受賞 (2021年4月)</li> </ol>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部





医学部附属病院

理工学部

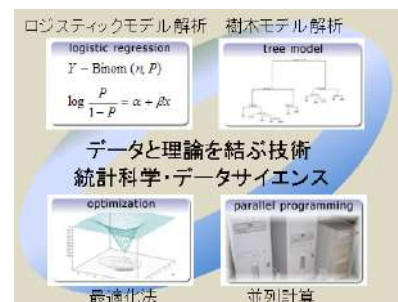
福祉健康科学部

その他学内施設等








所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・教授	
氏名	越智 義道 (Ochi Yoshimichi)	
取得学位	Ph.D., ワシントン大学、1983年12月	
SDGs目標	  	

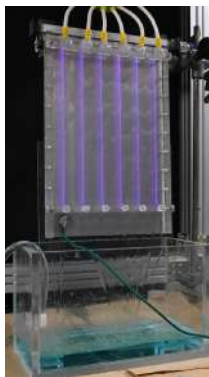
研究分野	統計科学
研究キーワード	計算機統計学、離散データ解析、正確推測、超過変動、並列分散計算
研究内容	<p>●離散データ解析における超過変動の処理に関する研究</p> <p>離散データ解析の枠組みで解析を行う際に典型的に想定される分布では、その平均と分散の構造に制約が生じ、データの挙動を反映できない場合があり、分析の妥当性に問題が生じる場合がある。このため、分布拡張や構造を特定せずに分析を行う方法の開発を行う。</p> <p>●離散データの正確推測に基づく解析手法の開発</p> <p>離散データ解析におけるもう一つの問題点は、データに想定される分布が適切なものであっても、その推測が大標本理論による漸近論に基づく点にある。特に、医学・生物学分野では倫理的な制約等から、得られる標本に限界があることが多く、推測の妥当性が問題となる。この問題に対応するために、漸近論によらず、起こりうるデータのパターンを網羅的に数え上げることにより分析を行う正確推測の適用を検討する。</p> <p>●ヘテロな計算機環境下での効率的な統計計算アルゴリズムの検討</p> <p>上記内容1、2のような新たな解析手法で用いられる統計計算では、数理解析的には計算不能な場合が多い。計算機の進展に伴い、モンテカルロ法などの技法に基づいて、理論的には上記のような場面でも、新たな解析手法を実装することが可能になってきている。ただ、必然的に計算機集約的な処理が求められるため、研究室内の計算機を並列処理に組み入れて統計計算の効率化を図ることを検討する。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>著書1. 2002年、“データによるプログラミング—データ解析言語Sによる新しいプログラミング—”、垂水共之、越智義道、水田正弘、森裕一、山本義郎 共訳、森北出版。</p> <p>論文1. 2004年、“The Performance of Computer Intensive Methods for Overdispersed Categorical Data”, Yoshimichi Ochi, Journal of the Japanese Society of Computational Statistics, Vol. 15, No.2, 255-264.</p> <p>論文2. 2017年、“Garrote Trees as Tree Structured Regression Analysis”, Masatoshi Nakamura, Yoshimichi Ochi, Hiroki Motogaito and Masashi Goto, Journal of the Japanese Society of Computational Statistics, Vol. 30, No. 1, 65-80.</p>





所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・教授	
氏名	金澤 誠司 (Kanazawa Seiji)	
取得学位	学術博士、熊本大学、1990年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	静電気工学、高電圧工学、放電プラズマ工学、レーザ計測、パルスパワー
研究キーワード	大気圧非平衡プラズマ、コロナ放電、レーザ誘起蛍光法、電気流体力学、環境浄化

研究内容	<p>●大気圧放電の生成と反応性プラズマの計測に関する研究 大気圧放電としてコロナ放電、バリア放電、プラズマジェットなどの主要な放電を生成してプラズマの計測を行っている。酸化力の高いヒドロキシラジカル(<math>\cdot\text{OH}</math>)や励起状態にある窒素分子(<math>\text{N}_2(A^3\Sigma_u^+)</math>)の可視化にレーザ誘起蛍光法を用いたシステムを構築している。ラジカル計測として電子スピン共鳴法や化学プローブ法も適用している。放電が生成する流れ場はシュレーレン法による電気流体力学的視点から現象の解明を目指している。</p> <p>●放電プラズマによる環境改善技術に関する研究 環境に深刻な影響を及ぼす難分解性物質を放電プラズマで処理するためのプロセスの開発を行っている。大気中に浮遊する微小粒子状物質の集じんやプラズマを用いた新たな高度促進酸化処理による次世代水処理技術の研究を推進している。</p> <p>●静電気問題と障災害の解決に関するコンサルティング ※関連リンク：<a href="http://elecls.cc.oita-u.ac.jp/plasma">http://elecls.cc.oita-u.ac.jp/plasma</a></p>	 <p>プラズマ水処理の様子</p>
------	---	--

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2011年、S. Kanazawa, <i>et al.</i>, "Observation of OH radicals produced by pulsed discharges on the surface of liquid", <i>Plasma Sources Science and Technology</i>, Vol.20, 034010 (8 page).</li> <li>2020年、S. Kanazawa, <i>et al.</i>, "Temporal-spatial distribution of <math>\text{N}_2(A^3\Sigma_u^+)</math> metastable molecules in the pulsed positive streamer in the needle-to-plate gap in sub-atmospheric pressure nitrogen", <i>Journal of Electrostatics</i>, Vol.103, 103419 (8 pages).</li> </ol> <p>●特許</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2009年、「大気圧コロナ放電発生装置」(特許4304342号)</li> <li>2015年、「ヒドロキシラジカルの測定装置及び測定方法」(特許5740138号)</li> <li>2021年、「ヒドロキシラジカル検出用組成物及びデバイス、並びにそれを用いたヒドロキシラジカルの検出方法」(特許6904530号)</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2003年、「高電圧パルスパワー工学」(オーム社)</li> <li>2017年、「プラズマ産業応用技術」(シーエムシー出版)</li> <li>2017年、「高度物理刺激と生体応用」(養賢堂)</li> <li>2018年、「高電圧パルスパワー工学」(理工図書)</li> <li>2019年、「電気電子計測」(理工図書)</li> <li>2021年、「高分子絶縁材料」(技術情報協会)</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1993年、電気学会 電気学会論文発表賞</li> <li>1997年、静電気学会 野口賞</li> <li>2006年、IEEE(米国電気電子学会)Innovation and Creativity Prize Paper Award</li> <li>2008年、大分大学 学長表彰</li> <li>2015年、静電気学会 論文賞</li> <li>2017年、静電気学会 進歩賞</li> <li>2018年、大分大学 学長表彰</li> </ol>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部




福祉健康科学部

その他学内施設等

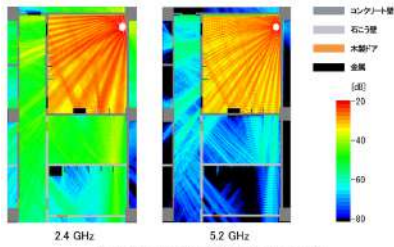
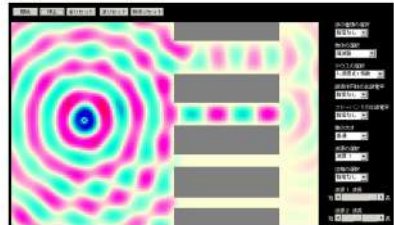
所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・教授	
氏名	菊池 武士 (Kikuchi Takehito)	
取得学位	博士 (工学)、大阪大学、2006年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	ロボティクス, 知能機械システム
研究キーワード	リハビリテーションロボティクス, 福祉工学, 歩行支援, 機能性材料応用
研究内容	<p>次世代ロボット技術はヒトとの直接的な接触を前提としているものが多く、これまでのロボティクス・メカトロニクス機器以上に安全への配慮が重要な課題です。私たちは、機能性材料（電気・磁気粘性流体, 磁気応答性エラストマー, 形状記憶合金等）や柔軟関節, それらを組み合わせたスマート構造を用いて, 安全性の高いリハビリテーションロボット・インテリジェント福祉機器の開発を行っています。</p> <div data-bbox="427 768 1370 1420" data-label="Image"> </div>

研究業績・アピールポイント	<p>○研究プロジェクト</p> <p>(1) 科学研究費補助金(基盤研究 (B)), 「生体の関節運動を模擬した支援機器は身体負担を軽減できるか?」, 2019-2022, 研究代表者</p> <p>(2) 防衛装備庁 安全保障技術研究推進制度, 小規模研究課題 (タイプC), 「繊細な力触覚提示のための革新的MR流体アクチュエータの開発」, 2018-2021, 研究代表者</p> <p>○学術雑誌</p> <p>[1] 菊池武士, 福岡賢治, 増田拓海, 阿部功, 福永道彦, 生体の膝関節運動を模擬した受動型アシストデバイスの開発と評価, 日本機械学会論文集, 86 (892), No.20-00134 (2020)</p> <p>[2] Takehito Kikuchi, Isao Abe, Tomoya Nagata, Akinori Yamaguchi, Tetsumasa Takano, Twin-Driven Actuator with Multi-layered Disc MR Fluid Clutches for Haptics, Journal of Intelligent Material Systems and Structures, 2021, 32 (12), 1326-1335 (2020)</p>
---------------	--



所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・教授	
氏名	工藤 孝人 (Kudou Takato)	
取得学位	工学博士、九州大学、1990年3月	
SDGs目標	 	

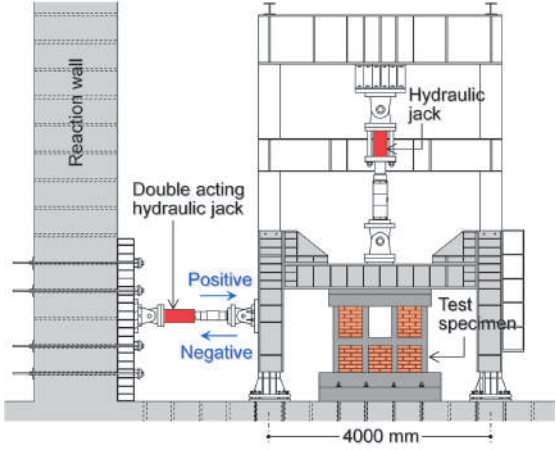
研究分野	電磁波工学とその応用
研究キーワード	電磁両立性, 電磁干渉性, 電磁波逆散乱問題, シミュレーション

<p>研究内容</p> <p>①電磁環境シミュレーションに関する研究：電磁界解析手法の1つであるFDTD法 (Finite-Difference Time-Domain Method) に基づき、電磁波の伝搬・散乱に関するコンピュータ・シミュレーションを行っている。具体的には、無線LAN電波の建物内強度分布の可視化、周期構造を利用した電磁遮蔽・放射特性解析などである。</p> <p>②電磁波シミュレータに関する研究：可視光線と呼ばれる周波数領域を除き、一般に電磁波は人間の目で感知できない。物体による散乱や導波路伝搬など、電磁波にまつわる諸現象を可視化することは、その概念を捉える上で極めて重要である。本研究では、電磁界解析手法とJavaプログラミングを組み合わせた高性能電磁波シミュレータの研究を行っている。</p> <p>③電磁波逆散乱問題に関する研究：電磁波の散乱現象を利用して物体の位置、形状、媒質定数などを推定する問題は、一般に電磁波逆散乱問題と呼ばれている。本研究では、物体の断層撮影を想定した計算機シミュレーションを通じ、電磁波を利用した逆散乱問題の高速・高精度解法の開発を目指している。</p>	 <p>無線LAN電磁波の屋内伝搬シミュレーション (周波数によって干渉縞の間隔や壁面での透過率が異なる様子がわかる。)</p>  <p>電磁波動画シミュレータの表示画面 (単一周波数の正弦波が幅の異なる複数の導波路に入射した場合の現象をシミュレーションしたもの。赤い部分が正、青い部分が負の値を表す。)</p>
---	---

<p>研究業績・アピールポイント</p>	<p>科学研究費採択状況：</p> <p>①周波数選択性をもつ機能的周期構造の研究開発と医療電磁環境への応用，基盤研究(C)，代表，2020-2022.</p> <p>②医療機器使用の安全安心な電磁環境の確立と無線通信による医療の効率向上に関する研究，基盤研究(B)，分担，2015-2017. など</p> <p>代表的な論文：</p> <p>①S. Kono and T. Kudou, 3D-FDTD analysis of electromagnetic shielding by using single-square-loop frequency selective surface, Proc. APCAP 2019, 6AM1-B-2, pp. 146-149, Aug. 2019.</p> <p>②T. Kudou, K. Miura, and E. Hanada, Numerical analysis of band-selective electromagnetic shielding by using dielectric square lattice type periodic structure, Proc. EMC Sapporo &amp; APEMC 2019, MonPM1A.5, pp.6-9, Jun. 2019. など</p>
----------------------	---




- 役員
- 大学院教育学研究科 教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース・教授	
氏名	黒木 正幸 (Kuroki Masayuki)	
取得学位	博士(工学)、九州大学、2008年4月	
SDGs目標	11 住み続けられるまちづくりを 	

研究分野	建築構造学
研究キーワード	鉄筋コンクリート造、組積造
研究内容	<p>●地震被災建物の応急補強に関する研究</p> <p>余震は本震と同程度かそれ以上の強さとなることもあるため、本震で被害を受けた建物を応急的に補強し余震による被害の拡大を最小限にすることが減災や早期復旧の観点から重要となっている。本研究では、PC鋼棒の緊張力によりコンクリートに生じたひび割れが閉じる効果に着目し、地震で損傷した鉄筋コンクリート柱部材を外帯筋状のPC鋼棒により補強する方法の開発に取り組んでいる。これまでに、主筋周辺のコンクリートに生じたひび割れの面積や幅の大きさに応じて応急補強後の主筋とコンクリート間の付着強度を精度良く評価できる算定式を提案している。</p> <p>●枠組組積造建物の耐震性向上に関する研究</p> <p>途上国ではひとたび大地震が発生すると組積造建物の倒壊で被害拡大し、大災害になるといったリスクがある。今日のサプライチェーンなどの相互依存を考慮すると、このリスクを軽減することは途上国の発展のみならず、我が国を含めた国際社会の安定のためにも重要な課題といえる。本研究では枠組組積造 (Confined Masonry) 建物の耐震性向上に向けて、耐力壁に設けられる開口部に対する補強、枠材主筋の定着破壊の抑制、中間梁の入れ方について提案を行っている。</p> <p>※関連リンク：<a href="http://www.arch.oita-u.ac.jp/a-kou/STRENG-LAB/member.html">http://www.arch.oita-u.ac.jp/a-kou/STRENG-LAB/member.html</a></p> <div style="text-align: center;">  <p>中央窓型開口付き試験体と実験装置</p> </div>

研究業績・アピールポイント	<p>代表的な論文を以下に示す。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 許勝雄, 黒木正幸, 菊池健児: 外帯筋状のPC鋼棒で応急補強した鉄筋コンクリート造柱における主筋の修復付着強度に関する実験的研究, 日本建築学会構造系論文集, 第85巻, 第767号, pp. 85-95, 2020. 1</li> <li>2) Kuroki, M., Kikuchi, K. and Nonaka, H.: Effects of Thickness of Mortar Joint on Compressive Strength of Brick Masonry Prism, Proceedings of the 42nd Conference on Our World in Concrete &amp; Structures, pp. 255-260, 2017. 8</li> </ol>
---------------	--



所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・教授	
氏名	後藤 雄治 (Gotoh Yuji)	
取得学位	博士(工学)、岡山大学、2002年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	計測工学、電磁気学
研究キーワード	電磁非破壊検査、電磁界解析
研究内容	<p>電磁気現象を利用した計測・診断技術として、大きく分けて「<b>電磁気センサ開発</b>」、「<b>電力・エネルギー機器支援技術</b>」について研究開発を行っております。</p> <p><b>(1)「電磁気センサ開発」</b></p> <p>「電磁気センサ開発」領域としては、主に自動車のエンジン部を締結する高張力ボルトの緩みを高速診断する電磁気センサの開発や、大型重機の磨耗部に施されている高周波焼入れ深さや硬度の評価を行うセンサ・システムの開発、強磁性を有する圧延ロール上のニッケルめっきの厚みを推定する電磁気センサや、大型鋳造品における残留オーステナイト含有量を、電磁気現象を利用して評価する小型電磁気センサの開発、ガス鋼管の腐食検査を実施する電磁気計測手法の提案等に関する研究・開発を実施してきました。これらの検査・評価手法の研究開発は、緊急に実用化が期待される課題が多く社会的要求度は高いものの、現存しない新技術であるため、民間企業単独での研究開発には失敗のリスクがあり困難な領域とも言えます。そこで私は、大学で培われてきた電磁気学等の基礎理論や高度な電磁界解析技術を駆使し、新しい計測・センシング手法を提案すると共に、民間企業と共同で実用化に向けた取り組みを積極的に行っております。</p> <p><b>(2)「電力・エネルギー機器支援技術」</b></p> <p>「電力・エネルギー機器支援技術」領域としては、次世代の電力エネルギーや電気自動車の電源として注目されている固体高分子形燃料電池の評価技術の提案を行っています。また、より厳格化された原子力発電所内の新しい高速検査・計測技術や、石油精製プラントの計測・診断技術に関する研究開発も行っています。</p> <p>固体高分子形燃料電池の評価技術に関しては、非接触で電池周囲の空間磁界強度を測定することで、膜/電極接合体 (Membrane Electrode Assembly, MEA) 部における電流分布を逆問題解析により推定・評価する新しいセンシングシステムを提案し、本手法の実用化に向けた研究開発を実施しています。</p> <p>原子力発電所内の新しい検査・計測技術に関しては、加圧水型軽水炉(PWR)の二次冷却系伝熱鋼管を検査対象とし、従来から実施されていた超音波探傷法では検査が行えない冷却用フィン付き鋼管や支持鋼板近傍における鋼管外面欠陥検査を可能とする新しい電磁気検査法の提案を行い、実用化に向けた取り組みを行っております。</p> <p>石油精製プラントにおいては、老朽化による事故が懸念されており、設備やプラント検査は急務となっています。特に老朽化が激しい加熱炉内の鋼管を検査対象とし、鋼管肉厚部の表裏面に生じている浸炭深さや欠陥等を高速に診断できる電磁気検査手法の提案を行い、実用化・事業化に向けた取り組みを行っております。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●招待講演論文 Y.Gotoh, N.Sasaguri, and N.Takahashi “Evaluation of Electromagnetic Inspection of Hardened Depth of Spheroidal Graphite Cast Iron using 3-D Nonlinear FEM”. <i>IEEE Transactions on Magnetics</i>, vol.46, no.8, pp.3137-3144, 2010</p> <p style="text-align: right;">他、論文83編</p> <p>●主な研究プロジェクト ・JST A-STEP機能検証フェーズ (代表) 2018年~2019年 ・パワーアカデミー財団、特別推進研究 (代表) 2019年</p> <p>●著書 ・非破壊検査技術シリーズ 磁粉探傷試験Ⅲ、(社)日本非破壊検査協会出版、2009年</p> <p>●受賞 ・蓮沼賞、計測自動制御学会、2019年 ・論文賞、日本非破壊検査協会、2012年、他7件</p> <p>●特許 ・特許第7010427号、2022年 ・US10458775 B2 (United States Patent)、2019年、他6件</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース・教授	
氏名	小林 祐司 (Kobayashi Yuji)	
取得学位	博士 (工学)、大分大学、2002年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	都市計画, 都市防災, 地域防災, 防災・減災教育, 都市空間解析	
研究キーワード	都市計画, 都市防災, 防災・減災教育, 事前復興, 強靱化, 地理情報システム (GIS)	
研究内容	<p>①地理情報システム (GIS) を活用した地域の災害リスク分析や空間構造の分析・評価</p> <p>多様化・激甚化する自然災害への対応を強化するために、災害リスクと避難可能性、被災想定の評価・分析、将来人口推計などを通じて、将来の都市・地域構造のあり方について提案を行っている。これらの研究実績をもとにして、自治体における国土強靱化地域計画、都市計画マスタープランや立地適正化計画--などへの助言も行っている。</p> <p>②事前復興推進のための調査分析と地域連携活動</p> <p>災害発生後のまちの再興が課題となっている。災害、被災を想定しながら次のまちづくりをどのように進めていくのかなど、被災後のビジョンを共有しながら、効率的・効果的な復旧・復興を進めていく必要があり、事前復興の役割は大きいと考えられる。そこで、自治体・企業と連携し、大分県域における事前復興推進のための組織化 (大分県域事前復興研究体【SPiRiT】の設置) を行い、調査・分析、意識啓発を実施している。</p> <p>③防災・減災教育と活動の支援</p> <p>防災・減災意識の社会実装を目指し、学校や地域における防災まち歩きやワークショップなどの活動を継続的に実施している。このなかでは、LEGOなどを活用し、子ども達が興味を持って防災・減災に取り組むことができるような工夫も行っている。</p>	<p>▶<b>氾濫特性マトリックスによる避難行動判定結果</b></p>  <p>水災害のリスク評価</p>  <p>事前復興の提案</p>  <p>子ども向けのワークショップ</p>
研究業績・アピールポイント	<p>地域社会との連携のもとで「防災・減災」の教育や活動の支援を行ってきた。防災・減災教育は次世代を担う子ども達や若者にとって重要な取り組みと考えており、今後も継続して活動を進めていく必要がある。また、事前復興の取り組み (意識啓発等) として、大分県域事前復興研究体【SPiRiT】の事務局も担当している。</p> <p>▶ 大分県域事前復興研究体【SPiRiT】HP <a href="https://www.spirit-oita.com/">https://www.spirit-oita.com/</a></p> <p>○研究業績</p> <p>【論文】「河川流域における河川氾濫を想定した居住エリアと都市計画制度への提案 一大分県大分市を対象として」(情報・システム・利用・技術シンポジウム論文集, 2021.12), 「造の評価と将来推定および災害を想定した居住地域の提案 一大分県日田市を対象として」(情報・システム・利用・技術シンポジウム論文集, 2021.12), 「自治会における防災意識・活動および学校・行政との連携に関する課題把握 一大分県臼杵市の自治会を対象としたアンケート調査を通じて」(地域安全学会論文集, 2019.3) など</p> <p>【科研費】「災害リスクを許容し、対応力を備えた家庭・学校・地域のコミュニティ形成と実践」など</p>	

所属・職位	理工学部 共創理工学科 自然科学コース・教授	
氏名	芝原 雅彦 (Shibahara Masahiko)	
取得学位	博士 (理学)、九州大学、2009年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	構造有機化学
研究キーワード	シクロファン, 色素増感光触媒, 分子ワイヤー
研究内容	<p>●多層[3.3]シクロファンに関する研究</p> <p>二つの芳香環をメチレン鎖等で架橋したシクロファンは渡環 <math>\pi</math> 電子相互作用を調べる観点から広く研究され, 多くの興味深い化学的または物理的性質が期待される。我々はこれまでに, 4層までの多層[3.3]パラシクロファン(PCP)および6層までの多層[3.3]メタシクロファン(MCP)の合成に成功し, 芳香環が積層した際に生じる, 空間・結合両経路による渡環 <math>\pi</math> 電子相互作用についての研究を行い, いずれの多層シクロファン(CP)においても多層化にともない強い電子ドナー性があることを明らかにした (論文1,2)。現在, 系統的な渡環 <math>\pi</math> 電子相互作用の解明に向けさらなる多層化を行っている。</p> <p>●多層[3.3]シクロファンの機能化に関する研究</p> <p>3層および4層CPにおいてはラジカルカチオン種の顕著な非局在化が観測され, 多層化にともない電荷共鳴帯の長波長シフトを観測した。これは, 多層シクロファンが電荷分離状態に寄与することを示しており, これらを組込んだ分子ワイヤーおよび色素増感光触媒への展開を目的として研究を行っている (論文3,4,5)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Synthesis, Structure, and Transannular <math>\pi</math>-<math>\pi</math> Interaction of Multilayered [3.3]Metacyclophanes. <i>J. Org. Chem.</i>, <b>2007</b>, 72, 2865-2877.</li> <li>2. Synthesis, Structure, and Transannular <math>\pi</math>-<math>\pi</math> Interaction of Three- and Four-Layered [3.3]Paracyclophanes. <i>J. Org. Chem.</i>, <b>2008</b>, 73, 4433-4442.</li> <li>3. Delocalization of Positive Charge in <math>\pi</math>-Stacked Multi-benzene Rings in Multilayered Cyclophanes. <i>J. Phys. Chem. A</i> <b>2011</b>, 115, 741-746.</li> <li>4. Synthesis and Electronic and Photophysical Properties of [2.2]- and [3.3] Paracyclophane-Based Donor – Donor' – Acceptor Triads. <i>J. Org. Chem.</i>, <b>2014</b>, 79, 11440-11453.</li> <li>5. Triphenylamine derivatives and the lithium-ion capture of [3.3] cyclophane used in organic dye-sensitized solar cells. <i>Dyes and Pigments</i>, <b>2017</b>, 136, 761-772.</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

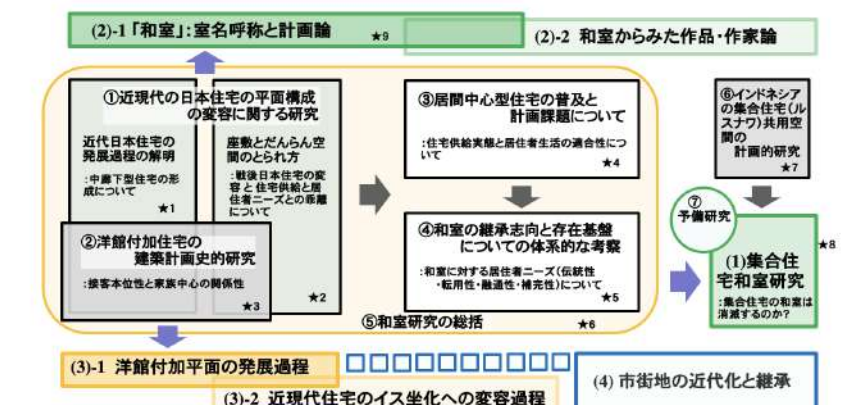
所属・職位	理工学部 共創理工学科 自然科学コース・教授	
氏名	末谷 大道 (Suetani Hiromichi)	
取得学位	博士 (情報学)、京都大学、2001年11月	
SDGs目標		
研究分野	複雑系科学、非線形動力学、ソフトコンピューティング	
研究キーワード	力学系、カオス、ニューラルネットワーク、カーネル法、次元縮約、計算トポロジー	
研究内容	<p>平衡状態から遠く離れた系では、非線形性が働くことで様々な動的現象が現れる。その振る舞いを数理的に記述するために、自己組織化、散逸構造、カオス、フラクタルなどの諸概念が整備されてきた。一方、データ量の膨大化と計算機能力の飛躍的發展に伴って、ニューラルネットワークやカーネル法などのデータに内在する非線形性を捉えたモデリングや解析手法の開発が進んでいる。</p> <p>このような背景の下、脳神経系が持つ柔軟な情報処理・制御・計算能力の背後にある物理的な基盤、特にカオス的なダイナミクスが持つ機能的役割について、リザーバーコンピューティングの観点から理論解析および数値シミュレーションを通じて探求している。同時に、外部の実験研究者と連携して、例えば、多様体学習を利用した脳波時系列による個人特性の解析と認証（生理学研究所との共同研究）、質量顕微鏡イメージングに対する計算トポロジー解析による脳内物質環境の可視化（関西学院大学との共同研究）などの共同研究を行なっている。同時に、これらの研究の理論的基盤となる力学系理論や数理モデリングに関する基礎的な研究を行っている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>(最近の論文)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ On the Phase Description of Chaotic Oscillators, Takashi Imai, Hiromichi Suetani, Toshio Aoyagi Journal of the Physical Society of Japan 91 014001 (6 pages) 2022年1月</li> <li>・ リザーバーコンピューティングと脳 末谷大道 Clinical Neuroscience 39 pp. 832-835 2021年7月</li> <li>・ A manifold learning approach to mapping individuality of human brain oscillations through beta-divergence Hiromichi Suetani, Keiichi Kitajo Neuroscience Research 156, pp. 188-196 2020年2月</li> <li>・ Multiple Pattern Generations and Chaotic Itinerant Dynamics in Reservoir Computing Hiromichi Suetani Artificial Neural Networks and Machine Learning - ICANN 2019: Workshop and Special Sessions. ICANN 2019. Lecture Notes in Computer Science, vol 11731. Springer, Cham 5 pp.76-81 2019年9月</li> </ul> <p>(最近の研究プロジェクト)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「共時的情報を統合する神経回路網による数学概念の獲得と感覚-記号関係の探求」 日本学術振興会 科学研究費助成事業 新学術領域研究(研究領域提案型) 2020年4月 - 2022年3月 末谷 大道 (研究代表者)</li> <li>・ 「安定カオスに基づく神経計算原理の構築と視覚的注意に関する時間特性の解明」 JSPS 科学研究費補助金 基盤研究B (一般) 2019年4月 - 2022年3月 末谷大道 (研究代表者)</li> <li>・ 「リザーバー計算から捉えるヒト脳振動現象の普遍性と個別性」 文部科学省 科学研究費補助金 新学術領域研究(研究領域提案型) 2018年4月 - 2020年3月 末谷大道 (研究代表者)</li> </ul>	


所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース・教授	
氏名	鈴木 義弘 (Suzuki Yoshihiro)	
取得学位	博士 (人間環境学)、九州大学、1999年6月	
SDGs目標	  	

研究分野	建築学 (建築計画)
研究キーワード	住宅計画、近代住宅史、座敷・和室、福祉住環境

研究内容

- ①近現代の日本住宅平面構成の変容に関する研究
- ②洋館付加住宅の建築計画史的研究
- ③居間中心型住宅の普及と計画課題について
- ④和室の継承志向と存在基盤についての体系的な考察
- ⑤既存市街地の住宅地再生に関する研究





研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●論文           <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 1999年「知的障害者の住生活における領域形成の分析」：共著・日本建築学会計画系論文集 No.520 ほか</li> <li>2. 2008-11年「現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究 その1-3」：共著・日本建築学会計画系論文集 No.633, 643, 660 ほか</li> </ol> </li> <li>●著書           <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2009年「中廊下の住宅 明治大正昭和の暮らしを間取りに読む」：共著・住まいの図書館出版局</li> <li>2. 2014年「建築のサブプリメント」：共編著・彰国社</li> <li>3. 2020年「和室学 世界で日本にしかない空間」：共著・平凡社 ほか</li> </ol> </li> <li>●受賞           <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 1997年：(財)バリアフリーシステム開発財団優秀研究論文報奨</li> <li>2. 2010年：(財)住宅総合研究財団「住総研 研究選奨」</li> <li>3. 2011年：(社)都市住宅学会賞 (著作賞)</li> <li>4. 2019年：(公社)日本建築士連合会 会長表彰</li> <li>5. 2019年：全国建築審査会協議会表彰 ほか</li> </ol> </li> </ul>
---------------	---

- 役員
- 大学院教育学研究科 教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等





所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・教授	
氏名	園井 千音 (Sonoi Chino)	
取得学位	文学士、九州大学、1991年3月 修士 (文学)、津田塾大学、1993年3月 M.A., University of Nottingham (U.K.), 1996年12月 Ph.D., Nottingham Trent University (U.K.), 2009年11月	
SDGs目標	  	

研究分野	英文学
研究キーワード	ジョン・ミルトン、イギリス文学、国民意識、道徳、自由思想
研究内容	<p>・16世紀から18世紀までのイギリスにおける国民意識形成の過程をイギリス文学の道徳的テーマとの関連において分析する。本研究の特徴は文学、科学、社会、歴史の視点において複合的にイギリス文学のテーマとイギリス国民意識の性質を分析する点である。イギリス国民意識の自由の追求、宗教的寛容、懐疑的精神などの基盤が16世紀後半に形成され始め、その要素が共和制樹立と崩壊、王政復古を経験する17世紀においてより明確になり、それが自由の確立と社会の関係が国民的関心の中心となる18世紀においてイギリス国民意識の特質として確立したと仮定し、各時代の代表的文学作品の文学的テーマが国民意識形成に果たした役割について考察する。本研究は国内外の各専門分野の研究協力により進めている。</p> <p>・ジョン・ミルトン文学の重要なテーマである自由思想について17世紀イギリスの道徳及び宗教との関係において分析する。ミルトンの理性と自由を重要視する感性と共和主義との関連を検証し、ミルトンの宗教的政治的特徴を明らかにする。またミルトン文学の芸術性とその近代的精神の複雑な関係を明らかにし、ミルトンの自由の精神がイギリス国民意識形成に及ぼした影響を17世紀後半から19世紀初頭にかけて考察する。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>・17世紀イギリス文学と18世紀後半イギリスロマン派文学との関係について特にジョン・ミルトン文学の自由と寛容の精神がロマン主義文学に影響を与えたことを分析発表した。</p> <p>“The Polemics on Liberty in Southey’s <i>Joan of Arc</i> in Relation to John Milton” [大分大学学術情報リポジトリ] URL: <a href="https://opac2.lib.oita-u.ac.jp/webopac/TD00531014">https://opac2.lib.oita-u.ac.jp/webopac/TD00531014</a> (全文公開)、”A Quest for Liberty in Robert Southey’s <i>Joan of Arc</i> (1796) in Relation to John Milton’s Political Writings (British Milton Seminar, University of Birmingham, UK, 2018)</p> <p>・ミルトンの自由概念とその思想的系譜について研究会で発表した。「ミルトンの自由概念—『アレオパジティカ』を中心に」(西欧思想研究会、2020年)、「18世紀イギリスにおけるミルトン作品出版とコモンウェルスマンとの関係」(西欧思想研究会、2021年)</p>

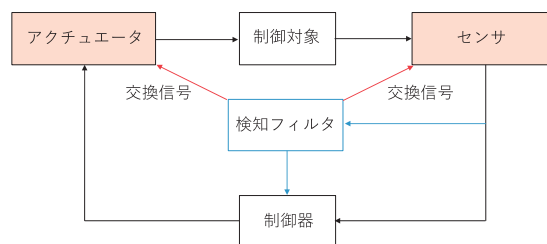




所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース（制御工学講座）・教授	
氏名	高橋 将徳 (Takahashi Masanori)	
取得学位	博士（工学）、熊本大学、1998年3月	
SDGs目標		

研究分野	制御理論
研究キーワード	自己修復制御, 故障検知, 適応制御

研究内容	<p>●センサ・アクチュエータ故障に対する自己修復制御に関する研究</p> <p>一般に、フィードバック制御系は、制御対象、制御器、センサ、アクチュエータから構成され、その安定性はこれらすべての要素が健全であることを前提に保証される。したがって、センサあるいはアクチュエータの故障は制御系の安定性に致命的な影響を与える。本研究では、制御系の安全性・信頼性を高めることを目的に、センサ・アクチュエータの故障を自動的に検知・交換する機能を備えた、自己修復制御系構成法について、理論と応用の両面から開発を行なっている。この自己修復制御は、故障検知器を備えた能動型耐故障制御の一つとして位置付けられる。従来法との大きな違いは、検知器に不安定なフィルタを利用している点にある。これにより、検知が困難とされる様々なタイプの故障を事前に規定した時間内に素早く検知できるだけでなく、検知器を1次のフィルタで設計できるなど、既存の耐故障制御法にはない、性能・利点が得られる。特に、制御対象が概強正実性をもつ場合には、ハイゲイン出力フィードバックによる制御系が構成でき、その制御構造が次数に依存しないという意味で、不確かな動特性に対して高いロバスト性を有する。また、適応制御を導入することで、故障・異常、環境変化などによる制御対象のパラメータ変化に対して、自動的に制御器のパラメータを調整することも可能となる。最近では、この自己修復制御の新たな試みとして、不安定なフィルタの代わりに、神経細胞の数理モデルを検知器に利用する方法を考案している。また、自己修復や故障検知の考え方を生物学へ発展させて、生物の種の絶滅などを早期に検出する方法などについての考察もはじめている。(論文1, 2, 3, 4)</p> <p>※関連リンク：<a href="https://researchmap.jp/masanori_takahashi">https://researchmap.jp/masanori_takahashi</a></p>
------	--



自己修復制御系の基本構成図

研究業績・アピールポイント	<p>● 上記研究に関する主な論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高橋：不連続な故障検知フィルタを用いる自己修復制御, 電気学会論文誌C, 141巻, 7号 (pp. 812~821), 2021年</li> <li>2. M. Takahashi: Self-repairing control against actuator failures using a spiking neuron model, Journal of Robotics, Networking and Artificial Life, Vol. 7, No. 3 (pp. 160~164), 2020年</li> <li>3. M. Takahashi: Simple Adaptive Control Against Sensor Failures, Proceedings of the 13th IFAC Workshop on Adaptive and Learning Control Systems (pp. 55~60), 2019年</li> <li>4. M. Takahashi: An alarm for predator extinction in a Lotka-Volterra system, Proceedings of the SICE Annual Conference 2019 (pp. 477~480), 2019年</li> </ol>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院




理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	理工学部共創理工学科知能情報システムコース・教授	
氏名	高見 利也 (Takami Toshiya)	
取得学位	博士 (理学)、京都大学、1995年11月	
SDGs目標	 9 産業と技術革新の基盤をつくろう	

研究分野	非線形科学
研究キーワード	集団運動、時系列分析、非線形動力学、高性能計算
研究内容	<p>●自己駆動粒子の集団運動に関する研究</p> <p>多数の粒子が関与する集団運動における機能の創発および複雑な動力学的メカニズムを研究し、実社会の問題に応用していくことが目的である。具体的には、集団の性質を粒子群最適化法など最適化問題の解法に応用して高速アルゴリズムを開発すること、あるいは、動力学を記録したビデオ映像などの時系列を分析する手法の開発なども実施している (論文1.)。</p> <p>●非線形動力学に関する研究</p> <p>複雑な物理現象を理解するためには、計算機によるシミュレーションが欠かせない。楽器の発音機構 (論文2.)、複雑流体の動力学 (論文3.)、心臓を含む生体内の電氣的振動などを対象として大規模な計算機シミュレーションを実施し、数学的なアプローチだけでは扱うことが難しい問題を分析することが目的である。</p> <p>●大規模並列計算ライブラリの開発</p> <p>スーパーコンピュータなどの大規模並列計算機を効率良く利用するためには、適切な実装を可能とする通信インターフェースの設計とベンチマークに基づく効果的な並列プログラミング手法が重要である。3次元の流体計算など具体的なアプリケーションを想定した中で、計算科学者が利用しやすい高性能ライブラリの開発を実施している (論文4.)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>多様な分野の研究者と共同研究を実施しており、研究成果の発表は、それぞれの研究対象に応じて、様々な分野の国際会議プロシーディングズや学術雑誌など、多岐にわたることとなる。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年、Analysis of the Collective Behavior of Boids</li> <li>2019年、Role of the foot chamber in the sounding mechanism of a flue organ pipe</li> <li>2016年、Breakup and deformation of a droplet falling in a miscible solution</li> <li>2016年、Effective Calculation with Halo Communication using Halo Functions</li> </ol>

所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・教授	
氏名	田中 康彦 (Tanaka Yasuhiko)	
取得学位	理学博士、東京大学、1990年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	数学, 代数学, 群論, 離散幾何学
研究キーワード	有限単純群、分類、再構築、局所解析、局所幾何
研究内容	<p>(1) 単純群分類の再構築</p> <p>単純群の分類定理の証明をもう一度整理しなおし簡易化、縮小化するための研究、その際に生まれた新たな原理を使って単純群の構造をさらに深く調べる研究を行っている。</p> <p>これまでの単純群の分類を振り返ってみると、技術的には単純群のさまざまな部分群の性質（局所的構造や埋め込まれかた）を調べる、現象論的には素数2の特殊性（素数2についてのみ成り立つ事柄、成り立たない事柄）を解析することが重要であった。この二つに着目すると、単純群の部分群が素数2に関して良い性質をもつとはどういうことかを明らかにする、またそのような部分群を探し出す方法をつきとめることが重要になると思われる。</p> <p>現在のところそのような部分群を探すための手段として、単純群の素数グラフの構造とそれに付随して現れるいくつかの部分群の性質を調べている。これにより、すでに研究が進んでいる可解群のアマルガムの構造を解析する方法を一般のアマルガムにまで拡張すること、さらにアマルガムに付随して現れる幾何学を解析することが可能になる。</p> <p>(2) 離散幾何学への応用</p> <p>有限単純群には興味深い有限幾何が付随していて、群の構造と幾何の構造との間には互いに密接な関係がある。Lie型の単純群においては、アマルガムの構造を調べる問題は共通のBorel部分群を含む極小放物型部分群たちの構造を決定する問題に対応することに注意する。したがって、アマルガムの構造を調べる問題は、単純群に自然に付随する幾何学的対象を記述する問題とも解釈できるわけで、Lie型でない単純群をも含む一般の単純群論を構築するためにも有用である。</p> <p>有限単純群の分類を複雑にしている大きな原因に、散在型単純群と呼ばれる一種の奇形の存在があげられる。これは、<math>PSL_2(4) \cong PSL_2(5)</math>のように、小さい単純群の中には二つ以上の異なる標数のLie型の単純群となるものがあることも関係がある。散在型単純群に付随する幾何を調べることにより、まだ詳しく知られてはいないそれらの奇形が生まれる理由を解明することが期待できる。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Makoto Hayashi and Yasuhiko Tanaka, On the finite simple groups all of whose 2-local subgroups are solvable, Journal of Algebra (ISSN: 0021-8693), Vol. 210, pp. 365--384 (1998).</li> <li>2. Yasuhiko Tanaka, Interaction between lights and shadows for the quasithin groups, 京都大学数理解析研究所講究録 (ISSN: 1880-2818), Vol. 1872, pp.72--82 (2014).</li> <li>3. 田中康彦, 有限単純群の分類定理, 第 27 回整数論サマースクール報告集「構成的ガロア逆問題と不変体の有理性問題」, pp. 141--158 (2019).</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等




所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・教授	
氏名	田上 公俊 (Tanoue Kimitoshi)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、1996年3月	
SDGs目標	 7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに	

研究分野	熱工学
研究キーワード	水素利用, 代替燃料, 低環境負荷技術
研究内容	<p>低炭素化に関する研究として当研究室では主に下記3テーマの研究に取り組んでいる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 「自動車用環境低負荷代替燃料に関する研究」 本研究は、「エンジン燃焼に適した燃料組成の開発」と「燃料に適したエンジン技術の開発」により二酸化炭素排出削減を目指している。</li> <li>② 「コージェネレーションシステムの高効率化に関する研究」 コージェネレーション用ガスエンジンの発電効率向上のための技術開発に関する研究である。</li> <li>③ 「船舶用水素専焼機関開発のための水素基礎燃焼特性の解明に関する研究」 本研究はその一つである水素専焼エンジンの開発のために水素基礎燃焼特性の解明に関する研究である。</li> </ol>
研究業績・アピールポイント	<p>①自動車用環境低負荷代替燃料に関する研究 NEDO「2020年度エネルギー・環境新技術先導研究プログラム」「自動車の早期低炭素化を実現する内燃機関／燃料組成の開発」の支援により2020年度から2年間の研究で行われている。自動車から排出されるCO2の大幅な削減には電動化技術の推進とともに、内燃機関の熱効率を大幅に高めていくことが重要である。本研究は、「エンジン燃焼に適した燃料組成の開発」と「燃料に適したエンジン技術の開発」により二酸化炭素排出削減を目指す研究である。</p> <p>②コージェネレーション用ガスエンジンの高効率化に関する研究 NEDO「戦略的省エネルギー技術革新プログラム」「コージェネレーション用革新的高効率ガスエンジンの技術開発」の支援により2017年度から5年間の計画で研究を行っている。2014年4月に閣議決定された「第四次エネルギー基本計画」において、「コージェネレーション」は、その重要性が示された。本研究は、コージェネレーション用ガスエンジンの発電効率向上のための技術開発に関する研究である。</p> <p>③船舶用水素専焼機関開発のための水素基礎燃焼特性の解明 国土交通省「2021年度海事産業集約連携促進技術開発支援事業」の支援により2021年度から2年間の研究で行われている。国土交通省が2020年3月に策定した「国際海運のゼロエミッションに向けたロードマップ」では2028年までに温室効果ガスを排出しない究極のエコシップ「ゼロエミッション船」の商業運航を目指している。本研究はその一つである水素専焼エンジンの開発のために水素基礎燃焼特性の解明に関する研究である。</p>





所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・教授	
氏名	寺井 伸浩 (Terai Nobihiro)	
取得学位	博士 (理学)、早稲田大学、1993年3月	
SDGs目標		

研究分野	指数型不定方程式論
研究キーワード	一般化されたRamanujan-Nagell方程式論, 一般化されたFermat方程式, Baker理論
研究内容	<p>不定方程式は数学の中では幾何学と同様古代ギリシャ時代以来の長い歴史を持つ. Mordell予想で有名なMordellは, 不定方程式の魅力を「過去何世紀を遡ってみても, プロアマを問わずこれほど多くの数学者を引き付けた分野は絶無であり, これほど多量の論文が発表された分野もまた皆無である」と著書の『Diophantine Equations』の中で述べている.</p> <p>インドの有名な天才数学者 Ramanujanが1913年に予想し, Nagellが1961年に証明した. その証明は虚2次体 <math>\mathbb{Q}(\sqrt{-7})</math> の性質を用いる.</p> <p><b>定理 1 (Ramanujan--Nagell):</b> 不定方程式 <math>x^2 + 7 = 2^n</math> は, 正の整数解 <math>(x, n) = (1, 3), (3, 4), (5, 5), (11, 7), (181, 1, 15)</math> だけをもつ.</p> <p>上の不定方程式 <math>x^2 + 7 = 2^n</math> をRamanujanとNagellに因み <b>Ramanujan-Nagell方程式</b>と呼ぶ. この不定方程式に関する結果は様々な形で一般化・拡張され, 不定方程式論における重要な研究分野の一つである. また, <math>b, c</math>を固定された互いに素な正の整数とすると, 不定方程式 <math>x^2 + b^m = c^n</math> を<b>一般化されたRamanujan-Nagell方程式</b>と呼ぶ. 上の定理1を含む次の予想を提起する:</p> <p><b>予想 1:</b> <math>c</math>を2以上の正の整数とする. このとき, <math>c = 2</math> の場合を除いて, 不定方程式 <math>x^2 + (2c^2 - 1)^m = c^n</math> (R) は, ただ一つの正の整数解 <math>(x, m, n) = (c^2 - 1, 1, 4)</math> をもつ. ただし, <math>c = 2</math> の場合, 不定方程式 <math>x^2 + 7^m = 2^n</math> はちょうど6個の正の整数解 <math>(x, m, n)</math> をもつ.</p> <p><math>c = 2</math> の場合は, (R) はRamanujan-Nagell方程式となる. 初等的・解析的・代数的方法やBaker理論・楕円曲線論をを組み合わせることにより予想1を示す. 今後の研究において, 一般化されたRamanujan-Nagell方程式の深遠・豊穡なる世界を究めたい.</p>
研究業績・アピールポイント	<p>[1] A note on the Diophantine equation <math>x^2 + q^m = c^n</math>, Bull. Australian Math. Soc. 90(2014), 20-27.</p> <p>[2] On Jesmanowicz' conjecture concerning primitive Pythagorean triples, Journal of Number Theory 141(2014), 316-323.</p> <p>[3] On the generalized Ramanujan-Nagell equation <math>x^2 + (2c-1)^m = c^n</math>, Acta Math. Hungar. 162(2020), 518-526. (with Yasutsugu Fujita)</p> <p>[4] On the generalized Ramanujan-Nagell equation <math>x^2 + (4c)^m = (c+1)^n</math>, Int. Math. Forum 17(2022), 1-10. (with Saya Nakashiki and Yudai Suenaga)</p> <p>[5] On the Diophantine equation <math>x^2 + b^m = c^n</math> with <math>a^2 + b^4 = c^2</math>, Indian J. Pure Appl. Math. 53(2022), 162-169.</p> <p>[6] On exponential Diophantine equations concerning Pythagorean triples, to appear in Publ. Math. Debrecen (with Yasutsugu Fujita)</p>

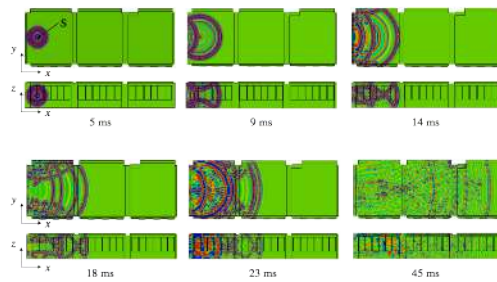
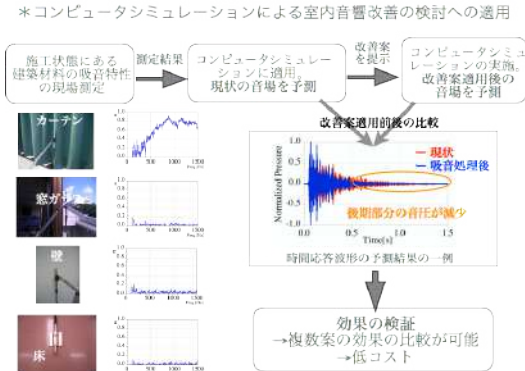


所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・教授	
氏名	戸高 孝 (Todaka Takashi)	
取得学位	博士 (工学)、東京大学、1995年11月	
SDGs目標	 	





研究分野	電気機器工学, 磁気工学, 磁性材料
研究キーワード	永久磁石モータ, アモルファス変圧器, 電磁鋼板, 磁気測定, 計算電磁気学, 磁性材料
研究内容	<p>●軽量・高効率モータの開発</p> <p>日本の総電力消費量の約55%は、工場や輸送機関の動力源として使用されているモータが占めています (経産省報告)。このため、政府はトッランナー方式の導入やIE3 (高効率モータ規格) の規制を2015年頃からかけるなどの対策をとっていますが、将来的には更に厳しい規制の摘要があり得ます。また、自動車業界でも石油の枯渇や高騰に対応するべくEVを開発販売していますが、バッテリー駆動モータの効率や重量は走行距離や電費と密接に関連するため、更なる軽量・高効率化が要求されています。そこで、モータ用磁性材料である無方向性電磁鋼板やアモルファス薄帯の素材の優れた磁気特性を有効に生かすため、永久磁石モータの加工製造工程やモータ構造の最適化の研究を行っています。</p> <p>●軟質磁性材料の磁場中熱処理による磁気特性の制御</p> <p>電磁鋼板等の軟質磁性材料は磁気弾性エネルギーを有するため、磁場中熱処理や応力下熱処理により磁気異方性をコントロールすることが可能です。これにより、電気機器の用途に適した磁気異方性をもつように制御する技術を開発しています。単に残留ひずみを除去する従来の熱処理ではなく、結晶粒の成長や配向の制御によってモータ等に適する磁性材料に改変する技術です。</p> <p>●電磁界解析並びに鉄損分布測定</p> <p>電磁応用機器の設計には電磁界解析や熱伝導解析を用いますが、モータコア内の鉄損分布は実際の分布とはかなり異なります。そこで、サーモグラフィを用いた鉄損分布の熱的測定技術を開発し、シミュレーション結果と比較検討することで、解析技術の発展、モータ構造や製造技術の発展に寄与するための研究を行っています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>低鉄損磁性材料を用いた軽量・高効率モータの開発のため、磁性材料の革新的活用技術、磁気特性改変・制御技術や低応力加工技術の開発を行っています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年, A Thermographic Camera Method for Measuring the Core Loss Distribution, Journal of Magnetism and Magnetic Materials, Elsevier, Vol. 505, 9 pages, 166679.</li> <li>2019年, FeSiBアモルファス磁性材料の引張り応力下焼鈍効果, 日本AEM学会誌, Vol.27, No.3, pp.329-334.</li> <li>2019年, アモルファス磁性材料を使用したステータモジュール型バーニアモータの特性評価, 日本AEM学会誌, Vol.27, No.2, pp.194-199.</li> <li>2018年, Effect of Heat Treatment Under High Magnetic Field on Crystallographic Orientation and Magnetic Properties of Non-Oriented Electrical Steel Sheets, IEEE Transactions on Magnetics, Vol. 55, No. 2, 5 pages.</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2010年10月 日本AEM学会 論文賞</li> <li>2015年11月 経済産業省, ものづくり日本大賞 (九州経済産業局長賞) など</li> </ol>

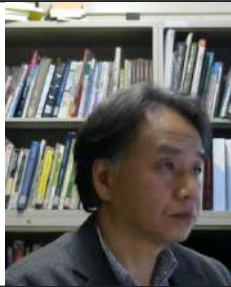


所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース・教授	
氏名	富来 礼次 (Tomiku Reiji)	
取得学位	博士 (工学)、大分大学、2003年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	建築環境工学, 建築/環境音響学
研究キーワード	建築環境, 建築音響, 騒音制御, 音環境予測, 吸音特性, 材料開発

<p>研究内容</p> <p>1、室内音環境予測に関する研究          快適で健康的な建築物や車内環境の実現には、良好な室内音環境の設計・制御が必要不可欠である。近年、車室や会議室、教室といった中・小規模の室内であれば、汎用計算機を用いて計算コスト的には、音の波動性を考慮した数値シミュレーションが可能となりつつあるものの、境界条件や音源・聴取条件といったパラメータ設定が難しく、十分利用されているとは言い難い状況にある。本研究では、それらの設定手法に加え、得られた結果を室内空間の設計者や利用者に提示する手法についても研究を行っている。</p> <p>2、既存の室内音環境の改善に関する研究          室内空間の境界となる材の吸音特性は、その材が使用されている施工状態に大きく依存する。そのため、特に既存の室内空間や音環境以外の条件で施工状態が決定している空間の音環境を改善するためには、施工されている現場で材の吸音特性を評価する必要がある。本研究では、大分大学で開発した材の吸音特性測定技術 (EA法) を利用し材の吸音特性を評価した上で、数値シミュレーションと組み合わせ、音環境改善の検討を行う手法について研究を行っている。</p>	<p>数値シミュレーション結果の可視化          講義室内の音波伝播の様子</p>  <p>*コンピュータシミュレーションによる室内音響改善の検討への適用</p> 
<p>研究業績・アピールポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>音の波動性を考慮した室内音環境の数値シミュレーション技術</li> <li>室内音環境の差異を可視化・可聴化により把握が可能</li> </ul> <p>R. Tomiku, T. Otsuru, N. Okamoto, Y. Kimura, Finite element sound field analysis for reverberation time in non- diffuse sound field with unevenly-distributed sound absorbing surfaces, Proc. of inter-noise 2017 (Published by CD-ROM, 7p), 2017</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>音環境の制御・予測に必須な材の吸音特性測定技術 (EA法)</li> <li>それぞれの材が使用されている状態での吸音特性の把握が可能</li> </ul> <p>N. Sakamoto, T. Otsuru, R. Tomiku, S. Yamauchi, Reproducibility of sound absorption and surface impedance of materials measured in a reverberation room using ensemble averaging technique with a pressure-velocity sensor and improved calibration, Appl. Acoust., 142, pp.88-94, 2018</p>	

- 役員
- 大学院教育学研究科 教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・教授	
氏名	豊田 昌宏 (Toyoda Masahiro)	
取得学位	博士 (工学)、北海道大学、1995年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	炭素材料学 (黒鉛層間化合物, グラフェン, 膨張黒鉛, 電極, 多孔質炭素, エネルギー貯蔵材料:電池) セラミックス材料 (誘電体)	
研究キーワード	エネルギー貯蔵, 多孔質炭素, 電池, 層間化合物, カーボンファイバー,	
研究内容	<p>炭素材料を中心に研究を遂行している。多孔質炭素の合成では、その調製方法とエネルギー貯蔵材料への適用等への検討を行っている。[M. Toyoda, et. al, Control of crystalline structure of porous carbons, ECS Adv., 4, 41411-41424(2014). M. Toyoda, et. al, Templated mesoporous carbons: Synthesis and applications, Carbon, 107, 448-473(2016)] この調製では、炭素前駆体となるPVA (ポリビニルアルコール) と鋳型となるMgOを混合し焼成する。例えば、クエン酸マグネシウムと混合・焼成することにより、MgO粒子の周りに炭素が被覆され、炭素化後、弱酸で洗浄を行うことにより、溶出したMgOの残存孔を細孔とした多孔質炭素が調製でき、メソ孔が主に形成されることを見出している。これまで多孔質炭素の調製では、炭素材料を水蒸気等で賦活する手法が一般的であったが、この調製法では、賦活の工程が省略できる。この他に、HPC (Hyper Coal : 石炭の一種) が軟化溶解性を示すことに着目し、また、その粘稠溶液が導電性を示すことから、それを電界紡糸により炭素繊維が調製できることを見出した。また、このHPCを貧溶媒を用いた沈殿法で析出させることによっても、賦活処理なしで多孔質炭素材料が調製できることも見出している。これら調製した多孔質炭素材料をエネルギー貯蔵材料として電極に適用し、例えば、高容量のキャパシタとなることを明らかにしている。これ以外には、ナノ炭素材料として優れた電気および力学特性を示すグラフェンを三元系黒鉛層間化合物の剥離により調製できることを、企業と共同で研究を進めている。</p> <p>以上、炭素材料の調製には実績があり、それらの実験を行うための装置、雰囲気制御可能な焼成炉 (管状炉, マッフル炉) を複数有し、また、炭素材料の評価を行うための種々の装置として、XRD, SEM, TEM, XPS, Raman, FT-IR, ガス吸着装置等の分析機器を研究室にて有している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>研究に関連する論文について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ MgO を鋳型とする多孔質炭素の調製とエネルギー貯蔵材料への適用について             <ul style="list-style-type: none"> <li>M. Toyoda, et. al., Control of crystalline structure of porous carbons, ECS Adv., 4, 41411-41424(2014).</li> <li>M. Toyoda, et. al., Templated mesoporous carbons: Synthesis and applications, Carbon, 107, 448-473(2016).</li> </ul> </li> <li>◎ HPCからの電界紡糸による炭素繊維の調製と電極への応用             <ul style="list-style-type: none"> <li>M. Toyoda, et. al., Preparation of carbon fibers from Hyper Coal solution and their surface characteristics, TANSO, [N0.294], 106-112(2020).</li> <li>M. Toyoda, et. al., "EDLC characteristics of carbon materials prepared from coal extra," Electrochemistry, 88(3), 119-126 (2020).</li> </ul> </li> <li>◎ 三元系黒鉛層間化合物の剥離によるグラフェンの調製             <ul style="list-style-type: none"> <li>M. Toyoda, et. al., "Preparation of few-layered graphene using K-THF-GICs with the addition of alcohol" TANSO, [N0.298], 87-94(2021).</li> <li>M. Toyoda, et. al., "Preparation of grafted few-layer graphene from K-THF-GICs by the addition of aldehyde," FlatChem., 24 100206 (2020).</li> </ul> </li> </ul>	

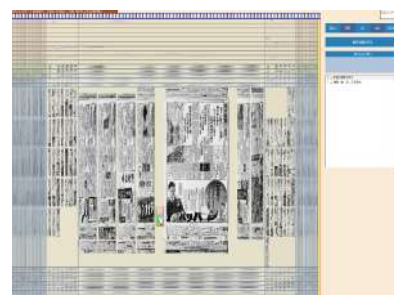
所属・職位	理工学部共創理工学科情報システムコース・教授	
氏名	中島 誠 (Nakashima Makoto)	
取得学位	博士(工学)、大分大学、2003年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	情報工学
研究キーワード	HCI, ブラウジングシステム, ウェブキュレーション, ナビゲーションシステム

**研究内容** コンピュータが人にとって真に有効なツールであるためには、その上で動作する情報システムのインタフェースデザインが自然な動作で使えるような設計であることが重要である。様々な利用目的において、コンピュータを使う人の生産性を高められるような、人とコンピュータの情報のやり取りの仕方について考え、その実現を目指している。

**【ビッグデータからの人による情報収集支援】**

大量のデータ（ビッグデータ）から人が意図せず新しい発見を行えるような**ブラウジングを提供するインタフェースデザイン**の実現を目指している。その一例として、字体の古さや不鮮明さによって機械によるテキスト抽出が難しい文書画像を対象にした新聞アーカイブのブラウジングシステムを構築し、円滑なズームの仕組みや、ブラウジングのきっかけとなる手がかり情報の提示方法などのインタフェースデザインを研究している。



**【ウェブキュレーションとVisual Thinking 支援】**

ウェブキュレーションは、ウェブ上で必要な情報を必要なだけ収集し、後日のアクセスや他者との共有が容易なように組織化する行為を指す。本研究では、HTMLなど構造化文書で提供されるウェブ上の情報を、その文書構造に依存せず、必要な部分コンテンツだけを収集し組織化できるようにして、視覚的な思考（Visual Thinking）を助ける**パーシャルブックマーク**の実現を目指している。ハイパーテキストの利点でもある再配布時の著作権問題も回避して、真の“Transclusion”の実現も目指している。

**【直感に訴えるナビゲーションシステム】**

AR（拡張現実感）技術を利用した図書館内ナビゲーションシステムや、スマートウォッチの振動を利用した新しいナビゲーションシステムの構築を目指している。人がナビゲーションの画面に集中する危険を回避できるよう、直感的に認識できるナビゲーション情報の提示方法を勘案し、様々な場所で利用できるような実現方法を探っている。



研究業績・アピールポイント	<p>●科研費 (2022-2025)人間の新しい「読むスキル」獲得を促進するインタフェースデザインの研究 (22K12704)</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. SpACCE: A Sophisticated Ad Hoc Cloud Computing Environment Built by Server Migration to Facilitate Distributed Collaboration. (共著). International Journal of Space-Based and Situated Computing, Vol. 2, No. 4, pp. 230-239, 2012.</li> <li>2. Partial Bookmarking: A Structure-independent Mechanism of Transclusion for a Portion of any Web Page. (共著). Adjunct. Proc. ACM UIST's 2016. <a href="https://doi.org/10.1145/2984751.2984761">https://doi.org/10.1145/2984751.2984761</a></li> <li>3. Designing a Simplified User Interface System for Smartphone Natives to Facilitate PC Operations. (共著). Proc. CISIS-2019. <a href="https://doi.org/10.1007/978-3-030-22354-0_71">https://doi.org/10.1007/978-3-030-22354-0_71</a></li> </ol> <p>●特許</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. データ入力システム, 情報処理装置, 情報処理プログラム及びその方法, 特許第6089181号</li> <li>2. 新聞記事アーカイブシステム, 特許6187972号</li> </ol>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院

理工学部

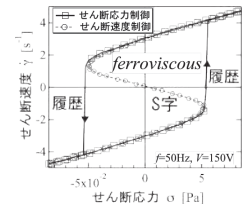
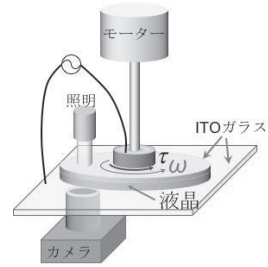
福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	理工学部 共創理工学科 自然科学コース・教授	
氏名	長屋 智之 (Nagaya Tomoyuki)	
取得学位	工学博士、名古屋大学、1990年3月	
SDGs目標	 産業と技術革新の基盤をつくろう	

研究分野	液晶物理学, 非線形動力学
研究キーワード	レオロジー, パターン形成, 確率共鳴
研究内容	<p>・液晶電気対流が誘起する負の粘性に関する研究</p> <p>粘性とは流れに対する抵抗なので、普通の物質の粘性率は正の値になります。しかし、高電圧下で激しい液晶電気対流が起きているときには、”見かけの”粘性率が負になることがわかりました。右図に示す粘度計を用いて、高電圧の元で乱流状態の液晶のせん断応力をせん断速度を変化させながら測定したところ、グラフに示す履歴を持ったせん断速度とせん断応力の関係が得られました。強磁性体は、外部磁場が無い場合でも自分自身が磁石となって磁化を持ちます。液晶電気対流の場合は、流れが自発的に生じる事になります。その為、モーターに力を与えないと、勝手に流れが発生してモーターに繋がった上の円板が回転します。(論文 1,3,4)</p> <p>・液晶光バルブにおける確率共鳴の研究</p> <p>確率共鳴は、パターン形成, 神経系, 画像処理などのアプリケーションに恩恵をもたらすノイズ現象です。この研究では、光フィードバック機能を有する液晶光バルブにおいて、カラーノイズにより確率共鳴が発生すると、液晶分子の向きが2つの安定な位置の間で切り替わることを実験的に明らかにしました。ノイズの種類, ノイズ強度, 自己相関時間の変化に対するS/N比を測定しところ、カラーノイズの自己相関時間が約20ms以上で典型的な確率共鳴が見られ、2値化ノイズはOrnstein-Uhlenbeckノイズに比べて確率共鳴をさらに高めることがわかりました。このことから、液晶ライトバルブでは、有色ノイズの条件を最適化することで、確率共鳴を最大化することが可能であることがわかりました。(論文 5)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>・論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Direct observation of coupling between orientation and flow fluctuations in a nematic liquid crystal at equilibrium, H. Orihara, N. Sakurai, Y. Sasaki and T. Nagaya, Phys. Rev. E <b>95</b> (2017) 42705.</li> <li>2. Negative viscosity of a liquid crystal in the presence of turbulence, H. Orihara, Y. Harada, F. Kobayashi, Y. Sasaki, S. Fujii, Y. Satou, Y. Goto, and T. Nagaya, Phys. Rev. E, <b>99</b> (2019)12701.</li> <li>3. Negative viscosity of liquid crystals in the presence of turbulence: Conductivity dependence, phase diagram, and self-oscillation, F. Kobayashi, Y. Sasaki, S. Fujii, H. Orihara and T. Nagaya, Phys. Rev. E, <b>101</b> (2020) 22702.</li> <li>4. Observation of stochastic resonance in a liquid-crystal light valve with optical feedback induced by colored noise in the driving voltage, Y. Goto, A. Shishibe, H. Orihara, S. Residori and T. Nagaya, Phys. Rev. E, <b>102</b> (2020) 62702.</li> </ol> <p>・科研費の採択実績 (2012以降の代表のみ)</p> <p>挑戦的萌芽研究 2012 - 2015 光導電体を利用した液晶電気対流の流れ制御          基盤研究(B) 2012 - 2015 光フィードバック下の液晶光バルブにおける確率共鳴と同期現象          挑戦的萌芽研究 2015 - 2018 剪断流動場における液晶電気対流の乱流-乱流転移とレオロジー          基盤研究(B) 2018 - 2021 電気対流が誘起する液晶の負の粘性          基盤研究(B) 2022 - 2025 電場で誘起される液晶の自発流れの成長機構の解明</p>





所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・教授	
氏名	畑中 裕司 (Hatanaka Yuji)	
取得学位	博士(工学)、岐阜大学、2002年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	知覚情報処理
研究キーワード	画像認識、画像解析、異常検出、レイアウト設計
研究内容	<p>●疾病の早期発見・早期治療を目指した画像診断AIの開発</p> <p>深層学習を活用して医用画像上の病変を自動検出したり、画像の特徴解析を行ったりして医師に知らせるAIの開発に取り組んでいる。特に、失明の最大疾病である糖尿病網膜症の初期病変である毛細血管瘤を深層学習で自動検出することに成功している(著書、1. 受賞1.)。また、深層学習の課題である教師画像の調達について、敵対的生成ネットワークで人工的に教師画像を生成することによって、深層学習の性能が向上することを確認している。</p>  <p style="text-align: center;">深層学習による糖尿病病変の検出</p> <p>●マルチエージェントに基づいたレイアウト設計に関する研究</p> <p>さまざまな感性を持つ人々が利用する住まい、オフィス、店舗などの自動レイアウト設計は困難である。そこで、人や家具をそれぞれ自立行動できるエージェントとして仮想空間上に配置し、強化学習とマルチエージェントシミュレーションを融合したレイアウト設計支援の研究に取り組んでいる。</p> <p>●視覚・聴覚刺激が人の運動に与える影響の解析</p> <p>室内運動の効果を高めるためのVRフィットネスが導入されつつある。視覚や聴覚刺激が力感に作用する感覚間相互作用の観点から、視覚・聴覚刺激が人の運動への影響について、定量解析する研究に取り組んでいる。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://img.csis.oita-u.ac.jp">https://img.csis.oita-u.ac.jp</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>深層学習や強化学習などの機械学習を用いた研究を中心として、大規模なデータ収集を実施しづらい医用画像の研究の経験を生かした様々な取り組みを行っている。</p> <p>●著書</p> <p>1. 2020年、Deep Learning in Medical Image Analysis: Retinopathy Analysis Based on Deep Convolutional Neural Network, Springer</p> <p>●受賞</p> <p>1. 2019年、田中栄一記念賞(MIT誌論文賞), 日本医用画像工学会</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・教授	
氏名	濱川 洋充 (Hamakawa Hiromitsu)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、1992年3月	
SDGs目標	 	

**研究分野** 流体力学, ターボ機械, 空力音響, 流体関連振動・騒音

**研究キーワード** 渦, 空力音, ファン, 吸音, 異音, 共鳴, 自然エネルギー利用, 性能改善

**研究内容** 空力騒音の低減化  
 自動車, 新幹線, 航空機などの乗り物, 空調機やパソコンのファンなどでは, 流れによって空力音が発生することがあります。プラントで使用される機械などでは, これらが原因となり振動や騒音のトラブルが生じることがあります。低騒音風洞を用いて静かな気流を発生させ, 様々な測定技術を駆使しながら, 流れの構造や空力性能の解明, 音や振動の発生メカニズムの解明, 防止対策の検討などを行っています。ボイラ管群の高精度共鳴発生予測法の開発, ターボ機械の性能向上および低騒音化技術の開発, 吸音デバイスの開発, 異音防止技術の開発, 自然エネルギー関連機器の性能改善, 堰による水流制御などに取り組んでいます。



低騒音風洞実験装置



管群共鳴試験装置



軸流ファン実験装置



水流可視化実験装置



水流の様子






波力発電用タービン装置

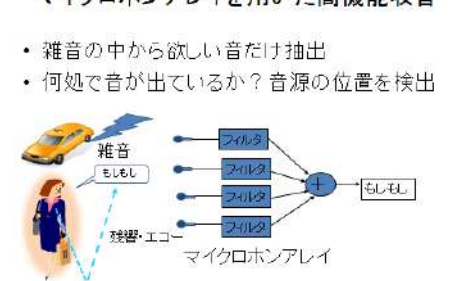
**研究業績・アピールポイント** アピールポイント  
 1. ターボ機械から発生する空力音の低減化と性能改善  
 2. 産業機械における音響共鳴現象と流体関連振動の予測と防止  
 3. 自然エネルギー関連機器の開発および性能改善  
 4. 異音の解明と抑止, 音響計測および評価, 流体現象の解明, 流れの可視化, PIV計測

応用可能な分野  
 流体関連振動・騒音の低減と予測, 音響共鳴現象の防止対策, 低騒音ファンの開発, ターボ機械の性能向上, 吸音デバイスの開発, サイレンサの開発, 自然エネルギー関連機器開発, 気流の可視化と換気





研究業績  
 1. 多孔板の吸音性能に及ぼす流れおよび孔形状の影響, ターボ機械, Vol.49, No.10, 2021  
 2. Fundamental Study on Improvement of Performance of Wells Turbine Blade, Journal of Physics: Conference Series, Vol. 1909, 2020  
 3. Reduction of Aerodynamic Noise radiated from Wells Turbine, IOP Conference Series: Earth and Environmental Science, Vol.240, 052005, 2019  
 4. Effect of Flow Separation on Acoustic Resonance in In-line Tube Banks, Fluid-Structure Sound Interactions and Control, 2019

所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・教授	
氏名	福田 亮治 (Fukuda Ryouji)	
取得学位	博士 (数理学)、九州大学、1999年11月	
SDGs目標	 	
研究分野	解析学	
研究キーワード	ファジィ測度、非線形積分、k-加法性	
研究内容	<p>● 非線形積分に関する収束定理に関する研究</p> <p>非線形積分とは、ファジィ測度に関する積分で、様々な形のもので定義され、応用上では有限集合の上に定義されたものを中心に盛んに研究されている。通常の積分は加法性(σ加法性)のある測度を基礎としているが、この加法性を仮定しない解析では、様々な基礎的な性質が保証されない。これは、例えば測度の同定においてパラメータ数が指数オーダーで発散する等の不具合の原因となっている。これらを解決するためには、非離散的空間での理論の構築が必要で、この研究はその一翼を担うものである。論文1では、分割型と位置づけられる非離散的 非線形積分に対して、従来定義されていたものをさらに拡張し種類を増やした上で、単調減少/増加収束定理を得るための条件を整理した。</p> <p>● 非離散的 k-加法性に関する研究</p> <p>k-加法性(kは自然数)は本来有限集合上の集合関数に定義されるメビウス変換に対して制限を与えることで、集合関数を決定するパラメータ数を減らすという意味合いのものであった。この概念を非離散的空間上の集合関数に拡張する方法として、有限部分集合からなる空間上の測度を用いて表現する方法(構成的 k-加法測度)と、非離散化したメビウス変換を用いて定式的に条件を与える方法(定式的k-加法測度)を提案した。論文2では、構成的k-加法測度であればある種の積分で単調減少収束定理が成り立つことを示した。また論文3では、これら2つのk-加法性は本質的には同等のものであることを示した。</p> <p>※関連リンク：<a href="http://lab.ms.oita-u.ac.jp/rfukuda/main.html">http://lab.ms.oita-u.ac.jp/rfukuda/main.html</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2019年、収束定理から見た各種分割型非線形積分の比較,知能と情報Vol.32, No.4</li> <li>2020年、Constructive k-additive measure and Decreasing Convergence Theorems, Lecture Notes in ArtificialIntelligence,vol 12256,</li> <li>2021年、On Two Generalizations for k- additivity,Lecture Notes in Artificial Intelligence. (12898 LNAI)</li> </ol>	


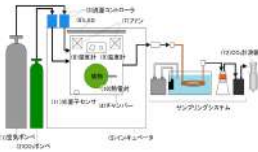
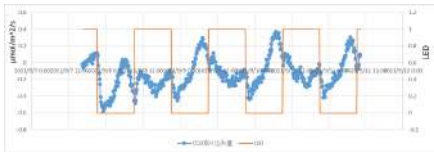
所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・教授	
氏名	古家 賢一 (Furuya ken'ichi)	
取得学位	博士 (芸術工学)、九州大学、2005年12月	
SDGs目標	 	

研究分野	音メディア処理, 音響信号処理, 音声処理
研究キーワード	雑音抑圧, 音声認識, 音響, 音楽, メディア処理, マイクロホン, スピーカ
研究内容	<p>①マイクロホンアレイを用いた雑音抑圧の研究：高騒音下で目的音をクリアに収録するために、複数のマイクロホンの出力信号を計算機上で処理するマイクロホンアレイ技術の研究。</p> <p>②高臨場感音響伝送技術の研究：遠隔のコンサートなどをネットワークで伝送するために、複数のスピーカと複数のマイクロホンを用いて、臨場感高く再現する技術の研究。</p> <p>③音関連スマートフォンアプリ開発スマートフォンなどの携帯端末を用いて日常的な身体音（心音、睡眠音など）を収録し、健康チェックやライフログを行うアプリの研究開発。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="384 801 863 1167"> <p><b>研究紹介</b></p> <h3>スピーカアレイによる選択再生</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>特定の人の空間だけに音を再生</li> </ul>  <p>Kinect人検出 * 人の顔と視線は超音波センサーで検出されている状態</p> <p>認識した人の顔のある方向へ指向性が追従して動くことを確認</p> </div> <div data-bbox="933 801 1412 1167"> <p><b>研究紹介</b></p> <h3>高臨場感音響再生</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>ヘッドホン、イヤホンによる携帯端末での高臨場再生</li> <li>スピーカアレイによる遠隔高臨場再生</li> </ul>  </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 20px;"> <div data-bbox="384 1243 863 1590"> <p><b>研究紹介</b></p> <h3>マイクロホンアレイを用いた高機能收音</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>雑音の中から欲しい音だけ抽出</li> <li>何処で音が出ているか？音源の位置を検出</li> </ul>  <p>雑音 もしもし 残響・エコー マイクロホンアレイ</p> </div> <div data-bbox="933 1243 1412 1590"> <p><b>研究紹介</b></p> <h3>携帯端末による音のライフログ</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>日常的な生活データの取得</li> <li>睡眠音、心音などを自動分析</li> </ul>  <p>心音のウェーブレット変換分析</p> <p>データもサーバーへ 処理結果付加情報 サーバー スマートフォンアプリケーション 端末に置き検取</p> </div> </div>
研究業績・アピールポイント	<p>専門分野である情報工学、情報通信技術を生かし、AI、IoT、VR等の先端技術を利用して地域創生に貢献する。これまでに、自治体と連携してVR技術を観光振興に利用する取り組み、地域活性化に貢献。地域での活動事例：<a href="https://www.oita-u.ac.jp/01oshirase/topics/2020-032.html">https://www.oita-u.ac.jp/01oshirase/topics/2020-032.html</a></p> <p>大分大学認定研究チームBURST「周産期見守りシステムプロジェクト」研究代表</p> <p>大分県地域課題解決活動事業「バーチャルリアリティを用いた観光情報発信プロジェクト」</p>






所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・教授	
氏名	松尾 孝美 (Matsuo Takami)	
取得学位	工学博士、九州大学、1985年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	制御工学
研究キーワード	ロバスト制御, 適応制御, システム生物学, サイバー物理システム, IOTセキュリティ

研究内容	<p>●CAM植物の推定と制御に関する研究</p> <p>植物が行う光合成は、C3型、C4型、CAM (Crassulacean Acid Metabolism) 型の3種類に分けられる。サボテンなどの多肉植物が行うCAM型の光合成は、乾燥環境に適応した炭素代謝機構を進化させている。代謝経路全体を可塑的に変動させることで状態を補償する能力を持っているため、イネや麦といったC3植物やC4植物と比べ、外界の影響を受けない自由駆動する体内リズムを有する効率的なバイオマス蓄積器とされる。CAM型植物にシステマチックな制御の応用を行うことにより、植物の水利用性を高め、砂漠化の問題や食糧問題、二酸化炭素排出量を削減するといった課題を解決することが期待されている。CAM型植物である、シコロベンケイソウを用いてCO2取り込み量を測定する実験を行った。本実験では昼と夜の長さの設定を変えた3つの実験を行い、Simulinkで実験データを用いた最適化を試みている。</p>    <p>●サイバー物理システムのセキュリティに関する研究</p> <p>協調型車間距離維持支援システム(CACC)の通信に対して、各種リプレイ攻撃を行い、通信ロスを引き起こし、攻撃性能の比較とCACCの制御性能の検証を行うことである。さらにリプレイ攻撃内の一つである、開ループ型繰り返しリプレイ攻撃の検出を目的とした、時間相互相関関数を用いた検出器を提案し、攻撃検出を行う。また開ループ型繰り返しリプレイ攻撃はCACCの距離センサに対しても攻撃を行い、CACCの攻撃箇所による影響の違いについても研究している。現在、ZMP社ロボカー1/10での実機実装を試みている。</p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>●科研費(2018-2021) システム同定法による二酸化炭素測定値からの植物単細胞リズム分離とその実験的検証</p> <p>●2019年度三豊科学技術振興協会研究助成 サイバー物理系へのリプレイ攻撃の新規シナリオと検出モニタの構築とその実装</p> <p>●論文</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Haruo Suemitsu, Shohei Ueno, Tadashi Konishi and Takami Matsuo:Real-Time Optimization with Adaptive Velocity Estimator and Application to Signal Separation of Cell Oscillators,ICIC Express Letters , Volume 16, Number 3, pp.317-325, March 2022.</li> <li>・M.Matsushita, S. Ueno, T. Matsuo: Delay and Repeated Replay Attacks on Cooperative Adaptive Cruise Control Systems, Proc. of SICE2021, pp.1384-1387,2021, Online.</li> </ul>
---------------	--

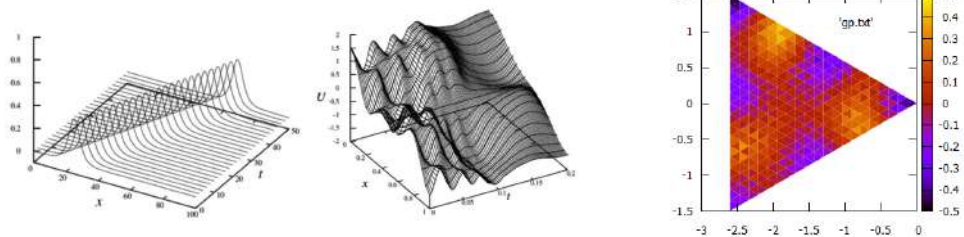


所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・教授	
氏名	吉川 周二 (Yoshikawa Shuji)	
取得学位	博士 (理学)、東北大学、2006年3月	
SDGs目標	 	

**研究分野** 解析学、非線形偏微分方程式論

**研究キーワード** 非線形偏微分方程式、固体の動的変形、熱弾性、塑性、数値解析



**研究内容** 非線形の現象などを記述する非線形偏微分方程式は、統一理論が未完成でその解の存在でさえ一般には自明でない。一方で応用分野においては、計算機の性能が向上した現在、これまでのように現象を線形近似して解析するのでは不十分な場合も散見される。モデルが非線形偏微分方程式で記述される場合に、その方程式を数学の立場から解析する。特にこれまでは熱弾性や塑性変形といった固体材料の変形を記述する非線形偏微分方程式を中心に解析を行ってきた。関数解析・調和解析・フーリエ解析・凸解析・確率解析などの数学解析の手法を用いて、解の存在・一意性といった非線形偏微分方程式の基本的な問題をはじめ、解の減衰や不変測度といった解の性質を調べる。近年は、近似解(数値解)の精度や正確さを検証する誤差評価といった数値解析に関する研究も行っている。中でも物理的な構造を継承する構造保存型数値解法に興味をもち研究を進めている。



**研究業績・アピールポイント**

1. S. Yoshikawa and Y. Wakasugi, Classification of asymptotic profiles for the Cauchy problem of damped beam equation with two variable coefficients: effective damping case, J. Differential Equations, **272** (2021), 938-957.
2. S. Yoshikawa, Energy method for structure-preserving finite difference schemes and some properties of difference quotient, J. Comput. Appl. Math., **311** (2017), 394-413.
3. H. Takeda and S. Yoshikawa, On the initial value problem of the semilinear beam equation with weak damping II: Asymptotic profiles, J. Differential Equations, **253** (2012), no. 11, 3061-3080.
4. S. Yoshikawa, I. Pawłow and W.M. Zajączkowski, Wojciech M. Quasi-linear thermoelasticity system arising in shape memory materials, SIAM J. Math. Anal., **38** (2007), no. 6, 1733-1759.

熱弾性や梁の方程式など主に固体の動的変形を記述する非線形偏微分方程式を研究対象にしてきました。関数解析や調和解析などの数学解析の手法を用いた結果が主ですが、最近では数値解析にも興味をもっています。

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・教授	
氏名	劉 孝宏 (Ryu Takahiro)	
取得学位	博士(工学)、九州大学、1996年4月	
SDGs目標		

研究分野	機械力学, 機械振動学
研究キーワード	自励振動, 強制振動, 回転体の振動, 動吸振器, 制振
研究内容	<p>(1) 接触回転系のパターン形成現象 工業界では、回転体の外周部と他の被接触系とが一定の線圧の下で接触を保持しながら回転する系（接触回転系）は数多く見受けられる。機械加工中にも同様の現象が発生し、製品不良を引き起こす。本研究では、振動が抑制可能な新たな加工工具の開発を行う。</p> <p>(2) 自動車用ATの振動抑制技術 自動車用ATでは、エンジンの爆発による強制ねじり振動で、乗り心地が悪化する場合がある。本研究では、振動を抑制する新たな遠心振子式動吸振器の開発、非線形振動の防止対策等を行っている。</p> <p>(3) 自動車用ディスクブレーキの自励振動 自動車で使用されているディスクブレーキでは、鳴きを生じたり、ロータ表面に熱の縞模様が生じたりすることがある。本研究では、これらの現象の発生メカニズムを解明し、防止対策を検討する。</p> <p>(4) 粒状体ダンパに関する研究 振動の抑制手法として、鋼球等の粒状体を使用されることがある。本研究では、まだ、振動の減衰メカニズムが明らかにされていない鋳鉄粉の振動抑制効果について、理論および実験の両面から検証を行う。</p>
研究業績・アピールポイント	<p><u>研究業績</u></p> <p>(1) スライダクランク連鎖を有する遠心振子式動吸振器によるねじり振動の抑制に関する研究 劉孝宏, 松崎健一郎, 中江貴志, 尾崎純也, 87(896) 2021年4月 査読有り</p> <p>(2) Fundamental Study on Optimal Design of Dynamic Absorber to Suppress Subharmonic Vibration of Order 1/2 in Automatic Transmission for Cards, R.Ueno, T.Ryu, T.Nakae, K.Matsuzaki, Proceedings of ICSV26 2019年7月</p> <p>(3) リーマ加工における加工穴多角形化現象に関する基礎的研究, 松崎健一郎, 劉孝宏, 末岡淳男, 塚本恵三, 眞方山航平, 83(852) 2017年 査読有り</p> <p>(4) Theoretical and experimental study on rifling mark generating phenomena in BTA deep hole drilling process (generating mechanism and countermeasure) K.Matsuzaki, T.Ryu, A.Sueoka, K.Tsukamoto International Journal of Machine Tools &amp; Manufacture 88 194-205 2015年9月</p> <p><u>アピールポイント</u> 複数のテーマにおいて企業との共同研究を実施している。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院





理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

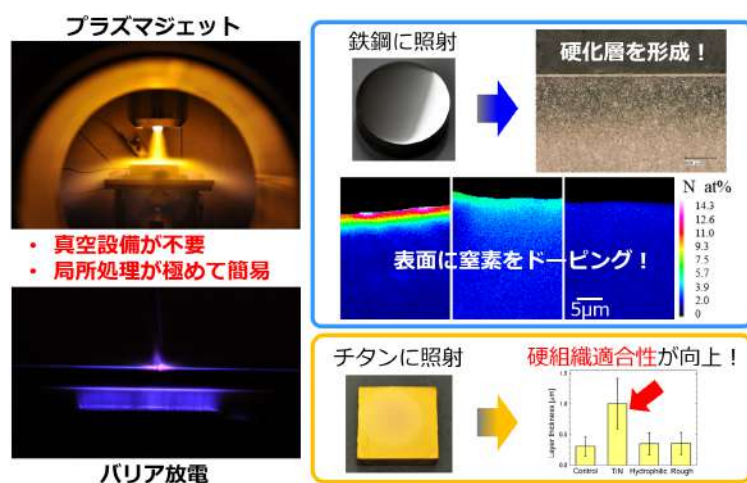
所属・職位	理工学部共創理工学科自然科学コース・准教授	
氏名	泉 好弘 (Izumi Yoshihiro)	
取得学位	博士 (理学)、熊本大学、1995年3月	
SDGs目標		

研究分野	植物形態学
研究キーワード	葉緑体分裂, 植物, 藻類
研究内容	<p>ペプチドグリカンの合成阻害剤の葉緑体分裂に及ぼす影響</p> <p>シアノバクテリアの細胞壁の主成分であるペプチドグリカンは、灰色藻類を除く真核生物の葉緑体には存在しないと考えられてきた。しかしながら、近年の研究でペプチドグリカンの合成阻害剤がシダ類、ヒカゲノカズラ類、セン類、接合藻類の葉緑体分裂を阻害することが明らかになった。これらの結果は真核生物にもペプチドグリカンの合成経路が存在し、葉緑体の分裂に関与していることを示唆している（セン類ではペプチドグリカンの存在が証明されている）。私は、プラシノ藻類やクロララクニオン藻類（二次共生藻類）を用いてペプチドグリカンの合成阻害剤が葉緑体分裂に及ぼす影響を調べていきたいと考えている。</p> <p>サイトカイニンの葉緑体分裂に及ぼす影響</p> <p>葉緑体の分裂面にリング状の構造（色素体分裂リング）があることが報告され、葉緑体の分裂は分裂面に生じるリング状の構造が収縮することによって起こるのではないかと考えられるようになった。その後、このリング状構造の周辺に存在するタンパク質に関する研究が行われ、様々なタンパク質が葉緑体分裂の制御に関与していることが明らかになってきた。それらのタンパク質の中でPDVと呼ばれるタンパク質はダイナミン様タンパク質（DRP5B）局在に必要であり、細胞内に野生株よりも小型の葉緑体を多数持つ変異株ではPDVが過剰に発現していることを報告された。これらの結果から、PDVの量が多くなると葉緑体の分裂速度が速くなり、細胞内に小型の葉緑体を多数存在するようになると考えられるようになった。その後の研究で、サイトカイニンがPDVの量を増加させ、葉緑体の分裂速度を早くする働きがあることが明らかになった。これらの研究は被子植物のシロイヌナズナとセン類ヒメツリガネゴケ行われている。私は、コケ植物のタイ類を用いて、サイトカイニンが葉緑体分裂に及ぼす影響を調べていきたいと考えている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <p>1993年, 共著, Chloroplast Division in Cultured Cells of the Hornwort <i>Anthoceros punctatus</i>., Journal of Plant Research</p> <p>1994年, 共著, Pattern of the Plastid Division in Spore Mother Cells of the Hornwort <i>Anthoceros punctatus</i>., Journal of Plant Research</p> <p>1999年, 共著, Changes in Plastid DNA Content during the Life Cycle of the Hornwort <i>Anthoceros punctatus</i> L., Cytologia</p> <p>2003年, 共著, Inhibition of Plastid Division by Ampicillin in the Pteridophyte <i>Selaginella nipponica</i> Fr. et Sav., Plant and Cell Physiology</p> <p>2008年, 共著, Effects of antibiotics that inhibit bacterial peptidoglycan synthesis on plastid division in pteridophytes., Cytologia</p>

所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・准教授	
氏名	市来 龍大 (Ichiki Ryuta)	
取得学位	博士 (理学)、九州大学、2004年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	プラズマ科学
研究キーワード	大気圧プラズマ, プラズマ材料プロセス, 窒化, 表面改質

研究内容	<p>●大気圧プラズマ窒化技術</p> <p>機械要素や金型といった鉄鋼材料を表面硬化するプラズマ窒化技術を、大分大学では世界に先駆けて非真空化しました。これにより真空設備や処理炉を一切使わずに、大気圧下で生成する窒素プラズマを用いて鉄鋼表面を窒化できます(研究レビュー1-3 特許1,2)。この非真空プラズマ窒化法により、以下の新規技術の提供が可能になると期待されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 小数ロットの鉄鋼部品を極めて安価に窒化する</li> <li>✓ 窒化防止剤やマスキングを用いずに狙った箇所のみを局所窒化する</li> <li>✓ 処理炉内に搬入できない超大型・長尺部材を窒化する</li> <li>✓ 可搬式のプラズマ源を現場に持ち込み窒化する</li> </ul> <p>また本技術は、医療用金属のプラズマ生体適合化処理を医療現場で達成するための技術開発にも展開しています(研究レビュー2)。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.eee.oita-u.ac.jp/elec/plasma/research/metal.html">https://www.eee.oita-u.ac.jp/elec/plasma/research/metal.html</a></p>
------	---



**プラズマジェット**

- ・真空設備が不要
- ・局所処理が極めて簡易

**鉄鋼に照射** → **硬化層を形成!**

表面に窒素をドーピング!

**チタンに照射** → **硬組織適合性が向上!**

Condition	Layer Thickness (µm)
Control	~0.5
TiN	~1.0
Hydrophilic	~0.5
Rough	~0.5

研究業績・アピールポイント	<p>Society 5.0「超スマート社会」の実現には、大量生産方式に取って代わる『多品種少量生産方式』の普及が必須です。本技術は上記の特徴から、多品種少量生産方式の実用窒化技術に最も近い候補であるといえます。少量生産品製造の省エネルギー・省資源化により、様々なサービスやインフラをより多くの人類に普及させる手助けができれば幸いです。</p> <p>●研究レビュー</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 市来龍大「大気圧プラズマ窒化法の研究とその意義」熱処理 <b>61</b>, 100 (2021)</li> <li>2. 市来龍大「プラズマプロセスによる金属の表面窒化」応用物理 <b>89</b>, 338 (2020)</li> <li>3. 市来龍大「非真空プラズマ窒化法の研究」自動車技術 <b>72</b>, 62 (2018)</li> </ol> <p>●特許</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 市来龍大 他「誘電体バリア放電による金属表層の硬化方法」特許第6904530号 (2020)</li> <li>2. 市来龍大 他「低合金鋼の硬化処理方法」特許第6241839号 (2017)</li> </ol>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部




医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等






所属・職位	理工学部 共創理工学科 自然科学コース・准教授	
氏名	岩下 拓哉 (Iwashita Takuya)	
取得学位	博士 (工学)、京都大学、2009年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	液体の物理学
研究キーワード	液体(液体金属, 分子性液体, 溶液, コロイド液体)とガラス

研究内容	<p>●液体の動的素励起に関する研究</p> <p>液体はどのように流れるのか?さまざまな物質の液体状態で原子や分子、ナノ粒子の運動機構を解明し、粘性率や誘電率など輸送係数の微視的起源を明らかにすることを目的としている。</p> <p>本研究を推進するために、X線や中性子散乱実験や物性実験、計算機シミュレーションを有機的に連携させ、実験と理論の双方から取り組んでいる。</p> <p>●ガラスの破壊メカニズムに関する研究</p> <p>ガラスはどのように壊れるのか?ガラスは、非晶質とも呼ばれ、原子・分子が不規則な構造をとる固体状態である。分子動力学シミュレーションを用いて、液体の観点からガラスの破壊メカニズム解明を目的としている。</p> <p>●解説(2018年, 日本物理学会誌)</p> <p>※関連リンク:  <a href="https://doi.org/10.11316/butsuri.73.12_832">https://doi.org/10.11316/butsuri.73.12_832</a></p>	 
------	---	--

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2017年, "Seeing real-space dynamics of liquid water through inelastic x-ray scattering", <a href="https://www.science.org/doi/full/10.1126/sciadv.1603079">https://www.science.org/doi/full/10.1126/sciadv.1603079</a> 水分子の実空間・実空間運動の観測に成功。</li> <li>2020年, "Shear softening in a metallic glass: first-principles local-stress analysis", <a href="https://doi.org/10.1103/PhysRevLett.124.085503">https://doi.org/10.1103/PhysRevLett.124.085503</a> ガラス特性の量子効果について新たな知見を発見。</li> <li>2022年, "Scaling of shear rheology of concentrated charged colloidal suspensions across glass transition", <a href="https://doi.org/10.1021/acs.jpcc.1c06683">https://doi.org/10.1021/acs.jpcc.1c06683</a> 荷電コロイド分散系の塩誘起ガラス転移に関する実験研究。</li> </ol>
---------------	---



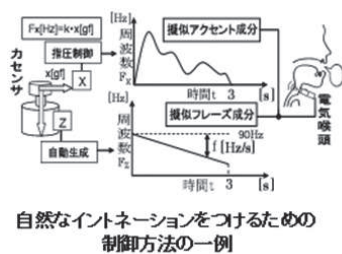
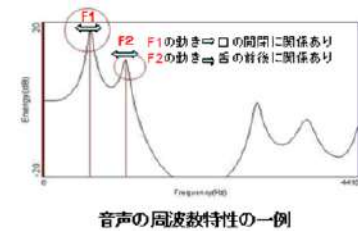
所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・准教授	
氏名	上見 憲弘 (Uemi Norihiro)	
取得学位	博士(工学)、北海道大学、1995年3月	
SDGs目標	 	

**研究分野** 福祉工学, 電気電子工学, 計測工学

**研究キーワード** 生体計測, 障害者支援技術, 音声分析, 感覚代行, 発声補助

**研究内容**



- 1. 口腔内の音響情報を利用した装置入力デバイスの研究  
運動機能障害者の装置入力デバイスとして、口の形と密接な関係がある音声ホルマント情報を使うことを検討している。口の中の動きの情報をマイクで拾った音から得ることで、特殊な装置を利用せず口腔のわずかな動きでマウス等の制御を行うことを目指している(論文1.3.)。
- 2. 発声補助装置の開発と音声の自然性に関する研究  
喉頭がんなどで喉頭を摘出し声を出せなくなった人が用いる発声補助装置のうち、電気喉頭に着目した。電気喉頭音源波形の改良やその音源の周波数を制御することにより、その不自然な声を自然な声にするための方法を探っている(論文1.2.)。
- 3. 障害物知覚に関する補綴・補助技術  
視覚障害者の一部が持つ、音を出さない障害物の存在を知ることができる「障害物知覚」能力について調べている。いろいろな環境下でその能力の要因や適用範囲について明らかにすることで、このような能力の獲得訓練などに役立てることを狙って研究を行っている(論文1.4.)。

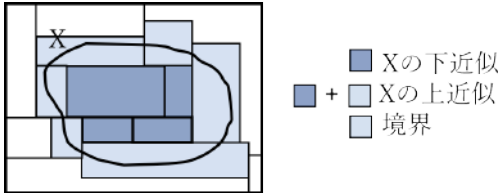





**研究業績・アピールポイント** 聴覚や視覚、触覚などの感覚、特に聴覚に着目し、その機能や心理物理実験による知覚特性を明らかにする。そして、その結果を発声補助や聴覚感覚機能障害の補助などの人と人とのコミュニケーション支援装置に役立てるための研究を行っている。

- 論文等
  - 2018、上見憲弘、視覚、運動、発声障害に対する音響情報の利用について、日本音響学会2018年秋季研究発表会講演論文集、1-5-3.
  - 2015年、村松良介、上見憲弘、頭の動きを用いた抑揚制御型電気喉頭の評価、LIFE2015予稿集(CDROM)、2G1-02.
  - 2013年、Norihiro UEMI, A Study of a Human Interface Device Controlled by Formant Frequencies for the Disabled, CCD/HCI 2013, Part I, LNCS, 8023, 340-345.
  - 2013年、徳富 梯志、上見憲弘、室内でのカラーレーションによる障害物知覚に影響を与える要因についての検討、電子情報通信学会技術研究報告. WIT, 113(272), 55-60.
- 著書
  - 2013年、赤松幹之、上見憲弘他、福祉技術ハンドブック(分担執筆: 2.3.2 発声機能補助、231-236)、朝倉書店.

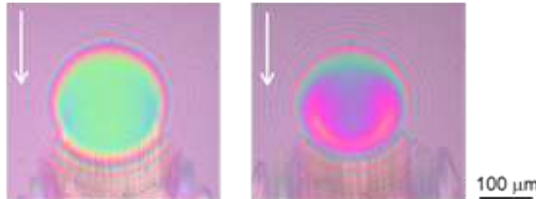

役員  
大学院教育学研究科  
教育学部  
経済学部  
医学部  
医学部附属病院  
理工学部  
福祉健康科学部  
その他学内施設等

所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・准教授	
氏名	大隈 ひとみ (Okuma Hitomi)	
取得学位	博士 (理学)、九州大学、2003年3月	
SDGs目標		

研究分野	計算機科学
研究キーワード	ラフ集合、関係理論
研究内容	<p>1. ラフ集合理論とその応用</p> <p>多様なデータから対象の特徴を抽出するための、ラフ集合論理に基づくデータ解析手法を提案する。具体的なデータへの応用も進める。</p> <p>従来のクラスター分析では各対象をいずれか1つのグループ（クラスター）に分類するため、境界付近の対象が誤分類されやすい。ラフ集合理論の上近似、下近似の概念を用いて確実にグループに属する対象の特徴とグループに属する可能性のある対象の特徴をとらえることにより、グループの特徴を柔軟に記述する方法を提案する。</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p>2. 関係理論の計算機科学への応用</p> <p>2項関係の計算体系である関係計算をもちいて、計算機科学の分野における問題を捉え、解決することに興味を持っている。特に、代数的・圏論的な手法を用いた関係データベースの理論やプログラム意味論に興味をもち、研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2010年, 学外組織, An overview of decision making in rough non-deterministic information analysis, Proc. 2nd World Congress on Nature and Biologically Inspired Computing, IEEE, 2010年</li> <li>2010年, 学外組織, Stable rule extraction and decision making in rough non-deterministic information analysis, International Journal of Hybrid Intelligent Systems, 2011年</li> <li>2011年, 学外組織, Properties on inclusion relations and division charts in non-deterministic information systems, 2011 IEEE International Conference on Granular Computing, IEEE, 2011年</li> <li>2012年, 単著, Division charts for handling the consistency in granular computing, International Journal of Reasoning-based Intelligent Systems, 2012年</li> </ol>

所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・准教授	
氏名	大津 健史 (Otsu Takefumi)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、2012年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	機械工学, 機械設計, トライボロジー
研究キーワード	機械設計, 機械要素, トライボロジー, 福祉機器設計

研究内容	<p>メカトロニクス機器をはじめとする機械は、軸受や歯車、ねじといった多くの部品(機械要素)から成り立っています。そのため、機械の安全性・機能性・効率性を高めるためには、機械要素の性能を向上させる必要があります。それにはキーテクノロジーとなるトライボロジー(摩擦・摩耗・潤滑)技術の発展が重要となります。研究では機械要素の性能向上を目的に、トライボロジーに関わる諸現象を各種実験を通して調べています。また、それを基にした新しい設計技術を提案することも目的としています。さらに、リハビリ機器を含めた福祉機器の設計についても検討を行っています。</p> <p>(研究テーマ)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 転がり・すべり接触面のその場観察と現象解明(潤滑状態観察, 油膜厚さ測定, 蛍光測定)</li> <li>・ ねじ締結用潤滑剤の摩擦・摩耗特性と締結精度向上技術の確立</li> <li>・ 潤滑油添加剤による低摩擦表面設計</li> <li>・ 超硬合金材料の耐摩耗表面設計</li> <li>・ 福祉機器の設計・製作・評価</li> </ul> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;"> <p>油の流れ方向</p>  <p>図1 油膜観察結果(光干渉法)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>図2 ボールオンディスク型摩擦試験機</p> </div> </div>
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>以下の各種実験装置・測定機器を利用し、研究を行っています。また、民間企業との共同研究を通じ、実際のものづくりにおけるトライボロジー問題の解決にも取り組んでいます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 潤滑面の直接観察装置(光干渉法, 蛍光法による膜厚測定)</li> <li>・ 摩擦試験機(スピン型, ボールオンディスク型, リングオンプレート型, クロスシリンダ型, ジャーナル軸受, 点接触弾性流体潤滑, フレッチング)</li> <li>・ 表面粗さ計, 表面観察用顕微鏡, 硬さ計, 材料表面研磨装置</li> </ul> <p>代表的な論文は以下の通りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Otsu &amp; Imado, Study on changes in the rheologic properties of EHL film using fluorescence measurements, Tribology Letters, Vol.66, No.40 (2018), pp.1-10.</li> <li>・ 大津・坂本・今戸・田中, MoP・ZnDTP併用条件における境界潤滑特性とその潤滑機構に関する研究, トライボロジスト, 第63巻, 第10号 (2018), pp.715-724.</li> <li>・ 大津・小松・橋村・今戸, ねじ締結用潤滑剤PIBのスターブ条件における油膜形成とせん断特性, 日本機械学会論文集, 第83巻, 第855号 (2017), pp.1-12.</li> </ul>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

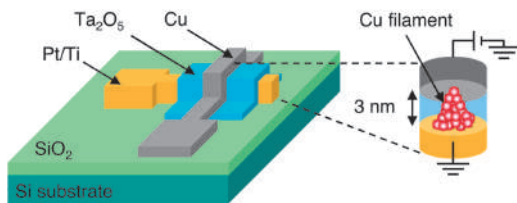
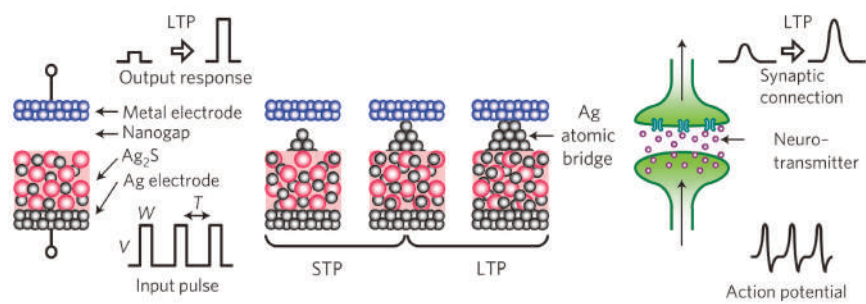
福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・准教授
氏名	大野 武雄 (Ohno Takeo)
取得学位	博士 (工学)、東北大学、2005年3月
SDGs目標	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>9 産業と技術革新の 基盤をつくろう</p>  </div> </div>



研究分野	ナノエレクトロニクス
研究キーワード	抵抗変化型メモリ、原子スイッチ、メモリスタ、シナプス模倣、IoT、AI



研究内容	<p>1. 抵抗変化型メモリに関する研究 (文献①) 次世代不揮発性メモリの候補である抵抗変化型メモリ (ReRAM) について、ナノテクノロジーを駆使したプロセスを用いてナノメートルスケールの素子サイズを作製し、低消費電力かつ高速で動作するメモリデバイスを実現します。</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p>2. 脳型デバイスに関する研究 (文献②) これまでに抵抗変化型メモリを用いた神経シナプスの模倣動作を実現していますが、その発展形に関する研究を行っています。</p> <div style="text-align: center;">  </div>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>① T. Ohno et al., "Resistive switching in a few nanometers thick tantalum oxide film formed by a metal oxidation." <i>Applied Physics Letters</i> <b>106</b>, 173110 (2015).</p> <p>② T. Ohno et al., "Short-term plasticity and long-term potentiation mimicked in single inorganic synapses." <i>Nature Materials</i> <b>10</b>, pp. 591-595 (2011). (ネイチャー姉妹紙、引用数1,000以上)</p> <p>③ H. An, T. Ohno et al., "Current-induced magnetization switching using an electrically insulating spin-torque generator." <i>Science Advances</i> <b>4</b>, eaar2250 (2018). (サイエンス姉妹紙)</p> <p>④ (継続中) 科研費・挑戦的研究 (萌芽)、科研費・基盤研究 (B) の研究代表者</p> <p>⑤ (採択実績) JST・さきがけ、科研費・若手研究 (A)、科研費・国際共同研究強化の研究代表者</p>
---------------	--

所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・准教授	
氏名	大森 雅登 (Omori Masato)	
取得学位	博士 (工学)、東京大学、2007年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	半導体工学	
研究キーワード	半導体デバイス, パワー半導体, 窒化ガリウム, GaN	
研究内容	<p>半導体はパソコンやスマートフォン, ゲーム機, デジタルカメラなど様々な電子機器の心臓部として, 私たちの生活をますます便利で豊かなものにしてきています。半導体は快適な暮らしを支えるだけでなく, 脱炭素社会や省エネルギー社会を実現するための切り札としても大きな期待が寄せられています。すでに半導体は太陽光発電やLED照明として省エネルギー化に貢献していますが, 最近ではパワーデバイスという電力を効率よく制御する半導体に注目が集まっています。我々はこのような省エネルギー用の半導体をはじめ, 安心安全な社会にも役立つ半導体の研究に取り組んでいます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>半導体材料の物性評価と新評価技術の開発</b> 高性能・高機能な半導体デバイスを実現させるためには, 半導体材料の結晶性や不純物濃度, 電気伝導率などの物性パラメーターの正確な理解と制御が必要不可欠です。当研究室ではフォトルミネッセンス法やホール効果測定などの種々の光学的・電気的測定手法を用いて半導体材料の物性を詳しく評価する研究を行っています。また, 従来手法では評価が困難な材料に対して新しい測定技術の開発にも取り組んでいます。</li> <li>● <b>窒化ガリウム (GaN) を用いた高効率パワーデバイスの研究</b> 窒化ガリウム (GaN) は青色発光ダイオードの材料としてよく知られていますが, 最近では高効率な電力変換素子 (パワーデバイス, パワー半導体) としての活用も進められています。もし既存の半導体デバイスをすべてGaNに置き換えることができれば, 日本の全発電量の約1割を節約できると言われており, 省エネルギー材料として注目が集まっています。当研究室ではまだ実現されていない高い電圧領域で動作する縦型GaNパワーデバイスの研究を行っています。具体的にはGaNへのイオン注入技術の確立や電界効果トランジスタのチャネル移動度の向上, 新構造パワートランジスタの実現などに取り組んでいます。</li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文</li> </ul> <p>[1] Masato Omori, Taisei Miyazaki, Kenta Watanabe, Maito Shiraiishi, Ryusei Wada and Takashi Okawa, "Determination of Mg acceptor concentration in GaN through photoluminescence," <i>Appl. Phys. Express</i> <b>14</b>, 051002 (2021).</p> <p>[2] Hideki Sakurai, Masato Omori, Shinji Yamada, Yukihiko Furukawa, Hideo Suzuki, Tetsuo Narita, Keita Kataoka, Masahiro Horita, Michal Bockowski, Jun Suda, and Tetsu Kachi, "Highly effective activation of Mg-implanted p-type GaN by ultra-high-pressure annealing," <i>Appl. Phys. Lett.</i> <b>115</b>, 142104 (2019).</p> <p>[3] Shinji Yamada, Masato Omori, Hideki Sakurai, Yamato Osada, Ryuichiro Kamimura, Tamotsu Hashizume, Jun Suda, and Tetsu Kachi, "Reduction of plasma-induced damage in n-type GaN by multistep-bias etching in inductively coupled plasma reactive ion etching," <i>Appl. Phys. Express</i> <b>13</b>, 016505 (2020).</p>	

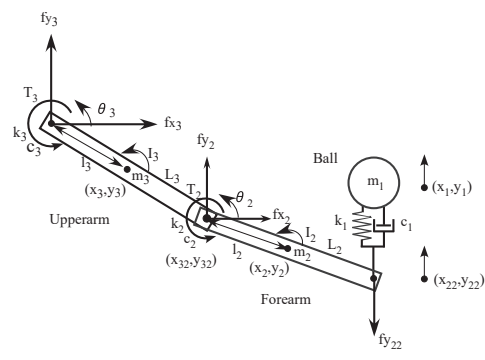
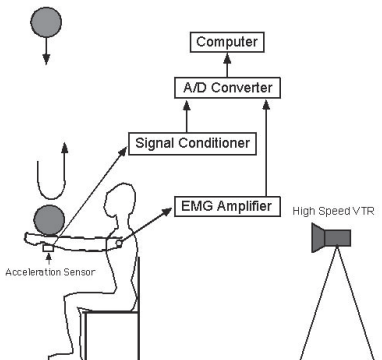


所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・准教授	
氏名	岡内 優明 (Okauchi Masaaki)	
取得学位	体育学修士、筑波大学、1983年4月	
SDGs目標		

研究分野	スポーツ科学 (スポーツバイオメカニクス)
研究キーワード	スポーツ技術、動作解析、シミュレーション





**研究内容**

打球系のスポーツの基本的な技術として、ボールの衝撃を緩衝する技術は重要であり高度な運動能力が必要である。人間の身体とボールが直接衝突し、ボールの勢いを緩衝しながら正確なコントロールが要求されるものとして、バレーボールのレシーブ、サッカーのトラップ等が例としてあげられる。その中でもバレーボールのアンダーハンドによるレシーブ時のボールの衝撃を緩衝する技術に注目している。

アンダーハンドパスの衝突モデル

研究業績・アピールポイント	バレーボールにおけるアンダーハンドパスの衝突モデル, 岡内優明・前田寛, 第18回日本バイオメカニクス学会大会論集, 174-175, 2004
	An analysis of the ball control technique of forearm passing in volleyball, Okauchi M. Maeda H, Engineering of Sport 9 Volume 2 Issue 2, p14, 2012
	バレーボールのアンダーハンドによるサーブレシーブ技術の解析, 岡内優明・前田寛, 日本機会学会[No.12-39]シンポジウム: スポーツ・アンド・ヒューマン・ダイナミクス2012講演論文集, pp.40-43, 2012
	Simulation of impact between hands and ball in overhead passing in volleyball Okauchi M. Maeda H, RMIT University, Sports Dynamics Discovery and Application, pp.36-41 2003
	A model of ball handling in overhand passing in volleyball, Okauchi M. Maeda H, Blackwell Science, The engineering of Sport 4, pp.730-736,2002年
Simulation of Ball Handling in Overhead Passing in Volleyball, Okauchi M. Maeda H XVIII International Symposium of Biomechanics in Sports pp.545-549	

所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース・准教授	
氏名	岡本 則子 (Okamoto Noriko)	
取得学位	博士(工学)、大分大学、2006年3月	
SDGs目標	  	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

研究分野	建築環境工学, 建築/環境音響学
研究キーワード	建築環境, 建築音響, 騒音制御, 吸音測定, 音場解析, 材料開発

研究内容	<p>●<b>建築材料の吸音特性の現場測定技術の開発</b></p> <p>建築材料の吸音特性を把握する代表的な測定手法として、JIS等で規格化されている残響室法や音響管法が挙げられる。しかし、前者は大規模な実験室や試料が必要とされ、後者は音波の入射条件が実際の建築空間と異なることなどから、施工された内装材の高精度な吸音測定は困難とされる。これらの課題の解決のため、本研究では、アンサンブル平均による材料の吸音特性の現場測定法を提案している。同手法によれば、環境騒音などのランダム入射音源、受音センサ、周波数分析器といった装置でin-situ（その場）測定が行え、従来法では困難とされる材料に対しても、比較的容易な吸音特性の計測が期待できる。(業績1, 2)</p> <p>●<b>有限要素法による室内音場の大規模解析手法の開発</b></p> <p>近年、計算機資源の発達に伴い、音場予測手法として、コンピュータを活用した種々の波動音響の数値解析手法が提案されている。中でも有限要素法（FEM）は、適用性の広さと精度の面で有利だが、必要とする記憶領域が大きい。コンサートホール等を対象とする3次元解析では、室容積や周波数に大きな制約があり、音響設計等でFEMを利用するには必要記憶容量の削減は喫緊の課題とされてきた。本研究は、計算コスト削減に向け、高性能スプライン音響要素で構成したマトリクス方程式のソルバーとして効果的な反復法と前処理の適用および各種パラメータの選択、並列計算の適用を図り、FEMによる周波数・時間領域音場の大規模解析手法として確立したものである。さらに、シンプルな吸音設定の下、200㎡の実験室や3,000㎡の音楽ホールの音場を対象に、実測値や高速多重極BEM等の他の解析手法と比較し、精度検証も行っている。(業績3)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>音環境計画のための設計支援技術として、内装材の音響特性の測定法や室内音場の予測手法等の開発に取り組んでいる。加えて、病院や障害者支援施設、集合住宅などの音環境の実態調査も行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>岡本則子, 大鶴徹, 富来礼次, 建築材料の吸音特性の現場測定法による施工状態管理システム開発に関する研究, 日本建築学会技術報告集, 第23巻, 第54号, 517-520, 2017</li> <li>S. Lawanwadeekul, R. Tomiku, N. Okamoto, et al., Comparison of sound absorption characteristics measured by impedance tube method and ensemble averaging technique on porous clay bricks, Acoust. Sci. &amp; Tech., 42(3), 154-157, 2021</li> <li>日本建築学会編(共著), 音環境の数値シミュレーション—波動音響解析の技法と応用—(第二版), 丸善出版, 2021</li> <li>岡本則子, 赤川貴雄, 障がい者支援施設の音環境に関するケーススタディ—入所型の施設の共用空間を対象とした実態調査—, 日本音響学会秋季研究発表会, 721-722, 2018</li> </ol>



図1 測定の様子

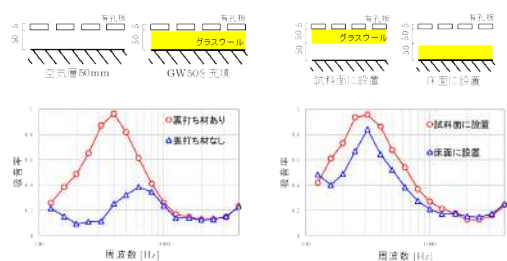







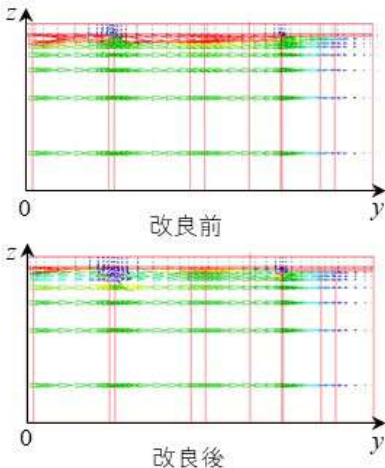
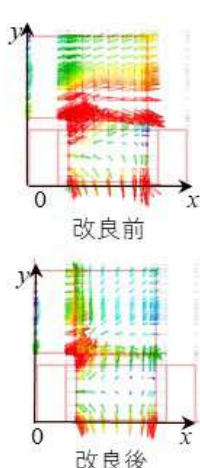


図2 測定結果の例(裏打ち材に関する検討)

所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・准教授	
氏名	小畑 経史 (Obata Tsuneshi)	
取得学位	博士 (情報科学)、大阪大学、2007年6月	
SDGs目標	  	
研究分野	応用数学	
研究キーワード	オペレーションズ・リサーチ, 意思決定, 合理的評価	
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 主観的意思決定に関する研究 主観的な意思決定法である階層化意思決定法 (AHP) を対象にして、個人の好みのような客観的には測れない評価基準による判断を数理的に扱うための研究を行なっている。AHPでは主観的な評価を数値化する際に一対比較をもとに、一対比較行列と呼ばれる行列を作成する。この行列の固有値・固有ベクトルは判断の一貫性と深く関係しており、その性質を調べることで人間の主観的評価の奥にある数理的なメカニズムの解明を目指す [1,2].</li> <li>● 集団意思決定に関する研究 投票データのような集団による意思表示をもとに、集団全体としての意思を決定するための手法について研究している。事業体の経営効率性評価手法であるデータ包絡分析法 (DEA) を使って、各投票者の選好度合いを統合して候補者の総合評価を得る手法や、多次元尺度構成法 (MDS) を用いて評価対象間の類似性を評価する手法を検討している [3].</li> <li>● スポーツのパフォーマンス評価に関する研究 スポーツ (主にサッカー) における選手やチームのパフォーマンスを評価する研究を行っている。DEA を使って選手の組合せの善し悪しを評価する手法や、変化係数をとまなうポアソン回帰分析を用いて、チームパフォーマンスの時間的な推移を対戦相手の強さを考慮して推定する手法を検討している [4].</li> <li>● 他に、オペレーションズ・リサーチ (OR) の普及を目指して、OR手法のウェブアプリケーションを開発、公開している [5]. <a href="http://lab.ms.oita-u.ac.jp/t-obata/grav/html5">http://lab.ms.oita-u.ac.jp/t-obata/grav/html5</a></li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<p>主要論文等</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. S. Shiraishi and T. Obata, On a maximum eigenvalue of third-order pairwise comparison matrix in analytic hierarchy process and convergence of Newton's method, <i>Operations Research Forum</i>, Vol.2, Article No. 30 (2021). <a href="https://doi.org/10.1007/s43069-021-00077-w">https://doi.org/10.1007/s43069-021-00077-w</a></li> <li>2. T. Obata and S. Shiraishi, Computational study of characteristic polynomial of 4th order PCM in AHP, <i>Bulletin of Informatics and Cybernetics</i>, Vol.3, No.3, pp.1-12 (2021). <a href="https://doi.org/10.5109/4372243">https://doi.org/10.5109/4372243</a></li> <li>3. T. Obata and H. Ishii, A method for discriminating efficient candidates with ranked voting data, <i>European Journal of Operational Research</i>, Vol.151, Issue 1, pp.233-237 (2003). <a href="https://doi.org/10.1016/S0377-2217(02)00597-0">https://doi.org/10.1016/S0377-2217(02)00597-0</a></li> <li>4. 和泉・小畑, サッカーリーグにおけるチームパフォーマンスの時間的推移の可視化, オペレーションズ・リサーチ経営の科学, 第63巻10号, pp.628-634 (2018).</li> <li>5. 小畑, 誰でも手軽に使えるDEAウェブアプリケーションの構築, オペレーションズ・リサーチ経営の科学, 第62巻7号, pp.431-436 (2017).</li> </ol>	

所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・准教授	
氏名	高 炎輝 (Gao Yanhui)	
取得学位	博士 (工学)、佐賀大学、2010年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	電力工学・電力変換・電気機器
研究キーワード	鉄損 振動 電磁界解析
研究内容	<p>近年、環境問題の観点から各種電気機器の低損失・低騒音化への要求が高まるとともに、高精度・高機能な各種電磁装置の開発が盛んに行われています。そこで、これら高性能電気機器・電磁装置の開発に必要なシミュレーション技術の開発を行うとともに、開発したシミュレーション技術を用いて高性能な電気機器・電磁装置の開発・設計を行っています。</p> <p><b>1. 電気機器の低損失化</b></p> <p>電気機器の低損失化を検討するため、機器で用いられる積層鉄芯の損失計算法について、積層鉄芯の層間ギャップと鋼板中の渦電流、さらには、磁壁移動によって生じる異常渦電流損やインバータ電源の電流波形に含まれる高調波まで考慮した損失計算法を開発し、電気機器の低損失化設計に適用しています。これまで、インバータ電源に接続されたリアクトルや異方性鉄芯を用いる電力用リアクトルの低損失化について検討し、積層鉄芯の角部の形状を改良することにより鉄芯中の磁束分布を一様にする損失低減法を提案しています (図1参照)。現在はさらなる高精度な鉄損計算法について検討しています。</p> <p><b>2. 電気機器の低騒音化</b></p> <p>電気機器の低騒音化を検討するため、積層鉄芯の振動解析法について、電磁応力と磁歪応力の両方を考慮した振動解析法を開発し、電気機器の低騒音化設計に適用しています。これまで、インバータ電源に接続されたリアクトルの低騒音化について検討し、鉄芯ギャップに挿入する絶縁物の硬さを調整することにより電磁応力と磁歪応力による鉄芯表面の変位をキャンセルする騒音低減法を提案しています (図2参照)。現在はさらなる高精度な騒音評価法について検討しています。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>図1 鉄芯中の磁束分布の均一化</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>図2 鉄芯中振動の低減</p> </div> </div>
研究業績・アピールポイント	<p>これまで、磁界のシミュレーションの分野で世界的に最も権威ある米国電気電子学会誌などに40編以上の論文が掲載されるなどの実績を上げ、平成23年には電気学会静止器技術委員会優秀奨励賞を受賞するとともに、電気学会 電力・エネルギーフォーラムや自動車メーカなどで招待講演を行っています。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部




医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・准教授	
氏名	片山 健夫 (Katayama Takeo)	
取得学位	博士 (工学)、東京工業大学、1999年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	電気電子工学、応用物理工学	
研究キーワード	光エレクトロニクス、光通信システム、光デバイス、光計測	
研究内容	<p>コロナ禍によるリモートワークの増大に伴いインターネットをはじめとする通信の需要が著しく増大しており、基幹となる光通信の大容量化は不可欠である。それを実現するための基盤技術の研究を行っている。さらに、極めて高度化したそれらの技術を大学生が学習するための手法や、光通信のための技術をセンシングに応用するための研究も行っている。</p> <p>●偏波多重コヒーレント光通信システムの研究 偏波多重化は、光ファイバ通信において他の高速化・多重化技術に重畳して大容量化を容易に行うことができる。しかし、長距離の光ファイバを伝送する過程で偏波状態が乱れ受信時において偏波分離が困難になる。そこでもともと使用しているコヒーレント検波の信号を用いて偏波補正を行う。</p> <p>●光位同期技術を用いた半導体レーザーの狭線幅化の研究 コヒーレント光通信において光源の線幅の細さとして現れるレーザーの周波数安定化は、信号の稠密化に大きな影響を与える。また、計測のための光源に用いる場合でも分解能の向上に寄与する。コヒーレント検波に用いる光位相制御や光コム発生技術を用いて安価でよく用いられる分布帰還型レーザーや面発光半導体レーザーの狭線幅化を行う。</p> <p>●ソフトウェア無線技術を用いた簡易型コヒーレント光通信システムの研究 近年の光ファイバ通信技術が複雑になっているため、学生が通信システムの仕組みを学習することが困難になっている。一方、ソフトウェア無線技術が進展したため、現代的な通信技術の実験が容易に行えるようになった。そこで、これらを応用して現代的な光ファイバ通信を学生実験でも行えるシステムを実現する。また、ソフトウェアで設計変更が可能なこの手法は、新規の光ファイバ通信の予備的な検証にも役立つ。</p> <p>●地すべり計測のための光ファイバセンサの研究 光ファイバに加わる外力は、通信においては擾乱として現れるが、定量的に評価することで計測が可能となる。そもそも長距離の伝送に用いられる光ファイバは、広い範囲のセンシングに適しており、ガラス製で安定しているため一度設置すると長期間の計測が可能となる。よって、危険な地すべり地帯の状態を計測するセンサに適しているため、光通信技術を応用する研究を行う。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>小池佑宗, 片山健夫, 水鳥明: “偏波多重QPSK信号のコスタスループホモダイン検波に適用する自動偏波制御システム” 2021年電子情報通信学会総合大会, B-10-8</p> <p>“Numerical study of a highly optical-feedback tolerant DFB laser with an absorber and a rear reflector using transfer matrixes and rate equations” Takeshi Kurosaki, <u>Takeo Katayama</u>, and Hitoshi Kawaguchi, <i>IEICE Electronics Express</i>, Vol. 14, No. 11, 2017</p>	



所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・准教授	
氏名	紙名 哲生 (Kamina Tetsuo)	
取得学位	博士(学術)、東京大学、2005年3月	
SDGs目標		

研究分野	プログラミング言語
研究キーワード	リアクティブプログラミング、文脈指向プログラミング、モジュラリティ
研究内容	<p>●リアクティブプログラミング (RP) に関する研究</p> <p>Javaに時変値(時間変化する値)の機構を導入したプログラミング言語SignalJを設計・実現し、センサとモータの連携などの場面において、Javaで蓄積されたプログラム資源を活用しつつデータ流指向のプログラミングが可能であることを示した(論文1.)。現在では、Society5.0における計算基盤の実現を目標に、データ流指向のプログラミングを、IoTを含む様々なアプリケーションに適用するための時変値の永続化や分散化のための機構の構築に取り組んでいる(論文2.)。</p> <p>●文脈指向プログラミング (COP) に関する一連の研究</p> <p>COPは、使用される環境や状況に応じて実行されるプログラムのモジュールを自動的に切り替えることを実現する。COPの機構にイベント機構やアスペクト指向の言語機構を統合した言語EventCJを実現し、COPの分野に大きな影響を与えた(論文3.)。このほか、言語設計、型システム(論文4.)、RP機構との統合、ソフトウェア開発方法論(論文5.)など、様々な機構の実現や提案を行った。</p> <p>※関連リンク：<a href="http://plp-www.csis.oita-u.ac.jp/ja/">http://plp-www.csis.oita-u.ac.jp/ja/</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>COP(2018年)とREBLS(2019年)国際会議でプログラム委員長を務めるなど、これらの分野を牽引する一人である。その他、Onward!(2021年)等多数の国際会議でプログラム委員を務めた。現在科研費基盤B採択課題(21H03418)研究代表者。このほか科研費基盤Cに2回、若手Bに2回代表者として採択。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年, Harmonizing Signals and Events with a Lightweight Extension to Java, <i>The Art, Science, and Engineering of Programming</i>, 2(3).</li> <li>2021年, Signal Classes: A Mechanism for Building Synchronous and Persistent Signal Networks, In <i>ECOOP 2021</i>.</li> <li>2011年, EventCJ: A Context-Oriented Programming Language with Declarative Event-based Context Transition, In <i>AOSD.11</i>.</li> <li>2018年, Method Safety Mechanism for Asynchronous Layer Deactivation, <i>Science of Computer Programming</i>, 156.</li> <li>2014年, Context-Oriented Software Engineering: A Modularity Vision, In <i>MODULARITY'14</i>.</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部







医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	理工学部 共創理工学科 自然科学コース・准教授	
氏名	北西 滋 (Kitanishi Shigeru)	
取得学位	博士 (地球環境科学)、北海道大学、2007年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	保全生物学、分子生態学、生物資源保全学	
研究キーワード	水圏生態系、遺伝的多様性、野生動物、外来種	
研究内容	<p>1.水圏生態系の生物多様性に関する研究</p> <p>水圏(海、湖沼、河川)は、多様な動植物の生息の場となっています。しかし近年、環境破壊や外来種の侵入などにより、水圏生態系の生物多様性の減少や生態系サービスの劣化が懸念されています。本研究室では、フィールド調査やDNA解析などにより、水圏生態系におけるさまざまな動物の基礎生態や遺伝的特性、人間生活の影響などの解明に取り組んでいます。また、得られた知見を生態系保全や環境教育などにつなげていくことも目的としています。</p> <p>2.水産対象種の資源保全・管理に関する研究</p> <p>近年、さまざまな水産対象種において、その資源量の減少が大きな社会問題となっています。加えて、無秩序な移植放流による在来生態系への影響 (遺伝的攪乱や在来遺伝子資源の喪失) も懸念されています。そこで本研究室では、「地域の在来個体群とその遺伝子資源の保全」と「水産資源の増大・持続的利用」とを両立した資源管理手法の確立を目指して、日本各地の在来個体群の生活史特性や遺伝的特性、それらの空間的・時間的差異に関する研究に取り組んでいます。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>分析技術</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミトコンドリアDNAや核DNAを用いた解析(集団解析、系統解析、親子判別など)</li> <li>・リアルタイムPCRを用いたDNA解析(SNP系統判別、環境DNA分析など)</li> <li>・野生動物の生態調査 (魚類調査)</li> </ul> <p>上記技術を用いた近年の論文</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Environmental Biology of Fishes (2018) 101, 699-710.</li> <li>・ PLoS ONE (2017) 13, e0191731.</li> <li>・ Ichthyological Research (2017) 63, 506-518.</li> </ul> <p>応用可能な分野</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 農林水産分野における資源管理策の立案支援(遺伝的構造解析、系統判別、環境DNA分析など)</li> <li>・ 生物調査や研究支援(分布・密度調査、遺伝的多様性調査など)</li> <li>・ 教育活動支援(生物多様性調査、科学人材育成など)</li> </ul>	

所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・准教授	
氏名	衣本 太郎 (Kinumoto Taro)	
取得学位	博士(工学)、京都大学、2006年3月	
SDGs目標	    	

研究分野	電気化学, 無機材料化学, エネルギー関連化学
研究キーワード	燃料電池, 二次電池, 水素製造, 竹, セルロースナノファイバー, 宇宙素材

研究内容	<p>SDGsとイノベーションに繋がる技術開発を目指して、水の成分の水素や空気に含まれる酸素を使って発電する(1)燃料電池や(2)二次電池の材料開発、(3)水から水素を取り出すための電極の開発、ならびに(4)竹を原料にしたセルロースナノファイバーの製造プロセスの開発や用途開発を進めています。</p> <p>(1) 燃料電池自動車やエネ・ファームに搭載される固体高分子形燃料電池の研究 固体高分子形燃料電池の電極触媒への研究として、(1)炭素粉末の表面を化学的に修飾して高性能化を図る、(2)独自の電子顕微鏡観察技術による劣化メカニズムの定量的説明、(3)白金を全く使わない触媒の開発に取り組んでいます。また、充電ができる新しい燃料電池の開発にもチャレンジしています。</p> <p>(2) 空気二次電池用電極の開発 水を分解することで充電し、水を作りながら放電する二次電池の開発を進めています。この電池には、酸素を反応させるための触媒(電極触媒)が必要で、パイロクロア型金属酸化物に着目して、高性能化と量産化のための研究開発を進めています。</p> <p>(3) 水電解による水素製造用の電極触媒の開発 水を電気分解すると水素ができます。この水素はエネルギー源として利用できます。そのための電極触媒として、活性炭、酸素、窒素とチタンを組み合わせた新しい化合物を世界で初めて開発しました。また、水の電気分解では酸素を円滑に発生させることも必要です。そのための電極触媒の開発も進めています。ゼロエミッション、クリーン、エコな水素社会の実現に繋げるため、高性能化の研究を進めています。</p> <p>(4) 竹を原料にしたセルロースナノファイバーの製造プロセスの開発と用途開発 竹の異常繁茂は生活環境や自然環境の悪化に繋がります。そこで、竹を素材活用して社会を豊かにするとともに環境を守ることを目指し、竹から繊維とセルロースナノファイバーを作る独自プロセスを開発し、大分大学発ベンチャー企業の株式会社おおいたCELEENAを2021年9月に起業しました。SDGs対応製品として化粧品等への活用が期待されています。現在、JAXAらと共同で宇宙用途の開発も進めています。</p>
------	---

研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>電気化学測定装置一式を有し、専門知識を含めて電池や材料開発の共同研究が可能です。</li> <li>研究室のHPもご参照ください。 <a href="https://www.appc.oita-u.ac.jp/kinumoto-lab/">https://www.appc.oita-u.ac.jp/kinumoto-lab/</a> </li> <li>関連として、株式会社おおいたCELEENAのHPも付記します。 <a href="https://www.oitaceleena.co.jp/">https://www.oitaceleena.co.jp/</a> </li> </ul>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

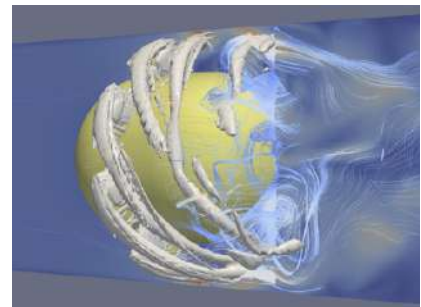
理工学部

福祉健康科学部

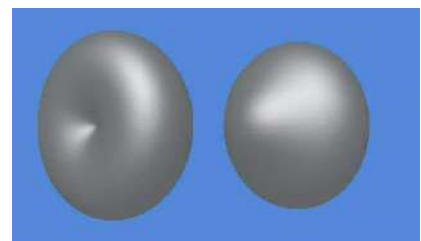
その他学内施設等

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・准教授	
氏名	栗原 央流 (Kurihara Eru)	
取得学位	博士 (工学)、北海道大学、2007年6月	
SDGs目標	 	

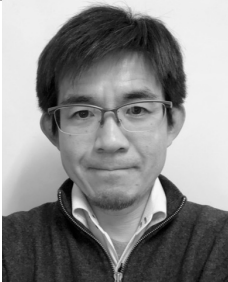


研究分野	流体力学
研究キーワード	流れのシミュレーション, 混相流,
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 流体機械を過ぎる流れのシミュレーションと性能設計                      これからのエネルギー問題の解決にあたっては、自然エネルギーの利用がますます盛んになることが予想される。我が国は周囲を海に囲まれており、そこでの発電技術としての洋上風力発電や潮力・波力発電が有力視されている。本研究では、一般的な流体機械に用いられるタービン翼に加え、波力発電用ウェルズタービンに対する数値解析を通してこれらの効率化・高性能化および低騒音化に資する翼設計の知見を得ることを目的としている。</li> <li>● 混相流の数値モデル構築とその応用                      大振幅音波と微小な気泡を用いた細胞への薬剤導入技術や腫瘍の治療が発展してきている。本研究は、大振幅の圧力変動（音波）によって励起される気泡の非球形振動と細胞壁や気泡同士の相互作用による力学的な挙動を理論的にあきらかにする。また、固気混相流として、病原性微粒子の存在する屋内での換気についての研究も行っている。</li> <li>● 田んぼダムによる流域治水の検討と提案                      近年、大型の台風や突発的な豪雨にともなう水害の被害が全国各地で起こっている。本研究は、大分県との共同で圃場区画とその河川流域における突発的な豪雨災害の軽減に向けて、水田を一時的なダムとして利用する「田んぼダム」の検討・検証作業を行っている。本研究では、コンピュータシミュレーションを用いて、豪雨時の水田の排水柵からの排水量と水田水位の制御に関する調査を行っている。</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文                      “Numerical Study of Turbulent Flow Around a Rotating Wells Turbine,” Proc. 31st International Symposium on Transport Phenomena (2020).                      “Dynamical Equations for Oscillating Nonspherical Bubbles with Nonlinear Interactions,” SIAM J. Appl. Dyn. Sys (2017)</li> </ul>



タービンを過ぎる流れと渦構造



非線形相互作用により変形した気泡

所属・職位	理工学部創生工学科福祉メカトロニクスコース・准教授	
氏名	小池 貴行 (Koike Takayuki)	
取得学位	博士 (教育学)、北海道大学、2007年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	スポーツ科学, スポーツ工学, 身体運動科学, 感性情報学
研究キーワード	スポーツバイオメカニクス, 運動制御, 運動学習
研究内容	<p>身体運動技術形成のメカニズムとその制御の解明</p> <p>(1) 身体の脱力を促す姿勢と力学的に有効な運動技術の関係</p> <p>(2) 障害者スポーツの運動技術解析 (例えば, 片手バッティング技術の解析)</p> <p>(3) 運動実施者の技術レベルに基づく技術イメージの実態: 自らとお手本の運動観察を通じた技術習得時における運動技術イメージの影響</p> <p>人はなぜ巧みで繊細な動きができるのか? という疑問は, 運動技術研究において解決すべき大きな問題の一つです. 1930年代に身体運動科学者ベルンシュタインが「技術の習熟と共に筋力に依存しない動作が実施できる」と提案しました. これは, 運動中に腕や脚など身体各部位の重さや慣性モーメントを活用し, 筋力は発揮された動作をコントロールするために使うと, より巧みな運動技術の発揮が可能となる考えです. 多くの研究者が, この技術の背後にある仕組みを運動力学や神経生理学の手法で解明しようとしています. 一方で, 運動時には自らの思い通りの動作ができない状況もあります. これは, 自らの運動技術を第三者の視点で見られないことや自己の運動技術のイメージを内的に想起できないためです. このことから運動技術の習得においては運動者の内部でイメージが構築できることが, 技術向上の近道になります. これら知見はスポーツ技術の習得だけでなく, リハビリテーションでも活かされると考えています.</p> <p>このような研究の実現に向けて, 当研究室では3次元計測が可能な複数台の高速度カメラ, 床反力計, モーションセンサー, 筋電図計, その他機器やソフトウェアを使い, 運動中に身体や関節まわりで発生する力や神経筋系の応答を分析し, このメカニズムの解明や巧みな技術の習得方法など身体運動のパフォーマンス向上に活かされる新たな知見を明らかにしています. また, 福祉への理解が深い大分県の土地柄を活かし, 障害者スポーツの運動技術解析も実施する計画です.</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1. 研究論文</p> <p>(1) 2007年, 自己運動と模範運動の運動観察が外力利用運動の技術修得に与える効果, 認知科学, 16(4), 508-522.</p> <p>(2) 2015年, 四肢への重り装着に伴う全力疾走中の股・股関節間の力学的協調, スプリント研究, 24, 65-72</p> <p>(3) 2020年, Mechanical advantages and disadvantages of a lower limb using forefoot to heel strike landing, Proceedings of the 13<sup>th</sup> ISEA conference 2020, 49, 15</p> <p>(4) 2022年, ハンドボール経験者と未経験者におけるジャンプシュート動作の相違に関するバイオメカニクスの分析 一三次元動作解析による角運動量の相違に着目して一, スポーツおおいた, 7, 2-11.</p> <p>(5) 2022年, 運動観察を通じた運動学習の現在~他者が行う運動観察を通じた運動の内部イメージと運動技術習得~, スポーツおおいた, 7, 12-20.</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院

理工学部

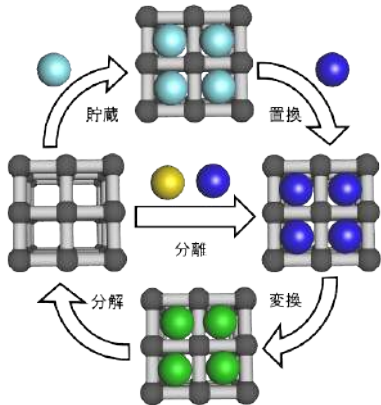
福祉健康科学部

その他学内施設等





所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・准教授	
氏名	近藤 篤 (Kondo Atsushi)	
取得学位	博士 (理学)、千葉大学、2008年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	化学
研究キーワード	吸着、分離、多孔質材料、地球温暖化

<p><b>研究内容</b></p> <p>持続可能な社会実現への取り組みは近年ますます重要となっています。そのための1つの取り組みとして、有用な資源を効率的に入手・合成したり、不要な物質を除去・分解することなどが重要となります。我々の研究室では、ナノサイズの空間を有する多孔質材料を活用して、持続可能な社会実現に貢献することを目指した研究を展開しています。材料合成から構造・物性の評価を通して、ナノ空間を有する多孔質材料科学の領域展開を目指しています。</p> <p>●多孔質材料の開発に関する研究</p> <p>空間とは、何もないスペースと一般的には認識されていますが、その空間がナノサイズになってくると”特別な”空間として振舞います。その理由は、空間を隔てている壁からの影響が顕著となってくるためであり、壁の構成成分がどのようなものであれ、この効果は発現します。我々は、このような普遍的な科学的知見をベースとしながら、様々な材料においてナノ空間を発達させた材料の合成や、その構造解析、構造的特徴に基づいた材料の応用展開を目指した研究を行っています。(論文1.)。</p> <p>●多孔質材料を用いた分離膜の開発に関する研究</p> <p>持続可能な社会実現のために従来の方法を低エネルギーで代替できる手法が求められています。我々は、その1つの可能性として多孔質材料を用いた膜による分離に着目しています。材料合成からその物性評価、改質、多孔質材料と他の材料との複合化による膜化、およびそのガス透過・分離特性までを一貫して手掛けています。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://kondoa.wixsite.com/kondo-lab">https://kondoa.wixsite.com/kondo-lab</a></p>	
--	---

<p><b>研究業績・アピールポイント</b></p>	<p>上記の研究以外にも、地球温暖化の主たる要因である二酸化炭素の分離に関する研究や、水の浄化・精製に関する研究を行っています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年、A. Kondo, H. Kajiro, T. Nakagawa, H. Tanaka, H. Kanoh, Dalton Trans., 49, 3692.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2014年、「吸着材・吸着プロセスの開発動向ーエネルギー・環境問題解決のためにー」, 加納博文監修, CMC出版, 71-78.</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年、日本化学会 コロイドおよび界面化学部会 研究奨励賞 受賞</li> <li>2014年、日本吸着学会 奨励賞 (カルゴンカーボンジャパン賞) 受賞</li> </ol>
-----------------------------	--

所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・准教授	
氏名	佐々木 朱美 (Sasaki Akemi)	
取得学位	博士 (文学)、広島大学、2006年3月	
SDGs目標		

研究分野	英語学
研究キーワード	統語論

研究内容	<p>●John Bunyanの英語の分析</p> <p>17世紀英国作家John Bunyanの作品から言語資料を収集し、他の同時代作家の英語や現代英語と比較対照しながら、その特徴を明らかにするものである。この時代、英語は標準的現代英語の体系において大きな発達を遂げたため、旧から新への転換期にあたり、中期英語期から引き継いだ用法を保持しながらも、同時に新しい用法も多く取り入れている。特に、文法についての徹底した規則が現代ほど完全に確立されていない統語面においては古い用法と新しい用法間での揺れが大いに観察できるが、個々の作家によってその傾向が異なることから、『天路歷程』をはじめとする主要な著作から収集した言語資料をもとに、Bunyanの英語について考察する。</p> <p>●John Evelynの英語の分析</p> <p>17世紀英国作家John Evelynが残した日記および書簡から言語資料を収集し、主に統語面の特徴を明らかにするものである。英語の統語面における歴史的発達の研究に貢献することを目的とし、現代英語で用いられている用法が未だ確立していない文法項目や語法を中心に、実証的に分析する。日記や書簡には新しい文法現象が比較的現れやすいだけでなく、このジャンルの英語は口語的要素も強いことから、文体的特徴にも注目しながら、統語構造との関連について考察を深める。</p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>17世紀英語の文法構造を分析的に記述することによってその特徴の一端を明らかにしている。特にJohn Evelynの英語に関してはこれまでに複数の文法項目（再帰代名詞、単純形副詞と-ly形副詞、関係詞、完了相における助動詞beとhaveの分布、他動詞の補文構造、原形不定詞、二重目的語構文、強意副詞）について新旧の用法の共存状況を調査している。これによってEvelynの日記の中には現代では既に用いられない古い用法が多く用いられている一方で、17世紀の傾向からすると先進的と思われる用法がかなり取り入れられていることが明らかになっている。</p> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2016年、<i>Language and Style in English Literature</i>、pp. 125-136、溪水社</li> <li>2018年、<i>The Pleasure of English Language and Literature</i>、pp. 307-318、溪水社</li> </ol>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



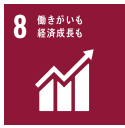

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	理工学部 創生工学 機械コース・准教授	
氏名	貞弘 晃宜 (Sadahiro Teruyoshi)	
取得学位	博士 (工学)、東京工業大学、2005年9月	
SDGs目標	  	

**研究分野** ロボティクス、メカトロニクスシステム、制御工学



**研究キーワード** 筋電位、マン・マシン・インターフェース、システム同定

**研究内容**

- 筋電位を用いた人間の動作を事前に推定するマン・マシン・インターフェースの研究  
筋電位は人間の動作に先んじて生じる電気力学的遅延特性 (EMD) とよばれる性質をもつ。この EMD を陽に考慮し、適切な筋電位から人間動作までのモデリング・同定を行うことで、事前に動作の推定を行うことができる (論文1)。従来用いていた筋電位はフィルタを利用して得ていたため、その際に生じる位相遅れにより、せつかくの EMD を短くしてしまうという問題があった。これを確率共振現象とマルチセンサを用いることで解決し、値方向には粗く量子化されてしまうが時間方向には従来より長い EMD を得る手法について提案している (論文2)。さらに、粗く量子化されるため従来手法では推定精度が悪くなることを、1D-CNN という機械学習の一種を用いたモデルを利用することにより解決し、結果として EMD は長くなるものの精度は変わらなくなる手法を提案している (論文3)。
- 非線形カルマンフィルタを用いた粒子画像計測法の研究  
データ同化的手法による流れ場のダイナミクスの同定と、その同定されたダイナミクスを利用した非線形カルマンフィルタを用いることにより、乱れの強い流れ場でも利用可能な粒子画像計測法を開発する研究を行っている。

**研究業績・アピールポイント**

- 論文
  - 2012年、林・小暮・浦・岩瀬・貞弘・畠山・澤口：筋電位の電気力学的遅延を用いた零位相追従型マンマシンインターフェースの開発、日本ロボット学会論文誌、Vol.30、No.8、pp.1-12.
  - 2019年、T. Sadahiro, Y.Hamasaki and T.Furukawa：Experimental Verification of Obtaining Longer EMD of EMG Using Multi-sensor and SR Phenomenon, Procs of The 38th JSST, Miyazaki, Japan, pp.43-46.
  - 2021年、D. Kashimoto and T.Sadahiro：Elbow Joint Angle Estimation Method Using 1D-CNN with Quantized EMG Generated by ST and Multi-sensor, Procs of The 40th JSST, Kyoto, Japan, pp.285-288.

所属・職位	工学部 創生工学科 電気電子コース 准教授	
氏名	佐藤 輝被 (Satou Terukazu)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、1997年2月	
SDGs目標		

研究分野	電気電子工学
研究キーワード	グリーンエレクトロニクス、電子回路、デジタル制御
研究内容	<p>●太陽光発電システムに関する研究 太陽光発電システムの最大電力を取り出すための制御に関する研究を行っています。太陽電池からのエネルギーを効率よく取り出すためには最大電力点追尾方式 (MPPT)が必要です。その制御方法の研究を行っています。また部分影発生時の対策についての検討や疑似太陽電池の検討も行っていきます。(論文1)</p> <p>●スイッチングコンバータに関する研究 小型軽量、高効率のスイッチングコンバータのデジタル制御と制御方式に関する研究を行っています。電源装置のは小型・軽量、高効率であるとともに、入力電圧や負荷電流に影響されない安定な出力が要求されます。本研究ではデジタル制御を用いるとともに簡単な回路と制御方式でそれを達成するのが目的です。また、システムが不安定にならない様にフィードバック系の安定性の検討を行っています。(論文2,3)</p> <p>●電子回路シミュレータの開発 スイッチング動作を含む電子回路のシミュレータの開発を行っています。既存のシミュレータより高速で比較的精度のよいシミュレータの開発がほぼ完成しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Simple and Low Cost PV Simulator Using Diode Characteristics for Development of PV System, Proceedings of The 37th International Telecommunications Energy Conference INTELEC 2015)</li> <li>2. フィードフォワード伝達関数に基づくデジタル制御降圧形コンバータについて(電子情報通信学会論文誌 B Vol. J104-B No. 6 pp. 511-519)</li> <li>3. Improved Transient Response of Digitally Controlled Buck Converter Employing Predictive PID Control(Proceedings of 2nd ICRERA (International Conference on Renewable Energy Research and Applications) 2012.)</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等




所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース・准教授	
氏名	柴田 建 (Shibata Ken)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、2003年8月	
SDGs目標	       	

研究分野	建築計画, 建築社会システム
研究キーワード	空き家活用, 団地再生, リノベーション, エリアマネジメント, DIY, まちづくり

研究内容	<p>縮退時代の地方における、まちなか・郊外・小さなまちのそれぞれについて、地域空間と地域コミュニティの次世代継承のありかたを模索する研究・実践活動を行っている。</p> <p>●シェアの時代のコミュニティデザイン：スマートシティの計画とエリアマネジメント ハウスメーカー等と連携しながら、活動拠点のシェアによる新たな地域ネットワーク形成、コミュニティエネルギーマネジメント、防犯環境デザイン等を実装した新しい住宅地の地域デザインとマネジメント組織計画手法に関する実践的提案を行っている。</p> <p>●ベッドタウンからクリエイティブ・ネイバーフッドへ：高度成長期に開発された郊外住宅地のエリアリノベーション 高度経済成長期に開発された郊外ベッドタウンである日の里団地（宗像市）、敷戸団地（大分市）等において、空き店舗の活用したサードプレイス運営、郊外暮らしの再定義に関するワークショップ、魅力創発の担い手の育成と活動拠点としての団地再生等に取り組むことで、脱ベッドタウンのエリアリノベーション手法の実践的提案を行っている。</p> <p>●スケートボーディングによるゲリラ的アーバンデザイン：タクティカルアーバニズムと公共空間の再生 スケートボーディングは、ロサンゼルス郊外において、その空間の退屈さに抵抗する若者が公共の広場や隣家の空きプールを一時的に占有することから始まった。このような都市空間のゲリラ的領有は、現在の硬直化した日本の公共空間に重要な示唆を与えてくれる。そこで、大分スケートボード協会と連携しながら、タクティカルアーバニズムの手法を用いて公共空間の魅力化に取り組んでいる。</p> <p>●空き空間を活用したなりわい暮らしの再定義：エコディストリクトとしての城下町の継承 空き家・空き地が近年増加している竹田城下町において、空き地活用の社会実験「竹田空き地戦略本部」等を行いながら、近世以来の「生業と暮らしの両立」を次世代へといかに継承するか、地域空間と地域組織のあり方に関するアクションリサーチを行っている。</p>
	  
	<p>図1 ひのさと48      図2 大分駅前でのスケートボーディング      図3 竹田空き地戦略本部の活動</p>

研究業績・アピールポイント	<p>●シェアタウン ボン・ジョーノ（北九州市、先進的まちづくりシティコンペ国土交通大臣賞受賞）：タウンエディターとして、全体のコンセプト作成、事業者のデザイン調整からコミュニティ育成まで関わる。（<a href="http://www.bon-jono.com/">http://www.bon-jono.com/</a>）</p> <p>●日の里団地（宗像市）：日の里暮らしの編集室代表として、団地再生ビジョンを作成し、地域ワークショップ等を実施。団地再生プロジェクト「ひのさと48」として実現。（<a href="https://stzkr.com/">https://stzkr.com/</a>）</p> <p>●竹田城下町（竹田市）：竹田空き地戦略本部として、空き地を活用した地域継承方策提案。（<a href="https://www.taketaakichi.com/">https://www.taketaakichi.com/</a>）</p>
---------------	--



所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース（建築構造講座）・准教授	
氏名	島津 勝 (Shimazu Masaru)	
取得学位	博士（工学）、長崎大学、2003年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	建築学
研究キーワード	鋼構造、混合構造、構造解析
研究内容	<p>●せん断パネル型ダンパーの塑性変形性能に関する研究 近年、地震エネルギーをせん断パネル型ダンパーに吸収させることにより、主架構の損傷を抑制する制振構造が広く普及し、様々な形状のせん断パネル型ダンパーが提案されている。このダンパーによって主架構の損傷を抑えることができれば、建物の寿命を延ばし、環境負荷の低減にもなる。そこで、本研究では優れた地震エネルギー吸収性能を有するせん断パネル型ダンパーと、その設計式を提案する。（論文1、2）</p> <p>●混合構造骨組の有限要素解析法に関する基礎的研究 主要構造部の材料は主に鋼・コンクリート・木の3つであり、これらは鉄骨・RC・木造として単体で用いられるのが一般的である。これらの構造形式には利点と欠点があるが、その欠点を補う新たな構造形式として混合構造の開発が行われている。本研究では合理的な混合構造骨組の実現ために、骨組の動的弾塑性挙動を把握するための方法を提案する。（論文3、4）</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、せん断パネルダンパーの塑性変形性能に関する研究、日本建築学会大会学術講演会梗概集</li> <li>2022年、せん断パネルダンパーの等価せん断座屈変形角評価式に関する研究、日本建築学会九州支部研究報告集</li> <li>2018年、平成28年熊本地震によるピロティ形式RC造建物の被害調査と解析的検討、コンクリート工学年次論文集</li> <li>2020年、鋼板補強されたL字形ピロティ形式RC造建物の数値解析、鋼構造年次論文報告集</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部





医学部

医学部附属病院




理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース・准教授	
氏名	田中 圭 (Tanaka Kei)	
取得学位	博士(工学)、九州大学、2009年3月	
SDGs目標	  	



研究分野	建築構造学, 木質構造学	
研究キーワード	木造住宅の耐震化, 木材利用, サステイナブル建築, 中大規模木造, 木造ビル, GIR	
研究内容	<p>●木造住宅の耐震性向上に関する研究</p> <p>2016年熊本地震では多くの木造住宅が倒壊し人命が失われた。また南海トラフや各地の活断層を起因とする地震の発生確率は高まっており、木造住宅の耐震性向上は喫緊の課題である。本研究室では、地震被害の調査・分析<sup>1)</sup>を行うとともに他大学や民間企業と共同で木造住宅用の耐震補強工法<sup>2)</sup>や耐震性能向上のためのデバイスの研究・開発を行っている。</p> <p>●木造建築の中層大規模化に対応するための技術開発</p> <p>カーボンニュートラルを実現するためには、森林による二酸化炭素の吸収量の拡大が不可欠である。そのためには森林資源である木材の利用拡大が必要である。これに向け世界的に非住宅の中層大規模建築の木造化が進んでいるが、地震国であるわが国では技術的な課題も多い。本研究室では高剛性・高耐力をもつGIR工法をはじめとした大型木造を実現に欠かせない技術の開発<sup>3)</sup>と構造設計用のデータの蓄積を行っている。 関連リンク：<a href="https://www.ki-ki.info/">https://www.ki-ki.info/</a></p> <p>●新しい木造建築の実現のための技術支援</p> <p>大型木造建築をはじめとした新しい技術を用いた建築物の実現には、個別案件ごとに実験による安全性の確認や第三者機関による認定が必要な場合が多い。本研究室では、これらを担う設計事務所やゼネコンに対しての技術支援や実験協力を積極的に実施している。 (実績：2005愛・地球博日本政府館<sup>4)</sup>、大分県立美術館、大分県立武道スポーツセンター<sup>5)</sup>、松尾建設本社ビル等)</p>	 <p>厚物合板を用いた格子形耐震補強パネルの開発</p>  <p>木造ビル用接合部の実験</p>  <p>技術支援した大分県立武道スポーツセンター</p>
研究業績・アピールポイント	<p>参考文献</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2016年熊本地震災害調査報告, 日本建築学会, 2018.6, 第4.6.7.13章を執筆</li> <li>格子状の厚物合板を用いた簡易耐震補強方法の開発, 日本建築学会技術報告集, 2012.6, 第18巻第39号, pp.523-528</li> <li>中層大規模木造に用いる接合部に関する研究, 日本建築学会九州支部研究報告, 2022.3, 第60号・1, pp.497-504</li> <li>2005年日本国際博覧会(愛・地球博)日本政府館の建設について, 木質構造研究会技術報告集, 2004.12, 第8号, pp.24-25</li> <li>大分県立武道スポーツセンターの概要と木材調達, 第26回日本木材学会九州支部大会講演集, 2019.9, o-8</li> </ol>	

所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・准教授	
氏名	槌田 雄二 (Tsuchida Yuji)	
取得学位	博士(工学)、大分大学、2013年6月	
SDGs目標	 	

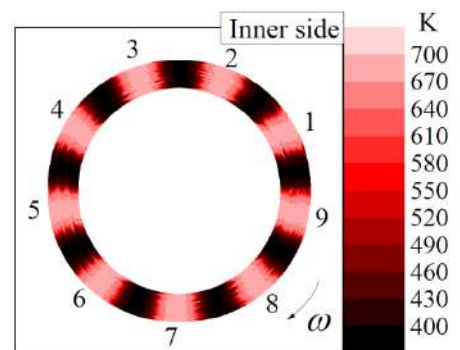
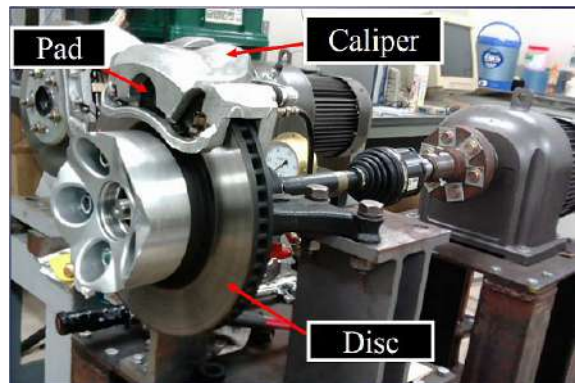
研究分野	磁気工学
研究キーワード	磁性材料, モータ, 変圧器, 電磁機器, 計測, 材質評価, 鉄鋼材, 磁気センサ, 予知保全

研究内容	<p>●高効率・低損失モータに関する研究</p> <p>本研究は、短時間の熱処理によってモータ積層コアの鉄損を低減するシステムの開発を目的とする。モータに用いられている積層コア(電磁鋼板の積層)は、打ち抜き工程、積層工程等の製造工程時に残留応力が発生し、磁気特性は劣化し、鉄損が増加することは一般的に知られている。本研究では、我々が考案した「二次電流加熱法」により、モータ積層コアを短時間で効率的に加熱することによって鉄損低減化を可能とし、既存のモータ製造工程にも容易に導入可能で、かつ運用も低コストな「熱処理システム」の開発を実現する(論文①)。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>図1 二次電流加熱法による熱処理装置</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>図2 JAXAプロジェクトで開発したモータ (©JAXA, 複数他機関と共同実施)</p> </div> </div> <p>●磁気センサを用いた金属劣化損傷評価システムに関する研究</p> <p>X線、超音波、磁気などを用いて構造物等の小さなき裂・傷を検出することは、非破壊検査手法としてある程度確立された技術である。本評価システムは、き裂・傷の検出から更に一歩進んで、構造物・金属製品に対して、磁気センサを用い、き裂発生前における金属劣化損傷の度合いを定量的に評価するシステムを実現する(論文②)。</p> <p>●工場・プラント設備の予知保全技術に関する研究</p> <p>金属劣化損傷評価システムを応用した予知保全技術に関する研究にも取り組んでいる。</p>
------	---




研究業績・アピールポイント	<p>論文, 受賞, 研究専門委員, 外部獲得資金を多数有する。以下は代表的なものである。</p> <p>●論文 ※「高効率・低損失モータ」と「材質評価」に関する代表的な論文</p> <p>①Yuji Tsuchida, Naoyuki Yoshino and Masato Enokizono, Reduction of Iron Loss on Laminated Electrical Steel Sheet Cores by means of Secondary Current Heating Method, IEEE Transactions on Magnetics, Vol. 53, No. 11, pp. 1-4(4pages), 2017.11.</p> <p>②槌田雄二, 松田泰輔, 榎園正人, 周波数掃引励磁スペクトログラム法による焼き入れ低炭素鋼の非破壊材質評価, 日本AEM学会誌, Vol. 20, No. 4, pp. 665-670, 2012.12.</p> <p>●受賞 ①日本AEM学会功労賞(2019), ②電気学会産業応用部門功労賞(2016), 他4件</p> <p>●研究専門委員・学会実行委員</p> <p>①委員長, 電気学会マグネティックス技術委員「電磁機器高性能化に向けた電力用磁性材料活用技術調査専門委員会」, 委嘱期間: 2020年5月1日~2023年3月31日</p> <p>※他研究専門委員, 学会理事, 編集委員, 参加者1,000名以上国内会議幹事など50以上</p> <p>●外部獲得資金 ①科学研究費補助金(基盤研究(C)), 二次電流加熱法によるモータ積層コア熱処理システムの開発, 平成29年度~令和4年度 ※研究代表者として科学研究費補助金獲得全8件, JAXA・もんじゅ関係の大型プロジェクト2件(大分大学研究代表者)など</p>
---------------	---

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・准教授	
氏名	中江 貴志 (Nakae Takashi)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、2010年3月	
SDGs目標		

研究分野	機械工学, 機械力学, 振動学
研究キーワード	自励振動, 摩擦振動, ブレーキ鳴き
研究内容	<p>●自動車用ディスクブレーキで発生する鳴きに関する研究</p> <p>ディスクブレーキは制動性, 放熱性が高く, 現在, 多くの自動車で使用されています。しかし, ブレーキをかけた際に, キーッという鳴きによる異音が発生します。本研究ではこの鳴きについてその発生メカニズムを調べています。(論文1.) 鳴きは自励振動と呼ばれる振動に分類されます。楽器のバイオリンの音もこの自励振動に分類され, 弓でバイオリンの弦をこすり, 弦が振動することにより音が発生します。対策として, 過去には動吸振器を適用し, 自励振動抑制のための最適な設計法を提案しています。</p> <p>●熱弾性を伴うディスクブレーキホットジャダーに対する自励振動からのアプローチに関する研究</p> <p>高速走行では, 右図に示すようなロータ表面に等間隔に熱が集中するホットスポットが発生し, ロータの熱膨張によってホットジャダーと呼ばれる自励振動問題が発生します。本研究では, ホットジャダーについて, 実験や解析から, その発生メカニズムを解明する研究を行っています。(論文2.)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>振動問題は機械の性能を大きく低下させるばかりでなく, 大きな事故につながる危険性も含んでいます。振動問題の解決により, 安全かつ省エネルギー技術の発展を目指しています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年, Effect of adding mass to rotor on in-plane squeal in automotive disc brake, MSTEC Web of Conference, VETOMAC XIV, Vol.211, Paper No. 13006.</li> <li>2021年, Fundamental study on the effect of pad length on automotive disc brake hot judder, Proceedings of ICSV27, Paper No.140.</li> </ol> <p>●受賞</p> <p>国際学会ICADME2019 Best Paper Award</p>





所属・職位	理工学部 共創理工学科 自然科学コース・准教授	
氏名	永野 昌博 (Nagano Masahiro)	
取得学位	博士(工学)、横浜国立大学、2003年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	生物学, 生態学, 生物多様性学
研究キーワード	生物多様性, レッドデータブック, DNA, サンショウウオ, 両生爬虫類, 土壤動物, 昆虫





研究内容	<p><b>【大分県の生物多様性の解明と保全】</b></p> <p>大分県に生息する生物（特に両生爬虫類）の多様性と生息状況を明らかにすることにより、大分県の絶滅危惧種の選定とランク付けを行う。また、それに基づいた絶滅危惧種の保全、野生生物と人間との持続可能な共存システムを考案する。</p> <p>特に外来生物による生態系の攪乱や在来種の遺伝子汚染の悪影響の低減・防止を目的とした、遺伝子雑種判別技術の開発やその技術を用いた応用的研究を進めている。また、希少な絶滅危惧種（流水性サンショウウオ）を探索するために環境DNAの用いた調査法を開発を進めている。</p> <p>また、2022年に大分県宇佐市・豊後高田市において新種のサンショウウオ（ニホウサンショウウオ <i>Hynobius nihouensis</i>）を記載し、他にも山口県、広島県、島根県、高知県、愛知県において新種のサンショウウオを記載するなどの分類と生物多様性に関する研究も行っている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="373 965 785 1361">  <p>Red Data Book レッドデータブックおおいた ～大分県の絶滅危惧種おそれのある最注目種～ オオイタサンショウウオ</p> </div> <div data-bbox="831 936 1243 1435">  <p>タワヤモリ</p> <p>大分県佐伯市におけるタワヤモリ（在来種）とニホンヤモリ（外来種）と雑種の分布状況</p> </div> </div> <p>大分県の絶滅危惧種の状況を編纂した「レッドデータブックおおいた」</p>
------	--



研究業績・アピールポイント	<p>2017, 大分市判田地域の魚類相. 大分自然博物誌-ブンゴエンス-、2巻, 13-25.</p> <p>2018, An integrative taxonomic analysis reveals a new species of lotic <i>Hynobius</i> salamander from Japan. <i>Herpetologica</i>, Vol.74, 159-168.</p> <p>2019, 祖母山尾平地域の哺乳類相. 大分自然博物-ブンゴエンス-、3巻,35-47.</p> <p>2020, 九州・奄美・沖縄の両生爬虫類, 東海あがや大学出版. pp.251.</p> <p>2021, Taxonomic Reassessment of the Izumo Lineage of <i>Hynobius utsunomiyaorum</i>: Description of a New Species from Chugoku, Japan. <i>Animals</i>, Vol.11, 1-20.</p> <p>2022, Taxonomic revision of the Yamaguchi salamander <i>Hynobius bakan</i>: Description of two new species from Chugoku and Kyushu, Japan. <i>Sci. Rept. Yokosuka City Mus</i>, 69, 1-17.</p>
---------------	---

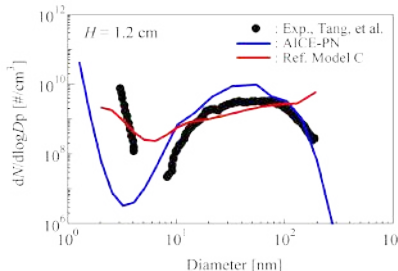
- 役員
- 大学院教育学研究科 教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等






所属・職位	理工学部 共創理工学科 自然科学コース・准教授	
氏名	西垣 肇 (Nishigaki Hajime)	
取得学位	博士 (理学)、京都大学、1996年5月	
SDGs目標	  	
研究分野	海洋物理学, 気象学	
研究キーワード	海流, 海洋力学, 微気象	
研究内容	<p>●海流の力学についての研究 黒潮・親潮などの海流について、現象の把握と力学機構の解明を目指しています。観測データや数値モデル・数値実験を用い、力学理論を適用して研究を進めています。(論文 1, 2)</p> <p>●沿岸海洋の流動についての研究 沿岸海洋の海水分布と流動について、その把握と力学機構の解明を目指しています。観測と数値モデル・数値実験を用い、力学理論を適用して研究を進めています。</p> <p>●地域の微気象の調査 大分県内の各地において、気温・降水量などの現地観測を行って、地域の気象と特有の微気象を調べている。(報告 3)</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.nature.oita-u.ac.jp/nishigaki/">https://www.nature.oita-u.ac.jp/nishigaki/</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Low ocean-floor rises regulate subpolar sea surface temperature by forming baroclinic jets. Mitsudera, H., Miyama, T., Nishigaki, H., Nakanowatari, T., Nishikawa, H., Nakamura, T., Wagawa, T., Furue, R., Fujii, Y., Ito, S. Nature Communications, 9, 1190, 2018.</li> <li>2. Subtropical Western Boundary Currents over Slopes Detaching from Coasts with Inshore Pool Regions: An Indication to the Kuroshio Nearshore Path. Hajime Nishigaki, Humio Mitsudera. J. Phys. Oceanogr., 42, 306-320, 2012.</li> </ol> <p>●報告</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>3. 祖母傾国定公園の気候：気温と降水量. 西垣肇, 平岡千波, 小原優香. 祖母傾国定公園自然環境学術調査報告書 (2020), 大分県, 21-32, 2020.</li> </ol>	

所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・准教授	
氏名	信岡 かおる (Nobuoka Kaoru)	
取得学位	博士 (薬学)、熊本大学、2008年7月	
SDGs目標	  	
研究分野	機能物質化学, 生物有機化学	
研究キーワード	イオン液体, 生体イオン媒体, 生体親和性材料, DDS, 不斉合成	
研究内容	<p><b>●機能性イオン液体の開発</b></p> <p>イオン液体”は室温で液体の“塩 (えん)”です。塩化ナトリウムが800度まで加熱しないと液体にならないことを考えると特殊な塩であることがわかるでしょう。イオン液体は塩であるため一般の有機溶媒とは異なり, 蒸発しにくく, 可燃性, 引火性もありません。さらに, 電気を流す, 生体分子を取り込むといった特徴も持つため, 安全で環境に優しい次世代媒体として期待されています。</p> <p>私たちは有機化学によりイオン液体にキラル, 蛍光, 刺激応答性など多彩な機能を与えたり, 生体分子からイオン液体を開発し, キラル医薬品を環境に優しく安全に作る方法や蛍光材料, 副作用の少ない薬剤輸送システム (DDS: ドラッグデリバリーシステム) などを開発しています。</p> <p><b>●イオン媒体を用いた生体分子の機能化</b></p> <p>DNAやタンパク質をはじめとする生体分子は生物を構成する重要な要素ですが, 材料化学の視点では自然界に豊富に存在するキラル超分子であり, 有望な機能性材料原料です。しかし, 私たちの体の大部分が水であるように, 生体分子の多くは水以外の溶媒に難溶なため, 実際に材料化することは困難です。私たちは水ではなくイオン媒体を用いることでこの問題を解決し, キラル材料や光機能性材料を通して, 医療分野では生体ナノイメージングや光免疫療法, 細胞実験材料として, 材料分野では3Dディスプレイや太陽電池への応用に取り組んでいます。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>私たちは, 物質・分子に着目する“ものづくり”の視点と, ヒトや生物の仕組みや機能に着目する“生命化学”の視点を融合した研究をしています。生体分子の機能材料化はこれらの分野の架け橋となり, 多くの材料化学者が生命化学・医薬化学へと参画可能となることで人類社会の発展に繋がると考えています。さらに, イオン液体の他に深共晶溶媒 (DES) も含めたイオン媒体に研究対象を広げ, 材料化学と生命化学の融合に取り組んでいます。</p> <p><b>●論文</b></p> <p>2020年, Constructing Double Helical DNA Supramolecule in Ionic Liquids, <i>Trans. Mat. Res. Soc. Japan</i>, vol.45, No.6, 191-196</p>	

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース（反応性ガス力学）・准教授	
氏名	橋本 淳 (Hashimoto Jun)	
取得学位	博士（工学）、九州大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	熱工学, 燃焼工学, 反応性ガス力学
研究キーワード	微粒子, すず, 数値計算, 層流燃焼速度, 消炎, 着火, 反応動力学, 燃焼, 代替燃料
研究内容	<p>●熱機関の設計計算に適用可能なPN予測モデルの開発</p> <p>健康被害対策, また材料として有効利用する観点から, 設計段階において利用可能な微粒子生成特性予測モデルの開発が強く求められている. 本研究では, 特に自動車用内燃機関を対象とし, 次世代合成燃料および潤滑油等から生じる微粒子の生成特性を予測可能なPNモデルの開発に取り組んでいる. さらに, 多様化する燃料の燃焼実験が可能な装置を開発し, モデル検証用データベースの構築に取り組んでいる. 図に, 本研究で提案したPN予測モデルと文献モデルについて, 粒径分布の予測計算を行った結果を示す. 横軸は粒径, 縦軸は個数濃度である. 文献モデルに対して, 提案モデルは化学種数が56%, 素反応数(物理衝突含む)が95%程度コンパクトであるものの, 良好な再現性を示すことがわかる.</p>  <p>●燃焼により生じる凝集粒子の酸化機構解明と予測モデルの構築</p> <p>ゼロエミッション社会においては, 微粒子低減を狙いとして機器が設計される. 微粒子は葡萄の房状の凝集体である. 微粒子径の評価モデルを提案するには, この凝集粒子の内部酸化およびそれに伴う断片化の記述が最も困難な課題である. そこで本研究では, 新たに構築する独自の実験手法を用い, 学術的な観点から凝集粒子酸化・断片化機構の解明を, 実用的な観点からゼロエミッション社会に貢献する微粒子予測モデル, および微粒子抑制手法の提案を行う. 検討中のモデルは, 一部前述のPNモデルに実装開始している.</p> <p>●自動車用超高効率エンジン研究の探索</p> <p>自動車産業界のカーボンニュートラル実現に向け, 火花点火機関の高効率低エミッション化を図ることを目的とし, 現状は計算機能力の不足により困難な燃焼のサイクル変動や微粒子排出の予測計算に挑戦している. 本研究では現在, 自動車用内燃機関技術研究組合(AICE)および宇宙航空研究開発機構(JAXA)との共同研究で, 富岳を用いた数値シミュレーションに取り組んでいる.</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●researchmap : <a href="https://researchmap.jp/hj1974x">https://researchmap.jp/hj1974x</a></p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年, PAH成長にセクショナル法を適用したガソリンサロゲート燃料用すず生成モデル(第2報), 橋本淳, 渡邊竜之介, 田上公俊, 石井一洋, 秋濱一弘, 自動車技術会論文集, 51巻, 6号, pp. 991-998.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2019年, 基礎からわかる自動車エンジンのシミュレーション, 草鹿仁, 金子成彦, 高林徹, 溝淵泰寛, 南部太介, 尾形陽一, 高木正英, 川内智詞, 小橋好充, 周蓓霓, 堀司, 神長隆史, 森井雄飛, 橋本淳, コロナ社</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2015年, 日本燃焼学会 2015年度奨励賞</li> </ol>

所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・准教授	
氏名	原田 拓典 (Harada Takunori)	
取得学位	博士 (学術)、東京大学、2002年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	キラル光学
研究キーワード	キラリティ、円偏光発光、アップコンバージョン、プラズモン、偏光分光、アミロイド線維
研究内容	<p>●アミロイド線維分解に関する研究 生体透過性の高い近赤外光をトリガーとしたアミロイド線維分解カスケード機構に関する研究。 (“Decomposition of amyloid fibrils by NIR active upconversion nanoparticles”, <i>Photochem. Photobiol. Sci.</i>, <b>19</b>, 29-33 (2020)) ※本カスケードは近赤外光のアップコンバージョンから光増感反応プロセスを経て生じた活性酸素によりアミロイド線維分解を生じる一連プロセスである。</p> <p>●高機能円偏光発光 (CPL) 材料の創製 円偏光発光材料は高機能光学材料として現在、期待が寄せられている物質である。エキシトンカップリングや局在表面プラズモン共鳴の局所的増強電場が光学特性に与える影響を調査し、円偏光発光特性強化を目指している。 (“Plasmon-Resonance-Enhanced CPL for Self-Assembly Meso-tetrakis(4-sulfonatophenyl)porphyrin-Surfactant Complex interacted with Ag nanoparticles”, <i>Chem. Commun.</i>, <b>50</b>, 11173-11176 (2014).)</p> <p>●キラル分光システムの開発 非溶液状態や巨視的異方性を示す試料の正しいキラルな光学特性 (円二色性、円偏光蛍光) を取得することを可能にする装置や偏光解析法の開発に関する研究。(論文1. 2. 特許1) ※関連リンク：<a href="https://www.appc.oita-u.ac.jp/kinetics/hp/research-harada/">https://www.appc.oita-u.ac.jp/kinetics/hp/research-harada/</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>1. “新たな学際分野開拓は、新規分析・解析装置の開発から”をモットーに、非溶液・凝縮系など光学異方性を示す試料のキラリティ測定が可能な次世代型分光計開発を進めている。ストークスミューラー行列理論に基づく偏光解析法を考案し、開発装置・偏光解析法を通して新しいキラル機能物質の材料開発や物性評価を展開している。</p> <p>●論文 1. 2020年、“Chiroptical spectrophotometer and analytical method for optically anisotropic samples”, <i>Rev. Sci. Instrum.</i>, (2020) 2. 2018年、“Application of a polarized modulation technique in supramolecular science: Chiroptical measurements for optically anisotropic systems” <i>Polym. J.</i>, <b>50</b>, 679-687 (2018)</p> <p>●特許 1. 2018年、“円二色性スペクトル及び円偏光蛍光を同一の光学系で測定する方法および装置”, 特許6268430</p>

役員

大学院  
教育学位  
教育学部

経済学部




医学部

医学部  
附属病院

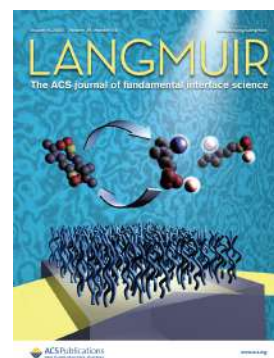
理工学部

福祉健康科学部

その他学  
内施設等

所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・准教授	
氏名	檜垣 勇次 (Higaki Yuji)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、2006年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	高分子化学, 界面・コロイド化学
研究キーワード	親水性高分子, 相分離, 防汚, 接着
研究内容	<p>●両親水性ブロック共重合体の水性相分離に関する研究</p> <p>細胞内液-液相分離により形成される液滴は動的な分画場として生命において重要な役割を担っており, 水性環境における高分子の相分離現象への関心が高まっている。我々は, 親水性高分子鎖である双性イオン高分子で構成される両親水性ブロック共重合体が, 水性環境下で自己集合して秩序性の高い格子状周期構造を形成する現象を見出した。さらに, この分子構造体が双性イオン特異的相互作用により形成されており, 浸透圧に起因する水の選択分配により高分子濃度に応じて構造転移することを見出している。生体適合性に優れた双性イオン高分子が形成するナノスケールの動的な分画場として, 先進医用材料, 診断デバイス, 送薬分子システムとしての応用が見込まれる (論文 1, 2)。関連成果として, 海洋付着生物の接着タンパク質が硬化過程で形成する液-液相分離構造を軟X線顕微鏡で可視化した (論文 3)。</p> <p>●親水性高分子薄膜の水和状態に関する研究</p> <p>固体表面に共有結合で固定化された親水性高分子の薄膜 (ポリマーブラシ) について, その水性環境における水和状態を主に中性子反射率測定に基づき研究している。優れた生体適合性を示す双性イオン高分子の薄膜が, 水中において双性イオンの双極子相互作用による会合により凝集したゲル状膨潤膜を形成しており, 水和膨潤度の低い固体界面層, 膨潤層, 散漫な液体界面層からなる不均質構造であることを示した。さらに, 共存イオンによる静電遮蔽が双性イオンの凝集解離を誘導し, 膜が高度に水和する現象を明らかにした (論文 4, 5)。本研究は, 水処理分離多孔質膜, 意匠鋼板樹脂表面の親水化表面改質技術として応用展開されており, 研究成果の一部は特許出願されている。</p> <p>* 関連リンク : <a href="https://yuhigakki.wixsite.com/mysite">https://yuhigakki.wixsite.com/mysite</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文 (主要論文を抜粋)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Akane Shimizu, Emi Hifumi, Ken Kojio, Atsushi Takahara, Yuji Higaki*, <i>Langmuir</i>, <b>37</b>, 14760-14766 (2021)</li> <li>2. Masaya Takahashi, Akane Shimizu, Shin-ichi Yusa, Yuji Higaki*, <i>Macromol. Chem. Phys.</i>, <b>222</b>, 2000377 (2021)</li> <li>3. Yuji Higaki*, Kazutaka Kamitani, Takuji Ohigashi, Teruaki Hayakawa, Atsushi Takahara*, <i>Biomacromolecules</i>, <b>22</b>, 1256-1260 (2021)</li> <li>4. Yuji Higaki, Motoyasu Kobayashi, Atsushi Takahara*, <i>Langmuir</i>, <b>36</b>, 9015-9024 (2020)</li> <li>5. Tatsunori Sakamaki, Yoshihiro Inutsuka, Kosuke Igata, Keiko Higaki, Norifumi L. Yamada, Yuji Higaki*, Atsushi Takahara*, <i>Langmuir</i>, <b>35</b>, 1583-1589 (2019)</li> </ol> <p>●受賞 (主要受賞を抜粋)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. IUMRS-ICAM2017 Young Scientist Award GOLD AWARD (2017.8)</li> <li>2. 公益社団法人高分子学会 高分子研究奨励賞 (2014.5)</li> </ol>





所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース・准教授	
氏名	姫野 由香 (Himeno Yuka)	
取得学位	博士(工学)、大分大学、2004年9月	
SDGs目標	  	









研究分野	建築・都市計画, 地域・農村計画, 都市設計
------	------------------------

研究キーワード	都市, 観光, 景観, 再生, まちづくり・マネジメント, 離島
---------	----------------------------------

研究内容	<p><b>1. メカニズム分析による持続可能な観光・景観まちづくりに関する研究</b>          景観の成り立ちや観光地としての変遷を分析することで、持続可能な景観まちづくりや観光地形成の方策を研究している。  <b>【実績】科学研究費</b>：観光資源の戦略的整備のための景観解析・整備システム開発／景観まちづくり活動の持続可能性とその要因分析／観光まちづくりのための計画技術の体系化と教育開発に関する研究／他2件)、<b>受託研究事業</b>：文化的景観に関する学術調査(別府市、豊後大野市、姫島村)／条例や計画の改定・策定に資する調査研究(大分県、大分市)</p>	
	<p><b>2. 市街地における街路・空き地・空き家などのストック活用マネジメント研究と設計</b>          地域再生の拠点となる空き地・空き家、文化財や街路、公共不動産の利活用に関する設計要件・体制・制度のあり方などを研究している。  <b>【実績】科学研究費</b>：歩行者の回遊行動誘発空間の創造による時間消費型の中心市街地の再構築に関する研究)、<b>受託研究事業</b>：地方都市における民間投資を促進する新しい都市再生事業のモデル提案(財)民間都市再生機構)／街路・公園・空き地・空き家の利活用に関する調査再生事業(大分市、杵築市協議会、津久見市協議会、豊後大野市)、<b>共同研究</b>：都市計画MP・立地適正化計画策定、エリアマネジメントに関する調査研究(2社)</p>	 模型を利用した設計ワークショップ  街路設計案のイメージ図
	<p><b>3. 離島地域や小集落の持続可能性要因に関する研究</b>          離島や小集落や団地など特定エリアの持続可能性を支える要件を、先進事例分析から追及する研究をしている。  <b>【実績】科学研究費</b>：離島集落の構成と社会関係資本の変遷にみる日本型サステナブルコミュニティの原則／住み継ぎの段階性に着目した集落を継承する少人数社会システムの構築に関する研究／他2件、<b>受託研究事業</b>：規模・基盤・産業・行政施策の経年変化にみる離島の構造特性と類型化—地方における自立的地域運営・経営に関する研究—(国土交通省・国土計画協会)／離島や小集落における持続可能な生活環境を支える生業や物流の維持可能性に関する調査事業(大分県、津久見市、玖珠町商工会、P団地管理組合)</p>	

研究業績・アピールポイント	<p>総合計画、都市計画MP、立地適正化計画、景観計画、観光基本計画、文化財(景観・建築物)保全活用計画に関する自治体支援。景観まちづくり活動、拠点再生プロジェクト、住民参加による公共不動産の利活用に関する取り組みなどの活動支援が可能です。関係する<b>【実績】</b>については、一部を「研究内容」欄に記載していますが、詳細は研究室のHPをご覧ください。<a href="http://www.arch.oita-u.ac.jp/urban/lab/">http://www.arch.oita-u.ac.jp/urban/lab/</a></p> <p><b>【研究内容の応用例】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地理情報システムを活用した各種統計データ解析や先行事例分析による対象の評価・提案</li> <li>・アンケート等の調査設計や統計ソフトを活用した各種アセスメント、計画KPIの設定</li> <li>・ワークショップを活用した住民参加や協働による参加型まちづくりの基盤づくり、事業化の支援</li> </ul>
---------------	--

役員  
 大学院教育学研究科 教育学部  
 経済学部  
 医学部  
 医学部附属病院  
 理工学部  
 福祉健康科学部  
 その他学内施設等

所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・准教授	
氏名	平田 誠 (Hirata Makoto)	
取得学位	博士 (工学)、早稲田大学、1992年3月	
SDGs目標	      	
研究分野	化学工学, 資源・エネルギー工学, 食品工学	
研究キーワード	発酵, 再資源化・リサイクル, ゼロエミッション, バイオマス, 機能性食品	
研究内容	<p>環境やエネルギー問題について、実験と理論の双方からアプローチし、安全・安心で効率的なシステムを実用化することを目指しています。物理的・化学的・生化学的手法のすべてを駆使し、食品廃棄物の再資源化などのゼロエミッション化、微生物を利用した水の浄化などの他、大分県産品を活用した新規食品開発にも取り組んできています。</p> <p>1. 有機性廃棄物からの乳酸生産          乳酸は、腐敗を防止する成分として古くから食品などに使われており、近年では化石資源の代替として生分解性プラスチックや有機溶媒の原料に利用されています。本研究では、廃バイオマスや生ごみなどの有機性廃棄物を原料として効率的に乳酸を発酵生産する技術について研究しています。これまでに、カビと乳酸菌を用いてそれぞれによる発酵に適した装置・操作法を検討するとともに、溶媒抽出や電気透析を用いた乳酸の効率的回収法についても開発しています。蛋白質の廃棄物を効率的に分解する方法を開発し、様々な有機性廃棄物が発酵の栄養源として有効利用できることも明らかにしています。また、乳酸発酵で得られた知見を活用してメタン発酵によるエネルギー回収にも取り組んでいます。</p> <p>2. 生活廃水・産業廃水の効率的処理          有機物、窒素やリンを含む生活廃水の活性汚泥処理、重金属や染料を含む廃水の処理、独立栄養細菌を用いた脱窒、河川水中リンの吸着除去、溶媒抽出法を用いた汚染物質の除去・回収などについて効率的な手法を提案してきています。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>これまでに下記の自治体委員会の委員長などを歴任し、研究を通して得た知識を地元還元するとともに、地域における課題などの情報収集に役立てています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大分県認定リサイクル製品認定委員会 副委員長</li> <li>・大分県リサイクル施設等支援事業 審査委員長</li> <li>・宇佐市新エネルギービジョン策定委員会 委員長</li> <li>・宇佐市緑の分権改革 事業総括</li> <li>・玖珠町バイオマスタウン構想策定委員会 アドバイザー</li> <li>・竹田市新エネルギービジョン策定委員会・バイオマスタウン構想策定委員会 委員長</li> <li>・おおいた食料産業クラスター協議会 コーディネーター</li> <li>・6次産業化おおいたサポートセンター サポート人材</li> </ul>	

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・准教授	
氏名	福永 道彦 (Fukunaga Michihiko)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、2011年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	機械工学
研究キーワード	設計工学, 生体力学, 身体動作, 関節運動
研究内容	<p>学生の頃、「正座ができる人工膝関節」の開発を研究課題として以来、関節運動や、それと関連する身体動作の測定、筋骨格系の力学解析、その応用としての動作補助デバイスや理学療法補助デバイスの開発に取り組んできました。</p> <p>人工膝関節の設計評価は、実際に使う前の段階で、安全性と有用性を証明する必要があるため、根本的な部分をシミュレーションに頼ることになります。普段、膝関節にどんな力がかかっているか、どのように運動しているか、そんな基本的な情報ですら直接測定することは困難です。じゃあシミュレーションなら簡単かということ、残念ながらそうでもない。人間の体を動かす筋肉は、いわゆる冗長設計がなされていて、身体運動の自由度より筋の本数が多く、力学的条件のみから筋力を算出することは不可能なのです。個人差だって相当あるはず。筋力が分からなければ当然、関節にかかる負荷も分かりません。そもそも、測定するのが困難なのに、どうしてシミュレーションの妥当性が評価できましようか！？新型人工関節の安全性と有用性は、つきつめて言えば、使ってみないと分からないのです。人間の筋発揮戦略みたいなものに何かしらの道筋が見いだせれば、もう少しでもリアルな、より有用なシミュレーションができるのではないかと考え、そのあたりが現在の興味です。</p> <p>現在、この問題を解くためには、合理的に見える仮定が使われています。上ではずいぶん文句を言いましたが、これとて捨てたものではなく、限界を理解していれば有効活用することが可能です。要は、身体動作と外力(床反力など)を測定できれば、筋骨格系にかかっている内力を推定できるので、医療や労災、スポーツに教育、その他広範な応用が可能です。</p> <p>目的を限定すれば、より小さいシステムでの身体動作解析や外力の測定も可能です。このような、現有技術の活用も、我々の重要な研究テーマとなっています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>以上のような興味のもと、下記のプロジェクトを主宰or参加してきました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2012-2013 圧力分布測定装置を援用した膝関節力の算出, 科学研究費 若手研究 (B)</li> <li>・2014 深屈曲型人工膝関節の海外向け仕様としてのモジュラーシステムの構築, 科学研究費 挑戦的萌芽研究 (研究分担者)</li> <li>・2016 作業動作を測定するウェアラブルセンサシステムの開発, JST研究成果展開事業 企業ニーズ解決試験</li> <li>・2016-2018 膝深屈曲動作の動力学に関する基礎研究, 科学研究費 若手研究 (B)</li> <li>・2019-2022 人工知能は筋の冗長性問題をどう解くか?, 科学研究費 基盤研究 (C)</li> <li>・2019-2022 生体の関節運動を模擬した支援機器は身体負担を軽減できるか?, 科学研究費 基盤研究 (B) (研究分担者)</li> </ul>

役員

大学院  
教育学部  
教育学部  
研究科

経済学部



医学部

医学部  
附属病院

理工学部




福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・准教授	
氏名	坊向 伸隆 (Boumuki Nobutaka)	
取得学位	博士 (理学)、島根大学、2005年3月	
SDGs目標		

研究分野	数学(微分幾何学)、リー群の関数空間における表現理論、等質空間の分類理論
研究キーワード	実半単純リー群の等質多様体
研究内容	<p>●連結実半単純リー群の等質擬ケーラー多様体に関する研究</p> <p>連結実半単純リー群<math>G</math>に対して、<math>G</math>の等質擬ケーラー多様体<math>M</math>は楕円(型随伴)軌道として実現され、逆に、楕円軌道<math>G/L</math>は<math>G</math>の等質擬ケーラー多様体になる(ただし、ここではケーラー多様体を特別な擬ケーラー多様体だと考えている)。従って、(例えば)群<math>G</math>の中心が自明であるという仮定のもとで、等質擬ケーラー多様体<math>M=G/L</math>はある複素旗多様体<math>G_c/Q</math>内の単連結領域<math>D</math>と<math>G</math>-同変実解析的微分同型となる、</p> $l : M=G/L \rightarrow D \subset G_c/Q, \quad gL \rightarrow gQ.$ <p>上記<math>l</math>により<math>M=G/L</math>を<math>G_c/Q</math>内の領域とみなすことで<math>G/L</math>を等質複素多様体だと考える。そして、有限次元複素線形空間<math>V</math>と正則準同型写像<math>\rho:Q \rightarrow GL(V)</math>から複素旗多様体<math>G_c/Q</math>上の等質正則ベクトル束<math>G_c \times_{\rho} V</math>を定め、その束を<math>G/L</math>へ制限することによって等質擬ケーラー多様体<math>G/L</math>上の正則ベクトル束<math>l^*(G_c \times_{\rho} V)</math>を得る。</p> $\begin{array}{ccc} l^*(G_c \times_{\rho} V) & & G_c \times_{\rho} V \\ \downarrow & l & \downarrow \\ G/L & \rightarrow & G_c/Q \end{array}$ <p>このとき、ベクトル束<math>l^*(G_c \times_{\rho} V)</math>の正則断面全体がなす複素線形空間(=関数空間)<math>W</math>において、連結実半単純リー群<math>G</math>の連続表現および複素半単純リー代数<math>Lie(G_c)</math>の表現が自然に定義される、</p> $G \times W \ni (g, \psi) \rightarrow \chi(g)\psi \in W, \quad Lie(G_c) \ni A \rightarrow A^* \in End(W).$ <p>ここで線形空間<math>W</math>の位相は半ノルムの可算族によって定まる局所凸位相である。連結実半単純リー群の連続表現や複素半単純リー代数の表現などを活用しつつ、複素線形空間(=関数空間)の研究を推進している。ちなみに、連結実半単純リー群の等質擬ケーラー多様体<math>M</math>の典型例として、複素射影空間<math>CP^n</math>、複素グラスマン多様体<math>M_{n,k}(C)</math>、コンパクト型エルミート対称空間<math>G_u/K</math>、複素平面内の開単位円盤<math>D^1</math>や上半平面<math>H^1</math>、複素ユークリッド空間内の対称有界領域<math>D</math>などが挙げられる。また、複素線形空間<math>W</math>の例としては、<math>M</math>上の正則関数全体がなす複素線形空間<math>O(M)</math>や、<math>M</math>上の正則ベクトル場全体がなす複素線形空間<math>\Gamma(T^{1,0}M)</math>などが挙げられる。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●受賞 2013年2月 2012年度数学研究会特別賞(大阪市立大学数学研究会)受賞</li> <li>●外部資金 2017年4月-2020年3月 基盤研究C(日本学術振興会)獲得</li> <li>●共著論文 2019年12月 N.Boumuki and T.Noda, Paraholomorphic cohomology groups of hyperbolic adjoint orbits, Tsukuba Journal of Mathematics, Vol.43, No.2, pp.113-143.</li> </ul>



所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・准教授	
氏名	緑川 洋一 (Midorikawa Yoichi)	
取得学位	博士(工学)、法政大学、1998年3月	
SDGs目標	 	








研究分野	信号処理
研究キーワード	音声認識、雑音環境下、ウェーブレット変換、口唇画像

研究内容	<p>・ 雑音環境下の音声認識のウェーブレット変換を用いた改善に関する研究</p> <p>近年、様々な場面で音声認識の技術は使われ製品などに組み込まれはじめている。また、音声認識による入力是非接触型である点なども大きな特徴であり、手などによる接触型の入力を利用しなくても入力ができ、他の作業をしながらの入力や環境福祉分野をはじめとする応用分野も限りなくあり、今後ますます必要とされる重要な技術の1つである。しかし、現段階では、条件の良い環境下で音声認識は有効で悪条件下での認識が難しい。このような悪条件の環境下、特に雑音環境下での音声認識についての改善に我々は着目し、ケプストラム法を基本としたスペクトルの変形などによる雑音環境下での音声認識の改善法について研究を行ってきた。しかしながら、まだ改善の余地がある。このため我々は、周波数情報と時間情報を同時に解析できるウェーブレット変換を利用することにより、雑音が重畳した信号から特徴を抽出することなどを行い認識率の更なる向上を狙うことを目指して研究している。</p> <div data-bbox="707 987 1166 1330" data-label="Figure"> </div> <p style="text-align: center;"><b>雑音環境下の音声の認識</b></p> <p>・ 雑音環境下の音声認識の口唇画像利用による改善に関する研究</p> <p>口唇付近の画像を利用し、画像処理技術を用いて解析することで、雑音環境下などで音声信号のみでは認識の難しい場合などに対応するための音声認識技術の基礎的研究を行う。これにより、雑音環境下などの悪条件下や静寂で音の出せないような静穏な環境下での非接触型の音声入力などできることなどを期待し基礎的研究を行う。</p>
------	---




研究業績・アピールポイント	<p>雑音環境下の音声認識の認識率改善について研究を行っているが、今後研究が進むと他のさまざまな場面で利用されている信号について、雑音が重畳した信号に関しての信号パターン認識の改善などにもつながると思われる。また今後研究が進むにつれ画像処理技術の進展も期待ができるとされる。</p>
---------------	---

- 役員
- 大学院教育学研究科 教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

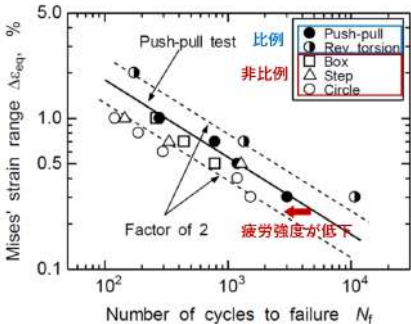


所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・准教授	
氏名	守山 雅也 (Moriyama Masaya)	
取得学位	博士 (理学)、筑波大学、1998年7月	
SDGs目標	     	

研究分野	機能性有機・高分子材料, 光化学
研究キーワード	光 有機 高分子 プラスチック 繊維 植物由来 表面改質 ゲル タンパク質 炭素
研究内容	<p>材料の機能は構成分子の化学構造や形, 集合構造 (集合状態), 分子が置かれる環境に依存する。これらの関係を分子レベルで理解する基礎研究の結果を基に, 分子の状況をコントロールすることによって機能を最大限発揮できる材料開発を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 光で可逆的に色や機能が変化する色素材料の開発。</li> <li>2. 生体分子と選択的に結合する新規色素の開発。</li> <li>3. 高性能オイルゲル・ヒドロゲル化剤および光応答性・発光性ゲルの開発。</li> <li>4. 光で接着力をコントロールできる接着剤の開発。</li> <li>5. プラスチックや繊維の接着性, 染色性, 低摩擦性, 抗菌性の付与や他の材料との親和性を向上させる表面改質。</li> <li>6. 燃料電池用炭素電極の表面改質と性能向上による新エネルギー技術の開発。</li> <li>7. 竹由来セルロースナノファイバー, リグニンなどを使った脱炭素・低環境負荷社会を実現する新材料の開発。</li> <li>8. タンパク質やアミノ酸, 糖などの生体分子や植物成分など天然物の分光学的な手法による構造, 機能分析。</li> </ol>
研究業績・アピールポイント	<p>最近主に以下の研究プロジェクト等で研究を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大分大学認定研究チームBURST「おおいた竹取物語オープンイノベーションセンター」メンバー (2018年～)</li> <li>・科学技術振興機構 (JST) 大学発新産業創出プログラム (START)「竹の解織・ナノ化技術によるCNFの開発」分担研究者 (2018～2021年)</li> <li>・大分大学学長戦略経費 (重点領域研究推進プロジェクト)「大分大竹CNFの宇宙利用への展開を目的とする基礎研究」分担研究者 (2020年), 「大分大竹CNFの人工衛星部品利用への研究開発」分担研究者 (2021年)</li> <li>・科学研究費補助金・基盤C「位相反転変調による革新的変更解析法の構築」分担研究者 (2021年～)</li> <li>・新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) 燃料電池等利用の飛躍的拡大に向けた共通課題解決型産学官連携研究開発事業「触媒担体表面の化学修飾技術によるPEFC超高機能界面の創出」分担研究者 (2021年～)</li> <li>・JST A-STEP 研究分担2件 (2021年), 地元企業との共同研究 (2015年～), 宇宙航空研究開発機構 (JAXA) との共同研究 (2021年～) 等</li> </ul>

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・准教授	
氏名	山本 隆栄 (Yamamoto Takaei)	
取得学位	博士 (工学)、立命館大学、1997年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	材料強度学
研究キーワード	低サイクル疲労、非比例多軸負荷、水素脆化

研究内容	<p>・非比例多軸低サイクル疲労に関する研究</p> <p>非比例多軸負荷とは主応力や主ひずみの軸方向が時間とともに変化する負荷形態で、機械や構造物で頻繁に見られる。非比例多軸負荷を受ける金属材料の低サイクル疲労強度は、主応力や主ひずみの軸方向が時間とともに変化しない単軸負荷や比例多軸負荷を受ける場合と比べて、著しく低下することが知られている。したがって、機械や構造物の安全性や信頼性を保証するためには、非比例多軸負荷の影響を考慮した金属材料の低サイクル疲労強度評価法が必要となる。そこで本研究では、非比例多軸負荷の影響を考慮した金属材料の低サイクル疲労強度評価法を確立するための基礎研究を行っている。</p> <p>・非比例多軸低サイクル疲労に及ぼす水素の影響に関する研究</p> <p>CO<sub>2</sub>の排出を伴わない極めてクリーンな再生可能エネルギーとして水素が注目されているが、水素は金属材料の疲労寿命を著しく低下させる「水素脆化」を引き起こすことが知られている。高圧水素貯蔵タンクや配管の構造不連続部では、繰返し非比例多軸負荷が生じることが多いため、本研究では水素環境中で非比例多軸負荷を受ける金属材料の低サイクル疲労強度についての研究を行っている。</p>	
------	---	---

研究業績・アピールポイント	<p>非比例多軸低サイクル疲労試験を実施するためには、特殊な試験装置と高度な実験技術を必要とするため、実施できる研究機関は限られている。</p> <p>・論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Ogawa, F., Itoh, T., &amp; Yamamoto, T. (2018). Evaluation of multiaxial low cycle fatigue cracks in Sn-8Zn-3Bi solder under non-proportional loading. <i>International Journal of Fatigue</i>, 110 (September 2017), 215-224. <a href="https://doi.org/10.1016/j.ijfatigue.2018.01.021">https://doi.org/10.1016/j.ijfatigue.2018.01.021</a></li> <li>Itoh, T., Yamamoto, T., &amp; Ogawa, F. (2017). Multiaxial Low Cycle Fatigue Life of Sn-8Zn-3Bi Solder under Non-proportional Loading. <i>Journal of the Society of Materials Science, Japan</i>, 66 (2), 166-172. <a href="https://doi.org/10.2472/jsms.66.166">https://doi.org/10.2472/jsms.66.166</a></li> <li>Yamamoto, T., Itoh, T., Sakane, M., &amp; Tsukada, Y. (2012). Creep-fatigue life of Sn-8Zn-3Bi solder under multiaxial loading. <i>International Journal of Fatigue</i>, 43, 235-241. <a href="https://doi.org/10.1016/j.ijfatigue.2012.04.007">https://doi.org/10.1016/j.ijfatigue.2012.04.007</a></li> </ol>
---------------	---

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部





医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・准教授	
氏名	渡邊 紘 (Watanabe Hiroshi)	
取得学位	博士 (理学)、中央大学、2010年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	数理解析学関連、基礎解析学関連
研究キーワード	非線形解析学、偏微分方程式論、発展方程式論
研究内容	<p>● 放物型・双曲型保存則の数学解析</p> <p>放物型・双曲型保存則は非線形移流と非線形拡散を伴う現象を記述する(偏)微分方程式であり、形式的には質量保存則として導出される。不連続性の発生や平滑化の喪失などの特異性を持つことが特徴であり、古典的な意味で解を定義することが困難である。一方で気体力学、多孔性媒質流れ、固体液体相転移現象等の様々な物理現象へ応用可能である。</p> <p>本方程式を非線形解析学と関数解析学の観点から研究し、「一般化された意味の解(エントロピー解)が存在すること」、「エントロピー解が一意的であり、初期値に連続的に依存すること」、「エントロピー解の定性的性質を得ること」を目的としている。</p> <p>近年では、衝撃波や希薄波に相当する特殊な解を構成し、エントロピー解の挙動の解析に応用した(論文1.3)。</p> <p>● 結晶粒界現象を記述する数学モデルの数学解析</p> <p>2000年にKobayashi-Warren-Carterにより、結晶粒界現象を記述する数学モデルが重み付き全変動汎関数の勾配流として導出された。未知関数(解)は結晶の配向度と方位角を表す。結晶方位角を表す解は一般に不連続関数となるため、数学的な解析が困難である。</p> <p>本モデルを変分法の観点から研究し、「一般化された意味の解(エネルギー消散解)が存在すること」、「エネルギー消散解の挙動を数学的に捉えること」、「一意的に存在する解のクラスを構成すること」を目的としている。</p> <p>近年では、ディリクレ境界値問題(論文2)や熱方程式と連立させたモデル(論文4)を考察した。特に論文2では、1次元定常問題の解構造を解明し、定常解の特異性は不連続性のみであることを証明した。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://researchmap.jp/h-watanabe">https://researchmap.jp/h-watanabe</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. H. Watanabe, Particular solutions to one-dimensional Cauchy problems for scalar parabolic-hyperbolic conservation laws and their applications, <i>Nonlinear Differential Equations and Applications NoDEA</i>, 29 (2022), Article number: 49.</li> <li>2. S. Moll, K. Shirakawa and H. Watanabe, Kobayashi-Warren-Carter type systems with nonhomogeneous Dirichlet boundary data for crystalline orientation, <i>Nonlinear Anal.</i> 217 (2022), Paper No. 112722.</li> <li>3. H. Watanabe, Traveling waves to one-dimensional Cauchy problems for scalar parabolic-hyperbolic conservation laws, <i>J. Differential Equations</i>, 286. (2021), 474-493.</li> <li>4. H. Watanabe and K. Shirakawa, Energy-dissipation in a coupled system of Allen-Cahn type equation and Kobayashi-Warren-Carter type model of grain boundary motion, <i>Mathematical Methods in the Applied Sciences</i> 43(17), (2020), 10138-10167.</li> </ol>

所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・講師	
氏名	池部 実 (Ikebe Minoru)	
取得学位	博士(工学)、奈良先端科学技術大学院大学、2011年3月	
SDGs目標		

研究分野	情報工学
研究キーワード	ネットワーク運用技術, ネットワークセキュリティ, 分散処理システム

研究内容	<p>●ネットワーク運用技術に関する研究</p> <p>一般ユーザがネットワークを安定的に利用するためには、その裏側で安定的にネットワークシステムを運用することが必要となる。ネットワーク機器同士がどのように接続しているのか、LAN上を流れるトラフィックがどのようになっているのか、コンピュータをネットワークに接続した際に認証して利用者を把握することなどがあげられる。このような点に着目して、日々のネットワーク運用管理に取り組みながら、同時に生きているネットワーク上で研究開発に取り組み、改善に取り組んでいる。組織内のユーザがフィッシングメールに記載しているURLをクリックした際に、悪意のあるサイトへの接続する仕組みを調査するシステムを構築しユーザの安全を守る研究開発にも取り組んでいる(論文1.)。</p> <p>●ネットワークセキュリティに関する調査・分析</p> <p>ダークネット(組織に割り当てられたIPアドレスのうち組織内で未使用のもの)に対して、通常では使用されていないためパケットは到達しないはずだが、観測してみると攻撃性のあるパケットが常時大量に到達している。このようなパケットを分析することにより、異常検知や攻撃のトレンドを把握できるような仕組みについて研究している。また、ハニーポットと呼ばれる攻撃者にわざと攻撃させるようにして、攻撃方法などを分析する研究にも取り組んでいる。これらの環境で攻撃を観測し、サーバに対する攻撃を検知するシステムの研究に取り組んでいる(論文2.)。</p> <p>●分散処理システムの開発</p> <p>様々なシステムを運用する中で、日々蓄積されるログデータを効率的に扱うためのシステム開発についても取り組んでいる。</p> <p>情報基盤システム学研究室Webサイト：<a href="http://www.cs2.csis.oita-u.ac.jp/">http://www.cs2.csis.oita-u.ac.jp/</a></p>
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020年, 佐保航輝, 池部実, 吉崎弘一, 吉田和幸, DNSシンクホールを用いた悪意あるFQDNに対する通信観測システムの運用, 情報処理学会デジタルプラクティス(Web), Vol.11, No.3, pp.589-608</li> <li>2017年, 清水光司, 小刀稱知哉, 池部実, 吉田和幸, SSHパスワードクラッキング攻撃におけるデータサイズを用いる検知手法の提案と運用評価, 情報処理学会論文誌 Vol.58, No.3, pp.695-707</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2017年, 情報処理学会論文誌ジャーナル特選論文表彰</li> <li>2019年, 情報処理学会インターネットと運用技術研究会 藤村記念ベストプラクティス賞</li> </ol>
---------------	---

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部





医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部



その他学内施設等



所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・講師	
氏名	内田 俊 (Uchida Shun)	
取得学位	博士 (理学)、早稲田大学、2016年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	非線型発展方程式
研究キーワード	極大単調作用素、凸解析、劣微分、多価作用素、放物型方程式、特異拡散現象、流体現象
研究内容	<p>・非線型発展方程式、特に劣微分作用素の抽象理論に関する研究</p> <p>物質・情報が時々刻々と「散らばり運ばれ伝わる」様子は、微分方程式と呼ばれる数理モデルで表現することができます。このような数理モデルを「エネルギーを最小化させるように状態が推移する」という物理学の原理に則って抽象化した「凸汎関数の劣微分作用素を含んだ非線型発展方程式」が私の研究対象であり、特に数理モデルの妥当性（解の存在や一意性）の検証、時間周期解やアトラクターの構成法に興味があります。</p> <p>また得られた抽象理論や技法を、以下の具体的な現象を記述する方程式に応用しました：</p> <p>A. <u>double-diffusive convection system</u> への応用</p> <p>スポンジなどの多孔質媒質に含まれている液体内の温度・溶質濃度の拡散と対流が同時に起こる現象 (double-diffusive convection) を表現する偏微分方程式系について考察しました。特に海洋現象への応用を踏まえて非有界領域上での解析を中心に行い、任意の初期状態や大きな外乱に対しても方程式系が解を持つことを証明しました (業績 2, 3 など)。</p> <p>B. <u>二重非線型放物型方程式</u> への応用</p> <p>線型の熱方程式は「無限のスピードで粒子が移動する」「温度が有限時刻で一定値にならない」といった現実にはそぐわない性質を持つことが知られています。より厳密な拡散現象の再現を目指したモデルとして二重非線型放物型方程式について考察し、この可解性を示しました (業績 1)。現在は「絶滅現象」と呼ばれる解の性質について研究しています。</p> <p>C. <u>ハイパーグラフ上で定義された微分方程式</u> への応用</p> <p>2頂点を結ぶネットワークモデルを「グラフ」と呼び、「ハイパーグラフ」は頂点の接続をより一般的なものに拡張したものです。各頂点に割り当てられたある量が「ハイパーグラフラプラシアン」によって拡散・平均化していく様子を表した微分方程式について考察し、発展方程式の技巧を用いることでこの方程式の可解性について証明しました (投稿中: arXiv 2107.14693)。現在は制御問題や偏微分方程式への応用について検討しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>S. Uchida, Solvability of doubly nonlinear parabolic equation with p-laplacian, to appear in <i>Evol. Eq. &amp; Control Theory</i> (online first <a href="https://www.aims sciences.org/article/doi/10.3934/eect.2021033">https://www.aims sciences.org/article/doi/10.3934/eect.2021033</a>).</li> <li>M. Otani and S. Uchida, Existence of time periodic solution to some double-diffusive convection system in the whole space domain, <i>J. Math. Fluid Mech.</i> 20(3) (2018), 1035-1058.</li> <li>M. Otani and S. Uchida, Global solvability for double-diffusive convection system based on Brinkman-Forchheimer equation in general domains, <i>Osaka J. Math.</i> 53(3) (2016), 855-872.</li> </ol> <p>数理モデルを抽象化することで「流体現象」「特異拡散現象」「グラフ理論」といった全く異なる分野に「凸性をもつエネルギー関数で支配される」という一本の線が見出されます。抽象化は単純な興味だけではなく、未知の現象に解釈の軸を与えることに役立ちます。</p>



所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・講師	
氏名	江藤 真由美 (Etou Mayumi)	
取得学位	博士 (理学)、九州大学、2013年3月	
SDGs目標		

研究分野	環境化学, 無機化学, 分析化学	
研究キーワード	溶液分析, シリカ, 水処理, アルミニウム	
研究内容	<p>●環境中でのケイ素, アルミニウムの動態解析</p> <p>地殻を構成する元素として2, 3番目に位置するケイ素とアルミニウムに着目し研究しています。一般的に環境中では鉱物、酸化物等の状態で安定に存在していることが多い両元素ではありますが、近年では天然有機物との反応性も注目されています。特にケイ素では植物や藻類等での骨格形成過程での有機物の役割等を背景として研究しています。アルミニウムに関しては、酸性雨の影響で天然水中に溶出したアルミニウムイオンの毒性緩和機構の1つとして有機酸との錯形成反応を研究しています。</p> <p>●シリカ質スケールに関する研究</p> <p>水処理施設などでのイオン交換樹脂や水処理膜に堆積するシリカ質スケールの生成過程とその対策に関して研究しています。特にスケール生成防止としての選択的ケイ素除去システムの構築を目指しています。</p> <p>●ケイ素集積植物に関する研究</p> <p>イネ科植物に代表されるケイ酸集積型植物での、根圏からのケイ素を含む無機元素の取り込みと各部位でのシリカの沈殿挙動を研究しています。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 主に無機元素に重点を置いた環境試料の分析、データ解析等。一般的な無機元素の定量から多核種NMRを用いた存在状態解析等。</li> <li>・ 水処理や熱水からの無機質スケール生成防止策の提案。</li> <li>・ 前職の経験を生かし、石油精製関連分野の触媒開発・評価方法等についてもお役に立てます。</li> </ul>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部




医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・講師	
氏名	大谷 英理果 (Otani Erika)	
取得学位	博士 (文学)、九州大学、2021年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	英文学	
研究キーワード	19世紀～20世紀初頭のイギリス・ニュージーランド文学研究、旅・観光旅行研究	
研究内容	<p>●E. M. ForsterとVirginia Woolfの作品に描かれる旅行表象の研究</p> <p>19世紀以降、観光旅行が技術の発達と共にモダンな現象として徐々に大衆化されていき、資本主義化の進展の中で様々な問題が生じてきた。しかしながら、旅行が、他国を理解するための平和的な手段であることに変わりはない。こういった背景の中で、作家のテキストに描かれる人間の移動（旅や旅行）と異文化描写を考察し、様々な学問領域で盛んになってきている観光研究を参照して、イギリス文学（特に、E. M. ForsterやVirginia Woolf）に描かれる旅行表象の研究を行ってきた（論文4, 5.）。</p> <p>●Katherine Mansfieldの作品におけるニュージーランドと旅表象の研究</p> <p>現在は、旅行や移住の視点から英文学作品の分析を引き続き行うと共に、ジェンダー表象の偏差への関心から、数は少ないが女性作家もしくは女性旅行家による小説・日記・紀行文などを考察し、そこに描き出された女性の声を拾い上げていくことを行っている。特に、英国植民地期のニュージーランド社会を舞台としたKatherine Mansfieldの作品群やヨーロッパを舞台とする女性一人旅を扱ったMansfieldの初期作品群の歴史・社会・文学的研究に力を入れている（著書1. 論文1, 2, 3.）。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Erika Otani. <i>Travel, Observe, and Create: Katherine Mansfield's Representation of Modern Tourism and New Zealand</i>. 九州大学, 2021年, Ph.D. dissertation.</li> <li>2. 大谷英理果 “Encountering the Other: Katherine Mansfield's Representation of Maori People.” オーストラリア・ニュージーランド文学会発行『南半球評論』第33号、pp. 6-18、2017年.</li> <li>3. 大谷英理果 「旅と創作—“The Woman at the Store”における女のコロニアルライフ」、日本ヴァージニア・ウルフ協会発行『ヴァージニア・ウルフ研究』第32号、pp. 33-47、2015年.</li> <li>4. Erika Otani. “Interaction between Hosts and Guests: E. M. Forster's Representation of Modern Tourism in <i>Where Angels Fear to Tread</i> and “the Eternal Moment.”” 九州大学大学院英語学・英文学研究会発行『九大英文学』第57号、pp.1-19、2015年.</li> <li>5. 大谷英理果 「『船出』における旅の意味の二重性—ヴァージニア・ウルフによる旅行表象—」、九州大学大学院英語学・英文学研究会発行『九大英文学』第55号、pp.1-18、2013年</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大谷英理果 「マンスフィールドが描くニュージーランドの女性像—性別分業へのまなざし—」『外国語の非・常識—ことばの真実と謎を追い求めて』小笠原真司・廣江顕共編、英宝社、2018年.</li> </ol>	

所属・職位	理工学部 創生工学科 福祉メカトロニクスコース・講師	
氏名	加藤 秀行 (Kato Hideyuki)	
取得学位	博士(工学)、埼玉大学、2011年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	計算論神経科学, 非線形動力学理論
研究キーワード	ニューロン, シナプス, 非線形力学系, 同期現象, 機械学習, データ解析
研究内容	<p><b>1. 複雑な現象のモデル化とその解析</b></p> <p>生体システムをはじめ, 工学システムや物理システムなどは非常に多様で複雑な現象を示します. この複雑な現象を数式により表現し, 表現した数式を解析的, または数値的に調査することで, 複雑現象発生メカニズムや異なるシステム間に共通する性質を見出し, システムの安定性の向上や制御などに応用していきます. 現在はデータのみから非線形システムの応答を分類する手法の開発やニューラル機械翻訳機の学習過程の解析などに取り組んでいます.</p> <p><b>2. 神経システムの解析と応用</b></p> <p>神経系における情報処理機構や学習の仕組みを解析・理解し, これらの知見を応用することで, 近年, 広く研究されている深層学習などの機械学習にかわる新たな学習理論の構築を目指しています. 特に神経雪崩現象と深層学習に着目した研究や深層学習と比べ学習コストの低いリザーブコンピューティングの枠組みであるリキッドステートマシンの研究に取り組むことにより, 神経科学の分野と機械学習の分野を橋渡しする理論の構築に取り組んでいます. また, 現在のノイマン型コンピュータに代わる次世代のブレインモルフィックコンピューティングの開発にも関わっています.</p> <p><b>3. 高次元空間における同期現象の同定手法の開発</b></p> <p>様々なシステムは同期により情報伝達を実現しており, 同期は情報伝達の必要条件であると考えられています. 一見, システムが同期しないように見えても, 私たちが認識できる3次元より高い次元の空間やゆがんだ空間でシステムが同期している場合があります. このような同期現象の同定は非常に困難です. このような高次元空間やゆがんだ空間における同期を同定するための指標を非線形動力学系理論の観点から開発する研究に取り組んでいます.</p>
研究業績・アピールポイント	<p>本研究室は下記のような技術を有しています.</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>複雑現象の数式による表現 (モデル化)</li> <li>複雑現象を表す数式を用いた数値シミュレーション</li> <li>複雑現象から得られたビッグデータの解析</li> </ul> <p><b>研究業績</b></p> <p>H. Kato, "Nonlinearity in simple phenomenological model for activity-dependent responses of target-cell specific synapses," <i>NOLTA Journal</i>, 12(3):356, 2021.</p> <p>T. Kato &amp; T. Ikeguchi, "Oscillation, conduction delays, and learning cooperate to establish neural competition in recurrent networks," <i>PLoS ONE</i>, 11(2), 2016.</p> <p><b>参加プロジェクト</b></p> <p>学術変革領域研究(B): 脳神経マルチセルラバイオコンピューティング (A01班, 分担)</p> <p>基盤研究(A): ブレインモルフィックコンピューティングハードウェア基盤の構築 (分担)</p> <p>基盤研究(C): 神経ネットワークにおける2種類の抑制性細胞の機能的役割に関する研究 (代表)</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部





医学部

医学部附属病院


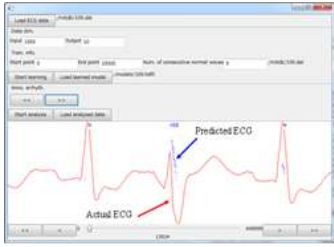
理工学部

福祉健康科学部





その他学内施設等

所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・講師	
氏名	行天 啓二 (Gyohten Keiji)	
取得学位	博士 (工学)、大阪大学、1996年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	情報工学
研究キーワード	深層学習, パターン認識, 画像処理, データマイニング, 言語理解

<p><b>研究内容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●文字認識を対象とした深層学習における説明可能性                  深層学習を適用する際、「なぜ、そのように判断したか?」を説明させることを試みる。文字認識問題について、ニューラルネットワーク内の各ノードが、どのような特徴を抽出しているかを把握し、その結果得られた知識を体系的に生成することを試みる(論文4,5)。</li> <li>●手書き文字画像・線画を対象とした深層学習による画像生成                  深層学習による画像生成、特に、文字画像や線画などの二値画像の生成を試みる。さらに、ニューラルネットワーク内の構造を工夫することにより、ユーザが望む通りに画像生成結果を制御する方法を確立する(論文1)。</li> <li>●医用データ処理・理解                  医用データのうち、心電図による不整脈の診断を、深層学習を用いて実現することを試みる。さらに、患者に関するその他のバイタルデータも活用し、より総合的に患者の状態を診断することができる手法を確立する(論文2,3)。</li> <li>●ネットコミュニケーションにおけるコミュニケーション支援                  主にtwitterを対象として、コミュニケーションの履歴を自動的に取得し、深層学習の一種であるdoc2vecやBERTに代表される技術を用いてその内容を理解した後に、各ユーザにとって適切な情報を提示する方法を確立する。</li> </ul>	<div style="text-align: right;">  <p>Stroke 1 = 0.245                  Stroke 2 = 0.316                  Stroke 3 = 0.403                  Stroke 4 = 0.211                  Stroke 5 = 0.009                  Stroke 6 = 0.516</p> <p>文字認識における 誤認識原因の説明</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>心電図異常部提示GUI</p> </div>
---	---

<p><b>研究業績・アピールポイント</b></p>	<p>上記研究内容のうち、近年では、以下のような研究を発表しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●論文</li> <li>1. 2022年、Automatic Characteristic Line Drawing Generation Using Pix2pix</li> <li>2. 2020年、Building Normal ECG Models to Detect Any Arrhythmias Using Deep Learning</li> <li>3. 2020年、Arrhythmia Detection Based on Patient-Specific Normal ECGs Using Deep Learning</li> <li>4. 2020年、A Method to Identify the Cause of Misrecognition for Offline Handwritten Japanese Character Recognition using Deep Learning</li> <li>5. 2018年、A Study of Data Augmentation for Handwritten Character Recognition Using Deep Learning</li> </ul>
-----------------------------	---

所属・職位	理工学部 共創理工学科 自然科学コース・講師	
氏名	小西 美穂子 (Konishi Mihoko)	
取得学位	博士 (理学)、大阪大学、2016年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	天文学	
研究キーワード	惑星形成、太陽系外惑星、原始惑星系円盤	
研究内容	<p>太陽系の外に多種多様な惑星（太陽系外惑星）が発見されて以降、太陽系の惑星だけでなく一般的な惑星形成過程を解明することが注目されている。太陽系外惑星の性質だけでなく、惑星の誕生現場である原始惑星系円盤（恒星の周りに作られるダスト（塵）やガスから成る円盤状の構造）を対象に、観測的な手法を用いて、個々の系の性質を明らかにする研究を行っている。</p> <p>● 原始惑星系円盤の構造に関する研究 近年、原始惑星系円盤はダストやガスの分布に多様な構造（腕構造や溝構造など）を持つことが明らかになってきた。円盤内の物質の分布や様々な物理量（温度や粘性など）を観測から明らかにすることでその成因（形成中の惑星との相互作用や円盤内の複雑な物理過程など）を調べることができる。国内外の光赤外線望遠鏡（すばる望遠鏡など）や電波干渉計（アルマ望遠鏡など）を用いて、個々の円盤中でサイズごとのダスト（個体微粒子）の分布を明らかにし、その構造を作りうる未発見の惑星の質量を推定、惑星以外での円盤構造の成因の検証などを行なっている。</p> <p>● 撮像法を用いた太陽系外惑星・褐色矮星の探査や性質調査に関する研究 太陽系外惑星の観測手法の中で撮像法は惑星の光を直接捉えることができ、遠方に形成される質量が比較的大きな惑星の形成に関して理解を進めることができる。また、形成中の若い惑星の兆候を捉え、初期惑星の性質の調査も可能である。国内外の光赤外線望遠鏡（すばる望遠鏡や超大型望遠鏡など）を用いて、太陽系外惑星や褐色矮星質量程度の探査や、多波長の撮像・分光観測によって個々の惑星の性質を調べている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>● 論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. M. Konishi, H. Shibai, T. Sumi, et al., 2015, "Indications of M-dwarf Deficits in the Halo and Thick Disk of the Galaxy", Publication of the Astronomical Society of Japan, Vo. 67, Issue 1, 1 (1-13)</li> <li>2. M. Konishi, C.A. Grady, G. Schneider, et al., 2016, "Discovery of an Inner Disk Component around HD 141569 A", The Astrophysical Journal Letters, Vol. 818, No. 2, L23 (8pp)</li> <li>3. M. Konishi, T. Matsuo, K. Yamamoto, et al., 2016, "A Substellar Companion to Pleiades HII 3441", Publication of the Astronomical Society of Japan, Vo. 68, Issue 6, 92 (1-9)</li> <li>4. M. Konishi, J. Hashimoto, Y. Hori, 2018, "Probing Signatures of a Distant Planet around the Young T-Tauri Star CI Tau Hosting a Possible Hot Jupiter", The Astrophysical Journal Letters, Vol. 859, No. 2, L28 (6pp)</li> <li>5. J. Hashimoto, Y. Aoyama, M. Konishi, et al., 2020, "Accretion Properties of PDS 70b with MUSE", The Astronomical Journal, Vol. 159, No. 5, 222 (10pp)</li> </ol>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院

理工学部


福祉健康科学部

その他学内施設等







所属・職位	理工学部 共創理工学科 自然科学コース・講師	
氏名	近藤 隆司 (Kondoh Ryuuji)	
取得学位	理学修士、九州大学、1989年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	教育工学, 低温物性
研究キーワード	SCORM, FCI, 超電導

研究内容	<p>● e-Learning に関わるソフトウェアの開発</p> <p>数式の自動採点や、動画による回答などを可能とする e-Learning 教材を作成するツールの開発をしている。それに伴い、採点ツール、点数集計ツール、問題バンク等も開発している。教材はSCORM規格に対応している。以下の図に示す採点ツールはWEBアプリであり、他のツールも同様である。数式採点と自由記述採点など、通常の紙媒体で課題を課す場合と同じように、タイプの異なる問題を同時に扱える。また教材は敢えて紙媒体と同じ伝統的なスタイルを踏襲し、コンピューターを使用して学習することへの違和感を軽減している。</p>  <p>※関連リンク：<a href="http://zairyu.susi.oita-u.ac.jp/wordpress/?page_id=393">http://zairyu.susi.oita-u.ac.jp/wordpress/?page_id=393</a></p>
------	---

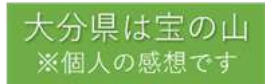
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. 平成28年、数式で解答するeラーニングコンテンツを活用した工学基礎教育の実践, 工学教育 64巻2号 pp.20</p>
---------------	---

所属・職位	理工学部 共創理工学科 数理科学コース・講師	
氏名	原 恭彦 (Hara Takahiko)	
取得学位	理学修士、九州大学、1985年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	統計科学
研究キーワード	農林水産業・環境データなどの分析

**研究内容**


- 農作物や苗木の圃場における土壌水分センサデータなどの可視化に関する研究
  - 圃場の空間データを確率場の確率変数によるものと捉え、空間類似性の散布図において数理モデルで回帰させた予測値として空間を可視化 (論文1、発表1、特許1)
- かん水技術などのスマート化AI化に関する研究
  - AIプロトタイプを作成と改良、データセンターにおける学習用データの蓄積と高速GPUの活用 (論文)



発表1

研究1

研究計画



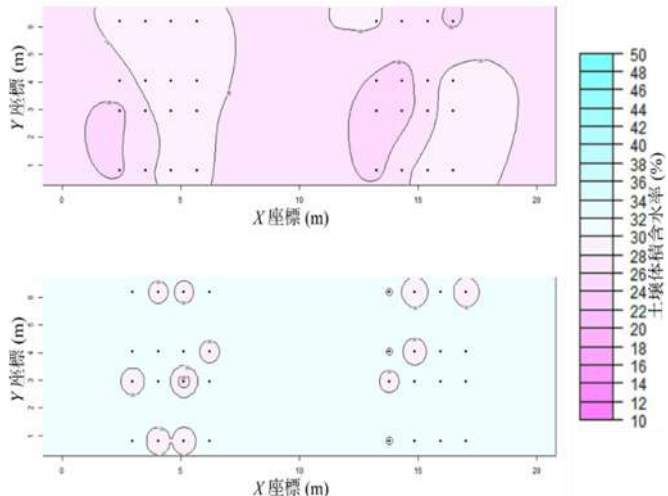








図1. 圃場の上層と下層の土壌体積含水率の予測値

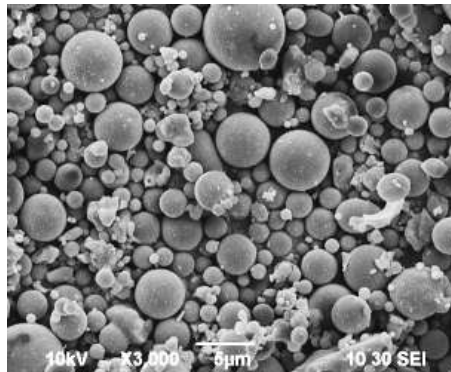
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●論文           <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、原 恭彦、空間統計学におけるクリギングとそのモデリング、大分大学理工学部研究報告 第68号 pp.1-6</li> </ol> </li> <li>●発表           <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年11月、原 恭彦・藤谷 涉、小ネギ栽培における土壌水分センサを活用したかん水の「見える化」、東京大学空間情報科学研究センターシンポジウムCSIS DAYS 2021</li> </ol> </li> <li>●著書           <ol style="list-style-type: none"> <li>2013年、宿久 洋・村上 享・原 恭彦、確率と統計の基礎 I 増補改訂版、ミネルヴァ書房、ISBN9784623066858</li> </ol> </li> <li>●特許           <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、原 恭彦・藤谷 涉・浅野 章好・芦刈 正公、土壌水分の推定方法、特願2021-140791</li> </ol> </li> </ul>
---------------	---





- 役員
- 大学院教育学研究科  
教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・講師	
氏名	本田 拓朗 (Honda Takurou)	
取得学位	博士 (工学)、熊本大学、2019年3月	
SDGs目標	 9 産業と技術革新の基盤をつくろう	

研究分野	トライボロジー、機械加工
研究キーワード	機械要素、シール、摩擦、潤滑、機械加工
研究内容	<p>●親水性エラストマによる防水軸シールの開発および性能向上          水中で回転機構や往復運動機構を実装するためには、水の侵入を防ぐシール（密封部品）が必要です。密封性能と低摩擦ロスを両立させるため、親水性エラストマをシールリップ材料に用いることで水潤滑の促進を図っています（論文1.）。</p> <p>●CNFによる親水性エラストマの繊維強化に関する研究          親水性エラストマを母材として、親水性の強化繊維であるセルロースナノファイバ（CNF）を配合することで、母材の摩擦特性上のメリットを活かしつつ、機械的強度の向上を目指しています（論文1.）。</p> <p>●ゴムのグリップ力を応用した拡張式止水プラグの開発（共同研究）          老朽化した下水管の点検や補修を行うためには、一時的に工事区間を止水・迂回させる必要があります。確実に止水を行い、安全な作業環境を確保するために従来品に替わる新しい構造の止水プラグを開発しています。様々な管路条件に対して、止水プラグのグリップ力を高めるために実験評価を行っています（研究プロジェクト1.）。</p> <p>※研究室HP：<a href="http://www.mech.oita-u.ac.jp/lab/kako/index.html">http://www.mech.oita-u.ac.jp/lab/kako/index.html</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文          1. 2018年、Honda T, et al., Fiber reinforcement of hydrophilic materials for a low-torque shaft seal in water environment, Mechanical Engineering Letters, Japan Society of Mechanical Engineers, Vol.4, Paper No. 17-00590</p> <p>●研究プロジェクト          1. 令和3年度中小企業経営支援等対策費補助金（戦略的基盤技術高度化支援事業）における共同研究（分担）</p>


所属・職位	理工学部 創生工学科 建築学コース・助教	
氏名	秋吉 善忠 (Akiyoshi Yoshitada)	
取得学位	博士(工学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	建築材料 (主にコンクリート)	
研究キーワード	フライアッシュ, 中性化, 物質移動抵抗性, 再生骨材, コンクリートの劣化予測	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●研究内容</p> <p>1. フライアッシュコンクリートの耐久性に関する研究 産業副産物であるフライアッシュを混和したコンクリートの中性化抵抗性、遮塩性、アルカリシリカ反応抑制効果等に関する研究を行っている。実環境にある鉄筋コンクリート構造物の耐久性照査に必要となる各劣化予測式の構築を目指している。</p> <p>2. 補修用モルタルの開発 フライアッシュや高炉スラグ微粉末など各種混和材料を用いて、力学性能、ひび割れ抵抗性、耐硫酸性等に優れた補修材の開発に取り組んでいる。</p> <p>●資格：コンクリート主任技士, コンクリート診断士</p>	 <p>10kV X3,000 5µm 10.30 SEI</p> <p>改質フライアッシュの電子顕微鏡写真</p>



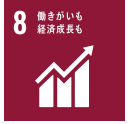

所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・助教	
氏名	大城 英裕 (Ohki Hidehiro)	
取得学位	工学修士、大分大学、1985年3月	
SDGs目標	  	


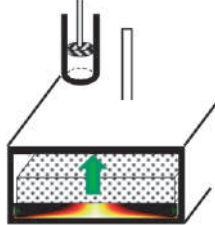
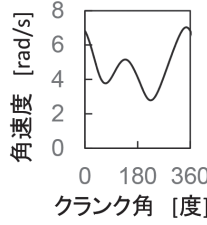
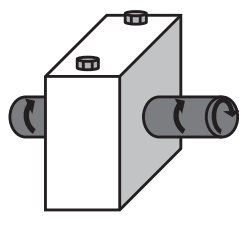
研究分野	人工知能, 情報工学	
研究キーワード	不良設定問題, 機械学習, コンピュータビジョン	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>不良設定問題とは、一つの解を導き出すための必要な情報が得られない問題を指す。従来の研究アプローチでは、課題に対して研究者がその解を求めるモデルを考えて解決する方法であった。しかし、機械学習の高性能化によって、答えを出すモデルを計算機自体が正解データから作り出せるようになってきた。我々は、コンピュータビジョン(視覚を計算機で模倣する研究分野の総称)における不良設定問題を選び、深層学習を用いて解を得る方法を探求する。そして得られた深層学習モデルを分析して、人に理解し易い形で取り出す。最近では、コンピュータビジョンの不良設定問題の一つ、一枚の画像から深度情報を取り出す課題の解法に関する論文を発表[1]した。本論文は、国際会議において発表賞を受賞した。このような不良設定問題の解法の枠組みを応用して社会問題の解決にも役立てたいと考えている。</p> <p>[1] T. Sakaki, H. Ohki, K. Gyohten, T. Takami : "A Study of Monocular Depth Estimation Using LiDAR Information and Stereo Images, " Proceedings of International Workshop on Frontiers of Computer Vision 2022, 8 pages, 2022-2-22(online)(Best presentation award)</p>	

# 理工学部



所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・助教	
氏名	賀川 経夫 (Kagawa Tsuneo)	
取得学位	修士 (工学)、大分大学、1993年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	知覚情報処理
研究キーワード	コンピュータビジョン, 機械学習, xR, 可視化技術
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>SLAMを用いた高精細孔壁画像の獲得技術の開発</p> <p>ボーリングの掘削坑を用いて地質や地層の解析を行うために、高精細な孔壁画像を獲得する必要がある。本研究では、ロボットナビゲーション技術であるSLAMを用いて掘削坑内を撮影するカメラの軌跡を推定しながら、孔壁画像を生成する手法の開発を行った。</p> <p>機械学習を用いた石灰岩分別システムの構築</p> <p>ベルトコンベア上を流れる石灰岩中に存在する不純物を多く含む石は、なるべく早い段階で判別し削除する必要がある。そこで、異常検知技術を応用した石灰岩の判別システムの構築に取り組んだ。高速カメラで撮影された石は、解像度や明度等に制限があるが、機械学習を応用した手法の開発を行った。</p>




所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・助教	
氏名	加藤 義隆 (Kato Yoshitaka)	
取得学位	博士 (工学)、東京工業大学、2003年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	機械工学 (エンジンシステム部門, 技術と社会部門)
研究キーワード	指圧線図計測, 数値流体解析, 四節リンク機構の動学的解析, マーケティング
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>100℃未満の加熱で動力を発生させる「低温度差スターリングエンジン」の実用化を目指す。「設計仕様の策定」「シミュレーション」「試作」「複数台の製作」を取り扱う教材作成も試みる。大分大学は日本機械学会と、生涯学習的な「低温度差スターリングエンジン競技会・発表会」を共催。</p> <p>関連リンク：<a href="https://www.mech.oita-u.ac.jp/lab/netu/kato/kato1.html">https://www.mech.oita-u.ac.jp/lab/netu/kato/kato1.html</a>          (検索ワード：加藤義隆)</p>
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;">  <p>DIY入門向けの工作</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>熱流体解析</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>表計算で解析</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>軸受けの遊び</p> </div> </div>	



所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・助教	
氏名	楠 敦志 (Kusunoki Atsushi)	
取得学位	工学士、大分大学、1990年3月	
SDGs目標		

研究分野	電磁波工学
研究キーワード	散乱、逆散乱、最適化問題
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>電磁波を物体に照射し、その物体から観測される散乱波を用いて対象とする物体の位置・大きさ・形状・内部構造・材質などを推定する電磁波逆散乱問題に関するアルゴリズムの研究を行っている。このようなアルゴリズムおよび技術は、各種産業や医療の分野における非破壊検査・リモートセンシングおよびX線CTなどとして、利用・改善が進んでいる。また、地中埋設物の探査技術は、遺跡の事前調査や各種のインフラの構造物の維持・管理への応用が行われている。一般に、電磁波は人体に与える悪影響が比較的少ない一方で、鮮明な画像を得ることは容易ではないと言われている。更には、この種の問題は非線形問題に相当するために、常に正確な結果が得られるとは言えないこともある。このため、既存の手法に加えて新たな最適化法を開発することともに、最適化法以外の手法も導入することによって、アルゴリズムの計算時間の短縮化、データ処理の効率化および推定精度の向上などにも目指している。</p> <p>A. Kusunoki, Detection Algorithm for Two Air Holes in Underground Using Particle Swarm Optimization, Proceeding of The 2012 International Symposium on Antennas and Propagation (ISAP2012), PO165, 2012.</p>

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・助教	
氏名	齋藤 晋一 (Saitou Shinichi)	
取得学位	修士 (工学)、大分大学、1992年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	伝熱工学
研究キーワード	衝突噴流、スプレー冷却、ナノ流体、電子機器冷却
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●多孔体ヒートシンクを用いた衝突噴流冷却に関する研究 衝突噴流冷却は優れた冷却性能を持ち、電子機器の冷却等に利用される。一方、噴流直下から離れると熱伝達が急速に低下する短所がある。本研究では熱伝達促進のために円環状の通気性多孔体をヒートシンクとして使い、フランジ付き噴流ノズルと組み合わせることにより、冷却能力の向上と均一な冷却が可能になるという結果を得ている。</p> <p>●ナノ流体を用いたスプレー冷却に関する研究 スプレー冷却は水の蒸発潜熱を利用する優れた冷却方法であり、電子機器の冷却等に利用される。一方、加熱面が高温になると蒸気膜の発生によって熱伝達が急速に低下する短所がある。本研究では親水性のナノ流体スプレーを使用し、加熱面上にナノ粒子層を堆積させることによって蒸気膜が発生する温度を上昇させ、冷却性能の低下が抑えられる結果を得ている。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院





理工学部

福祉健康科学部

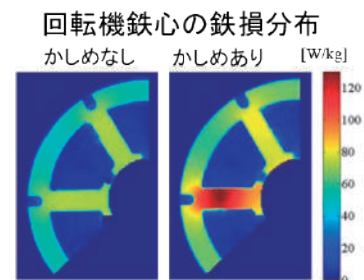
その他学内施設等





所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・助教	
氏名	佐藤 慶三 (Sato Keizo)	
取得学位	博士 (工学)、大分大学、2005年3月	
SDGs目標	 9 産業と技術革新の基盤をつくろう	

研究分野	情報工学
研究キーワード	ウェブキュレーション, 協調作業支援, IUI, 情報視覚化
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・PCやタブレット端末上での作業の効率化に関する研究 日常的に利用しているPCやタブレット端末を、より使いやすくするにはどのような機能やUIが必要となってくるか、を追及する研究である (論文[1]).</p> <p>・WWWを介した情報の収集、整理や発信に係るシステムの研究 ウェブページなどの電子資料について、必要な情報を含む部分のみを選択、保存、参照できる仕組みにより、情報の収集、整理を効率的に行えるシステムについての研究である (論文[2]).</p> <p><b>研究業績：</b></p> <p>[1] Sato K. et al., (2020) A Mechanism of Window Switching Prediction Based on User Operation History to Facilitate Multitasking. In: NBIS - 2019.</p> <p>[2] Nagatomo T., et al., (2018) Creating Learning Materials by Learners Themselves Using Partial Bookmarking for Web Curation. In: CISIS 2017.</p>




所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・助教	
氏名	佐藤 尊 (Sato Takeru)	
取得学位	博士 (工学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	   7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに 9 産業と技術革新の 基盤をつくろう 12 つくる責任 つかう責任	

研究分野	電気機器設計工学
研究キーワード	磁性材料の磁気特性評価、高効率モータの設計・開発
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●サーモグラフィーカメラを用いた鉄心の鉄損分布評価に関する研究 回転機や変圧器などの電磁応用機器に用いられる鉄心には優れた磁気透磁率かつ低鉄損な磁気特性が求められるが、鉄心作製時の加工によって鉄心材料の磁気特性は劣化してしまう。加工による劣化箇所を特定し、改善することで高効率な回転機を開発することを研究の目的としている。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2017年、熱計測による誘導電動機固定子鉄心表面の鉄損分布測定</li> <li>2019年、熱的測定によるかしめ積層ステータコアの鉄損分布評価</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2016年、MAGDA優秀講演論文賞</li> </ol>



所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・助教	
氏名	鈴木 絢子 (Suzuki Ayako)	
取得学位	博士 (生命科学)、山口大学、2015年11月	
SDGs目標	  	

研究分野	生命科学, 遺伝子工学, 分析化学
研究キーワード	酵母, DNA, プラスミド, 非破壊分析
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>【微生物を利用した有用物質の大量生産】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・酵母からのハイパーコピープラスミドの調整 (生物工学会九州支部大会, 2021)</li> <li>・酵母内在性プラスミドを利用した異種細胞間で遺伝子発現可能なプラスミドベクターの構築 (<i>J. Biosci. Bioeng.</i>, 2022)</li> <li>・有用物質生産のための高機能プラスミドの作製</li> </ul> <p>【データサイエンスと農畜産業の融合による新たな分析システムの開発】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・農業の効率化を指向したデータ解析</li> <li>・光分光法を用いた農作物の非破壊分析 (日本農芸化学会年度大会, 2022)</li> </ul>

所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・助教	
氏名	立花 孝介 (Tachibana Kousuke)	
取得学位	博士 (工学)、東京工業大学、2018年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	プラズマ化学
研究キーワード	大気圧プラズマ、プラズマ-液体相互作用、ラジカル計測、数値計算
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プラズマ-液体相互作用 (プラズマと液体の接触部における物理化学) の解明 大気圧プラズマを用いた水質浄化、材料合成、医療・バイオ応用に関する研究が盛んに行われているが、そのメカニズムは十分には解明されていない。本研究ではプラズマ-液体相互作用を解明すべく、様々な実験と数値計算を行っている。数値計算ではマクロな流体モデルからミクロな分子論的モデルまで扱っている。</li> <li>・大気圧プラズマを用いた炭素触媒の合成に関するメカニズム解明 セルロースを原料とするバイオ燃料の生成にて重要な炭素触媒は、大気圧プラズマにより室温・短時間で合成できることが知られている。しかし、その合成メカニズムは未解明である。本研究では炭素触媒の合成メカニズムを解明すべく、電子スピン共鳴装置 (ESR装置) を用いてプラズマ照射時の液中ラジカルを計測している。</li> </ul>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

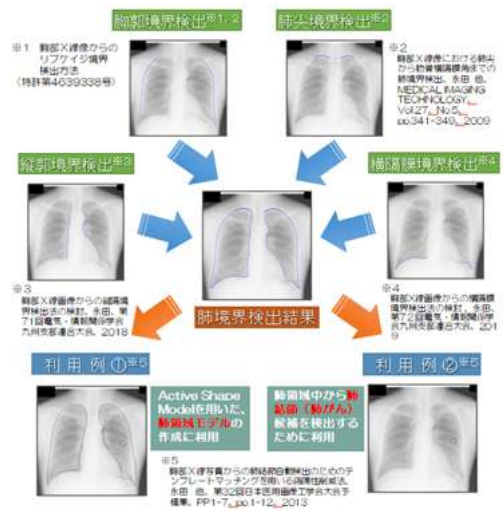
その他学内施設等

所属・職位	理工学部 創生工学科 機械コース・助教	
氏名	堤 紀子 (Tsutsumi Noriko)	
取得学位	博士 (工学)、九州大学、2006年3月	
SDGs目標	 	



研究分野	材料力学
研究キーワード	金属疲労、引張強度、水素脆性
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●鉄鋼材料の強度特性に及ぼす水素の影響に関する研究</p> <p>水素は金属材料中に侵入し、強度および変形特性を低下させる、いわゆる「水素脆化」を引き起こすことがある。燃料電池システムの配管等は水素にさらされている。燃料電池システムなどの水素利用機械を長期間、安全に使用するためには、水素脆化メカニズムおよび疲労強度特性に及ぼす水素の影響を明らかにする必要がある。</p> <p>ガス配管に使用される炭素鋼およびオーステナイト系ステンレス鋼を使用して、引張強度特性および疲労強度特性に及ぼす水素の影響を調べている。炭素鋼の引張強度特性に関する研究では、水素は破壊起点となるボイド発生を増加あるいは成長を促進させ、延性特性を低下させることを明らかにした。疲労強度特性に関する研究では、水素は特に有限寿命域において材料のすべりを促進させ、疲労寿命に影響を与えることを明らかにしている。</p>

所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・助教	
氏名	永田 亮一 (Nagata Ryoichi)	
取得学位	博士 (工学)、大分大学、2010年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	情報学
研究キーワード	胸部X線像, 肺領域検出, 肺癌検出, CAD, 機械学習, 画像処理
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●肺領域検出に関する研究</p> <p>肺癌の死亡率は第1位を占めており、早期発見することを可能とするシステムの構築が求められている。胸部X線像から早期肺癌結節の検出を可能にするコンピュータ支援診断 (CAD) システムでは、肺領域内から早期肺癌結節を検出するため、肺領域の検出が重要となる。本研究では、胸部X線像から正確に肺領域を検出する手法の開発を目指す。</p> <p>※関連リンク：<a href="http://www.csis.oita-u.ac.jp/">http://www.csis.oita-u.ac.jp/</a></p>







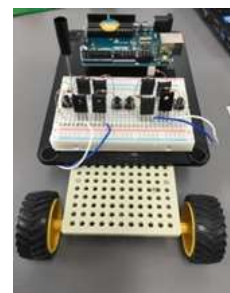
所属・職位	理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース・助教	
氏名	西島 恵介 (Nishijima Keisuke)	
取得学位	工学修士、大分大学、1991年3月	
SDGs目標		

研究分野	知覚情報処理
研究キーワード	デジタルヘルスケア、音メディア処理、音響信号処理
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●音メディア処理の医療応用に関する研究</p> <p>超高齢化社会に伴い、我々の健康を守る医療やヘルスケアは社会保障費の急増、深刻な人材不足などの課題がある。その課題に対し、AIやIoTといったデジタル技術を応用したデジタルヘルスケアに取り組んでいる。特に、音メディア処理からのアプローチとして、生体音を分析、情報提供し健康の維持・増進を図る研究に取り組んでいる。</p> <p>これまでに、睡眠音、心音（胎児心音）、シャント音（血流音）、嚙下音を対象としている。 ※関連リンク：<a href="https://www-ai1.csis.oita-u.ac.jp/">https://www-ai1.csis.oita-u.ac.jp/</a></p>



所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・助教	
氏名	原 正佳 (Hara Masayoshi)	
取得学位	修士（工学）、大分大学、1993年3月	
SDGs目標		

研究分野	制御工学
研究キーワード	制御、画像認識
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●局所特徴量や統計的学習手法による物体検出の研究に関する研究</p> <p>多種物体が写っている画像を、スキャンする窓のサイズを変えながら順次移動させて特徴量を算出する。そしてそれをもとに弱識別機を複数作成し、その識別機を組み合わせることで認識検出を行う。深層学習ほか別アプローチによる画像認識との性能検証を行い、簡易システムの構築を目指している。</p> <p>●小型マイコンによる自律ロボットの制御に関する研究</p> <p>機器の自律化が進んでいくなかで重要な働きをするマイコンの役割とそれを使ったシステムの構成をシンプルに行い、周囲の状況をセンサ情報から判断し目的に応じた制御を行う移動ロボットの研究を行なっている。図に明るさにより動作を変える車輪型移動機の一例を示す。</p>



役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部




医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等





所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・助教	
氏名	平尾 翔太郎 (Hirao Shotaro)	
取得学位	博士 (学術)、長崎大学、2010年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	有機化学
研究キーワード	有機合成化学, 新規変換反応開発, 機能性化合物合成
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●活性化基を活用する効率的なカルボニル官能基導入反応の開発</p> <p>アルデヒド, ケトン, エステル等のカルボニル化合物は, 高分子や医・農業等の機能性材料にしばしば見られる構造であり, 新たな物性や機能の発現において重要な役割を果たしている. また, カルボニル化合物は様々な官能基に変換できることから, 多様な骨格の起点となる合成中間体としても幅広く用いられており, 合成化学の分野においても重要である.</p> <p>カルボニル化合物の合成方法のうち, 炭素骨格へのカルボニル官能基の直接的な導入反応に着目し研究を行っている. 効率的な反応の実現には, カルボニル官能基合成ユニットに適当な反応性を付与する活性化基の探索が重要となる. 現在, 本反応を様々な有用化合物合成の鍵反応として応用するとともに, 反応概念を展開したさらなる新反応の開発を目指して研究を行っている.</p>

所属・職位	理工学部 創生工学科 電気電子コース・助教	
氏名	水鳥 明 (Mizutori Akira)	
取得学位	工学修士、大阪大学、1984年3月	
SDGs目標		

研究分野	半導体レーザーの位相制御, 光通信
研究キーワード	光PLL, 光多値QAM
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容:</p> <p>半導体レーザー(LD)の位相制御は通信容量の拡大はもとより各種分野への計測精度向上の可能性から大きく期待されている. LDを駆動する電流ドライバに位相誤差情報をフィードバックすることで通信系ではBPSK, QPSK, 16QAMなどのホモダイン検波受信に成功している. 現在は一般的なDFB-LDの位相制御にチャレンジしている.</p> <p>研究業績:</p> <p>[1] A. Mizutori and M. Koga, "Demonstration of four-wave-mixing induced crosstalk cancellation in 10-Gbit/s phase locked multi-carrier OOK signals transmission," IEICE Communications Express, Vol.1, 1-6, 2013.</p> <p>[2] M. Koga, Y. Shigeta, F. Shirazawa, H. Ohta, A. Mizutori, "Costas Loop Homodyne Detection for 20-Gb/s QPSK Signal on the Optical Frequency Synchronous Network," JLT, Vol.33, No.23, Dec.1, 2015.</p>

所属・職位	理工学部 共創理工学科 応用化学コース・助教	
氏名	吉見 剛司 (Yoshimi Takeshi)	
取得学位	博士 (工学)、大分大学、2017年6月	
SDGs目標		

研究分野	界面化学、高分子化学、繊維化学
研究キーワード	高分子、液晶、ソフトマテリアル、表面界面、サイエンスコミュニケーション
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>この世界の物質はすべて炭素、水素、酸素などの原子がつながってできています。そんな化学構造の中で電子の偏りが大きい部分は極性が高く、水に溶けやすい性質があります。逆に極性が低い部分は水に溶けにくいです。この両方の性質を同時にもつ物質のことを「両親媒性」といいます。</p> <p>私は両親媒性の分子を規則的に配列させ、その秩序的なナノ構造に由来した高機能・高性能素子の開発を行っています。具体的には両親媒性の高分子液晶から水面展開単分子膜やラングミュアープロジェクト (LB) 膜を作製し、界面における超微細構造の制御に関する研究を行っています。さらに、光応答性の素材を利用してナノ構造を光によって制御できる材料の開発も行っています。</p> <p>また、現在はこの文章冒頭のように科学を一般の方々にも分かりやすく解説する技術である、サイエンスコミュニケーションについても研究を始めました。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部




その他学内施設等



# 福祉健康科学部

---



## 福祉健康科学部

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・教授	
氏名	相澤 仁 (Aizawa Masashi)	
取得学位	文学修士、立教大学、1984年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	子ども家庭福祉	
研究キーワード	社会的養護 子どもの権利擁護	
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>子どもの権利擁護に係る実証モデル事業に関する研究 一時保護所・児童養護施設・里親家庭における子どもアドボカシー活動に関する調査研究</li> <li>地域包括システムのためのアセスメント票の開発に関する研究 地域包括ケア会議などで複合的課題を抱えた家族を対象にしたアセスメント票の開発研究</li> <li>児童福祉施設における青少年支援の再検討に関する研究（分担研究） 児童養護施設など施設における子どもの遊びやレクリエーションに関する調査研究</li> <li>養育環境リスク要因の累積が人間発達に及ぼす長期的影響性と影響防御機序の解明に関する研究（分担研究） 児童養護施設や里親家庭で生活している青年に対するPACEs（保護的・補償的経験）に関する調査研究</li> <li>地域共生社会の実現に向けた実務者ネットワーク構築事業に関する研究 多世代交流・支え合い活動構築や包括的支援体制整備活動を推進するための調査研究</li> <li>社会的養護に関する研究 社会的養護における代替養育と市町村における子ども家庭支援活動との連携に関する調査研究</li> </ol>	
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>児童福祉司を中心とした子ども家庭福祉に携わる者の資質向上について</li> <li>シリーズみんなで育てる家庭養護全5巻（編集代表）</li> </ol>	




所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・教授	
氏名	朝井 政治 (Asai Masaharu)	
取得学位	博士 (医学)、長崎大学、2014年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	理学療法学、リハビリテーション	
研究キーワード	呼吸リハビリテーション、摂食嚥下リハビリテーション、介護予防	
研究内容	<p>●「社会参加」を促進する地域作りの課題と主観的・客観的意義に関する研究 「社会参加」からみた介護予防の効果を明らかにすること、「自分らしく生きる」という視点から「社会参加」の意義を明らかにすることを目的に、大分市で要介護認定を受けていない在宅生活を行っている65歳以上の住民を対象に、</p> <p>①介護予防に関する質問紙調査 ②専門職による身体機能評価・口腔機能評価を調査し、経年変化や居住地ごとの比較を行っている。</p> <p>平成31年度科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 基盤研究(B) (一般) (課題番号19H01588: 研究代表者 隅田好美の分担研究者)</p> <p>●運動時の呼吸困難を軽減するための介入に関する研究 呼吸器疾患を有する患者の運動時の呼吸困難は運動制限因子として重要である。呼吸困難を軽減する方法として、「顔に冷風を当てる」、「音楽を聴くなど、外部刺激を用いる」、「機械を使った呼吸補助を行う」などが一般に用いられている。現在、一般健常人において、胸郭運動を制限の有無による呼吸困難に及ぼす影響の調査や、聴覚刺激に加え、視覚刺激を併用した場合の呼吸困難の変化についての基礎的研究を行っている。将来的には、呼吸器疾患患者の運動時呼吸困難を軽減するための新しい方法を開発したいと考えている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>2015年に大分大学に赴任し、教育と研究活動に従事しています。赴任前は、理学療法士として医療機関にて勤務し、臨床研究を中心に実施していました。</p> <p>●論文</p> <p>1. Asai M, Tanaka T, Kozu R, Kitagawa C, Tabusadani M, Senjyu H. Effect of a Chronic Obstructive Pulmonary Disease (COPD) Intervention on COPD Awareness in a Regional City in Japan. Intern Med. 54: 163-169, 2015</p> <p>2. 朝井政治, 神津 玲, 俵 祐一, 中村美加栄, 柳瀬賢次. 体位呼吸療法が奏効した急性呼吸不全の1症例. 理学療法探求 4: 24-28, 2001.</p>	






所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・教授	
氏名	片岡 晶志 (Kataoka Masashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年9月	
SDGs目標		

研究分野	運動器 (整形外科) 領域、リハビリテーション医学領域
研究キーワード	骨粗鬆症、骨折、骨代謝、骨リモデリング、運動器、高齢者、転倒、ロコモ

研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 薬剤による骨折治癒促進効果の究明</li> <li>② 骨粗鬆症に対する新規治療法の開発</li> <li>③ ビタミンD含有食品の骨粗鬆症治療への有効性の解明</li> <li>④ 骨粗鬆症治療における運動療法+薬物療法の相乗効果の解明</li> <li>⑤ 骨粗鬆症治療薬の骨強度に対する効果の検討</li> <li>⑥ 骨粗鬆症治療薬の骨微細構造への影響</li> <li>⑦ 腎不全に合併した2次性骨粗鬆症治療薬の検討</li> <li>⑧ 電気刺激による骨折治療効果の検討</li> </ol>	 <p style="text-align: center;">ラット大腿骨</p>
	<p>実験動物における骨折モデル、骨粗鬆症モデル、糖尿病モデルの作成は確立している。これらのモデルを使って基礎実験から臨床まで幅広く研究をおこなっている。</p> <p>④の実験結果の1例を示す。下図はラット骨粗鬆症モデルに骨粗鬆症治療薬 (ZA) と運動療法を実施した大腿骨マイクロCT画像である。<u>この結果から運動療法は骨粗鬆症治療に不可欠であることが言える。</u> A : シヤム、B:コントロール、C:ゾレドロン酸 (ZA)、D:トレッドミル (T)、E:ZA+T</p>	

研究業績・アピールポイント	<p>代表論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Kataoka M., Yoshiyama K., Matsuura K., Hijiya N.Higuchi Y., Yamamoto S. Structure of the murine CD156 gene, Characterization of its promoter, and chromosomal location. J. Biol. Chem.272:18209-18215, 1997.</li> <li>2. Anna Kajsa Harding , Per Aspenberg, Masashi Kataoka, David Bylski, Magnus Tägil Manipulating the anabolic and catabolic response in bone graft remodeling: synergism by a combination of local BMP-7 and a single systemic dosis of zoledronate J. Orthop. Res. 26:1245-1249. 2008.</li> <li>3. Tsubouchi Y., Ikeda S., Kataoka M., Tsumura H. Combination therapy with low-dose teriparatide and zoledronate contributes to fracture healing on rat femoral fracture model. J. Orthop. Surg. Res. 13:267-273, 2018.</li> <li>4. 超高齢社会における問題点：高齢者の骨粗鬆症と骨折について 福祉健康科学 (1), 19-23, 2021-02</li> </ol> <p>最近の外部資金</p> <p>基盤研究C：ラット難治性骨折モデルにおけるアバロパラチドとゾレドロン酸の骨折治癒促進効果 (2021-2023)</p>
---------------	---

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・教授	
氏名	上白木 悦子 (Kamishiraki Etsuko)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2010年5月	
SDGs目標	 	

**研究分野** 社会福祉学

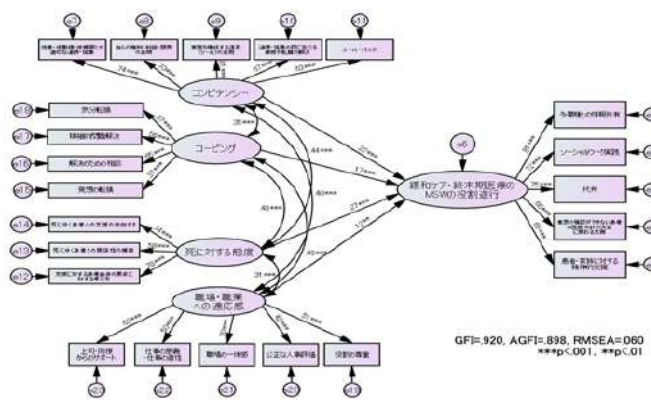
**研究キーワード** 緩和ケア・終末期医療、ソーシャルワーク、社会福祉学、尊厳

**研究内容**

- 緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカーの役割に関する研究  
医療技術の長足の進歩や人口構造の変化、医療政策の転換等、さまざまな事情によって、昨今、緩和ケアや終末期医療の場面においても倫理的・法的・社会的検討課題が増えています。例えば、意思の確認ができない患者さんの医療方針の決定について、周囲の人々や社会がどのように考えているかといったことは、誰にでも起こりうる倫理的・法的・社会的な検討課題です。これらの課題に対してソーシャルワークがどのようなことができるのか、研究を続けています。
- 障害者施設の看取りに関する研究
- 地域共生社会に向けた実務者ネットワーク会議事業（大分県保健福祉部との事業）
- 障害者の生涯学習支援体制の構築事業（大分県教育庁との事業）



**研究業績・アピールポイント** 上記の研究内容について、今まで明らかにされていなかった、緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカーの役割を、5つの役割として新しく提示しました（下図）。研究紹介動画（本学研究マネジメント機構産学官連携推進センター作成）  
(<https://youtu.be/JeludIVHJMg>) でも紹介しています。

- 論文
- 1. 2021年、上白木悦子「緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカーの役割の必要性—患者への質問紙調査の因子分析結果—」社会福祉学 62(1), 14-26. (2019年日本社会福祉学会奨励賞(論文部門)受賞)
- 2. 2018年、「緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカーの役割遂行の構造に関連する要因」社会福祉学 59(3), 16-29.



所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・教授	
氏名	河上 敬介 (Kawakami Keisuke)	
取得学位	博士 (医学)、名古屋大学、2001年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	基礎理学療法学
研究キーワード	骨格筋、メカノバイオロジー、理学療法学、筋萎縮、筋損傷、筋解剖学
研究内容	<p>●筋萎縮に対する機械刺激の効果とそのしくみを明らかにする研究</p> <p>一般に、筋力トレーニング効果には強い負荷運動が必要です。しかし、強い負荷運動は高齢者や患者に対して難しいし、危険です。一方、理学療法室の高齢者や患者に対して弱い負荷量でも筋機能が向上することをよく経験します。また、萎縮筋に対する筋力トレーニング効果は、健常筋に対する効果に比べてかなり早く表れます。「不思議」です。我々の目的は、これらの「不思議」を明らかにすることと、それを基に既存の定説を覆す新たな理学療法を開発することです (論文1, 2, 3)。</p> <p>●筋損傷に対する理学療法効果とそのしくみを明らかにする研究</p> <p>一般的に、スポーツ時に起こる筋損傷は、安静、冷却、圧迫、挙上が大切だと言われます。しかし近年、損傷筋に起こる炎症反応は筋の修復に不可欠であり、炎症を抑えると回復が遅れることが分かりました。また、理学療法で用いる力学刺激は筋損傷時の再生を加速することが分かってきました (論文4)。これには、損傷筋を掃除する細胞や筋の幹細胞の活動が関わっている様です。我々の目的は、炎症反応による筋の修復のしくみを明らかにすることと、それを基に既存の定説を覆す新たな理学療法の開発です。</p> <p>●筋の肉眼解剖学的情報の収集や、それに基づく理学療法の検証に関する研究</p> <p>理学療法の疑問を解決するに足る筋解剖学の情報は、長きに渡り不足状態が続いてきました。そこで、この情報収集と、それを基に、からだの外から筋肉の位置や形を触って知る方法を開発しています (著書1, 2)。近年発展が目覚ましいVRを用いた、解剖学・理学療法学の教育法の開発を行っています。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.youtube.com/watch?v=fsD4Hci87xs">https://www.youtube.com/watch?v=fsD4Hci87xs</a>  <a href="http://kjlalab-ja.wp.med.oita-u.ac.jp/">http://kjlalab-ja.wp.med.oita-u.ac.jp/</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021. Morphological and biochemical changes of lymphatic vessels in the soleus muscle of mice after hindlimb unloading. <i>Muscle Nerve</i>, 64(5) 620-628.</li> <li>2020. Cessation of electrically-induced muscle contraction activates autophagy in cultured myotubes. <i>Biochem. Biophys. Res. Commun.</i> 553(3) 410-416.</li> <li>2017. Training at non-damaging intensities facilitates recovery from muscle atrophy. <i>Muscle Nerve</i>, 55(2) 243-253.</li> <li>2017. Post-injury stretch promotes recovery in a rat model of muscle damage induced by lengthening contractions. <i>J. Physiol. Sci.</i>, 68(4) 483-492.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2020. 標準理学療法学・作業療法学 解剖学 改訂第5版、医学書院、東京</li> <li>2013. 骨格筋の形と触察法 改訂第2版、大峰閣、川崎</li> </ol>

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 心理学コース・教授	
氏名	河野 伸子 (Kawano Nobuko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年9月	
SDGs目標		

研究分野	臨床心理学・発達心理学
研究キーワード	心理療法、マインドフルネス、生涯発達心理学
研究内容	<p>●マインドフルネス心理療法の効果研究</p> <p>マインドフルネスは、近年広まってきた瞑想を用いた心理療法です。「現在に気づきを向ける」ことを通して、身体感覚や五感、思考や感情を、ありのまま観察することを練習します。マインドフルネスを練習することによって、自分自身の状態に早めに気づき、ぐるぐる考えること（反芻と言います）から抜け出すことで、うつや不安、ストレスを減少させると言われています。</p> <p>共同研究者の一人として、マインドフルネス心理療法とマインドフルネス心理療法に実存的なアプローチを加えた場合の効果の比較検討を行い、効果の予測因子を抽出しました。</p> <p>マインドフルネス心理療法は、医療領域で用いられてきましたが、現在では、幅広い領域、幅広い対象の方に応用されており、私も、一人ひとりの幸福な生活を支援できるよう、応用していきたいと考えています。</p> <p>●子育て支援・保護者支援における多職種連携</p> <p>子どもが生まれ成長していく過程は、同時に、その保護者にとっては、子どもを受け入れ、養育することを学び、親になるという過程でもあります。その中で生じるさまざまな課題に対して、心理的支援を通じて実践的に取り組むと同時に、多職種との効果的な連携の在り方についても検討しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>(論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Kawano N, Terao T, Sakai A, Akase M, Hatano K, Shirahama M, Hirakawa H, Kohno K, Ishii N. (2021) Maternal overprotection predicts consistent improvement of self-compassion during mindfulness-based intervention and existential approach: a secondary analysis of the EXMIND study. BMC Psychology.;9(1):20.</li> <li>2. Sakai A, Terao T, Kawano N, Akase M, Hatano K, Shirahama M, Hirakawa H, Kohno K, Inoue A, Ishii N. (2019) Existential and Mindfulness-Based Intervention to Increase Self-Compassion in Apparently Healthy Subjects (the EXMIND Study): A Randomized Controlled Trial. Frontiers in Psychiatry. 10:538.</li> </ol> <p>(著書)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. (共著)「第3部 教育臨床の諸問題 第3章 虐待」武内珠美・渡辺巨・佐藤晋治・溝口剛 (編)『教育臨床の実際〔第2版〕』2018. 151-160.</li> <li>2. (共著)「第3章 諸機関での発達障害 1保健センターで出会う発達障害の可能性のある子どもとその親への支援」伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編)『京大心理臨床シリーズ7「発達障害」と心理臨床』2009. 214-223.</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



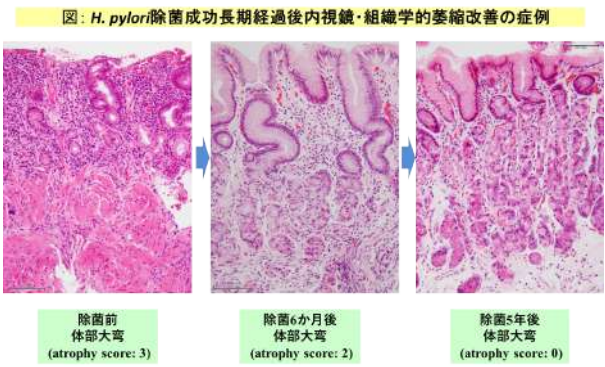
所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・教授	
氏名	兒玉 雅明 (Kodama Masaaki)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1994年3月	
SDGs目標		






**研究分野** 生物系、医歯薬学、内科系臨床医学

**研究キーワード** 上部消化管学 (食道、胃、十二指腸)、消化器内視鏡学、*Helicobacter pylori*、胃癌、消化器内科学

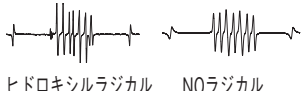

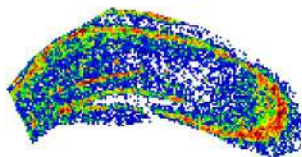

**研究内容** ***Helicobacter pylori*と胃炎、胃癌に関する研究**  
*Helicobacter pylori* (*H. pylori*)は胃炎および胃癌の発生原因となることが指摘されている。  
*H. pylori*感染により引き起こされる慢性萎縮性胃炎、腸上皮化生は胃癌の前癌病変とされ、本病変に与える除菌治療の効果を検討してきた。すなわち、感染自体による胃粘膜の形態変化、また*H. pylori*除菌による胃粘膜の変化、すなわち萎縮、腸上皮化生の経時的变化、免疫組織学的な細胞動態、粘液形質、消化管ホルモン発現の変化、そして細胞周期関連遺伝子、癌遺伝子産生蛋白の変化を病理学的、遺伝子学的に追跡し、*H. pylori*感染と除菌治療による胃粘膜の形態変化、除菌後にできた胃癌特性の解明による除菌後胃癌早期発見早期治療に向けた取り組みを行っている。  
 特に除菌後長期にわたる胃粘膜の組織学的解析は20年以上にわたって行っており、本学で*H. pylori*検査、除菌を行ったおよそ10000例近い症例の組織を用いた研究を行っている。

**研究業績・アピールポイント** *H. pylori*除菌治療は胃粘膜の炎症、萎縮、腸上皮化生に変化を与えることが示唆されている。除菌後10年間から17年間の長期にわたる研究にて胃粘膜の炎症、活動性は除菌後に速やかに改善し、萎縮も徐々に有意な改善を示した。腸上皮化生は胃体小弯のみ6年後より有意な改善を認めた。国際的胃炎分類のシドニーシステムに従って胃の5点から毎年継続的に10年の長期間経過を追った報告は他にはない。ピロリ菌感染症の保険適用拡大に大きく影響を与えた。Kodama M, et al. Ten-year prospective follow-up of histological changes at five points on the gastric mucosa as recommended by the updated Sydney system after *Helicobacter pylori* eradication. *J Gastroenterol.* 47: 394-403, 2012. 除菌後17年間の解析で、萎縮は除菌1年後からの有意な改善を認めた。腸上皮化生は期間を通して有意な変化を認めなかった。男性は女性より腸上皮化生が高度で胃癌高リスクが示唆された。腸上皮化生を有す症例、男性において除菌後胃癌リスクへの注意したフォローが必要と考慮された。Kodama M, et al. Gastric mucosal changes, and sex differences therein, after *Helicobacter pylori* eradication: A long-term prospective follow-up study. *J Gastroenterol Hepatol.* 36(8):2210-2216, 2021.





所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース教授 (福祉健康科学研究科, 医学系研究科, 減災・復興デザイン教育研究センター 兼任)	
氏名	徳丸 治 (Tokumaru Osamu, MD, PhD, MPH, LtCol JGSDFR)	
取得学位	博士 (医学)、東京女子医科大学、2000年1月; MPH, Univ. Texas, 2001年8月	
SDGs目標	   	

研究分野	生理学, 予防医学, 航空宇宙医学
研究キーワード	航空宇宙医学, 電子スピン共鳴, フリーラジカル, 質量分析, 感染症, 性差, 防災, 避難所



研究内容	<p>【航空宇宙医学】パイロットや宇宙飛行士は特殊で過酷な環境でミッションを遂行する。特殊環境での生理機能の解明を目指すとともに、航空宇宙医学の広報に努めている。</p>  <p>ヒドロキシルラジカル NOラジカル</p>  <p>ESR分光器</p> <p>ATP in hippocampus (mouse) m/z = 505</p>  <p>【スピン共鳴解析学】BURST「量子生物学」の課題として、核磁気共鳴 (NMR) や電子スピン共鳴 (ESR, 右上図) など量子力学的現象を生命科学に応用し、酸化ストレスや虚血再貫流障害の病態生理の解明を目指している。</p> <p>【脳組織内の高エネルギーリン酸の分布の可視化】質量分析イメージングにより、脳虚血に伴うマウス脳内の高エネルギーリン酸 (ATP, ADP, AMP) の変化を時間・空間的な可視化に取り組んでいる (右中図)。</p> <p>【小児感染症の性差・年齢差】厚生労働省の公表する感染症定点観測データを用いて、小児感染症の年齢毎の性差に関する研究を継続している。</p> <p>【防災】我が国は、世界有数の災害多発国である。令和3年度大分大学重点領域研究推進プロジェクトの研究代表者として、自然災害時の避難所における健康危機の実態把握と解決を目指して領域横断的な研究を展開している (右下図)。</p> 
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>【学内プロジェクト】令和3年度大分大学重点領域研究推進プロジェクト「自然災害時の避難所における健康危機管理」研究代表者 (令和3年度~5年度)</p> <p>【外部資金】科学研究費 基盤研究 (C) 代表 (令和4年度-令和6年度), その他に分担4件</p> <p>【社会貢献】厚生労働省 大分労働局 労働衛生指導医; 防衛省 陸上自衛隊 予備2等陸佐; 日本宇宙航空環境医学会 理事・広報委員長; 日本渡航医学会「渡航医学」編集委員</p> <p>【専門医・学会認定資格】小児科専門医, 日本医師会認定産業医, 生理学エデュケーター, 日本渡航医学会認定医療職, 宇宙航空医学認定医</p> <p>【主な業績】航空宇宙医学: Tokumaru O et al. <i>Aviat Space Environ Med</i> 1999;70:256-263.; Tokumaru O et al. <i>Clin Neurophysiol</i> 2003;114:1926-1935 Tokumaru O et al. <i>J Travel Med</i> 2006;13:127-132. スピン共鳴解析学: Tokumaru O et al. <i>Neurochem Res</i> 2009;34:775-785.; Tokumaru O et al. <i>J Surg Res</i> 2018;228:147-153.; Umeda R, Tokumaru O et al. <i>J Clin Biochem Nutr</i> 2019;64:20-26.; Matsumoto S, Tokumaru O et al. <i>J Clin Biochem Nutr</i> (in press). 感染症: Eshima N, Tokumaru O et al. <i>PLoS ONE</i> 2011;6:e19409.; Eshima N, Tokumaru O et al. <i>PLoS ONE</i> 2012;7:e42261.; Hino Y, Eshima N, Tokumaru O et al. <i>Children</i> 2021;8:40; Hino Y, Eshima N, Tokumaru O et al. <i>J Infect Chemother</i> 2022;28:929-933. 防災: Tokumaru O et al. <i>Disaster Med Public Health Prep</i>. doi:10.1017/dmp.2021.99</p> <p>詳細は <a href="https://researchmap.jp/osamu_tokumaru?lang=ja">https://researchmap.jp/osamu_tokumaru?lang=ja</a> をご覧ください。</p>
---------------	--

- 役員
- 大学院教育学研究科 教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・教授	
氏名	中山 慎吾 (Nakayama Shingo)	
取得学位	社会学博士、筑波大学、1991年3月	
SDGs目標		



研究分野	高齢者・障害者福祉 福祉社会学
研究キーワード	ケアの肯定的側面
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ケアの肯定的側面に関する研究 「ケアの肯定的側面 (positive aspects of caregiving)」というテーマを中心に自分自身の研究を統合的に進めていけるのではないかと考えています。この研究テーマには、福祉従事者の実践と家族介護者による介護の双方を含めることができます。 具体的には、社会福祉従事者の肯定的仕事観に関わる質問紙調査の実施と分析に取り組んできました (論文1, 2, 4, 5)。 最近では、主に心理学の領域で関心が高まっているマインドフルネス・トレーニングを、福祉施設職員への研修等に応用できないかと考え、研究に取り組みつつあります。</li> <li>●社会福祉実践における福祉理念に関する研究 昭和20年代から障害者福祉の実践に携わった糸賀一雄や田村一二などの著作を参照して、福祉実践における福祉理念に関する研究も行っています (著書1)。</li> <li>●地域包括ケアのあり方について 福祉健康科学部では、地域包括ケア概論の授業も担当しており、地域包括ケアに関する研究も行っています (論文3)。</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●論文           <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 障害者施設職員における肯定的仕事観及び職務環境と仕事への満足度・熱中度との関連性, 福祉健康科学, 2021年</li> <li>2. 障害者施設職員における業務等の認識に関する研究: 自由回答の質的及び数量的分析, 九州社会福祉学, 2020年</li> <li>3. 地域包括ケアの広がりとは多職種連携: ウェルビーイングの多元性に対応する支援体制, 福祉社会学部論集, 2019年</li> <li>4. 障害者施設職員における職務環境の認識に関する研究: 自由回答に基づく分析, 福祉社会学部論集, 2019年</li> <li>5. 障害者施設職員の肯定的仕事観に関する研究: 自由回答に基づく分析, 福祉社会学部論集, 2019年</li> </ol> </li> <li>●著書           <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 渡部昭男ほか編『糸賀一雄研究の新展開 ひとと生まれて人間となる』(第11章「糸賀一雄と田村一二におけるケアの肯定的側面の探求」), 2021年</li> </ol> </li> </ul>

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・教授	
氏名	松本 由美 (Matsumoto Yumi)	
取得学位	博士 (商学)、早稲田大学、2009年12月	
SDGs目標		


研究分野	社会保障論
研究キーワード	社会保障、医療保険、フランス、ドイツ
研究内容	<p>●人口高齢化等の変化に対応した医療保険者の編成に関する国際比較研究 (2019年4月～2023年3月)</p> <p>人口高齢化等の変化を背景として、医療保険の持続可能性を高めることが喫緊の政策課題となっているが、多数の保険者によって運営される日本の医療保険にとって、この課題への対応は容易ではない。日本と類似した医療保険制度を持つフランスとドイツでは、近年、保険者の編成をめぐる重要な改革が実施され、財政的安定や効率性・公平性の向上が図られている。そこで本研究は、フランス・ドイツとの比較考察に基づいて日本の医療保険者の編成の「あるべき姿」を示すことを目的とする。</p> <p>●予防重視型の医療保障システムの制度設計に関する研究 (2015年4月～2018年3月)</p> <p>人口の高齢化の進展にともなう医療・介護費用の増大が見込まれるなか、医療保障システムにおける「予防」の比重を高めることが必要となっている。本研究では、フランスとドイツの取組みについて検討し、次のようなことを明らかにした。両国では、人々の健康維持や疾病の悪化防止に必要な「予防」と「治療」を継続的・一体的に提供するための制度的な枠組みが整備されつつある。比較考察を通じて、日本において予防重視型の医療保障システムを構築するためには、かかりつけ医 (家庭医) の役割、恒常的な連携体制の構築、医療の質の向上を促す仕組み、および医療保険者の役割を検討することが重要であることが示唆された。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 松本由美 (2020) 「フランスの補足的医療保険における連带的要素」『週刊社会保障』第74巻3100号、42-47.</li> <li>2. 松本由美 (2020) 「医療保険制度における疾病管理—フランスとドイツの制度的対応からみえてくるもの」『健康保険』第74巻6号、14-19.</li> <li>3. 松本由美 (2018) 「フランスとドイツにおける疾病管理・予防の取組み」『健保連海外医療保障』No.117、1-13.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 松本勝明 (編著)、加藤智章、片桐由喜、白瀬由美香、松本由美 (2015) 『医療制度改革—ドイツ・フランス・イギリスの比較分析と日本への示唆—』旬報社.</li> </ol>



## 福祉健康科学部

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 心理学コース・教授	
氏名	渡辺 亘 (Watanabe Wataru)	
取得学位	博士 (心理学)、広島大学、2001年3月	
SDGs目標		
研究分野	臨床心理学	
研究キーワード	臨床心理学 心理療法	
研究内容	<p>① 心理療法に関する実践的研究</p> <p>臨床心理士・公認心理師として心理療法やカウンセリングによる社会貢献を実践しながら、心理療法のプロセスや心理療法家のあり方について考究する。特に対人関係精神分析の視点を中心に据えることによって、心理療法家とクライアント間で構成される双方向の創造的な過程を明らかにし、一対一の個別的な心理療法の本質について検討を進める。</p> <p>② 遊戯療法に関する実践的研究</p> <p>子どもに対する心理療法である遊戯療法（プレイセラピー）について、そのプロセスや心理療法家のあり方について考究する。</p> <p>③ 〈自分〉〈私〉という心理的経験に関する研究</p> <p>他の誰でもない「この私」に関する経験が心理療法・遊戯療法の場でいかに構成されるのか、それを助けるものは何かを、特に心理療法家とクライアントの関係の力動を支点として検討を行う。</p> <p>④ 心理専門職の養成に関する研究</p> <p>心理専門職（臨床心理士・公認心理師）の養成を行いながら、心理専門職の職能について検討するとともに、その発達過程とそれを促進・阻害する要因を明らかにし、より豊かな心理職の養成体制を実現する。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>著書（共著・共編） 2019「時間のかかる営みを、時間をかけて学ぶ人のための心理療法入門」創元社</p> <p>著書（共著・共編） 2018「教育臨床の実際：学校で行う心と発達へのトータルサポート」ナカニシヤ出版</p> <p>学術論文 2020「心理療法における見ることの諸様態」大分大学臨床心理学研究 創刊号</p> <p>学術論文 2019「心理療法における乖離された自己の構成と自己の多重化—「一個人としての姿」に視点を置いて—」大分大学教育学研究科心理教育相談室紀要15</p>	



所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・准教授
氏名	阿南 雅也 (Anan Masaya)
取得学位	博士 (保健学)、広島大学、2012年3月
SDGs目標	



研究分野	運動器理学療法学, バイオメカニクス
研究キーワード	動作解析, 変形性関節症, 力学的ストレス, 協調性, 変動性

研究内容	<p>ヒトは地球上において、重力の影響下にて立ち上がり動作、歩行などの基本的動作をおこなっています。しかし、加齢や外傷などにより、関節への力学的ストレスがより増大することで変形性膝関節症などの変性疾患が生じ、活動制限に至ります。運動器疾患を対象としている理学療法士において、病態発症および進行の原因を明らかにし、さらに個々の患者に応じた理学療法を提供するための客観的評価方法を開発することは非常に重要であります。</p> <p>当研究室は三次元動作解析システムや筋電計、モーションセンサーなどを用いて、高齢者や運動器疾患患者の動作の特徴を明らかにします。そして、理学療法学の発展に貢献できることを目指しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 運動器疾患の病態発症および進行の原因の解明に繋がる研究 日本学術振興会・科学研究費・基盤研究 (C)：関節に作用する圧縮力や骨内に生じる応力からみた変形性膝関節症の進行要因の解明, 2020~2023年度</li> <li>● 運動器疾患に対する運動機能評価に基づくサブグループ化を確立する研究 学長戦略経費 若手研究支援：前十字靭帯損傷予防のための評価方法の検討, 2020年度</li> <li>● 新しい客観的評価方法を利用した理学療法の効果検証における症例研究 学長戦略経費 若手研究支援：クラシック・バレエにおける身体全体の協調運動と身体機能との関連, 2019年度</li> </ul> <p>Researchmap : <a href="https://researchmap.jp/read0150790">https://researchmap.jp/read0150790</a></p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Ibara T, Takahashi M, Shinkoda K, Kawashima M, <u>Anan M</u>: Hip sway in patients with hip osteoarthritis during one-leg standing with a focus on time-series data. Motor Control 25(3):1-17, 2021</li> <li>2. Tokuda K, <u>Anan M</u>, Sawada T, Tanimoto K, Takeda T, Ogata Y, Takahashi M, Kito N, Shinkoda K: Biomechanical mechanism of lateral trunk lean gait for knee osteoarthritis patients. J Biomech 66: 10-17, 2018</li> </ol> </li> <li>● 著書 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 阿南雅也:変形性膝関節症. Crosslink理学療法学テキスト 運動器障害理学療法学 (加藤浩 編). pp240-275, メジカルビュー社, 2020</li> <li>2. 阿南雅也:隣接関節との関連を考慮した評価. 人工股関節全置換術の理学療法 (対馬栄輝 編). p86-95, 文光堂, 2020</li> </ol> </li> <li>● 受賞 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. World Physiotherapy subgroup outstanding poster presentation award: International Association of Physical Therapists working with Older People(IPTOP): World Physiotherapy Congress 2021</li> </ol> </li> </ul>
---------------	---

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部


医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部




その他学内施設等

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 心理学コース・准教授	
氏名	飯田 法子 (Iida Noriko)	
取得学位	修士 (教育学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標		




研究分野	臨床心理学、福祉心理学
研究キーワード	子育て支援、心理支援
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>自身が発達障害を抱える母親の育児支援の研究 虐待の難治例の中には、母親自身に発達障害が存在するケースが多いといわれており、本研究では、その家族を支援するためのプログラムを作ることを目的としている。具体的には家族療法の様子を動画に録画し、その映像を子育て支援者とともに振り返り、子育てのエッセンスを学べるようなプログラムの開発を行っている。</li> <li>夫婦間紛争における子どもの心理支援 臨床心理士（公認心理師）の立場から子どもの強制執行など夫婦間紛争の狭間にいる子どもへの支援について、実際に関わった家族への支援の事例検討を通して心理士の行う支援の在り方への提言や、子どもの意思に係る児童福祉的な観点から、提言を行っている。</li> <li>保育現場の子育て支援に関する研究（大分県保育コーディネーターに関する研究） 大分県保育コーディネーター養成研修委員（平成27年～）の立場から、大分県独自の認定制度である大分県保育コーディネーターに関する調査研究を実施中（継続予定）である。</li> </ol>
研究業績・アピールポイント	<p>子育て支援の中でも、特に、母親の発達障害や夫婦間紛争など子育て支援における心理臨床や、保育現場での支援に関して、実際に現場に入り、調査や開発等を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●論文 <ul style="list-style-type: none"> <li>・母親自身が高機能自閉スペクトラム症である4事例の育児支援についての一考察, 社会福祉科学研究, 2018年 単著</li> <li>・強制執行における「同時存在」についての一考察 — 「子どもの意思」の視点から—, 公益財団法人鉄道公財会, 2018年 単著</li> <li>他</li> </ul> </li> <li>●外部助成金 <ul style="list-style-type: none"> <li>「母親自身に発達障害がみられる家族への子育て支援プログラム」の開発・応用</li> <li>・平成30年度～32年度 日本学術振興会科学研究費補助金（基礎研究C）課題番号18K03164</li> <li>・平成24年度～26年度 日本学術振興会科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）課題番号24653207</li> <li>・「子ども引き渡しの強制執行への立ち合いにおける心理士の在り方」に関する研究 平成27年度「明治安田こころの健康財団」研究助成対象</li> </ul> </li> <li>●著書 <ul style="list-style-type: none"> <li>・保育実践と児童家庭福祉論, 第15章 保育と教育・療育・保健・医療等の連携とネットワーク, 勁草書房, 2017年, 12月, 共著</li> <li>他</li> </ul> </li> </ul>

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 心理学コース・准教授	
氏名	池永 恵美 (Ikenaga Megumi)	
取得学位	博士 (心理学)、九州大学、2012年3月	
SDGs目標		
研究分野	臨床心理学	
研究キーワード	臨床動作法、心身相関、心理劇、発達障害	
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>●身体志向の心理療法における身体感覚の気づきと自己制御に関する研究 近年、心理的問題に対する身体志向の心理療法が国内外で非常に注目され、その代表的な技法としてマインドフルネスや臨床動作法が挙げられる。しかしながら、両者の従来の研究では、心理的側面や脳機能に関する検討が中心であり、実際の身体の状態との関連については不明な点が多く、身体面へのアプローチが心理的変容になぜつながるのか、その作用機序については統一した見解はない。そこで本研究では実際の動作や筋緊張をバイオメカニクス的手法を用いて客観的に計測し、様々な心理的指標との関連について検討を行っている。</li> <li>●青年期発達障害者を対象とした集団心理療法の効果に関する研究 青年期はアイデンティティの形成が重要なテーマとなる時期であり、杉村（1998）はアイデンティティの形成を「自己の視点に気づき、他者の視点を内在化すると同時にそこで生じる両者の視点の食い違いを相互調整によって解決するプロセス」としたが、他者との相互的コミュニケーションに困難を有する青年期発達障害者の場合にはアイデンティティの形成に困難を有することが示唆される。また同時に幼少期からの生育環境等から二次障害を呈していることも多く、青年期発達障害者が同世代の他者と仲間関係を築き、相互受容的なコミュニケーションを体験できる集団心理療法の場は青年期発達障害者へ心理支援として非常に重要である。本研究では青年期発達障害者の集団心理療法の体験プロセスを自己理解・他者理解の変容という観点から検討を行っている。</li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●論文 <ul style="list-style-type: none"> <li>・池永恵美・河野伸子（2022）. 青年期の発達障害者を対象とした集団心理療法過程—アスペルガー障害のある男性の3年間の経過の検討—. 大分大学臨床心理研究, 第2号, pp13-21.</li> <li>・酒井奈那・富永咲子・花岡祐奈・松縄明日香・和田恵利菜・渡邊晴美・池永恵美（2020）. 青年期発達障害者への集団心理療法に関する先行研究の動向と課題. 大分大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要, 第15号, pp126-136.</li> <li>・池永恵美（2012）. 臨床動作法における援助者の援助が動作者の動作体験に及ぼす影響. 心理臨床学研究, 29巻6号, pp762-773.</li> </ul> </li> <li>●著書 <ul style="list-style-type: none"> <li>本吉大介・池永恵美（2019）. 動作法における体験様式の研究. 針塚進監修・遠矢浩一編. 「臨床動作法の実践を学ぶ」. 新曜社, pp175-191.</li> </ul> </li> <li>●受賞 <ul style="list-style-type: none"> <li>2011年 日本リハビリテーション心理学会研究奨励賞</li> </ul> </li> </ul>	

# 福祉健康科学部



所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・准教授	
氏名	紀 瑞成 (Ji Rui-Cheng)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1998年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	リンパ系の構造・機能およびリンパ管新生に関する研究
研究キーワード	リンパ学、実験病理学、リハビリテーション科学、免疫組織細胞化学、分子生物学
研究内容	<p>1. リンパ管系の臓器内分布と新生に関する免疫組織化学的研究          リンパ系は、リンパ管・リンパ節・胸腺などからなる複合システムで、リンパ循環を介して組織液の血液中への回収にあずかり、また免疫系においても重要な役割を担っている。本研究の遂行に必要な、臓器内にあるリンパ管内皮細胞の増殖・分化の免疫組織化学的観察、および病理標本の網羅的検討を行っている。</p> <p>2. 種々の影響因子によるリンパ管内皮細胞の性状および細胞動態の解析          リンパ管の細胞生物学的性状を明らかにするために、細胞増殖因子・接着因子・化学因子に対するin vitroでの細胞の動態変化を評価・解析している。さらに、最近では、超分子複合体の優れたアロステリック効果と抗癌メカニズム、および関節炎に対する抗腫瘍壊死因子療法の効果についての研究にも携わっている。</p> <p>3. リンパ系における特異的機能分子の発現と悪性腫瘍の転移機構などの解析          疾患動物モデル（悪性腫瘍、炎症、糖尿病、創傷治癒、リンパ浮腫）における微小循環系の構築とリンパ管新生・再生の機序に関する分子生物学的解析を行い、特に腫瘍とリンパ行性転移との関連性を明らかにしようとして試みている。</p> <p>4. 筋萎縮及び筋損傷の回復過程におけるリンパ管系の役割とそのメカニズムの解明          リンパ管系は、骨格筋の萎縮・損傷・再生過程においても重要な役割を担っていると考えられている。最近では、四肢の骨格筋疾患におけるリンパ管新生の関わりが注目されつつある。本研究プロジェクトでは、早期リハビリによる筋萎縮と筋損傷の回復促進過程でのリンパ管系の応答、およびそれらの病態を制御する内皮細胞のシグナル伝達機構の解明に取り組んでいる。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1. リンパ系疾患に関わる実験動物モデル（悪性腫瘍、リンパ浮腫）を用いた、リンパ管内皮細胞の変化とその分子機構の検証技術（癌のリンパ行性転移の抑制やリンパ浮腫の予防に貢献）。</p> <p>2. リンパ免疫系疾患に関わる内皮細胞のシグナル伝達機構の発見（新たな分子標的治療の開発に貢献）。</p> <p>3. リンパ管系の形態・機能応答が及ぼす影響およびそのメカニズムの解析（早期リハビリによる筋損傷の治癒過程及び筋萎縮の回復過程の解明）。</p>



所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・准教授	
氏名	菅田 陽怜 (Sugata Hisato)	
取得学位	博士 (保健学)、大阪大学、2012年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	リハビリテーション科学、神経科学、人間工芸学、人間情報学	
研究キーワード	運動学習、脳機能イメージング、仮想現実、ブレイン・マシン・インターフェース	
研究内容	<p>1) 運動学習に関わる脳内メカニズムの解明 理学療法には疾患や障害で失った運動機能を再度学習する、すなわち「運動学習」のプロセスが含まれる。この、運動学習に関する能力には個人差が存在することが知られているが、その脳内メカニズムが十分に解明されたとは言いがたい。この運動学習に関わる脳内メカニズムを理解できれば、新たなリハビリテーションの開発などにつながる可能性がある。</p> <p>2) 身体化錯覚の転移を用いた新たな神経リハビリテーションの開発 ヒトは日常生活において、「自分は自分である」あるいは「自分の身体は自分のモノである (身体所有感)」ことに対して特に疑問を持つことはない。しかしながら、近年では視触覚刺激などにより自己認識の実験的操作が可能になっており、この自己認識を人工的に操作することにより、新たな神経リハビリテーションが生み出せるものと期待されている。</p> <p>3) 内受容感覚 (心の感覚) と運動学習能力との関連性解明 四字熟語の中に「心身一如」という言葉がある。これは、「肉体と心は一体のもので、分けることができず、一つのものの両面である」ということを意味している。この「心」の部分について、近年の研究で身体内の臓器や生理状態についての感覚として「内受容感覚」という言葉が使用されている。この内受容感覚は、人間における感情の本質的な根源とされているが、一方では、内受容感覚の機敏さは身体内のモニタリング能力、すなわち身体の適切な制御能力の高さを意味することが報告されている。このことは、内受容感覚の変化に従属して運動機能が変化することを示している。内受容感覚の変化によって運動機能が変化すると仮定すれば、内受容感覚を人工的に操作することによって運動機能の構成要素である「運動学習能力」を変調でき、引いては脳卒中患者に対する新たなリハビリ手法の開発につながる可能性がある。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Sugata H, et al. Role of beta-band resting-state functional connectivity as a predictor of motor learning ability. <i>Neuroimage</i> 210: 116562, 2020</li> <li>2. Sugata H, et al. Modulation of Motor Learning Capacity by Transcranial Alternating Current Stimulation. <i>Neuroscience</i> 391: 131-139, 2018</li> <li>3. Sugata H, et al. Frequency-dependent oscillatory neural profiles during imitation. <i>Sci Rep</i> 7: 45806, 2017</li> <li>4. Sugata H, et al. Common neural correlates of real and imagined movements contributing to the performance of brain-machine interfaces. <i>Sci Rep</i> 6: 24663, 2016</li> <li>5. Sugata H, et al. Relationship between the spatial pattern of P300 and performance of a P300-based brain-computer interface in amyotrophic lateral sclerosis. <i>Brain-Computer Interfaces</i> 3:1-8, 2016</li> <li>6. Sugata H, et al. Alpha band functional connectivity correlates with the performance of brain-machine interfaces to decode real and imagined movements. <i>Front Hum Neurosci</i> 8: 620, 2014</li> <li>7. Sugata H, et al. Neural decoding of unilateral upper limb movements using single trial MEG signals. <i>Brain Res</i> 1468: 29 -37, 2012</li> </ol>	





# 福祉健康科学部

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・准教授	
氏名	滝口 真 (Takiguchi Makoto)	
取得学位	博士 (学術)、佐賀大学、2021年3月	
SDGs目標		


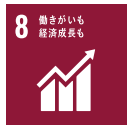
研究分野	社会福祉学、ソーシャルワーク
研究キーワード	価値と倫理、福祉思想、ソーシャルワーク、障がい児・者福祉
研究内容	<p>1. 社会福祉の哲学 社会福祉はマジョリティの社会においてマイノリティの問題を中心的課題とする糸賀一雄、阿部志郎、高田眞治らの福祉思想の援用を試みる。主として、近代社会福祉の礎を築いた石井十次、留岡幸助、山室軍平、石井亮一、井深八重等のミッションの背景にある福祉思想をも視野に入れた価値と倫理および対人援助観について考察する。</p> <p>2. コミュニティ・ソーシャルワーク研究 福祉現場のソーシャルワーカーやケアワーカーとの研究会を通して、障がい児・者および認知症の高齢者への具体的な支援方法について地域の社会資源を応用援用するソーシャルワークおよびコミュニティワークの実践を可視化し、考察を試みる。</p> <p>3. 障がい児・者福祉 障がい児・者を捉える社会からの側面と同時に障がい児・者から捉える社会への側面の両側面からのアプローチを研究の視座に置く。医学モデルと社会モデルの両視点の位置からの障がい観を通して、ソーシャルワークにおける人間観や価値観への提言を検討する。</p> <p>4. 余暇生活への福祉的支援 障がい者や認知症高齢者等の生活における余暇の活用並びに生活を営む中での余暇支援のあり方について考察を試みる。アメリカにおけるTR (セラピューティック・レクリエーション) を援用しつつ、ケアマネジメントを応用したA-PIE (①アセスメント→②計画→③実施→④評価→⑤再アセスメント) プロセスによる実証的研究を進める。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1. 「中年高齢期のひきこもりにある人々の生活困難の構造についての質的分析 — ソーシャルワーカーへのインタビュー調査を通して — 」(共著). 福祉文化研究第31号. 日本福祉文化学会. 2022.</p> <p>2. 「韓国老人長期療養施設におけるレクリエーション支援に関する考察 — 施設職員を対象としたテキストマイニング分析を通して — 」(共著). 日本看護福祉学会誌Vol.27 No.2. 日本看護福祉学会. 2022.</p> <p>3. 「介護支援専門員のもつスピリチュアリティとケアプランとの関連に関する研究」(共著). 日本看護福祉学会誌Vol.27 No.2. 日本看護福祉学会. 2022.</p> <p>4. 「権利擁護にかかわる組織、団体」(分担執筆). 日本ソーシャルワーク教育学校連盟編集. 『権利擁護を支える法制度』. 中央法規出版. 2021.</p> <p>所属学会：日本キリスト教社会福祉学会副会長 (学会誌編集委員長)、日本福祉文化学会理事 (学会誌査読委員)、日本看護福祉学会理事 (学会誌査読委員)、日本社会福祉学会代議員 (学会誌査読委員)、日本女子大学社会福祉学会専門委員 他</p>



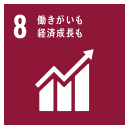

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 心理学コース・准教授	
氏名	中里 直樹 (Nakazato Naoki)	
取得学位	博士 (心理学)、広島大学、2017年3月	
SDGs目標		

研究分野	社会心理学, ポジティブ心理学
研究キーワード	Well-being, 幸福度, 人生満足度, 自由, 居住環境・居住地域, 統計解析
研究内容	<p>「1. 日本人のWell-beingの低さをもたらす要因についての検討—自由の観点から—」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本人のWell-being (幸福度) は, 他の先進諸国の人々と比べると低いことが一貫して報告されています。その原因について検討することを中心的な研究課題と位置付けています。研究知見を基に, Well-being向上の方策を提言することを目指しています。</li> <li>➤ 特に, 個人がどの程度自由に振る舞うことができているか (i.e., 自由選択の感覚) に着目し, 日米の社会人などを対象として国際比較研究を実施しています。</li> <li>➤ 近年では, 社会における規範の厳格さや身近な人々との関係の良好さも踏まえた複合的な検討も行っています。</li> </ul> <p>「2. 居住環境・地域, 個人の特徴, およびWell-beingの関連性についての検討」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● カナダのトロント大学に留学した際に実施した, 居住環境とWell-beingの関係についても引き続き関心を持っています。留学時には, 居住環境の向上を経験した人々を対象に, その前後5年のWell-beingの推移を分析しました。</li> <li>➤ 今後は, 日本国内および大分市内・県内における個々人の特徴に適した居住地域の研究を構想しています。</li> </ul> <p>「3. 学校教育現場や職場環境への『自由とWell-beingの関係』の適用可能性」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 研究内容1で見出された『自由とWell-beingの関係』が, 学校教育現場に適用できるかについても関心を持っており, 大分県の教育現場での調査も始めています。</li> <li>● 従業員のWell-beingについては, 長期的な観点から見た職場環境への好影響の可能性から, 近年, 社会で注目を集めています。こうした研究にも関心を持ち, 大分県の女性を対象に, 希望するライフコースの実現度とWell-beingとの関連性についての調査も始めています。</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 国際共同研究を含め, Well-beingに関する研究を10年以上にわたって実施してきた実績があります。</li> <li>● 多様な統計手法を用いて分析を行ってきました。公的機関が収集したものなどの大規模調査データの分析, 時系列データの分析, 国際比較分析, 個人 (各従業員など) と集団 (それぞれの職場など) との関係性を考慮した上での分析を得意としています。</li> </ul> <p>【主要論文】</p> <p>Nakazato, N., Nakashima, K., &amp; Morinaga, Y. (2017). The importance of freedom in the East and the West over time: A meta-analytic study of predictors of well-being. <i>Social Indicators Research</i>, 130, 371-388.</p> <p>Nakazato, N., Schimmack, U., &amp; Oishi, S. (2011). Effect of changes in living conditions on well-being: A prospective top-down bottom-up model. <i>Social Indicators Research</i>, 100, 115-135.</p> <p>【科研費研究プロジェクト】</p> <p>「規範の厳格さが自由選択の感覚とWell-beingに及ぼす影響に関する検討 (若手研究)」</p>



所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・准教授	
氏名	橋本 美枝子 (Hashimoto Mieko)	
取得学位	修士 (社会福祉学)、淑徳大学、1996年3月	
SDGs目標		

研究分野	社会福祉学、精神保健福祉
研究キーワード	ソーシャルワーク、ソーシャルワーク実習教育、省察的思考、内発的動機づけ
研究内容	<p>省察的思考に基づくソーシャルワーク実習教育方法の研究</p> <p>精神保健福祉士は、社会福祉学を基盤にソーシャルワークを実践する。それゆえ筆者は、精神保健福祉士と社会福祉士の実習を分断せず、学生がすでに実施した社会福祉士の実習体験を省察・言語化し、精神保健福祉援助実習の計画・実施に反映させる実習指導を実践してきた。実習指導のねらいは、実習を媒介に学生が事前指導・実習指導・事後指導を受ける過程で、ソーシャルワーカーに必要な知識、価値、スキルを獲得し向上させることである。本研究は、かような実習教育実践の効果を検証し、ソーシャルワーク実習指導の教育方法を確立することを目的としている。</p> <p>学生が作成した実習計画書および実習指導過程を分析すると、下記のことが言える。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 実習に対する動機付けの明確化 および強化             <p>内発的・内省的な実習計画ゆえに、学生は目的・目標を省察しつつ実習・指導に望むことができる。また、形骸化しがちな実習目標を意識した実習の実践と評価が可能になる。</p> </li> <li>2. 実習指導を媒介としたソーシャルワークスキルと知識の獲得             <p>実習体験の言語化、分類・作図によって自らの学習ニーズを可視化し、他者にプレゼンテーションすることで、言語化スキル向上の機会となる。また、言語化を通して、専門知識を深めるとともに、誤った理解を修正する機会となる。</p> </li> <li>3. ソーシャルワークプロセスの体験的学習             <p>学生が自身の学習ニーズに気づくために情報（実習体験）を整理・分析し、計画し、実行・評価する過程は、ソーシャルワークの過程そのものである。学生には、実習で事例研究を課しているが、その前に自分の成長に必要な実習計画を立てる作業は予行演習となる。</p> </li> <li>4. 実習指導を媒介としたソーシャルワークの価値・視点の獲得             <p>自らの実習体験をストレングス視点で正当に評価し、ストレングスを活かした実習計画・実施をする経験は、実習で関わるクライアントのストレングスを発見し、それを活かしてエンパワメントをはかるソーシャルワークの価値と視点に合致。</p> </li> </ol>
研究業績・アピールポイント	<p>従来の実習教育では、実習配属施設に合わせて実習計画を立てる傾向にある。しかし筆者は、個々の学生に自身がソーシャルワーカーになるために、実習を通して何を習得したいのか、実習体験の省察をもとに実習目標を明確化し、その後に配属先を決定する。実習計画書は、先に立てた実習目標を基に配属機関の特性に応じて微調整する。この逆転の発想が、学生が自分の学習ニーズを充足させるための実習計画および実習の実施・評価を可能にする。</p> <p>この省察的思考に基づくソーシャルワーク実習教育方法の研究自体は、まだ取り組み始めたばかりである。</p>

所属・職位	福祉健康科学部福祉健康科学科心理学コース・准教授	
氏名	溝口 剛 (Mizoguchi Tsuyoshi)	
取得学位	修士 (心理学)、広島大学、1997年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	臨床心理学	
研究キーワード	精神分析的な心理療法, 情緒発達と心理支援, 地域支援ネットワーク	
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 関係論の視点からみた精神分析的な心理療法の実践と理論的検討 クライアントの心理力動の理解や有効な心理療法的関わりについて、特に関係論的精神分析の立場から検討を行っている。またセラピストの訓練過程における臨床経験の組織化と対人関係という観点から検討を行っている。</li> <li>2. 児童期・思春期・青年期の情緒発達と心理支援に関する研究 大学生が直面しがちな心理的問題や学生生活サイクル上の問題、学生支援体制等に関する研究を行っている。また、不登校など学校不適応を呈する児童生徒の心理学的理解や彼らに対する心理支援に関する論考も継続している。</li> <li>3. 現代青年の心理的問題と援助、ならびに地域支援ネットワークに関する研究 おおいたひきこもり地域支援センター（青少年自立支援センター）の立ち上げ初期から9年間スーパーバイザーとして携わり、並行して不登校児童生徒の親同士のネットワーク構築事業や大分いのちの電話相談員養成講座などにも携わっている。</li> </ol>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>●論文 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 心理臨床家としての核 (core) をつくる—「公認心理師」時代の相談室における臨床教育の意義 (単著)；大分大学臨床心理研究第2号, 2-11., 2021年</li> <li>2. ひきこもり傾向をもつ若者のバウムテストにみられる描画特徴 (共著)；大分大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要第7号, 145-156., 2011年</li> <li>3. 「五月病」からアイデンティティの旅へ (単著)；大学と学生15号, 45-50, 2005年</li> <li>4. 対象関係からみた「うらみ」の様相～般若にみられるうらみの分析を通して～ (単著)；心理臨床学研究18(6), 606-614., 2001年</li> </ol> </li> <li>●著書 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 時間のかかる営みを、時間をかけて学ぶための心理療法入門 (共著)；創元社, 2019年</li> <li>2. 教育臨床学の実践—学校で行う心と発達へのトータルサポート— (初版/第2版) (共編著)；ナカニシヤ出版, 2011年/2018年</li> <li>3. 大学生の心の成熟と転落を左右する対人関係のもち方—そのメカニズムとコミュニケーションのあり方— (共著)；あいり出版, 2012年</li> <li>4. 精神分析における未構成の経験—解離から想像力へ— (D.B.スターン著) (共訳)；誠信書房, 2003年</li> </ol> </li> </ul>	

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・准教授	
氏名	三好 禎之 (Miyoshi Yoshiyuki)	
取得学位	博士 (社会福祉学)、日本福祉大学、2018年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	社会福祉学 生活構造論 内発的発展論	
研究キーワード	健康寿命の延伸 社会的関係資本 ノルディック・ウォーク 生活構造 内発的	
研究内容	<p>—研究分野—</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.公害被害者世帯の生活構造研究</li> <li>2.公害被害者世帯地域の内発的発展に関する研究</li> <li>3.公民学連携事業による健康寿命延伸施策と生活保障に関する研究</li> </ol> <p>—研究分野1,2の紹介—</p> <p>高度経済成長期に顕在化した四大公害問題を主に研究しています。なかでも、公害被害者世帯の生活構造がいかに破壊され、階層落層、階層転落が生じたのか。また、内発的な力によって窮乏化の状況をどのように脱したのか、ライフヒストリー法により実態を探索し、生活再建に必要な施策を研究しています。</p> <p>—研究分野3の紹介—</p> <p>健康寿命の延伸と社会的関係資本を運動によっていかに延伸させつつ、地域で福祉的効用を高めることができるのかを研究しています。現在、大分県内4市と宮城県1市でノルディック・ウォーク教室を開催しつつ、健康寿命の延伸と社会的関係資本の醸成にかかる研究に取り組んでいます。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>○「水俣病多発地域における被害者の生活保障と支援団体に関する研究—ライフヒストリー分析を通して」 日本福祉大学博士論文 2018</p> <p>○「ノルディック・ウォークを用いた体力向上に関する研究—豊後高田市におけるパネル調査—」 『福祉社会科学』 大分大学大学院福祉社会科学研究所 2021</p>	



所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 心理学コース・准教授	
氏名	村上 裕樹 (Murakami Hiroki)	
取得学位	博士 (心理学)、名古屋大学、2012年5月	
SDGs目標		

研究分野	心理学
研究キーワード	感情、自律神経活動、脳、生理反応、マインドフルネス
研究内容	<p>● 情動制御の神経生理学的メカニズムに関する研究</p> <p>さまざまな心理療法に組み入れられている認知活動について整理しなおし、ストレスの低減につながる認知活動と感情反応、脳機能、自律神経活動、免疫・内分泌系反応の関連性について研究しています。</p> <p>特に現在は、ストレスの低減やうつ病の再発予防効果が認められている「マインドフルネス」に注目しています。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://researchmap.jp/h.murakami">https://researchmap.jp/h.murakami</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>● 論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Kobai, R. &amp; Murakami, H. (2021). Effects of interactions between facial expressions and self-focused attention on emotion. PLOS ONE, e0261666.</li> <li>2. Terasawa, Y., Oba, K., Motomura, Y., Katsunuma, R., Murakami, H., &amp; Moriguchi, Y. (2021). Paradoxical somatic information processing for interoception and anxiety in alexithymia. European Journal of Neuroscience. 54(11), 8052-8068.</li> <li>3. Murakami, H., Katsunuma, R., Oba, K., Terasawa, Y., Motomura, Y., Mishima, K., &amp; Moriguchi, Y. (2015). Neural Networks for Mindfulness and Emotion Suppression. PLoS One, 10(6), e0128005.</li> </ol> <p>● 著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 村上裕樹 (2012). 第7章 心的外傷後ストレス障害 (pp. 169-202) 熊野宏昭・今井正司・境泉洋監修『メタ認知療法：うつと不安の新しいケースフォーミュレーション』(全395頁) 日本評論社</li> </ol> <p>● 受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 村上裕樹・松永昌宏・大平英樹 (2008). 遺伝子多型が脱中心化による感情制御に及ぼす影響 日本感情心理学会第16回大会 (大妻女子大学, 5月)</li> </ol>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・准教授	
氏名	八木 直樹 (Yagi Naoki)	
取得学位	博士 (文学)、九州大学、2008年3月	
SDGs目標	 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	歴史学
研究キーワード	大友氏、戦国大名、戦国時代
研究内容	<p>1. 室町・戦国時代における大友氏の領国支配に関する研究</p> <p>大友氏は、鎌倉時代以来、豊後（現大分県）を本拠とし、幕府が任命した守護を出身とする大名です。鎌倉・室町・戦国時代を通して約400年間、同じ国を支配し続けた大名家は全国的にもかなり珍しいです。その大友氏が室町時代の守護から戦国時代の戦国大名へと成長できた過程と理由を研究しています。具体的には、領国支配を担った組織はどのようになっていたのか、どのような家臣がどのような役割を果たしていたのかを考えています。</p> <p>2. 豊後大友氏を中心とした九州戦国史に関する研究</p> <p>戦国時代の大友氏は、本拠地豊後以外の国々へと勢力を拡大していきます。そして現地の様々な領主層を支配下に組み入れていきました。戦国大名大友氏と現地の領主層との関係を追及することにより、大友氏を中心とした九州戦国史を叙述したいと考えています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2019年、八木直樹「耳川大敗と大友領国」黒嶋敏編『戦国合戦「大敗」の歴史学』山川出版社</li> <li>2018年、八木直樹「大友義統の家督相続時期について」鹿毛敏夫・坪根伸也編『戦国大名大友氏の館と権力』吉川弘文館</li> <li>2014年、八木直樹「戦国大名大友氏の普請命令と免除特権」稲葉継陽・花岡興史・三澤純編『中近世の領主支配と民間社会—吉村豊雄先生ご退職記念論文集』熊本出版文化会館</li> <li>2014年、八木直樹「戦国期九州における情報伝達と外交交渉—大友氏の使僧真光寺を中心に—」『九州史学』166号</li> <li>2013年、八木直樹「戦国大名大友氏の軍事編成と合戦」鹿毛敏夫編『大内と大友—中世西日本の二大大名—』勉誠出版</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、八木直樹著『戦国大名大友氏の権力構造』戎光祥出版</li> <li>2014年、八木直樹編著『シリーズ・中世西国武士の研究 第2巻 豊後大友氏』戎光祥出版</li> </ol>

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・准教授	
氏名	ラングリ・レイモンド (Langley, Raymond)	
取得学位	博士 (教育心理学)、University of Illinois大学、1995年6月	
SDGs目標	  	
研究分野	教育心理学、理科と数学の教材の発達、国際教育	
研究キーワード	cognitive educational psychology、international education、bilingual cognition、science education	
研究内容	<p>●教育心理学と国際交流に関する研究</p> <p>専門は心理学、特に教育心理学と認知的心理学。人間の脳の働きと学習の関係に興味があります。今は行なっている研究は、大学でどうやって、分かりづらい概念を効果的に教えるか、バイリンガル教育、バイリンガル知識表現、日本学部生と留学生の合流した授業でどうやって相互教育と相互理解を促進するか、という研究です。</p> <p>My research interests include educational and cognitive psychology, the relationship between learning and the brain, science education, translation, and intercultural communication. Ongoing projects include developing approaches to teach difficult science and math concepts, bilingual content instruction, and international student education.</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>I have found with regard to global competence that for domestic students, global competence is associated with the number of languages spoken, while for international students it is associated with years living in Japan. I am also developing classroom techniques for joint online classes where students come from different countries. In addition, I have demonstrated the efficacy of bilingual education for concept understanding.</p> <p>●論文</p> <p>1. 2020年、Kaori Burkart, Raymond Langley, and Christopher Burkart, "The Applicability of the Global Competency and Intercultural Sensitivity Indices in the Japanese Educational Environment", World Council on Intercultural and Global Competence, online journal. 2. 2013年、Raymond Langley, "Tacit Knowledge and Text Comprehension in College Students: Problems in Understanding the Concept of Natural Selection", Oita Text Forum Journal, Vol. 1, Jan.</p> <p>●著書</p> <p>1. 2019年、Kazumi Nagaike and Raymond Langley, "Practicing Shojo in Japanese New Media and Cyberculture: Analysis of the Cell Phone Novel and Dream Novel", in Shojo Across Media, Palgrave Macmillan.</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・講師	
氏名	安藤 敬子 (Ando Takako)	
取得学位	博士 (看護学)、大分県立看護科学大学、2022年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	看護学
研究キーワード	看護教育、産業保健、睡眠
研究内容	<p>● 交替勤務労働者における睡眠に関する研究</p> <p>交替勤務労働者は、概日リズムに反する生活をしている。そのため、健康を害したり、安全のリスクが高いことが知られている。これらのリスクを低減するための労働者ができるセルフケアや組織的な関わりについて検討し、産業保健活動に活かし、労働者の健康と安全を守ることに寄与することを目的にしている。</p> <p>1) 安藤敬子、影山隆之、小林敏生：男性交替勤務労働者の深夜勤における眠気と関連する要因 生活習慣および職場ストレス要因との関連. 産業精神保健 27 (1) : 36-46, 2019.</p> <p>2) 安藤敬子、影山隆之：三交替勤務に従事する男性労働者の深夜勤務中の眠気に対する睡眠衛生教育の効果. 産業精神保健 29 (3) : 273-285, 2021.</p> <p>● 交替勤務労働者の経耳道光照射による概日リズムの改善に向けたプログラム開発</p> <p>これまで経耳道光照射による抑うつ状態の改善が報告され、その機序として概日リズムへの影響が考えられている。そこで、夜勤をする交替勤務者において覚醒レベルの変化が起こるのか、生体リズムに関連する時系列データ（心拍のR-R間隔の変動、自律神経活動としてのHF・LF成分、身体活動量を測定する加速度）によって評価する。</p> <p>科学研究費助成 基盤研究 (c) 2021年~2024年</p>
研究業績・アピールポイント	<p>労働をする期間は、人生において長い時間であり、また、退職後の健康にも影響する。そのため労働者の健康と安全を守ることは大きな意義がある。今後は睡眠だけでなく、産業保健に関してテーマを拡大していく予定である。</p> <p>● 論文</p> <p>1. 安藤敬子、影山隆之、小林敏生 (2019). 男性交替勤務労働者の深夜勤における眠気と関連する要因—生活習慣および職場ストレス要因との関連. 産業精神保健, 27 (1) : 36-46</p> <p>2. 安藤敬子、影山隆之 (2021). 三交替勤務に従事する男性労働者の深夜勤務中の眠気に対する睡眠衛生教育の効果. 産業精神保健, 29 (3) : 273-285</p> <p>● 著書</p> <p>1. 安藤敬子 (2016). 第4章 適応様式の解説 1. 生理学的様式 栄養、排泄、活動と休息 (p54-66) 『ロイ適応看護理論の理解と実践 第2版』小田正枝監修</p>


所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 心理学コース・講師	
氏名	岩野 卓 (Iwano Suguru)	
取得学位	博士 (臨床心理学)、北海道医療大学、2016年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	臨床心理学, 産業組織心理学	
研究キーワード	アディクション (依存), ポジティブ心理学, ウェルビーイング, オンライン教育	
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 依存症に関する研究 アルコール依存の治療プログラムを開発し, 研究者のHP上で無料公開している (岩野ら, 2021)。同プログラム (右図) は, 県の依存症指定医療機関にて実施。依存症の誤解・偏見に関する調査も行っており, 医療関係者のアルコール依存症者に対する態度が悪く, 当事者との接点をもつことで態度が軟化することも検証している (岩野ら, 2020)。</li> <li>● ポジティブ心理学に関する研究 成人を対象として, ウェルビーイング (充実感) を高める介入プログラムを開発 (岩野ら, 2020)。ウェルビーイングの測定指標も作成している (岩野ら, 2015)。</li> <li>● オンライン教育に関する実践 大学の講義にて, Mentimeterを利用したオンライン講義を行い, 無記名学生アンケートにて高評価を得ている。教育研修に関しては, 対人プロセス想起法を用いた大学院生の技能向上を実践し (岩野ら, 2020), YouTubeを用いた教育動画の開発・公表も行っている (<a href="https://www.youtube.com/channel/UCP4-g_Hw0BNtTgNnqLXjW0g">https://www.youtube.com/channel/UCP4-g_Hw0BNtTgNnqLXjW0g</a>)。</li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Iwano, S., Kambara, K., &amp; Aoki, S. (in press). Psychological interventions for well-being in healthy older adults: Systematic review and meta-analysis. <i>Journal of Happiness Studies</i>.</li> <li>2. 岩野 卓・高野 裕太・堀内 聡・平原 弦・帆秋 伸彦 (2021). アルコール依存に対する集団認知行動療法プログラムの開発およびパイロット試験. <i>認知行動療法研究</i>, 47(3), 273-282.</li> <li>3. 上地 広昭・堀内 聡・岩野 卓・島崎 崇史・竹中 晃二 (2021). 行動経済学に基づくライフスタイル改善のためのアプローチ. <i>ストレスマネジメント研究</i>, 17(1), 35-40.</li> <li>4. Yuta, T., Iwano, S., Aoki, S., Nakano, N., &amp; Sakano, Y. (2021). A systematic review of the effect of sleep interventions on presenteeism. <i>BioPsychoSocial Medicine</i>, 15. DOI: <a href="https://doi.org/10.1186/s13030-021-00224-z">https://doi.org/10.1186/s13030-021-00224-z</a></li> </ol> </li> <li>● 受賞 2013年, 第35回日本アルコール関連問題学会第2回小杉好弘記念賞 受賞</li> </ul>	



所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・講師	
氏名	栄留 里美 (Eidome Satomi)	
取得学位	日本女子大学大学院人間社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程 単位取得満期退学 2014年3月 博士(社会福祉学)、鹿児島国際大学、2015年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	社会福祉学
------	-------

研究キーワード	子どもの人権, アドボカシー, 権利擁護
---------	----------------------

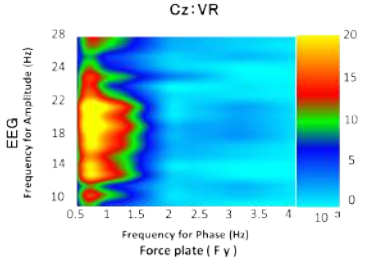
<p><b>研究内容</b></p> <p>・子どもアドボカシーに関する研究</p> <p>すべての子どもは自分自身に関わることにについて意見を言う権利があり、そしてそれを聴いて受け止めてもらう権利(国連子どもの権利条約12条)があります。しかし、時として、保護者や施設職員・里親など養育に関わる人たちに要望を伝えても聴いてもらえないこともあるでしょう。深刻な場合には、子どもたちが暴力を受けていて声を上げられないこともあります。</p> <p>そのようなときに、子どもたちが安心して助けをもとめられる第三者が必要とされます。子どもたちに求められる「第三者」とはどのような仕組みが望ましいのか、子どもたちがこの権利を保障される社会の在り方はどうあるべきかを科研費等の助成により研究しています。</p> <p>私が特に注目しているのは、子ども側に立って代弁する特徴をもつイギリスのアドボカシーサービスという仕組みです。日本にも、このような「第三者」を創るにはどうしたらいいか実践研究を進めています。それらの成果を単著や共著として発信しています。</p>	 <p style="text-align: center;">著書・共著</p>
---	--

<p><b>研究業績・アピールポイント</b></p>	<p>(単著)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2015年『社会的養護児童のアドボカシー：一意見表明権の保障を目指して』(明石書店)</li> </ul> <p>(共著)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2009年『子どもソーシャルワークとアドボカシー実践』(明石書店) 堀正嗣、栄留里美</li> <li>・2011年『イギリスの子どもアドボカシー—その政策と実践』(明石書店)</li> <li>・2013年『子どもアドボカシー実践講座』(解放出版社)</li> <li>・2018年『独立子どもアドボカシーサービスの構築に向けて—児童養護施設と障害児施設の子ども・職員へのインタビュー調査から』(解放出版)</li> <li>・2021年『アドボカシーってなに?—施設訪問アドボカシーのはじめかた—』(解放出版)・『子どもアドボカシーと当事者参画のモヤモヤとこれから』(明石書店)・『施設訪問アドボカシーの理論と実践』(明石書店)</li> </ul>
-----------------------------	---

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・講師	
氏名	川上 健二 (Kawakami Kenji)	
取得学位	修士 (医科学)、大分大学、2017年3月	
SDGs目標	 	





研究分野	リハビリテーション科学、理学療法学
研究キーワード	転倒、筋電図、脳波、筋、徒手療法

研究内容	<p>●高齢者を対象に転倒リスクのバイオマーカーを検出する研究</p> <p>我が国では現在、健康寿命の延伸に向けた取り組みが多く行われている。健康寿命を短くする一因に「転倒による骨折」があり、転倒を予防することが大きな課題となっている。そこで、重心動揺と筋電図および脳波の関連性を解析し、新しい転倒リスクのバイオマーカーを見出すことを目的に研究を行っている。方法は、若年健常者群と健康な高齢者群に対し、開眼時、閉眼時および最近リハビリテーション分野でも用いられるようになってきたVRゴーグルを使用した歩行体験時の下肢筋電図と脳波および足圧中心を同時に計測し解析を行っている。</p>	 
	<p>●疲労した筋の運動機能を向上させる定量的機械的圧刺激について研究</p> <p>「筋疲労」とは運動時に必要な筋力やそれを発揮するための能力が低下した状態をいい、こうした筋機能低下に対する理学療法として、臨床では徒手的に圧刺激を与える方法が用いられてきた。しかし、その刺激強度についてはセラピストの経験に委ねられるためばらつきが多く、適切な刺激強度については明らかになっていない。そこで、徒手の圧刺激を模擬した定量的圧刺激装置を作製し、前腕筋への圧刺激が運動機能と筋収縮様式へ及ぼす影響をボタン押し課題を用いて筋電図周波数解析を行っている。</p>	

研究業績・アピールポイント	<p>●転倒リスクのバイオマーカーを検出する研究については、2019年から科学研究費助成事業の助成を受けて実施している。現在、若年健常者に関する論文を作成中である。(右の上図)</p>	
	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2014年、人工膝関節置換術後の膝蓋骨骨折後の理学療法</li> <li>2016年、疲労した筋に対する機械的圧刺激が運動機能向上に及ぼす影響 (右の下図)</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、可動域練習, 筋力増強訓練の原理と適応, 応用</li> </ol>	

- 役員
- 大学院教育学研究科 教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

# 福祉健康科学部

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・講師	
氏名	工藤 修一 (Kudou Syuichi)	
取得学位	修士 (社会福祉学)、日本福祉大学、1997年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	高齢者福祉・地域ケア
研究キーワード	介護報酬、モラルハザード、老人保健施設
研究内容	<p>1 効率的な介護サービス提供システムの構築 要介護者の急激な増加などにより介護費用が増大している。総じて要介護者数はコントロールに大きな限界があり、よって、焦点は要介護者一人当たりのコストコントロールとなる。適正な介護報酬の設定やサービス事業者のモラルハザード防止の観点などから、効率的な介護サービスの提供システムの考案を試みている。</p> <p>2 介護保険下の老人保健施設の新たなあり方 老人保健施設は家庭復帰を目的とした施設であるが、現在では長期入所者が多数を占めている。制度創設時は、我が国の医療・福祉施設で唯一理学療法士、もしくは作業療法士の配置が義務付けられていたことが大きく影響し、いわゆる回復にある患者も少なからず入所していた。しかし、その後、一般医療機関へのリハ職の配置が大きく進展し、応じて老人保健施設の入所者はプラトーの方となった。その結果、機能回復しての家庭復帰者が大きく減少し、老人保健施設の存在意義が問われている。こうした現状認識のもと、高齢者ケアの政策動向を踏まえて、老人保健施設の新たなあり方を検証している。</p> <p>3 過疎地域の福祉・介護サービスの提供システム 近年、過疎地域のサービス事業者の撤退が相次いでいる。原因はシンプルで、不採算性にある。他方、こうした地域ほど障害者や高齢者などの生活課題は多様で、また、年々深刻化している。解決方法のひとつとして、社会福祉連携推進法人の活用が考えられ、この実効可能性を探っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>(共著)『単身高齢者の見守りと医療をつなぐ地域包括ケア』(中央法規,2020) (単著)「地域を支えるソーシャルワークのあり方—ディレンマ・有用性・教育課題—」(『地域リハビリテーション』4 (3) ,2009)</p> <p>全国国民健康保険診療施設協議会：小規模自治体における地域包括支援センターの効率的な取組に関する調査研究事業委員 (2021)</p>

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 社会福祉実践コース・講師	
氏名	齋藤 建児 (Saito Kenji)	
取得学位	博士 (社会福祉学)、岩手県立大学、2021年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	社会福祉学、地域福祉、高齢者福祉	
研究キーワード	地域共生社会、社会的居場所、社会参加、ソーシャル・キャピタル	
研究内容	<p>●高齢者の社会参加支援に関する研究</p> <p>高齢者の社会参加は、老後の健康やウェルビーイングとの関連から重要な位置付けにある。問題意識は、老化のプロセスにおいて、多かれ、少なかれ体験するストレスフル・ライフイベントや、過疎地域の物理的、社会的な諸課題がもたらす社会参加の阻害要因である。これまでの研究では、こうした環境のもと、いかにして社会参加の枠組みを地域社会で形成するか、地域の住民及び組織体、支援者としての行政、ソーシャルワーカーの役割について探索的に検討した。</p> <p>(論文1.)</p> <p>主体的外出場所が地域在住一般高齢者の主観的ウェルビーイングに与える効果：高齢期のストレスフル・ライフイベントの体験・認知に関する調査結果から 2019 高齢者のケアと行動科学 25,56-66.</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsbse/24/0/24_13/_article/-char/ja/">https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsbse/24/0/24_13/_article/-char/ja/</a></p> <p>(論文2.)</p> <p>山形県酒田市におけるいきいき百歳体操の効果—身体機能・QOL・相互扶助行為に関する調査から— 2018 東北公益文科大学総合研究論集 35,51-62.</p> <p>※関連リンク：<a href="https://koeki.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&amp;active_action=repository_view_main_item_detail&amp;item_id=411&amp;item_no=1&amp;page_id=13&amp;block_id=21">https://koeki.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&amp;active_action=repository_view_main_item_detail&amp;item_id=411&amp;item_no=1&amp;page_id=13&amp;block_id=21</a></p> <p>(論文3.)</p> <p>過疎地域における社会的居場所の円滑な運営方法の検討：—地域包括支援センター職員へのインタビュー調査 2020 高齢者のケアと行動科学 25,56-66.</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsbse/25/0/25_56/_article/-char/ja/">https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsbse/25/0/25_56/_article/-char/ja/</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>共生社会政策において、地域づくりと個別支援はその根幹にあり、既往研究では上述のとおり社会参加の枠組み形成をテーマに取り組んできた。以下の論文では、それらをまとめている。</p> <p>●論文</p> <p>1. 2021年、「高齢者の社会的居場所に関する研究：山形県酒田市を事例として」岩手県立大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻博士後期課程（令和2年度）</p> <p>●受賞</p> <p>1. 2021年、岩手県立大学学長賞受賞</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部





医学部附属病院

理工学部


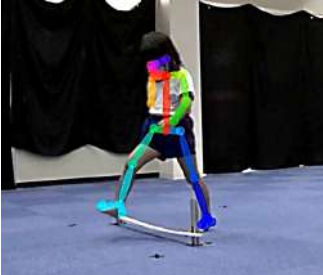
福祉健康科学部

その他学内施設等







所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・講師	
氏名	萬井 太規 (Mani Hiroki)	
取得学位	博士 (保健科学)、北海道大学、2015年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	理学療法学、リハビリテーション科学
研究キーワード	姿勢制御、運動制御、運動発達

<p><b>研究内容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 予測的姿勢調節の後天的再学習方法の考案に関する研究                  予測的姿勢調節 (APAs) とは、運動直前に見られる姿勢の準備活動のことであり、安定かつ円滑な動作の達成に重要な役割を担う。しかし、高齢者やパーキンソン病等の神経筋疾患では、APAs が低下し、動作のふらつきや転倒の原因となる。ゆえに、APAs の再学習方法の確立が喫緊の課題である。これまで動作の反復練習がその動作のAPAs を高めることが示されているが、異なる動作への効果は低いことが問題視されている。当研究室では、加齢や発達に伴うAPAs の変化の特性を解明し (論文1, 2, 3)、新たなAPAs 再学習方法の考案に取り組んでいる。</li> <li>● 乳幼児期から学童期の姿勢・運動制御の発達特性の解明                  昨今、ふらつく、転ぶといった運動が不器用な子どもの増加が問題視されている。運動の発達は、日々の運動の積み重ねによりなされていくことから、不適切な姿勢制御・運動制御を早期に見出し、適切な運動を学習する機会を提供することが重要である。乳幼児期の運動発達の特性を明らかにするため、三次元動作解析システムを始めとする精密機器を用いた分析に加え (論文4, 5)、ビデオカメラ映像からAIを用いて動作を解析する手法も駆使し、縦断的に小児期の運動発達の特性の解明に取り組んでいる。</li> </ul>	  
---	---

<p><b>研究業績・アピールポイント</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文</li> <li>1. Mani H: Age-related changes in distance from center of mass to center of pressure during one-leg standing. J Mot Behav 2015; 47:282-90.</li> <li>2. Mani H: Development of postural control during single-leg standing in children aged 3-10 years. Gait Posture. 2018; 68:174-180.</li> <li>3. Mani H: Development of temporal and spatial characteristics of anticipatory postural adjustments during gait initiation in children aged 3-10 years. Hum Mov Sci. 2021; 75:102736.</li> <li>4. 萬井：5つの運動機能領域から見た健常児の歩行特性—3歳から10歳児と成人との比較. 理学療法学. 2020; 47: 560-567</li> <li>5. Development of the Relationships Among Dynamic Balance Control, Inter-limb Coordination, and Torso Coordination During Gait in Children Aged 3-10 Years. Front Hum Neurosci. 2021; 28: 15:740509.</li> </ul>
-----------------------------	--



所属・職位	大学院 福祉健康科学研究科 附属臨床心理教育研究センター・講師	
氏名	渡邊 晴美 (Watanabe Harumi)	
取得学位	修士 (教育学)、福岡教育大学、1995年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	臨床心理学	
研究キーワード	教育臨床・スクールカウンセリング・緊急支援	
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>虐待や引きこもり、発達障害などの複合的課題に対応するための総合的多角的心理支援の資質・能力の涵養</li> <li>心理専門職として領域横断的心理支援を展開することができる実践力の養成</li> <li>地域に即した総合的多角的心理支援の基盤となる支援者コミュニティの形成</li> </ol>	
研究業績・アピールポイント	<p>○公認心理師、臨床心理士</p> <p>○ 私はこれまで、20年以上にわたり、大分県内の公立小・中学校でスクールカウンセラー・緊急支援スクールカウンセラーとして教育臨床実践を重ね、その経験をもとにスクールカウンセラースーパーバイザーとしてスクールカウンセラーへの指導・助言などを行うことで県下のスクールカウンセラーをサポートするとともに、教育現場における心理支援専門職の質の向上や後進の育成にも力を注いできました。</p> <p>近年、子どもたちをめぐる諸問題は、虐待、引きこもり、発達障害など様々な「複合的課題」を抱え、より複雑化してきています。これらの諸問題に対して心理専門職として求められるものは、総合的多角的心理支援を展開できる資質と能力です。教育現場で活動する心理支援の専門家であるスクールカウンセラーには、「チーム学校」の一員として、困りを抱える子どもたちの生活をささえるべく、医療・福祉などの他領域と連携して、心理支援を行っていくことが求められます。</p> <p>令和2年4月に設置された臨床心理教育研究センターでは、センターでの活動を通して、複雑化する心の問題に対応することのできる、領域横断的・総合的多角的心理支援の展開ができる心理専門職の育成に取り組んでいます。</p> <p>臨床心理教育研究センターでは、臨床心理学的支援に関する地域貢献、大学院教育、研究及び発信の事業を一体的に進めるとともに、医療・福祉・教育・司法犯罪・産業労働の5領域の架け橋及び地域支援の活性化を推進することにより、地域共生社会の実現に寄与することを目的として様々な活動を行っています。具体的な活動としては、センター内に設置されている心理教育相談室での相談業務、相談業務に係る調査・研究、臨床心理学コースの相談業務実習に対する指導を行っています。</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部




医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

# 福祉健康科学部

所属・職位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・助教	
氏名	田中 健一郎 (Tanaka Kenichiro)	
取得学位	博士 (医学)、長崎大学、2018年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	リハビリテーション科学、健康科学
研究キーワード	理学療法、高齢者、介護予防、地域包括ケアシステム
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●高齢者の介護予防・健康増進に関する研究</p> <p>高齢者では加齢に伴い、徐々に身体機能が低下し、健康な状態から要介護の状態に陥りやすくなります。多くの自治体では身体機能の低下を予防する事業が実施されていますが、住民主体型の事業の効果については、詳細が明らかにされていません。本研究では効果的な介護予防、健康増進事業の開発に関する研究を行っています (図1)。</p> <p>この研究では、住民が主体的に行う介護予防事業においても、バランス機能や歩行機能の改善の他に、日中の身体活動量の改善効果が示されました。さらに、住民同士のつながりが強化され、地域機能の改善効果についても可能性がみられています。</p> <p>住民の方々が末長く、住み慣れた地域で健康的に、また、希望をもって生活を続けられることを目標に、今後もより効果的な介護予防事業の開発に関する研究、疾患別の介護予防事業の効果に関する研究を行っていきます。</p>



図1. 住民主体型の運動事業の様子

# その他学内施設等

---

グローバル感染症研究センター

教育マネジメント機構

研究マネジメント機構

学術情報拠点


減災・復興デザイン教育研究センター

保健管理センター





I Rセンター

所属・職位	グローバル感染症研究センター・教授	
氏名	太田 正之 (Ohta Masayuki)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、1994年6月	
SDGs目標	  	

研究分野	消化器外科学、代謝・内分泌学
研究キーワード	肥満外科、胃バンディング術、スリーブ状胃切除術、糖代謝、摂食中枢、脂肪肝





研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ラット胃バンディングモデルの開発 2005年に臨床で肥満外科手術である調節性胃バンディング術を導入し、同時にラット胃バンドモデルの開発を行い（論文1）、内臓脂肪切除の糖代謝における上乗せ効果を検討しました。</li> <li>●ラット胃バンディングモデルとスリーブ状胃切除術モデルの比較 新しい術式であるスリーブ状胃切除術のモデルと胃バンディングモデルを糖代謝、胃腸の食物通過時間、脂質代謝、摂食中枢について比較を行いました。スリーブ状胃切除術は食物の通過時間を短縮させ、糖代謝をより改善しました（論文2）。またスリーブ状胃切除術は脂質代謝もより改善し、血中のグルカゴン様ペプチド-1やpeptide YYを上昇させ、グレリンを低下させ、摂食中枢を不活化し満腹中枢を活性化しました（論文3）。この結果、スリーブ状胃切除術は単なる摂食を抑制する手術ではなく、消化管ホルモンの分泌を変化させる、いわゆるメタボリックサージェリーであることが明らかになりました。</li> <li>●ラットスリーブ状胃切除術モデルにおける脂肪肝改善メカニズムについて ラットスリーブ状胃切除術モデルの肝臓において胆汁酸をリガンドとするfarnesoid X receptor (FXR) とその関連する因子の活性化を認め、スリーブ状胃切除術の脂肪肝改善メカニズムを明らかにしました（論文4）。</li> </ul> <div style="text-align: center;">  <p>ラットスリーブ状胃切除術モデルの術中写真</p> </div>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>15年を超える肥満外科の基礎的研究により、肥満外科手術、特にスリーブ状胃切除術の代謝改善や摂食行動変化のメカニズムを明らかにしました。今後はさらに胆汁酸や腸内細菌、短鎖脂肪酸の変化について研究を進めたいと考えております。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●論文</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Endo Y, Ohta M, et al. An obese rat model of bariatric surgery with gastric banding. <i>Obes Surg</i> 2007; 17:815-819.</li> <li>2. Masuda T, Ohta M, et al. A comparative study of gastric banding and sleeve gastrectomy in an obese diabetic rat model. <i>Obes Surg</i> 2011; 21:1774-1780.</li> <li>3. Kawasaki H, Ohta M, et al. Effects of sleeve gastrectomy and gastric banding on the hypothalamic feeding center in an obese rat model. <i>Surg Today</i> 2015; 45:1560-1566.</li> <li>4. Watanabe K, Ohta M, et al. Effects of sleeve gastrectomy on nonalcoholic fatty liver disease in an obese rat model. <i>Obes Surg</i> 2018; 28:1532-1539.</li> </ol>
---------------	--

所属・職位	グローバル感染症研究センター・教授	
氏名	三室 仁美 (Mimuro Hitomi)	
取得学位	博士 (医学)、東京大学、2004年3月	
SDGs目標	  	




研究分野	細菌感染生物学
研究キーワード	粘膜感染病原細菌、ヘリコバクター・ピロリ、病原性、宿主応答
研究内容	<p>私たちは、粘膜感染病原細菌感染症をグローバルな視点で理解し、その研究成果をもとに、地域や人種などローカルの視点を考慮した、きめ細やかな感染制御法として還元することを目指しています。私たちはこれまで、人に感染する粘膜感染病原細菌と宿主の相互作用による感染現象の解明、とりわけ、ヘリコバクター・ピロリ感染による病態形成機構の解明に注力してきました。現在、3つの内容を主軸とした研究活動の展開を目指しています。</p> <p><b>1) 動物モデルを活用した、病原細菌感染による疾患発症機序解明：</b></p> <p>ピロリ菌感染者の多くは幼少期に感染後、生涯にわたる持続感染を経て、壮年期に胃炎や胃がんの発症に至ります。何十年にもわたる疾患発症を理解するために、動物モデルを活用して感染現象を分子・細胞レベルで解析し、臨床検体・臨床分離株を用いて検証することで、疾患発症機序解明を目指します。(参考文献 1, 2, 4, 6, 7)</p> <p><b>2) 粘膜感染病原細菌に共通する病原性の理解：</b></p> <p>共同研究の成果を含む研究から、ピロリ菌のような慢性感染起因菌と、赤痢菌、腸管病原性大腸菌、A群連鎖球菌等の急性感染起因菌において、共通の生命現象を利用した感染機序が多数明らかになり、病原体は感染時間を調節して、自己増幅に有利な環境を作り、感染を拡大させる、という共通戦略の理解が進みました(参考文献 3, 5, 8)。しかしなぜ病原性細菌が存在するのか、その理由が不明瞭です。粘膜感染病原細菌は、人に対する病原性を発揮することを目的とするのではなく、感染環境において生きながらえるために副次的に病原性を獲得した可能性を、多様な病原細菌研究を展開して検証していきます。</p> <p><b>3) 抗菌薬に頼らない感染制御法の開発：</b></p> <p>ピロリ菌は世界人口の約半数が感染する大規模感染症起因菌です。衛生状態の向上に伴い近年日本では感染率が低下していますが、世界レベルでみると、感染者数が未知の発展途上国も多く、感染制御には程遠い現状です。ピロリ菌感染症の治療は、抗菌薬による除菌療法が採用されていますが、薬剤耐性菌の増加は看過できません。感染症全体をみると、2050年までに全世界で年間1000万人以上が薬剤耐性菌により死亡すると推定されています。ピロリ菌感染対策として安易な抗菌薬による除菌治療に依存することは、その他の感染症への危機的治療崩壊に直結しかねません。また、高齢化社会において、高齢者のQOLの維持のためにも消化器系疾患の改善は重要であり、疾患の早期発見・発症予防・治療は重要な課題です。これらの問題を解決するために、疾患発症分子機序を利用した疾患悪性化の早期発見につながるバイオマーカー、抗菌薬に頼らない病原体特異的除菌方法や、病原体の疾患発症機構のみを抑制することで無害な常在菌とする手法の開発を、産学協働研究体制を構築して積極的に展開していきます。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>Nat Commun. 2021;12(1):2085. doi: 10.1038/s41467-021-22317-7.</li> <li>Biochem Biophys Res Commun. 2020;525(3):806-811. doi: 10.1016/j.bbrc.2020.02.087.</li> <li>Sci Rep. 2020;10(1):3251. doi: 10.1038/s41598-020-60306-w.</li> <li>Immunity. 2020;52(4):635-649.e4. doi: 10.1016/j.immuni.2020.03.002.</li> <li>Nature. 2019;566(7742):110-114. doi: 10.1038/s41586-019-0884-1.</li> <li>Microbiol Immunol. 2018;62(4):221-228. doi: 10.1111/1348-0421.12582.</li> <li>Nat Commun. 2014;5:4497. doi: 10.1038/ncomms5497.</li> <li>Cell Host Microbe. 2013;13(5):570-583. doi: 10.1016/j.chom.2013.04.012.</li> </ol>



所属・職位	グローバル感染症研究センター・講師	
氏名	三好 智博 (Miyoshi Tomohiro)	
取得学位	博士 (理学)、新潟大学、2008年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	細菌学、RNA生物学、構造生物学
研究キーワード	ノンコーディングRNA、病原性微生物、細菌叢破綻
研究内容	<p>●微生物ノンコーディングRNAに関する研究</p> <p>細胞内で発現する小分子 RNAは、唯の分解産物であり特別な機能はないと考えられてきたが、その機能が徐々に明らかになりつつある。この小分子RNAは、塩基配列特異的に標的核酸に結合して、多種多様なメカニズムにより遺伝子の発現制御を行う。細菌の病原性の発現と小分子 RNAによる制御に着目し機序の解明による新規感染症治療法の開発を目指している。(論文5)</p> <p>●健康に寄与する常在微生物の調査・分析</p> <p>我々の体には多くの種類の微生物が住み着いており、その重さは1kgにもなる。これらの常在微生物は、宿主の健康状態や生活環境と複雑に相互作用し、腸内や口腔内など様々な部位で特異的な細菌叢を形成している。健康に寄与する細菌種の変化が及ぼす病原性細菌への影響を明らかにすることで、疾患の発症のメカニズムを明らかにしていきたい。(論文1,3)</p> <p>●タンパク質・核酸複合体の立体構造解析</p> <p>生体高分子の分子機能を立体構造から明らかにする学問を構造生物学という。この生体高分子の立体構造情報に立脚した構造生物学は、医学・生命科学の発展に必要な不可欠な実験手法となっている。X線結晶構造解析を用いて、様々な生命現象を原子レベルの分解能で明らかにしようと試みている。(論文2,4)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年, <i>Gemella haemolysans</i> inhibits the growth of the periodontal pathogen <i>Porphyromonas gingivalis</i>. <i>Sci Rep</i>, 11(1):11742.</li> <li>2021年, Structural insights into the switching off of the interaction between the archaeal ribosomal stalk and aEF1A by nucleotide exchange factor. <i>JMB</i>, 433(15):167046, 2021.</li> <li>2019年, <i>Aggregatibacter actinomycetemcomitans</i> induces detachment and death of human gingival epithelial cells and fibroblasts via elastase release following leukotoxin-dependent neutrophil lysis. <i>Microbiol Immunol</i>, 63(3-4): 100-110.</li> <li>2018年, The ribosomal stalk protein is crucial for the action of the conserved ATPase ABCE1. <i>Nucleic Acids Res.</i>, 46(15): 7820-7830.</li> <li>2018年, Nucleic Acid-Binding Assay of Argonaute Protein Using Fluorescence Polarization. <i>Methods Mol Biol</i>, 1680: 123-129.</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2019年、第16回 インテリジェント・コスモス奨励賞</li> <li>2016年、第3回 学長賞 (新潟大)</li> <li>2011年、第27回 井上研究奨励賞</li> </ol>

# 教育マネジメント機構

所属・職位	教育マネジメント機構 基盤教育センター・教授	
氏名	岡田 正彦 (Okada Masahiko)	
取得学位	修士 (教育学)、広島大学、1993年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	社会教育学 生涯学習学
研究キーワード	生涯学習支援 社会教育関係職員 養成・研修 まちづくり
研究内容	<p>1. 社会教育関係職員の養成・研修・ネットワーク・キャリアパス形成支援に関する研究          社会教育主事（社会教育士）をはじめとする社会教育関係職員の養成や研修などを通して、職員が地域の生涯学習支援を有効に行うための学ぶ機会（社会教育主事講習、社会教育関係職員研修など）を整備する方策について各種プログラムへの参画を行いつつ研究をすすめている。その際社会教育関係職員が効果的に業務を行うためには職員による人的ネットワークの形成が重要であることから、各地での生涯学習実践研究会などに参画しつつネットワーク形成の支援を検討している。また、社会教育関係職員が社会教育の現場から異動した後も引き続き社会教育の取組の中で得た知見や人的ネットワークを生かしてキャリアパスを有効に形成できるよう支援する方策についても検討している。</p> <p>2. 国立大学における生涯学習・地域連携系センターの機能高度化に関する研究          全国国立大学生涯学習系センター研究協議会に加盟して活動しつつ、大学に設置された生涯学習・地域連携系センターが学内・学外にどのようなネットワークを形成し、どのような形で地域の生涯学習推進に貢献するかを検討している。</p> <p>3. 地域における生涯学習のまちづくりに関する研究          行政事業やNPOや地域組織の取組を通して人々がニーズや必要に応じて学習し、その成果を地域で活用し、持続可能で活気やつながりを豊富に持つ地域となるための方策について、社会教育行政事業（委託事業を含む）やNPO・地域組織などの取組に関与しつつ研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>科学研究費補助金基盤研究 (C)「社会教育主事の養成と力量形成支援・キャリアパス形成支援に関する実証的研究」(研究代表者)(平成29年度～令和3年度)</p> <p>岡田正彦「大学開放推進戦略に関する考察—国立大学開放の効果的推進と社会的インパクトの向上を目指して—」日本生涯教育学会編『生涯学習社会における高等教育の役割と機能』(日本生涯教育学会年報第36号), 2017年11月, 59~69頁。</p> <p>岡田正彦「『社会教育主事の養成、力量形成・キャリアパス形成支援に関する調査』結果の分析—全国国立大学生涯学習系センター協議会の承合事項での調査を受けて—」大分大学高等教育開発センター『大分大学高等教育開発センター紀要 第10号』2018年3月, 115~127頁。</p> <p>岡田正彦「社会教育主事等指導系職員に対する切れ目のない支援を目指して: 大学生涯学習系センターの機能向上を手がかりに (特集 大学の生涯学習センター: その今日的役割)」『社会教育』, 2018年9月, 6~11頁。</p> <p>岡田正彦「社会教育関係職員の業務成果向上支援に関する考察: 研修と実践の螺旋的サイクルの形成に向けて」大分大学高等教育開発センター『大分大学高等教育開発センター紀要 第9号』2017年3月, 41~46頁。</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部




医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

## 教育マネジメント機構

所属・職位	教育マネジメント機構 国際教育推進センター・教授	
氏名	坂井 美恵子 (Mieko Sakai)	
取得学位	M.A. (Japanese pedagogy), University of Wisconsin, Madison, August 1995	
SDGs目標	 	
研究分野	日本語教育	
研究キーワード	コロケーション、e-learning、プレゼンテーション、多読	
研究内容	<p>① 外国人学習者のコロケーション習得研究とe-learning教材の開発  <b>【内容】</b> コロケーションとは、例えば「人気を博す」のような語と語の特定の結び付きのことである。コロケーションには多様な組み合わせがあり、日本語学習者にとってその習得は難しく、上級レベルの学習者であっても「*人気を取る」などのような誤った使い方をする。そこで、名詞と動詞のコロケーションの練習ができるe-learning教材の開発をこれまでに行い、習得の難しいコロケーションの特徴を分析する。</p> <p>② わかりやすいプレゼンテーションを支援するe-learning教材の開発と実践  <b>【内容】</b> 中級レベルの日本語学習者を対象に、聞き手に配慮したプレゼンテーションにふさわしい語や表現を提案し、漢語から和語への言い換えや、コロケーションの習得が可能となるe-learning教材の開発を行ってきた。その教材をさらに発展させ、上級レベルも対象に含め、オンライン上でプレゼンテーション原稿の準備ができる教材を開発する。</p> <p>③ 日本語多読教材の開発と学習者の意識変容に関する研究  <b>【内容】</b> 多読は近年、外国語教育において注目を集めており、読む速度や語彙の習得など言語能力の向上、読書習慣の形成などの効果があることが報告されている。しかし、初級学習者用の多読教材は非常に少ないため、教材開発を行っている。使用する語彙と文法を段階的に制限し、読みやすい教材を目指している。さらに、多読教育を実施し、効果的な多読の実践方法及び、多読の意義や学習者の意識変容について考察を行う。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>[論文]「日本語上級レベル学習者の多読の読書傾向と段階別読み物を読む理由」(2021)『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』Vol.8, No.1: pp.1-11</p> <p>[論文(共著)]「コロケーション検索システム『かりん』の開発と試行—一中上級日本語学習者の試行結果を比較して—」(2020)『大学教育』第17号: pp.13-16</p> <p>[論文(共著)]「初級学習者用多読教材の開発」(2019) <i>The Proceedings of the 23<sup>rd</sup> Japanese Language Symposium in Europe</i>, 24: pp.633-635</p> <p>[論文(共著)]「日本語学習者向けコロケーション習得モバイルラーニング教材の開発」(2016)『CIEC研究会報告集』Vo.7: pp.68-72</p> <p>[著書(共著)]「コロケーション習得を目指したPC・タブレット用日本語教育学習支援システムの開発」(2014)『最新ICTを活用した私の外国語授業』(丸善プラネット)第12章: pp.167-178</p> <p>[科研基盤研究(C)]「日本語学習者のためのプレゼンテーション支援e-learning教材の開発と実践研究」2019-2023 研究代表者</p> <p>[科研基盤研究(C)]「わかりやすいプレゼンテーションを支援するe-learning教材の開発と実践」2021-2024 研究代表者</p>	

所属・職位	Global Education and Intercultural Advancement Center, Professor	
氏名	Kazumi Nagaike (長池 一美)	
取得学位	Doctor of Philosophy, The University of British Columbia, May 2005	
SDGs目標		
研究分野	Popular Culture Studies, Gender/Sexuality/Queer Studies	
研究キーワード	Manga, BL, LGBTQ, Transnationality	
研究内容	<p>Her research interests include studies in comparative literature, gender/sexuality, and popular culture. She is the author of <i>Fantasies of Cross-dressing: Japanese Women Write Male-Male Erotica</i> (Brill Academic Publishers, 2012) and co-editor of the collection <i>Boys' Love Manga and Beyond: History, Culture and Community in Japan</i> (University Press of Mississippi, edited by Mark McLelland, Kazumi Nagaike, Katsuhiko Suganuma, and James Welker, 2015), <i>Shōjo Across Media: Exploring "Girl" Practices in Contemporary Japan</i> (Palgrave, edited by Jaqueline Berndt, Kazumi Nagaike and Fusami Ōgi, 2019), and <i>Women's Manga in Asia and Beyond: Uniting Different Cultures and Identities</i> (Palgrave, edited by Fusami Ōgi, Rebecca Suter, John Lent and Kazumi Nagaike, 2019); she has also edited special issues of the <i>Journal of Graphic Novels and Comics</i> (<i>Boys' Love Manga</i> 4:1, June, 2013) and <i>Transformative Works and Cultures</i> (Transnational Boys' Love Fan Studies, no. 12, March, 2013). Nagaike has published a wide range of journal articles, book chapters, and translations in relation to her ongoing analysis of gender/sexuality in Japanese literature and popular culture.</p>	
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) <u>Kazumi Nagaike</u>, <i>Fantasies of Cross-dressing: Japanese Women Write Male-Male Erotica</i>, Brill Academic Publishing, 277pages, 2012.</li> <li>2) Mark McLelland, <u>Kazumi Nagaike</u>, Katsuhiko Suganuma and James Welker (eds.) <i>Boys Love Manga and Beyond: History, Culture and Community in Japan</i>, The University Press of Mississippi, 303pages, 2015.</li> <li>3) Fusami Ogi, Rebecca Suter, <u>Kazumi Nagaike</u> and John A. Lent (eds.) <i>Women's Manga in Asia and Beyond: Uniting Different Cultures and Identities</i>, Palgrave Macmillan, 366pages, 2019.</li> <li>4) Jaqueline Berndt, <u>Kazumi Nagaike</u> and Fusami Ogi (eds.), <i>Shōjo Across Media: Exploring "Girl" Practices in Contemporary Japan</i>, Palgrave Macmillan, 397pages, 2019.</li> </ol>	

役員

大学院  
教育学位  
教育学部  
研究科

経済学部

医学部


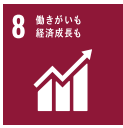
医学部  
附属病院

理工学部






福祉健康科学部

その他  
学内施設等

## 教育マネジメント機構

所属・職位	教育マネジメント機構 国際教育推進センター・教授	
氏名	南里 敬三 (Nanri Keizo)	
取得学位	PhD (言語学)、シドニー大学、1995年2月	
SDGs目標		
研究分野	絵言語テキスト分析学、ファッション誌研究	
研究キーワード	ファッション誌、レイアウト、ファッションスタイル、デフレ経済	
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 絵（写真、イラストなど）と文字によって構成され、絵の占める面積が文字のそれに比して広いテキスト（絵言語テキスト）が採用するレイアウトがその美しさを最大化するのはどのような条件下であるかを研究している。</li> <li>● 【絵の配置に関する研究】売れている20代女子向けファッション誌はどのような構造をしているのか             <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ ファッション誌の構造を、ファッション誌に用いられる写真の形式（裁ち落とし、角枠、切り抜き、縁取り写真）、被写体による写真分類（ヒト写真、モノ写真等）、及び、当該頁に掲載される人写真の枚数、モノ写真に写されたモノの個数を基に図式化しファッション誌のカタチを抽出（これをファッション誌の波形構造と呼ぶ）。</li> <li>➢ 波形構造の特徴を、ファッションモデルの属性（白人モデル化日本人モデル化）と当該頁に掲載されている情報量（ヒト写真の数、モノの個数）に対比させ、売れているファッション誌の特徴を抽出を行った。その結果、ミニマルレイアウトで無名の白人モデルを採用したファッション誌が売れているのではないかと結論を得た。</li> </ul> </li> <li>● 【テーマの絞り込みに関する研究】売れている20代向けファッション誌であるGISELeはどのような衣服解説を行っているのか             <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 見出し及び見出し相当文にテーマ分析を施し、GISELeのアパレルアイテム紹介記事が抽象的テーマから漸次テーマを具象化していく様子を図式化してみた。</li> </ul> </li> <li>● 【スタイル、時代、経済から見たファッション誌の研究】             <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 2000年代初頭の「めっちゃモテ」の時代から2020年のLARME復刊まで、どのようなスタイルを推すファッション誌が売れ、その理由を日本経済の衰退に絡めて考察。</li> </ul> </li> </ul>	
研究業績・アピールポイント	<p>【絵の配置に関する研究】では次の論文を参照のこと。「ネットから見たファッション誌が売れない理由：GFL誌はそれをどう克服したか」（2020）『大分大学国際教育推進センター紀要』（1），pp. 194-219。ファッション雑誌の構造分析方法を詳しく解説している。雑誌編集の解説書でよくファッション誌には「リズム」が必要だとの説明を見かけるが、それはファッション誌が採用する周期的視覚的变化であると言える。その視覚的变化を分析する方法を提案している。【テーマの絞り込みに関する研究】では次の論文を参照のこと。「GISELeの言語空間：テーマの絞り込みを解明する」（2021）『大分大学国際教育推進センター紀要』（2），pp. 67-99。ファッション雑誌のテーマの絞り込みのパターンを紹介している。【スタイル、時代、経済から見たファッション誌の研究】では次の論文を参照のこと。「売れるファッション誌はまだ作れるのか」『大分大学国際教育推進センター紀要』（3）に掲載予定。</p>	



所属・職位	教育マネジメント機構 教学マネジメント室・教授	
氏名	牧野 治敏 (Makino Harutoshi)	
取得学位	教育学修士、大阪教育大学、1983年3月	
SDGs目標	   	
研究分野	教科教育学（理科、生活科、教科横断的な学習）、教師教育	
研究キーワード	理科教育、科学教育、生活科、自然認識、自然体験活動	
研究内容	<p>自然体験を基盤とした科学教育に関する研究</p> <p>自然科学の知識や技能をパッケージとして伝達的に学習者に獲得させるのではなく、学習者自らの自然認識をもとに、その体験や情報を整理することで知識が体系化されることを、実践的に学ぶ手法を開発する。</p> <p>同時に、現実世界での事物現象と情報としての知識や理論との距離を正しく認識することで情報リテラシーの育成を図る。</p> <p>これらの手法を、幼児、児童生徒、大学生（特に教員養成系）の学習者に適応することによる、年齢に応じた科学教育の手法、教材を開発する。</p> <p>幼児等就学前児の自然認識と保育者との関わりに関する研究</p> <p>誤概念として扱われている幼児の自然認識の仕方について、発達段階を考慮しながら、その子どもの思考様式を探るとともに、それを支援する保育者のかかわり方を研究する。</p> <p>科学史を系統的に利用することによる科学理論の形成課程を理科授業に活用する研究</p> <p>科学史の教育的利用として、特定の科学者注目することで、ある理論の形成過程を時系列的に把握することで学習者の理解を深める手法が多く行われている。しかし、科学者の活動や科学理論の形成過程を従来の時代区分にとらわれずより広く捉えることで、ある時代や地域、あるいは学者集団のダイナミズムを他の時代や集団との比較することで、科学理論の形成過程や科学者の思考方法を浮き彫りにし、学習者がその中にある共通性に気づくことで、科学を理解する手だてとする方法の研究。</p> <p>シェアリングネイチャーにおけるフローラーニングを教育場面に応用する研究</p> <p>学習者の心と体の状態にマッチする学習内容を提供することで、主体的な学習が促され、生きた知恵となって身につけ、より良い生活へと導くことのできる教材やカリキュラムを開発する研究。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <p>生活科と総合的な学習の時間に対する本学会員の関心について—全国研究大会での発表テーマに出現する単語の分析より—、せいかつか&amp;そうごう（日本生活科・総合的学習教育学会誌）、第29号、2022年</p> <p>科学研究費（研究代表者）</p> <p>マルチメディア時代に適合した教科書の研究、開発 —理科教科書を主体として— 1995、奨励研究（A）</p> <p>九州の4大学が取り組む「自然体験活動」に基づく科学教育カリキュラムの開発 2007–2008、基盤研究（C）</p> <p>「地域の色」をテーマにアートとサイエンスを連携させた中学校の総合的学習の開発 2018–2022、基盤研究（C）</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	Global Education and Intercultural Advancement Center, Associate Professor	
氏名	Kaori I. Burkart (ブルカート 香織)	
取得学位	Master of Education, Iowa State University, May 2003 Doctor of Education, University of West Florida, May 2014	
SDGs目標	 	

研究分野	Educational Sociology and Psychometrics
研究キーワード	Intercultural Sensitivity, Global Competence, Diversity Studies, Multicultural Education, Curriculum Development, Teacher Education, Higher Education
研究内容	<p>In 2014, I conducted a statewide quantitative study in the state of Florida, United States of America. This project integrated two survey instruments to examine how three global competency components (intercultural communication skills, substantive knowledge, and perceptual understanding) influence preservice teachers' intercultural sensitivity using a multiple regression model. The results indicated that, of the three components, intercultural communication skills had the strongest influence, more than five times the influence of perceptual understanding. Substantive knowledge had nearly twice the weighting of perceptual understanding as a predictor of intercultural sensitivity. The statistical model also incorporated demographic variables which revealed that both intercultural sensitivity and global competence levels of the majority group (e.g., middle-class White females, monolingual, with little international experience) appeared to be lowest as compared to other demographic groups.</p> <p>Internationalization interventions in Japanese higher education are relatively new, and a robust infrastructure of global competence constructs remains to be established. My colleagues and I have translated the instruments used for the 2014 study described above from English to Japanese. The translated instruments were tested for reliability and validity in collecting data from preservice teachers from two nationally funded universities in Japan. If cultural/ethnic majority group members need more assistance in intercultural environments than other groups, then the assumptions generated in the previous study are likely broadly applicable to the Japanese population. Japanese students are likewise monocultural and mostly monoracial as well as almost exclusively monolingual and have little experience with intercultural interaction. Thus, such comparative studies are expected to contribute to on-campus internationalization on Japanese and American higher education campuses.</p>
研究業績・アピールポイント	<p><u>Burkart, K. I., Langley, R., Burkart, C. S. (2020).</u> Applicability of the Global Competency and Intercultural Sensitivity Indices in the Japanese educational environment: Comparative assessment of validity and reliability testing. <i>World Council on Intercultural and Global Competence</i>. Retrieved from <a href="https://iccglobal.org/tag/self-efficacy/">https://iccglobal.org/tag/self-efficacy/</a></p> <p><u>Burkart, K. I. (2018).</u> Preservice teachers' intercultural sensitivity and global competency. <i>Florida Association of Teacher Educators Journal</i>, 3(1), 7-25.</p> <p><u>Burkart, K. I. (2016).</u> Teachers' professional roles and agencies in curriculum development and implementation. <i>National Teacher Education Journal</i>, 9(3), 41-48.</p> <p><u>Burkart, K. I. (2015).</u> Environmental justice movements as social responsibility. <i>Journal of Research and Advanced Studies</i>, 3(1), 81-88.</p> <p><u>Burkart, K. I., &amp; Thompson, C. J. (2014).</u> Intercultural mindedness: Teachers left behind. <i>Florida Association of Teacher Educators Journal</i>, 14(1), 1-14.</p> <p><u>Burkart, K. I. (2013).</u> Comparison between commercially and publicly available instruments. <i>Journal of Research and Advanced Studies</i>, 2(1), 1-10.</p>

所属・職位	教育マネジメント機構国際教育推進センター・講師	
氏名	西島 順子 (Nishijima Yoriko)	
取得学位	博士 (人間・環境学)、京都大学、2021年7月	
SDGs目標	  	

研究分野 外国語教育学、日本語教育学

研究キーワード 言語政策、複言語・複文化主義

研究内容

- イタリアの複言語主義の歴史の変遷に関する研究  
 現在、言語教育において一般的に理解されている複言語主義 (plurilingualism/plurilinguisme) とは、欧州評議会が推進する言語教育の理念である。しかし、それとは政治的に異なる文脈において、また欧州評議会がそれを発表する20年以上前に、1970年代のイタリアではplurilinguismoが論じられ、それに基づくeducazione linguistica democratica (以下、民主的言語教育) と称する言語教育改革が進められていた。この民主的言語教育を提唱した言語学者De Mauroの言説を中心に、イタリアにおけるplurilinguismoの萌芽から言語教育の実践まで明らかにした (論文2, 3, 4)。
- イタリアのplurilinguismoに基づく移民児童への教育政策に関する調査・分析  
 現在、イタリアではplurilinguismoは欧州評議会の複言語主義と同義で用いられている。その理由は、1980年代以降の移民生徒の増加や、1990年代からの欧州評議会の言語政策の影響の下で、次第に欧州評議会の提唱するplurilinguismoと一元化していったからである。しかし、イタリアで創出されたplurilinguismoの理念を包摂する民主的言語教育は、De Mauroの政治的助力もあり、教育法の改正時にたびたび影響を与え、継承されていった。その変遷の中で、学校で移民に対峙する教師がplurilinguismoの概念をいかに教育現場に還元し、教育実践を行ったかを調査している。
- 日本語教育に関わる実践研究  
 日本語教育へCEFRの実践研究として、言語ポートフォリオがアジア人日本語学習者の自律学習に与える効果の検証や、アカデミック・ジャパニーズ領域における口頭表現の Can do statementsの構築の試作を行った (論文5)。また、調査研究として、ドイツと日本の日本語教師のアセスメントの文化的差異の分析を行った (論文1)。

研究業績・アピールポイント

- 論文

1. 「日本語教師の成績評価に関する日独間の文化的差異—評価ピラーの質的調査—」 濱田朱美, 西島順子, *Japanisch als Fremdsprache* 7, 85-107, 2021年3月
2. 「近現代イタリアにおける言語状況と言語政策の展開: トゥッリオ・デ・マウロの民主的言語教育の創出まで」 西島順子, 『日伊文化研究』58, 64-76, 2020年3月
3. 「イタリアにおけるplurilinguismoの歴史の変遷—1975年の民主的言語教育の提言まで—」 西島順子, 『言語政策』(15), 105-129, 2019年3月
4. 「1970年代のイタリアにおける民主的言語教育の構築—トゥッリオ・デ・マウロの構想した言語教育とplurilinguismo—」 西島順子, 『人間・環境学』(27), 153-167, 2018年12月
5. 「アカデミックな場における対話型口頭表現能力のCan-do statementsを用いた枠組み作成の試み」 西島順子, 『同志社大学 日本語・日本文化研究』(11), 69-90, 2013年2月

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部





医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

# 研究マネジメント機構

所属・職位	研究マネジメント機構・教授（グローバル感染症研究センター兼任）	
氏名	一三三 恵美 (Hifumi Emi)	
取得学位	博士（工学）、九州大学、2001年12月	
SDGs目標	  	

**研究分野** 生命科学、生物工学、抗体工学

**研究キーワード** 抗体酵素、抗体、ウイルス、がん

**研究内容** 抗体は高い抗原分子認識能を持つけれども、酵素的機能は持たない。一方、酵素は標的分子（基質）を分解できるが、分子認識能は抗体に比べるとはるかに低い。一三三らは、両者の機能を併せ持つ抗体鎖を発見したことを端緒とし、抗原分解能を有する抗体鎖（「スーパー抗体酵素」と名付けた）の基礎、および応用研究を進めている。基礎研究としては、スーパー抗体酵素が自然の免疫機構の中で生じる理由の解明や効率的な作製法の開発、応用研究としては、インフルエンザウイルス・狂犬病ウイルスなどの悪性ウイルスやピロリ菌、がん細胞に対するスーパー抗体酵素の作製に取り組んできた。その中で3次元構造が抗体分子と同様に構造多様性を持つことが明らかとなり、製造上大きな障壁となると考えられた。そこで、この課題解決に取り組み、精製過程で銅(II)イオンを適切に用いることで解決した。この内容をまとめたReviewは今でも多くの研究者に読まれている (*Antibody Engineering*, 2018)。

一方、最近では、スーパー抗体酵素の作製に要する労力・時間の軽減に取り組み、これを大幅に短縮する新しい技術の開発に成功した (*Science Advances*, 2020)。これは、世界中で作製されてきた何万種類という抗体にも適用可能な手法であり、抗体を容易にスーパー抗体酵素に変換する革新的手法である。海外からも高く評価されている。

**現在の研究テーマ：**

- (1) インフルエンザウイルスや新型コロナウイルスの保存領域に対する「スーパー抗体酵素」の作製
- (2) がんや認知症に関連する複数のタンパク質を標的にしたハイブリッド型抗体酵素の設計と作製
- (3) 抗体酵素分子のドメインスワッピングと機能向上に関する研究





**研究業績・アピールポイント** 上記関連論文

1. Review/Structural diversity problem of antibodies and catalytic antibody light chains and the solving method, E. Hifumi et al., Chapter 10, (pp231-257) *Antibody Engineering*, 2018, (InTech publishers) DOI: 10.5772/65238
2. A new algorithm to convert a normal antibody into the corresponding catalytic antibody. E. Hifumi et al., *Science Advances*, **6**(13), eaay6441(2020). DOI: 10.1126/sciadv.aay6441 IF: 13.1

関連する研究費（研究代表者：一三三恵美）

1. 文科省科学研究費補助金・基盤研究A 「完全抗体をスーパー抗体酵素に変える革新的技術の開発」(H28～R1)
2. 文科省科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）ガン関連タンパク質の働きを同時に制御するハイブリッド抗体酵素の開発 (R2～R4)
3. 科学技術振興機構・未来社会創造事業「大気中のウイルス（インフルエンザウイルスや新型コロナウイルス）を無力化する革新的感染予防システムの開発 (R1～R3)



所属・職位	研究マネジメント機構 産学官連携推進センター 知的財産管理部門・教授	
氏名	松下 幸之助 (Matsushita Konosuke)	
取得学位	博士 (工学)、新潟大学、2002年 9月	
SDGs目標	  	

研究分野	給排水設備、ユニバーサルデザイン、植物工場、オープンイノベーション
研究キーワード	衛生器具、排水システム、排水処理、介護支援ロボット、月面農場、知的財産

研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 水回りのユニバーサルデザインを実現するための給排水設備機器の実現 給排水設備機器の新機能を実現するための要素技術の研究ならびにその成果を搭載した排水処理システムや水回り家電商品、介護支援ロボットなどを商品化 (37商品群) <b>【主な製品】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ディスポーザ生ごみ処理システム</li> <li>・ ベッドサイド水洗トイレ</li> <li>・ 浴室暖房換気装置・手指温風乾燥機</li> <li>・ ベビーチェア・ベビーシート・フィッティングボード</li> </ul> </li> <li>● アジアにおける建築設備調査 建築設備の専門家集団による調査団を結成して、アジアにおける建築設備の実態を調査研究し、現地大学との共同研究と人材育成のための活動を推進中。給排水設備担当として、インドネシア・ベトナム・カンボジア・中国・台湾・ミャンマー・ネパールの各国に対して日本の建築設備技術を海外展開するための人材ネットワークを構築中。</li> <li>● 難分解性有機物分解・病原性微生物失活技術の社会実装 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新規考案の電気化学処理による水処理システムの研究</li> <li>・ 液中の難分解性有機物および微生物 (細菌・カビ・藻類) の無農薬殺菌・失活技術を組み込んだ応用機器の研究 →植物工場、月面農場 (JAXAと共同研究中)、陸上養殖、安全な給水設備機器への応用</li> </ul> </li> <li>● A I ・ I o T 分野における知的財産マネジメント 内閣府の委員会でオープンイノベーションにおけるプロジェクトマネジメント、データ類の知的財産権上の扱いと流通方法、日本版バイ・ドール法への対応、オープンイノベーションにおける利益相反マネジメントなどの制度設計に関する研究を推進</li> </ul>	 <p>ベッドサイド水洗トイレ</p>  <p>月面農場のイメージ</p>  <p>A I と I o T を実装した医療システム</p>
------	---	--



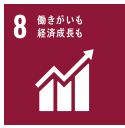



研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 知的財産権 特許出願122件 (うち、権利化35件)、商標 3件</li> <li>● 論文 1. 2013年、Study on the Method of Connecting to the Gravity Drainage System of Bedside Flush Toilet, Paper of CIB W062 2. 2016年、島根大学における知的財産創活教育、日本弁理士会、パテント</li> <li>● 受賞 1. キッズデザイン賞 少子化対策担当大臣賞 (キッズデザイン協議会) 2. 日本ロボット大賞サービスロボット部門 優秀賞 (経済産業省) 3. 日経優秀製品・サービス賞 日経MJ賞 最優秀賞 (日本経済新聞社) 4. 設備器具・システムデザイン部門最優秀賞 (建築設備総合協会) 5. JSEE AWARD (日本工学教育協会)</li> <li>● プロジェクト 内閣府S I P (戦略的イノベーション創造プログラム) 「A I ホスピタル」 J A X A 宇宙探査イノベーションハブ T a n s a X チャレンジ</li> </ul>
---------------	--



# 研究マネジメント機構

所属・職位	研究マネジメント機構 産学官連携推進センター 産学官連携部門・准教授	
氏名	小川 領一 (Ogawa Ryoichi)	
取得学位	博士 (学術)、鹿児島大学、2008年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	開発学、廃棄物管理
研究キーワード	プロジェクトマネジメント、ソーシャルビジネス、廃棄物管理、産学官連携、国際協力
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 開発途上国の廃棄物管理に関する調査・分析 <ul style="list-style-type: none"> <li>- スリランカ国西部州における廃棄物管理計画（マスタープラン）策定支援プロジェクト（国際協力機構 2019年3月 - 2021年3月）</li> <li>- ラオス国廃棄物管理セクターに係わる情報収集確認調査（国際協力機構 2019年2月 - 2021年2月）</li> <li>- モロッコ国国家都市廃棄物処理戦略策定プロジェクト（国際協力機構 2018年4月 - 2019年11月）</li> <li>- モロッコ国ティズニット市及び周辺コミュニティにおける廃棄物管理能力向上プロジェクト（国際協力機構 2013年9月 - 2016年2月）</li> <li>- キューバ国ハバナ市廃棄物管理能力向上プロジェクト（国際協力機構 2009年9月 - 2013年6月）</li> <li>- 北米・中南米地域中米カリブ地域廃棄物管理分野情報収集・確認調査（国際協力機構 2012年8月 - 2012年9月）</li> <li>- スリランカ国廃棄物処分場における汚染防止と地域特性を活かした修復技術の構築プロジェクト 詳細計画策定調査（国際協力機構 2010年10月 - 2010年11月）</li> <li>- 大洋州地域における日本の廃棄物管理分野協力の事例調査（国際協力機構 2009年1月 - 2009年3月）</li> <li>- モンゴル国ウランバートル市廃棄物管理強化計画詳細計画策定調査（国際協力機構 2008年12月 - 2009年1月）</li> <li>- 中華人民共和国循環型経済推進プロジェクト第1次事前調査（国際協力機構 2008年3月 - 2008年4月）</li> </ul> </li> <li>● 空き家問題を対象とするソーシャルビジネスに関する調査、事業 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 農林水産省農山漁村振興交付金（農泊推進対策）事業（清水地域資源活用協議会 2020年4月 - 2021年3月）</li> </ul> </li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小島嶼開発途上国におけるプラスチックごみの現状と課題 小川領一, 河合溪 日本島嶼学会大会 研究発表要旨集 2019 2019年</li> <li>● 小島嶼開発途上国と持続可能な開発目標（SDGs）～フィジー沿岸域の集落から排出される生活ごみに着目して～ 小川領一, 河合溪 2018 2018年</li> <li>● 開発途上国の島嶼地域における廃棄物管理の現状と課題—キューバの事例を中心として—</li> <li>● 小川領一 日本島嶼学会大会 研究発表要旨集 2016 2016年</li> <li>● 開発援助における小規模社会基盤整備と住民組織 地域政策科学研究 (4) 17-32 2007年2月</li> <li>● 小規模社会基盤整備における住民参加型プロジェクトのマネジメント—コミュニティのソーシャル・キャピタルに着目して— 南太平洋研究 27 (2) 37-52 2007年</li> <li>● スワジランド国農村環境改善事業の検証—住民参加型プロジェクトの効率的な運営方法についての一考察 地域政策科学研究 (3) 147-170 2006年2月</li> <li>● 保有資格 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 技術士（衛生工学部門 廃棄物管理計画）、専門社会調査士</li> </ul> </li> </ul>

所属・職位	研究マネジメント機構 研究支援センター 機器分析部門・准教授	
氏名	西口 宏泰 (Nishiguchi Hiroyasu)	
取得学位	博士(工学)、大阪府立大学、1994年3月	
SDGs目標	    	

研究分野	材料化学 触媒化学 光化学 分析科学 地域資源・評価
研究キーワード	グリーンプロセス、表面処理、物資変換、新規機能性材料
研究内容	<p>●耐熱性、耐摩耗性に優れた傾斜機能材料の開発に関する研究</p> <p>金属拡散透過法は材料の機械的強度を殆ど劣化させずに材料表面に極めて密着性が良好で、しかも、耐高温酸化性・耐食性・耐摩耗性に優れた合金層を提供することが可能です。その中にカロライジング処理というものがあり、通常、カロライジング処理は還元雰囲気あるいは真空下で処理する必要がありますが、最近、大気中でも同処理が進行することを見出したので大気雰囲気での表面処理技術の展開とメカニズムの検討を行っています。</p> <p>●グリーンプロセスを指向したペロブスカイト、ペロブスカイト類縁物質の合成</p> <p>ペロブスカイト型化合物(ABO<sub>3</sub>型化合物)はそのAサイト、Bサイトへの他元素のドーピングによって原子価制御が可能で酸素イオン伝導性やその他の物性を大きく変化させることが可能な物質です。また、ペロブスカイト化合物は耐熱性にも優れるので高温環境下で安定的な作動を要求される触媒反応に対して他の酸化物と比較して有利です。グリーンプロセス〔酸素吸蔵、NO<sub>x</sub>分解 酸素透過、炭化水素からの水素製造等〕を指向した化合物の合成と高非表面積化について検討しています。</p> <p>●新規機能性無機材料の開発—各種(貴)金属微粒子分散新規ナノコンポジットの開発とその応用—</p> <p>安全・安価・グリーンな糖類の熱分解(還元剤)として用いる金属微粒子作成法を応用・改良したプロセスは水溶性の金属前駆体であれば種類によらず合成可能であり、2種類以上の金属の複合化が容易で合金微粒子を合成可能であることを見出したので、新規金属ナノ粒子-炭素ナノコンポジット(複合材)の開発を行っています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>2020年、Applying the ensemble averaging method with a pressure-velocity sensor to measure sound absorption characteristics of porous clay bricks. <i>Applied Acoustics</i>, 164, 107250, 1-10, 2020.</p> <p>●特許</p> <p>2018年、金属基材の表面処理方法 特許 第6274530号、</p> <p>2010年、金属ナノ粒子-炭素複合体、これによる触媒、ならびにこれを用いたナノカーボン類の製造方法およびナノカーボン類 特許 第4590643号</p> <p>●著書</p> <p>2005年、固体表面キャラクタリゼーションの実際、田中庸裕・山下弘巳 編、講談社サイエンティフィック、(分担執筆 第14章-1)</p> <p>●受賞</p> <p>2003年、「Fe, Sr添加LaGaO<sub>3</sub>系酸化物を酸素分離膜に用いた膜型反応器によるCH<sub>4</sub>部分酸化反応」、石油学会論文賞</p>

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部


医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等


所属・職位	学術情報拠点情報基盤センター・教授	
氏名	吉田 和幸 (Yoshida Kazuyuki)	
取得学位	工学博士、九州大学、1984年3月	
SDGs目標		

研究分野	情報工学
研究キーワード	計算機ネットワーク、情報セキュリティ、spam対策、ネットワークモニタリング
研究内容	<p>計算機ネットワーク、情報セキュリティに関する研究に取り組んでいます。</p> <p>(1) ネットワークトラフィックの可視化システムに関する研究： インターネットトラフィックの増大に伴い、サーバやそこで動作しているサービスを調査するスキャンも増加している。大量のパケットが来るスキャン等の傾向を把握するには、個々のパケットやフローの解析では困難である。我々は、スキャンの状況をリアルタイムに表示するシステムを作成し、運用している。本研究では、可視化した分布図から読み取れるスキャンの傾向などについて考察している。</p> <p>(2) DNSシンクホールを用いた悪意あるWebサーバに対する通信観測システムに関する研究 本研究ではクライアントが悪意あるWebサーバへ接続することを防ぎながら、接続時におけるクライアントの挙動を分析することを目的とする。DNSシンクホールと観測サーバを用いてクライアントからの悪意あるFQDNに対する通信を観測するシステムの構築について述べる。DNSシンクホールは、通常、問い合わせられた悪意あるWebサーバの名前に対して存在しないIPアドレスを応答することによって、悪意あるWebサーバへの接続を抑制する。しかし、管理者はブロックした接続において、たとえばWebサーバからどのようなファイルがダウンロードされようとしていたのか、どのような情報を外部へ送信しようとしていたのかまでは把握できない。また、ユーザ側の視点でもなぜ接続がブロックされたのか把握できない。そこで、我々はDNSシンクホールから観測サーバのIPアドレスを応答することにより、当該通信を観測サーバへ誘導し、クライアントからの悪意あるFQDN宛の通信を分析する仕組みを構築した。本観測システムでは観測サーバで収集したHTTPリクエストを分析することで、ブラックリストに記載されたWebサーバの名前のみでは分析できない接続後の挙動や攻撃手法を分析する。</p> <p>(3) インターネットを利用した不正アクセスが多く発生している。特に、SSHサーバに対する不正アクセスの件数は依然として多い。SSHは、通信路を暗号化するため、通常のファイアウォール等でSSHを用いた不正アクセスを検知をすることが難しい。そこで、我々はSSHへのパスワードクラッキング攻撃を検知することを目的として「SSHパスワードクラッキング攻撃検知システム(SCRAD)」を開発・運用してきた。本システムではSSHサーバ・クライアント間の1コネクションのパケット送受信回数とデータ量とからパスワードクラッキング攻撃を検知している。提案手法での運用結果を分析した結果、攻撃者のコネクションを99.7%正確に判定できたが、正規ユーザのコネクション判定率は72.2%であった。提案手法によりSSHパスワードクラッキング攻撃によるSSHサーバへの侵入のリスクを低減できることと、正規ユーザを誤検知することにより、ユーザの利便性を損ねる可能性があることが判明した。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>(1) 吉田 和幸, 宇野 秀亮, 池部 実, 吉崎 弘一: リアルタイムトラフィック可視化システムとその運用経験, マルチメディア, 分散協調とモバイルシンポジウム2021論文集, 2021 (1) 1228-1232, 2021年</p> <p>(2) 佐保航輝, 池部実, 吉崎弘一, 吉田和幸: DNSシンクホールを用いた悪意あるFQDNに対する通信観測システムの運用, 情報処理学会デジタルプラクティス, 11 (3) , 589-608, 2020年</p> <p>(3) 清水光司, 小刀稱知哉, 池部実, 吉田和幸: SSHパスワードクラッキング攻撃におけるデータサイズを用いる検知手法の提案と運用評価, 情報処理学会論文誌ジャーナル, 58 (3) , 695-707, 2017年</p>

所属・職位	学術情報拠点情報基盤センター・准教授	
氏名	吉崎 弘一 (Yoshizaki Koichi)	
取得学位	博士(理学)、東北大学、2001年3月	
SDGs目標		




研究分野	教育工学, 計算機システム
研究キーワード	学習支援システム, eラーニング
研究内容	<p><b>【オンラインの学習活動を可視化するデジタル学習環境の構築と運用】</b>  オンライン授業では教授者の目の前に学習者がいないため、学習者ごとの学習状況の把握が一般に困難である。このことは個々の学習者に適応させた学習指導や課題設定が難しいだけに留まらず、履修放棄者の抑制等への対策を考える上でも大きな課題となっている。このような現状に対して本研究では、1) 既開発のWebシステム・ブラウザ拡張機能を連携して学習支援システムの管理外のWebページ上の学習活動も記録し、2) 学習記録に基づき学習状況の分析をした上で、3) 分析結果をWebページ上で可視化及びシステム利用者にプッシュ通知することで、教授者・教育機関の担当者が学習状況を把握しやすいデジタル学習環境を構築する。</p> <p><b>【Web APIでデータと機能を連携する学習プラットフォームの開発】</b>  本研究では、教学を支援する複数のWebシステムが標準的なWeb APIを介して連携する学習プラットフォームを開発する。プラットフォームの構成要素は、履修情報等を管理する学務情報システム、学習活動を管理する学習支援システム、及びそれらの効率的な利用を支援する名簿管理システムと利用申請システムである。学務情報システムは、国際標準規格IMS OneRosterに準拠したCSVファイルで履修情報等のデータを提供する。本研究で開発した名簿管理システムで、そのデータをIMS OneRoster規格に準拠したREST APIで提供する。学習支援システムからこのAPIにアクセスすることで、効率的なデータ連携ができることを確認した。</p> <p><b>【協調キュレーション機能を持つ学習支援システムの開発と能動的学習での実践評価】</b>  Web上には学習に利用できる学習資源が数多く存在するが、広く分散するこれらを効率的に引用しながら学習者の視点で整理・記載したドキュメントを、他の学習者や教員と共有して評価するWebシステムは見当たらない。本研究では学習者が様々な学習資源を引用・整理・共有・評価するための協調キュレーション機能を、本研究代表者・分担者が開発してきた学習支援システムLePoに追加実装することで、Webを活用する新たな形態の能動的学習を可能にした。このキュレーション機能を大学の論文執筆指導の授業で使い、同機能の実践評価を行った。その結果、同機能を用いて論文執筆を支援した実験群では、より明確な構成と論旨展開を持つ論文になることが示唆された。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 科研費基盤研究 (C) 2021-2023 : オンラインの学習活動を可視化するデジタル学習環境の構築と運用 (研究代表者)</li> <li>・ 科研費基盤研究 (B) 2021-2023 : 「幼児の遊びを止めない!」 幼児教育でのICT活用フレームワークの構築 (研究分担者)</li> <li>・ 科研費基盤研究 (C) 2017-2020 : Web APIでデータと機能を連携する学習プラットフォームの開発 (研究代表者)</li> <li>・ "RosterHub: Open-Source Roster Management System for Interoperability of Educational Systems", Koichi Yoshizaki, Junmi Nakashima, Proceedings of E-Learn: World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, and Higher Education, ISBN 978-1-939797-45-2, pp. 891-896, 2019</li> <li>・ 科研費基盤研究 (C) 2014-2016 : 協調キュレーション機能を持つ学習支援システムの開発と能動的学習での実践評価 (研究代表者)</li> <li>・ "LePo: An Open-Source Learning Management System with Text Annotation and Content Curation Functions", Koichi Yoshizaki, Hiroshi Hotta, The IAFOR International Conference on Technology in the Classroom - Hawaii 2017 Official Conference Proceedings, ISSN: 2432-1222, pp. 21-28, 2017</li> </ul>



所属・職位	減災・復興デザイン教育研究センター・教授
氏名	鶴成 悦久 (Tsurunari Yoshihisa)
取得学位	博士(学術)、鹿児島大学、2016年3月
SDGs目標	   







研究分野	土木工学分野における空間情報工学, 海岸環境工学, 災害情報学
研究キーワード	防災・減災, 環境, 地形・地質, 流域, 海岸, 空間情報, GIS, UAV (ドローン)



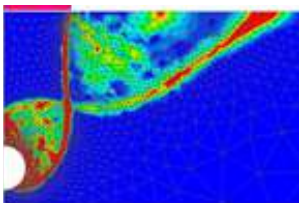
<p>研究内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 防災・減災における空間情報の高度活用に関する研究                     <p>近年の地震活動に加え、豪雨災害を含めた大規模な自然災害は我が国が抱える大きな課題でもある。過疎高齢化が著しく進行し、多くの地方自治体で平時の防災対策や災害時対応、災害復旧や復興過程で安全・安心な地域づくりの達成ができるか危惧される。そこで災害情報を災害時対応の高度化に繋げ、復旧・復興過程に空間情報技術を活用した、災害支援に関する研究を行っている。</p> </li> <li>● 地域防災・減災の向上に関する調査研究                     <p>自然災害が多発する今日において地域防災の向上を目指した防災・減災の施策は極めて重要である。とりわけ気候変動に伴う土砂災害は近年その発生頻度とともに甚大な被害が各地で発生している。そのためリスクマネジメントからクライシスマネジメントの各段階において地域課題を抽出・可視化し、地域防災・減災に資する実践的な研究を行っている。</p> </li> <li>● 河川流域・沿岸環境の保全と生態系を取り巻く環境モニタリングの研究                     <p>多様性に富む沿岸の水圏域環境は、里山を源流域とする河川が流域の栄養塩を沿岸域に供給し、沿岸域の一次生産や生態系を維持する。そこで流域及び沿岸の生態系を取巻く環境の変化を定量的に把握するための新たな環境モニタリング手法を開発・応用し、河川流域から沿岸環境の調査と評価、情報の可視化に関する研究を行っている。</p> </li> </ul>	 <p>大分県や関係機関と連携した災害情報の分析や評価 (災害リスク評価システム)</p>  <p>地方公共団体における災害対応の高度化 (ドローン情報共有システム)</p>  <p>災害情報のアーカイブと防災教育への活用 (防災・減災教育支援システム)</p> <p>災害情報活用プラットフォームEDiSON</p>
-------------	---	---

<p>研究業績・アピールポイント</p>	<p>減災・復興デザイン教育研究センターでは多様化かつ複合的な災害への対応を目指し、産学官がもつ多種多様な防災・減災に関するデータを統合させ、機械学習・AIによる先端技術を活用したデジタル技術により新たな防災・減災拠点「災害情報活用プラットフォーム (EDiSON : Earth Disaster Intelligent System Operational Network)」の研究開発を行っている。EDiSONでは地域や地方公共団体が抱える防災・減災に関する様々な課題把握や、空間情報を活用したりリスク認知や課題の可視化を通じ、地方公共団体への災害対応の高度化、防災教育・地域防災活動の支援と教育体制の強化、事業継続計画 (BCP) をはじめとする事業者への災害対応支援を目指している。</p> <p>本研究では大分県をはじめ民間企業や放送事業者と連携した研究開発事業を進めており、一部の機能は令和2年7月豪雨でも活用された。令和3年度においては大分県とともに防災に関する情報のシステム連携を進め、大分県防災の高度化に向けた様々な実証実験を実施している。プロジェクトでは災害対応から情報共有、そして防災教育に至るまでの災害サイクルに対応した一元的な支援システムの構築を目指している。</p>
----------------------	--



所属・職位	減災・復興デザイン教育研究センター・准教授	
氏名	山本 健太郎 (Yamamoto Kentaro)	
取得学位	博士(工学)、熊本大学、1998年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	地盤工学、地盤防災工学、地盤環境工学、生態学
研究キーワード	防災&減災・現場・低環境負荷・藻場基盤材・斜面・数値解析・防災&環境教育

研究内容	<p>●斜面災害を低減するためのリスクマネジメント手法に関する研究 実際にフィールドに出向き、気候変動の影響を大きく受ける地盤災害・環境問題を解決するための応用技術の研究・開発に取り組む(論文3.)。</p> <p>●産業廃棄物リサイクルマテリアルなどを有効活用した低環境負荷藻場基盤材の開発 陸域では産業廃棄物による環境問題が生じている。陸域での環境負荷を減じつつ、沿岸海域の環境改善を図るため、産業廃棄物をリサイクル材として活用した藻場基盤材の開発を試みている(論文4.)。</p> <p>●基礎地盤、斜面あるいは地下空洞の安定解析(地盤構造物の安定性評価) 地盤工学は地盤を対象とする学問分野のため、取り扱いが難しい分野です。それらに対して、数値解析、理論解析や土質実験を行い、現象の解明や新しい設計手法の提案などを試みています(論文1.2.)。</p> <p>●自然災害リスクに関する評価手法の開発とその減災の実用化に関する調査研究 この調査研究では実務的視点に重点を置き、現場での調査や試験をできるだけ数多く実施し、そこから各種の情報を得て、リスクを評価する手法を確立することを目指す。さらに、産学官と協力して「実務的に活用できる仕組み」を構築することを目指している。</p>	 <p>表層土層深さの測定</p>  <p>海藻が繁茂した藻場基盤材</p>  <p>地下円形空洞を有する地盤の破壊メカニズム</p>
------	---	---

研究業績・アピールポイント	<p>近年は、現地調査や現場試験を主とし、地盤構造物の数値解析やリサイクル材を活用した藻場基盤材開発など、幅広く実施してきている。また、防災&amp;減災活動同様に産学官連携、他分野との融合や国際共同研究も研究を強固にするために重要と考えています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2011年、Stability of a circular tunnel in cohesive-frictional soil subjected to surcharge loading, Computers and Geotechnics 38(4), pp.504-514</li> <li>2011年、Stability of a single tunnel in cohesive-frictional soil subjected to surcharge loading, Canadian Geotechnical Journal 48(12), pp.1841-1854</li> <li>2021年、大分県中津市耶馬溪地域に多発する斜面崩壊とその特性, 第14回環境地盤工学シンポジウム論文集, pp.469-476</li> <li>2021年、流動砂や廃瓦を活用した藻場基盤材の製作とその海中モニタリング, 第14回環境地盤工学シンポジウム論文集, pp.331-338</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2011年、Editor's Choice, Canadian Geotechnical Journal, for paper Stability of a single tunnel in cohesive-frictional soil subjected to surcharge loadingなど</li> </ol>
---------------	---

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	保健管理センター・教授	
氏名	工藤 欣邦 (Kudo Yoshikuni)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1994年3月	
SDGs目標		

研究分野	大学保健管理
研究キーワード	大学生 健康管理 教育啓発活動 感染症
研究内容	<p>1. 非医療系・非教育学部学生の麻疹対策の構築 (2019年)</p> <p>入学時提出の自己記入式健康管理カードで麻疹ワクチン接種歴を確認し、在学中に指導した2017年度入学の経済・理工学部1年生の状況を検討した。また、入学時の書類を基に健康診断時に指導した2018年度入学新生との間で一定期間内に2回接種を完了した割合を比較した。2017年度生は、カードで2回接種確認73.3%:A群、カードで2回接種確認できず母子手帳持参26.7%:B群、B群中來所なし33.2%:BN群、母子手帳でも接種歴が確認不可7.0%:B0群、母子手帳で1回接種確認16.6%:B1群、母子手帳で2回接種確認43.3%:B2群であった。カードと母子手帳から84.9%でワクチン2回接種を確認できたが、B0群+B1群44名中、指導8か月後までに2回接種完了は3名で、2018年度生と比べワクチン2回接種を完了した割合が大幅に低かった。入学後の麻疹対策実施は困難で入学前や入学の時点での2回接種確認が重要である。</p> <p>2. 大学生における熱中症および熱中症対策の実態調査 (2020年)</p> <p>大学生における熱中症の実態を明らかにするため、学部2~4年の在学学生を対象とした調査を実施した。大学入学後に熱中症を発症した学生の割合は2.8%であった。熱中症の発症頻度は、男女ともに体育系サークル群、文化系サークル群、無所属群との間で有意な差を認めなかった。重症度は57.5%がⅠ度であったが、Ⅱ度以上の熱中症も30.2%認めた。サークルに所属する学生においては、サークル活動中以外の時間帯で発症した割合が、体育系サークル群40.0%、文化系サークル群64.0%と少なくないことや、状況別にみた検討において自宅での発症が17.8%と2番目に多いことから、サークル活動中のみならず、日常生活における啓発や注意喚起が重要と考えられた。特に、暑さ指数 (WBGT値) を知っている学生が20.0%と少ないことから、学内における教育啓発活動の強化が必要と考えられた。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>工藤欣邦, 他. 学生の健康診断に対する理解度と受診率—受診率向上を目指して—. CAMPUS HEALTH 54(2): 100-105, 2017.</p> <p>工藤欣邦, 他. 学生・教職員を対象とした禁煙外来の取り組みと今後の課題. CAMPUS HEALTH 54(2):113-118, 2017.</p> <p>工藤欣邦, 他. 大分大学における無煙環境推進活動—現状の報告と今後の課題— (総説). CAMPUS HEALTH 55(2): 36 - 41, 2018.</p> <p>工藤欣邦, 他. 大学生を対象とした頭痛の実態調査. CAMPUS HEALTH 55(2): 126 - 132, 2018.</p> <p>工藤欣邦, 他. 非医療系・非教育学部学生に対する麻疹対策~在学学生に対する調査経験を踏まえて~ CAMPUS HEALTH 56(2):256-260, 2019.</p> <p>工藤欣邦, 他. 大学生における熱中症および熱中症対策の実態調査. CAMPUS HEALTH 57(2):74-80, 2020.</p>

所属・職位	保健管理センター（挟間健康相談室）・准教授	
氏名	加隈 哲也 (Kakuma Tetsuya)	
取得学位	博士（医学）、大分医科大学、1996年3月	
SDGs目標		

研究分野	内分泌代謝内科学、栄養学および健康科学	
研究キーワード	肥満症、メタボリックシンドローム、行動療法、生活習慣改善	
研究内容	<p>●大学生世代の体重管理と生活習慣改善指導</p> <p>思春期肥満の70-80%は成人の肥満症に移行することが注目されている。思春期から成人期の過渡期に位置する大学生は、成人期肥満症やメタボリックシンドロームの発症ならびに進展予防を考える上で、非常に重要な位置づけになる。大学生を対象とした研究でも、運動不足に加え、早食いする人、夜型の生活リズムの人、清涼飲料水を過量摂取する人など、いくつかの生活習慣は体重増加に寄与していることが報告されている。一方で、朝食の欠食も、この世代の体重増加に寄与する報告がある。我々も、他の4つの代表的な生活習慣（毎日の体重測定、運動習慣、夜食の頻回摂取、清涼飲料水の過量摂取）の有無と比較して、朝食を欠食する学生は、欠食しない学生より、入学時から5年生までの体重増加が最も大きいことを報告した（Kakuma T et al. J Endocrinol Metab 2020-1[論文1]）。朝食を欠食する学生は、食行動は控えめだが、朝が弱く、夜型の生活パターンを示す。夜型の生活リズムは、時間生物学の観点からも、体重が増加しやすいことが報告されており、生活リズム異常を起こさないためにも、朝食の摂取は重要である。</p> <p>在籍していた旧講座では、医学部5年生の臨床実習として、学生同士が違いに採血を行い、自身の耐糖能を知ることが目的に75gブドウ糖負荷試験を実施してきた。平均年齢25歳の大学生世代で男女を含む集団においては、BMIやウエスト周囲長より、ウエスト周囲長/身長が内臓脂肪蓄積を評価し糖代謝異常の予防を検討する上で有用なマーカーになること（加隈哲也他.CAMPUS HEALTH 2019-1）。内臓脂肪量の影響が少ない大学生世代では、インスリン分泌能は、運動習慣や食習慣、体格より、性差で規定される部分が多いことがわかった（加隈哲也他.CAMPUS HEALTH 2019-2）。また毎日体重測定する学生は26.8%であったが、体重測定習慣における糖代謝の違いは認められなかった。一方で、体重測定習慣の認識には男女の違いがあり、食習慣や運動習慣との相乗効果が観察された（Kakuma T et al. J Endocrinol Metab 2020-2）。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>自分の専門分野は内分泌代謝学であり、肥満症としての生活習慣病である。治療者からの指摘ではなく、対象者が自らの意思で行動変容するという方法論を追求している。これを『大学生や職員のメタボ発症予防や改善』に活かしていければと考えている。</p> <p>●論文</p> <p>1、Effects of self-awareness of eating behaviors and differences in daily habits among Japanese university students on changes in weight and metabolism. <b>Kakuma T</b>, Yoshida Y, Okamoto M, Shibata H, Tsutsumi T, Kudo Y. J Endocrinol Metab.10: 131-139, 2020.</p> <p>●受賞</p> <p>1、2010年5月、第53回日本糖尿病学会年次学術集会 プレジデントポスター賞</p> <p>2、2017年11月、第55回全国大学保健管理研究集会 優秀演題賞</p> <p>3、2019年5月、Metabolism reviewer-award 2018</p> <p>4、2021年10月、第59回全国大学保健管理研究集会 優秀演題賞</p>	

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部


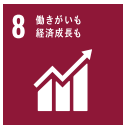
福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	保健管理センター・准教授	
氏名	堤 隆 (Tsutsumi Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2004年6月	
SDGs目標		

研究分野	精神神経医学
研究キーワード	メンタルヘルス
研究内容	<p>・大学生のメンタルヘルス不調に関する研究          大学生時代は、アイデンティティの形成上重要であり、さまざまな心理的な問題や精神疾患が発生しやすい時期でもある。そのため、精神的不健康状態をきたし、その結果として、学業成績の低下、対人関係の困難さなどの不良な結果に至ることが報告されている。本研究は大学生のメンタルヘルス不調を明らかにするものである。</p> <p>・新入生のメンタルヘルスに関する研究          近年、大学の新入生のメンタルヘルスの問題が指摘されており、青年期のメンタルヘルスにはうつや不安等の多岐に渡る問題が存在している。青年期など、若年層で発症した精神的不健康は、慢性的な経過をとるという報告もなされている。その結果として、学業成績の低下、対人関係の困難さなどの不良な結果に至ることなどが考えられている。本研究は新入生の入学時のメンタルヘルスを明らかにするものである。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文          Tsutsumi T, Terao T, Hatanaka K, et al. Association between affective temperaments and brain-derived neurotrophic factor, glycogen synthase kinase 3<math>\beta</math> and Wnt signaling pathway gene polymorphisms in healthy subjects. J Affect Disord 2011; 131: 353-357.          堤 隆, 工藤欣邦. ぴあROOM. こころの健康 2018 : 33 : 11-15.          堤 隆, 河野香奈江, 工藤欣邦. 大学生のメンタルヘルス不調に関与する背景因子. 大学のメンタルヘルス 2021 : 4 : 79-83.</p> <p>著書          堤 隆, 寺尾 岳. 化学的検査. プラクティカル精神医学 中山書店 ; 2009. P.187-191.</p>

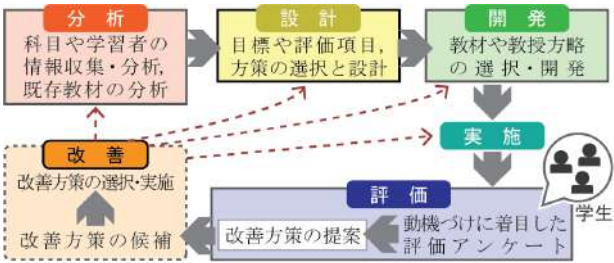



所属・職位	IRセンター・教授	
氏名	下田 憲雄 (Shimoda Norio)	
取得学位	経済学修士、関西学院大学、1983年3月	
SDGs目標		
研究分野	数理経済学・計量経済学・ゲーム理論・景気動向分析	
研究キーワード	一般均衡論, 力学系, データ分析, 産業連関分析, 景気動向指数	
研究内容	<p>■一般均衡論の枠組みの中でシステムの安定性等の研究</p> <p>一般均衡論における安定分析は、課題は多々あるにせよ、多くの研究成果が蓄積されている。他方、初期点からコアへの運動過程は一つの経路に限定することができない。すなわち、一般的な微分方程式による確定的な積分経路を明示できない。ラグランジュを積分して経路を求めるとき、積分値を最小化するというハミルトン原理から1本の経路を選び出すことができない。一つのアプローチとして、初期点からコアへのすべての運動経路を記述することを考える。</p> <p>■計量経済モデルを用いた分析</p> <p>地域経済の計量モデルを推計し、消費構造、産業等生産構造などを量的に把握することは、地域経済政策の立案、評価等に重要である。計量モデルは様々な経済的現象、経済的成果の評価を行う上で基本的な分析手法であり、その整備が必須である。その観点からモデル分析を進める。</p> <p>■経済データの分析（産業連関分析、景気動向指数分析等）</p> <p>大分県では地域の産業連関表を策定、公表している。国の産業連関表ならびに九州地区の産業連関表と比較しても遜色はない。この産業連関表を用いて、地域経済、産業間の量的な関係、政策効果、時系列分析などが可能となる。技術進歩率、企業立地や港湾整備の波及効果の推計を実施してきたが、製造業等以外にも大分トリニータの大分県経済へ与える効果なども推計してきた。こうした作業はデータに基づく政策立案の基礎となるものである。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>*一般均衡モデル下での力学系分析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「純粋交換モデルにおける一つの力学系表現について」、単著、『経済学論究』、第57巻第2号、関西学院大学経済学部研究会、pp.1-6,2003.</li> </ul> <p>*地域計量経済モデルや産業連関表等を用いて、地域経済の分析を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「旅行者・観光客の消費がもたらす県内産業への経済波及効果について」、共著（直野智和・小野宏・下田憲雄）、『大分大学経済論集』、第64巻第5・6号、pp.113-148、2013.</li> <li>「大分県ストック・ワトソン型景気指数の試算」、共著（下田憲雄・小野宏）、『大分大学経済論集』、査読あり、第62巻第3・4号、pp. 14-34、2010</li> </ul>	





所属・職位	IRセンター・准教授	
氏名	鈴木 雄清 (Suzuki Yusei)	
取得学位	修士 (教授システム学)、熊本大学、2012年3月	
SDGs目標	4 質の高い教育をみんなに 	

研究分野	教育工学
研究キーワード	授業・研修改善, 学習の動機づけ, 学習ログ, 教学IR

<p><b>研究内容</b></p> <p>■ 学習者の動機づけを高める授業・研修改善のための教員・講師の支援に関する研究</p> <p>心理学理論や研究に基づいた学習の動機づけの視点から授業を評価するアンケートを作成し、学生に調査した結果から授業改善の方策を提案する教員向けシステムを構築している。教員が具体的にどのような改善を行ったかの情報を教員コミュニティで共有したり、改善の方策提案の自動リコメンドを実装したりすることによる教育改善支援を目指す。</p> <p>■ 学習ログの分析による教育改善や学習者の特徴判別に基づく学習者支援に関する研究</p> <p>学習支援システム (LMS) に蓄積される学習ログデータ (学習者のアクセス日時や、課題の完了日時、テストの得点等) を分析し、教育改善のための知見を得たり、学習者の特徴判別 (先延ばし傾向が高い等) に基づいた学習者個別への支援を行えるようにしたりすることを目指す。</p> <p>■ 教学IR (Institutional Research) データの収集・管理・可視化のための研究</p> <p>教育の効果測定や改善に教学IRデータ (学生の成績や各種アンケート結果など) を活用できるようにすることを目的に、大学機関の教育に関するデータを一元的に収集・管理し、分析結果を可視化するための仕組みやシステムを構築する。</p> <p>■ 幼児期の養育環境が及ぼす影響についての研究</p> <p>■ 学生・教員・企業等の教育評価のズレを可視化する研究</p>	 <p>図1 動機づけに着目した改善方策提案システムによる授業改善支援</p>
	 <p>図2 教学IRデータの可視化の例</p>

<p><b>研究業績・アピールポイント</b></p>	<p>Considerations for Classification of Procrastinator Focusing on Periodical Online Exam in Blended Learning Course, Shin-ichiro Kubota, Ryuichi Matsuba, Naoshi Hiraoka, Yusei Suzuki, Yoshiko Goda, 2020 IEEE International Conference on Teaching, Assessment, and Learning for Engineering, 8-11, 2020.</p> <p>Design of a Supporting System for Consultation of Instructional Improvement, Yusei Suzuki, Ryuichi Matsuba, Katsuaki Suzuki, Toshihiro Kita, Advances in Intelligent Systems and Computing, 772 927-935, 2019.</p>
-----------------------------	--

所属・職位	IRセンター・講師	
氏名	堺 完 (Sakai Osamu)	
取得学位	修士 (教育学)、同志社大学、2009年3月	
SDGs目標		

研究分野	高等教育学
研究キーワード	学生調査、教学IR、短期大学研究

研究内容	<p>■学生調査及び教育の内部質保証に関する研究</p> <p>本研究は、大学等に在籍している学生が在学中に正課内外の様々な経験や活動、それらの大学での活動を通じて身に付けた知識や技能、価値観や態度といった成果をどのように認識しているか、アンケートツールを使って調査し、そこから得られたデータもとに、大学等の教育内容の改善や各種支援策の見直しなど、教学面の評価・改善活動にどのようにつなげていくかについてを検証するものである (著書1.)。</p> <p>■短期大学の学習 (修) 成果の測定に関する調査・分析</p> <p>大学・短期大学基準協会の実施する「短期大学生調査」から得られた調査データをもとに、短期大学教育の教育効果とそれに影響を与える要因を分析している (論文1. 及び論文2.)。また教育の内部質保証を行うにあたって、どのような可視化が必要であるのか、調査結果のフィードバックの在り方を検討している。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.jaca.or.jp/service/other/research/tandaiseichosa/">https://www.jaca.or.jp/service/other/research/tandaiseichosa/</a></p> <p>■短期大学卒業生調査の研究開発</p> <p>就職等で社会に出た短期大学生が、卒業後の就業経験や日常生活を送る中で、短期大学での教育をどのように評価しているかを測定する卒業生調査の研究開発に大学・短期大学基準協会調査研究委員会の研究協力者として従事している。</p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>■論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2015年、堺完、木村拓也、西郡大、山田礼子「短期大学におけるエンゲージメントの構造-重回帰分析、分散分析、多重対応分析を用いた検討-」『短期大学コンソーシアム九州 紀要 短期高等教育研究』Vol.05、pp.15-24</li> <li>2018年、一般財団法人短期大学基準協会、『短期大学における学習効果測定法 (短期大学生調査) の研究開発報告書』、2章及び3章分担執筆 (pp.6-29)</li> </ol> <p>■著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、堺完、西郡大、木村拓也「学生調査のフィードバックと可視化・データ活用に向けた支援」、山田礼子・木村拓也編『学修成果の可視化と内部質保証 日本型IRの課題』、玉川大学出版部、pp.56-76</li> </ol>
---------------	---

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




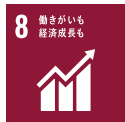

医学部

医学部附属病院


理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	IRセンター・助教	
氏名	安部 恵祐 (Abe Keisuke)	
取得学位	博士 (理学)、熊本大学、2008年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	教育学 生物学 食品関連 医工連携関連 キャリア関連 研究IR
研究キーワード	産学官金等共創教育 (PBL/CBL)、人財開発、製品開発、科研費支援

研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>【研究内容】</b> 次世代を牽引できる若手リーダー人財創出プロジェクト (人財開発) を実施している。現在、産学官金等共創教育 (地域ブランディング等) を通じ、地域への課題解決策の提案や製品開発のファシリテーション等を行っている。</p> <p><b>【研究実績等】</b> 教育開発：地域ブランディング等PBL ※COC+事業S評価 選定理由にも記載</p> <p>人財開発：「おおいた共創士」制度の設計・運営、キャリアベース産学連携支援等</p> <p>製品開発：「もち麦粉」を基にした麺の開発支援</p> <p>researchmap: <a href="https://researchmap.jp/keia">https://researchmap.jp/keia</a></p>	 <p><b>シニアアカデミア教育の構築</b></p> <p>大学 ↔ 研究開発 (知財(特許等) リック) ↔ 企業</p> <p>大学側: 研究 (論文), PBL教育, 教育 (AP, CP, DP)</p> <p>企業側: 市場形成, 製品開発等, 人財育成, コンビニアンシー, 中堅社員, コロナ対応</p> <p>高校</p> <p>失われた30年を取り戻すべく、教育スリップを防止し、理論・分析止まりではなく、意義(熱・魂)のある教育構築を目指します。</p>
--------------------	---	--



# 索引

---

# 学部別索引

## ■ 役員

北野 正剛	6
津村 弘	7
藤井 弘也	8
山岡 吉生	9

## ■ 教育学部・ 大学院教育学研究科

ア	青柳 かおり	12
	麻生 雄治	13
	麻生 良太	40
	甘利 弘樹	14
	安道 百合子	41
イ	市原 靖士	15
	伊藤 安浩	16
ウ	内田 昭利	65
エ	衛藤 裕司	17
オ	大上 和敏	18
	大島 崇	69
	大谷 由布子	59
	大塚 道太	42
	大野 貴雄	43
カ	川畷 道広	19
	川田 菜穂子	44
キ	清國 祐二	66
ク	熊丸 真太郎	70
	栗栖 由美子	20
	黒川 勲	21
コ	河野 晋也	71
	古賀 精治	22
	古長 治基	60
	小林 良彦	61
	小山 拓志	45
サ	財津 庸子	23
	齊藤 友子	46
	佐藤 晋治	67
シ	清水 慶彦	47
	清水 良彦	48
	鄭 敬娥	24
ス	杉山 昇太郎	62
	住岡 敏弘	25
タ	竹中 真希子	68
	田中 修二	26

	田中 星治	27
	谷口 勇一	28
	田端 真弓	49
	玉江 和義	29
ト	土居 晴洋	30
	都甲 由紀子	50
ナ	中川 裕之	31
	永田 誠	51
	中原 久志	52
ハ	萩嶺 直孝	53
	橋本 美喜男	54
	長谷川 祐介	32
	花坂 歩	55
ヒ	廣瀬 剛	33
フ	藤井 康子	56
	藤田 敦	34
	藤村 晃成	72
	藤原 耕作	35
マ	松田 聡	36
ミ	御手洗 靖	37
	三次 徳二	38
ム	向井 隆久	57
	村上 佑介	63
モ	望月 聡	39
	森下 覚	58
ヤ	山本 遼	73
ヨ	吉野 敦	64

## ■ 経済学部

ア	青野 篤	95
	秋山 智恵子	96
イ	碓 邦生	116
	石井 まこと	76
	市原 宏一	77
ウ	鶴崎 清貴	78
	宇野 真人	97
オ	大井 尚司	79
	大呂 興平	80
	小笠原 悟	81
	越智 学	117
	小野 慎一郎	98
	小野 宏	99
カ	加藤 典生	82

	金子 創	100
	加納 拓和	101
	川崎 晃央	102
キ	城戸 照子	83
	金 康浩	118
	金 珍奎	84
	木村 雄一	103
ク	久保田 亮	104
コ	河野 憲嗣	85
	小山 敬晴	105
シ	柴田 茂紀	106
タ	高島 拓哉	107
	高見 博之	86
テ	デイ・スティーブン	87
ト	豊島 慎一郎	88
ナ	中村 美保	108
	仲本 大輔	109
	中本 裕哉	110
ハ	林 勇貴	111
フ	藤原 直樹	89
ホ	包 聯群	90
マ	松岡 輝美	112
	松隈 久昭	91
ミ	宮町 良広	92
ム	村山 悠	113
モ	本谷 るり	93
ヤ	矢野 英子	114
	山浦 陽一	115
ワ	渡邊 博子	94

## ■ 医学部

ア	赤木 智徳	213
	赤田 純子	213
	赤嶺 孝祐	214
	秋岡 秀文	214
	浅山 良樹	120
	穴井 博文	121
	阿部 史佳	215
	阿部 徹太郎	215
	阿部 世史美	216
	安部 隆三	122
イ	池田 八果穂	202
	石井 圭亮	169



石崎 敏理	123	川崎 貴秀	227	鈴木 正志	145
井手 知恵子	124	河島 毅之	228	角 華織	237
糸永 知代	216	河野 憲司	133	夕 駄阿 勉	146
井上 尚実	217	川野 利明	228	高橋 尚彦	147
井上 亮	125	河野 正典	229	竹中 隆一	238
猪股 雅史	126	河野 康志	178	竹野 祐紀子	238
猪俣 理恵	203	キ 岸本 慎太郎	229	田中 健誠	239
伊波 英克	170	北野 敬明	134	谷川 雅人	148
井原 健二	127	君付 和範	230	チ チドウロウ ショーン マイケル	208
今井 浩光	128	木村 成志	179	千葉 政一	187
岩尾 正雄	217	木村 裕香	230	ツ 塚本 善之	239
岩城 貴史	218	木許 賢一	180	テ 寺尾 岳	149
岩本 祐一	204	清村 紀子	135	寺西 仁志	240
ウ 上田 貴威	171	ク 久保 修一	231	寺林 健	240
上村 尚人	129	久保 毅	231	ト 土井 恵里	241
内田 智久	218	久保田 敏昭	136	道津 剛明	241
宇都宮 理恵	219	久保 夕樹	232	友 雅司	209
梅田 涼平	205	桑 慎一郎	232	ナ 中川 幹子	150
梅野 惟史	219	栗林 良子	233	中村 優佑	242
工 江藤 千晴	220	黒川 竜紀	181	奈須 家栄	151
衛藤 剛	172	コ 後藤 奈穂	233	二 西園 晃	152
オ 大崎 美泉	130	後藤 瑞生	206	西田 欣広	188
大下 晴美	173	小林 隆志	137	二宮 遼	242
大野 夏稀	220	小宮 幸作	182	ノ 野上 龍太郎	243
緒方 正男	131	近藤 秀和	234	野口 香緒里	243
岡本 和久	221	サ 斉藤 功	138	八 橋本 崇史	244
岡本 光弘	221	斉藤 信夫	183	羽田 真郎	244
沖田 純	222	酒井 貴史	234	秦野 浩司	189
沖本 忠義	174	佐々木 美圭	235	波多野 豊	153
奥山 みなみ	222	佐藤 祐貴子	207	花岡 拓哉	245
小栗 沙織	223	シ 塩田 星児	184	花田 克浩	245
小坂 聡太郎	223	鹿野 健史朗	235	花田 俊勝	154
尾崎 貴士	224	柴田 洋孝	139	花田 礼子	155
小副川 敦	175	島田 隆一	236	濱田 文彦	156
小野 克重	132	清水 誠之	236	原田 千鶴	157
小野 光美	176	下田 恵	185	ヒ 泥谷 直樹	190
小山 雄三	224	白石 憲男	140	平川 博文	246
折橋 隆三	225	白石 裕士	186	平野 直樹	246
カ カーン シャキル	225	秦 聡孝	141	平松 和史	158
甲斐 友喜	226	ス 末延 聡一	142	フ 藤木 稔	159
加来 信広	177	末弘 理恵	143	札場 博貴	247
金崎 理子	226	簧河原 靖子	237	船越 弥生	247
神山 長慶	227	杉尾 賢二	144	ホ 細山 嗣晃	248

マ	前田 知己……………191	伊東 弘樹……………256	澁谷 忠正……………312
	正木 孝幸……………192	糸永 一朗……………267	清水 史明……………277
	松浦 恵子……………160	井上 真紀……………268	下村 剛……………257
	松尾 哲孝……………193	岩崎 達也……………296	首藤 敬史……………278
	松田 史佳……………248	ウ 上原 幸……………296	白下 英史……………279
	松原 悦朗……………161	内野 哲哉……………297	新宮 千尋……………260
	松本 重清……………194	梅木 真由子……………297	ス 杉田 憲司……………312
	松本 昂……………249	梅本 真吾……………298	鈴木 浩輔……………313
	松本 紘幸……………249	工 衛藤 真樹……………298	セ 関口 和人……………280
ミ	三浦 真弘……………210	遠藤 美月……………269	タ 高司 亮……………281
	三重野 英子……………162	遠藤 裕一……………270	高野 久仁子……………282
	水上 絵理……………250	圓福 真一郎……………299	高橋 美香……………313
	道越 淳一……………195	オ 大木 玲子……………299	立山 香織……………314
	宮崎 英士……………163	大地 嘉史……………300	田仲 和宏……………261
	宮本 伸二……………164	大津 智……………271	田中 遼大……………262
ム	村上 和成……………165	大西 晃平……………300	田村 弘一郎……………314
	村田 久美……………250	岡本 真実子……………301	ツ 塚本 菜穂……………315
	室長 祐彰……………251	小川 竜……………301	テ 手嶋 泰之……………283
モ	森 茂……………166	奥田 健太郎……………272	ナ 中田 健……………315
	森 晋二郎……………167	小山 淑正……………302	中野 聡子……………316
	森山 宗仁……………251	カ 甲斐 健太郎……………302	ニ 西田 陽登……………263
ヤ	八塚 洋之……………252	甲斐 真也……………303	西田 正和……………284
	矢野 光剛……………252	門脇 嘉宣……………303	二宮 繁生……………316
	八尋 隆明……………211	金崎 彰三……………304	又 濡木 真一……………285
	藪内 健一……………253	川崎 ゆかり……………304	ハ 橋本 武博……………317
	山末 まり……………212	ク 倉成 正恵……………305	ヒ 日高 正剛……………286
	山本 恭子……………196	栗林 佳奈……………305	平川 雅士……………317
ユ	幸松 美智子……………197	栗林 由英……………306	平野 隆……………287
	油布 邦夫……………198	コ 河野 健太郎……………273	広瀬 晴奈……………318
ヨ	吉岩 あおい……………168	河野 辰行……………274	フ 福井 暁……………318
	吉村 亮彦……………253	河野 洋平……………306	福田 顕弘……………319
ワ	脇 幸子……………199	小坂 麻里子……………307	藤島 紀……………319
	和田 朋之……………200	小崎 智史……………307	ホ 本郷 哲央……………288
	渡邊 哲生……………201	後藤 孔郎……………275	マ 前田 美和子……………320
		後藤 芳美……………308	増田 崇……………320
		小林 修……………308	増田 曜章……………289
		サ 齋藤 聖多郎……………309	松本 陽……………321
		坂本 智則……………309	丸野 美由希……………321
		シ 軸丸 美香……………310	ミ 水上 一弘……………264
		篠田 茉央……………310	三股 浩光……………258
		篠原 徹二……………311	宮崎 正志……………290
		篠原 麻由香……………311	宮脇 美千代……………291
		柴田 智隆……………276	モ 初井 泰朋……………322

## 医学部附属病院

ア	安部 隆国……………294
	荒川 光江……………294
	安藤 忠助……………265
	安德 恭彰……………259
イ	石川 一志……………266
	泉 寿彦……………295
	井谷 和人……………295

	森重 真毅	322
ヤ	山本 俊介	323
ヨ	横山 敦	323
	横山 勝彦	292
	吉川 裕喜	324
	吉田 雄一	324
ワ	和久田 浩一	293

## 理工学部

ア	秋田 昌憲	326
	秋吉 善忠	415
イ	池内 秀隆	327
	池部 実	405
	石川 雄一	328
	泉 好弘	364
	市來 龍大	365
	井上 高教	329
	岩下 拓哉	366
	岩本 光生	330
ウ	上見 憲弘	367
	氏家 誠司	331
	内田 俊	406
エ	江藤 真由美	407
オ	大賀 恭	332
	大城 英裕	415
	大隈 ひとみ	368
	大竹 哲史	333
	大谷 英理果	408
	大谷 俊浩	334
	大津 健史	369
	大野 武雄	370
	大森 雅登	371
	岡内 優明	372
	岡本 則子	373
	小田 和広	335
	越智 義道	336
	小畑 経史	374
カ	高 炎輝	375
	賀川 経夫	416
	片山 健夫	376
	加藤 秀行	409
	加藤 義隆	416
	金澤 誠司	337

	紙名 哲生	377
キ	菊池 武士	338
	北西 滋	378
	衣本 太郎	379
	行天 啓二	410
ク	楠 敦志	417
	工藤 孝人	339
	栗原 央流	380
	黒木 正幸	340
コ	小池 貴行	381
	後藤 雄治	341
	小西 美穂子	411
	小林 祐司	342
	近藤 篤	382
	近藤 隆司	412
サ	齋藤 晋一	417
	佐々木 朱美	383
	貞弘 晃宜	384
	佐藤 慶三	418
	佐藤 尊	418
	佐藤 輝被	385
シ	柴田 建	386
	芝原 雅彦	343
	島津 勝	387
ス	末谷 大道	344
	鈴木 絢子	419
	鈴木 義弘	345
ソ	園井 千音	346
タ	高橋 将徳	347
	高見 利也	348
	立花 孝介	419
	田中 圭	388
	田中 康彦	349
	田上 公俊	350
ツ	槌田 雄二	389
	堤 紀子	420
テ	寺井 伸浩	351
ト	戸高 孝	352
	富来 礼次	353
	豊田 昌宏	354
ナ	中江 貴志	390
	中島 誠	355
	永田 亮一	420

	永野 昌博	391
	長屋 智之	356
ニ	西垣 肇	392
	西島 恵介	421
ノ	信岡 かおる	393
ハ	橋本 淳	394
	畑中 裕司	357
	濱川 洋充	358
	原 恭彦	413
	原田 拓典	395
	原 正佳	421
ヒ	檜垣 勇次	396
	姫野 由香	397
	平尾 翔太郎	422
	平田 誠	398
フ	福田 亮治	359
	福永 道彦	399
	古家 賢一	360
ホ	坊向 伸隆	400
	本田 拓朗	414
マ	松尾 孝美	361
ミ	水鳥 明	422
	緑川 洋一	401
モ	守山 雅也	402
ヤ	山本 隆栄	403
ヨ	吉川 周二	362
	吉見 剛司	423
リ	劉 孝宏	363
ワ	渡邊 紘	404

## 福祉健康科学部

ア	相澤 仁	426
	朝井 政治	427
	阿南 雅也	437
	安藤 敬子	450
イ	飯田 法子	438
	池永 恵美	439
	岩野 卓	451
エ	栄留 里美	452
カ	片岡 晶志	428
	上白木 悦子	429
	河上 敬介	430
	川上 健二	453

## 学部別索引

河野 伸子……………431	ミ 三室 仁美……………461
ク 工藤 修一……………454	三好 智博……………462
コ 兒玉 雅明……………432	ヤ 山本 健太郎……………477
サ 齋藤 建児……………455	ヨ 吉崎 弘一……………475
シ 紀 瑞成……………440	吉田 和幸……………474
ス 菅田 陽怜……………441	
タ 滝口 真……………442	
田中 健一郎……………458	
ト 徳丸 治……………433	
ナ 中里 直樹……………443	
中山 慎吾……………434	
ハ 橋本 美枝子……………444	
マ 松本 由美……………435	
萬井 太規……………456	
ミ 溝口 剛……………445	
三好 禎之……………446	
ム 村上 裕樹……………447	
ヤ 八木 直樹……………448	
ラ ラングリ・レイモンド…449	
ワ 渡邊 晴美……………457	
渡辺 亘……………436	

## その他学内施設等

ア 安部 恵祐……………484
オ 太田 正之……………460
岡田 正彦……………463
小川 領一……………472
カ 加隈 哲也……………479
ク 工藤 欣邦……………478
サ 堺 完……………483
坂井 美恵子……………464
シ 下田 憲雄……………481
ス 鈴木 雄清……………482
ツ 堤 隆……………480
鶴成 悦久……………476
ナ 長池 一美……………465
南里 敬三……………466
ニ 西口 宏泰……………473
西島 順子……………469
ヒ 一二三 恵美……………470
フ ブルカート 香織……………468
マ 牧野 治敏……………467
松下 幸之助……………471

発行  
令和4年(2022年)8月

編集・発行  
国立大学法人大分大学  
研究推進部研究推進課

〒870-1192 大分市大字旦野原 700 番地

T E L 097(569)3311 (代)

E-mail kenkyou@oita-u.ac.jp

U R L <https://www.oita-u.ac.jp>

顔写真掲載の有無は  
本人の希望によるものです。

※記載内容は令和4年5月1日現在の情報です。



